

ガンダム　ビルドフア
イターズS(シャドウ)

高機動型棒人間

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第七回ガン普拉バトル選手権世界大会から三年。

中学生のタッグが並みいる強豪を破り優勝した事实は、新たな世代の到来を告げていた。

そんな中「国際ガン普拉バトル公式審判員」に所属する青年は、かつて畏怖された二代目メイジン・カワグチを想起させる少年と出会う。

これは、公式審判員たちのバトルと仕事と日常の物語。

目次

第1章 「結成 ガンプラ警察特務班」

Parts. 01 「コウイチとユウジ」	1
Parts. 02 「紫電のアレック ス」	55
Parts. 03 「フルタイム・ワー ク」	107
Parts. 04 a 「ガンプラア イドルグループ コスモス」 (前編)	170
Parts. 04 b 「ガンプラア イドルグループ コスモス」 (後編)	
Parts. 05 「最興ファイター」	222
PC 01 「番外編 激突 S H A DOW対OEGA」	269
PC 02 「番外編2 キノ・シユンの 里帰り」	352
Parts. 06 「戦いと因縁 (きず な)」	377
Parts. 07 「彼の實力」	395
過去編 「Lost parts」	483
Lost 01 「ニブンノイチ」	

802	P a r t s . 0 8 「哀・真実」		
	書 ガンプラ編」	786	
	P a r t s ー 7 . 5 「???」による報告		
	第2章 「3つの運命が歴史になる」		
	L o s t ー 0 3 「w i m p」	721	
	ド	698	
	L o s t ー 2 . 5 「ガンプラ☆ワール		
	失	688	
	P C ー 0 3 「番外編3 すれ違った喪		
	o n ∞ R e a l i t y」	611	
	L o s t ー 0 2 「I m a g i n a t i		545

第1章 「結成 ガン。プラ警察特務班」

Parts. 01 「コウイチとユウジ」

ガンダム ビルドファイターズS

Parts. 01 「コウイチとユウジ」

ガン。プラバトル公式審判員の心得

- 一、・審判員は、規則を把握し公正であれ。
 - 二、・審判員は、迅速であれ。
 - 三、・審判員は、神ではない。
 - 四、・審判員は、一人ではない。
 - 五、・審判員は、罪を憎んで人を憎むな。
 - 六、・審判員は、ガン。プラへの愛を忘れるな
- Sideコウイチ

抜けるような青空の先には、こちらを見下ろす地面がある。

人の営みが、空を挟んで相對する矛盾。

円筒型のスペース・コロニー獨特の光景だ。

内壁をぐるりと居住区域が囲むため、こんなことになる。

そして今、その一部がゴム風船のように膨らんだかと思うと、強烈な閃光と共に吹き飛んだ。

濛々と立ち込める煙の中から、一つの影がぬらりと彷徨い出てくる。

緑の巨軀の上で、桃色の単眼が蹂躪された街を酷薄に見下ろす。

MS-06 ザク。

最も知られている人型機動兵器「モビルスーツ」の一つだ。

ザクはコロニーの中央をすべるように飛ぶと、今しがた空いた穴を見上げた。

その後を追って、新たなモビルスーツが侵入してきているのだ。

従来の近代兵器の系譜を感じさせるザクとは異なり、こちらの機体はヒーロー然としたシルエツトだった。

機体名、RX-78-2 ガンダム。

全長18メートルとされる「伝説のMS」は、左腕にはシールド、右腕にはビーム・ライフルを携えて、コロニーの円い大地に降り立った。一般的に知られた外観と異なり、全身はクリーム色に塗装されている。

その脅威を威嚇するように、ザクの単眼が鳴動した。

構えたマシンガンが火を噴き、的確に相手のシールドに命中、穴を開けた。

だが、ガンダムはそれを気にも留めず前進する。

行う動作は規定通りに一つだけだ。

ゆつくりとライフルの銃口を向けて、引き金を引く。

耳をつんぎくビームの発射音とともに、ザクの胴体に穴が開き、そして四肢をもろとも崩壊させるほどの大爆発を引き起こした。

ガンダムは炎の中へ消えていく緑の巨人を、ただ立ち尽くして見送った。

『BATTLE ENDED』

あまりに戦場に不釣り合いな無機質な電子音声が、その戦闘を終了させる。

偽りのスペース・コロニーはあつという間に、空色の粒子、プラフスキー粒子へと崩れていった。

これはプラスチックに反応し、ガンダムのプラモデル『ガンプラ』に命を吹き込む物質である。

時間が硬化したように立つガンダムも、無残に倒れ臥すザクも、実はガンプラなのだ。ザクの方は、無残にも五体四散していたが、模型としての形状はとどめていた。

「以上、5月8日に実施したレベルBテストは想定値に届かず、終了しました。よって、改良型の『ダメージレベルシステム』は第10回ガンプラバトル世界大会での実装は困難かと思われます」

「そうか」

すべての報告を終えると、僕はずれていた眼鏡を直し、全天周囲プロジェクターを消した。会議室を覆うように投影されていたテストプレイの映像が暗転する。

そしてプロジェクターの傍らに立つ僕と、長いデスクの左右で、映像を眺めていた『公式審判員』各幹部が残された。

ガンプラによる対戦である『ガンプラバトル』が競技としての形式を確立して十数年。その公式ルールの順守と、競技自体のさらなる発展と普及を目指すのが『国際ガンプラバトル公式審判員』、通称『ガンプラ警察』である。

僕はバトルシステムの現開発元であるヤジマ商事から出向してきたばかりで、この組織の全貌は掴めていない。それでも、この場にいる人々の多くがジャブローのモグラのようならくでもない連中であることはおよそ把握していた。

「しかし、改修開始から1年。まだ新バージョン実装に至らないとは」
「ヒカワ・コウイチ君。君はプログラム調整チームからの人材ということだが、こう未完成の進捗ばかりを伝えられても困るんだがね」

僕は少しむっとした。

こちらはこの仕事に全力で、誇りをもってあたっているつもりだ。
好きで未完成品を見せつけているわけではない。

それを、たった数分のビデオを見ただけで、彼らは退屈そうに文句をぶつけてくる。ヤジマは今年の世界大会に間に合わせる気など最初からないというのに。

次々湧いてくる不満が渦を巻き、僕はそれを吐き出そうと口を開いた。

「お言葉ですが……」

「まあまあ、完成を急かしているのは我々審判員です。ここでヒカワくんを責めても、システムが完成するわけでもありませんまい」

僕の言葉を一人の人物が遮った。

大柄な体格をスーツできつちりと包んだ、どこかのOVAでグフ・カスタムに乗って、いそうな容姿の中年男性だ。

この組織における直属の上司、ハカドさんだった。

「ハカド。特務班には口を出さないでもらおう」

「そうはいきませんな。こちらとしては、ヒカワくんの報告は『特務ファイター』の有用性を実証するチャンスにもなりますので」

「またそれか。本部のお墨付きだか知らんが、一人も採用できないようじゃ、机上の空論だ」

僕とハカドさんが所属する審判員の広報部『特務班』は、今年になって新たに設立された、とある制度のための部署である。

あいにく実績はなく、他の部から向けられる視線は冷え切っていた。

今回の不評の原因の一端ともいえる。

「あてはあります」

「なに？」

「机上の『特務ファイター』には、あてがあると云ったのです。ダメージシステムには間に合いませんが、これからの世界大会への準備には大きな助けになりうる。そうだな？
ヒカワくん」

「え？……あ、はい」

まったくもって初耳だったが、僕は調子を合わせて頷いた。

幹部たちの疑念の目がこちらに向けられる。

「とにかく。これ以上時間を取っても仕方ない。各自、己のやるべきことを粛々と遂行する。よろしいですか？」

ハカドさんがやや語気を強めると、幹部たちは黙りこくった。

特務班は見下せても、どうもあの人自身にはかなわないらしい。

十五分かそこらで、僕による「ダメージレベルシステムに関する中間報告」は終了した。

「しかしヒカワくん。君は真面目すぎるね」

「いけませんか」

「何事も表に出しすぎるのはよくない。彼らは私に負けず劣らず無能だが、権力を手に入れるだけの強かさは持ち合わせた連中だ。今に首が飛ぶぞ」

オフィスを出ての移動中、ハカドさんは困り顔でツブロックをなで上げながら言った。

僕らはこれから、ハカドさんの言うところの「あて」に向かう最中である。これまでと同様に、僕も同行する。

ちなみにスカウトは本人には内密で審査するので、2人とも私服姿に着替えていた。

僕は白のTシャツに灰色のジーンズ、ハカドさんは、だぼだぼの水色のシャツにスウェットといういで立ちだ。

「その恰好、外では目立ちますよ」

「そうかい？」

もつとも、駅のホームでそれを指摘するのも手遅れであるように思われた。

不思議そうに自分の恰好を眺めるハカドさんに僕は内心で呆れたが、フォローはしておく。

「まあ、ゲームセンターに入り浸る冴えない中年ファイターには見えますかね」

「それはよかった。うまく溶け込めそうだ」

僕の上司は無邪気に笑った。

対象は支部のある駅から電車でしばらく揺られた先、とあるゲームセンターにいるらしい。これでスカウトは5人目。

拒否されれば確実に大会にも間に合わず、あの幹部たちはこそつて特務を責め立てるだろう。

僕は、いつのまにか顎まで垂れていた汗を拭いた。

「けやきが丘。けやきが丘です。お降りの際は足元にご注意ください」

電車のアナウンスに背中を押されるように、僕らは目的地に降り立った。

冷房のきいた車内から放り出され、夏の熱気がまとわりつく。

「これは、すごい」

思わず、口に出してしまふほどであった。

駅前の商店街はこの熱気をもものもしない活力に満たされていた。

中でも点在するおもちゃ屋の窓越しからは、小学生ぐらいの子供たちが模型の箱を手にとって和気藹々としている様子が伺える。

「さすがに世界大会のファイナリストたちを輩出した町だ。私があの子たちぐらいの頃、ガンブラを作る同世代は殆どいなかった」

「メイジンの貢献と新旧バトルシステムがなければ、今のガンブラームはありえな

かったでしょう」

「全くだ。特に、第7回を見たときは、ようやく若者たちの時代が来た、とうれしくなつたよ。君はどうだった。ヒカワ君」

僕は曖昧な笑みを返すしかなかった。

あの世代をわが子のように微笑ましく思うほど年は離れていない。

かといって、僕自身はビルダーではないので共感や対抗心も抱きづらいのだ。

「彼が通い詰めているのはここだ。もう来ている時間帯だろう」

ハカドさんが自動ドアの前に立つと、店内の騒音が僕らを襲った。僕は思わず耳を塞いだ。だが、彼は身じろぎ一つしない。相手を下調べするために、何度も通い詰めたのだから。

「バトルシステムは2階だったかな」

いくつものアーケードゲームの横を素通りし、少し入り組んだ階段を上れば、六角形の台座がプラスキー粒子のホログラムを柱状に展開している。

この台座がガンバトル専用のユニットである。

このゲームセンターでは各4台のユニットが一単位として連結し、広大な仮想戦場を生み出していた。

バトルの様子は観客も横合いから直接観戦可能であり、僕は最も自分に近いフィール

ドに目をやった。

広大な砂漠の中央で、白い武者のような「シャイニングガンダム」が、赤黒い龍を模した「ガンダムエピオン」と格闘戦を演じている。

アニメさながらの動きだが、これらは、この瞬間を除けばただのプラモデルにすぎない。

エピオンの高出力ビーム・サーベルが徒手空拳で捌きながら、シャイニングが距離を詰める。

即座に赤熱化したエピオンのヒートロッドが、薙ぐように振るわれる。

しかし、シャイニングがそれよりも速く腰にマウントしていた自身のサーベルで一刀両断にエピオンを斬り伏せた。

『BATTLE ENDED』

バトルが終わり、粒子が散っていくと二機は完全に動きを止める。

何の変哲もないガンプラバトルだが、上下に泣き別れになったエピオンを取り上げる操縦者が、僕の目に留まった。

胸の内にもやもやとしたものがある。彼は自費でガンプラを修復する必要に迫られるだろう。それは更なる出費であり、こちらは潤ってもビルダーに不満が残る。

僕らがもつとダメージレベルシステムの開発を急がなければ、いつまでもこういった

光景は減らない。

「ヒカワくん、なにをしている。彼はこっちのユニットだよ」

ハカドさんが手招きをしていることで我に返り、慌てて僕は後を追った。

僕の上司は、コーナーの最奥にあたる場所に立っていた。そこはシステムこそ起動してはいるが、照明の当たり方が悪いのかやや薄暗い。

「丁度コンピューターとバトル中らしい」

彼が僕に耳打ちしてくる。

だが、僕の立つ場所からはその姿がうかがえない。展開された戦場の向こう側には背景としての青空が投射され、ファイターの姿は隠れているのである。

「対人戦ではなく、NPC戦をこなしているのですか？」

「まあ、見てみたまえ。なかなか面白いから」

「はあ……」

機械相手は最高難易度でも対人戦とはわけが違う。テストに必要な実力を測ることはできないだろう。

僕はやや不審に感じたが、フィールドをのぞき込んだ。

「……………!?!」

そして、あまりに尋常ならざる光景に声を失った。

設定されたフィールドは飛行場。

そこにシステムそのものが操作する、ずんぐりとした機体「ハイモック」があちこち山と積み重なっている。

パーツのエグレ、へこみ、断絶。どれもがあまりにひどい。

いずれも執拗に攻撃を受けたであろう、死屍累々の様相である。

そして何よりも目を引いたのは、今一機のハイモックの上に馬乗りになって、拳を振るうモビルスーツだった。

「あいつが、やったのですか」

「そうなるな」

細身の箱を組み合わせたようなシルエットに、球形の頭部、バイザー型のカメラアイ。「ガンダムAGE」の量産機の一つ、「アデル」だ。

全身を黒く塗装されている以外に改造箇所は見られなかった。

その鬼気迫るアデルの拳が、敵機のドーム状の頭部を吹き飛ばす。

すぐさまコンピュータが、追加で3機のハイモックを呼び出した。

『Mock Battle model deployed』

案内音声を聞いたアデルは、操り人形のようにぎこちなく、しかし異様な素早さで立ち上がった。

その右腕は駆動系がいかれたらしく、だらりとぶら下がっている。

黒いアデルはそれを気にする素振りを見せず、腰部に装備されたサーベルへ静かに左腕を伸ばした。

「あつ」

思わず声を上げる。

野球のピッチングのようなモーションで、ビーム・サーベルが投げつけられる。

三角形に並ぶハイモックの内、先頭の1機が刃を頭部に受けて仰け反った。

『BATTLE START!』

遅れてユニットから音声の流れ、ようやくシステムがハイモックを稼働させた。

間違いなくフライングだ。

通常、出撃した瞬間から戦闘は開始されているため、バトル案内音声より先に攻撃するフライングはルール違反ではない。

だが、対人戦ではかなり嫌われる行為でもある。

奴は残る2機が同時に放った牽制弾を、腰を沈めて回避した。

次に右半身を敵に向けて、背面のブースターを一気に開放。一直線に突撃をかけた。

「あの損傷具合でタックルする気か！」

「いや、ヒカワくん、あれは違うよ」

左側のハイモックがヒート・ホークを振り下ろす。

しかし、たとえ右半身が溶断されてもアデルの勢いは止まらない。

もう片方のサーベルを相手の肩間接にねじ込むと、最初にフライングをされた1体の頭上めがけて肘うちで倒した。

奴は使いものにならなくなった右腕を盾代わりにしたのだと、そこで気付いた。

モビルスーツ2機分を計算した爆発が発生する。最後の敵機があたりを受けて、紙屑のように砂漠を転がった。

「えげつないことをする」

ハカドさんのつぶやきには驚きと呆れが含まれ、僕は憤りで手が震えるのを抑えられなかった。

「あんな戦い方が、許されるのか」

答えは否だ。

わざわざプラモを壊すような、無謀で乱暴な戦い方が存在してなるものか。

これは間違いなく、ガンプラへの冒瀆だ。

「おっと、立ち上がるようだ」

ハカドさんが指摘する。

全身の各部からスパークを発生させながらも、黒いガンプラはまだ健在であった。

推進器を使わずに徒歩で、アデルはハイモックにゆっくりと接近した。

そして、相手の胸部の真上に片足を上げる。

接地用に仕込まれているらしいスパイクが、足裏の先端から飛び出してきた。

「おい、やめ……」

僕がそんなことを口走ったのも届くはずがなく、無情にスパイクが振り下ろされた。

ハイモックの四肢が衝撃に応じて痙攣する。

あいつはそのまま何度も、何度も踏みつけた。

8回目でグシャリと音を立ててハイモックはひしゃげた。

『BATTLE ENDED』

終了の合図。

またたく間に粒子は拡散し、ファイターの姿が露わになる。

僕は機体にこんなむごい真似をする張本人の姿を拝んでやろうと、ハカドさんより先にそこへ歩み寄っていった。

彼に、会う人間のことは逐一観察しておけ、と言われていたものもある。

そこにいるのは、灰色のポロシャツにカーキ色のカーゴパンツを履いた、短い黒髪の少年だった。

細い骨格に程よく筋肉がついた、スポーツマンのような体つきをしている。

少年はアデルをユニットに放り出したまま、首にかけていた赤いバスタオルで汗を拭いていた。

そのせいでちらりと覗く口元しかわからないが、何となく、顔立ちがいいことは察することができる。

「いやあ、すごいな。よくもまあ、ただのアデルでそこまで立ち回る」

ハカドさんの声に反応して彼がこちらを見やった。

予想通りかなり整った顔をしている。

細い眉の下に固く結ばれた唇、肌もやけにきめ細やかで、顔つきだけなら女に見えないこともない。

そして僕と少年の視線が交差した。

とたんに怒りが霧消する。代わりに、ぞくり、と全身が泡立つのを感じた。

「なんだ、その目は」

「……」

そんな第一声を発するほど、彼はただの人間とは思えないような目をしていた。

詩的な表現になってしまいが、瞳の中に地獄があった。

一度捕まったら最後、どん底まで引きずり込まれるような暗い感情が渦巻いている。

要するに僕は、この年下の少年に心から恐怖したのだ。

けれども同時によく似た目をどこかで見たことがあるような気がした。

「アシハラ・ユウジ君だね？」

「そうだが……あんたらは誰だ」

アシハラというらしい彼が口を開く。微塵も覇気を感じない、低い声だった。

「私は国際ガン普拉バトル公式審判員のハカドだ」

「……同じくヒカワです」

僕らはスマートフォンサイズの電子端末を取り出すと、起動して彼に見せた。

画面には公式審判員の身分証明になる、水色の十字のマークが描かれている。

バトルに使用する記録装置「GPベース」と同様に、複製困難なテクノロジーの塊だ。

アシハラ少年は胡散臭そうに画面を眺めて、ふうん、とつぶやいた。

「最近の審判員は服務規定がゆるいな」

「君に気づかれないようにしたかったからね。変に緊張や警戒をされても困る」

「あっそう」

僕らのことをほとんど無視し、アシハラは自らのガンプラを手に取った。

無茶なバトルの影響でアデルは殆どプラスチックの塊と化している。

僕はその有様に胸がちくりと痛み、さつき引つ込んだ怒りが、再び湧き戻ってきた。

眉をひそめる僕を横目に、ハカドさんは早速話を切り出す。

「今日はスカウトにきた」

「俺を」

「そうだ。きみを特務ファイターとして勧誘したい」

「聞いたことがないな」

「こちらには見向きもせず、彼はアデルに応急処置を施している。

断ち割られたポリキャップを交換し、プラ板をあてがって装甲を補修する表情は真剣そのものだ。

「とはいえ、これ以上のバトルは無理だろう。」

「それなりにこの界限の情報は何を得ているけど、噂すら知らない」

「設立されたのは最近だし、正式発表までは極秘だからさ。無理もない」

ハカドさんの目配せを受けて、僕が説明を引き継ぐ。

「特務ファイターというのは、公式審判員専属のファイターです。組織から下される『特務』、具体的には新規に開催された大会のレギュレーションチェックや、初心者へのデモ、イベントの手伝い、そして新型システムのテストなどをガンプラで行ってもらいます」

僕が技術畑の人間でありながら、この特務にやってきたのはそれが理由だ。

特務ファイターに実際にバトルをしてもらい、新システムのデータを収集する。

ラボで数字を眺めるよりも、目の当たりにした方がなおいとの判断だった。
アシハラは無言だ。

今までスカウトをかけてきたファイターたちは、どちらかといえば困惑を浮かべていたが、彼の顔からは不信感しか受け取れない。

「きみのように、特徴的なバトルスタイルを持ったファイターこそ、この特務にふさわしいと私は考えている」

「言葉を濁さなくてもいい。要するに、無茶なガンブラを使う奴を採用して、耐久実験に使いたいんだろ」

「いや、そういう訳では……」

ハカドさんが言葉に詰まっている。

僕といえば、彼の隣でめまいすら覚えていた。

人を小馬鹿にしたような慥懃無礼な態度。何より、あの戦法を自覚して使っていたことが頭にくる。

こいつはガンブラをバトルの道具だと思っていないに違いない。

「そもそも、公式審判員の仕事を俺のような三流ファイターに肩代わりさせるだど？笑わせるな。あんたらは殆ど仕事をしていないだろ」

「なん、だど」

「世界大会と全国大会に顔を出すかどうかで、出たとしても、審判としての役目を果たしたかすら怪しい。その上にこれだ。どれだけさぼれば気が済む」

我慢の限界だった。

反射で僕は目の前の少年の肩を強く掴んだが、彼はまるでマネキンのように表情を変えなかった。

「いい加減にしろ。僕らがこの時期、のうのうとしていると本気で考えているのか」

「違うのか。わざわざこんな場所まで来るのは、暇人のすることだ」

「お前！」

頭にカツと血が上ったところで、僕らの距離はハカドさんによって引き離された。

「冷静になれ、ヒカワくん。あくまで参加は自由意志だ」

「しかし」

「特務ファイターの実態は、彼の言葉通りだ。否定はできん」

二の句が継げなくなる。

冷静に考えれば、ダメージシステムはともかく、その他の仕事は審判員の本業でもある。

ハカドさんにそう言われれば、僕にはどうしようもなかった。

くだんの彼は平然と荷物を纏めている。

僕を嘲笑する様子すらない。完全な無関心だった。

自らのアデルをゾーンズに提げたホルスターに入れ、アシハラはリュックサックを担いだ。

「そもそも俺の本職はビルダーだ。ファイターが欲しいなら他を当たってくれ」

「おい、待って……」

そのまま彼が背を向け、下層への階段へ歩いていく。

追おうとする僕を引きとめ、今度はハカドさんが彼に呼びかけた。

「そうは言ってもなりたくないのではないかね。『強いファイター』に」

すると、その単語に思う所があったのか突然アシハラ歩みが止まった。

枯れ果てた瞳でこちらをにらんでくる。

畳みかけるように、ハカドさんは言葉を紡いだ。

「君が住んでいるのは、この隣町だ。それでもこの『けやきが丘』に来るのは、ここ出身のビルドファイターたちが悉く強者ぞろいだからだろう。だが、あえて言おう。かつて世界へ踏み出した彼らのようになりたいなら、こうして毎日、物言わぬコンピューター相手に模擬戦を繰り返しても不可能だ」

ハカドさんの推測は、僕には釈然としない。

ビルドファイターとは自ら機体を作り、戦えるビルダーの事を指す言葉だが、この町

にいる有名なビルドファイターとアシハラでは、あまりに違いすぎる。

過酷なバトルで愛機をわざわざ傷つける者はいない。

もし憧れたというのなら、バトルに対するあり方は模倣するというのが自然だ。

「特務ファイターは君に強さを提供できる。それは保証しよう」

「……………」

あの乾ききった少年の素性と内面を、僕の上司はどこまで把握しているのだろうか。アシハラはその場でしばし沈黙していた。だが、やがて先ほどより更に低い声で答えた。

「あなたに何がわかる。特務とやらを遂行して欲しいなら、もつと一流のファイターに声をかけるんだな」

それだけ言い捨てて、彼はゲームセンターの階段を下り始める。

「まだ時間はある。いつでも待っているよ」

ハカドさんの最後の呼びかけにも返答はなかった。

僕の腕を掴んでいた骨ばった手は、ようやく離された。

「ハカドさん。あんな奴にこだわらなくてもいいじゃないですか」

十数分、他に目星をつけられそうなファイターがいないことを確認した。

その後の帰路で僕は上司に苦言を呈していた。

今日までの4回は、この人があそこまでこだわりを見せたことはない。

断られたときは丁寧に礼を言っ、後腐れなく去っていくのがハカドさんのやり方はずだ。

「彼はこれまでの子たちの中でも別格だ。性格も悪くない」

「なんですって。完全に僕らを嘗めきっています」

「彼の観察眼の賜物だろう。ビルダーには必須だが、彼の場合は読心のレベルまで昇華されている。君の不満など顔を合わせたときに見透かされていたさ」

「だからといって、あんな態度を取っていい理由になりますか。それに、あのバトルです。殺気を全身に纏って情け容赦なく戦うなんて、まるで……。そうだ。『二代目メイジン』ではないですか」

ようやく僕は思い当たった。

最初に思わず威圧された、アシハラの見線。あれを見たのは、まだ自分が一介のガンダムファンにすぎない時代だった。

『メイジン・カワグチ』。

ガン普拉バトル界にて頂点に君臨し、常にすべてのビルドファイターの目標となる存在で、現在で三代目になる。

その先代にあたる二代目メイジンはガン普拉バトルの競技としての地位を確立し、そ

の並ぶものなき強さから畏怖と尊敬を受けていた。

僕は一度だけ、そんな二代目と直接顔を合わせたことがある。

緊張していたせいか前後の状況や会話はあまり記憶にないが、その時、彼が常に掛けているバイザー越しに目が合ったのだ。

二代目メイジンの眼は、まさしくアシハラと同一のものだった。

心が死んでいる。勝利という結果のみにすべてを注ぎ、楽しもうという感情が微塵も感じられない。

「彼もかつてのメイジンも、ガンプラに対する愛情が欠落しています。そんな人物を、公式戦、ましてや僕らのダメーシシステムのために連れてこられることは、受け入れられません」

「それは、本気で言っているのかね。ヒカワくん」

ついさつきまで困ったように曖昧な笑みを浮かべていたハカドさんが、急に表情を消したので、僕は言葉が過ぎたことに気づいた。

普通ならば生意気な小僧として僕は失職するだろう。

しかし、いまだかつて見たことのない侮辱的な所業の後に、止めようがなかったのも事実であった。

「……ハカドさんは、彼の何をご存じなのですか。面識がおりなんですか」

「私は彼に会ったことはないよ。しかし……いや、君の意見は正しいな。もう帰ろう」
ハカドさんはやや間をおいてからそういった。

少し声が震えているのが気にかかったが、失言の引け目もあって、これ以上深く追及することは、僕にはできなかつた。

Sideユウジ

「ただいま」

アパートの扉を開けても、返事はない。叔父はまだ仕事だし、両親については考えをめぐらせるまでもない。

居間のソファーにリュックを放り出して、二人分の夕食の下準備をする。

それを終えると、俺は自室の扉を開けた。

そこには勉強机とベッド、ガンプラの陳列棚を無理やり押し込めたかなり手狭な空間がある。

俺は勉強机の上にカッターマットを敷いただけの簡易的な作業スペースへ向かった。腰のホルスターケースからアデルを取り出す。

こいつはHGを塗装し直しただけのもの。何度も同じキットを購入し直してはそのパーツと破損部位を交換しているため、実質15機目くらいである。

ガンプラの破損に、俺は頓着しない。すべては機体を扱うファイターの自己責任だ。

「設計図の仕様に改修した方が、俺の操縦感覚に近いのか？」

ハイモックに溶断された、右肩から下を掌に載せてしばらく考え込む。

最近やけにこいつは右腕の調子が悪かった。

ソフトたる操縦系統と、ハードたるプラモのどちらが原因か見当もつかない。ならばとりあえず、分解して観察するしかない。

机の引き出しから一冊のスケッチブックを取り出す。

表紙には『アイデアノート No. 6』とあって、その中身はほとんどが千切りとられていた。

開くと、たった数枚だけガンプラの設計図が残されている。

頁をめくるとアデルのものにいきついた。

自分自身の筆跡で描かれた、素組みの内部に複雑な関節機構を組み込む設計、なんらかのシステムとの連動。

それが何を意味するのかは理解できるが、なぜ俺がこんなものを作り出そうとしたのかというと。

「オレは弱い奴は嫌いだ」

「うっ、ぐっ」

突如、懐かしい声が耳元で囁いたかのような錯覚に、俺は口元を抑えて背中を折った。

視界がオレンジ色に明滅する。

沈みゆく夕焼けを何度も繰り返すような強烈な瞬きの中、ささやき声の主のシルエツトがゆらめく。

もがく俺を、嗤っていた。

(強くならなきゃ。強くなれたら、きつと——)

自分の声で、自分と思えない幼さの残る口調の思考が奔っていき、胃の内容物が急速に喉をせりあがってくるのを必死にこらえる。

過去への詮索を打ち切り、床板の模様を数えることだけに集中していると、症状はゆつくりと治まった。

「……最悪だ」

引き出しから処方された薬の袋を取り出すと、リュックに入れっぱなしになっていたペットボトルの水で流し込む。

医者によれば、俺の身体は1年前に巻き込まれた事件をきっかけに、その時期の記憶を強いトラウマとして思い出さないようにしているのだという。

事件の内容や、関係者へつながるような連想をはじめると、このように身体が拒否反応を示す。

まるでガンダムSEED Destinyに存在した「ブロックワード」のような話

で、思わず自嘲の笑いがこぼれた。

「……」

修復作業を始めるため、再度アデルを手に取ったが、どうも集中できなかった。

たった今の発作だけが原因ではない。

頭の中を、昼間の出来事が離れないのだ。

「特務ファイター、ねえ」

ヒカワと呼ばれていた、眼鏡をかけた意志薄弱そうな男が掴んだ、自身の右肩に触れる。

アデルのダメージと同じ箇所なのは、ガンプラのダメージを少しでも俺に実感させるためだろうか。

あいつ自身はそこまで意識的に動いているようには見えなかったが、推測させるだけの怒りと情念が、指先のわななきから観察できた。

『こいつのバトルスタイルはとんでもない。上司の推挙でなければ、お前を張り倒してやる』

さしずめ、そんな心境だったのではないか。

とても自分のような三流ファイターと相性がいいとは思えない。

そう結論つけて思考から追い出そうとすると、今度はあの中年の男の言葉が入れ替わ

るように蘇ってきた。

『そうはいつてもなりたいたいのではないかね。強いファイターに』

『特務ファイターは君に強さを提供できる。それは保証しよう』

俺の住んでいる町まで引き合いに出した辺り、発作やその原因についても調べはついているのだろう。

ますます腹が立つが、ここらで別の選択肢を試さなければ、俺もアデルも打ち止めかもしれない。

そんなとりとめのないことを巡らせていると、リュックの中から『ガンダムAGE』の第一期オープニングが鳴った。

俺の携帯の着信音だ。取り出して画面を見れば、知らない番号である。

「もしもし」

『昼間はどうも。アシハラ・ユウジくん』

「……ストーカーか、あんた」

例の、グフ・カスタムに乗っていきそうな中年審判員の声だった。

『さつきは部下が失礼をした』

「勝手に携帯の番号を探るあんたも大概だ」

『まあまあ、そう言わずに。実はあの場に彼がいたから伝えていないことがあってね。』

きつと、これを聞けば君は承諾してくれるだろう』

「……なに?」

そう切り出すとハカドとかいった男は、淡々とそれを話し出した。

「side コウイチ

アシハラ・ユウジと出会った翌日、僕はハカドさんにある事件を調査するように言われた。

『パーツハンター』。

勝利した相手のパーツを奪い、自らの機体を強化するという悪辣なプレイヤーのことである。それに該当するケースが、この地域で報告されているという。

本来は僕らの管轄ではないが、担当するべき部署『警備部』は大会前の人事異動やらで、てんやわんやだ。

『特務ファイター』がない以上、支部で最も手が空いている僕らにお鉢が回ってきたのである。最終的な処理だけ、警備部が行うのだろう。

心底バカにした目で顔見知りの職員から書類が手渡しされたときは、吐き気すら催した。

昨日の会議で大見得をきつたハカドさんを少しだけ恨みもした。

「三代目メイジンからの証言で、最近ようやく明るみに出始めた。私も遅いとは思いますが、

放っておくわけにもいかない」

「具体的な目撃証言などはないのですか」

「ない。パーツハンターならば様々なパーツの混成だろうが、そんな機体いくらでもあるから、アテにはできんな」

当の本人は昨日の出来事をすっぱり忘れたように、調子が変わらずにいる。

僕は胸の内のもやもやとした気分を、いまだに持て余しているというのに、とんでもない精神力の持ち主だ。

「それにしても、なぜ今なんです？」

聞けばメイジンが『パーツハンター』に遭遇したのはデビュー前だという。それが五年ほどの時を経て全国で散見されるようになった。

「忘れられた頃に、歴史は繰り返すものさ」

「しかし、よりにもよってこのタイミングで」

「アシハラくんの言う通り、我々は今までが暇すぎるのだろう。手を付けるべきいくつもの事象から目を背けている、そのツケが回ってきたのだよ」

聞き取りの書き込まれた手帳片手に、ハカドさんの言葉を苦々しく思い出す。

その事実一つを認めるのに、僕は大変な勇気が必要とされていた。

こんなときに限って、これから調査する場所は昨日のゲームセンターときている。

再びアシハラと遭遇して何か言われようものなら、僕は卒倒しかねない。

腹に力を入れて騒音に耐え、二階のバトルエリアへ向かうと、何やら昨日と様子が違うことに気づいた。

アシハラのいた場所と違う、人があえて近寄っていない一角がある。

「何だ？」

見れば、筐体の前で小学生と思われる子供どうしがつかみ合っている。ゲームで直接暴力に訴え出るのは幼稚なプレイヤーにありがちだが、見過ごせない案件だ。

周囲の人間の迷惑だし何より友情に亀裂が走るといふのがある。

「こら、何をしているんだ」

「誰だよ、おっさん」

拳を振り上げていた側がこちらを睨む。もう一人の気弱そうな少年は掴まれていた喉元を放されて、呼吸を荒げていた。さすがに相手も子供だからか、命に別状はなさそうである。

僕は心中で息をつくとき、加害側の少年を見下ろした。

「僕はまだ24歳だ」

「いいから、おっさん。余計なことするなよ」

最近の子供は失礼な奴ばかりだと思つづくと思ふ。

するとほんの一瞬だけ、この子を手ではたこうという発想がよぎった。

恐ろしさに背筋が凍りつく。僕は今、何ということ考えたのだ。

こんな子供に大人が、まして審判が手を上げるなど論外だ。

いつもより自分がすすんでいる気がする。アシハラ・ユウジと遭遇してから平静が保てていない。

「そうはいかない。他人に暴力を振るうのはモラル違反だ。それに、ガンプラバトルでの揉め事だろう?」

努めてそう言うと、僕はユニットに置きっぱなしになっている二体のガンプラを指した。どちらも損傷がひどい。死力をつくして戦ったのだろう。

ダメージという概念に過敏な身の上としては、やはり悲しい光景には違いない。

「こいつが、約束を守らなかったからだよ」

「約束?」

「今の勝負はどう考えたって反則だよ……。無効試合だ」

「ふざけやがって!」

「まあまあ」

相手の小声を聞きとがめて、また殴りかかろうとする彼を制止する。

激昂する少年に、昨日の自分を重ねたのもあるかもしれない。

とにかく、こういった勝負でのいざこざは話し合いでは埒があかなくなるものだ。どちらでも自分が正しいと信じ切っているからであるし、勝利の快感は手放しがたい。

ならば第三者の目から判断して、決着をつけるのがいい。

「それなら、もう一度僕の前でガン普拉バトルをしよう。どっちの勝ちかを、僕が判断する」

「おっさんが?」

「ああ。僕は審判だからね」

胸元から、公式審判員の身分証明を出して2人に見せた。子供たちの目が円くなった。

『Please set your GP base.』

『Beginning Plavsky particle dispersal.』

青白い粒子が、ユニットから立ち上っていく。この粒子が戦いの舞台となり、ガン普拉に命を与える時間は、何百回見ようと美しい。

『Field 3 Forest』

『Please set your Gunpla.』

それぞれが己の愛機を設置する。

手荒な手段を取っていた少年は、ビーム・ジャベリンを持った初代ガンダムを。

気弱そうな少年は、四肢と両肩に多様な射撃兵装を搭載した重装備の青いガンダムを発射台に乗せた。後者は原型がわからないレベルで改造されている。

粒子が浸透し、仮初の生命を得た二機のガンダムのツインアイが輝く。

『BATTLE START』

「ガンダム、行くぜ！」

「ハーデスガンダム、出ます！」

黄色い球状の操縦桿が出現、それを握りしめてファイターたちは威勢よく名乗りを上げた。

ガンダムの劇中と同様のカタパルトが互いのガンプラを射出する。

バトルの火ぶたは、ここに切って落とされた。

再現されたのは森林地帯。その上空で、彼らは正面からかち合った。

ハーデス、というらしいオリジナルのガンダムは全身の武器で弾幕を張りつつ、肩に装備されたビーム・キャノンを発射する。

ガンダムはそれを懸命にかわすが、どうやらライフルを持っていないらしい。攻めあぐねていた。

「さっつき、ぶっ壊されなければ！」

「さっつきと落ちろ！」

戦闘でテンションが上がりだしたのか、あの気弱な少年の口調もやけに乱暴になっていた。

よくある事態であるし、殴りかかられたことへの仕返しの意味もあるのだろう。

初代ガンダムが防戦一方のまま時間が経過していく。

僕が何度も実感することだが、データではなく本物を動かす以上、破損が後に響くのはガンプラバトルの難点だ。

とうとうガンダムの軌道がふらついてきた。

しかし、その条件に関しては相手とて同じはずなのだ。公平なバトルに、僕の手は出せない。

「そこだー！」

ハーデスガンダムは両膝からビーム・ブーメランを取り外すと投げた。ガンダムが一つは振り払い、もう一つをとっさにシールドでガードするが、左腕が吹き飛ぶ。

その機を逃さない相手によってガトリングが畳みかけられると、初代ガンダムの各部に着弾し、火を噴いた。

「ぐわっ！」

「もらったー！」

回転しながら急速に落下していくガンダムに、快哉をあげてハーデスが追撃をかけ

る。

意外に早く、勝負は決まった。そう僕が思ったときだ。

『WARNING! NEW PLAYER HAS COME』

乱入を知らせるアナウンスが流れるやいなや、2機の合間を裂くように、ビームの奔流が襲いかかった。たまらずハーデスは後退し、その隙にガンダムは体勢を立て直して緩やかに着地するが、激変した展開にどちらも理解が追い付いていなかった。

「だ、誰だ!？」

「俺だよ」

僕は慌てて筐体の反対側に回り込む。四ユニット構成の内、一人分空いている操縦スペースに、あいつがいた。

やや乱れた黒髪に、光が失われた目と、張り付いたような仏頂面。

そして、ゆったりと降下してくる黒いアデル。

「アシハラ・ユウジ。いつの間に!」

「今しがた来た。あんまりな茶番を見かけたからな」

「彼らの真剣勝負に水を差すな。すぐに乱入をやめろ!」

「そうだ!どけ!」

ハーデスを扱う少年の抗議すらどこ吹く風で、アデルは着地した。

昨日と同じく黒く塗装されていることに変わりはないが、各所にディテールアップが施されて、完成度はまるで別次元だった。

滞空する青いガン普拉を見上げ、アシハラはため息をつく。どことなく、使っているガン普拉までだけだるそうに見えるのは気のせいだろうか。

「おいそのの、降りてこい」

「ふざけるな！ 一体誰なんだ。おま」

そこでハーデスのファイターの声が途切れた。あろうことかアデルが主武装であるドッズ・ライフルを発射して、その両脚を消し飛ばしたのだ。作りこみから生まれる大出力がなせる技だった。

「ダメだ、やつぱり当たらん」

不格好に墜落するハーデスガンダム。アデルの方といえれば諦めたようにライフルを放り捨てていた。

あいつの言葉を信じれば、今の一撃で仕留めるつもりだったようである。

おずおずと、初代ガンダムの少年がアシハラに尋ねる。

「兄ちゃん。誰？」

「通りすがりの三流ファイターだ。覚えておかなくていい。お前もパーツハンターと無能審判員とは、運がないめぐりあわせだったな」

そしてアシハラはこともなげに、とんでもないことを口にした。

「いま、誰がパーツハンターだって言った？」

「あの青いガンダム使っているガキだ」

「そんな、子供だぞ!!」

「俺の顔をじろじろ眺めまわした目は節穴か？よく観察しろよ、あのガンプラ」

僕は、どうにか浮上してきたハーデスに目をこらしてみた。

フィールド発生装置らしき曲面パーツを背面に強引に積む。大型ビーム砲。箱型のミサイルポッドを数門。

ありがたいな、とりあえず強そうな武装をゴテゴテ載せてみたといった感じのガンプラだ。

僕が来る前に負ったのであろう損傷と、消滅した両脚が痛々しい。

それ以外には、よくわからない。

僕の様子から特に気づいたことがないのを悟ったのか、やれやれとでも言わんばかりにアシハラが首を横に振った。

「あちこちのパーツの作り方の癖が違う。ヤスリのかけ方、ゲートの処理、塗装の仕方がまちまちだ。これが二・三種類なら時期の違いだろうが、あんな千差万別が混在するなんてことは一人のビルダーのミキシングじゃまずありえない。だいいち、接ぎ方が雑す

ぎる。バトルで破損した相手のパーツを奪って、ろくに修理もせずにくつつけたからだ」

「そ、そんなことまで」

「公式審判員のくせして気づかない、お前がおかしい」

僕はシステム側の人間だ。ビルダーの常識には疎い。

それを言葉にして返そうとも思ったが、みじめな言い訳にしかならないのでやめた。もつとあいつに口撃されて、子供たちの前で無様をさらすだけだ。

「ところで坊主。あのビーム・キャノン、本当はお前のだろう。さしずめ、元はフルアーマーガンダムだったのを、今はしかたなく素体だけになっている、といったところか」

「そうだよ。俺のパーツ、俺が勝ったら返してくれるって約束したのに、あいつがとぼけてさ」

そこで僕は、しっかりと約束の内容を聞いていなかったことに気づいた。正当な主張とそれを反故にした人間は確かにいた。

だが被害者と加害者は逆だったのだ。

その結論にたどり着いたとたんに、自らの勝手な思い込みが、情けなくなってきた。

「パーツハンター。異論はあるか？」

「うるさい！僕は強くなるんだ！」

ハーデスから駄々をこねるような砲撃の雨が降り注ぐ。まだあんなに弾丸が残っていたとは、様々なガンプラの寄せ集めは伊達ではないようだ。

損傷から反応に遅れたガンダムをアデルが、アルファベットのAを逆さまにした意匠を刻むシールドでかばう。

表面に多少の傷こそつくが、まるで壊れる気配はない。激突音の嵐の中、アシハラが少年に再び通信をつなぐ。

「そのジャベリン寄越せ」

「え、でも」

「あの野郎みたいに盗む訳じゃない。代わりに一撃叩き込んでやる」

アデルが無骨なマニピレーターを広げて突き出した。

しばらく逡巡した後、少年のガンダムはビーム・ジャベリンを手渡す。それをアデルが受け取ったとたんに、ビームの球が大きく膨らんだ。

機体自体の出力が桁違いなのだろう。それは設定を抜きにして、このアデルが規格外のガンプラとして作りこまれていることを意味する。

「今、強くなると言ったか、パーツハンター」

『もう弱いつて言われるのは嫌なんだ。もつと色んなパーツを使えば、きつと……』

「……そうか」

ハーデスガンダムから弾丸とともにまき散らされる悲鳴のような独白を、黒いアデルは、シールドの裏で姿勢を低くし、俯いたように聞いていた。

それも束の間、弾かれたように面を上げると、盾の先端をガンダムの前方の地面に刺して固定、自らはその陰から飛び出した。

ハーデスの弾幕は、動き回る目標の方を追う。実弾の数発が装甲に直撃したが、それでもアシハラは前進を止めようとしない。

アデルがジャベリンの柄をしっかりと握り、狙いを定める。かつてフライングでハイモックを仕留めた時と同じ、投擲のモーシヨンだ。

違う点は、右腕の装甲の隙間から淡い光が漏れ出していることだった。

「——システム、起動」

アシハラが、小声で何かつぶやいた。

空間を貫く一陣の閃光。

驚くべき可動範囲でもって、アデルはジャベリンを投げる。

それは轟音をたて、真つすぐハーデスに向かっていき、左半身を六割がた削りとっていった。

「そんなー！」

ハーデスガンダムが背中から木々の中へ倒れこむ。現実感を持たせる演出として、ホ

ログラムの鳥たちが騒がしく飛び立っていった。そして呆気にとられる初代ガンダムとその操縦者をよそに、アデルは腰から一本のダガーを取り出すと、短く光刃を発振する。

あまりのパワーに、周囲の空気が揺らめくほどのピンク色の刃だ。

足元の樹木をもともせず、アデルはハーデスの倒れる地点へずかずかと歩いていった。

「なんて胆力のガンプラだ」

僕は独り言を口にした。

ガンプラバトルは機体の基本スペックに加え、完成度で大きな補正が加わる。アシハラのははつきり言って、この場に限定すれば異常だった。

仮に世界大会、もしくはアーティスティック・ガンプラコンテストに持っていったとしても、上から数えた方が早い。

この子供たちの作るガンプラとは、天と地ほどの差がある。こんな所にいるべき機体ではないのだ。

「うっ……」

身動きの取れないハーデスガンダムをアデルが蹴り転がす。

その青い装甲が土にまみれても、ハーデスは指先一本動かしていなかった。そして、

一回転して仰向けに戻った機体の上に馬乗りになると、アデルはダガーの切っ先をコクピットに向ける。

今度は止めようという気力さえ湧かなかった。

きつとあの少年には、非常に恐ろしい光景が焼き付いていることだろう。

「お前の負けだ」

アシハラはダガーを相手の胸部にうずめる。

びくり、とハーデスの四肢が一度だけ震え、そして動かなくなった。

『BATTLE ENDED』

粒子は消え、戦闘の痕跡はプラモを除いて雲散霧消する。そこには棒立ちする当事者たちと、仏頂面の乱入者が残された。

「——あのシステム、低出力ならアブソープなしでも解放可能か」

「兄ちゃん、強いね！」

「あ？」

初代ガンダム使いの少年が、アシハラを見つめている。

僕から見た少年の横顔に浮かんでいるのは、憧れの感情だった。

あれだけ苛烈な戦闘をしたアシハラが、こともあろうに彼には格好良く写ったらしい。

するとあいつは眉間の皺をますます深くした。

「それは違う。何度でも言うが、俺は三流ファイターだ。俺を褒めている暇があったら、友達に声のひとつでもかけてやれ」

少年はまるで叱られたように元気をなくしてしまっただが、そんなことは気にもとめずアシハラは僕の方を振り向いた。

正確には僕の向こう側、必死の形相でバラバラの破片をかき集めるパーツハンターの方向である。

目に涙をため、ぐずぐずと鼻水を垂らしながら、あちこちの武装、ちぎれた四肢を拾っていた。

彼は間違いなく罪を犯した側であるのに、その漂う悲壮感に手を差し伸べたくなる。

打ちのめされた敗者の領域へアシハラが、自分のアデルと同じく無遠慮に踏み込んだ。

「まだ、まだ僕は負けていない。あいつには負けていない」

「おい」

ぶつぶつと、うなされたように繰り返していた彼の体が明らかに跳ねた。こちらはアシハラにすっかり怯えきっているようだ。

僕からアシハラは背を向ける形になって、表情がわからない。

ただ、会話の内容は十分に聞き取れた。諭すような、ほんの少し角の取れた声だった。「バラバラにされて、悔しかったんだろ」

「……うん」

「悲しかったんだらう」

「うん」

「強くなりたいなら、負けを認めて、イチからきちんと作り直せ。お前はまだスタートラインにも立っていない」

「PARTSハンターの少年はうつむいている。またもため息をついたのか、アシハラのが大きく上下した。」

「『ガン普拉バトル公式審判員の心得、その五。審判員は、罪を憎んで人を憎むな』」
「……………えっ?」

あいつは、一つの条項をつぶやいた。

何のことやらわからないといった様子で、PARTSハンターはアシハラを見上げたが、その視線が気まずかったのか、奴は視線を逸らした。

「聞こえなかったならいい」

僕はいえ、驚愕と疑問で頭がいっぱいだった。

アシハラが口にしたのは『公式審判員の心得』といって、就任する際に全員が暗記さ

せられる六つのルールである。これを覚え、順守してはじめて公式審判員として認められるわけだ。

組織に入ってから教わるため、ただのファイターが知る機会のあまりに少ない条項。さらにはアシハラのような男は最も嫌いそんな理想の体現でもある。

そんな代物を、息をするようにそらんじることができるとは、一体アシハラ・ユウジとは何者なのだろうか。

「おい、後は任せた」

「え？は!?ちよつと待て?！」

「今ので嫌な注目を集めた。このゲームセンターにはもう来ない」

いつの間にか目の前にいたアシハラの言葉で、はつと周囲を見渡す。

遠巻きから、様々な年齢層の野次馬たちが少年たちを、携帯片手に眺めていた。

「公式審判員です！恐れ入りますが撮影や無用な風評の拡散はご遠慮ください！撮影した内容のSNS投稿は、犯罪になる可能性があります！」

僕がライセンスを掲げながら彼らのプライバシー侵害を止めている間に、アシハラ・ユウジの気配は遠ざかっていった。

side ユウジ

「それにしても、とんでもない幕引きだったね、ヒカワくん？おかげで警備部のサイバー

対策課からの抗議が飛んできたよ」

「ご迷惑をおかけし、申し訳ございません」

翌日。

俺とヒカワ・コウイチは、公式審判員支部の、ハカドさんのオフィスにいた。

少ない調度品と表彰状以外は、たいして置かれていない、がらんとした部屋である。

彼はそこでデスクに座り、俺たち二人に苦笑いを向けていた。

ヒカワは上司の面前で頭を下げたまま、横目で器用に睨みつけている。

何故昨日の騒動の一因が、けろつとした顔でここにいるのか、理解ができないといった様子だった。

結局パーツハンターの事件は、発端が子供同士のささいな喧嘩であったことから、世間へはほとんど広がりを見せず、興味本位で顛末を撮影した連中も、公式審判員からの要請によりネットへの投稿を削除していった。

それでも記録が完全に消えることはないだろうが、この程度のいざこざならビルドファイターたちの間では日常茶飯事だ。

やがて、ガンプラバトルの歴史の『影』へと埋もれていくに違いない。

「ところでアシハラ・ユウジくん。これは確認だが、君は我が支部最初の『特務ファイター』になってくれるんだね？」

「その解釈で構わない」

「ちよつと待つてください。どういうことですか、ハカドさん！」

ヒカワが身を乗り出す。いちいち芝居がかった挙動はどうにかならぬものか。

「おや、言っていないなかったかい。先日、彼がスカウトを承諾してくれたのだよ」

「あれだけ拒否していたのに！」

「気が変わった。この通り、制服も支給された」

「え？……そ、そういえば、いつの間に」

『乙ガンダム』でアムロやハヤトが着用していたフライトジャケットの形状を模した制服を見せる。

ゲームセンターに乗り込んだときも着ていたのだが、こいつは今気づいたらしい。

わざわざジャケットの裾を掴んでぐいぐい引っ張るのは、生地が傷むのでやめるべきだ。

「いやあ、喜ばしいことだよ。アシハラくんがスカウトを受けたおかげで、特務も幽霊部署を卒業だ」

実際のところ、俺の気が変わったというのには語弊がある。

あの電話で「特務ファイター」になるにあたって、俺はハカドさんから、金額などは別の報酬を提示された。

『君を苛んでいる記憶障害の原因となった『あの事件』にまつわる情報を提供できる。もちろん、他の人間には、情報提供の事実そのものを伏せてだ。悪い話ではないと思うが』
最初は、自分のデリケートな部分まで知られていたという確信で苦虫を噛み潰した気分にもなったが、冷静に考えてみればこれはチャンスだった。

俺の記憶を奪い、強さへの渴望を植え付けた根源と、今度こそ向き合えるかもしれない。

「きちんと説明してください。何がどうしたらそんな事態に」

「落ち着きたまえ。ヒカワくん。今回の一件、もし彼がいなければ解決できなかったのではないかね？」

「そんなことは」

「ないとも?」

上司と部下のやり取りは、すっかり形成が逆転していた。ハカドさんは鋭い視線でヒカワを見据えながら、慣れた手つきで追及の矛先をあらぬ方向へと向けていく。

「君は審判員の心得、第一項を忘れたのかね？」

「……………」。「審判員は規則を把握し、公正であれ」、でしたよね」

「そうだ。今しがた聞いた限りでは、君は公正な采配を下したとは、私には思えないのだがね」

かつて俺に心得を叩き込んだとある人によると、『心得に反する行動は審判員において重大な問題』らしい。

教わった当時はあまり深刻にとらえていなかったが、なるほど、こういう人間が下手に動く場合も想像した上での第一条だったのだ。

ヒカワはギロチンにかけられる側にでもなったかのように神妙に首を垂れた。

「処分は受けます。減俸でも、謹慎でも、なんでも構いません」

ハカドさんが腕を組み、ちらりと俺を見やった。

それは、俺が特務ファイターの任を受けると決めた後、告げられた内容をヒカワにも知らせてもいいか、という確認であった。

余計な前ふりはいらないのでさっさと告知してやってほしい、という意思を肩ですくめて伝えると、ハカドさんはにやりと口角を上げた。

「ふうむ、それなら、ユウジくんとバディを組んでもらおう」

「わかりまし……なんですすつて?」

「実はもう手続きは済ませている。これは上司としての配属通知のようなものだし、君の同意を得る必要はなかったからね」

案の定、ヒカワはハトが豆鉄砲を食ったような間抜け面となっている。

俺ももう少し表情筋の使い方を覚えていたら、昨日同じ顔になっていたかもしれないな

い。

なにせ、どう考えても俺たちは相性最悪である。

『ヒカワくんが捜査して』『ユウジくんが戦う』。役割分担として理想的だと思うがね」
「何をおっしゃるのですか。よりにもよって、こんな、ガン普拉を大事に扱わないような人間と」

「ガン普拉の破損は自分でどうにかすべき現象だろ。所詮はおもちゃだ」

「ふざけるな。いいか、その理屈で一体何人の人間が苦しんだと思つて……」

「ヒカワくん。ユウジくん。それ以上の諍いはやめたまえ」

ぐつ、とヒカワが息を呑む。

どういう理由かはまだ知らないが、こいつはガン普拉が壊されるのを極端に嫌うようだ。実際にガン普拉そのものを動かすガン普拉バトルの特性上、確実に起こり得る事象に、どうして文句をつけるのかが俺にはさっぱり理解できない。

そんなに傷つくのを見たくないのなら、柵に飾った機体を眺めて暮らせばいいのに、何故わざわざ公式審判員という、バトルに首を突っ込む資格を得たのだろうか。

「ともかく、これは書類上で申請、認可された決定事項だ。『特務ファイター』アシハラ・ユウジと『公式審判員』ヒカワ・コウイチは現時刻をもつて、チームを結成して任務にあたること」

「了解」

「……了解しました」

今回の失敗ですっかり気落ちしたのも手伝つてか、喉に何かつかえたような顔色ではあるものの、ヒカワは了承した。

その返事を聞いて、やや険しくなっていたハカドさんの表情が、ぱつと元の好人物のものへ戻る。

切り替えの早い人だ。

「そうと決まれば、握手でも交わしたまえ。これから確実に長い付き合いになるからね。ささ、見ていてあげるから」

しかも、非常にどうでもいい提案までしてきた。

気が進まないが、ここで拒否しても後が面倒なのは察しがついていた。

傍らに立つヒカワへ向き直ると、右手を差し出す。

ヒカワは俺の手を見てもしばらくやりきれない表情のままだったが、ハカドさんの視線に負けたのか、しぶしぶ握り返してきた。

生白くて、ひ弱そうな手だった。

「……よろしく」

「三流同士、仲良くやるとしよう」

「やっぱりむかつかない。お前は」

こうして俺とヒカワのバディは結成された。

そこに交わされる言葉も表情も、最低のはじまりだった。

Parts. 02 「紫電のアレックス」

Parts. 02 「紫電のアレックス」

side ???

入国手続きを済ませて、息を大きく吸う。

故国の前ではないが、悪くない空気だ。

スーツケースを磨かれた空港の床に置いて周囲に目をやると、自分たちとは明らかに異なる国籍の人間たちが、せわしなく歩き回っていた。

「たった一年で随分と変わった。そうは思わんか？アレクシア」

「え？」

オレの妹が名を呼ばれてこちらを向く。その背中まで伸ばした茶髪が揺れた。

整った顔に収まった細い眉尻と潤んだ灰色の瞳は、戸惑いの表情を作っている。

彼女はオレに同行してこの極東の島国までやってきていた。未熟だが、オレの知る限りではもつとも信頼のおける人間ではある。

「私は日本に来るのは初めてですよ？兄さん」

「ふむ、そうだったな。かつてここに来ていたのはオレだけだった。時差ぼけが抜けて

いないとみえる」

「もう、すっかりしてください」

アレクシアがほほ笑むとこの無機質なエントランスの空気も幾分か華やぐ。

この顔を、老いさらばえる前に剥製にして飾っておきたいとも思うが、そうはいかないのが残念だ。

加えてオレと彼女は顔がよく似た双子なのだから、鏡を誉めているようなものである。

「今の時間は」

「午後二時です」

ほぼ予定通りだが、それ故に歯がゆい点もある。

『仕事道具』がまだないのだ。

「機体とパーツ一式が届くのは明日になるうが、それまで何もしないとこのも実に屈だ」

「既にいくつか、この付近でバトルができそうな所に目星をつけておきました」
「ほう。それなら空白期間も簡単に埋められる。よくやった」

そう妹を褒めておくと、オレは空港の固定電話へ向かった。

背中越しに、静かにアレクシアがつき従っているのがわかる。

記憶していた番号にかければ数コールで相手が出た。

「アレックス・メルフォールだ。ナリタに到着した。肩慣らしに行くので五分で迎えを
寄越せ」

簡潔に要件だけを伝えて、受話器を叩きつける。

返答は聞いてやる義理がない。相手は受話器越しでもわかるほどに慌てていたが、それを気に留める必要がどこにある。

どうせオレが残された時間を無為に消費する気だと慌てているに過ぎんだ。異邦人を真っ先に疑ってかかるのは日本人の短所の一つである。

「まったく、オレを誰と心得る」

「兄さん？」

「いや、些末なことだ。気にするな」

何やらこちらの顔をうかがっているアレクシアに、ひらひらと手を振った。

彼女がこんな態度になるのはオレが露骨に不機嫌な時だけである。

八つ当たりをするような人間ではないとわかっているのに、妹は苛烈に燃え上る炎に触れるように、おどおどとする。

余計な目ざとさだ。

「向こうに話をつけた。お前が目星をつけた場所に向かうでしょう」

「はっ」

荷物を手に空港出口へと歩く。

目的の設定と、至るまでの道のりは既に決めてある。重要なのはそれを時間内に踏破できるかどうかだ。

我々『ムラサメ』に与えられた刻限はあと一か月。第十回世界大会までとなる。

それまでにオレの、「アレックス・メルフォール」の名を日本に知らしめてみせる。

決意を新たにしてみれば、心の臓の高鳴りを確かに感じた。

side コウイチ

仮想の大地で、RX-78-2の「ダメージレベルテスト仕様」は逃げ回っていた。

クリーム色のボディカラーは相変わらずであるが、今回は粒子消耗量計測用のクリアパーツを増設された。それを追うのはツヤのない黒で塗装された『ジム・クウエル』だ。

ビームの応酬が交わされるが、テスト機のライフルは高硬度に設定されたジムの装甲にはじかれ、ジムがかえす一撃は確実に退路を塞いでいた。

「操縦技術、戦術選択に関しては本人より上手だな」

僕はその戦闘に関する所感を、手書きでメモしている。

現在の恰好としては、スーツの上に白衣を羽織っていた。

特に意味はないが、ラボにいた時の癖だ。こうしないと集中力が切れる。

ガンダムに追いつがるジム・クウエルは、アシハラ・ユウジのガンプラのデータを基に、ヤジマ製のフルスキャン3Dプリンターで出力した検証用機体である。性能は原典たるアデルより劣るが、機動データ自体は踏襲されているので、かなり本物に近い動きを再現できていた。

このジムは換装などを考慮していない設計であるため、純粋な戦闘データだけを取りやすいという利点もある。

とうとうRX-78に間合いを詰めたジム・クウエルは、背面に回り込んだかと思うと、右脚で蹴りをかました。

テスト機のメインブースターを載せた「ランドセル」が火を噴いて停止する。

「ガンダム、攻撃パターンをセンサー系集中へ変更」

音声入力を認識したガンダムは、ジム・クウエルのセンサーアイへバルカン砲を浴びせる。

それすらものともせず、ジム・クウエルは相手の頭部を鷲掴みにしてしまった。腕部がうなりをあげてガンダムを荒野に叩きつけ、引きずり回していく。

ガリガリという音が耳に痛い。その勢いのままに、ジムが相手を岩壁に押し付ける。とうとうガンダムの右腕がちぎれとんだ。想定外の損傷に、しまった、と慌てる。

「テスト終了。システムを停止」

瞬く間に粒子は筐体へ収束していき、後にはものいわぬガンプラたちが残る。

崩れ落ちた黄色いRX-78-2を、ジム・クウエルは冷淡に見下ろしていた。

『BATTLE ENDED』

無機質なシステム音声が、僕以外に人のいないテスト・ルームに響く。

僕が支部に来て初めてのダメーゼレベル実験は、こうして好調に終わった。

フィールドに倒れ伏すテスト用RX-78ガンダムは、腕のポリキャップが断裂するに留まっている。

これはプログラムの改良が、理想的な状態にまで近づいていることを示していた。

本来ならば喜ぶべき時だが、僕の気分は晴れない。

「はあ……。再検証するにしても、あれを見るのは気が進まないな……」

テストには彼のGPベースを一時的に借り受けて行っている。ビルドファイターの全戦闘記録を封じたこの小型端末は、僕が本人の立会いの下解析したのだが、あまりに内容がひどすぎた。

いわく、同じ模型部員の機体を完膚なきまで壊しつくした。

いわく、ゲームセンターの野良試合で起こった乱闘に無関係ながら介入、すべて壊すことで終わらせた。

その他にも枚挙にいとまがない程の、アシハラとアデルによる暴挙が列挙されてい

た。

「お前は他人のガンプラをなんだと思っているんだ！」

「前にも言っただろ。ガンプラはガンプラだ。機動兵器の形をとったプラモデル。それ以上でも、以下でもない」

アシハラはそんなことを平気で言う男。

僕の嫌いなタイプであつた。

ガンプラはそのビルダーの時間と労力、技術の結晶。仕様上しかたないとはいえ、その壊れる姿を見て悲しむものが大多数だろう。

しかしながら、あいつは自分の機体に対してこだわりがあるようには思えなかつた。ふらりと支部を出てはあの黒いアデルをボロボロにして帰つて来る。

眉ひとつ動かさず、淡々と修理しては腰のホルスターにしまいこんでそれつきりだ。

僕らが組んでから一週間が経過したが、たいてい言い争いをしているか、それ以外はまともに口もきかない状態である。

「どうかね。進捗は」

「ハカドさん」

上司であるハカドさんが、ペットボトルを両手に持つて部屋にやつて来た。

「関節部の破断まで抑えることには成功しましたが、まだまだです。今回のテストの理

想は無傷か、再組立てでできるレベルの脱落ですから」

「そうか……。まあ、一息つきなさい。そこまで眼鏡の汚れを放置するなぞ、几帳面な君らしくない」

「はあ。ありがとうございます」

ペットボトルのキャップを開け、冷たいお茶を流し込む。ハカドさんはミネラルウォーターをちびちびと飲んでいた。

「ユウジくんの機体の……データのみを写し取ったのか。ヤジマの3Dプリンターは機体そのものを複製できると聞いたが、アデルをそのままコピーしないのかね？」

「それは見た目だけです。もう少し年数が経てば改良もできるでしょうが、現状は内部構造を100%解析し、再現することは難しいです」

「分解してもダメかね」

「万が一に、それをしたとしても不可能だと思います。あいつの製作技術は職人とかそういう類のものです。人間の指先に籠った年月と知識に共感できる程、機械は進歩してはいません」

そう説明しながらあいつのGPベースをユニットから外し、あらためて全体を観察する。

まさしくこのベースは、その『人間の年月と知識』の結晶だった。アシハラのは、

バトルの回数にしては、やけに綺麗である。

バトルユニットに直接接続する精密機械だから、さすがに丁寧に扱っているのだろうか。

識別用にビーズ型のアクセサリをはめ込むことができる中央上のくぼみには、やはり何もはめこまれていなかった。

ベースにも案外表れる個性がそぎ落とされていたのである。

「年月、とはいっても彼はまだビルダーとしてデビューしてから三年しか経っていないと聞いたが」

「え？そんなんですか？」

その言葉に僕は思わず耳を疑った。ハカドさんも、瞋を上げて意外そうな表情をあらわにする。

「意外と短いだろう？」

「いえ、そういうことではなく、その、このベースには一年分の戦闘と改修の記録しか残っていないんです」

「妙だ、とは思っていた。」

情報格納技術の進歩で、毎日バトルにあけくれても十年分は保存可能な端末だ。

ビルダーが本職という言葉信じにせよ、アデルに投入されている技術は完全にバ

トル用のそれで、一年間で世界クラスまで研鑽することなど不可能だ。

消去されたデータが存在するともいえるのだろうか。

それなりのプログラミング知識があれば確かに可能だが、過去の戦闘記録により行われる、機体の制動補正に多少なりとも影響が出るはず。

いかにアシハラとはいえ、自らの修練の証をそう軽々しく消せるものではあるまい。

「まさか、前科？」

「おいおい何を言い出すんだ。それはスカウトした私の首が飛ぶぞ」

「すみません。さすがに邪推でした」

知らず知らず口に出していたらしく、慌てて僕はその推測を打ち消す。

ハカドさんは過去を代償に言うことを聞かせる、といった司法取引に応じる人ではない。

実のところ最近、ちよつと自信がなくなってきたのだが。

「おおかたベースを買い替えた、といった所だろう」

「交通事故にでも巻き込まれたならともかく、データが全損したと？」

「それ以上は余計な詮索だよ、ヒカワくん。気になるなら、ユウジくん本人に尋ねればいいじゃないか」

「……いえ、それは……」

ハカドさんが空にしたペットボトルを丁寧につぶし、ごみ箱に放り込んだ。

弧を描いたボトルは入口をはずれ、ハカドさんは大柄な体躯を縮ませてそれを拾おうとする。

「なあ、ヒカワくん」

「はい」

彼は巖のような顔を下にしたままだ。表情が伺えない分、威圧感のある低い声だけが喉元まで迫る。

「君も含め、私の部下にはお人よしが多いからね。皆が気を使つてばかりでは、これから先の業務に響く」

「承知しています」

「それならいいんだがねえ」

所在なさげに僕は自分の眼鏡を外し、レンズを布でぬぐった。

バディを組む、というのは責任という重しを二人で一緒に担ぐということだ。いがみ合えばいずれ揃つて潰れることは目に見えている。

ハカドさんが案じるのも当然だろう。

「君は大人だ。大人の特権とは、子供に対して譲歩する余裕を持つことだ」

「それが自分の信念を曲げるとしても、ですか？」

「間違つた選択なら、彼を選んだ私も、諸共にしつぺ返しを食うだろう。しかし、私は石橋を叩いてから渡る主義でもある。『アシハラ・ユウジ』は簡単には砕けんよ。君も身を預けてみてはどうかね？」

最後はおどけた調子に戻つて、ハカドさんは語りかける。
僕は手持無沙汰に他人のGPベースを弄びながら考える。

あいつと僕はわかりあえない。

それでも、あいつの技術を利用する。しなければならぬ

自分の理想をかなえるため特務ファイターを必要として、アシハラを巻き込んだのは紛れもなく僕であるからだ。

ならば僕のすべきことは、意地を張ることではあるまい。

「……いや、しかし」

ハイモックの屍山の頂上で立ち尽くすアデルの光景が浮かぶ。

あの獣じみた戦い方は、僕には絶対に許容できないラインだ。あれを許せば、ヒカワ・コウイチの根本が揺らぐことになる。

譲歩か、決裂か。優柔不断な思索の泥沼にはまる寸前で、ぱん、と掌を打ち合わせる音で正気に返った。

「さて、話は変わるが手伝いを頼みたい」

「え？なんですか？」

「世界大会前のアクセス集中で広報のサーバーがダウンしてしまつてね。暇な特務から、技術者を貸し出してほしいとき」

「アシハラとの話は？」

「サーバーと違つて、そつちに期限はないよ」

「……わかりました、向かいます」

仕事用のカバンにベースをしまつて、僕はそれを肩に担いだ。

広報にも専門のメンテナンス業者がいるはずだ。しかし当然作業代がかかる訳だから、僕に払われている給料の枠内に押し込んでしまおうというわけだ。

一分一秒が惜しい部署とはいえあんまりな話だ。落ち込む僕をよそに、ハカドさんはうきうきとベースに近づいている。

「バトルするならきちんと申請出してからにしないと、怒られますよ」

「君の名義じゃダメかね？」

「当たり前ですよ。僕の貸し出し時間、ちょうどさつき終わりましたから」

腕時計を確認してから、肩を落とす上司を置き去りにして部屋を出る。

扉を背にして閉めると、自然とため息が出た。最後のくだらないやり取りはともかく、無意識に先送りしていた問題に半ば強引に向き合わされた。

それは僕とアシハラの間、口をあける大きな断層であり、もたもたしてはハカドさんに背中を押される。

解決策はきつと、どうあっても不本意だが、飛び込んだ方がましには違いない。

「とりあえず、お菓子でも買って与えてみればいいのかねえ」

そんな賄賂を本気で一考してから、あまりのくだらなさに乾いた笑いが出た。

side アレックス

紅白二色に塗装されたウイングガンダムが宇宙を駆ける。鳥を模したバード形態で、星の隙間を一直線に抜けていく。

直立不動の体制で迎撃するのは紅のガンブラ。ザクアメイジングと呼ばれ、三代目メイジンの愛用するガンブラの一つである。

『燃え上がれ……』

ビルドファイターには聞きなれたメイジンの声。

ザクの長距離砲から放たれる、正確無比な射撃がバード形態を襲う。しかしウイングは、そのまま機体を左右に空転させビームを回避した。

『燃え上がれ……！』

ザクアメイジングはミサイランチャー、バズーカと次々と武装を切り替え、弾幕を張る。

軌道を先読みし、的確に弾道を合わせた、一発一発が必殺のものだ。

ところが、紅白のウイングガンダムはそれをすべて変形せずにかわしてみせた。

直線突破をやめないままに、この反応速度。

操縦しているのは相当の実力者と見受けられる。

幾重もの攻撃の網をかいくぐり、もはや射撃が間に合わぬ間合いまでウイングが詰めた。

しかし、メイジンとて隙を生んだわけではない。

『燃え上がれ！』

突然、ウイングの主要射撃兵装であるバスターライフルが無残に両断される。

相手の腰部に収納された、ヒートナタの仕業であった。

普通ならばここで勝負の大勢は決まる。

あれだけの機動の最中に、機体中央に位置した構造物を真二つに切り裂かれれば、バランスが崩れるのは自然の摂理だ。

ところが紅白のウイングは一步も引かない。目にもとまらぬ速さでモビルスーツ形態に変形すると、左腕のシールドを構える。

それが真ん中から折れると、抜き放たれた緑色のビームサーベルがナタと交錯した。

『燃え上がれ！ガンプラアアアアアアアア！！』

メイジンの熱の入った絶叫と共にその映像は止まった。巨大な「GBWC 10th」の文字が画面に出現する。

『第10回ガンプラバトル世界選手権！君は、生き残ることができるか？』

その文句と共に、映像は暗転した。

オレが見ていたのは、恒例の世界大会の告知動画だ。あの紅白のウイングガンダムは世界大会の定番としてよく出演しているが、今年のもは随分気合が入っていた。メイジンのガンプラとのバトルを流すなど、前代未聞である。

「いつもとファイターが違いましたね」

「メイジンは本気であった。まあまあの手練れと見える」

映像を再生していた携帯端末を閉じて前方にあるトレイに放ると、あわててアレクシアが端末に傷がないか改めた。

それは妹の私物だった。

オレたちは今、日本の部下が寄越したリムジンに乗っている。移動手段として文句はないが、この国では人目につくので、オレは気に入っていない。

「それで、なんだったか。『特務ファイター』とかいったな？」

「はい。日本の公式審判員本部が提唱したシステムで、初心者への指導やバトルプログラムのアドバイザーとして、審判員資格のないファイターを採用するものですよ」

「くだらぬ。要は仕事の丸投げか」

かつての公式審判員は、ガンプラバトルの普及活動、ルールの監視、システム開発への協力等を一手に引き受けていた。現在でも、一般人の認識はそのままだろう。

組織内で分担して十分に機能していたにも関わらず、それを素人に任せるとは怠慢極まったものである。

「いや、それとは別の目的の隠れ蓑か……」

「別の目的、ですか？」

「アレクシア。この制度の発案者は誰だ」

「えっと……」

妹から告げられた名を聞いて、オレは合点がいくと同時に、大きな笑い声をあげた。

妹と運転手が、ぎよっとした顔でこちらを見る。

さつきまで顔を曇らせていた男が、壊れたように笑いだせば当然か。

「ははは、そういうことか。アレも、存外あきらめが悪いではないか！」

「兄さん？」

「お前もこいつ、制度の発案者のことは知っているだろうか？」

「それは、まあ」

妹はオレの言わんとすることを図りかねているようだが、それはオレと彼女の理解能

力の差というものだ。

オレには、特務という言葉の裏に隠された、とある個人の野卑な私情が手に取るようにわかる。業務の軽減というメリットをお偉方にちらつかせて、自分の本来の目的を達成したのだ。

そういう狡猾で知恵の回る人間が、この特務ファイターとやらの生みの親である。

つまり、オレと同類ともいえよう。

「案外、捜し物は近くにあるかもしれないな」

「アレクシア様、アレクサンダー様、到着いたしました」

リムジンが停車したのは、とあるゲームセンターの入口だった。

けばけばしい色の電飾が、昼間にも拘わらず激しい主張を繰り返している。入口には同年代くらいの子少年少女がたむろし、道路にはみだしかけているアーケードゲームを遊んでいる。

この建物の、商業主義の象徴のようなデザインは万国共通らしい。

「帰りはまた連絡します。ありがとうございます」

「いえ。お気をつけて、お嬢様」

アレクシアがねぎらいの言葉をかけると、運転手はやけに嬉しそうな顔をしたまま走り去っていった。

道行く連中はオレたちに怪訝な顔をちらりと向けるが、この灰色の瞳と視線がかち合うとそそくさと視界から消えていく。

妹は先刻オレが放り投げた端末で情報をさらっていた。

「ここは数日前、パーツハンターによる活動が確認されましたが、審判員と特務ファイターの手によって収束しています」

「うむ」

「まだ日本支部内部の情報には手が付けられていません。よって職員名などの詳細は不明ですが、穏便に処理されたのは確かなようです」

「程度が知れるな。権限の上下関係からして、腰抜けは審判員か」

自動扉の前へ足を踏み入れると、故郷とよく似た喧噪と騒音の嵐が吹き荒れた。

オレの初陣はここからはじまるのだ。

Side ユウジ

「いらつしやい。おう、ユウジか。模型部はどうした」

「早引けだ。それよりGPベースを貸してくれ。一秒でも早く、アデルの改造とテストがしたい」

「今ならどつちのブースも空いているから、じゃんじゃん使っていいぞで」

俺の叔父、アシハラ・リョウタロウは模型店『ピシディアン』の店主である。

筋骨隆々の肉体に作業用のエプロンを着け、頭に海賊のようにバンダナを巻いた風変わりないで立ちで、無精ひげはいつも生やしっぱなしだ。

俺のガンプラはこの『ビシディアン』で調達され、改造され、試運転される。

まさしくビルドファイターとしての活動拠点といえた。

制服の上着を脱ぎ、カバンからガンプラと工具を取り出すと、叔父がカウンターから上半身を乗り出してきた。

「これからバイトだろう？仕事仲間とはうまくいつているのか？」

「俺がそんな人間かよ。最後に会話をしたのはおとといだったか」

そう答えると、あの人は太いゲジゲジ眉を八の字にして、ぐう、と喉から独特の唸りを発する。困った時の叔父の癖だ。

「ユウジ。お前は、手先こそ器用だが心の在り方が不器用だ。自分の思ったことを常に奥へ奥へと封じ込めようとする」

「なんだ、それ。今度は心理学でもかじったのか？」

「そんな大層なものじゃないさ。育ての親としての心配だよ」

アデルはキャノン砲を二門追加、右腕にビーム砲と左腕にガントレットを装備した簡易改修仕様となっている。火力こそ増大しているが、総合バランスはガタガタだ。

我ながらどうしてこうなったのかまるで説明できない。ここまで自分に合わない調

整を施したので、新手のハンディキャップにすら思われる。

自機から顔を上げるといつの間にか、正面に叔父が立っていた。その右手は彼のお気に入りガンプラを握っている。

本人にならってバンダナを頭部に巻き付けたジエスタだった。

「バトルするのか」

「先に言っておく。今のユウジは、俺には勝てない」

「やけに自信満々だな」

空色の粒子が周囲に満ちる。

『Field 1 Space』

「覚悟、信念、何よりコミュニケーションの足りない甥っ子にこの私は倒せんのだ！」

「そうかい」

今日の叔父の言い回しはやけに頭にくる。球体操縦桿をきつく握りしめ、アデルの駆動を体感し、深呼吸をした。

依然、異物がかかえるような違和感は消えてくれない。

『BATTLE START!』

『『アデル・シャドウ』、アシハラ・ユウジ。Sally Forth……!』

『アシハラ・リョウタロウ。『ジエスタ』、獲物をかっさらう!』

二機のガンプラが、戦場に飛び出した。小細工なし、真つ向からの砲撃戦が幕を開けた。

Side アレックス

このゲームセンターのガンプラバトルコーナーはいわゆる民度が低かった。

言い方を変えれば、一定のルールやコミュニティを犯すものがヒステリックに排除されるようにできていた。

妹の選択が故意なのか否かは問題ですらなかったが、オレたちは入って十数分で妙な日本人に絡まれたのである。

そいつは一見すると普通の若者ではあるものの、敗北すると髪をかきむしって喚き散らす男だった。

「操作の感度が悪い!」

「ビームしかないのにイーフィールドなんて卑怯だ!」

「太陽炉採用なんてチートだろ!」

自分が敗北すれば、その責をすべて他人に押し付けている。当然、バトルをした相手はしらけて台から外れ、ごくまれに哀れなニュービーが餌食になっていた。

もちろん勝てば鬼の首を取ったように男は大騒ぎをする。やがて男の周囲には一歩ひいた空気が出来上がり、空気の読めない次なる犠牲者が引つかかるのを、彼らは憐憫

をこめた目で見送るのであった。

そこにオレたちは土足で上がり込む。わざとこの日本人のほど近くで観戦し、その人物評価を直に届けてやる。こんなに幼稚な存在へ遠慮する必要がどこにあるのだ。

我が祖国フランスの小学生ファイターでもこんな負け惜しみは言わないし、取り乱さない。

いつそ笑いを取ろうとしている道化だと考えた方が、理屈は通るではないか。

「は」

「誰だ、今笑ったのは?!」

オレが失笑をこぼしたのを聞きとがめたのか、日本人の狂気はこちらに向けられた。

葬列のごとき群衆は、くだんの哀れみをオレたちにも投げかけようとしたが、見慣れぬ外国人にわずかに反応を変えた。好奇が入り混じっている。

「おい、お前。ボクをバカにしたな? あ? ……なんだ。知らない顔だな、初見の癖に偉そうに!」

「ショケン、とは初めて見ると書く用語のことか」

ずいぶん独り言の多い道化をよそに、オレは妹に尋ねる。日本語に不自由はないが、こういった俗な表現は理解しづらい。

だが意思疎通が困難なら、妹に通訳させればいいのだ。彼女はオレのサポートとし

て、この日本に來ている。オレに稀に生まれる隙を自覚し、的確に彼女に埋めさせれば、それはオレが完璧であることに代わりあるまい。

彼女は日本人に一瞥もくれないまま、ノータイムで肯定する。

「はい。この場合、ゲームセンターにはじめて來た人のことでしょう」

「こいつはそんなことを気にしているのか」

「いいか？ここにはこのルールがある。それをわきまえた強豪ファイターしか入れないんだよ！」

次にこの日本人が発した言葉の意味は無難に読み取れた。要は時代遅れの選民思想だ。

無論この男がそう思い込んでいただけだろう。

そも、強豪ならば敗北自体がありえない。真の強者にとって、勝利とは必要最低限の絶対条件である。

「……アレクシア。ここの風紀は最悪だが、日本での『紫電』の復活劇にはちようどいいな」

「そのつもりで選ばせていただきましたから」

「話を聞いているのか？日本語通じないなら出て行ってくれろ？」

無視されていてもまだ喋り続けていたらしい。

そろそろ金切り声も聞き飽きたな、とぼんやり思っていると、アレクシアが一瞬だけ、オレと揃いの灰色の瞳をヤツに向けた。

すると日本人は口をあんぐりとあけたまま肉体が硬直し、やがてすごすごと後ずさる。

たいしたことはしていない。

ただ、睨んだだけだ。

シンプルなそのアクションは動物に太古から備わる威嚇行為であり、上下関係をはつきりと叩き込んでしまうものだ。

いかに虚勢を張る弱者でも、本能的に危機を刻み付けられて尻尾を巻くだろう。

だが、その反応は、妹には最短の回避手段でも、オレの興が冷めるというもの。

せつかく売られた喧嘩を高値で買い取ってやるというのだ。

アレックス・メルフォールは遁走ではなく闘争を望む。

「日本人、貴様にバトルを申し込む」

「え？」

「国内強豪ファイターなのだろう？オレも母国では名が売れた身だ。万が一オレに勝つたら、貴様の名前を持って帰ってやる」

「いい、言うじゃないか。外人」

「ただし負けたら貴様は地に這いつくばって、この場の全員に許しを請え。そして金輪際、バトル界限に顔を出さんことを命じる」

「なんだと！」

日本人は落ち着きかかっていた鼻息を再び荒くしてくれた。その眼はぎよろぎよろと、集まっていた野次馬に向かう。

しかしこの場に居合わせたものは、最早矮小な狂気を恐れていない。

オレの態度が説得力をもって彼らから不安を噴き晴らしたからである。

胸を張り、目を見開き、はつきりといきわたる声で堂々と挑発する。

肉体に一片の震えなく、こいつならやりかねない、というのを雰囲気で押し通すのが虚勢との違いだ。

オレの得意とする所である。

「どうだ、欲しいだろう？ハリボテではなく、本物の名声が」

「ああ、ああ、わかったよ！受けてたとう！」

「そう来なくては」

妹は指示を静かに待っていた。オレは振り返らずに問う。

「アレクシア。このゲームセンターで貸し出されている機体の数は」

「全十三機です」

「オレの機体とお前自身の機体を見繕って持って来い。三分だ」

アレクシアは無言でこくりと頷くと、胸元に名札をつけた店員を発見して声をかけた。

そいつもこの推移を見守っていたらしく、妹をどこかへ案内していく。

オレは自らの両手に目を落とす。

革製の指ぬきグローブを外すと、生まれつき色素の薄い、病的な白さの掌があらわになつた。

三代目メイジンが前髪をかき上げてオールバックにするように、バトルの際に必ず行うローテーション。

オレはこのグローブの付け外しによって、蹂躪の準備を行うのであった。

「試合形式はタッグマッチ。ボクは相方、外人のあんたはツレと組むんだ」

「よかろう」

「兄さん、持ってきました」

「ドムか。紫の機体を選んだことは褒めてやる」

オレは重MSの「ドム」。アレクシアは換装型の機体「ストライクガンダム」の「ランチャー」という遠距離砲撃装備を選択していた。

『Please Set Your Gun—Pl a』

同時に貸し出されたGPベースをセットし、水色の粒子が柱状に噴出する。

この虚構の小世界では、いかなる暴挙も暴力も許容される。

「しかし、こんなゲームセンターが日本での初陣で、本当によろしいのですか？ 兄さんには地方大会などもっと相応しい舞台が……」

「まだ甘いな。衆愚に勝利を見せつけるのは前提にすぎん。あの道化のことだ、己の敗北を認めず駄々をこねるだろう」

その場合、仲裁で駆り出されるのは誰か。

ガンプラバトルが原因で起こった争いを穏便に解決する、なおかつ『たかがゲームセンターのいさかい』に出勤できる、暇な部署はどこか？

「……まさか、いえ、そううまくいくでしょうか？」

「いくとも。ここは一度、その恩恵を受けた店だ。次も必ず頼る。『公式審判員』をな」

『BATTLE STARRT』

「時間だ。アレックス・メルフォール、『ドム』出陣する！」

「アレクシア・メルフォール、『ストライク』行きます！」

オレたちのガンプラは、完全に同タイミングで出撃した。

戦場は荒野。

ドムは地上専用なので砂漠をホバー移動し、ストライクは脚によるダッシュで追従す

る。

オレは即座にあの日本人の機体をズームし、その機種を確認した。

左肩に巨大な盾を懸架した特徴的なシルエットに青と白のカラーリングですぐに判別がつく。

「GNT-0000 ダブルオークアンタ。相手は、赤の機体色に大型対艦刀を二振り、インパルスか」

『ソードシルエットですから、私と逆の近接型ですね』

「アレクシア。インパルスはお前が処理しろ。オレはクアンタを落とす」

『了解』

手早く指示を出すと、オレたちの二機は手早く散開した。

空いた空間に、クアンタのGNソードビットが飛来してきたのだ。この遠隔武器はクリアパーツの効果で、素組みですらかなりの切れ味を發揮する。

「だが、六つしかないものを半分にわけたのは失策だな」

あえてそう呟くと、オレはアームレイカー式操縦桿を操作した。

ホバー移動をコンマ数秒単位で方向転換、直線的な動きの組み合わせを、疑似的な円運動に至るまで組み上げる。

誤差を修正。さながら絨毯の文様を描き出すように、極限までに磨き上げていく。

人類の技量にオートのビット風情が追い付けるはずがない。それが三基まで減らされているならば尚更だ。

あらぬ地点に刃が呐喊して、ドムは間隙をすり抜けられた。

あつという間にクアンタを破壊可能なレンジに突入。バズを向けて威嚇する。

「そら。抗わなければ負けるぞ?」

『トランザム!』

相手のボディ全体が赤く発光すると、視界から消えた。機体出力を三倍にまで引き上げる。「トランザムシステム」だ。

『お前はマジで潰す!』

「マジ?ああ、この場合は、全力という意味か。……それがどうした?まさか、本気でかればオレに勝てるんでも?」

『くっ!』

激昂したクアンタが、紅の尾を引きながら呐喊してくる。AIによる乱数座標変更を織り交ぜ、本体自体はカメラで追いきれないレベルまで加速する。

ただし、その軌跡が残像で表現されてしまうことを失念している。この程度のファイターならば、オレの戦術予測の範疇でしかない。

「そっか」

すかさずオレはドムの胸部に搭載されたメガ粒子砲を放出した。眩いビームの光芒が、クアンタのカメラアイへ向けて突き刺さる。

設定の話になるがこの武装は、目くらましにしかない極めて低出力な代物だった。

センサーに傷をつけることならば可能性はあるが、素組みではそれも期待できない。だが、オレにはそれで充分だ。

手段が一つしかないならば、最高のタイミングで使いこなすのがアレックス・メルフオールである。

『目がー』

クアンタの動きが止まった。

いくら機体の移動速度が桁違いだろうと、操縦する人間が動きを止めれば自慢のスペックは意味をなさなくなる。

あまりに大きな隙。オレのドムは再度バズを構え、狙いを定め。そして。

「……いふん」

『な、なんだ!?!』

あの日本人の驚愕する声が聞こえる。ドムが武器を降ろし、攻撃をしてこない意図が

理解できないのだろう。

『なんのつもりだ!』

オレは何も言わずに仮想距離にして二十キロの中空を指さした。そこに一つ大きな円形の爆発が発生する。そして、共有された機体シグナルから、インパルスガンダムのものが消失した。道化に付き合わされたことと、アレクシアの射程範囲に入ったことが運の尽きだったということだろう。

「こちらが一機墜。このままでも、機体数の差によってこちらの勝利だ」

『くそ、くそっ! あいつ、ボクより先に落ちやがって!』

「そこで、貴様はどうする」

『はあ?』

武装をすべて捨て、背を向けるとドムに腕を組ませる。低高度で滞空するクアンタは、仁王立ちのドムを背後から見下ろす形になるだろう。

素人から見れば八百長、あるいは自殺行為でしかない。だが、オレはあえてその行動をとった。

「まもなく妹がここに来る。いや、あいつめは空気を読まんから、ここ一帯薙ぎ払うかもしれぬ。それでは勝負にならない」

『……何が言いたい?』

「オレに一撃を試みることを許す。なに、我が一族の名誉にかけて真実だとも」

ドムが真横に伸ばした右指先を、くいと曲げる。いかな単細胞にも理解可能な最小限の侮蔑だ。そして、当然ヤツは激昂した。その感情に呼応するように、胸部のGNドライヴが唸りを上げる。

『がああ、どこまで、どこまでボクをバカにするんだああ!!』

洗練されたデザインと真逆に、クアンタは獰猛に飛び掛かって来る。

オレはそれに対してただ一度だけ、アームレイカーを捻った。

素組みのドムの裏拳が、最も速く、最も強力な角度で飛ぶ。そして正確無比にクアンタの胸部に命中した。こっん、と軽くプラスチックをノックした音がこちらにも伝わった。

必要最小限の衝撃は粒子を通して波紋のように広がり、静かに機体中枢を沈黙せしめた。

『……………あれ?』

「あくまで試みるだけだ。この『紫電のアレックス』に勝ちたいなら、万倍の技量を積んで来い」

クアンタが膝から崩れ落ち、ドムにしだれかかる。無慈悲な機械音声が、戦闘終了を告げた。

オレの勝ちだ。

『BATTLE ENDED』

沈黙して事の推移を見守っていたギャラリーが、一斉にざわめきはじめた。

あいつらには半信半疑だったオレの実力が、記憶として刻まれるだろう。この反応が最も起こり得る場所を、妹は選んだのだ。適切な采配だったといえる。

「あのドム、クアンタに拳をぶっつけただけで倒した！」

「三分も経たずにか!？」

そのどよめき、すべての賞賛と驚嘆を込めた歓声が耳に心地よい。

そう、オレが求めるものは、この光景の中に見出されるのだ。

名誉も賞賛もいらぬというファイターがいるが、あれは嘘だ。強者にとっての最大の報酬とは、地に伏す弱者の泣き顔ではない。

オレに期待する者、懐疑を抱く者が一斉に、オレを認める瞬間だ。

「お疲れさまです。兄さん」

「ああ」

アレクシアが歩み寄って来る。汗一つかかず、ストライクも無傷。まあ当然といえる。
る。

オレの妹の技量とて、そこらの無名ファイターなぞ、指一本触れられることすら許さ

れぬ位のセンスを持つているのだ。

今回はあまりそれが発揮されなかったのは、兄としてやや残念ではあるが、そのうち嫌という程発揮してもらうことになるだろう。

「すげえな、あんた、二つ名まで持つているのか」

野次馬の一人が、羨望のまなざしをたたえて尋ねてくる。

「『紫電のアレックス』だ。掌に三度書いて飲んでおけ。お前たちの国での風習だろう？」

「あああああ!!!」

そして敗者側から上がった奇声に、その場にいた全員が注目した。

中でもオレとアレクシアが向けた視線は、極めて冷え切っている。

ここまです測通りの反応、現在は三文小説の登場人物でもやらないのではないか。

「お前！お前！なんで先に負けた！二人がかりなら勝てたかもしれないのに！」

あの道化の日本人が、妹に敗北した己の相方に詰め寄っている。相手の襟元をきつく締めあげて、前後に揺さぶるのは滑稽だ。

相方の方は酸素がいつていないのか声を詰まらせながら、弱弱しく首を横に振っていた。

「し、仕方がないだろう。女の子の方も、滅茶苦茶に強かった。実力が違いすぎる。あい

つら二人とも世界ランカー級だって」

「そんなの、お前の憶測だ！ボクは負けなしだ！どいつもこいつも足を引つ張ったり、卑怯な手を使つたりして！」

さて、ここまでは予測の範疇だ。後は問題の種火を大きくし、目的の連中を呼びつけるだけでいい。オレはアレクシアに対して、人差し指と中指を二。三度曲げ伸ばしをして合図すると、バトルユニットの反対側へ回り込んだ。

道化はオレが歩み寄ってきたことに気づき、振り向いてから、オレの表情を見て青ざめた。

オレが何を考えているか、被捕食者の勘で察知したらしい。

その泣きはらした顔を、今度は本物の拳で横合いに薙いだ。

side コウイチ

「外国人ファイターと、日本人ファイターが喧嘩している」

サーバー修復を手伝っていた所で、この一報。

パーツハンターの事件があつたゲームセンターからの通報を受け、僕は現場に急行した。

実のところ、こういう事件自体は審判員がいちいち対処するものではない。

問題は相手が外国人ファイターであることと、どうも暴力沙汰に発展しているらし

い、ということだ。

向こうの国の審判員に訴え出られてでもしたら、この支部の責任問題になりかねないのである。

世界大会を前にして、それは避けたい。

ふとアシハラも同行させてやろうという考えが頭をよぎったが、あいにく、あいつの所属する宮里学院高校は距離が遠すぎた。

「後で文句つけられても、僕は知らないからな」

想像の中でのあいつが、ふん、と鼻を鳴らした気がした。

「ガン普拉バトル公式審判員です。道を開けてください」

到着すると店長に事情を話し、ライセンスをかざしながら人込みを進む。

バトルスペースのあるフロアは野次馬たちでごった返していた。決して大きくはない建物の構造上、その場所にたどり着くまで僕は大いに苦労することとなった。

「こんなのおかしい！ボクはなにも悪いことはしていない！」

入り口を開けてから耳に届いていた罵声が、発声主まではつきりとわかる距離になってきている。ややダボダボのシャツを着た青年が、レースゲーム用の座席に縛り付けられていた。

誰がやったかが知らないが、ずいぶんひどい対応をしたものだ。

「この人と、口論をしていたファイターというのはどなたですか？」

僕が呼びかけると、周囲の何人かが、バトルベース近くで話し込んでいる男女を指さした。

どちらも目が覚めるような鮮やかな茶髪で、何となく外国人と判別できる。

『公式審判員です。少しお話しよろしいですか？』

とりあえず英語で話しかけてみると、先に少女の方が振り向いた。

アシハラの時と同様にぎつと外見を観察するが、あいつ以上に整った容姿であった。

日光の恩恵を受けた健康的な白さの肌の上で、宝玉のようにくりつとした灰色の瞳、面相筆で描いたような細い眉、筋の通った高い鼻と艶やかな唇が収まっている。

アシハラを影とすれば、彼女は陽のイメージを強く受けた。

「大丈夫ですか？」

「あつ、はい」

いけない、見とれていた。

「私たちに話しかけられたのですよね？」

「あれ、日本語がわかるんですか？」

その小さな口から飛び出した流暢な日本語に、僕は少なからず驚かされた。

まるで訛りや片言のところが無い一言だ。日本の滞在期間が長いのだろうか。

「はい。私はアレクシア・メルフォールといいます。こちらは兄の「アレクサンダーだ。長い故、アレックスでよい」

もう一人の青年も、やはり日本語に堪能だった。

双子の兄妹なのだろう。髪長さや性差による体型差を除けば、まるで合わせ鏡のようによく似ている。

加えてこの青年の方は、外見年齢に不相応の威圧感にじみ出していた。

どこかの国の王族に謁見を許されたような緊張が、無意識に背筋を伸ばさせる。

「アレックス……さんと、アレクシアさん」

「そうだ」

「縛られている彼と、口論になっていたということですが」

「ヤツは他の連中に欠片も益のない人間だ。だがモラル違反はパーツハンターと同じく、公式ルールでは処罰できなからうか？」

彼、アレックスの言葉に思わずうなずく。

例えばパーツハンターは他人のものを、なおかつ無断でミキシングした証拠が揃わなければ処罰できない。

アシハラと遭遇した一件の証拠は揃い得ただろうが、例外中の例外だ。子供だったからこそ、穏便に済んだともいえる。

同様にバトルでの罵詈雑言も、人道的な言動でもなければやはり立件するのは難しい。

悪役キャラの真似をしただけ、という言い訳が通じるのはガンプラバトルだからこそだ。

あくまで遊びの審判である僕たちの欠陥の一つだった。

「嚴重注意、せめて店舗への出入り禁止を言い渡すのがせいぜいでしょう。ファイター資格たるGPベースの没収までは不可能です」

「だろいな」

「それと、あなた方には支部の事務所で詳しく話をうかがいたい」

「ほう。何故だ」

「何故って。直接的な方法で、彼の身体を拘束してしまっている。これは、その、暴力行為に該当し、ます」

口にしなから、僕はその行為をおおいに後悔した。

アレックスの背後から発せられる雰囲気、怒気を孕んだものに変わったのを明確に察知できたのである。舌が口内に貼りついて、言葉がどんだん尻すぼみになっていく。

さつきまで平然と視線を合わせられていたのが、それすらかなわない。

まるでヘビに睨まれたカエルだ。歳はこちらが上でも、パワーバランスの差が明確に

すぎる。

「顔色が悪いぞ」

「え、あの」

にやり、とアレクサンダーが口角を吊り上げたが、僕はそれに気の利いた答えを返せなかった。

こんな日常離れた感覚をつい最近も味わった気がする。

それを思い返そうとしたところで、僕とアレックスの間を遮るように、アレクシアさんが進み出た。

「ここは私が」

「任せる」

握りつぶされそうな怒気が蜃気楼のごとく消滅した。

助かった、と気取られないように息をつく。だが、アレクシアさんも穏やかな表情とは言いが難かった。

「審判員さん。申し訳ありませんが任意同行は拒否させていただきます」

「えっ」

いつの間にかアレクシアさんの右手には革表紙の手帳が収まり、彼女はその内容に目を走らせているようであった。

「公式審判員による検挙、判例によると、我々を聴取によつて拘束することは妥当ではない、とされています。私たちは彼が、傷害事件を起こす前に取り押さえただけです。負傷させた訳ではありません」

彼女の小さな唇から、立て板に水を流すように見解が語られる。

その手帳に何が記されているのかは知らないが、その理屈は正しかった。こういうケースで、やや乱暴にとはいえ事件解決に貢献した人物を一方的に聴取した前例は皆無だ。どう考えても過程と結果が倒錯している。

兄妹に僕は論理的に反論できず、口を噤むしかない。

そこで、ようやく思い当たった。

この状況、自分の情けなさに反吐が出そうな感覚は、つい先日アシハラにパーツハンター事件を解決された時の心象にそっくりだ。アレックスの発するオーラも、あいつの目を見たときの戦慄とよく似ているではないか。

アシハラとの付き合い方を課題とされたその日に、アシハラと雰囲気似た人間に出会う偶然。

僕は何か作為めいたものすら感じていた。

「……」

「どうしようもなからう。だからオレたちは日本に来た。いい機会だ。貴様の上司に宣

伝しておけ」

立ち尽くす僕の前にアレックスが両腕を組んだまま再び立ちふさがると、袖口から手の中に何かを収めた。

手品じみた鮮やかな手つきで掲げられたのは、薄い情報格納媒体だ。審判員のライセンスに形状は酷似しているが、なんだろうか。

表面のディスプレイに目をやると、紫色のLEDでアルファベットの文字列と、審判員の十字を縦に裂く日本刀を模したマークが浮かび上がって来た。

その文字を、僕は声に出して読む。

『ムラサメ』……?』

「オレたちの故国、フランスで設立された『ガンブラトル私設自警団』である。公式審判員が見落とし、あるいは目こぼししていた問題を、ファイターたちが自浄するための組織だ」

僕は度肝を抜かれた。彼は何と言ったのだ。自警団だと？

ただの一ビルダーでもなく、一応は審判員に属する僕に向かつてそのルールを凌駕する存在であると、彼は言ったのだ。

まさか今回のこの喧嘩騒ぎも、その『自警団』の活動の一環だということのか。

正気の沙汰とは思えない。青ざめる僕をよそに、アレックスは貴族然とした物言いを

続ける。

「オレたちは来る世界大会までに『ムラサメ』の自浄活動を、日本にも普及させるつもりでいる」

「こんな騒動をこれからも起こすつもりなのか!？」

「こんな騒動?笑わせるな。今回はこの程度で済んでいただけありがたいと思え!」

彼から発せられる圧力が一層強くなり、僕は怯む。

隣でアレクシアさんは顔を曇らせてはいるが、また口を出してくる様子はなかった。

しかし、今の言葉が事実なら、僕はまだ言葉を紡ぐだけの勇気を振り絞れる。

さつきよりマシだ。

資格を持たぬ人間による自治行為はルール違反以外のなにでもない。

「それなら……それならますます許容できません!しかるべき捜査を行った後、強制帰

国措置も」

「できるとしても?まだ、『喧嘩に巻き込まれたフランス人の兄妹』にすぎないオレたちを国に返すなどできるものか。仮にこれからしかすとして、貴様らに真相を感知できないほど周到に行つてみせるとも!」

そう彼は豪語する。そこに妄信や妄想の気配がないのが何よりも恐ろしい。

彼は本当にこれから、本気で、正気で、公式審判員を敵に回すと宣言しているのだ。

「三年前に、貴様らの信用は地まで墮ちた。今度はオレたちが、貴様らに成り代わる番である。その為に、いくつか回収すべきものは存在するが……、それは別の話か」

「何を言ってる……」

「止められるものなら止めてみよ。オレたち『ムラサメ』は受けて立つ」

それだけ言い残すと、アレックスとアレクシアさんは、僕の横をすり、とすりぬけて、人込みへ歩いて行ってしまふ。彼らが歩くところだけが綺麗に分かたれていくのは、さながら聖書の奇跡だった。

「あ、待て……」

慌てて後を追おうとするが、もう彼らは喧噪の中に完全に姿を消していた。

去り際までアシハラに相似しているのは、やはり根が似通っていると感じる故の錯覚だろう。

しばらくやり場のない手を空中にさまよわせたが、諦めて下ろす。

なんとということか。目の前で犯行予告と宣戦布告を突き付けられて、迂闊にも立ち去られてしまった。

ハカドさんに報告されたらお叱りを受けそうだ。

「おい！あんた審判員なんだろう！早く助けてくれよ！」

まだ被害者はずいぶん元気だった。

この日本人青年に対しても、いくつか聞くべきことはありそうだ。

彼を縛っているビニールひものようなものを解きながら、僕にはあの兄妹の姿が目に見えなくて離れない。

できることなら二度と会いたくないが、彼らは実行するつもりに違いない、という確信があった。新たなホームとなった組織への大きな脅威に、僕はなすすべもないというのか。

『アシハラ・ユウジは簡単には砕けんよ。君も身を預けてみてはどうかね?』

「アシハラにどことなく似た雰囲気、アレックス。ハカドさんは、このことを知っているのか?」

確かに同じタイプが自分の側に立っているのなら、彼との距離を縮めるべきだ。

例えば悪いが、毒には毒を以て制す、という先人の知恵もある。どうみても僕よりアシハラの方がアレックスとの相性はいいだろう。

「僕はどうするべきなんだ。どうすれば……」

よろける被害者の青年を立てさせて、同行させながら、僕はこちる。漠然とした不安が沼のように足元まで迫っている気配がある。ニュータイプでもあるまいが、そのイメージを否定できない自分がいた。

side ユウジ

膝をつく黒いアデルと、それを見下ろす濃紺のジエスタ。ジエスタは左肩を挟られていたが、それ以外はかすり傷でダメージに繋がるものはなかった。

俺は叔父のガンプラに完敗した訳である。昔ならともかく、今の俺がここまで大敗を喫することはありえざる顛末だった。

「ユウジ、何故負けたか、わかるか」

「負けに理由なんてあるかよ。俺の腕が落ちたのだ」

粒子が回収され、ユニットが稼働停止する。

「違う、違う。お前は感情がすぐガンプラの動きに出る。射撃が苦手なお前が砲撃仕様なんて自殺行為だし、それを抜きにしても動きに精細を欠いていた。今のお前は何かストレスや焦りを感じているのさ」

「……かもな。特務ファイターになってからこっち、いらつくことばかりだ」

「そんなにひどい人なのか？ その同僚。なんだったら、俺が一言文句を……」
「いや、いい。余計なお世話だ」

叔父いわく、俺は焦っているらしい。

昨日までは冷静でいられた自分が、突然ここまで憔悴するとは驚きである。

何故、と自問自答すれば思い当たる原因は一つだけだろう。

俺が特務ファイターに電話で再勧誘された時、ハカドさんが告げた『未確認の極秘事

項』のことだ。

口元を反射的に抑え、くぐもった声を漏らす。

「アレックスが来るかもしれない」

「彼が?……待て、ユウジ。まだあの子にこだわっているのか?」

「当たり前だろ……ぐ、む」

「バカ。無理をするな。だいたいお前は……」

叔父の叱責は続いていたけれど、俺の耳には届いていない。

ハカドさんの言葉が頭で鐘の音のように反響しつづけているのだ。

『とあるビルドファイターが日本に来る。国籍はフランス。容姿は茶髪に灰色の瞳。こ

の特徴は、君の記憶には一人しかおるまい?』

そんな人間は、アレックス・メルフォル以外に知らない。

傲岸不遜で傍若無人。王様気取りの大馬鹿野郎だ。

あいつのことを詳しく思い出そうとすると、また脳髓が悲鳴を上げ、吐き気とめまい

が全身を襲う。

これまでの発作とは一線を画す強烈な反応だ。

俺の一年前の記憶を奪った原因が、アレックスにあることは間違いない。

過去の記憶と対峙させられる苦痛は、特務の任務やガンプラの改修によって逃避でき

た。

ところが俺はとつくに対人関係の構築に失敗している。

苦痛の軽減や解消は望むべくもない。何もかもが手遅れだった。

「だけど、それでもあいつに会わなければいけないんだ」

強迫観念が記憶障害をねじ伏せる。

その為の最短距離として、特務ファイターになってやったのだ。

ハカドさんがアレックスに関する情報を寄越すのと交換で、俺は自分の時間を特務に

割く

それがパーツハンターをとつちめた日に、ハカドさんと交わした取引の内容であつ

た。

まさかヒカワ・コウイチの目的に賛同したなど、天地がひっくり返つてもありえない。

「叔父さん、もう一回バトルをさせてくれ。ノルマルに差し戻せば、ジエスタには勝てる」

「……それは構わないが、あまり無理はするなよ?」

心配そうに語りかける叔父をよそに、俺は額を伝う汗を乱暴にぬぐった。

ヒカワと馴れ合っている暇があつたら、一分一秒を惜しんで腕を上げて強くなる。

そしてあいつを探し出す。

日本は広い。

まさかアレックスとヒカワが顔見知り、などという事態は起こるまい。

『アデル・シャドウ』。アシハラ・ユウジ。Sally Forth……!』

『よし来い!』

side アレックス

ゲームセンターから離れた路傍で、オレたち兄妹は迎えを待っていた。

「本当に、本当に大丈夫でしょうか？」

「さっきの威勢はどうしたのだ。審判員の心得、その三つ目を思い返してみよ」

『審判員は、神ではない』

「オレたちは連中に代わって神になるべき組織である。日本に来てから、随分慎重になつたではないか」

「それは、そうですねが」

妹が傍らでのおどおどとしているが、オレはむしろ上機嫌だった。

日本の審判員の精神的練度は想定より低い。

スケジュールを繰り上げて動かし、それに伴って思い通りになる時間が増える。

「機体が予定通り到着すれば、世界大会前に第三までを回収して……」

「兄さん、さすがに皮算用がすぎます。日本には彼以外にも優秀な審判員が」

「ははは。そうか、さすがに無謀であった。お前の忠告に従うとしよう」

これから先、与えられた短い時間は、多くの目的への確に割り振らなければならない。アレクシアに諫められ、オレは一度頭を冷やした。

『ムラサメ』全体から俯瞰すれば自警団の活動なぞ、その一部にすぎぬ。

それより重点を置くべきものは二つ。

回収と、再会である。

「アレクシア、まずは『神器』の回収を最優先にする。繋がりそうな案件はすべてオレの目に通せ。いいな」

「はい。先行して入国していたメンバーからの情報集積と、整理を急ぎます」

妹はそう言うと、自らのスマートフォンでどこかに電話をかける。おそらくは今必要な最低限の人員をかき集めるためのものである。

事務作業や調査に関しては、彼女はオレに並ぶ天才だ。

母国語で早口にまくしたてている妹を横目に見ていると、額に雨粒がぼつり、と落ちてきた。

空を見上げれば、いつの間にか重苦しい雲が彼方から押し寄せ、わずかに雷鳴も聞こえる。

故郷とは空気も、空模様も異なる日本の空だった。

胸に郷愁のような温い感情が湧くが、これは実感や記憶の想起が伴わないものらしい。

故にオレは、淡々と事実を述べる。

「……一年ぶりの再会、であったか。どんな面構えになったか期待しているぞ、ユージ」
オレの小さな独り言は、妹には聞こえなかったに違いない。

Parts. 03 「フルタイム・ワーク」

Side ユウジ

特務ファイターの仕事についてから二週間ほどの日数が経ち、高校生活二度目の夏休みが到来した。

それはすなわち、仕事が本格的に開始されることを意味する。

俺はハカドさん呼びつけられ、その任務を命じられた。班長執務室は相変わらず殺風景で、彼は資料と称して、そのイベント概要を手渡してきた。

「今度ヤジマ商事がスポンサーをやっているシヨツピングモールで、ガンプラバトル普及のためにイベントを開催する。君たちには運営を手伝ってきてもらいたい」

「たち、というと」

「当然、ヒカワ・コウイチくんとき」

あの人には期待に満ちた目でそう言われたが、たかが高校生になにができるというのか。

俺は審判員支部の建物を歩きながら、当然の疑問を浮かべた。

『広報部』の執務室を出ると経路は複雑に分岐し、他の部署へ連結する。

ガンプラバトルの振興を主とするこの『広報部』は、建物の最も入口付近に配置されていた。それより奥には大別して三つの部署がある。

違法行為の捜査、検挙を行う『警備部』。

ライセンスの改修やヤジマに技術提供を行っている『技術開発部』。

そしてすべての部署の活動を管轄する『執行部』だ。

そのほとんどが三年前のプラフスキー粒子暴走事故以降の組織再編で誕生したらしい。

「ヒカワくんは研究室にいる。預けていたGPベースを受け取りたまえ」

ハカドさんに言われたことを思い出し、ヒカワのいる場所へ向かう。

何人かの職員がすれ違いざまに眉をひそめた。何かをした覚えはないが俺という人間はあちこちで煙たがられているようだ。

たとえ迷惑こそかからずとも、これだけ不愛想な態度の新人がいればこうもなろう。注がれる視線を感じないふりをしながら、よく磨かれた廊下を進む。

かなり速足で歩いているため、俺の左右を様々な部署の扉があつという間に通り過ぎていく。

普段は『広報部』の部屋に入る所だが、あいつが研究室を借り受けているのは『技術開発部』である。

廊下の突き当たり、電子ロックがかけられたいくつものドアの内、その一つから見覚えのある淡い水色の光が漏れ出していた。

たびたびヒントと共に変更されるパスコードを入力する。そのヒントが口頭でなく、あいつのデスクに飾ってある写真だから面倒くさい。

今週は『0083』の試作一号機と二号機の対決だった。シーンは核攻撃直後だからそこに関係する数字と叫びたら、無線周波数の『582』か。

その通り入力すると、ずっしりと重い金属ドアは開いた。

他人が入ってきていることに気づいていないのか、ヒカワは俺に背を向けてバトルシステムを観察している。プラフスキー粒子の光は、あいつの顔の輪郭を浮かび上がらせるが、眼窩の下には大きなクマがあるのがわかった。

「仕事だ」

「ん？……ああ、お前か」

「パスワードは長めに設定しておけ。重要度の低い施設とはいえ、この程度なら俺でなくとも破れる」

「毎週考えるのが大変なんだよ……。一年戦争の日付のネタは使い切ったし」

ヒカワが無造作にシステムの電源を落とす。艶消しブラックで塗装されたジム・カスタムが墜落するが、それに気を回す余裕もないらしい。

白衣はよれよれで、かけている細いフレームの眼鏡もずれているし、いかにも疲れ切っている様子だった。

「ハカドさんは何と？」

「イベントの手伝い、だそうだ」

「そうか……。たいしたことじゃない。言葉は大仰だけど、要は子供たちに作り方や操作方法を教えるだけさ」

「そんなことは、スカウト時にとつくに聞いた。それを俺に任せるのか」

「ああ……。僕としては確かに不本意だけれど、これが特務の本業だよ」

珍しくムキにならずヒカワは眠そうに目をこする。

正確には、ムキになる気力を失っているらしい。

「世界大会前の一か月はガンプラに興味を持ち、とりあえず観戦しに行こうという人たちを集める重要な期間だ。僕らに夏休みはないよ」

「給料さえ出ればどうでもいい。それはそうと、GPベースを返せ」

俺はヒカワに右手を差し出す。

ここ数日は叔父の模型店にあるバトルシステムで稼働させていたが、レンタルのベースではどうしても反応が異なっていて不便だった。

「わかっている。ここに保管されている一年分のデータはだいたい解析し終えたから、

そろそろ新鮮なものが欲しかったんだ」

筐体からベースを外すと、ヒカワはそれを俺の掌に載せようとして、わずかに躊躇した。

「なんだよ」

「……妙なことを聞くが、ガンプラを初めてどのくらいになる？」

「それを教えて俺に得はあるのか」

「……いや、そうだった。お前はそういう奴だったな。気にするな。忘れてくれ」

俺の返答にヒカワは呆気にと取られていたようだが、やがてかぶりを振って俺にベースを返却した。念のため、各種データが書き換えられていないかを後でチェックしておくと思う。

それからあいつは、あつ、と間の抜けた眩きを口にしてから、懐に手を入れた。

よれた白衣の内から着崩したスーツが垣間見えるのがみつともない。

「お前にもう一つ、渡すものがある」

ヒカワはそう言って更に、厚さ一センチほどの薄い電子媒体を探り当てた。

GPベースと違って、何かにはめこんで使用するという訳ではなさそうだった。どちらかというとスマートフォンに近い。

「それは何だ」

『特務ファイター』用のライセンスだよ。身分証明に必要な個人情報と、逐次与えられるイベントの情報などを格納できる。公式審判員と最新情報のやり取りも可能なすぐれものさ」

「ハカドさんからそんなもののは話は聞いていないぞ」

「認可降りたのが三日前だから、伝える暇がなかった。ここ数日忙しいのなんの」

そう言うと、尋ねてもいないのにヒカワは語り始めた。

パーツハンター事件で特務ファイター、というか俺の突発的な介入を目にしたヒカワは、すぐさま本部にこう上申した。

『特務ファイターが公式審判員に所属する正式な職務であることを証明できなければ、好き勝手な介入と混同されて、組織全体への風当たりが強くなるかもしれない』

その認可が下りたのが三日前。精査におよそ一週間あまりだから役所にしては迅速だ。

とはいえギリギリのスケジュールであることには変わりなく、おかげで寝不足でグロッキー状態だというのである。

俺に意図のわからない質問をしたのも、その体調が原因とみた。

「あんなこともあったし、ライセンスの必要性は上がるかもしれないな」

「俺には大した覚えはない」

「え？……ああ、ちよつと個人的に、変な因縁をつけられただけだよ。事件ですらない」
こんな調子だ。まだ意識は夢と現実の狭間を行ったり来たりしているのではないだろうか。

そんな奴が作った『ライセンス』を掴み、あらゆる箇所から眺める。

基本的な形状はヒカワが携帯している公式審判員のものに似通っている。しかし細かなシルエツトなどが微妙に異なっていた。

「つまり、こいつはお前が改造したのか」

『技術開発部』に公式審判員のライセンスの基幹テクノロジーを開示してもらって、わからない所はヤジマのノウハウで補完しただけの代物だよ。模型的に言えばニコイチだ」

GPベースを特務ファイター専用の半袖ジャケットにしまうと、明らかに起動用と思われる側面のスイッチを押す。すると緑色のレーザーが俺の目を照らした。

思わず目を細めるが、それも一瞬の出来事だった。

「所有者の指紋と網膜パターンを記録、持ち主として認識するしかけだ。これでこいつは、お前の言うことしか聞かない」

「メンテナンスはどうする」

「そこはそれ、僕だけが知る起動パスがあるから問題ないさ」

やけに自信満々にヒカワは胸を張る。その所作もふらつきながらであるため、いささか病的ですらある。

俺はライセンスをGPベースと反対側のポケットに仕舞った。ヒカワが作ったものなど信頼度は皆無だが、受け取らなければ資源の無駄になる。

「とりあえず、今度のイベントとやらにも使えるだろう。受け取っておく」
「そうしてくれ。僕は寝る」

ヒカワはソファアに崩れるように座り込むと、ものの数秒で寝息が聞こえてきた。

用事は済んだので退散しようと考えたが、ふと引き返して研究室の中を物色する。

部屋の奥に用具入れがいくつか設置されていて、その一つから丁寧に畳まれたブランドケットを取り出した。

きつとこの本来の主であるエンジニアたちが仮眠に使用するのだろうか。

それをヒカワの全身を覆うようにかぶせる。生地は鼻にまでかかったらしく、やや息苦しくなるが知ったことではない。

そしてようやく俺は部屋を出た。

この行為は風邪を引かれても後のスケジュールに差し障りが出るからで、決して親愛の情ではない。

side アレックス

スーツに身を固めた一人の女が宿泊先のホテルに到着した。

癖のない黒曜石のような輝きの長髪を頭頂部できつく結び、やや濃い化粧も理知的な雰囲気有助長させている。アレクシアがもう少し落ち着きを覚えればこう成長すると思わせた。

名前はオザワ・リサ。日本人でありながら、長年オレたち兄妹のサポートに就いているのである。

「空港での検査に時間を要しました。この国はセキュリティだけは強固ですから」

「ふん、仮にも生まれ故郷をそう卑下するものでもあるまいよ」

「いえ、わたくしはアレクサンダー様とアレクシア様に仕えてから、祖国への思いは捨て去っています」

他愛のない会話を交わすと、オザワは持っていたアタッシュケースを机上に置いた。

慣れた手つきで二重のロックが外される。

「こちらで間違いはないですね」

ケースは解放され、ガンプラが外気に晒される。オレは機体の外観をチェックしたが、原型機体、武装、改修箇所、すべて注文通りだ。そして部位ごとに特注の耐衝撃クッションに区分けされていたおかげで微瑕ひとつなかった。

「パーフェクトだ。マニユーバの調整はこちらで行うとする」

「承知いたしました」

「ところでオザワよ、アレクシアには会ったか？」

妹は連絡もなしに朝からどこかへ出かけたらしい。それについて問うと、相手は首を横に振った。

これでこのホテルにいる部下は、誰もアレクシアの行方を知らないことになる。

言い含められたのか知らぬが、警備を強化することも一考すべきであろう。

「残念ながらお嬢様には、まだお渡しできていません」

「現在地は把握しているのだろうか」

「行動分析をしますに、こちらの可能性が高いかと」

彼女は懐から一枚のチラシを取り出して、オレの前に差し出した。

それは薄っぺらなもので、色彩が派手なのは表面のみ。裏にはろくな内容も記されていない簡素な紙切れだ。

『第10回世界大会記念！あやとシヨツピングモール ガンプラ製作教室！』

そう銘打たれている。

極端に頭身を縮めた規格『SD』のザクとガンダムが戯れる絵は、いかにも児童向けだった。

省みれば日本に来た当日、アレクシアが車中でこのシヨツピングモールと端末の画面

の間で視線を右往左往させていた。おおかたオレの日本におけるバトルの候補地として、あのゲームセンターと共にリストアップされていたのか。

「製作教室、か」

「初心者向けのイベントで、お嬢様のビルダー能力には不要なものです。しかしながら、公式審判員が主催しています」

「ほう？」

その進行に公式審判員が関わっているなら、妹が首を突っ込むのもわかる。

なにせ審判員に宣戦布告したのはオレだ。手間を省くべく敵情視察にでも行ったの
だろう。

かといって、あいつにどうとでもなるものでもない。審判員に比肩しうるのはオレのみである。

まさかアレクシアは本気で遊びに向かったのだろうか。

「はしやぎすぎだ」

「連れ戻しましょうか？」

「否！ 渡したらあとは放っておくようにするがいい。どうせオレは機体のテストで一日を使うつもりだ。あいつの遅れた分は自力で取り戻させる」

そう命じるとオレは、チラシを丸めて屑籠に放った。小さな紙屑になったそれは、狂

いなく吸い込まれていった。

Sideユウジ

俺たちは町内に点在するショッピングモールの内、町の中央にあるものによつて来ていた。

この地方は商店街などの独立した店舗の勢力と総合施設の勢力が拮抗し、顧客の流れも半々になっている。少しでもその天秤を傾けるべく、ショッピングモールの親会社はこうした企画を打ち出していて、俺たちもその片棒を担いでいる訳である。

「お前の、ひいては『特務ファイター』のイメージを改善するチャンスだ。少しは気張れ」「ファーストツシヨンのはずだ」

「誰の言動のせいだと思ってるんだよ!?!この前も技術開発部のチーフに、スタッフが研究用の試作機を壊されたと苦情を言われたんだ!」

「そもそも俺に興味本位で押し付けるのが悪い。そのクレーマーには、ガンダムフレームの研究レポートを読むより先に『鉄血のオルフェンズ』を全話見返すように勧めなくてはべきだ」

「あ、ああ、言っておく……っ」

あれから泥のように眠ったヒカワは、いつもの調子を取り戻していた。

やかましいのは困るが、寝不足で足を引っ張られるよりはマシであった。

「イベント本部は五階のエレベーターを降りてすぐの所にある」

「玩具売り場を占有しているのか。たかが一玩具にしては厚かましいじゃないか」

「ここの構造に詳しいんだな」

「この地域に住んでいる人間なら、一度は来たことぐらいあるだろう」

まだ開店前のおもちや売り場に踏み込む。シヨッピングモールそのものがまだ開いていないので、店内はがらんとしていた。

建物の規模が大きいおかげだろう。ガンプラのコーナーはかなり広大で、『ビシディアン』より広いのでは、とも思う。

「ヒカワさん。こっちです」

小柄でパーマのかかった長髪の男性が陳列棚の間から手を振っている。

律儀にスーツを着続けるヒカワと違い、そいつは緑と赤のチェック柄のシャツにデニムといった出で立ちだった。

公式審判員、特に子どもと密接に触れ合うメンバーには服務規定が緩いという話を聞いたことがある。

俺に面識はないが、おそらく支部にいるヒカワの知り合いなのだろう。

プラモデルの箱で形成された谷間を抜けてその男の下へ向かうと、開けた空間に出た。

通常の作業台を四つ、正方形に並べた大きさの所謂『ファミリーサイズ』が複数設置されていた。世界大会時の体験製作ブースと同様の形式といえる。

「お待たせして申し訳ない、カザミさん」

「いえいえ。今回は噂の特務ファイターも来てくれるからと、我々広報班の一部が勝手に張り切っているだけです」

この長髪の男はカザミというらしい。小柄で常に薄笑いを浮かべているのが不気味だ。

ヒカワが俺を仏頂面で表情が固定されていると評するならば、こいつは笑顔のまま顔の筋肉が固まっている。

カザミはその笑みを俺に向けて、やけに甘ったるい声で話しかけてきた。

「あなたが、特務ファイターですか？」

「ああ」

「カザミさん、気をつけてください。こいつ生意気な上にひねくれ者ですから」

隣でヒカワが余計なことを付け加えてくるので、隙だらけの脇腹に肘鉄をくらわす。

ヒカワがうめいて身をよじるが、カザミはそれをやはり笑って受け流していた。

随分肝のすわった男だ。

「ははは。この年頃ならそんなものでしょう。あなたの名前は？」

「アシハラ・ユウジ」

「アシハラくん。ハカドさんから伝わっていると思いますが、ここではバトルのアグレッサーと、私の製作講座の手伝いに入ってもらいます」

最初にブースで製作講座を開き、次に自分のガンプラで勝負をする相手として俺を当てるつもりらしい。いきなり個々に対戦すると子どもならではの諍いがそこかしこで発生するからだろう。

いつぞやの失敗をまたも思い出したのか、ヒカワが虫を噛み潰したような顔をする。

よりにもよって俺と組む理由にされてしまった一件だ。ヒカワ・コウイチにとって、パーツハンター事件はトラウマに等しいだろう。

これからも長々と引きずるに違いない。

「相手の年齢層は？」

「基本的には小学生低学年から中学生までを想定していますが、趣味を開拓しに大人も来ます。重要なのは『特務ファイター』を見たユーザーが、ガンプラを作りたい、と思うことです」

「なるほど、それでアシハラ以外の特務が生まれれば万々歳だ」

それはますます無理難題だな、と心中で思う。

俺はファイターとして三流だ。たとえ初心者相手にも顔を真っ赤にして全力でぶつ

かる人種である。子どもがはじめて作ったガンプラの関節を捻じ切り、装甲を叩き潰す。

そしてつかみ取った勝利に一切の呵責なく悦に入る。

それがアシハラ・ユウジであり、正々堂々を期待されても困るといふものだった。

とはいえヒカワの言う通り、少なくともこの支部に所属する『特務ファイター』は俺一人のままである。

人材確保のためなら、大会以降を見据えて藁にも縋らんばかりだろう。

カザミが狐のような細い目で確認を取って来る。

「アシハラくん。概略は理解できましたか？」

「善処する」

「よろしい」

そしてこの胡散臭い男はにこやかに頷いた。

side コウイチ

開場十分前になった。

デパート自体はもう開店しているので、ブース前には多くのビルダー候補が並んでいるだろう。

僕自身のシフトは午前までだが、アシハラはその代わりがない以上、ほぼ一日働く

ことになる。その支援が僕の本業となる。

なにか飲食物を差し入れておいてやろうと、僕はあいつのいる作業スペースへ向かった。

特務ファイターの作業スペースは、会場の真正面。例えるなら小学校の教室での、教壇にあたる位置にある。アシハラはそこで自分のガンプラのチューニングを続けた。

なんだかんだで、準備はしつかりとしてきたらしい。

「アシハラ、一口で食べられるお菓子を置いておく。疲れたら食べる。それとお茶だ。定期的に飲んでおけ」

台の隅に、袋にいられたチョコレートとペットボトルを置いてやる。

アシハラはボトルにちらりと視線を走らせたが、それ以上の反応はなかった。

そんな奴の態度を、なかなか懐かない犬のようだと感じる。余計な真似をすると噛みつかれそうだ。

ハカドさんに忠告されたから、僕なりに歩み寄っているつもりだが、アシハラのような読心じみた観察スキルはない。

未だにあいつの思考、思想は理解も共感もできていなかった。

「……また改造しているのか」

アシハラはガンブラである黒いアデルに目をやる。

酷評された僕のガンブラに対する審美眼だが、この機体が相当に作り込まれていることはわかった。HGがベースだが、ほとんどRGに近い。

機体は『ガンダムAGE』出典プラモ独特の構成、つまり頭部および胴体のコアパーツと、四肢に分解されていた。

アシハラは胴体と手に持った青い部位を見比べながら、400番の紙やすりで微妙な形状変更を施している。

「ウエアシステムだね」

「一目瞭然だろう」

「一からフルスクラッチを？」

「スパロー原型だ。それもわからないのか」

「悪かったな。僕はてつきりレイザーかと思った」

「あれは貴重なキットだ。換えが効きづらいからバトル用には向かない」

『ウエアシステム』はアデルが本来保有する換装機構である。四肢すべてを戦況に応じて交換することで、一機でがらりと戦闘スタイルを変更する。アシハラいわく、今は高機動ステルス型の『スパロー』を改造しているらしい。

「どうせノルマルだけじゃ物足りないと思っていたんだ。今日中の完成は見込めない

が、進めるに越したことはない」

「ノルマル？」

「通常装備のことだ」

日本語の抑揚で発音されているから確証はないが、フランス語だろうか？

以前遭遇した『ムラサメ』のフランス人兄妹のことを想う。兄であるアレックス・メルフォールは高圧的な人物で、その立ち居振る舞いに、僕はどこことなくアシハラと共通項を見出していた。

かろうじて続く話題の足しになるだろうと、アシハラに尋ねる。

「なあアシハラ、『ムラサメ』って聞いたことあるか？」

「Zガンダムの研究所、あるいはSEED DESTINYの可変量産機だ」

「いや、そうではなくて、フランスの……」

「ヒカワさん。ブース開けます」

ちようどやって来たカザミさんに会話を遮られてしまった。

アシハラはわずかにいぶかしげな様子を見せたが、すぐに興味を失ったようだった。

僕は誘導のため、カザミさんとフロアの外へ向かう。入り口には多くの人が詰めかけていた。

小学生ぐらいの子供が大半だが、中には高校生以上であろう人もいる。

既に何人かの職員が整理にいそしんでいるが、どう見ても人手が足りていない。

「こんなにたくさんの人が、ガンプラを作りたいと来てくれるのは、嬉しいですね」

「ええ」

カザミさんは顔をほころばせた。僕もつられて頬が緩む。

彼はほぼ同い年ながら、この支部の広報部広報班長、つまりは特務班長であるハカドさんと同格の上司にあたる。

誰に対しても笑顔を絶やさず、物腰は丁寧で、この組織には新入りである僕にもそう接してくれていた。

なんでも、他人にガンプラ製作を教えることに関しては抜群に上手だとの噂だ。今日はその腕前を拝めるのだろう。

「お配りした整理券の番号に従ってご案内します。みなさん、押し合わずに係員の指示に従ってください」

僕らの他にも、広報班のメンバーが応援で次々出てくる。混沌とした人の流れを分割、整理していくのは流石の一言だ。

僕も早速、しわの入った整理券を握りしめる男の子に声をかけた。

side ユウジ

「……………」

まだ年端のいかない子どもが、俺の作業台に身をのりだして目を輝かせている。やがて俺の視線に恐れをなしたのか、遠慮がちに距離を取った。

もう慣れた光景だ。寂寞を感じる心はとうの昔に錆びついた。

「すごいガンプラだね……」

「うん、でも触つちやダメだよ、きつと」

ここそそと子どもが言葉を交わしているのが耳に届いた。

特に要請された訳ではないが、俺は見本として二体のガンプラを用意している。

『ガンダムエクシア』と『ストライクガンダム』だ。

バトル向けではなく、直立の姿勢を前提とした観賞用だった。もし戦闘に持ち込んだとしても可動範囲はないに等しい。

チョイスしたのは初心者が最初に選ぶ機体の代表格だからだが、それだけでもない。

これらは俺なりに未練のある機体である。

『全世界のガンプラファンのみなさん！この映像が見えますか？もしそうなら、この一戦を見逃さないでください！』

やけに甲高い、誰かの声を思い出した。そういえば、三年前の夏に俺の人生を変えたのはその声があった。誰かの声がかけた。強くなつてアレックス・メルフォールともう一度会

う、という目標は変わっていないはずだ。

……本当にそうだろうか？

そんな疑念が頭をよぎる。

強くなるのは、具体的に誰のレベルまで上り詰めればいいのか？

そもそも俺とアレックスはどんな関係だったというのだ？

驚くべきことに今の俺には、それらさえ思い出すことができないのだ。

例の症状が、激しい吐き気とめまいが詮索を中断させてしまう。

現在のアシハラ・ユウジに残されているのは、アレックスという大馬鹿野郎に会わなければならぬ、という強迫観念とこうした無意識の記憶の断片のみである。

「……バカらしい」

過去がどうであれ、その時の俺はきつと前進すると決断したのだ。

子ども相手に戦え、と言われるのならそれらも引き受ける。片っ端から潰してやる。とにかく、強くならなければ。

明確なゴールのわからない焦燥感、叔父に指摘されてなお、俺の胸にくすぶり続けている。

「アシハラ・ユウジくん。準備はいいですか」

「ああ」

我に返ると、例の審判員、カザミが相変わらず真偽不明の笑みを浮かべて歩み寄ってきた。

「どうやら所定の人数が集まったらしい。俺は別に用意していたガンプラの箱を開けた。」

すると俺の周りに群がっていた子どもたちは、蜘蛛の子を散らすように各々のスペースに座る。

今回、俺が使うのは当然ながらHGのアデル。二種類あるうち、ライトブルーの一般機仕様だ。

普段使用しているものとは同一の機体だが、教導用として、審判員の予算から別に買いなおしたものだ。

作業台を軽く片付け、供与されたマイクをオンに、ブース全体に自分の声が届くように調整した。

自分の隣にカザミが座るとこちらに一層微笑みかけたが、あいにくそれに応える愛想はない。あいつも自分のマイクの電源を入れた。

「ガンプラ製作教室を担当する、カザミ・シロウです」

「同じくアシハラ・ユウジ」

「今回は144分の1スケールであるHGのプラモを使用して、基本的な工作とそのク

オリティを上げる小技を教えます」

子どもの付き添いらしき大人たちは、俺の態度に困惑しているようだが構うものか。そう考えて、最初のランナーに手を伸ばす。

ちなみに俺とカザミの手元は備え付けられたカメラが拡大し、数か所に展開されたスクリーンに映写されている。

「パーツのくつついた板をランナーと呼びます。ガンプラの場合、アルファベットで大きく区分されていますね。ざっと目を通し、不足がないかを確認してください」

「万が一そのパーツ不足があつた場合は？」

「それは近くの職員に言ってくれば、対応しますよ」

カザミは観客から上がる質問にもにこやかに対応する。

本来この程度の質問は自力でどうにかすべきなのだが、現場の最前線で働く審判員はだいたいが過保護ばかりらしい。

この男の場合裏があるともとれるが、こんな類のはヒカワだけかと思っていたので、頭が痛くなる。

「さて、説明書を確認したら次はニツパーでパーツを切断します。まずは対応するアルファベットのランナー、それから同じ番号のパーツを探し出してください」

なおニツパーは各自が店で購入、あるいは持参することになっている。

爪切りでも代用できるが、やはり専門の器具が望ましいのだ。

ニツパーの刃をランナーとパーツの間、ゲートと呼ばれる部分に差し込んで切断する。

「この時、パーツの側から離して切り離すのがポイントです。ね、アシハラくん」

「……近づきすぎると挟れるからな」

話題を無理にこちらに振らないでほしいものだ。

そう思った俺はわざと一つのパーツをランナー付近で切り出して、挟れたパーツを指さした。

この間、子どもは自分の購入したガンプラの組み立て作業を行っている。

俺の手元を見て慌ててニツパーの刃を調節する奴が何人か見受けられた。

「パーツに残ったランナーの残りは、当然組み立てる上で邪魔になります。今度は刃を密着させて切り落とせば綺麗になります」

客の中には、おおげさに頷く者もいる。

俺は黙々と別のパーツを切り出し、残存した部分をヤスリで削り取っていた。

「気になるようならアシハラくんのように、デザインナイフや紙ヤスリを使えばいいですね。ここまでとりあえずやってみましょう」

そう言うとかザミはいったんマイクの電源を切った。

一瞬奇妙な静寂に包まれた作業場が、今度は親子、あるいは友人といった者たちの談笑の場へと早変わりする。

「わざわざパーツを挟るなんて、勿体ないですよ?」

「どうせ使わない予備パーツだ。好きにさせろ」

そう答えた俺はわざと挟ったパーツを箱に放り込む。白いパーツは箱の隅に無造作に転がると、ランナーの網目の合間に消えた。

時間がわずかでも空けば、本来の自分用のガンブラ『アデル・シャドウ』を調整する。パーツハンターの一件以降、ただのカラー違いだったアデルをかつて設計していた仕様に差し戻すべきだと結論付けていた。

とはいえ案の定手間と時間はかかる。ガンダム世界で言うところの『整備性』が劣悪なのだ。

装甲を取り外して内部に工作を施していると、こりずにカザミが話しかけてきた。

「アシハラくん。提案があるのですが」

「なんだ」

カザミはにこやかに手本用のガンブラ、『メツサーラ』のボックスイラストを見せた。その意味するところを理解した俺は、大きくため息をついた。

side コウイチ

かれこれ二時間は人込みに揉まれただろうか。

秩序もなく動き回る少年たちを落ち着けて、ブースまで案内するのは骨が折れた。ようやくシフトを終えた僕は後方の待機所にて椅子に座り込んでいた。

スーツの下は汗でぐっしり濡れている。

カザミさんは途中で抜け出して、アシハラと一緒に教室を進行中のはずであった。

「あいつ、カザミさんに迷惑かけていないだろうな」

控室の陰から教室の方をこっそり覗き見る。

質問をしているのか、二人の周囲には人だかりができていた。しかし、その数がカザミさんとアシハラでは明確に差が生まれている。

本人の顔がチラチラとのぞく程度になるまで囲まれている『公式審判員』と、ぼつんと作業を続けている『特務フアイター』。

その光景は特務班にとっては非常にまずいものでもあった。

『ガンプラの普及活動、ならびに改良の協力』。そのうちの前者が機能しなくなれば、この役割の存在意義は大きく衰退する。

「どうしよう。アシハラに何かフォロー入れるべきか？」

そんなことを思案していると、カザミさんがおもむろに立ちあがった。そしてほとんどの観客の視線が彼の挙動に集まるただ中で、こんなことを宣言した。

「さて、そろそろ、予定していたエキシビジョンマッチを行おうと思います。ガンプラを作る楽しさを知ったみなさん、まずは先輩ファイターによるバトルを観戦してみたくはありませんか？」

にわかに湧き上がるブースに、僕は慌てた。

そんなもの予定にはない。アドリブでそういったものを差し挟んでしまうと、イベント全体の進行に支障をきたす。

カザミさんは大きく腕を振り、傍らに座る無表情のあいつを手で指す

「対戦相手は、我ら公式審判員期待の新人『特務ファイター』のアシハラ・ユウジくん！」
アシハラはまるで動じずに、顔を作業台に向けたままひらひらと左手を振っていた。

まばらな拍手が起こる。これだけで、この場に居合わせた人々がどのような印象を与えられたか容易に想像できる。

「条件は一つ、今この場で、基本工作のみを施した『素組み』のガンプラで勝負すること。それだけです。運用可能なら三個まで『素組み』した武装の変更、追加のみ許可されます」

今度はより大きな拍手。そのタイミングで僕は控室を抜け出し、カザミさんの肩を軽くたたいて、人々から遠ざけた。

至近距離にて小声で話しかける。

「おやヒカワさん。なにか緊急事態でしょうか？」

「これからバトルするなんて聞いていませんよ！」

「それはまあ、さつき決めましたから」

「そうじゃなくて！こう言つては何ですが、アシハラはそこまで強力なファイターではありません。もし広報のカザミさんに敗北すれば、いよいよ特務ファイターの面目が」

僕だけの恥ならどうでもいい、特務班長のハカドさんまでそれを負うことになる。

それはまずい。何より僕の心臓と胃に悪い。

しかし、僕の心配をカザミさんはどこ吹く風といった様子だ。広報に特務の窮状を伝えたところでどうにもならないのだから、予想できた反応ではある。

「大丈夫ですよ」

「でも、素組みでしよう？」

「ええ。彼の場合、原作の六割ぐらいになるでしょうね」

ガンプラバトルには完成度が性能として判定される。プロポーションの改修やディテールの追加も加算されるが、今回はそういったものは一切なしの『丸裸』のガンプラだ。

いかにアシハラとはいえ、改修したアデルの高い基本性能なしにカザミさんに勝てるとはやはり思えない。

「ヒカワさん。彼とあなたの関係は、ハカドさんからある程度は聞いています。それからあなたが、あなたなりに努力しているのも察しがつきました」

「は、はい」

カザミさんが急に話題を転換した。その内容に僕はどきり、とする。

「しかし、あなたは彼をいまだ信用できていない。それでは、あなた達は真のバディになることは永久に不可能でしょう」

「それがバトルとどんな関係が……」

「まあ、見ていてください。私が彼の信用の担保を引き出して見せますよ。我ら公式審判員が見初めた、『特務ファイター』の実力を」

そう言って、カザミさんはポケットから自らのGPベースを取り出した。

「ヒカワさんはデータサンプリング用の端末をお持ちですね。それと私のベースをリンクさせてください。バトルをリアルタイムで中継できるようにしよう」

「僕が直接観戦してはいけないのですか」

「あなたがの目があると、できない話もありますから。なに、ビルドファイターの勤にすぎませんが、結構当たりですよ」

そういうとカザミさんはGPベースを差し出す。その背後で、アシハラやゲストたちが僕らを見つめているのがわかったので、僕は慌てて端末を起動した。両手に収まるサ

イズのやや大きいものだ。素早くカザミさんのベースと信号を接続し、その推移を観測可能にする。

「完了しました」

「よろしい。それでは、昼食でも取ってゆつくりしてください。私は、久々の本気のバトルにいそしみますから」

カザミさんは顔の彫りをますます深くして、くるりと僕に背を向けた。

「お待たせしました！準備は万端ですので、始めましょう！」

再び熱気に包まれるフロアを出ようとする最中、アシハラと目が合った。

死んだような黒い瞳はしばし僕の顔を刺すように見つめていたが、やがて関心を失い、逸らされた。

僕は端末を抱えてそそくさと模型売場を離れ、レストラン街になっている上の階へ向かう。

暖色系のたたずまいを眺めると、自然と胃が空腹を告げた。

目下のところは、何を食べるか決めるとしよう。

「あれ、あなたは審判員の……？」

その時、聞き覚えのある声を背中からかけられ、僕は振り向いた。

流れるような茶髪に、日本では見かけない灰色の瞳。絵画のように整えられた顔があ

る。

「あなたは、ムラサメの、えっと」

「アレクシア・メルフォールです。先日は兄が失礼しました」

日本式の綺麗な御辞儀をしたのは、ガン普拉バトル自警団を名乗る少女だった。

side ユウジ

『Beginning Plavsky Particle Dispersal』

『Fieldl Space』

『Please Set Your Gun—Pla』

塗装もしていない、ライトブルーのアデルを設置する。こうして『素組み』のアデルを動かすのは、はじめてだと思う。ある期間の記憶は空白が多いので断言はできないが、たぶんそうだろう。

一つだけ余分なものを持ってきた以外には、装備の追加もほとんどない。相手の手の内もわからぬまま、無闇な装備変更は愚策と考えた。

『Battle Start!』

『アデル』、アシハラ・ユウジ、Sally Forth……!』

「メツサーラ、行きましょう!」

ガンプラは戦場へとカタパルトで射出された。

「すっげえ！」

「本当に動いている！」

俺たちが戦うバトルユニットを360度囲むように、老若男女のビルダーたちが見守っている。子どもにとっては、映像とは異なる生のバトルだ。テンションは否が応でも上がるだろう。

俺が対峙する機体はメツサーラ。二つのスラスタユニットに手足が生えたようなデザインの、大型MSだ。アデルの倍はある。

『では拝ませてもらいます！君の実力を！』

メツサーラの背面、スラスタユニットの先端からメガ粒子砲が盛大に発射される。

俺はアデルのシールドを正面に向けて、コンソールに走る激震を耐えた。

想像よりも反動が大きい。やはり素組みの機体は性能が期待値を下回っている。

盾の陰からドズライフルを構えるが、既そこには影も形もなく、センサーは真上に警報音を鳴らしていた。

「ミサイルか」

誘導を切るほどの機動力はない。オートロックに合わせて、ライフルでミサイル群の中央を数発撃ちぬいた。

球状の爆炎がカメラいっぱい広がるが、本命らしき反応は皆無である。俺はアデル

に腰のビーム・サーベルへ手を伸ばさせて、背後に向けて振りかぶった。

ここは予測通り、メツサーラのサーベルと光刃が交錯する。

高速で離脱しようと試みるメツサーラの右脚を驚掴みにする。そこへ複数回にわたりに切りつけて、どうにかバーニアを沈黙させた。

『甘いですよー!』

ところが相手は自ら右脚を振りほどき、パージしてみせる。合わせ目消しをしていない分、強度が劣るのを利用したダメージコントロールであった。

巧い。この男、素組みのガンプラならではの戦法を確立しているとみた。

そしてメツサーラは静止し、俺のアデルを見下ろすポジションを取る。

『なるほど。二代目に似たファイター、ですか。確かにその手段を選ばない暴力性は、二代目に通じる要素はあるでしょう』

「丸パクリだからな」

サーベルを収納し、ライフルの銃身を向ける。似ているものにも、俺の戦闘は二代目メイジンを意識して行っている。それが自分の性分に一番合致したやり方だからであつた。

資料を観て動きを学んだのだ。伝説のファイターには遠く及ばないが、ままごとぐらいはできているだろう。

『丸パクリ？いいえ、それは間違っていますよ。アシハラくん
「なに」

ところが、カザミはそれを否定した。メッサーラの人差し指が俺のアデルの胸部中央へ向けられる。

それは機体そのもののみならず、粒子の壁を通した俺にまで指されているような錯覚に陥らせた。

『あなたのそれは、二代目に近い思想の下に組み上げられたマニユーバですが、厳密には異なります』

俺が引き金を引くよりも早く、あいつは横へ飛ぶ。その軌跡を塞ぐようにライフルを斉射するが、メッサーラはそのすべてを回避してみせた。

お返しとばかりにメガ粒子砲が飛んでくるのをこちらもかわす。仮想の宇宙空間を漂うデブリがいくつか火の玉に変じた。

機体性能差が如実に出ているのか、アデルのセンサーではこいつの動きを追うのがやっつである

『あなたの動きはメイジンであっても二代目ではない。三代目のものです』

「何を言ひ出すかと思えば。三代目の戦法は、俺のような出来損ないとは正反対だろう。審判員の目はどいつもこいつも錆びついているのか」

『ははは。きついですねえ。だからこそ、君のような存在が必要になってしまおうでしょう』

カザミの笑い声は、通信越しでも怪しさが満載だ。まるで戯れるような口調の一方で、熾烈な弾幕がアデルを圧迫する。

俺はグレネードランチャーの弾頭をシールドで防ぐと、左腕でサーベルを投擲し、敵機の右のスラスタユニットを黙らせる。もはやシールドは穴だらけで、使い物にならないと判断したので放棄した。

メッサーラはなおも距離を離れた射撃戦を展開する。

苛立ちを抑えながら、俺は戦闘を続行した。

side コウイチ

僕とアレクシアさんはフードコートにいた。僕が注文したのは鉄火丼。彼女は生姜焼きをメインにしたランチ定食である。

「本場の和食は、はじめて食べるでしょう。どうですか？」

「なんだか、思っていたのと違います。でもおいしいです。エキゾチックジャパンです」
少女はこくこくと頷きながら生姜焼きを口に入れる。しなやかな箸づかいが実に優雅だ。

ちなみに、ご飯もおかずも大盛りである。

「どうしてここに？敵情視察というやつですか？」

「まさか。フランスでもそうですが、ムラサメはできることなら審判員と協力体制を築きたいと思っています。今日は、ただの観光です」

「へえ」

「……………」

「……………」

質問に彼女が答えるたび、会話がとぎれる。

この微妙な空気のまま十数分、彼女はこの間に定食三人前は平らげている。

恐るべき健啖家ぶりだが、こちらはともかく気まずい。

僕は井にほとんど手をつけていなかった。なにせ目の前にいるのは、感覚の異なる外国人であり、僕とは相容れない可能性もある相手だ。

緊張と警戒心で、体がこわばるのである。

「そういえば、お兄さん、アレックス氏はいつもあんな調子なんですか？」

「私が年下ですから、敬語はいりませんよ。……ええ、兄はいつもそうです。カリスマといえど聞こえはいいですが、高圧的とか人を食ったような態度といわれても仕方ありません。私や部下のみんなも苦労させられています」

アレクシアさんが乾いた笑いを浮かべて、つい親近感を覚えてしまう。アシハラに似

た人物なら、その傍には僕にベクトルが近い人間もいるということか。

もつとも、兄妹間ならそれなりの配慮もあるだろうし、少なくとも僕には二人が険悪には思われなかった

「アレックスは、最初に日本に来た時には親友がいたんです」

「最初に？すると彼は二度目の来日ということかな」

「そうなりますね」

アレクシアさんは僕の問いに頷いた。

親友ということは、アレックスが気を許す相手ということだ。どんな聖人君子なら、そんな立場に居座ることができるのだろう。僕はその相手に妙な尊敬さえ覚える。

彼女は最後の皿を平らげると、静かに両手を合わせた。

日本式の礼儀作法をどこで勉強してきたかは不明だが、ずいぶん様になっている。

「その親友は、ツガミ・ユウジというビルダーです。それなりに有名だと思うのですが、ご存知ですか？」

「ツガミ……ユウジ？」

脳裏に今しがた別れたバディの姿が浮かぶ。苗字は違うが、あの二人が出会えば相性は僕よりはいいに違いない。

数日前の話題にも上った、あいつの経歴の食い違いを想起する。その間隙に、アレッ

クスとの何かがあったとして、何故あの男は思い出を消去したのか。

ますます謎が深まるだけで、僕は推理することの難しさを痛感した。

「とても穏やかな性格の人で、傍若無人なアレックスのいいストッパーになっていたと、そう聞いています」

「はあ。それはすごい」

続く彼女の言葉で、その拙い推理も吹き飛んだ。

あれを穏やかと言うなら、僕は仙人を自称できるだろう。

やはり他人の空似に違いはない、と判断した。そもそも、僕の周囲で最近知り合った人間がつかつていているなんて、いくらなんでもできすぎだ。

「あの、ヒカワさん？」

「たいしたことじゃないよ。僕の知り合いが、たまたま同じ名前だっただけでしてね。でも日本に『ユウジ』なんて名前は星の数ほどいるし、だいたい性格はその、アレックス寄りだから……」

「ああ……。苦労様です……」

アレクシアさんの同情と憐憫を含んだ視線がづらい。

そしてその前で積み重ねられている食器を見て、きつとストレスで食べずにはいられないのであろう、彼女の気苦労に思いを馳せるのであった。

それにしても大盛りランチを四つは財布と健康に悪いのではないか。

「そうだ。カザミさんのバトル」

僕は『ユウジ』という名前でカザミさんとの会話を思い出し、端末を取り出した。

アレクシアさんの前でそれを広げるのにわずかに躊躇したが、言っている場合でもない。

ここで見逃したら、僕はアシハラとの関係に改善の手がかりを失うことになる。二つの可能性を天秤にかけ、後者に傾いたのだ。

彼女は興味深そうにその画面をのぞき込んできた。灰色の瞳が揺れる。

「それは？」

「ちよつと上司にバトルを見るように言われていて」

端末を起動すると、中継がデータは映像の形をとって表示されていた。下の階で行われているバトルは、カザミさんのベースを通して逐次こちらに送信されている。それを端末のコンピューターが第三者視点に再構成、わかりやすくこちらに転送しているのだ。

そのタイムラグ、ゼロコンマ二秒。ヤジマ脅威のメカニズムである。

「これは、今行われているのですか？」

「下の階の玩具売り場でやっているんだ」

「いいですね。私もこれから寄ろうと思っていたんですよ」

こうして二人して端末をのぞき込むと、ともすればカッブルに見えなくもない。

あいにく僕はアレクシアさんのことを、綺麗だと思っても女性としての好意は抱いていない。向こうもそんなものだろう。

こんなにほのぼのとしていて、いいのだろうか。

『アシハラくん。私は多くのビルドファイターを教え導いてきました。その上で言います。あなたは二代目メイジンのコピーではない』

『しかし、三代目のそれでもあるまい』

カザミさんとアシハラは、なにか言い争いながら戦っている様子だった。

アデルの蹴りがメツサーラの胴体を捉えるが、メツサーラは衝撃の瞬間、胴体を伸縮させることで被害を軽減する。逆にアデルの右脚部は小脇に抱えられ、サーベルで貫かれた。

彼らの会話の内容は、音声として僕らの耳に届いている。アレクシアさんの反応に注意を向ける余裕もなく、僕は画面にくぎつけになっていた。

『三代目といっても、我々がよく知る三代目ではなく、三年前の彼です』

メイジンのデビュー戦である第七回世界大会のことを示しているらしい。僕の知る限り、あれからメイジンの方針に変更はないはずだ。

それにも拘わらず、アシハラは何やら納得した様子であった。

『ああ、お前の言わんとすることはだいたいわかった』

『そう。あなたのそれは第七回大会の決勝戦、『エクシアダークマター』を駆っていた時の三代目に瓜二つなのですよ』

「あれか！確かに、言われてみればそっくりかもしれない」

僕は膝を打った。

彼の言う通り、三年前の大会決勝戦にて三代目が豹変した事件が起こったことがある。

その際の型にはまらない暴力と、弱点や破損箇所への集中攻撃は、勝利のために手段を選ばない暴君とも形容された。二代目と同様に。

第七回の記録映像は数えるほどしか見ていないので、正確な比較はできないが、アシハラ戦法とも共通点が多く認められることは確かだ。

アレクシアさんがひそひそと僕に尋ねる。

「ヒカワさん。エクシアダークマターって……」

「開発コードA5、えっと、『ガンダムアメイジングエクシア』を不正に改造したガンブラだよ。彼の狂乱には、PPSE社マシタ会長による介入があったと結論付けられていて……」

「その一件なら、私も記憶しています。当時の審判員がそれを一切阻止できなかったことで、私たちのような若いビルドファイターの間で、審判員への不信は高まりましたから」

彼女は合点がいったようだが、僕の苦い記憶は『公式審判員』としてではない。

まだヤジマに所属するよりも前にP P S E社のエンジニア見習いだった頃の話だ。

才能を評価してくれるワークチーム内で、まだ年若いアラン・アダムス氏の指揮の下、僕も末端として参画していたのである。

あのガンプラは僕にとっても愛着のある機体だったのだ。よって僕らの努力と研究の成果を汚されたようで、ダークマター自体への心証は悪い。

そんな機体とアシハラの戦闘スタイルが酷似しているのは、僕とあいつの相性の悪さを強調したにすぎないように思われた。

『ここまでの模倣は見事と言わざるを得ません。しかし、それはあなた本来のスタイルを覆うようにある、いわば影です』

『何を言っているのかさっぱりわからん。影だかなんだか知らないが、俺からこの戦法を除けば、ただのビルダーしか残らんぞ』

アデルが懐に飛び込んだ。横なぎに振るわれた刃をかくぐり、メッサーラの胴体にタックルを仕掛けて強固に組み付くと、ブーストを噴射して直線状のデブリをもろとも

貫通していく。

『いいえ、いいえ、それはあり得ません。ビルドファイター個人の強さが先達の投影のみで成立することは不可能だ。その隙間を埋める何かが存在しなければ、あなたの強さは成立しない!』

メツサーラのスラストターが細い火を噴いて軌道を強引に変更する。

二つのガンプラはもみくちやになって、ひととき巨大なデブリへと墜落していった。

side ユウジ

俺の強さ。

正直、その言葉に多少は精神を揺さぶられた。

今、この胸をしめつけるような焦燥感強さの希求によるのは間違いない。

アレックス・メルフォールという人物に、強くなって出会う。

過去の空白に住まう過去の俺は、その命令を現在の俺に刻み付けたのだ。

そこに明確な指標はない。思い出すことが苦痛である以上、いつの誰を目指せばいい

のかがわからない。

否、それ以前の問題かもしれぬ。

『わかりました。あなたは、自分が強いかどうか、それすら自覚していないのですね』

言葉を紡ぎ続ける相手を黙らせるように、俺のアデルは馬乗りになって拳を振るう。

胴体に埋没したようなメツサーラの頭部が、ややへこんだ。

モノアイに向けてマニユピレーターを突き込もうとした時、相手の腕部のシルエツトが膨らんだ。大型のクローが展開され、アデルの両肩に食い込んだのである。

抵抗するがびくともしない。

これで俺の機体は、メツサーラの上体に乗ったまま動けなくなった。

『自認できるほど、あなたは自分を好いていない。なによりも、あなたの修練を認める人間などいなかった』

「うるさい」

『それはそうでしょう。あなたの対戦にこれまで、具体的な強さのランクを備える人間はいなかったのですから！』

「知った風な口を、きくな」

極力語調を荒げず、蹴りを入れて敵を振りほどこうと試みる。惑わされたら相手の思うツボだ。ペースに飲まれず、目の前のこいつを屠ることに専念する。

すると今度はメツサーラの肩の機構が展開した。寸前でクローを引きはがし、アデルを飛びのかせる。直後に無数のミサイルがさく裂し、二機のガンプラの間を断絶させた。

『……もしも、私を倒せるというのなら、少しは助けになるでしょう』

煙の中を、メッサーラが進み出る。そのスラストはどちらも大破して機能不全に陥っている。実弾もこれでほとんど弾切れのはずだ。

だが、まるで墜とせる気がしない。パーツの破損を適切に把握し、最小限に軽減され続けた結果、メッサーラ本体は致命的なダメージを一切負っていなかった。

対する自機は満身創痍である。今の爆発で前面装甲が吹き飛んで撃墜寸前の判定だった。あらゆる情報がレッドゾーンを示し、限界を伝えてくる。

ここではじめてモニターで、カザミの顔が映し出された。その笑顔は変わらないが、こいつがバトルを心の底から楽しんでいることはわかった。

奴がデニムのポケットに手を伸ばす。何の真似かと身構えたが、取り出したのは審判員のライセンスだった。

そして、どういう訳かその十字のシンボルを画面越しに突き付けてきたのだ。

『改めて、自己紹介を。私は公式審判員広報班長のカザミ・シロウ。そして二代目メイジンが開設した施設、今はなき『ガンプラ塾』一期生でもあります』

『『ガンプラ塾』か。それなら、俺と二代目が違うことにも気づくはずだ』

それは不思議と腑に落ちた。

次代のメイジン育成のために生み出したといわれる機関『ガンプラ塾』。その一期生なら、たしかイギリスの有名ビルドファイター、ジュリアン・マツケンジーと同級のは

ずである。

要は俺なんぞとくぐつてきた修羅場の数が違うということだ。

この男は、俺が出会ったファイターの中でも一二を争うぐらいに強い。

カザミの自己紹介は、それをあえて俺に誇示するためのものであった。

『ではあなたは何者ですか。メイジンの影を纏うあなたは、誰ですか』

俺は相手に倣って、ジャケツトに死蔵していたライセンスを緩慢な手つきで取り出した。審判員のそれよりも不格好で、ヒカワの手製で改修した、いかにも試作品といった野暮ったさの媒体。

一度手に持ったはずなのに、それはやけにずっしりときた。

スイッチを入れると公式審判員のマークが一瞬だけ表示され、続いて『アシハラ・ユウジ』の文字、俺の登録されたプロフィールが現れる。

GPベースから移植されらしい俺の戦績が、カザミの問いへの何よりももの答えだった。

命中率、回避率、防御率はすべて低レベルでも、勝敗比率は勝ち越し。

過去の自分の求めに、今の自分がどれくらい応じることができていたのか。その解答は振り返ればあったのだ。

「……俺は無様で低俗なファイターだが、勝ちに拘ればそれなりに、強い」

『それが影による呪いの産物だとしても?』

現在では反面教師とされる人物の、負の側面を俺が背負っているとこいつは語る。取り払う術を知らないだけ質が悪い。

だが、それでもいいさ、と俺は楽観することにした。

現在のビルドファイターたちがこぞって忌み嫌う『影』なんて、俺にはよく似合っているのではないか。

何故なら俺は、地べたを這いずってでも勝利を求める出来損ないだから。

「構わない。俺はアシハラ・ユウジ。ただの三流ファイターだ」

『そうですか。その三流くんが私を超えれば、きつと面白いですね』

カザミが笑う。細い目が消えそうなほど細くなる。俺も自ら操縦桿から手を離して、実に緊張感のない状況だった。空気が明らかに弛緩している。

だが、今の俺の胸には焦りとは異なる感覚が息づいていた。

それは高揚感だ。

カザミ・シロウを明確に強敵であると定義した時、俺の中でちりちりと燃え上る火種が存在したのである。

その事実にも自分でも正直驚いた。

俺にはまだ、ガンプラバトルを楽しむ余裕があったらしい。

「ああ……それはきつと面白いな」

『では、決着をつけるとうしまししょう！』

メッサーラがビーム・サーベルを抜刀する。

こちらは左腕が死んでいる。センサーの範囲を最大まで拡大すると、表示されるデータの隅に、微弱な物体反応があった。大きさから推測して、ただのデブリでも破片でもない。

アデルのブースターの調子をチェックし、後退する準備をした。

今こそ賭けに出るべき時である。

S i d e コウイチ

「アシハラ・ユウジ。彼が、ヒカワさんの言う名前の同じお知り合いですか？」

「まあ、はい。そうだね」

アレクシアさんの静かな問いを僕は肯定する。画面に収まる小世界ではアデルとメッサーラの外観しかわからない。彼らの間にどんな表情が交わされたのかは不明である。

それでも僕は、アシハラの新たな一面を感じ取っていた。

『それはきつと面白い』

僕と出会ってから、はじめてアシハラから飛び出した言葉だと思う。

いかなる期待も楽観もなく、淡々と勝利を重ねていた少年。それが、これまで僕が抱いていたアシハラへのイメージである。

それは撤回するべきだった。

決して彼の戦い方に賛同できる訳ではない。それでも、アシハラ・ユウジもガンブラバトルの結果を夢想し、面白いと口にできるのなら、希望はある。

そんな一筋の光明が、カザミさんとあいつの会話に垣間見えた気がした。

バトルの情勢は先ほどと一転して、アデルにメッサーラが追いつがる形になっている。

アデルの射撃兵装はまだ残っているけれども、左腕にスパークが走っている状態では満足に撃てなからう。

それでも右腕だけでライフルを発射している。ビームで牽制しながら、アデルは後退を続けた。

「どこかに誘い込むつもりでしょうか」

アレクシアさんが呟く。僕は端末を操作し、二機の位置をマップとして別画面に表示した。

「スタート地点にまで引き返している」

「仮想空間とはいえ、よく方向の見当がつかますね。射出されたゲートは自動的に消滅

するはずでしょう」

そうになると、リーダー上に目印となるものを設置している可能性はあるが、今回のバトルのレギュレーションは、素組みであること。武装などの追加も加工は禁止だったはずだ。

とうとうライフルを投げ捨て、一点で停止した。メツサーラは残された推進器でまっすぐに突っ込んでくる。

サーベルが振り上げられ、決定的な一斬が放たれた。

『なっ!?!』

「おお!?!」

瞬間、僕とカザミさんは同時に驚愕の声を発した。サーベルが止められている。

シールドを放棄して、左腕を盾にする角度でもない。アデルの右手には何かが握られていた。

『AGEEーの脛! アデルを組んだ時の余りですか!』

『製作教室で扱れたパーツだ。カタパルトと一緒に放り出されただけだからゴミに等しいが、役には立ったな』

ガンプラのパーツなら、ただランナーから切り出ただけでも、プラフスキー粒子の恩恵はある。多少なりとも刃を受け止めることは理屈の上ではできる。

そうはいっても気休めだ。バターのように白いパーツは溶断され、両者に隙が生まれた。

『あと一手、足りませんでしたね!』

アデルが腰のサーベルに手を伸ばすが遅い。今度こそメツサーラの一撃がコックピットを正確にとらえようとしていた。

「アシハラ!」

僕は思わず声を上げていた。何の意味もない純粋な応援を、気に入らなかつた相手に投げかける。

果たして、両断されたのはカザミさんのガンブラだった。

斜めに袈裟切りされたメツサーラのボディが断末魔の火を噴き上げる。アデルの右腕は上段に掲げられ、サーベルの光刃が揺らめいていた。

何が起こったかはわからんが、とにかくアシハラは勝っていた。

『一手足りないなら、先に出すだけだ』

『これは、メイジンの技ではない。なるほど、これがあなたの……』

さも戦死するような含みを残して、メツサーラは爆発四散した。端末には『BATTLE ENDED』と表れて、データ送信が打ち切られる。画面が暗転、僕とアレクシアさんにフードコートの喧噪が戻ってきた。

僕はアデルが引き起した時間跳躍に等しい現象に、独り言をこぼす

「なんだ、今の。特殊なシステムも、不正な操作も観測されていない」

「居合」

「居合？日本の武術の、居合かい？」

アレクシアさんは頷に細い指先を当てて考え込むような姿勢で押し黙ってしまった。返事がない。しばし沈黙考したのちに、彼女は首を横に振ると愛想笑いを浮かべた。

「あくまで私の直感です。忘れてください」

「え、でも気になるよ」

「そういうことはお知り合いに直接聞いてください。私はもう、時間切れのようですか」

アレクシアさんの視線が僕の肩越しに誰かへ向けられているのを察知した僕はそこからへ頭を動かした。

そこには、長い黒髪を一つに束ねて、やや濃い化粧をした、スーツ姿の女性がいた。

誰だろう、と首をひねった結果、ムラサメのメンバーという推定に遅れて思い当たっ
て身構えた。

アレクシアさんはそんな僕の様子が滑稽だったらしく、くすくす。と押し殺した声を
発する。

「ヒカワさんは失念しているようですが、私はガンプラバトル自警団『ムラサメ』のメンバー、アレクシア・メルフォールですよ」

「僕としたことが、完全に友達感覚でいたよ」

「ふふ、私も楽しかったです。でも、次に会う時は敵ですから」

彼女があっけにとられる僕の横を素通りし、くると身を翻して優雅に一礼する。

そのまま流れるようにスーツの女性のところまで歩いていくと、こちらを一瞥もせず去っていった。

アレクシアさんにいいように弄ばれていたことを、僕はそこでようやく気付いた。

side アレックス

仮想空間の落雷が、機体のすぐ近辺に落ちた。その刹那の輝きが、オレの機体の堂々たる威容を浮かび上がらせる。

ベース機体は「ガンダムSEED DESTINY」に登場する機体、アカツキ。

メタリックパープルに塗装されたその背面には『ガンダム サンダーボルト』のフルアーマーガンダムをベースとした大型バックパック。

火力偏重と重量過多、そして選択肢の多すぎる故にオレでしか扱えぬ、文字通りの専用機である。

名付けて『暁 雷光』。

紫電の二つ名を持つ今のオレにふさわしい機体といえた。

直上に味方機の反応が発生し、オレはため息をついた。この模擬戦で味方になりうるのは一人のみだ。

「兎戯に没頭する歳でもなし。一体なににかまけていた」

『ごめんなさい。兄さん』

設定した仮想フィールドであるギアナ高地で、オレは妹のガンプラと対峙した。

同じく『SEED DESTINY』出典であるザクウオーリアに、セイバーガンダムを模倣したオリジナルのウイザードシステムを装備した機体。機体色はパールホワイト。

普段からアレクシアが愛用しているガンプラ、『ソヴァール・ザクウオーリア』だった。

「世界大会まであと二週間強。貴様一人のためにオレを煩わせる気か？」

『兄さん。おわびと表現しては変ですが、目当ての人物に当たったかもしれません』

「なに？」

その報告を聞いて、オレの憤激も多少は冷める。アームレイカーのウエポンスロットに載せていた指を離し、続きを促した。

妹を迎えに行っていた、オレたちの世話役たる女、オザワは表情を崩さない。

あらかじめ妹に話を聞いているのだろう。

『ツガミ・ユウジと思われるビルドファイターに遭遇しました。あのゲームセンターにいた公式審判員、ヒカワ・コウイチと面識があります』

「ユウジ、だど?……く、くくく、そうか。あの情けないもやし男の知人とは、人の運命は先がわからぬものよな! ははは。よくやった、アレクシア。此度の独断専行は放免する」

『ありがとうございます』

ザクに膝をつかせる妹を後目に、オレは歓喜に胸を躍らせた。

日本ならば、灯台下暗し、とでも言うべきか。それほどまでに近い場所にあの男がいる。

なんとという僥倖だ。

「再会の時は近いな」

哄笑するオレを祝福するように、五つの落雷が連続でフィールドに叩きつけられた。

Side ユウジ

「いやあ、楽しかった。つい羽目を外してしまいましたよ」

フィールドが収束し、観客の歓声に包まれたところで、俺は自分が観戦されていることを思い出した。あの茶番のような会話も筒抜けだったかと考えると、さすがに気恥ずかしい。

「大丈夫、私たちの会話は外部にはシャットアウトされています。彼らには、メツサーラとアデルの死闘しか見えていません」

「余計な気遣いだな。まさかあんた、本物のお人よしなのか？」

言い返すとカザミはぼかん、としてからすぐに口をへの字に曲げた。

ようやく笑顔以外のバリエーションを見た気がするが、これも苦笑のようにもみなされる顔だった。

「そう、私はどうも第一印象が『黒幕みたい』だとか『胡散臭い』となってしまうのです。ガン普拉塾にいたころ、非常におそろしい先生がいましたね。その人となるべく波風立わずに接するよう努力した結果の、私なりの処世術なのですが」

「バカだな。怒られるようなことをしなければ、肩で風を切ればいだけだろう」

「そうですねえ。私は『素組み』に強いこだわりを持っていましたから」

俺とカザミの下に、子どもが次々と駆け寄って来る。手には先刻組み上げたばかりのガン普拉たちが握られていた。

「すべてのファイターたちが、道を見失った時に立ち返る場所。それがガン普拉では『素組み』であり、審判員としては私がそうありたかった」

「つまり、塾でも延々と素組みを作り続けたと。それは目を付けられるだろうな」

メイジンはたどり着くゴールであるべきで、スタート地点を望むこの男とは、あり方

が真逆だ。どちらが正解と決まったのではないが、今回に限って言えば、俺に必要なのは後者だったらしい。

この男に勝てたならそれなりに自信がつく。

己の理想を追い求める、眩しい人間の強さを凌駕できたのならば、俺の鍛錬も決して無駄骨ではなかったといえよう。

「礼を言う。カザミ・シロウ。あんた、教育者としては傑作だよ」

「お安い御用ですよ。しかしあなた、お礼に一言多いですよ。それでは友達はできません」

カザミはからかうように笑う。俺は自分の行為をわずかに後悔し、顔を背けた。

「それに、あなたに自信を与えるきっかけが、ヒカワさんの作ったライセンスも一助になっているのも、お忘れなく」

「なに」

「さあ、次はみなさんのバトルです！ランダムに対戦表を作成しますから、一列に並んでください！」

自分の手にある、あのライセンスを見下ろす。カザミがわざわざ己のライセンスを提示したのは、この行為を誘発させる狙いもあったのだろう。

どこまでも食えない男だ。さすがにハカドさんと同格の立場、広報班長という位置は

伊達ではない。

「アシハラくん。すみませんが、改造をしたい子どもたちがいるようです。応用知識を初歩から教えてあげてください！」

人いきれの果てから、カザミの救援要請が飛んでくる。俺は肩をすくめた後、作業用ブースに引き返して回答の代わりとした。

Side コウイチ

模型売り場に戻って来ると、カザミさんは子どもたちにガンプラの操縦方法を教授していた。

僕の姿を認めると、両腕を広げてにこやかに近寄ってきた。

「どうでした。彼のバトルから、何かを掴めましたか」

「はい。流石です、カザミさん。おみそれしました」

「彼に足りなかったのは強さではなく、自信と余裕ですよ。深呼吸して見渡せば、雄大な景色が広がっていることもあるのです。それより、今ならアシハラくんに尋ねられるでしょう？」

カザミさんが小声でささやくが、僕は疑問符を浮かべる。なにか、聞くべきことなどあつたらうか。このイベントを始めてからの記憶をそうざらいしても見当たらない。

そんな僕を見かねてか、カザミさんはヒントをくれた。

幼子に諭すように、骨ばった人差し指をピンと立てて語りかけてくる。

「ヒカワさん。もしもガンプラに興味のなさそうな知り合いで、あなたが仲良くなりた
い人物がいたとします。ある時、その人がガンプラに対し、好意的な反応をしてくれた
場合は何と話しかけますか」

「あつ」

「あなたはアシハラくんのもつと根本的などころに焦点を当てるべきです。彼はまだ若
い。第一印象で決めつけると、損をしますよ」

カザミさんはそういうと右目だけを強くつぶつた。その行動をしばらく図りかねた
が、ひよつとしてウインクだろうか。だとしたら申し訳ないがハカドさんより下手くそ
である。

僕はごくり、と唾を飲み込むと、アシハラにいるブースの一角へ歩みを進めた。

「兄ちゃん、このストライクガンダムみたいのが作りたいよー!」

「それなら手始めにアンテナをシャープ化する作業からだ。ヤスリとニッパーを持って」

バトルの前と打って変わって、アシハラの周りにも子どもがたくさん集まっていた。

二人のバトルを見て感激した。それだけで、彼らがこいつに懐くには十分すぎる理由
なのだ。

僕が来たことを感知したアシハラは、相変わらず生気のない目で僕を見上げた。

たとい彼の心理に変化が起こったとしても、僕にはさっぱりである。
「なんだ」

「アシハラ。その、お前は毎回ガン普拉を滅茶苦茶にするけどさ」

僕はどもりながら、質問を切り出す。このままでは文句だ。案の定、アシハラは不機嫌そうに唇を曲げている。

落ち着け、と自分に言い聞かせ、軽く深呼吸をする。

この質問は、初歩的にして大切なものだ。一世一代の告白に等しい、最大限の思いを込めて投げかけるのである。

僕は、それを問う。

「ガン普拉、好きか？」

アシハラはそれに対して口を半開きにした。完全にバカにしているのがわかったが、今は我慢だ。やがて呆れたようにあいつは首を横へかして、答えた。

「当たり前だろ。だから壊れても直すんだらうが」

それを聞いて、僕は胸のつかえがとれた気がした。

勘違いしていたのだ。アシハラはガン普拉を壊すことに躊躇しないから、愛情もないのだ、と。それは手前勝手な憶測だった。

アシハラには壊れても直せる、ガン普拉という物体への信頼があつたのである。

だからガン普拉バトルを楽しむことができる。一般的なビルドファイターと同じだ。思想の違いはあらゆる方向にあっても、まさしく根源で僕らは同好の士であった。

ところが、ささやかな感動にひたる僕に容赦なく水を差すのも、アシハラ・ユウジである。

「もう昼飯は済んだなら、この作業を俺の代わりにやれ。それくらいはできなければ無能だし、俺はもう腹が減った」

「……お前、やつばむかつくな」

「なんとでも言え。もとより相性最悪だろう。俺たちは」

アシハラは鼻を鳴らして奥の控室へ引つ込んだ。僕は押し付けられた頭部アンテナとニツパー、ヤスリ、そして瞳を輝かせる生徒を見比べて、観念してうなだれる。

安全用のフラッグを切断し、手元が見えるように加減しながらヤスリで磨いていく。

ちらりと奥へ目をやれば、あいつは持参したらしい弁当を広げて、律儀に手を合わせていた。

「ふふ」

「メガネの兄ちゃん。どうしたの?」

「なんでもないよ。ちよっと、うれしいことがあったのさ」

アシハラ・ユウジは自分勝手に人とかかわりを好まない。ガン普拉を壊しまくる要

注意人物、されどガンプラ愛は、確かに存在する。

すぐに関係を良好にすることは無理でも、道筋がわかったのである。僕はそれがありがたかった。

Parts. 04 — a 「ガンブラアイドルグループ コスモス」 (前編)

side コウイチ

支部から電車で30分。そこから更に徒歩で15分。

僕たちは担当区域ギリギリに位置する、静かな通りへとたどり着いた。

そこに居並ぶのは、マニアックな地域の料理店や古書店、時代の趨勢に取り残された
ロートルな店舗たちである。

その中でも一棟のビルがとりわけ異彩を放っていた。

壁は緑青に変色し、地上階にあるはずのテナントは正午になっても電気が点く心配す
らない。ほとんど廃墟と形容しても差し支えない建物だ。

それでも、僕たちはそこに足を運ぶ理由があった。

「……お、お」

「な、な」

こちらを威嚇するような低い声。

振り返れば、僕の仕事上の同僚がそこにいた。

輪郭や肌色の白さ、黒髪の艶にだけ注目すれば中性的と評価できるだろうか。

しかしその印象は、乱れた髪型と全身から漂っているどんよりとした雰囲気ですべてに殺されている。

眼光にいたっては人間として最低限の精気すら感じられない。

「まだ着かないのか。それともここがどこかもわからないのか?」

「もうすぐだってば」

そして何よりも、あえてこちらの神経を逆なでしているかのような、この態度がひどい。

アシハラ・ユウジは今日も平常運転であると、僕は実感した。

「あと五分くらいだ」

「その時間感覚もあてになるのやら」

アシハラの減らず口に対してあえて口をつくむ。

以前ならばすぐに怒り、喧嘩になるような状況であっても僕はこのように我慢していた。

きつかけはもちろん先日二人で手伝ったガンブラ製作教室である。

カザミさんのおかげで、僕のアシハラへの印象は変わりつつあった。

少なくとも悪意によってガンブラを傷つけるような人間ではないと理解した。

問題は、この僕の心境の変化が微塵も相手には伝わっていないということだ。

あいつにとつてのヒカワ・コウイチは相変わらず無能な審判員であり、仕事上で組まされている相手にすぎない。

カザミさんと僕の間隔のやり取りを知らないのだから当然だ。

その結果僕は心的距離を測りかねて、こうした忍耐を強いられているのである。

「それにしても胡散臭い場所だ。『特務』が必要だとは思えない」

アシハラは淀んだ目は、ビルの地下入口に掲げられた小さな看板に留められていた。

『コスモス☆ライブステージ 開場12時30分 公演13時』

そんな題字がポップな書体で記されている。

僕らはこれから『アイドルのライブ』に向かうのである。

一見『ガンブラ警察』とも呼ばれる僕らには関係のない話のようだ。アシハラが怪訝に思うのも無理はないだろう。

しかし、実際にアシハラは任務として、腰のホルスターにアデルを収めてきていた。

「ともかく付いてきて」

「仕方ない」

僕らは階段を下る。

ノブをひねり、手狭な空間に身体をねじこんで、やつとのことの中に入る。

扉の向こう側には異様な緊張感があつた。

何十人もの人々がひしめきあい、そのほとんどは男性だった。

時間ギリギリにやってきた僕らを、どこからかじつとりとした視線が一瞬だけなめていく。

「こんにちは。お二人ですか？」

「ええ」

スタツフは燕尾服に身を包んでいた。

チケツトはあらかじめ購入しておいたので、それを提示してから人ごみの端へと流されていく。

アシハラの方はというと窮屈そうに顔をしかめていたが、ふと、彼らが手に持っているものに気が付いたようだった。

「おい。なんでどいつもこいつもガンプラを握りしめているんだ」

「やつと気が付いたか？」

「顔を知っている奴も何人かいる。ここにいる奴ら、ほとんどがガンプラビルダーか」

その推察は正しい。

この場に集うビルドファイターたちは目的があつて、狭苦しい中にガンプラを持ち寄っている。

四方八方を敵に囲まれた気分なのか、アシハラは剣呑な顔つきだった。

「そう硬くなるな。ここは楽しむところだよ」

「……随分慣れた様子だな」

「お前をスカウトする前から何度か来ているし、個人的に行ってもいる。最近忙しくて、自分の時間が取れなかったんだよねえ」

「へえ」

心外なことに、あいつの右の眉が小馬鹿にするように吊り上がる。

僕にだって趣味はある。

ガンダム作品の設定画を眺めることと、アイドルの追っかけだ。

このグループのライブはまだ三、四回という新参者だが、アシハラよりは場慣れしている自負があった。

「悪いか？」

「いいや。他人の好みに文句は言わんさ」

「じゃあもう少し愛想よくしてくれ……」

「善処する」

そんな会話をしている間に、アシハラの全体を闇が覆いかぶさったかと思うと、輪郭を残して殆ど見えなくなった。

天井の灯りが消されたのだ。

会場を観客のざわめきだけが支配する。

僕は蛍光塗料の塗られた針のある腕時計を確認した。

時計の長針は11と12の間にうすぼんやりとさしかかかって刻限を示している。

そこで僕は肝心なことを聞きそびれていると気づいた。

「そういえばアシハラ、お前って大きな音は…」

時すでに遅し。

会場をおだやかに流れていた音楽の音量が、突如として耳をつんざくくらいにまで上昇した。

客が手にサイリウムの代わりにガンプラを掲げて歓声をあげる。

極彩色に照らされて、耳を塞いでいるアシハラの様子が浮かび上がる。

間髪入れずに、足元から見慣れた空色の粒子が噴出し、会場全体に広がっていった。

「おい、これはプラフスキー粒子か」

「もちろん」

距離が近いので、あいつの問いはかろうじて届く。

僕は得意げになって首を縦に振った。

この装置はフィンランドの有名ビルドファイター、カルロス・カイザーの設計を基に

したものだ。

ヤジマ・エンジニアリングによって、小型化や新粒子への対応加工、および既存の自社製品との互換性の向上などの改修が行われて、試験運用までこぎつけられた。

そして何を隠そう、僕はこのシステムの開発チームに名を連ねていたことがあるのだった。

完全に粒子がホールに充満する頃、複数人の歌声も響きわたる。

きらびやかな衣装で彩られた少女たちと、それに連れ添うようにガンブラが飛び出してきた。

操縦系のガジェットはない。

機体コンディション管理用のパネルもなく、まさしくガンブラが、自ら歌って踊っているのだ。

「紹介しよう！彼女たちがガンブラアイドルグループ『コスモス』さー！」

僕は歌声に負けないくらい、精一杯の大声をアシハラにむかって張り上げた。

side アレックス

メタリックパールの愛機、『暁 雷光』はバックパックを外して水中にいた。

本来の仕様ならば両腕にも武装が追加されるはずだが今回はフリーハンドだ。

原型機たるアカツキの機体特性上、ただでさえ推進力が不足した状態でこんな不自由

な空間にいるのは自殺行為にあたる。更に兵装もバルカン砲とビーム・サーベルくらいで、水中で減衰するビーム兵器はあてにならない。

つまりはほぼ丸腰。そんな条件下でも、余裕をもってあたるのがアレックス・メルフォールである。

『アレクサンダー様、敵機の反応が捉えられません。目視による観測を』

「指示などいらぬ。もう相對した」

オザワの通信をこちらから切断し、オレは指抜きグローブを嵌めた両手を再度強く握る。革がギチギチと音を立て戦意をみなぎらせていく。

オレの真下をすくいあげるように、仄暗い海の底から甲殻類を模したその巨大な体軀が姿を現した。

ひし形に張り出した装甲とあらゆる障害を破砕する爪。ジオンの系譜を示す単眼。

全長77.8mとされる水中巡行形態のMA、シャンブロだった。

『『紫電のアレックス』とやら、その首、貰い受けるぞ!』

「よく言った。かかっている」

アレクシアによると、相手はデビュウからしばらく大会で他のビルドファイターと鎬を削っていた。しかしスランプに陥ったのをきっかけに初心者狩りに走ったらしい。

不幸だったのはその被害者が、オレたちムラサメの噂を聞きつけてしまったことだろ

う。

ゲームセンターの一件を解決してから、組織は噂の流布、インターネットでの情報操作を行っていた。素組みのドムでクアンタを瞬殺した『紫電のアレックス』の名を餌にしたのである。結果、複数の匿名の依頼により、オレが直接こいつの行きつけの模型店に出向くこととなった。

「自ら退化の道を選ぶとは情けない奴だ。より高みへ進化するのは自然の摂理。ミジンコ以下だよ！ 貴様は！」

『言ってくれるじゃないか！ こいつで潰れろ！』

シャンプロのアイアン・ネイルがあぶくを立てて展開されて、暁 雷光に迫る。その部位だけで通常の規格のガンブラの全高を上回った。メツサーラなどの大型機体ですら、質量の差による一撃で圧壊は免れないだろう。

ところがこの機体は違う。ムラサメの技術の粋を集めた、記念すべき機目のMSだ。

『バカな！』

「粒子残量もつたない。原始的な根競べといこう」

暁 雷光はアイアン・ネイルを片腕で阻む。もう一つのネイルも反対側の腕で防ぐ。

殺意に満ちた爪が紙一重の場所で拮抗していた。

『MAとMSではパワーの次元が違うはずだ。こんなことができるはずは!』
「できるとも。これはガンプラバトルだからな!」

馬力のみではない。強靱なフレームによる耐久性と、球状の操縦桿が両方ともあらゆる方向へ持つていかれそうになるのを、オレ自身の筋力で抑えていることを併せて成立する現象だ。

しかも操縦桿は暁 雷光とオレの余裕に反して大きさに暴れようとする。

操縦系統が過敏なものも考え物であった。

「最強のガンプラに必要なのは、強者の振るう威光に追従するポテンシャルだ。貴様の図体ばかりの機体では、この『暁 雷光』の胴に傷をつけることすらできん」

『ふざけた真似を!』

シャンプロの口にあたる部分が開いた。その奥には原作でビルを薙ぎ払うほどの威力を秘めたメガ粒子砲が咆哮の時を待っている。元よりビルーム耐性においてガンダム作品で五指に入るモビルスーツに対して、水中で発射とは愚行極まりない。

ここで早々に決着をつけるとしよう。

「ぬん!」

『お、お、お、お、お、お、お、お!』

相手が悲鳴を上げる。それもそのはず、暁 雷光がネイルの先端を腹に抱き込んで円

を描くように振り回し始めたのだから。

相手はなすすべもなく遠心力で姿勢を崩し、無防備な下腹部をさらけ出した。

「さあ、これを耐えれば貴様の勝ちだ！」

『ひっっ』

貫手でその装甲にマニピレーターを突っ込む。

動物のハラワタを腑分けするように、プラスチックの一部を引きずり出した。水圧かダメーヅか、たまらずシャンプロはその巨軀を沈めていった。

しばしの静寂。

爆発の轟音と無数の泡が海底から吹き上がり、暁 雷光を一時的に包み込む。

一見美しい自然現象でも、それは粒子による幻にすぎない。オレはその光景を何の感慨もなく眺めていた。

『BATTLE ENDED』

「くそっ……どうしてこんな奴に……」

こいつもアタリではない。

筐体に手をつけて頂垂れる対戦相手の様子にオレは落胆を隠せなかった。

自警団ムラサメが討滅するべきファイターの共通点はすべて、己の弱さを自覚しないところにある。弱者へ転落したことに気づかず、いつまでも強者のつもりでいる滑稽な

人間が、背後から本物の強者に首を刈られるのだ。

あの道化男もその典型だった。

それは同時に、オレの求めるファイターではないことも意味する。

オレの進む道のりにはありふれた弱者は不要なのだ。

「お疲れ様でした」

オザワがタオルをもつて控えているので、グローブを着けて受け取ってやる。

アレクシアは『ムラサメ』に来る依頼の窓口となる必要があるから、根拠地となっているホテルで待機を命じていた。

今頃は先日の遅れを取り戻すべく、自らのガンブラ『ソヴァールザクウォーリア』を動かしているに違いない。

「それにしても腹が減った。早朝に戦わなくとも、昼間に乱入して殲滅すればよかろう」
「いえ、依頼として送付された匿名のメールで時間帯は昼を避けてほしい、とありましたので」

「見下げ果てた根性だな。自ら立ち向かっても敗北は必至。ならば関連を匂わせない時間帯にこっそり始末をつけようというわけだ」

今回は暁 雷光の徒手空拳のデータを収集できたのでよしとするが、次回からはある程度、選別しなければなるまい。ムラサメは体のいい復讐代行業者ではあつてはなら

ぬ。

今度からすべての依頼は口頭ではなく資料などでまとめて渡すように徹底させよう。

「は、放せ！何するんだよ！返せよ！」

「おとなしくするんだ」

後方では部下が敗北したファイターともみあいになっている。

おそらく力づくによってGPベースを取り上げているのだろう。

相手が公式審判員なら温情が与えられただろうが、自警団にそれはない。

ここで男が呪うべきなのは己の行為の浅はかさと顔のない依頼人たちだ。立ち直れないならば自業自得である。

オレは部下に始末を任せて、自らの足で模型店を出た。オザワがびったりとそれに付き従う。

ちなみにホテルからは徒歩で向かえる距離だったので、自動車を使うまでもない。

だいたいそんな成金じみた行為では肉体がなまる。

帰途でオレはオザワに問いを投げた。

「回収したものは本国に送信できているか？」

「はい。壱番から参番まで、フランスより受理の連絡がありました。引き続き任務を続行せよ、とのことですよ」

「ちつ。あれを何に使っているかは調べがついているのだ。机上の獣より前線の雷光を押し上げるべきであろう」

「おつしやる通りで」

思わず本国からの伝達に舌打ちをしていた。

こうまであからさまにリターンがないのはオレの計画に響きかねない。

こちらの勢力を抑え込みたい目論見が伺えるが、そんなことをすれば敵愾心を煽ると気付いていないのか。

あえて言えば、その正気を疑うレベルの失策に困惑していた。これは彼我の関係をはつきりさせる機会なのだろうか。

思考を巡らせていると聞きなれた声が入ってきた。春の陽光を思わせる穏やかな声音だ。

「おかえりなさい。兄さん」

「お嬢様？」

「む」

オレたちは拠点の正面玄関にたどり着いていた。そこにどういふ訳か妹が待ち伏せている。オザワが日本式の礼をするが、オレは眉をひそめた。

こういうことをやる時のアレクシアからはろくな話題が出てこない。

部下の傷病によるシフト転換、敵勢力のサイバー攻撃、エトセトラエトセトラ。フランスにいた頃からそうだ。

そしてその処理に追われるのは常にオレだった。

「わざわざ出迎えとは、オレの機嫌を取らねばならぬ依頼でも舞い込んだのか？」

そう言つてやると彼女は困つたように微笑むと、小さく頷いた。

オレはオザワにガンブラのケースを持たせると、並んで歩きながら、顎をしゃくつて続きを促した。

「電話による匿名の依頼でした。一方的に内容を伝えた後、通話を切断。こちらの呼び出しには応じていません」

「そいつは何とぬかしたのだ」

「とあるガンブラアイドルグループのメンバーの活動に、不透明な箇所があるので、自警団として捜査してほしいと」

「ほう」

「本国の口座に、前金としてかなりの金額を振り込んできました。否が応にもやらせたという現れでしょう」

ムラサメが口座を開設している情報は、母国にある本部のことまで調べなければわからない。

報酬として金を受け取るのは法人相手などに限られ、そういった行為はまだ日本では行っていないからである。

自分たちは相手の情報を調査しているから、付け入る隙はないという意味表明。狡猾さと仔細さを併せ持つ相手だ。

一つミスがあるとすれば、オレの機嫌に対してリサーチが不足していたことだろう。

オレはアレクシアに言い捨てた。

「金は全て突き返せ。こちらからの連絡に応じないというのも気に食わん」

「でも兄さん」

「なんだ。まだあるのか」

「その、不透明な箇所というのが『技術スパイ』に関連しているとのことですが」

「なに?」

三人でエレベーターに乗り込み、オザワがボタンを押した。

わずかな重力の圧迫感の後に金属の箱は上昇していく。

妹が言う『技術スパイ』。

他人の血と汗の結晶を、横から掠めるハイエナのような輩のことだ。

『自警団』として討滅すべき対象であるのも確かだが、それ以上に、別の理由でオレの気を惹く存在である。

奴ら相手ならば、数百万の札束よりも価値のある報酬が期待できる。

「たわけ。なぜそれを先に言わぬ」

「す、すみません。兄さんなら察することができるとか」と

「はっ、オレは万能だが全能ではない。会話の度にお前の心なぞいちいち読んでいられるか。脳神経と観察眼の無駄遣いだ」

ホテルのエレベーターはあつという間に定めた階へ到着する。

オレは萎縮するアレクシアを置いて先に降りた。

「待ってください。それではお受けになるのですね?」

「ああ」

妹はわざわざ早足で追ってきていた。

このやりとりはオレに対する最終確認である。

組織として数十人の人員を一気に動かす長として、必要な儀式だ。

「その依頼には『ムラサメ』として動く。作戦はいつも通り、オレが立案する」

「了解しました」

「それと、依頼人の身元を特定して礼儀を教えてやれ」

「既に部屋に来ていただいています。得意先からの打ち合わせメールに偽造して、こちらにいらっしやるように仕向けました」

「早いじゃないか」

こういつた雑務の管轄は妹とオザワが仕切っているが、未だ失敗しているところは見たことがなかった。

オレが扉を押し開けると、部下たちが一斉に居住まいをただした。

部屋の中央で、やせぎすの男が神経質そうに汗を拭いている。

焦点は一つに定まらず、自らの左右に控えている『ムラサメ』構成員に怯えていた。

妹が耳打ちするには、芸能事務所に所属する社員の一人らしい。

アイドルグループの妙な動きというのも、社内で察知したにちがいない。

いかに謎の人物を気取って上位にしようと試みても、直接コンタクトをとって顔を覚えてしまえばこの通りだ。

オレは依頼人の正面に位置する座椅子に、悠然と座った。

「さて、あらためて依頼を聞こうか」

「あ………もしかして、ムラサメの幹部の方ですか」

「意外そうだな。ウチについて調べはついていたんじゃないのか？それとも、会長の孫など親の七光りにすぎないと侮ったか？」

「ひっ………」

依頼人の呼吸が詰まる。

高圧的な態度で連絡をよこしてきた割には、まるで小動物のような態度だ。

「知らないなら教えてやる。オレはアレックス・メルフォール。そこに座っているのは妹のアレクシアだ」

アレクシアはオレの左隣で脚を揃えて座り、丁寧にお辞儀した。

膝には愛用のタブレットも載せている。

「アイドルグループと言ったな。貴様自身の口から簡潔に、詳細に話せ」

「……」

「グループ名は『コスモス』でしたかね？」

「は、はい」

アレクシアのいらぬ助け船に、依頼人が同調する。

オレが睨みつけると妹は口を噤んだ。

痩せた男は自らをサトウと名乗り、ことのあらましをぼそぼそと語り始めた。

『『コスモス』は、私が勤める事務所で、一年前に結成したグループです。ヤジマ商事との本格的な業務提携により、ガンブラバトルを組み込んだ演出を売りに行っています』

「アレクシア、資料を」

「そのセンサー常連であるハイバラ・キミコが、最近不審な人物と接触しているという噂がありました」

オレが差し出した手に、アレクシアが紙束を乗せてくる。該当人物の経歴だった。ハイバラ・キミコ。

ガンプラーアイドルグループ『コスモス』で、最も頻繁にセンターポジションに立つ女。その容姿や歌唱力もさることながら、ガンプラーバトルも全国大会に出場経歴があるらしい。

自分のもてる能力すべてをもつてのし上がったとすれば、好ましい人間だ。少なくともムラサメが、オレが正面から対決するだけのものは持っている。

傍らの妹に尋ねる。

「お前はこいつを知っているか」

「日本に来てから情報収集の際に、ネットニュースやラジオで何度か見かけました。ただし、地方局やマイナーなチャンネルです」

「知名度は無きにしもあらず、か。そのハイバラが技術スパイ、あるいはそれらしき人物にインテリジェンスを流しているの？」

「そうです。現在は事務所内のごくわずかな人間に、風説としてある程度ですが、いつ広まってもおかしくない瀬戸際なのです」

サトウはまた汗をぬぐう。

アレクシアが次にオレに渡したのは、いくつかのバトルユニットの写真だった。

出典はかなり古いもので、現在は既にアップデートされているという注意書きもつけられていた。

流石に最新版は情報プロトコルが強固だったのであろう。そもそもオレたちでたやすく手に入れられるなら、技術スパイが潜入する苦労はない。

「私は専門外ですが、ライブに使用される粒子関連備品は、常に最新鋭のものが搬入されているそうです。バトル以外の用途を模索しているヤジマには、貴重なデータ源だそうで」

「兄さん。近日行う発生装置のメンテナンスは、管轄の公式審判員が行うと」

「またしても奴らか」

アレクシアの補足にオレは嘆息した。

わざわざ審判員側の技術者を投入する理由を飲み込みかねるが、それは現場にいけばわかるだろう。

ひとまずは装置の配置、グループでの運用状況を仔細にまで分析しなければならぬ。

「サトウとிட்டたな。現場調査のための身分証明が欲しい。二時間以内に取り寄せる」

「そんな。書類の申請や許諾だけで半日はかかりますよ!」

「私も手伝います」

アレクシアはサトウを別室へ誘導する。

オレは立ち上がって、部屋にいる部下たちを見回す。

いずれも神妙な顔つきである。

これから何を始めるのか覚悟はできているようだった。

「今回の一件、日本における『ムラサメ』の初の本格的な活動だ。相手が技術スパイとくれば、『神器』の手がかりが得られることは、まず間違いないだろう。機を引き締めてかれ！」

「イエツサーー！」

「貴様らはイベント会場の見取り図の作成。そこにいる三人は現地捜査メンバーのリストアップ。残りのメンバーは、この地域で活動をしている技術スパイ、ならびに関連したガンブラ・マフィア等の勢力を洗い出せ」

「イエツサーー！」

長期間の試運転期間で鬱憤がたまっていたのか、威勢のいい返事がかえってくる。

蜘蛛の子を散らすように動きは始める部下たちを横目に、オレはオザワを呼び寄せた。

肩を触れあわせ、声をひそめてその話題を口にする。

「先日のアレクシアが言っていた情報の確認はついたか」

「……はい。お嬢様のリーク通り、公式審判員にはアシハラ・ユウジという人物が所属していました」

「アシハラ。たしか母親の旧姓か」

「そうです。アクセスできた経歴も既知の情報と一致しました。同一人物で間違いないでしょう」

「……」

「アレックス様？」

「なあ。お前が知るユージなら、この事件を知ったときにどう思うだろうな」

「……赤の他人であろうとできる限りのことをするでしょう。彼は、そういう人でした」
「だろうな」

あの男が今はどんな心境であるのかは興味がないが、性格に関しては把握しているつもりである。

お人よしでおせっかい。

自分の手の届く場所ですんなり事件があると知れば、十中八九首を突っ込んでくるだろう。

いずれ『ムラサメ』の前に立ちはだかることは、想像にかたくない。

「となると、残る問題はタイミングだ」

さて、オレの『友』はいつ、部外者をやめるのか。

side ユウジ

初めて見る光景だった。

歌うアイドルの周囲を、いかなる原理かガンプラが飛び回っている。

彼女たちが連れてきたものだけではない。ファンが持ち込んだガンプラも、それに合わせるように中空へ躍り出ていた。

そこには本来あるべき操縦系統が一切存在しない。

「どうなっている」

「あれはバックステージの記録装置で、観客のガンプラの機動データを読みとって、AIを介して自動操縦しているんだ」

「要するに超巨大なGPベースか」

彼女たちの周囲を飛行し、ステージを彩っているのは桃色に塗装された『デナン・ゾン』と呼ばれるモビルスーツたちだ。甲冑を纏ったようなシルエットとサングラスのようなカメラアイ、なによりモビルスーツとしては非常に小柄であることが特徴である。

ヒカワは中央にいる、肩の上で艶のある黒髪を切りそろえた女を指し示した。

「センターで一人だけ白いデナン・ゾンを操作しているのが、『コスモス』」人気トップのハイバラ・キミコさんだ」

「自動操縦とは動きが違う」

「さすが、目がいいね。彼女の衣装を見て」

大音量の歌唱をなるたけ無視し、派手なスポットライトの下に目をこらす。動きに併せて揺れ跳ねる衣装の各部に、光る端末があつた。円盤状の基礎から延びる突起と、さらに小さな球状の先端という構成だった。

その形状に、俺はガンダム作品にて見覚えがある。

『Gガンダム』のモビルトレーサーで、ダンスをやらせているのか」

「コンソールより連動性は十分の一。それでも自動操縦よりは恣意的な操作が可能なんだ。僕がプロジェクトに参加させてもらっていた時は、まだ試作段階だったけど、どうやら実地試験には至ったらしいね」

「こいつを、お前が」

粒子復活以降、こうしたハードウェア方面の開発は目を見張る速度で進行している。ヤジマが各方面の会社と技術提携を行うことをよしとしたのが原因だろうが、それにしても早い。

そして審判員のカザミに助言を受けたあの日以降、俺はヒカワ・コウイチという人間へ自分が向ける感情が変わっていると知覚した。

うまい表現が見つからないが、こいつをつぶさに観察できる分の気力が生まれた、と

でも言うべきか。

誰のとも知れぬ機体が傷つくのを悼み、バトルダメージシステムというものに手を出した男。そいつがガンプラを動かすという粒子の目的を損なわず、それでいて機体を傷つけないイベントの誕生に一助したという。

頬がむずかゆくなる。

ひよつとして、この喉から漏れ出すのは感嘆のため息か。

「おい、大丈夫か？」

「……ああ。視界が点滅して軽く酔っただけだ。もう直った」

「それならよかった」

ヒカワの余計な心配を振り払う。

身体が無意識に反応するという現象自体は、記憶障害の発作にも似ていて苦手だ。

しかし今沸き起こる感情に、吐き気を催すような気分の悪さはなかった。

「そういえば、お前のガンプラは動いていないな？」

「飛び出されてたまるか」

「しまったままなのか？出してみるよ」

どうせロクな動きをしないに決まっているのだが、ヒカワは何故か楽しそうである。

躊躇しつつも腰のホルスターからアデルを取り出すと、それはふわりと浮かび上がっ

た。

当然、バトル時に必要な手続きは一切踏んでいない。

「おお、動いた」

ヒカワが快哉を上げる。黒いアデルはしばらくステージの方向を向いたまま直立の浮遊状態を保っていたが、それ以上は動かなかった。

周囲のガンブラが数機接近してアデルにちよつかいを出す、アデルはサーベルの柄に手を当てて威嚇をしてまで追い払ってしまう。

「ははは、まさしくガンブラは持ち主に似るな」

「似ていない。調子に乗るな、ヒカワ」

「あ、ああ。ごめん」

俺は即座に否定する。いかにオレでもバトルでもないところにいちいち他人に嘯みつくものか。

アイドル『コスモス』のライブは続いていた。かなり高い音程の、聞き慣れないオリジナル曲のみならず、歴代ガンダムシリーズの曲も歌っているようだ。

アイドルというのは外見とキャラクターで売り出すものと認識していたが、彼女らは案外歌もうまい。

キーが高いくせに鼓膜が悲鳴を上げない、ちょうどいい音程であった。

ふと一瞬、中央にいるハイバラとかいう女がこちらを向いた気がした。

数十人の内から一人に意識を向けるとは思えない。ただの自意識過剰だろう。

「で、いつまでここに居る気だ」

「何を言い出すのさ。このまま最後までいるよ」

「なに」

「仕事はこれからだよ。ライブが終わったら、楽屋で支配人さんと話さなきゃいけないんだ。まさか、遊びにきたと思ったのかい？」

まるで子どもを諭すような、慈しみすらこめた口調だ。

その俺の苛立ちをアデルは感じ取った。

15cmの体軀がしなると、その充実した可動範囲でもって、ヒカワの顔面めがけ渾身の蹴りをみまう。

その足先は眼鏡のフレームの中央、鼻あての部分に直撃した。

「いった!？」

「自業自得だ、バカ」

ヒカワは鼻頭をおさえ悶絶する。

その様子に呆れている間に、奴に抱いた感触はすっかり忘却の彼方へと去っていた。

side アレックス

アレクシアと部下を連れて、オレは『コスモス』の小劇場に来ていた。

床には金色のテープが散らばり、空気には未だ観客の熱が残留している。

祭りの跡にムラサメ以外の人影はなかった。

オザワを含めた数名が外注の清掃業者を装い、体よく人払いをしているからだ。

依頼人であるサトウは舞台の端をさして供述する。

「このあたりで、ハイバラと見慣れない人物が親しげに会話をしているのを、他のメンバーが頻繁に目撃するそうです」

「写真はないだろうな。本人に後ろめたさがあるならば、人目をばばかりはずだ」

「いえ、一枚だけですが見つかりました。この劇場の監視カメラに不自然なデータの空白があり、唯一サルベージに成功したものです」

アレクシアが普段から携行している端末をオレの前に差し出した。

そこにはハイバラ・キミコと、作業着に身を包んだ男が談笑する姿が写っていた。

作業着の人物の手足を妹が拡大表示すると、長いスクロール紙が掌からはみ出している。

そして微かにだが、紙面の端に手書きで図が描き込まれていることも判別できた。

「画像加工の形跡はありません。男性の持つているメモの内容は、さすがにこのままでは判読不能ですが……」

「わ、私にも見せてください」

突如としてサトウは端末をひったくった。

写真の存在がよほど意外だったのか、瞳孔をぎよろつかせ、なにかブツブツと呟いている。その気もそぞろとなつている間に、オレは妹をアイコンタクトで呼びつけた。

肩を抱いて身をかがめると、己と鏡写しの顔が、呼吸を感じ取れる距離にまで近づく。

「あの写真、お前は鵜呑みにするか？」

「ありえませんが」

「理由は」

「破損、あるいは消去したデータの残滓にしては鮮明すぎます。まるで、これだけを私たちが拾いあげるように誘導された気分です」

妹の表情が曇る。

同じ表情筋の持ち主でも、オレには絶対にありえない表情だ。

だが、彼女にしかない懐疑心と不安が、結果的にいい方向へと導いてくれる場合もある。

オレは眼差しで続きを促した。

「サトウさんの態度も気にかかります」

「そうだな。ムラサメに高圧的な接触を図った人間にしては、小心者だ」

「……ここへ来る直前、オザワさんからも報告がありました。フランス本国へと彼が入金する数日前に、彼自身へ大金が転がり込んでいたそうです。残念ながら大本は見失っています」

サトウの独り言がやんだ。

妹と自分の頭の間、視界の端で様子をみる。

顔は血の気が引いたままであるが、その目は大きく見開かれてオレたちの背中一点へと留まっていた。

聞き耳を立てられているようだが、アレクシアは構わず会話を継続している。

フランス語ならば聞き取れないと高を括ってはいえるのかもしれない。

「兄さん。本当の依頼人は別にいて、私たちは思うように転がされているのでは？」

「まあ落ち着け。結論を出すには性急だ」

オレは振り返って、サトウへ歩み寄る。

取り繕う隙も与えられなかったため相手はマネキンのように硬直した。

オレはその両手から端末を取り上げると、でたらめな箇所を指で拡大する。

何の変哲もない幕の裏側だ。

しかし、さも重要な場面を見出したかのような表情を装い、アレクシアへ突き出してみせるとどうだろう。

サトウの青ざめた肌に幾分か赤みがさして、安堵の呼吸を肺から吐き出している。わかりやすい反応。やはり迂闊だ。

その態度だけで、オレは妹の油断が幾分もマイナスに影響していないことを悟った。そしてアレクシアに対して、表面上の態度とまったくかみ合わない内容を告げる。

「この写真が『単なる打ち合わせ』か『売れっ子アイドルと技術スパイの密会』か。問題はそこに尽きる」

「では彼の身辺調査は」

「当然後回しだ。相手が尻尾を出すのを待て」

周りに部下を数名集める。

こいつらは事前にマフィアの顔写真などの情報をできる限り集めているはずだ。

スパイの容疑者は目鼻立ちまでくつきりと写り込んでいるので、照合は容易である。

「どうだ。こういう人相の人間はいるか」

「この地域でマークされている者には、該当なしです。特定勢力に所属しないフリーランスのスパイが、他の場所から流れてきたという可能性はあります」

「では検索範囲を広げろ。それとUSBケーブルとメモリ、外付けのリーダーをよこせ」
オレは端末を操作して、写真を一枚のメモリーチップに保存する。

旧式のマイクロチップだ。技術革新に置き去りにされたため、これを解読できるデバ

イスは現在では非常に限られている。

そして転送を確認したのちに、本体側のデータを完全に消去した。

チップを妹にめがけて放る。彼女はそれを器用にキャッチして両手で包み込んだ。

「その記録媒体はオザワに預ける」

「ムラサメのデータベースには保管しないんですか?」

「オレが最終的な判断をくだすまで、嚴重に隠さねばならん。オザワはそこいらの電子機器や金庫より余程信用がおける」

「わかりました」

妹はやけに嬉しそうな顔でうなずいた。

S i d e コウイチ

「清掃業者さんはもう済んだのかな」

「スケジュールにまだ余裕はあります。待ちましょう」

僕とこの劇場の支配人さんは、長机を挟んで向かい合って座っていた。

彼はスタッフと同じデザインの燕尾服に身を包んでいて、白髪交じりの髪色と髭がよく似合う紳士であった。

彼は紅茶のカップをゆったりと口にする。

支配人という単語を口にするにふさわしい。落ち着き払った人である。

「地下に強引な拡張工事をしたので、トラブルが発生したのかもしれない」

「それは……」

「いえ。ヤジマのせいではありませんよ。ここを工事することを許したのは私ですから」

静かに彼はそう呟く。

カチヤン、と大きな音をたててカップが机に戻され、薄い橙の水面が跳ねた。

そこに一抹のトゲトゲしい感触を覚えて僕は身をすくませた。

今日の支配人さんはどうも機嫌がよろしくないようだ。何か事件でもあったのだろうか。

アシハラに毒を吐かれ続けてから、すっかり自分の感性に自信がなくなっていた。

張本人を参照しようとして左へ首をめぐらせると、もぬけの殻である。

「あれ？」

「お連れ様なら先ほど、設計図の打ち合わせをしている最中に黙って出ていかれましたな」

「あ、あいつ……」

仕事を放り出してどこへ消えてのか。

唇がわなわなと震える。

ソファアールから勢いよく立ち上がると、今度は支配人さんが縮こまった。

Side ユウジ

公演が終了してから、さらにおよそ二時間後。俺は出口側の売店にいた。

各メンバーのブロマイドといったグッズのみならず、ガンプラまで販売されている。

「随分羽振りがいいこった」

ヒカワによるとガンプラを自在に飛ばすこのライブは、ヤジマとの密接な提携のおかげである。今日は早くにその公演を切り上げ、粒子発生装置と制御AIを点検、アッパデートするらしい。

特務ファイターの仕事はその後の稼働テストの手伝いという訳だ。

戦闘は不要な代わりにエンターテイメント的な、アクロバティックな動きを要求される。

さらに改修したアデルを試すいい機会だ。

俺が何の気なしに『ガンダムGセルフ』の箱を手を取っていると、舞台のあった方向から話し声が入ってきた。

「今日は短い時間でラッキーね。いつもよりガンプラの動きが元気だった気がしない？」

「そうね。とはいっても、テストやら忙しいのに変わりには……あら？」

やってきたのは女三人、先頭にいるのは俺と同世代くらいの女だった。

白のカットソーにベージュのスカートという出で立ちで、黒髪を肩のあたりでばつさり切った気の強そうな顔つきだ。そいつは俺を見て、なんの前振りもなく尋ねてくる。

「あんた、あのアデルのビルダーでしょ」

「唐突だな。どのアデルだ」

「あのつまらなそうにしていたガンブラよ。他と違って、ホビーホビーの表紙飾っていいような完成度だったから目立ったわ」

その女の横で、残り二人の女が小声でひそひそと言葉を交わしている。ウエーブのかった茶髪にギャル風のメイクをしたのと、唇がアヒルのようなままであるのが特徴的な、スタイルばかりいい女だ。

「この人、結構イケメンね。体つきもいいし、タイプかも？」

「あいにく縁はほとんどない」

「ありや、聞こえてた」

女たちはおどけて顔を見合わせてから、ふふふ、と笑いあつた。

あいにくこういふ類の女に鼻の下を伸ばす趣味はなく、その所作は癩に障るだけである。

そこまで考えて、俺はこの三人が三人とも舞台上にいた人物たちであることに思い至った。

アイドルグループ『コスモス』のメンバーだ。

ガンブラの棚を物色している短髪の女は、中央で最も華やかであった人間である。

「お前、ハイバラ・キミコか」

「今更気づくなんて、やっぱりファンという訳じゃなかったのね」

ハイバラはやれやれというように両手を挙げた。

ライブの時の様子とは打って変わって、ドライな印象を受ける女だ。

ファンでない人間が貴重な席を取っていたことにも、特に感想はないらしい。

「お察しの通り、あたしはハイバラ・キミコ。こっちの茶髪の子がヒノキダ・エミで、アヒル口の子がシェリー・サカイね。あなたは？」

「アシハラ・ユウジ。ここには仕事で連れられてきただけだ」

「ほらキミコ！あのテストをするっているファイターさんじゃない？」

俺が簡潔に自己紹介すると、シェリーと呼ばれた妙な口元の女がハイバラの肩をしきりに叩いた。すると彼女は得心がいった様子で、ぽん、と掌を拳でたたく。

「ああ、公式審判員ね。どうりで目つき悪いと思っただわ」

「すごい、ガンブラ警察よね」

「本物はじめて会ったわあ」

「俺はただの……」

やいのやいのと騒ぎ立てる女相手に、そう大層なお役人様ではないことを示そうとした時、劇場を揺さぶらんばかりの怒声が飛んだ。

女三人は顔を寄せ集めたまま、俺はライセンスに指を伸ばしたまま動きを止め、そこからへ注目する。

顔の筋肉を引きつらせたヒカワ・コウイチが、こちらに大股で近づいてきていた。あたふたとそれに随行するのは初老の男だ。

「アシハラ！ お前、打ち合わせ中に抜け出すとはどういう見だー！」

「あれは俺には専門外だ。作業の日程がわかれば、ほとんど下見だろう」

「民間人の特務ライターでも、こういう時には顔を出せ！ 後ですれ違いが起こったらどうするんだ！」

「まあまあ。後で概略を説明しますし、相手はまだ学生でしょう。そこまで叱らなくても」

男がヒカワをなだめる。

確かこの劇場の支配人だったはずである。

ハイバラはそんな支配人とヒカワを白い目で見ていたが、急に何かを思いついたとみ

える。

俺に早口で畳みかけてきた。

「ねえねえ。あんた公式審判員なら、ガンプラの作り方教えるの、得意よね？」

「そいつは何日か前に店じまいに」

「ちよつと私のガンプラ製作を手伝ってほしいのよ。付き合ってくれる人いなくてさ。

お願い！ユウジ！」

両掌を合わせて拝み倒される。

初対面の男よりも、同性の友人と仲良くやればいだろうにと考えたが、その想定は残りのメンバーの指先を検分したときに消えた。

なるほど。俺は今、業界の裏事情を覗き込んでいるようだ。

「いいだろう」

「ありがとう！」

「おい、まだ話は終わってないぞ……!?!」

彼女が全身で歓喜を表す一方、ヒカワはまだ不満やるかたない様子である。

俺へ詰め寄ってこようとした途端、その肉付きの少ない腕にハイバラが飛びついた。

途端に奴の顔色が赤くなったり青ざめたりとどりにどりに変化する。

ハイバラから甘ったるい猫なで声がもれる。

「ねえ、あなたも審判員なんでしょ？後であたしたちのサイン入りポスター、タダであげるから……」

「う、ぐ。まあ、ハイバラさんがそこまで言うなら……」

生真面目な審判員殿はあっさり陥落する。

そんな心理的脆さのため息を漏らすと同時に、内心でハイバラ・キミコという人物に感心していた。

相手が自分のどんな振舞に喜ぶかがわかっている。機嫌取りと雰囲気察知の達人。

ファイターとしてならば、おそらく援護射撃や指揮管制が抜群にうまいのではなからうか。

できれば敵対したくない。俺は彼女と余計な波風を立てないように心がけることにした。

「キミコ。私たち、支配人さんと装置の解体現場見てくるわ！」

「まだ外装を外している程度でも、ちよつと気になるし」

「わかった」

そう言葉を交わすと、アイドル二人は、支配人と劇場の奥へ戻っていった。きんきんとしたはしやぎ声が徐々に遠のいて、やがてかすかにしか聞こえなくなる。

後には俺とハイバラ、ヒカワだけが残された。

ヒカワの方は一時の熱が冷めてしまったのか、唇をへの字に曲げている。

功名に丸め込まれたことに不安と不信が渦巻いている様子であった。

当のハイバラはというと、微妙な空気をもともせず上機嫌で陳列棚に向き直る。

多種多様なラインナップから一体のガンブラの箱を取り出した。

『ビギナ・ギナ』。

白百合を思わせる可憐な機体だ。ライブで使用されたデナン系とは近い系統樹にある。

「この上の階に工作室があるの。ユウジ、付いてきて。審判員さんも」

ハイバラが俺の手首を掴んで、ぐいぐいと引っ張っていく。

劇場の出口を抜けて、緑青色のビルの外側にある非常階段を上らされる。

さび付いた金属ノブが回されると、上の階は様々な企業の備品置き場となっていた。

飾りつきのない廊下のそこかしこにガラクタが転がされている。合間に扉板が見え隠れしていなかったら、この通路もろともゴミ屋敷と見間違えていたかもしれない。

「道理で劇場以外に活気がないわけだ。もう何年も使われていないのかも」

ヒカワのそんな独り言が聞こえた。

『工作ルーム』という看板がある木製の扉の前で、ハイバラは俺の誘導をやめた。

俺の右手首がようやく解放されてじくじく痛む。

扉が開くとなじみ深い、シンナーや塗料の残留した臭いが鼻についた。

「ハイハイ」

「随分本格的だね。この前のイベントブースぐらいはあるんじゃないか？ どうだろう、アシハラ」

「大げさだ」

とはいえ、その部屋は確かに広がった。三人は余裕で作業を同時進行可能であるほどのスペースと、しっかりとした換気設備がある。そうしたレイアウトの傍らには、十数体のガンプラがレイアウトされていた。

俺が所属する学校の模型部のものよりはるかに上等であった。

「ここではスタッフがガンプラの修理をしたり、メンバーの何人かが作ったりしているの」

「そういえばヒノキダさんとシエリーさんは参加しないのかい？」

「あ。それは……」

「他のメンバーはガンプラを作ったことがないんだろうよ」

「えっ……？」

俺が先んじて答えるとヒカワはガクン、と首を傾けた。まるで壊れかけのブリキ人形だ。

そのサビだらけの頭に答えがなじむまで、かなり時間がかかる。

ハイバラからは小さな拍手が送られた。

「そうそう。ユウジ、よくわかったわね」

「指先だ」

「へ？」

「ちよつと貸してみろ」

「は、え!?!」

俺はハイバラの手を取って、ヒカワにもわかるように角度を変えた。彼女は身をのけぞらせるが手首の意趣返し気分もあって無視する

きちんと切られた爪の先端、皮膚との間にごくわずかだが、白い物質がこびりついていた。

これはホワイトの油性塗料である。おそらく使用してから二、三日経過しているだろう。

「デナン・ゾンは全機体が油性マーカーによつて塗装されていた。それも指紋が微量ながら残留していたし、ムラが大きかった」

「つまり初心者が塗っていた？」

「そういうことだ」

製作に慣れていないなら、なおさら手元は汚れるリスクが高い。

いつもゴム手袋をしている可能性も指紋の跡から鑑みれば考えづらいだろう。

あまりにもジタバタとするので俺はハイバラの手を離してやる。我儘アイドルは右手を庇うようにして、俺から距離をとった。羞恥と怒りから頬は薄桃色に染まっている。

表情のころころ変わる女だ。ヒカワへの説明に忙しいので、それに構ってやる暇はない。

「油性塗料は石鹸を使ってもかなり落とすのに難儀する。ガンプラの装甲や関節は摩耗していて、何度もリペイントした痕跡があるにも関わらず、あの二人の手には汚れ一つなかった」

「そういえば自動操縦には想定外の負荷がかかるから、バトルもしていないのにすぐに壊れるってデータがあつたな」

するとハイバラがつい、と形の整った顎をそらした。

「あたしたち『コスモス』のメンバー十五人の内、ガンプラビルダーは三人。バトルもたしなむビルドファイターはあたし一人よ。文句ある？」

「でもガンプラアイドルって……」

「そんなの世間様が勝手に持っているイメージに決まっているでしょ？あの元祖ガンブ

「ラアイドル『キララ』だって、世界大会予選の時はファンに作ってもらったんだから！」
 なかなかの剣幕にあてられてヒカワはすっかり硬直してしまった。

言い訳がましい事を口にした自覚が生まれたのか、ハイバラはばつの悪そうにスカートのすそを払い、腰に手をあてる。俺を下から見上げるように、彼女の表情がぐっと迫ってきた。

「とにかく、あたしは作れるんだから。手伝いはしてよね」

「……ああ」

「工具取ってくるわ。待ってて」

ハイバラは入り口の向かいの壁にもう一つある扉の向こうへ消えた。

戸が閉まる音を合図にしたかのごとく、ヒカワの硬直がとける。よろよろと俺の傍らにやってくる、すぐ近くの丸椅子に崩れ落ちた。

「……夢がひとつ、砕けた……」

顔を覆っている指の隙間から、そんな内容が漏れ聞こえる。このグループの実情はともかく、あの『キララ』がファンに製作を代行させていたというのは知れ渡ったエピソードだ。

第七回世界大会の日本予選で本人が公言している。

それも知らなかったとこをとみると、奴の青春はよほど純朴に過ごされたらしい。

茫然自失のバディは放っておいて、俺は完成させられたガンプラたちを見学することにした。ビギナ・ギナ、デナン・ゾン、ベルガ・ギロス……クロスボーン・バンガードの機体に偏っているが、どれも悪くない出来であった。

おおよその基本工作に加えて、塗装やウエザリングなども丁寧に施されている。

ライブでの機体を自作とすれば、ここに並ぶ機体のほとんどはハイバラの作品だろう。表面処理のクセなどが共通していた。

しかし一体だけ完成度が際立っているガンプラがある。ビルダーとして、少しの嫉妬と敬意をいさぐようなものだ。俺はその機体、ビギナ・ロナの前に足を踏み出した。

ほぼフルスクラッチで構成されている一つの作品を慎重に持ち上げる。

それには、スマイレ色を基調に黄金のエングレーピングで縁取られた高貴さの極致があった。

これだけはどう観察しても別人による作品である。ホコリのつもり方からして、かなり最近に置かれたものらしい。

俺はクツ裏のデイトールを確かめようとキットをひっくり返して、そこで妙なものを見つけた。

「おい、ヒカワ」

「……何さ」

「ビギナ・ロナのクツ裏に何かがテープで貼り付けられている」

「足の裏だ？追加パーツじゃないのか？」

覇気のない返事だ。

俺はテープを剥がすと、工作室の明かりの下に晒した。それは指先に収まる程度のメモリーチップだった。

「マイクロチップ？この御時世にずいぶんと古風だな」

「頭の古い人間だったか、そうでなければいけない理由があつたんだろうよ。ヒカワ、こいつの中身を解読できるか」

「あまり人様のものをのぞき込むのは……」

「言っている場合か。こんな場所に隠してある記録媒体なんて、十中八九まともなものじゃない」

そう断じるとヒカワは渋々タブレットを取り出す。ガンブラバトル関連技術を以て開発された専用のデバイスだそうで、その情報処理能力は一般のタブレットやノートパソコンの数倍であるという。

ガンブラ塾出身の審判員、カザミとのバトルもこれで観戦していたらしい。

無数の文字列とタブが出現し、ヒカワはその意味ひとつひとつを拾い上げて、つぶさに解読しているようだった。

「中身は面倒なセキュリティが十重二十重だ」

「そんなもの破れ」

「乱暴だなあ。そもそもこれ、僕ら以外の人間で開けられるのか……?」

そんな独り言をつぶやきながら、ヒカワはメモリの内部に進入していく

指先に迷いはなく非常に迅速だ。

あのカザミによると、こいつはPPSEでメイジンの機体で使用された特殊関節『ハイポリキヤップ』の研究チームに所属していたらしい。

3年前の事件でPPSEが崩壊したのちはソフト分野の勉強をやジマ商事のラボで積んで、ダメージレベルシステム開発班に異動、現在に至るといふ。

つまりソフトとハード、どちらにも精通したスペシャリストという訳だ。

性格の好みはともかく、技量だけならとんでもない人間である。

ものの数十秒で一つのファイル名だけが残された。

「とりあえず、今見つかったのはこの画像データだ。他にあるかもしれないけど、それは支部に戻って分析した方が早いね」

展開されたのは一枚の写真だった。

ライトが最低限にまで絞られた劇場で、ハイバラが誰かと会話している。浮かべている笑顔に偽っている様子はない。

相手はスタッフだろうか。書類片手に口を開いている。

その画像の下にたった一行、文字列が打ち込まれている。

「当該人物に技術スパイの疑いあり。調査されたし。G4」

「……」

「……」

俺たちは押し黙ってその写真と文字列を見ていた。しばしの間を置いて、先にヒカワがぼそりと呟く。

「これ、合成加工か？」

「わざわざ公式審判員の保有するテクノロジでないと開示できないファイルがフェイクだとしても」

「こんなことが……まさか、粒子発生装置の設計図を狙っているのか？ ハイバラさんが？ いいやありえない！ 絶対に！」

「ごめんごめん、何だか部屋がすごく散らかっていて！」

甲高い詫び言とともにドアが蹴り開けられる。

すんでのところでヒカワが素早く端末を後ろ手に隠し、オレはビギナ・ロナをきちんと立て直す。

ハイバラは細腕いっぱいに段ボール箱を抱え、意気揚々と帰ってきた。

「片づけにずいぶん手間取ったわ。前に使った奴がよほど気の利かない人間だったのね」

「そうかい」

「そ、それは大変だったね」

箱を持つてやって中を覗くと、作りかけのパーツやら塗料皿、洗浄液などが雑多に詰め込まれている。汚れが端々に残留していて、水洗い程度で済ませていることが丸わかりだ。このままではメーカーの想定より早く寿命を迎えるだろう。

両手があいた彼女は大儀そうに肩を回していた。

「部屋の清掃も結構だが物品の管理もきちんとすべきだ」

「う。それぐらいわかっているわよ！」

ちらりと目をやると、ヒカワは端末をこっそり制服の懐にしまい込んでいた。

メモリーカードは入ったままだがわかってやっているだろう。

正式な令状もなしにあんな代物を回収するという振舞はなんらかの規約に障るであろう。

素人の俺でもわかることだ。

しかしヒカワは面と向かって写真をつきつけずに、隠し通す判断を下した。

発見したことに責任こそとつても、それ以上は俺の管轄外である。

案の定、ハイバラは俺たちを怪しんだ。

「ねえあなた達、私に何か隠していない？」

「部屋のガンブラを眺めていただけだ。どれもいい出来をしている」

「え。そう？あそこにあるのは大体私が作ったんだけど」

「改造はしないのか」

「普段は家でしかやらないけど、今度は劇場のリニューアルだし、ちよつとハメを外すのも悪くないかなって」

「だから『審判員』に教わりたいたと」

「そういうこと。とにかく世界観のクロスオーバーとか、オリジナリティが出したくて。

でもここの劇場の売店はラインナップがけち臭くてさあ。支配人に文句を言っても……」

「ふうん」

責任の所在は殆どないとはいえ、これから告発したところで俺にもデメリットしかない。

体よく彼女の注意をそらす。ガンブラについての談義以上に、ビルドファイターが食いつく話題はこの世に存在しない。

せきをきったようにあふれ出すハイバラの愚痴、自慢、そしてもう一度愚痴。

それを話半分聞きながら、作業台へ道具を並べていく。

エアブラシは明らかに汚れすぎであったので、彼女が作業中に洗浄しておかなければなるまい。

「おいヒカワ。お前はそろそろ仕事だろう。さっさと下見にでも行ってこい。邪魔だ」

「え？僕も見ていくよ。せっかくだし」

「……勝手にしろ。バカが」

せっかくメモリーチップを隠すタイミングを与えたのに、このざまである。

察しが悪い同僚のせいで頭がシクシクと痛んだ。

Parts. 04-b 「ガンプラアイドルグループ
コスモス」(後編)

side コウイチ

アシハラは数分前の出来事などおくびにも出さず、淡々とハイバラさんを手伝っている。

僕はというと制服の胸ポケットに手を当てたまま、一步もその場から動けなかった。

こんな澁刺とした少女が、人の作り上げた技術の結晶を盗むことに手を貸しているなど信じられない。

仕組まれた何かがあるはずだ。

もちろんそれは100%僕の第一印象と肩入れであった。

だが、僕は技術スパイに憤るエンジニアという以前に、彼女のファンであり、なによりも公式審判員である。

すべての人がガンプラを楽しめるようにするのが務めで、その為には、彼女が冤罪という証拠を提示しなければ。

「どこかにあるはずなんだ」

「そうは言っても、他に心当たりがないのよ」

聞きとがめられたかと慌てて彼女の方を見たが、ハイバラさんは箱の中身についての話題と勘違いしたようだ。

「さつきから何を探しているんだ」

「プラモ用のニツパー。いつもはこの工具入れに入れてあるのに」

「ニツパーくらい、ガンプラのホルスターと一緒に携帯しておけ」

「だってライブ衣装には付けられないじゃない。あなたみたいに肌身離さずとはいかないわ」

アシハラは僕の独り言からおよそを読心したのか、話の流れをそちらに振っていた。

さつきの会話といい、やろうと思えば他人の機嫌を取れるのだ。

ハイバラさんが工具入れと称したのは30センチほどの幅のケースで、がしやがしやと漁っているが見つかる気配はない。

そんな彼女をアシハラはしばし見守っていたが、やがておもむろにジャケットの内側から一本のニツパーを取り出した。

緑色のグリップで、刃は照明を受けてこちら側が写るほど研がれている。ほとんど新品に近いそれをあいつは躊躇なく差し出した。

「これをやる」

「え、でも、これあなたのニツパーでしょう?」

「俺の得物は別にある」

流石に遠慮するハイバラさんに対し、アシハラはもう一本のニツパーを取り出して見せた。

グリップが塗料などの汚れで薄汚れている以外はほとんど同じものだ。むしろ刃に至ってはこちらの方が澄んでいるのではないだろうか。

それを見て、彼女は納得した様子で綺麗な方のニツパーを受け取った。

「ありがとう」

眩しい笑みだ。ファンでなくてもどきり、とするに違いない。

しかし、あいつは相変わらずの無表情で古びたニツパーを弄んでいた。

「『常にニツパーは二つ持ち歩け。一つは自分の為に、もう一つは、誰かにガンプラの楽しさを伝える為に』。審判員の心得と一緒に叩き込まれた、俺の師匠の教えだ」

「師匠ってひょっとして、ガンプラ造形術の?」

「そうだ」

ハイバラさんの問いをアシハラが肯定する。初耳だった。

ガンプラ造形術とは華道や茶道のように師弟関係を結び、ガンプラの製作、バトルの技量を磨く者たちの術である。達人に教えを乞うのだから凡百のビルダーよりも技量

の平均値は高まる。

アシハラがそんな経歴の持ち主ともなれば、化け物じみた製作技術や観察眼にも一定の説明がつく。

「なあ、お前が所属しているのって、関西の心形流か？」

「いいや。関東のドマイナーな流派だ。おそらく門弟は俺ともう一人くらいしか残っていないだろうよ」

「そうか……」

心形流は世界大会ファイナリスト、ヤサカ・マオを輩出した最も有名な造形術の一門である。

僕はそこに多少の縁があったので、興味本位で尋ねてみたのだがはずれらしい。

不意に、アシハラが僕の何気ない質問に答えてくれたのは珍しい現象なのでは、と思う。

ところがハイバラさんの小さな顔が僕らの間にひよいと割り込んでくると、ついそちらに気を取られてしまった。

「ねえ、ユウジの師匠ってどんな人だったのよ」

「そうだな……俺たち弟子に厳しくて、だらしなくて、平気でルールを破るろくでなしだった」

「何よそれ。とんでもないじゃない」

「だが、いい人だったよ。昔のことは色々忘れちゃったが、それは覚えている」
「そっかあ」

彼女はビギナ・ギナの組み立てを進めながら相槌を打っていたが、その何気ない受け答えが、わずかに震えを帯びて届いた。

「ちよつとだけ、うらやましいね」

快活な少女の顔へ、一瞬だけアシハラと同じ色の影がさしこんで引いていく。

僕はどうしてもその影を見逃せなかった。

「それは、一緒にガンプラを作ってくれるような友人がいないからですか?」

「まあ、そうなるかな。正直、ガンプラアイドルなら大好きな趣味を共有できる仲間とアイドルもやっていけるって、はしゃいでいたから。現実は厳しいわ」

彼女はガンプラの顔面に、慎重にマーカーで色を塗っている。ちよつどそれはカメラアイの輪郭にそって滲んだ。

アシハラはそんな様子の少女の隣へ、パイプ椅子で無遠慮に腰を下ろした。

いつの間に入れたのか、換気扇の轟音が響く。

「嫌なのか。他のアイドルが」

「ケンカ売っているの?」

「だが、お前とあいつらは根本的な所で相容れない。ガンプラにもつとも関わるべき立場にいなから、その点で価値観のすれ違いを抱えている」

アシハラはハイバラさんを見ようともしない。あいつが相対しているのは、エアブラシの表面に歪んで写り込む、自分の顔だけだ。

ハイバラさんはさっきまでの調子が嘘のように、はきはきと言葉を紡いだ。

「ガンプラやガンダムに興味がなくても、みんなアイドルになりたくてここに来た。致命的な歯車が噛み合わなくても他の要素がそれを埋め合わせてくれるの」

分割されたガンプラの各部位が組み上げられていく。ほぼ素組みにしても、おそるべき速さでビギナ・ギナは完成した。

全長は13cmほどでプラモデルにしても小型である。いくつもの工程を経て、たったこれだけの小物が残されるのだ。

こうして完成したガンプラをどう楽しむかは無数の選択肢が与えられる。

ハイバラさんやアシハラのように戦う人、鑑賞する人。すべてが許されている。

そしてアイドルの小道具という用途も、ガンプラに与えられた新しい可能性のほずだ。

メンバーのほとんどがビルダーでないからって、ショックを受ける必要はない。

僕は彼女の言葉で、そんな当たり前のことを思い出した。

ハイバラさんはその作品を誇らしげに作業台に立たせて、頼杖をついている。

「ユウジ。人と仲良くなる方法は、ガンプラがすべてじゃないでしょう?」

アシハラ、エアブラシをティッシュに押し付けていた手が止まる。

鬱屈とした視線がビギナ・ギナからハイバラさん、なぜか僕を通つて手元へと一巡した。

「……俺と同じくらい歳の癖に、よほど道理がわかっている」

「でしょ? アイドルっていうのは、そんじよそこらの人よりメンタルが年上なのよ」

ほがらかな太陽の笑みが輝く。

それは隠し事で後ろめたい僕の気分でさえも幾分か照らしてくれた。やはりアイドルの最強の武器は『笑顔』につきる。

アシハラは眩しそうに顔を背けると、急に立ち上がって僕と向かい合った。

握りこぶしから親指を立てると粗雑に出口を指す。

「話がある。表に出ろ」

自信へと投げかけられた言葉で、何を思ったのかは定かではない。唯一たしかなことには、そこには有無をいわせない迫力があつた。

Side アレックス

調査が完了した二日後。審判員が装置の試験稼働を行うという情報を受けて、オレた

ちは劇場に舞い戻っていた。

「あとはこのスピーカーですね。急に配線が変更になるとは、技術者の方が頭を抱えそうです」

「オレたちの目的を忘れてないか？」

「いいえ、全然」

「……」

オレたち兄妹は劇場の裏手にある物品の搬入ゲートにいた。

部下が数名、作業着に身を包んで、段ボールを上げ下ろししている。

今度は大型機材の取り扱い業者をかたつて潜入した。さすがに最新型バトルシステム周辺の機材は内内に運んでメンテナンスがなされているようだが、劇場の放送機材はその限りではない。

観客の立ち見区域の一部を工事継続中として封鎖してから、オレたちの仮拠点を設営した。現在、仮拠点には名義を偽られたオレたちの物資が次々と搬入されている。

むろん書類は改ざん済みである。現地のスタッフが戸惑う程度であろう。

アレクシアはこの業務もきちんとかこなさなければ気が済まないよう、入念な準備と打ち合わせを繰り返し、すっかり業者の元締めになりきっていた。

「依頼人であるサトウも怪しい。黒幕は別にいると言ったのはお前だ」

「ええ。もちろん覚えていきます。それを突き止めるために、あえてスパイを泳がせる判断をしたのは兄さんであることも」

「そうだ。今日ここで技術スパイを確保し、『神器』を回収する」

「……ハイバラ・キミコさんの冤罪についてはどうするのです?」

「どうでもいい。最初から『ムラサメ』の偉いはアイドルに接触した技術スパイであり、それ以外は些事にすぎない」

ハイバラ・キミコはたしかに冤罪だ。

あの『決定的証拠』が皮肉にもそれを証明している。

だがそんなことは黒幕の存在を肯定するための道の途中で、多少の考慮に入れるべきであった要素にすぎない。神器回収という必須通過点とは異なる。

他人の有罪無罪にかかわらずっていられるほど、ムラサメも暇ではないのだ。

「まさか、お前は顔も合わせたこともないアイドルの無実を証明するために、黒幕を知りたいのか」

「そうです」

「愚考だな。スパイを捕まえて吐かせても状況証拠の積み重ねであることには変わりない」

「私たちは『自警団』のはずです」

「公式審判員の定めた規則の範疇で裁けない相手を裁く、身勝手なだけの正義だ」
「だったら！」

「故にこそ、訂正のきかない完璧な結果を提示しなければならん。凶に乗るな、アレクシア」

公式審判員が同じように、黒幕を捉えて公衆の面前へ晒しだせば、ハイバラ・キミコへの疑惑はあつさり晴れるはずだ。

けれども、それは連中が仮にも法にのつとり正義を執行する、公権力の使者だからにすぎない。しよせん海を越えた国からやってきた『外人』が、立ち上げたばかりの自警団とは説得力が違う。

オレはともかくムラサメは最強には程遠いのだ。

アレクシアは叱責を受けてなお、拳に力がこもっていた。

「それでも、許されるはずがありません。他人の人生を身勝手な風評で汚すなんて、万死に値します」

「……ふん。そんなに地雷を踏んでいたか」

「アレクサンダー様。アレクシア様。準備完了です」

世話役の聞きなれた冷やかな調子の声に、アレクシアは頭を冷やされたらしい。

まもなく普段の穏やかな顔つきに立ち戻った。

オザワは両手にGPベースを持っていた。カラーリングはそのままに、先端の球状のくぼみへ、識別用の紫色の結晶が象嵌されている。

これは、バラバラの条件で集積していた試運転データを集積、専用のプログラミング調整を施したものであった。

ガンプラが、ファイターにとって凶暴な愛馬となりうる手綱とも言える。

「では、行くとしよう」

部下たちに運び込ませたのは粒子発生装置。市井に流通しているバトルユニットそのものだ。ムラサメの潤沢な予算にものをいわせて数台購入した。

これを使って劇場のシステムにエントリーし、スパイが奔放に回る遊び場をオレたちの狩場に変じさせる。

『G u m — p l a ■ ■ ■ B a t t l e ■ ■ ■ b a t m o d e s t a r t ■ p』

非正規のシステム侵入に音声機能もバグを吐き出すが、想定内の挙動だ。

もつと根幹部分にあるガンプラの操作系統システムまでは侵されていないはずだ。

その対策も兼ねての改造GPベースである。

『P l e a s e S e t y o u r G u n — p l a』

「待たせたな」

暁 雷光をセットする。

こいつは初回の起動実験以来のフル装備で、背面には『サンダーボルト』に登場するサブアームと重火器を満載したウエポユニットを久方ぶりに背負っている。

その双眼が、プラフスキーの息吹を受けて黄金に発光した。

隣ではパールホワイトに塗り替えられたザクが、ピンクのモノアイをひととき強く輝かせる。

アレクシアのガンプラだった。

「ここはかなり広大だ。監視体制は万全とは言い難いだろう。ライブで観客が熱狂している間にケリをつけるぞ」

「了解」

天下のヤジマ商事といえども、たかが一アイドルの、施設のカメラまで世話はしてやれない。見学する関係者も総人数は普段の四分の一ほどだ。

つまり普段は想定しえない死角が今日だけ増える。オレの働きやすい環境である。

「アレックス・メルフォール。『暁 雷光』。出陣する！」

「アレクシア・メルフォール。『ソヴァールザクウォーリア』、行きます！」

カタパルトが火花を伴って暁 雷光とザクを射出した。

いくらシステムがアップデートされても、散布しているものは同じプラフスキー粒子だ。目論見通り、用意したユニットを玄関口にして、二機のガンプラは劇場の全体を飛

行可能になっていた。むしろこちらにはカスタムGPベースのバックアップがある分、アイドルの機体より戦闘能力は割増される。

『舞台では『コスモス』所属のガンプラが既に何機か飛行していますね』

『事前情報によると自動操縦だ。バトルをしようにもプログラミング通りにしか働けないよ』

オレの暁 雷光を導くようにソヴァールザクウオーリアは飛行している。

こいつはセイバーガンダムのパックパックにウイザードとして換装しており、暁 雷光の射程をカバーするように設計されている。

ワークスチームではなくアレクシアの手製だった。

ほぼすべてがビーム兵装なのは、ビームに対して強い耐性を持つ暁 雷光に牙をむかぬような制約があったらしい。

誰が妹に助言したかは知らぬが、余計な気遣いだ。

『兄さん。前方にアンノウン反応です。粒子挙動探知にひっかかる程度のステルス機と思われます』

あのシャンプロとのバトルを基に新たに搭載された新型レーダーが警鐘を鳴らした。

これはガンプラそのものではなく、その周囲で流体的に変化する粒子そのものを観測しているから、通常の規格では索敵不能であっても補足できる。

カメラをズームし機体の種類を識別する。

古いブラウン管テレビのような頭部と、筋肉質なボディビルダーを思わせる、黒いマツシブな胴体。

絶対防御機構『プラネイト・ディフェンサー』が特徴のモビルスーツ『ビルゴ』だ。

それが三機、床に着陸して何か怪しい挙動を取っている。

まかり間違っても歌や踊りではない。

「仕留める。先行して牽制しろ」

「はい」

アレクシアのザクが急加速をかける。ビルゴはそれにテレビ頭をもたげて反応すると、手持ちのビームキャノンを斉射した。はずであった。

というのも、オレの視界には空気を裂くはずの光の条線は、粒子のひとかけらさえ顕れていない。ただヤタノカガミがビームを感知し、無条件で反射しているという警報だけがポップアップしているのである。

敵の弾幕は不可視であった。

「違法改造のガンプラとは、いきなりアタリを引いたな」

ファンネルをクリアパーツで作成し、回避を困難にすることは世界大会でも行われたが、いくらなんでもビームに塗料をふきつけるとはいかない。直撃判定のみが迫る技な

んてプラフスキー粒子の判明している物理法則を凌駕している。

こいつは確実にイリーガルな代物だった。

さて、アレクシアのザクはそんな虚無の攻撃と射撃戦をするという難題を課せられていた。ザクが空中で糸が切れた人形のように脱力して急停止したかと思うと、あらぬ方向へ機体を転回させる。それで機体が破損しないならば、回避には成功しているのだ。

『頭かくして尻かくさず、です。私には、すべて捉えられています』

妹はビルゴのキャノンの銃口を観察していた。

いかにビームが透明であろうと、銃口は反動をわずかに再現して後退する。

ガンブラが実際に動く以上、それはいかに腕部の構造を頑強にしようとは避けられない現象だった。

前触れなく、ザクの肩にあるシールドの表面が、一直線に焼け焦げた。

その盾を腕部に対して垂直に傾けさせて、内部から飛び出した黒い柄を掴む。

ビーム・トマホークの桃色の刃が中空に向けて振るわれて、しきりにエッジを明滅させる。

粒子同士の干渉はオレの暁 雷光からも観測できた。

見えないビームを切り払ったのちに、ザクは腰部左右のセイバーウィザードからアムフォルタス・プラズマビーム砲を展開させ、大出力の奔流を放った。

白い閃光の中心を、赤い衝撃が駆け抜ける独特すぎるエフェクトが、静かだった戦闘空域を一気に塗りつぶす。ビルゴはプラネイト・デイフェンサーでしのぐが、余波でわずかに動きが止まった。

『今です。兄さん！』

オレは両掌を覆うグローブを外していた。

彼女の行動は牽制にすぎない。

あくまで、主役はオレだ。

「全火力。解放」

暁 雷光のウエポンスロットを、並列起動する。縦横無尽に、数センチ幅のモニターが一斉に目覚めた。

その総数二十。

通常の表示に収まりきらず、オレの正面すべてを覆うように出現している。

カスタムGPベースの調整のおかげだ。

こちらはルール違反ではなく、制御できるならばグレーゾーンであった。

そして、オレはこれが制御できる。

「一番から二十番、弾丸装填、連続斉射準備」

コマンド入力を受け、腕組みをした暁 雷光の背面が、複雑怪奇な変形を遂げはじめ

た。

総弾数600発ずつのガトリング砲二門が前方に折れ曲がって、レールキャノンと肩を並べた。サブアームが伸長してバズーカを構えた。

迫撃砲が上空へ口をあけた。

ミサイルコンテナのロックが外れ、ビームキャノン四門は上方にそろって威嚇する。

その他にも無数の武装群が、オレの号令を待っていた。

ビルゴの無表情なモニターが、たしかに戦慄したのがわかった。

「これこそが、我が暁 雷光の真骨頂だ！防げるものなら、やってみせろ！Feeu(撃て)！」

すべての銃器が咆哮した。

side ユウジ

俺はイベント設営の手伝いをするため、劇場裏手で準備をしていた。

やや古びた洗面所を借り受け、顔を洗いながら、おとといの顛末を思い返す。

結局俺がハイバラ・キミコにしてやったことといえば、個人的に気に入っているニッパを譲渡しただけであった。

廊下で手短かにヒカワと会話をしたあと、部屋に戻った俺たちを待っていたのは、誰もいない作業台であった。

机には支配人に呼び出されたので、会話を邪魔しないように裏口から劇場に戻るとい
う旨が記されていた。

それから特務ファイターは非番のまま二日間が経過し、ハイバラとは遭遇していな
い。

置き手紙の文末には俺への感謝も述べられていたが、釈然としない気分である。

「……ひどいツラ構えだ」

鏡の中にいる、タオルを頬にあてがった人相の悪い男に俺は文句を言った。

こいつと対照的に、あの時の彼女の顔は晴れ晴れとしていたことを思う。

いや、俺以外の人間はたいてい、ああいう風にネガティブな感情を跳ね返す強さを、ど
こかに持っているのかもしれない。

腰のホルスターに整備完了したアデルを収納、公式審判員『特務ファイター』のジャ
ケットの袖に腕を通す。

「人と仲良くするには、ガンプラだけがすべてではない」

表でスタツフ同士が怒鳴りあいながら右往左往する中、ハイバラの言葉を反芻する。

ヒカワ・コウイチとアシハラ・ユウジの相性は、『ガンプラという分野に関わると』最
悪であった。

あいつはビルダーではない癖に、ガンプラが壊れることを忌避する。

俺はビルダーで、ガンブラが壊れることを厭わない。

どこもかしこも正反対で、だからこそ相性最悪だと結論付けたはずだ。

ヒカワはイヤホンで曲の音程を比較しながら修正作業にいそんでいた。

「サトウさん！スピーカーの音程、戻りましたか？」

「ヒノキダによると、まだだそうですね！」

「どうして機材に干渉しちゃったんだ……」

悠長に待っているつもりはない。

オレはぐるりと舞台を反対側まで迂回し、裏方の制御ルームでイヤホンを耳に突っ込んでいる男を呼んだ。今日はノートパソコンが相手らしく、それから伸びたコードは、奥の制御装置に接続されていた。

「おい、おい、ヒカワ」

「え？なに？今忙しいんだけどー！」

肩を加減無しに叩くとようやくヒカワがイヤホンを外して怒鳴る。

やはりというか、一昨日の話をすっかり忘れていた。

「それは結構。装置が治れば、表に出るアイドルが一人くらい減つても気にしないという訳か」

「……あつ」

一拍おいてヒカワは青ざめる。ファンを自称しておきながらとんだ面の皮の厚さだ。

正確には、わかっていても結論を先送りにしていたというのが奴の心境だろう。

ハイバラの疑惑を晴らすために、特務が事件を解決する。

その決断をくだすまでに踏ん切りがつかないのである。

「しかし……」

「気持ちにはわかる。俺とお前の立場なら、俺は喜んでお前を切り捨てる」

「いや、そうではなくて」

公式審判員の仕組みにはわずかに知識がある。ヒカワの言い訳の裏にひそむ事情も察せられた。

実のところ、こういうケースでは広報部所属の特務ではなく、警備部が出勤するべきである。

特務が動けばヒカワどころハカドさんの首も飛ぶ。

しかし例の画像のみでは状況証拠にさえもならない。世界各国のスパイの顔を把握している訳でもなし、疑惑の存在さえも立証不可能なのだ。

では他の証拠を探し出し、きちんと並び立てるまで待つべきかと問われればこれも否だ。

なぜならば今日こそが、技術スパイの動き出す絶好の機会だからである。

木を隠すならば森の中。わずかな異変が、メンテナンス時に起こる不測の故障へ埋もれていく。狙わない手立てではない。

今だつてこのスピーカーの故障は技術スパイによる事前準備の影響かもしれない。

あの入口付近の封鎖された区画で、誰かがほくそ笑んでいるとも限らない。

被害妄想で済むならそれで結構。

ともかく正式な役所仕事を踏むには、俺たちが気づくのが遅すぎたのだ。

よつて、俺一人で戦うと決めた。

『コスモス』のライブに乗じて、スパイらしき人物を探し出し、あわよくば拘束する。

みてくれは三流ファイターの独断専行。ヒカワは監督不行き届きによる始末書程度

で済むだろう。

「この二日間、悪あがきの調査をあきらめて、お前の判断を待ったんだ。そろそろ事態が

切迫していると覚悟しろ。そんなに自分の進退が気になるか」

「違うんだ！僕は保身とか管轄なんてどうでもいい！」

「なに」

ここにきて、ヒカワは俺の観察による心理推測を裏切った。

奴が洩る理由など、管轄部署や自分のライセンスといったしがらみしかないと思つた。

その退路を塞ぐために俺一人で行動するというプランを立てたが、なにか腹立たしいものとして映ったらしい。

ノートパソコンをすっきり蚊帳の外に置きざりにして、ヒカワは俺との距離を詰めた。

体格ではこちらの方が上のはずが、妙に大きく感じ取られる。昔、ガンプラの師匠とバトルで対峙したときに知った、気圧されるといふ感覚だった。

「たしかに昨日くらいまではよくよ悩んでいたさ。でも、今のお前の言葉でもう我慢の限界だ。いいか。僕は、お前のその自己犠牲が気に食わないんだよ!」

「……………意味がわからない。俺が自己犠牲をしていると?」

脳が混乱する。

俺の行動のどこに自己犠牲があったのか。何か勘違いをしていないか。

俺はこいつの観察過程の根本的な部分で見落としをしていたのではあるまいか。

「普段は自分以外どうでもいい、みたいな態度のくせに! 僕が嫌いだらう!?! 巻き込んで、全部押し付けられればいいじゃないか!」

言われてみれば、という感想であつた。

自己中心的で誰に対してもドライに接する。

アシハラ・ユウジを自己分析したならば俺もヒカワと同じ結果をはじき出す。しか

し、それとこのプランはあまりにも合致しない。

どうしてわざわざ、一度会っただけの少女のために動こうとするのか。

自らの独断専行という形式にすることで、ヒカワに責任の所在がむかないようにしたのか。

間違っているのは『ヒカワ・コウイチ』の性格ではなく、『自分自身』へ向けている評価ではないのか？

俺は一度、大きく深呼吸をした。

「前も言ったが、俺とお前は本当に反りが合わないな」

「な、なんだよ。急に。そんなこと言われなくてもわかって」

「だが」

「だが？」

一呼吸空ける。ここから話す内容は、絶対に『俺』らしくない言葉だ。

己の現在、正直に考えている深層意識と向き合い、露呈していく。

「ハイバラが犯罪者だと、俺もお前も微塵とも信じていない。それはハイバラの言った、『ガンブラ以外の共通点』ではないのか」

「！」

「この際正直に吐こう。俺は公式審判員の掲げる正義に共鳴した訳じゃないが、お前な

ら話がわからんでもない、と思っただ」

むずかゆくなる胸元を、空いている左拳で強く抑えた。

「ガンプラを壊さずにガンプラを動かして楽しむ。その理想を現実にする難しさは、門外漢でもわかった。

そうだ。俺はヒカワ・コウイチを少しだけ見直した。尊敬したのだ。

そんな男が、こんな所でもやもやしているのに腹が立つ。こいつはもつと無茶ができては、という期待がある。

「だから俺を失望させるな。ヒカワ・コウイチ。ハイバラ・キミコの潔白を明らかにするには、お前のエンジニアとしてのテクニックが必要だ」

審判員として認められたつもりはない。ただ、どちらも目前の悪に憤りを抱いた。

ヒカワは技術スパイト、罪なき少女を貶める存在に。

俺はきつと、罪をかぶせてのうのうとしている顔の見えない畜生に。

「……………」

明らかにヒカワは息を呑んだ。

それはそうだろう。

カザミの指摘したメイジンの影、のせいなのか。俺はこれまで、こうやって感情を吐露することにさえ強い抵抗を覚えていた。

たとえそれが、まごうことなき俺の本心であつても。

「……ごめん、アシハラ。お前に正義感があるのを、ちよつと疑つていた」

「好きに疑え。とにかく俺は気に食わなかつた」

「それでいいんだよ。僕もそう思った。頭に來たんだ」

「それならば」

ヒカワ・コウイチが力強く頷く。

「僕もお前と一緒に組織の縄張りを踏み荒らしてやる。公式審判員の心得、その四。『審判員は一人ではない』そうだろう?」

今までが異常なほど溝があつたのが、ようやくまともに戻つただけなのに、大げさな奴だ。

「やろう、アシハラ。僕が捜査して」

「俺が戦う。組んだ時からそういう分担だろうに」

「ははは。そういうええばそうだ」

「話を戻すぞ。そもそもあの写真がおかしいことについてだ」

俺は早速、自分の推測を切り出した。

ビギナ・ロナのクツ裏から発見されたメモリーカードにある写真は明らかに不自然な

構図で撮影されていた。二人きりでこっそり会うならば、わざわざ一段高い舞台に立つのはおかしい。密談はもつと隅でしなれば、こんな一枚も撮られる危険がある。

技術スパイは、そんな愚を犯すまい。

「とりあえず、技術スパイらしき人物の持っている図面を拡大解析、僕が持っている粒子の装置設計図と照会した。その結果はFailed。一件も合致しなかった」

ヒカワも自分の調査結果を語る。口では渋りながら、とつくに行動は起こしていたらしい。

「設計図を入手しているなら、既に技術は拡散しているはずだ。他の資料は」

「もちろん調べたさ。そうしたらこの舞台と、地下の配管までの一帯をミルフィール状に凶解した断面図だった。元々AIをあそこに搭載するプランが存在したけれど、小型化が進んで破棄されたらしい」

自動操縦用の様々な試みの内、不要と切り捨てられたものが犯罪者の手に流れてしまったわけだ。ゴミ箱に放り込んだものというのは、セキュリティが甘くなるものである。

おおかたあの写真で行われた会話は、はじめて来た業者が、わかりづらい構造をハイバラに尋ねるといった体裁だったのではないか。

「警備がてら劇場も一回りしてみたが、舞台袖に不自然な経路があった。あの吹き抜け

てくる冷たい空気は地下空間だろう。工事のどさくさに紛れて、偽装を繰り返しながら巧妙に拡張したとみえる」

「この真下に？金庫の地下にまでシヨベルで穴を掘るような所業だな、それ」

「まさしくそうだ。金の代わりにテクノロジーを盗む泥棒だが」

そしてそんな計画を進めるには、独力では不可能だ。協力者がいる。

それも劇場の地下での工事計画の進行に携わり、スパイに有利であるように幫助するような人間だ。

状況証拠にすぎないが、冤罪を晴らす地盤固めはこれで完了である。

「後は物的証拠か。スパイを逮捕して吐かせるのが最上だが」

「僕もお前も、ここは離れられない。困ったな」

俺たちが行き詰りかけたその時、劇場の端で、何か光るのが俺の視界の隅に捉えられた。

そちらを振り向き、目をこらす。

火線だ。実弾とビームが入り混じった濃密な弾幕が、この会場のほんの隅で、苛烈に降り注いでいた。

「何の光だ」

「僕には見えないよ?」

「眼鏡を買いなませ。誰かが戦闘をしている」

そう考えると、突然胸騒ぎがした。嫌な予感がする。

そこへ、ひどく慌てた様子で駆け込んでくるやせぎすの男がいた。『コスモス』の事務所に属する社員の一人だ。たしか、名前はサトウといったか。

「ヒカワさん。大変です!」

「サトウさん? どうかしましたか」

「ウチのハイバラ・キミコが、舞台の奥に見慣れないガンプラがあると行って、自分のガンプラを差し向けてしまったのです。もうテストを兼ねたライブは始まっていますし、引き返させるべきなのですが!」

俺たちがステージと裏方を隔てる幕をのけて、表を覗くとハイバラは一見何事もないようにステップを踏んでいるし、桃色のデナン・ゾンも飛行していた。

しかし、彼女が着ているモビルトレースを模したスーツは様子がおかしい。

「まさか、デナン・ゾンともう一機、同時に動かしているのか!? 片方は決まった動きしかないとはいえ無茶だ!」

ヒカワはたしかこのスーツはコンソールよりも恣意的な操作はできないと言っていたはずだ。ハイバラへかかっている負担は尋常ではないだろう。

「俺がアデルで出る」

「任せた」

俺は最も付近にある緊急用エントリーシステムにアデルをセットする。

これはライブでガンプラが暴走した際に、取り押さえる為の設備で、まさにじゃじゃ馬を捕まえに向かう訳だ。

今日はアデルの装備が変更されている。あの製作教室で製作を進めていた、高速近接装備『スパロー』をベースにした『モワノー』ウエアだ。

両腕にはガンダムEz-8の胸部を基にしたガントレットを追加。両脚部にエールストライカーのブースターを片方ずつ履いている。

もちろん全体のカラーはツヤを消したブラックで統一した。

武装はガンダムMk-2のハイパーバズーカと、原典と同じく、クリアグリーンの刃を持つ短刀シグルブレイドを腰部後ろに帯びる。

そして、こいつの操縦場所はヒカワの左に陣取った。経験はないが、事を荒立てずに出撃するには、ここから遠隔操作するしかない。

「エントリー準備完了。発進どうぞぞ！」

「ふざけている場合か」

「これって必要なコールじゃないのか？」

「ガンプラバトルでは不要だ。まったく……『アデル・シャドウ』、アシハラ・ユウジ。S

ally Forth……!」

アデルが射出されたが、その広大きにめまいを覚えそうだった。普段とは異なり、正面にはモニターしかない。広すぎる戦場が、空間知覚を否が応でも狂わせてくる。

「リーダーに反応が二機。これがハイバラさんと、戦闘している相手か？」

「いや。他にもいる」

追加されたストライカーの脚部スラスターで、反動を相殺しながらバズーカの引き金を引く。拡散弾で闇討ちを受け、スパークの断末魔と共に機能停止したのは、ビルゴだった。

「なんだ、こいつ！リーダーには写っていないぞ！」

「ステルス塗料だ。かなり高価だが、最近は市場に出回っている」

つまりは肉眼しか頼りにならないという、骨が折れる作業だ。

次なるビルゴがこちらを探知するより先に、その恰幅のいい図体を、頭上でアーチを描くように跳躍。がら空きの背中にバズーカの砲身をスウィングして叩き込む。圧壊するビルゴ。

残るはおそらく一機。アニメでも奴らは三機で一組だった。・

「とりあえず持つてきたはいいが、軽量化した『モワノー』にバズーカは相性が悪いか」
この状況ではデッドウェイトになるバズーカを放り投げ、アデルにシングルブレイドへ

手をかけさせた。

「アシハラ！後ろだ！」

ヒカワの悲鳴。

すぐさま180度回頭し、右脚のスラスターを掲げると、見えない何かが貫通して爆ぜた。すぐさま脚部を根本からパージして、余計なダメージを避ける。

カザミが素組みのガンブラで行っていた技術を、パーツ分割として設計に組み込んだ、俺流の学習というやつだった。

相手が攻撃の矛先を補正するよりも速くブレイドを抜刀する。間に合う。

いつぞやのメツサーラ戦で思い出した感覚でもって、俺はビームキャノンを切断せしめた。

「よく片脚で踏み込めたな……」

「知らんのか。あんなものは飾りだ」

アデルはビルゴの首元に刃をねじ入れて完全に沈黙させると、全方位を索敵する。

「どうやら、今の一機でビルゴは打ち止めらしい。」

「ただし、ビルゴに限った話だが。」

「なるほど。そういうセレクトもありか」

俺は機影を正面に発見した。これもレーダーにはないということは、装甲表面に同じステルス塗膜が張られているらしい。

猛禽類のように鋭利なシルエットに、青い機体色。それに対照的に、赤熱化する鞭であるヒートロッドを所持していた。まるでサーカスで猛獣を従えるように、ロッドをしながらせている。

その機体をヒカワは知らなかったらしく、曖昧な表情を浮かべている。

俺はあえて、その機体名を口にした。

「ガンダムアクエリアス」

「そんなガンダム、いたか？」

「ゲーム出典だからな。俺もこんな機体を使ってバトルをする物好きはあったことがない」

それでも、ビルゴとは相性は最高だろう。元々、あれらはモビルドールと呼ばれた自立稼働機体だ。

その中枢へウイルスを流し込むことで、モビルドールに電子戦を挑むのがガンダムアクエリアスであり、応用すればバトルシステムにも侵入するという『性能再現』も、理屈上では可能ということか。

まさしく技術スパイ向けといえる。

「アデルの脚を持って行つた攻撃も、システムをクラッキングしてこちらのセンサー系統を犯しているのか」

「そんな機体、どうやって倒すんだよ」

「いくらシステムに好き勝手できたとしても、殴れば壊せる。アーキタイプのバトルシステムじゃあるまいし、このガンダムは確実に存在しているんだ」

一応、こちらからずかずかと徒歩で乗り込んで、劇場のどこかで浮遊しているはずのアクエリアスを踏み壊すという最終手段もある。

ただし、実際のガンブラは15cmくらいのサイズで自在に飛び回るから、ゴキブリ退治のようにはいかないだろう。

やはり同じ土俵で叩くが一番であった。

アクエリアスの武装はロッドのみだろうが、こちらはそれよりリーチが短いブレイドだ。

バズーカを拾っても無意味だろう。初代ガンダムよろしく、絡み取られて破壊されることがオチだ。

さらに悪いことには、両脚部のバランスが不安定になっている。あくまでさっきのパーズは緊急措置であり、このまま戦闘を続けると、状況は不利になる一方だった。

「一瞬でいい。換装する時間があれば」

「じゃあ、私を作るわよ！」

突然、超高速で接近する機影。白百合の姫騎士のようなガンプラが、こちら目がけて突撃をかましていた。

「ハイバラさん!? 今までどこに? というか、ライブ中にどうやって通信を!」

「まだ公演が続いているのはこっちでも聞こえているぞ」

「問題ナツシング！」

先んじてショットランサーの穂先と、その先端に貫かれたままのビルゴがアクエリアスに、質量兵器として襲いかかった。

アクエリアスはヒートロッドでそれをいなして後退した。

ハイバラのカスタムガンプラが、アデルに並び立ってブイサインを寄越す。

ビギナ・ギナの腰部に、ステージ衣装をイメージしてか『Gのレコンギスタ』に登場するGアルケインのフルドレスを追加してあった。頭部にネイルシールを流用した、コスモスの花が意匠として転写されている。

登録名は『コスモ・ギナ』とある。

「シエリーたちに無理言つて、フリートークで時間稼いでもらっているの!あと五分はもたせるって!」

ガンダムアクエリアスの鞭が、二機をまとめて縛ろうと長く伸びる。

テグスや針金を仕込んで自在に操る、古くからの改造テクニクだった。

するとコスモ・ギナがくるりとその場でターン。フルドレスから放たれたレーザーがロッドを弾き飛ばした。

このチャンスは無駄にできない。アデルを全速後退させる。

俺は普段使用している『ノルマル』ウエアの脚部を、劇場めがけて渾身の力で放り投げた。

アデルは『モワノー』の残った片脚をも分離、自然落下するパーツが、床に激突して砕け散る寸前で合流する。

あらかじめ内部に入れておいたネオジウム磁石の手助けもあって、両脚のみを通常のウエアに換装する。

その間、コスモ・ギナは果敢にアクエリアスめがけてビームの華を斉射していた。しかしとうとうライフルにロッドが絡みつき、誘爆が起こった。

「くっ！」

「よく持ちこたえた。感謝する」

万全の状態に回復したアデルが、順手持ちをしたシングルブレイドで飛び掛かる。

伸びきった鞭を切断。さらにアクエリアスの空いた胴体をクリアグリーンの刃で刺突した。

なすすべもなくくずおれるガンダム。

今の一撃は致命であった。

仮に撃墜判定をクラッキングで無視して、強引に動かせば胴体は上下泣き別れになるだろう。ライフル破壊への対応が遅れたのか、右手指を数本喪失したコスモ・ギナが着地した。

「あんた、お礼なんて言えるのね」

「助力に感謝するくらいなの、人間の感情は残っている。俺を殺戮マシンか何かと間違えるな」

「ごめんごめん。こつちこそ、ありがとう。こんな不審者がいたなんて、さつきまで、ちつとも知らなかったわ」

ハイバラは技術スパイの存在は知らされていなかったようだ。

これもライブの邪魔をしにきた、不逞の輩程度にしか扱っていないだろう。それでいい。

人間、知らない方がよかったことなんて星の数ほどある。

「それにしても、よく他のメンバーが我儘を聞いてくれましたね」

「言ったでしょう。ガン普拉ビルダーじゃなくても、みんな仲間だもの。私はみんなを信頼しているし、みんなも私を信じてくれている。そういうものよ」

感激でもしたのか、ヒカワは目をわずかに潤ませていた。

俺たちの眼前、ガンブラの後方である舞台で、再び照明が七色のコントラストを明滅させはじめた。音楽も大音量で流れ、曲が再開されたらしい。コスモ・ギナはそちらへ向いた。

「それじゃ、私戻るわ。時間内に決着がついてよかった、よかった」

八基のスラスター・ノズルをなびかせて、コスモ・ギナは引き返していった。

確かに、想定より早く決着がついた。俺たちのこの戦闘はテストの一環とみなしてヒカワに報告させれば、スケジュールの前後はごまかせるだろう。

これで一件落着かという考えが頭をよぎったが、すぐさまそれを否定する。

最初に目視した謎の二つの反応を確認していない。あのアクエリアスの方がそれらより手前にいた以上、陽動にすぎないかもしれない。

「念のためだ。お前はテストのデータ管轄に戻れ」

「ああ、わかった。またイヤホンを繋ぐから音は聞こえないけど、どうせそばにいるんだから。何かまずいものがあつたら、すぐに叩いてでも教えるよ」

ヒカワは遅れを取り戻すようにキーボードに指を走らせはじめた。俺はアデルを一度こちらに帰還させて、直接シールドとライフルを持たせてやると再出撃させる。

両腕は『モワノー』でも、『ノルマル』の武装は互換性を残しているのだ。

わざわざ往復するのは億劫だが、仕方がない。

「やっ、ハッか」

劇場の最奥。今日になって封鎖された工事区画のほど近くだった。

関係者はみな舞台前に寄り集まっているので、不気味なほど人が少ない。俺のアデルだけが、ひっそりと飛行していた。

突然に閉めきられた区画なので、なにか不具合でも発生したのか、とヒカワは不思議がつっていたが、正式な手続きを通して認可された業者の話だから疑いの余地はないらしい。

「こいつは、まるで墓場だな。こっちがスパイを守る百人部隊だった、ということか」

床に敷かれたバトルユニット上に、無数のビルゴが積み重なっている。俺が倒した数よりはるかに多い。ざっと数えて数十機だ。

不気味なことに、そいつらはディフェンサーを展開した痕跡があるにもかかわらず、無残に風穴をあけて沈黙していた。なんらかの仕掛けでもって、防御機構を封殺されたと推測される。

その時、どこからか俺に通信が接続された。しかもサウンドオンリーだ。

訝しみながら名義を確認して、俺は怖気が走るのを感じた。

『ALEX』の文字が表示されていた。

『まさか、直掩と本命を先に仕留めるとは。運がいいではないか。ユージ』
「な、に」

その声を聴いたとき、鮮烈な光景が記憶の底から急速に浮上してきた。

眼に痛いほどのオレンジが、地平線の彼方をなめるように照らす。

茶髪に灰色の瞳の人物が手をかざしてその景色を眺めていたが、やがてこちらを向いて、にかりと歯を見せた。

約束をした相手。どうしても、会わなければ気が済まぬ人間の声だった。

「アレックス、なのか」

『そうだ。一年ぶりだな。ツガミ・ユウジ』

「ツガミ？俺は……いや、ボクは……ぐわっ!？」

コンソールに重い衝撃。茫然としている間に、不覚にも後ろに回り込まれていた。

アデルに蹴りを入れたのはパールホワイトのザクウオーリアだ。

その更に背後に、メタリックパープルのアカツキが両腕を組んで仁王立ちで構えている。
る。

間違いない。どちらかをアレックスが使っている。

「ちっ」

アデルは振り向き、ザクめがけてドツズライフルを連射する。白いザクには、大道芸

のような宙返りでライフルを回避された。

返しの一射は正確にコクピットに届くもので、かろうじてシールドでしのぐ。

正面モニターいっぱいにはザクのモノアイが広がった。

盾で下から挟むようなアッパーを繰り返すが、上半身を反らして避けられた拳句、それを右脚で蹴飛ばされる。

二機のガンプラが正面からがっぷり四つに組みあつた。高トルク同士のおつかり合いに、マニピレーターが悲鳴を上げる。

『どうしたユージ。随分余裕のない動きではないか』

「戯れるな。お前、俺の何を覚えていやがる！」

アデルは頭突きでザクを突き放した。

しかし、これも策だったと気付く。視界をふさいでいたザクが横にのいた瞬間、暁の背面に、無数の武装が曼荼羅のように待ち構えていた。

「やられる」

俺は反射的にアデルのシステムウィンドウを展開、そのひとつのパネルを拳で叩いていた。

封じられた記憶の扉に指がかかった気がした。

Side アレックス

語調は荒く、一人称も異なり、操るガンブラにもその面影はない。

しかし、オレは相対しているガンブラの操縦者は目当ての人間だとわかった。

こいつはツガミ・ユウジだ。

「Feu(撃て)」

暁 雷光の残弾は少ない。そのありつたけを、この黒いアデルめがけて雨あられと降り注がせる。爆発と煙の小宇宙が、バトルユニットの一区画を覆いつくした。

ザクが後退し、ビームライフルのエネルギーパックを交換している。

むせ返りそうなほどの煙は晴れて、オレは歓喜の声をあげた。

「おお、これを耐えたか！」

装甲のほとんどを削られ、内部に造形されたフレームがむき出しなつてもなお、腕をXの字に構えたアデルは健在だった。

オレとてさすがに驚く。万全のビルゴを単純火力で押しつぶした暁 雷光の砲撃。それを、特段の防御手段もないアデルで立っていられるとは、さすがの完成度である。

「いや、ただの完成度による頑強さではないな」

『……………これが、あの設計図の』

通信越しに、ぜえぜえと息を荒げるユウジの声がある。

アデルのフレームから、手負いの獣の表皮を流れる血液のように、プラフスキー粒子

がふつつつと溢れている。

きつとこれを浸透させ、一時的に機体性能を限界以上まで引き上げたのだ。

「『伝説のシステム』。見事な再現だ。ユージ」

『兄さん。例の技術スパイの身柄を抑えました。バトルに敗北後、ガンプラを回収しようとして地下から頭を出したのをオザワさんたちが取り押さえたようです』

ザクウォーリアが暁 雷光に接触回線でささやく。

名残惜しいが、今回の再会はこのまでのようだ。

「帰るぞ。アレクシア」

『はい』

「さらばだ。ユージ。あの女によろしくな」

アデルを見下ろしていた二機、暁 雷光とザクが踵を返すと、弱弱しくなっていたアデルの反応は、ゆっくりと途切れた。

限界を超えて、力尽きたのだろう。当然の結果だ。

ツガミ・ユウジはアレックス・メルフォールには勝てない。じゃんけんでグーはパーに勝てないような、世界の摂理である。

帰還した暁 雷光を自らの手で回収し、速やかに現場を離脱した。アレクシアもザクをケースにしまって、オレの前を歩いている。

すると、後から誰かが必死に走る靴音が耳に入った。

「アレックス！」

オレの背中に、ユージの声が投げかけられた。アレクシアがびくり、と身を跳ねさせるほどの気迫だ。オレは強引に妹の背を押して、よろめくのも構わずに歩かせる。

まだ、あいつと直接顔を合わせるわけにはいかない。

ムラサメの求めるすべてのものを、『神器』を集めるその日までは、ガンブラ越しの会話で我慢してもらおう。

S i d e コウイチ

「くそっ」

突然操縦席からアシハラが飛び出すと、舞台横の花道を突っ切って、入口近くの工事区画まで飛び出した。

僕は装置が思わぬバグを吐き出したのを修正するのに夢中だったので、その行動に仰天する。あそこまでアシハラが動揺しているのははじめて見た。

尋常ならざる事態が起こったに違いない。

間もなく、ひどく憔悴した様子であいつは帰ってきた。

「なにがあった。顔が真っ青だよ」

「……ガンダムアクエリアスが持ち去られていた。お前、見かけたか」

「なんだって。それじゃあ、スパイの存在を証明できない」

まさか動けなくなっていたガン普拉を、遅れてきた関係者が気づかず踏みつけてしまったのだろうか。

このライブの喧噪の中、繰り広げられているバトルも、高校生のアシハラが背後を駆け抜けた光景にもほとんどの観客が気づいていない。

プラスチックのかたまりを靴の裏で踏み抜いてしまっても、意識の外側であるとはありうる。

「ちくしょう。あの野郎……」

装置のないヒノキの床に、アシハラがへたりこむ。冷房はそれなりに効いているはずなのに、この数分でひどい汗をかいていた。右手には、帰路で拾ってきたのであろう、黒いアデルが握られている。

それは全身各所が裂断し、撃墜判定に届いていただろう損害範囲だった。

僕がほんの少し目を離している間に、新たに壮絶な戦いがあつたことが物語られている。

「アシハラ……」

僕とアシハラの間には流れる重い空気とは裏腹に、舞台できらびやかな音楽は流れ続けていた。

Side ユウジ

スパイの確保に失敗した翌日、最悪の事態が発生した。

とあるゴシップ雑誌が、独占スクープと題してハイバラの疑惑を取り上げたのだ。

その記事には、俺たちが入手したあの写真が堂々と貼り付けられていた。

今現在コスモスの事務所には問い合わせが殺到して回線がパンク。各メンバーもメディアの前から姿を消しており、審判員による連絡さえまともにとれない状態だとう。

「困ったなあ……警備部長はカンカンだったよ……」

「申し訳ありません。僕の失態です」

特務班長執務室の扉ごしに、ハカドさんとヒカワの会話がくぐもって届く。

よせばいいのにヒカワは責任を負うつもりで話を進めていた。

俺自身はというと、ハカドさんの命令で部屋の外に締め出されて、扉に背をあずけている。

こんな仕打ちをするということは、あの人は誰のせいであんな事態になったのかを薄々察しているのである。

俺がスパイを捕らえそこねたために、ハイバラの写真が相手の目論見通り漏洩したのだと。

俺がアレックスに敗北していなければ。

過去の記憶の干渉に気分を乱されていなければ。

さまさまな「もしも」が脳裏に浮かんで消える。

「事件の報告を怠り、発生を未然に防げなかった。警備部長は特務の解体を本部に進言している」

「そんな！」

「無論。そんな申請は簡単には通らない。犯罪の解決はできても、発生を防ぐことができわめて難しいのは警備部だって身をもって知っているはずだ」

「僕の辞表だけでは済みませんか？」

「私が受理しないからねえ。とにかく、特務がなんとかして汚名……返上できるような方法を他に探すしかないよ」

俺は上着のポケットから携帯電話を取り出した。

ディスプレイには『師匠』の文字がある。文字通り、俺のガンプラ造形術の師の電話番号だ。

あの人は公式審判員だった。それもかなりの上位の役職の。呼び出しボタンを押せば、数日以内に事態は好転するだろう。

「……」

ボタンの上ののせた親指がとまる。

この行為は勤による独断専行どころではない。権力の威を借りて自分の失態をぬぐおうとするなど、その警備部長様とやらも卒倒しそうな外道中の外道だ。

仮にも公式審判員からライセンスを持たされている人間が取つていい手段なのかと迷いはある。

それでも、ハイバラはヒカワ・コウイチと共闘するための踏ん切りをつけさせてくれた相手だ。同じビルドファイターの少女を救うためには四の五の言っている場合ではない。

「よし」

深呼吸や決心をつけるよりも先に手が動く。通話中を示すために画面が暗転し、俺は電話を耳元に当てた。心臓が早鐘を打ち、トラウマを想起したときの発作が出かかる。喉をこみあげる吐き気とめまいだ。

それをこらえて俺は廊下に立ち尽くした。

数回コール音が鳴った後、相手が出た。声もなく、ただ沈黙だけがスピーカーの向こう側に広がっている。

俺は、一年ぶりに挨拶をした。

「お久しぶりです。俺のこと、覚えていらつしやいますか。師匠」

Parts. 05 「最興フアイター」

side コウイチ

時刻は深夜。部屋の南西側に取り付けられた窓から、月が真円を描いているのがわかる。柔らかな光のカーテンが、僕の作業机全体に癒しを投げかけていた。

「また別の形式の暗号配列か。解除キーから確定させなきゃ」

アイドルグループ『コスモス』の件における沙汰を待つ間、僕は一枚のSDカードの分析を続けていた。それは『コスモス』の工作ルームでガンプラの足の裏から発見された代物であり、その事件の鍵を握った写真が封印されていたものであった。

しかし、実の所、こいつが腹の内に抱える秘密はそれだけではないらしい。

「これで、どうだ？」

しびれてきた人差し指で、ENTERキーを叩くと、パソコンの画面を覆っていた情報のヴェールが、また一枚引き剥がされる。

数瞬だけ、その真実が垣間見えたかと思いきや、新たな幕の内に消えていく。

「今日もダメか。そろそろ、寝ようかな……」

僕は全身にひどい疲労を感じて、机に突っ伏した。睡魔がかすむ視界の中で、パソコ

ン画面のデジタル時計が、ちょうど二時に切り替わった。

するとどうだろう。これまでの苦勞が嘘のように、数字列が書き換えられていく。「なんだ!？」

技術スパイ、という言葉が頭をよぎり、僕は画面にかじりつく。幸か不幸か、それは外部からのクラッキングではなく、正式なプログラムに従った挙動であった。

「時限式で開示されるように、タイマーが設定されていたのか」

しかし、これはそれ以前に誰かに見つけてもらわなければ水泡と化す。このカードの作成者は、いつ、どこで誰に読みとられることを想定したというだろう。

アシハラですら、このカードに極秘写真を封入した下手人に関してはおわからない、と白状していた。僕には確かに、自分がとんでもない爆弾のスイッチを握らされているよな、寒気を感じた。

『極秘 第八回ガン普拉バトル選手権ジュニアカップにおける『神器』の運用記録』
開封されたのは、そう名付けられた映像のようであった。

最初にカメラが捉えるのは、昼間の高層ビル街である。人間も鳥もない無人の街。その異様さから、僕はこれがプラフスキー粒子による疑似空間であるとわかった。

そんな摩天楼へ、突如一条の光が貫通する。最も高いビルが中央から破断され、溶け落ちていった。動画は無音で、ただ崩落する建造物と、煌々と燃えさかる炎だけが淡々

と映写される。

その直下、焰へくべられる瓦礫のさなかから、銀色のシルエットが、ぬらり、と姿を現した。

曲面を主体とする有機的なデザインの装甲で全身を覆い、身の丈ほどに張り出した肩は、ナイチンゲールやキュベレイといった、ネオ・ジオンの系譜のものに近い。

背中には巨大な増槽と、それを包み込むように、七色に輝く放熱版らしきパーツが孔雀の羽じみて下がっている。睡蓮の華を思わせるヘッドギアの奥に収まるのは、スリットのないZガンダムと同様のフェイスパーツだ。

「ガンダム……」

僕はその呼称に伴われる伝説の迫力を、威容の重みをはじめて実感していた。

まるで博物館に収蔵される神仏像の如き美しさである。現代の人間がこれを市販のプラモデルから生み出したとは到底思えない。

それでも、胸部に刻まれたアルファベットのAの意匠から、辛うじて『ガンダムAG E-1』がベースとわかった。

カメラが勢いよく右へ振られると、そこには恐竜、あるいは怪獣を模した機体、ダナジンがあった。こちらは三つ首になって全身がスモークグレーに変更されている。

ダナジンが三条のビームをそれぞれの頭部から吐き出す。それを回避も防御もせず

に、ガンダムは装甲の表面だけではじいて見せた。

Iフィールドのような防御機構ではなく、間違いなくアーマーの表面で粒子が霧散している。

次なる一撃も、その次も。灰色の竜の吐息はすべて徒労と化した。

ガンダムは両腕を組み、なおその場から動こうとしない。あまりの性能差、実力差を悟ったのか、ダナジンは上空へ飛ぶ。

ガンダムはゆるやかに頭部を巡らせると、右腕を天へ掲げた。

背中ユニットが切り離されると、同心円状に展開、さながら曼荼羅の様相を呈して一際強く輝いた。

放熱板と思しきパーツは、実際にはオールレンジ攻撃兵装『ファンネル』だったのだ。ファンネルでひし形のゲートを形成したガンダムは、その狭間へ向けて跳躍、飛翔する。

その外見に見合わず、おそろしく速い。

まるで蒼天を引き裂いて走る雷だ。

「すいん」

並走する流星は激しく接触を繰り返し、とうとうダナジンが墜落してくる。

頭から落下したせいで、首根っこから火花が散っていた。

遅れて着地したガンダムは左の掌を鋭く伸ばし、竜の腹を指した。右手は腰に添えられて、脚は前後に揃えられている。

最後の抵抗とばかりに駆け寄るダナジンめがけて、再びゲートが展開される。そして円形に逆立つ七色の翼。

次の瞬間にはダナジンは上下に両断され、ガンダムの残心と揺らめく光刃だけがあった。

僕の目には、ガンダムの装甲の隙間から、淡い粒子の輝きが漏れ出すのが映っている。

『BATTLE ENDED』

プラフスキーの幻想に、機械的に表示される勝敗決着の合図が示された。

背景がかき消えて、銀色のガンダムを操縦していたファイターの姿が露出される。

驚くべきことに、それはまだ中学生くらいであろう少年だった。

茶髪に灰色の瞳。いっぺんの曇りもない自信に満ちて輝く顔には覚えがある。

ガンプラバトル自警団に所属するファイター、アレックス・メルフォールだ。映像の中の彼は幼いながらも、既にその風格は備わっていたらしい。

そこへもう一人が駆け寄ると、首もとに勢いよく飛びついた。

肩までの黒髪に、プラフスキー粒子と同じセルリアンブルーのヘアピンを通した子供だった。

満面の笑みで、アレックスの頬に自分の頬をすり付けている。

その日だまりのような笑顔の可憐さと、華奢な体型から少女と思われたが、アレックスの口元はこう動いていた。

「ユ」「」「ジ」

その顔にあるのは明確な親愛だった。あのアレックスからは想像もできなかった、柔らかな顔つきである。映像はそこでぶつり、と途切れた。

僕は画面から距離を取り、眉間を抑えて一息つく。どこから検証すればいいのか検討もつかない。とんでもないものを、観てしまった確信がある。

「彼が、ツガミ・ユウジか」

ムラサメ所属の少女、アレクシアさんは、彼女の兄であるアレックス・メルフォールがツガミ・ユウジという人物と親友同士だったと語った。

穏やかな性格により、アレックスの暴走を抑えていた、とも。

彼がその人物ならば、なるほど、あの尊大な青年が慈しみをこめて接するのも頷ける。そして恐ろしいことに、僕は初めて見たはずの、ツガミ・ユウジの顔立ちに覚えがあった。

全身にみなぎる活力の有無や、態度に違いをのぞけば、彼はアシハラ・ユウジによく似ている。

「まさか、本当に同一人物なのか？」

アシハラの家族構成に兄弟の記載はない。他人の空似にしてはシルエツトが近すぎる。

そして先入観の交った状態で記憶を顧みれば、あいつもフランスという国への繋がりをにおわせていたのであった。

たとえばカザミさんとの製作教室で作り上げたウェア『モワノー』である。

原典の『スパロー』をフランス語に変換したネーミングだが『ガンダムAGE』にフランス語による命名系統はない。

当時の僕だって、なんとはなしに『ムラサメ』を連想して、あいつに尋ねようと試みていたはずだ。それは不運にも現場の混乱で結局聞きそびれていたのである。

「そもそも、神器って一体なんだ……どうしてこの映像が、ハイバラさんの写真をリークしたメモリーチップに封印されているんだ……」

前者の問いはまだ、論理的な推測の余地がある。

『神器の運用記録』とは、あのガンプラの戦闘ビデオそのものを指すのだろう。

神々しい偉容を誇っていた。祭事具と形容されるのはわからないでもない。

後者は本当に意味不明である。

技術協力の任務に駆り出されるまで、アシハラはアイドルにまったく興味がなかつ

た。

ここまでコスモスの事務所にやってくる機会のない男のメモリーを、ライブ会場でもないプライベートな空間に封印する理由がわからない。

そんな芸当は、アシハラが特務ファイターとしてあの日あの場所にいることを知っている、僕たちの身内でなければ不可能である。

「ありえない。どうしてこんな回りくどいことを」

一度見ただけではすべてが明瞭にならない。

映像のコマ単位の詳細な解析と、そして何より、アシハラにこれを見せて確認をとる必要性がある。

そう考えた矢先、僕は私用のスマートフォンにメールが入っていることに気づいた。

封筒のアイコンの右上に、着信を報せる印が点滅している。

どうやら動画に夢中で対応しそこねたらしい。

「げっ」

送信主を確認すると、僕は自分の顔から血の気が引いていくのを感じた。

それは、この忙しい時に一番遭遇したくない相手であった。

side アレックス

我々の知る「ツガミ・ユウジ」より、あの男は見違えるような変化を遂げていた。時

間稼ぎで手を抜いていたとはいえ、アレクシアのザクと渡り合い、暁 雷光の弾幕を耐えきってみせたのだ。

「しかし、目的のものを逃してしまつては特務の名折れよなあ？」

アイドルグループ『コスモス』における技術スパイの男は、ホテルの一室を使用した尋問室でアレクシアと向かい合つてソファアに座つている。目つきは鋭く、頬に傷跡までつけている、いかにも小悪党といった人相だ。

名前をハンダというらしいが、それも本名かは怪しい。

依頼さえあれば全国を飛び回つて情報入手、売りつけるフリーランスであり、『コスモス』の一件では、事務所内の誰かに頼まれているはずだ。それを吐かせるのみならず、オレの予想では、多くのガンブラマフィアの情報を得意先として保持しているだろう。アレクシアが、技術スパイ相手に、子供をあやすように言葉を紡ぐ。

「さて」

「……」

「ハンダさん、震えていては何も始まりませんよ」

肘掛けの部分に座り、横目で推移を眺めているが、いつまでもこんな調子である。

ハンダは捕まえられた当初こそ、こちらをにらみつけるだけの気力があつたが、今ではかけられた手錠をしきりにいじり、齒の根が合わずにガチガチと音を立てている。

アレクシアによほど怯えているらしい。

「あなたがおっしゃった場所なのですが、すべてダミーの施設、企業でした。そろそろ、まともな情報をくださいますか？」

「本当にそこで取引していたんだ！」

「では『コスモス』の所属する事務所は本当に、あなたの活動に便乗しただけか。それだけでもつきりさせましょう」

「知らない！サトウという男が協力をすると行ってきたんだ。それより上に誰かがいることも匂わせたような話し口だったが、それを詮索しないのは俺のポリシーなんだよ！」

「そうですか」

「もうこれで全部だ！こいつを外せ！」

「口の利き方に気をつけてください。私が女である以上、あなたとの単純な力比べなら屈服させられるかもしれません、今は立場が逆です」

部下の一人が、アレクシアの肘おきに置かれたトレイから、一本の注射器を手に取り、彼に近づく。その先端から透明な液体が玉を作り出すのを目にして、ハンダは半ば錯乱しはじめた。

その中身が自分の肉体に危害を及ぼすと、裏の世界の経験から悟ったのか。

「なんだ、それは！俺に何をやる気だ！」

「大丈夫ですよ。そこまで危険な代物はムラサメにはありませんから。ちよつと口が軽くなるとか、そういう類です」

アレクシアがにこり、と聖母の微笑みをみせるが、あちらはたまつたものではないらしい。にわかには暴れ出すのを、男三人がかりでようやく押さえ込む。そこに注射器を持つた部下がむりやり腕をはだけさせて針を静脈へ入れた。

シリンダー内の液体がすべてハンダの体内に吸い込まれると、奴は脱力してソファーにもたれかかった。

シヨックで失神したようである。尋問室に静寂が戻り、妹がため息をつく。

オレと揃いの茶髪がふわり、と揺れる。

「本当にこういうことは気が進まないんですが……」

「よく言う。今の注射はオレたち以外に打ち込んでみただの水だ」

「それは、そうですか」

つくづく妹は誰にでも甘い、と思う。たとえ犯罪者相手に演じる虚構の拷問劇だろうと、彼女は非人道的な行為に心を痛めるし、手を差し伸べてしまう。

どちらかというと審判員むきの精神性なのだ。

だが、オレもあいつもメルフォーラ家の人間だ。ムラサメ創設者であるオレたちの祖

父の、血の呪縛からは逃れられない。

「アレクサンダー様。彼の拠点でこんなメールが復元できました」
「うむ」

ハンダが根拠地としていた場所を捜査していたオザワが、オレにプリントアウトした文面を手渡ししてきた。主が帰還しないまま数日、コンピュータがデータを自動消去しようとしていた所を、すんでの所でひきあげたものである。

実際デリートは半ば開始されていたようで、一部に歯抜けがあるが、そこは推測であることを明記しながら補足がなされている。

「奴から没収した、クラッキング用ガンブラ『ガンダムアクエリアス』が役に立ったな」
「まさか自分のガンブラにウイルスを流し込まれるとは想定していなかったらしく、あっさりプロテクトをかいぐりしました」

猛禽類を思わせるシルエットと、ほとんど差し色のないブルーの機体色を特色とする、ガンダムアクエリアス。

その出自は『ガンダムW』世界と設定されながら、ゲーム出典という特殊な出自のガンダムである。

ハンダが仕事道具として所持していたガンブラで、原典性能よりさらに、ネットワーク中にウイルスを流し込むことに性能を特化させてあった。

そのコアユニットにため込まれたウィルスはプラフスキー粒子なしでも、ハードに直結してしまえば効果がある程強力なもので、ハンダ自身もかなり自信を持っていたらしい。

「日付は二週間前。依頼主であるガンプラマファイアからのものです」

「組織名は？」

「事前調査チームによると、粒子復活以降に勢力を拡大させている『ドラド』という組織である、と」

「あれか。以前、本国で名を耳にした」

オレは添付された資料に目を通す。

ガンプラマファイアの中では新参であるこの組織は、違法操縦や賭博バトル、不正技術を主に仕切り、その特色として『ニュージェネレーション』の積極的な利用が挙げられていた。

『ニュージェネレーション』とは、第七回世界大会以降に頭角を現した新世代ビルドファイターたちのことである。

すなわち、プラフスキー粒子によるガンプラバトルに幼少期からなじみ、粒子の特性を肌で理解したビルドファイターの新型（ニュータイプ）。

まだ子供の多い彼らの技術を、早期に利用しはじめたマファイアの一つが、この『ドラ

ド』だった。

今回のハンダとの取引もその一環だろう。

粒子発生装置とファイターの衣服を密接にリンクさせる技術は、『ドラド』の狙う、粒子をなじませた世代にぴったりだ。

「……オレの読みも甘かったな」

「と申しますと？」

「ど」ぞの名も知れぬ雑誌が出した、この記事の話だ」

オレは部下がスクラップした誌面をひらひらと振った。

内容は快進撃を続けるアイドルが、技術スパイという犯罪者に情報を横流ししている疑惑があった、とセンサーシヨナルに書き立てている。

内容は薄く、ほとんどが憶測と誰とも知らぬ『関係者の証言』で組み立てられた紙くず同然の記事だ。それでも日本には一億人以上の人間がいて、その中にはこうした噂を鵜呑みにし、歪んだ風評を広める人間がどこかには現れる。

あのアイドルグループの評価を失墜させるといふ何者かの計画は、ひとまずの成功を迎えてしまったのである。

アレクシアが膝をそろえて、身体ごとこちらへ向き直った。

「この記事を書かせたのは、ハンダさんではないですよね？」

「メディアアとの接触記録はなかったのだろうか？そもそも自分の活動をあえて悟らせるなぞ愚考だ。写真を見た時点で、スパイも巻き添えをくつっている側とは簡単に推測できた」

黒幕として残される線はマフィア『ドラド』か第三勢力である。

スパイが音信不通になり『ドラド』は不審に思っているはずだ。このタイミングで自分たちにたどり着かれかねない糸を放るとも考えづらい。つまり第三勢力が犯人と考えるのが自然だった。

ハイバラ・キミコ、あるいは『コスモス』の信頼を失墜させることに執念を燃やし、その目的のためにあらゆる勢力を巻き込んだ複雑な事件を引き起こすとは、なかなか面白い相手だ。

「単なるアンチにしては手が込んでいるし、消去法で考えれば身内による犯行か」

「つまり私が予測した黒幕は『コスモス』の内部にまだ潜んでいると？」

「今頃は祝杯でもあげているか。もしくはマフィアと縁を切つて高飛びの準備をしているかもなあ？」

「ひどい……」

アレクシアがまた薄暗い炎を瞳にともらせる。

この一件は妹の神経にひどく障るようで、強い執着をたびたび表していた。

残念ながら、今の『ムラサメ』が取るべき行動の前には邪魔な感傷である。

「今回の事件は公には決着がついている。仮に黒幕がドジを踏むとしたら、それはオレたちの前ではない」

「公式審判員、ですか」

「そうだ。今のオレたちはそれよりも、優先すべき事項がある」

オレは読み終えた紙束を妹に投げてよこした。

回収されたメールによると、彼らは設計図をテストする場所を決定したというやり取りを交わしていた。

今回の場合、粒子発生装置という大掛かりなものを複製してテストする特質上、測定や設置に必要な各種機器の運び込みなど、多数の人的資源を要するだろう。

そこが本来のドラドの活動拠点でないにしろ、収穫は大きくなる。

我らムラサメが自警団の任務の陰で求めるもの、『神器』の手がかりもあるに違いない。

文中で指示された拠点は、区画整理で取り残されたビル街の隅で、細々と老朽化していくビルだった。

「所有者名はダミー会社と同じか、確率は50・50だな」

「これを建築した個人運営の会社が業績不良で倒産。土地と建物を借地として手放した

ようです」

「そこで、五階だけを輸入業者の名前をかたつて使用している、か。人間の痕跡は？」
「五分前に派遣した構成員から連絡があり、ビルで動く人影を複数名確認したと。荷物をまとめているようにも見受けられる、との補足です」

「こちらの動きが既に知られているなら時間は少ない。オザワ、車を出せ。アレクシア！出かけるぞ！」

「は、はい！」

オレは妹を呼びつけると暁 雷光の入ったケースを掴む。妹も部下が差し出したザクのケースを手にとってソファァーから立ち上がった。

相手はガンプラマファイアだが、その場で動いてしまえば辿ることができない。

ムラサメの刃からは逃れられない。

side コウイチ

僕は顔面蒼白のまま、廊下を歩いていった。

すれ違う同僚たちがぎよつとした顔で道を空けてくれるが、それに礼を言う余裕もない。
い。

メールを見てからも映像の検証を続けていて、ろくに眠れていないのだ。

加えて今現在、ハカドさんから呼び出しを受けている。

いよいよ処分が決まったらしい。

減給か、ヤジマに送り返されるか、それとも首が飛ぶか。

雑誌の記事を見た日には覚悟こそ決まっていたが、いざとなると恐ろしいものだ。

手の震えが止まらない。

「ハカドさん。ヒカワ・コウイチです」

「入ってください」

ノックすると、いつもの声で許可の返事がある。

「失礼します」

おそるおそるノブを回し、執務室へ侵入する。

まっさき目に入ったのは、執務室の机上で両手を三角形に組み、口元を隠したハカドさんだった。普段ならば他の幹部を射すくめるほどの鷹の目が、今日は濁ったまま一点を漂っている。

その先を辿ると、来客用のソファアールにちんまりと誰かが収まっている。

桜色の和装に身を包むおばあさんだ。

その人物が何者か思い当たった途端、僕の呼吸が一拍停止した。

「な、ナガイ本部警備部長……！」

「ほほ。おぬしか。ユウジと無茶をやらかしたエンジニアというのは」

この方は、ナガイ・トウコ女史という。

人なつこそうなしわくちやの笑みに、頭頂部で団子に結った白髪。

いかにも駄菓子屋などにいそうな風貌であるが、れっきとしたガン普拉バトル誕生の立役者の一人だ。

現在は静岡にある国際ガン普拉バトル公式審判員本部の、警備部長というポジションにいられた。

階級の隔たりはハカドさんやカザミさんどころではない、『ガン普拉警察』としての審判員の、事実上のトップだ。

僕はハカドさんに問い詰める。

「ひよっとして、今回の騒動、そんなにまずかったですか」

「……うーん」

『特務』の生みの親でしょう！世界大会まであと二週間を切っているのに、こんなところまでいらつしやるなんて」

「ふいふい」

ナガイさんは杖に顎を乗せて微笑んでいる。

当事者であるにも関わらず、僕はひどく場違いな雰囲気に取り込まれた感覚に陥った。

「まあヒカワくん。座りたまえ」

ハカドさんがおだやかに、彼女の隣を手で示す。

よりにもよつてなぜそこなのか。

僕はごくりとツバを飲み込み、膝から砕けそうになるのを必死に抑えつつ腰を下ろした。

一挙手一投足が、彼女の三日月に細められた視線の奥から、品定めされている気分になつて落ち着かない。

「今日はどうしてこちらに？」

「何を言つちよる。お主らが呼んだのじやろう。なあ？ハカド」

「ええ」

「……あの、さっぱり覚えがないのですが」

ナガイさんは心外そうに口をすぼめてみせる。

そんな顔をされても僕は困る。

執務室デスクに座る上司を見やると、彼もナガイさんの奥ゆかしさに辟易した様子で、自分の額をトントンと人差し指で叩いた。

「ナガイさんは本部の警備部長以外に、もう一つ肩書きを持っていられる。関東のガンプラ造形術のひとつ、『ガンプラ心剣流』という流派の創始者であらせられるのだ」

「ガン普拉、心剣流？」

そのときになって、アシハラがハイバラさんと交わっていた思い出話がよみがえる。たしか彼は関東のマイナーな造形術に師事していたと語った。

そして同時に『剣』という言葉から、あいつのアデルが繰り出した居合斬りが連想される。

僕の顔色を見て、ナガイさんが穏やかに微笑む。

まるでアシハラがそうするように、卓越した観察眼で僕の考えている内容を読み取っているかのようだった。

「ようやくと気づいたかの」

「アシハラが言っていた『師匠』ってもしかして」

「そうじゃ。お主が組んでいる特務ファイターのアシハラ・ユウジは、わしの愛弟子よ」
ナガイ女史は、着物の懐から一つのニツパーを取り出す。

それはアシハラが愛用しているものと同じ、緑色の握りのニツパーであった。

しいて違う点を挙げるとすれば、アシハラはニツパーはグリップだけがひどく汚れていたのに対し、ナガイさんのものにはシミひとつない代わりに色が褪せていた。

酷使による損耗というより、グリップの材質の経年劣化によるようだ。

「久しぶりに電話をしてくれたかと思えば、特務をどうにか存続できないかと聞いてき

てな」

「あのアシハラが？」

「あやつは結構義理堅いぞ」

自分で問を返しておいて妙な話だが、アシハラがそんな行動をとったことに、不思議と違和感はなかった。

今回の一件や、それ以前のパーツハンター事件なども顧みれば、その理由はすぐに出た。

アシハラの本質はかなりのお人よしなのだ。

僕が長いこと彼の印象を決めつけて接していたせいで認識がまだ追い付いていないだけで、少なくとも協力して戦うことができる相手ではあるということを、すっかり失念していた。

「このニツパーにしても長野の山奥で鍛えたものでな……」

「警備部長。あまりはぐらかさないでいただきたい。彼から頼まれた内容は、そうではないでしょう？」

彼女は喜々として話を脱線させるので、ハカドさんが諫める。

するとナガイさんの顔から笑みが消えた。

ビデオを早回しにしたような、ほんの一瞬の出来事。瞬きの合間に、温和なおばあさ

んから公式審判員の長の顔になった。

「僕は自分がこの部屋に呼び出された経緯をすぐに思い出させられた。背中に氷を放り込まれた心地に陥った。」

「そうだな。時間も無い。まずはこの若造の知識のほどを確認せねば」

「知識、ですか」

「単刀直入に聞こう。おぬしは『ムラサメ』についてどの程度把握している？」

その名前を思い出すのに、少し時間が必要だった。

アレックスとアレクシアさんの兄妹が所属する、フランス発祥のガン普拉バトルの自警団だ。まだ活動をはじめたばかりで、少なくとも現在まで、表立って公式審判員と衝突する事例は聞いたことがなかった。

その旨を正直に話すと、ナガイさんは心底残念そうにかぶりを振った。

「甘すぎる。アレックス本人と顔を合わせておきながらこれほど認識に齟齬があるとは。ユウジはどれだけ口を噤んできたのじゃ」

「あの、どういう意味ですか」

「おぬしは『ムラサメ』をこの地域の片隅でうごめく、カルト宗教の親戚のように思っておらんか？」

「違うんですか？」

「まったく違うー！」

ナガイさんの小さな上半身がずいと乗り出し、僕に迫る。

「あの組織の実情は、世界の各国に支部を置き、まるでカビの根のように我らの領域を犯す大規模勢力じゃ」

「つい先日まで警備部長直々に北米まで出動し、ムラサメの取り締まりを進めておられたそうだ」

「警備部長、直々に」

「そうじゃ」

アレックス・メルフォールの尊大な態度を想起する。

昨晚の映像にも映った、茶髪に灰色の瞳の少年。子供の頃から王者の風格を備えていた。

確かにあれは単なる小規模自治組織のメンバーにしては、自信過剰にすぎた。

アシハラと同年代の青年がああも増長するには、それだけの環境があつたというにはかならない。フードコートでアレクシアさんに手玉にとられた時も同様だ。

あの兄妹の得体の知れなさは、誰よりも僕自身が感じ取っていたはずだ。

それでも本部に報告を怠っていたのは、ここ数日の忙しさだけでは言い訳がつかないか。

ひとえに僕の油断が生んだ行為である。

どうしてアシハラライセンス製作のときに、報告を渋ったのだろう。

頭を抱えた。

「ムラサメの自警団としての機能は、人種問題も絡むかの国では一定の支持を集めていた。北米支部だけでは最早手に負えなかつた」

「米国のムラサメはどうなつたんですか」

「わしが帰つてきた、というのはそのうちのことよ。マフィアとの闘争にかこつけて蹴散らしてやったわ」

彼女は簡単に言つてのけるが、生半可な対策では成し遂げられない。

国家の後押しがあり、集団が形成する数の圧力を盾にして、はじめて権力が発生するのが警察機関である。そんな、一個人が状況の趨勢を左右し得るなど、今時フィクションの中でも時代遅れなネタだ。

「現地の審判員も大いに手助けをしてくれた。まあ、わしのような老いぼれが特效薬になる癌細胞もあるという訳じゃ」

「では警備部長が出動なされば日本のムラサメも」

「そう簡単にはいかぬのが人の世よ」

淡い期待は即座に一刀両断された。

彼女は節くれ立った木製の杖を、骨の浮いた小さな掌の間でくると弄びながら答えている。その手つきには震え一つなく、肉体の衰えなど程遠くみえた。

「なにしろアレックスがいる」

「アレックス・メルフォール、ですね」

「然り。奴はムラサメの創始者、メルフォール一族の後継者じゃ。受けた教育、天授の才能を併せ、その能力を思うままに振るつておる」

「そりゃあ、あんなに偉そうだよなあ……」

そびえる壁の高さに嘆息をもらす。

警備部長は杖を停め、床を一度こつんと叩いた。その音で僕の全神経が彼女の言葉へと収束する。

「しかし『ムラサメ』が行うガン普拉バトルにおける自警団活動は、手段にすぎない。奴らが各国で行っている真の目的は、『神器』と呼ばれるアイテムの収集じゃ」
『神器』。

その単語に僕は身震いを覚える。

昨晚、洪水と押し寄せた謎のひとつが、さつそく解き明かされようとしていた。

side アレックス

例によってリズムジンは目立つので、オレたちは通常の乗用車で目標まで移動してい

た。

運転しているオザワに代わり、アレクシアが現地の部下からインカムで報告を受けている。まだ中に人間はいるらしい。

オレは後部座席で突入方法を考えていた。

「ビルの外からの撮影では限界があるか」

「建物の中に入らせますか？」

「銃器を所持していると面倒だ。不要な犠牲を払う。こちらの存在には、オレたちの突入まで気取られるな」

「では、引き続き出入りしている人間だけを観察するように伝えます」

「そうしろ」

「アレクサンダー様、アレクシア様。到着しました」

目標の付近にある路地の一つにオザワは車を停車させた。

両側を高層ビルに挟まれ、日光の恩恵がほとんどない、薄暗い場所だ。

その路地を抜け、通りを二つ超えれば目当てのビルの裏側に出る。

妹は情報収集に使う端末もガンプラと共に引っ提げていた。

本来こういう時の分析を行うはずのオザワは、不測の事態に備えて車内待機を命じてある。

「さて、偵察している連中にドローンで内部を観測させろ」

「ついさつき命令を出したところで、その、気づかれますよ?」

「さつきはさつきだ。今はオレがいる」

頷いたアレクシアはインカムで部下にその内容を伝えた。

表通りを挟んだ向こう側で、部下がドローンを飛ばしたのがわかった。

プロペラを四枚備えたドローンの下部には高精度のカメラと、ガスボンベやロボットアームなど、荷重搭載量ギリギリまで器具が搭載されている。

技術の進歩はガンプラバトルだけではない。

「内部の映像が来ます」

「見せろ」

妹の端末に、ドローンが窓からのぞき見た映像が送信される。

地上からは人影程度しか確認できなかったのが、これならすべて見通せる。

部屋の作り自体は簡素だ。

バトルユニットに配線が直結され、部屋の壁に接して配置された大型演算装置にそれが伸びている。

事前調査と何も差異はない、はずだった。

「なんだ、この男は」

部屋の中央に一人の若い男が立っている。

逆立てて脱色した金髪に、黒いサングラス、紅白のアロハシャツに半ズボンという出で立ちだ。この温帯気候の島国に、南国むけの恰好とは体温調節中枢が壊れているに違いない。

そんな男が、こちらに向かって白い歯を見せて笑い、しきりにブイサインを送っている。

「どなたでしょう。事前調査ではこんなマフィアの方はいなかったと思うのですが」

「……………オレとしたことが、しくじった」

「兄さん？」

推測通りなら、あの男がこの場にいるのは喜ばしくない。

オレは状況の飲み込めない妹を置いて、ビルの内部に入り込んだ。

骨組みすら露出した一階をすり抜け、エレベーターホールにたどり着く。

エレベーターの機能は生きているが、そのコンテナは最上階で停止していた。

「ええい、時間の浪費だ」

オレはらせん状の階段を滞りなく五階まで上り詰めた。

左右には見向きもせず窓際の実験室まで踏み込むと、金属製のドアを片足で蹴り開けた。

場違いな雰囲気の中の男はまだドローンに向かつて手を振り、飛び跳ねていたが、オレの侵入に気づいて振り返った。

大きく左右に腕を広げ、まるで歓迎するような素振りである。

その口から流暢なフランス語がこぼれ出た。

「おうおう、落ち着けよアレックス。こっちの調査じゃ、お前は冷静沈着との評判じゃねえか」

「サングラスでロクに見えていないのか？オレは冷静だ」

この程度で息は乱さない。だとすれば、顔に苛立ちが浮かんでいるのだろう。

そして相手はフランス語のアクセントからして生粋の日本人だ。

ついでに英語圏での生活もそれなりにあるかもしれない。eの発音だけiと混じっている。

「やはり部下からの口頭のみ報告は信用できん。撤回と押収の区別もつかんとは」

「日本語うまいねエ。じゃあ、オレちゃんも母国語で話すとして」

わざとらしく咳払いをして、その男は日本語で語り始めた。

「オレちゃんの仲間は別室で待機してくれている。てめえらムラサメに勘づかれないように」

「その割には挑発的な言動だ。貴様自身は指揮官向きの人間ではない。誰の差し金だ」

「てめえの裏をかける人間なんて限られるさね。オレちゃんじゃムリムリ」
「兄さん」

ようやくアレクシアが追いついてきた。

それを見た軽薄な男は、ひゆう、と口笛を吹く。明らかに外見で気に入った様子である。

妹の方は、こういうタイプの人間は苦手で、申し訳程度に上げた口角がやや引きつっていた

「双子とは聞いていたが、まあ美人だこった。勢力が同じなら声かけてたぜ」

「兄さん、この人は」

「公式審判員だ。米国から派遣されたのだろう」

「え!？」

「ふふふ……その通り!」

アレクシアが目を見開くと、男は含み笑いをしてから大声を張り上げて人差し指をこちらに突きつけた。妹だけが、その勢いにひるんでいる。

「オレちゃんこそは国際ガンプラバトル公式審判員北米第5支部所属、キノ・シユン! てめえらムラサメを追っかけて、はるばる海を渡ってきたのサ!」

当然、拍手も喝采もない。

キノと名乗ったそいつはしばらくポーズを決めていたが、やがて白けたのか指を下ろした。

そこへアレクシアがおずおずと声をかける。

あまりに意気消沈するので憐憫でもわいたのだろう。

「あの、つまり、ここにいたマフィアは？」

「全員検挙済み！お前らが躍起になって探している『神器』のデータも回収の後に、ここからは抹消済みさ！」

にわかにキノは活気を取り戻す。

それだけパフォーマンスに付き合う相手を欲しているのだ。

オレはというと、奴の言葉の内容に舌打ちをせざるをえなかった。

最初に部下が『ドラド』の拠点を把握し、監視を開始した時点で、公式審判員はここでのおんびりと捜索を行っていたのだ。私服の審判員とマフィアでは、部下に違いはわかるまい。

行動のスピードにおいて完全に競り負けている。まさしく、してやられたという訳だ。

「私たちは、囲まれているのですか？」

「そうなるが、仲間を呼んで身柄を抑える素振りもない。こいつ一人がオレたち兄妹に

用がある」

「ご明察。さすがムラサメの創設者の孫は、頭の出来が違うね」

キノはアロハシャツのポケットから、一枚のメモリーチップを取り出した。サイズは指の間に収まる程度で、何のラベリングもなされていない。それを筐体の側面に違法にこじ開けられたスロットへ差し込む。オレは奴の行動の意味を推察したが、自分でそれを否定した。

まさか、そんなバカがこの世に存在するはずがない。

「オレちゃんを日本に呼びつけた人からの依頼だ。『ムラサメ』の最高傑作の戦闘データと、GPベースの認証コードを確保する代わりに、この場を見逃して構わんってな」

「……つまり?」

アレクシアが先を促すと、キノはメモリーを仕舞い、代わりにGPベースを取り出した。

ライセンスではなくGPベースを出す理由など、オレたちファイターの間ではたった一つしか意味を持たない。

「ガン普拉トルだ。勝つても負けても、オレには任務の範疇にすぎねえ。全部終わったら、どこにでも行っていいぜ」

「どうしますか。兄さん。罠の可能性もあります」

「いや。受けよう。断れば面倒な捕り物劇を演じることになりそうだ」

オレは持つていた暁 雷光のケースのロックを外した。

フタだけが下にむけて垂れ下がり、メタリックパープルの威容が姿を現す。

アレクシアもオレの形相から本気であることを察知したらしい。あわただしくケースを開き、パールホワイトのソヴァールザクウオーリアを取り出した。

呆れと、それ以上の憤怒に脳が焼き切れそうだった。

こんな男にオレが裏をかかれたという事実。なにより『神器』が渡っているという現状が、まったくもって度し難い。

「キノ・シユン。貴様はオレの想像を超えるバカだ！」

「誉め言葉として受け取るぜ。アレックス・メルフォール！」

キノがバトルシステムの筐体を起動させる。

セルリアンブルーの粒子がオレたち三人の間を分断するように立ち上った。

『Please set your Gunpla』

暁 雷光の、ザクの目にそれぞれ仮初の火が灯る。

設定されたフィールドは第九番目の『Canyon』、つまり峡谷だ。

そそり立った岩肌は、本来ならば人類の侵入を許さない断崖絶壁だろう。地に足をつけた戦闘は、非常に行いづらいと考えていい。

時間帯は深夜らしく、空には煌々と満月が輝いている。

「アレックス・メルフォール。『暁 雷光』出陣する！」

「アレクシア・メルフォール。『ソヴァールザクウオーリア』行きます！」

二機が射出された直後、AIによって計算された重力が双方にかけられる。

オレは操縦桿を数回ひねって、違和感に気づいた。

機体重量バランスが後方に偏りすぎている暁 雷光のフル装備は、重力下では操作性が大幅に悪化する。

もとよりオレ以外には使いこなせぬじゃじゃ馬だが、まだ実戦を重ねていないのは、手綱を離れる可能性も考慮しておく必要があった。

先行しているパールホワイトのザクの背中に、指先から放ったワイヤーで通信を繋ぐ。

これは正式なバトルではない。

通常の回線では審判員の権限で傍受されるかもしれない。

「アレクシア。オレは索敵と援護射撃を行う。敵機の特性を把握してこい」

『了解です。兄さん』

『先手必勝！』

「む」

想定より数倍早く、ビームの条線が伸びてきた。

アレクシアのザクは身を反らすだけで回避し、ビームは暁 雷光の装甲の表面に衝突すると、後方へ跳ね返って岩壁を抉りとった。

するとオレの见ているモニターに複数の情報が羅列される。

それは今のビームの発射された方向と暁 雷光のシルエツト、そして、オレの思考操作によつてあらぬ方向へ飛んで行つたビームの行く末についてだつた。

プラフスキー粒子には、ガンプラを動かす以外にも人間の思考を読み取る性質がある。

それを利用したサイコミユの真似事は、まだ実験段階の代物だつた

「ヤタノカガミのビーム反射に恣意的に反射方向を決定させる、か。組織のワークスチームの連中は面倒な仕様ばかり追加するな」

『兄さん、敵が来ます』

敵機は、前方からミサイルに匹敵するスピードで接近していた。

否、センサーの追跡が追い付いていないだけで、既にオレたちの直上にいる。

真円を描く月を背景に、そいつは両手を広げて大の字で落下してきていた。

およそ二頭身という極端にデIFOオルメされた体型と、さながら本物の衣装のようにはためく、中華風の装飾が施された装甲。

SDガンダムという規格だ。

これに特有の、極めて人間に近い瞳は存在しておらず、人の意思で操られることを明確に示すようなデザインだった。

『三式臥龍 孔明ガンダム』！ただいま参上！』

『三国伝』の世界観に準じたらしい小さき機影が、名乗りと共に武装を抜き放つ。

月明りに、かぎ爪を思わせる形状の双剣が照り映える。

「SD風情が、この暁 雷光の懐に飛び込むつもりか！」

暁 雷光のバックパックに搭載されたビーム・キャノン二門が、角度を上げて火を噴いた。

すると三式臥龍とやらの周囲の空間が一瞬、陽炎のように揺らめく。

次の瞬間にはビームから離れた位置に、その小さな機体を移動させていた。

速い。

あのステルス機との戦闘から更に改良を加えたカメラが、まるで補足できないスピードだ。

決して空元気や虚勢ではなく、相手のポテンシャルが高いことがうかがえた。

『ちえいやあああああ!!!』

「ふん」

暁 雷光が身を翻すことで、相手の振り下ろされた一斬は空振りに終わり、代わってザクが横合いからトマホークで攻撃を加える。

またも三式臥龍の機影が揺らめき、音を置き去りにする速度で間合いを離していった。

その中華風の鎧の両肩から円筒状のメガ・ビームキャノンがせりだしている。

間違はなく大技だ。

すかさず暁 雷光のサブアームがシールドを選択し、放たれたビームは完全にシャットアウトされた。

『腕を組んだまま武装を使うとは、余裕かますじゃねえか！』

『あの』

『ん？なんだ、姉ちゃん』

『その機体名のことなんですが』

『お？なんでも聞いてくれ』

『孔明ならり・ガズイカッガンダムで、そもそも三国伝で三なら演者は司馬昭なのでは？』

アレクシアの指摘に三式臥龍の動きが止まった。

しばし黙り込むと、律儀に人差し指を突きつけて答える。

その指先がひとときわキラリ、と輝いたのはバトルシステムの余計なサービス精神だろう。

『そ、そんなことは百も承知！こつちの方がかつこいい名前がつけやすか』

『兄さん今です』

『うおう?!』

奴が回避したのは、暁 雷光がバックバックの一部から隆起させ、発射したビーム・キヤノンである。

オレの思考を読み取ったままなのか、暁 雷光の組んだ腕が苛立たしそうに揺れている。

こちらは重要な情報をめぐって戦っている相手だというのに、いらぬこだわりを語っている場合だろうか。

オレに茶番と思われても仕方あるまい。

「貴様のような男に『神器』が奪い取られるとは、にわかには信じられん」
『そのことなんだけどう。ほっ、と』

三式臥龍は、ザクのフォルテスビーム砲による追撃すらかわしてみせる。

中華風の追加装甲から多数の弾頭が顔を出すと、てんでバラバラな軌道でこちらに襲い掛かってきた。

おそらく原型機に搭載されていた、恣意操作可能なミサイル『ファンネルミサイル』だろう。

ザクウオーリアはライフルで逐一迎撃を試み、オレの暁 雷光は背面に追加されたC IWSで薙ぎ払う。

『オレちゃんにはムラサメが『神器』を集める理由がわからねえ。あんなもの、ためえらが躍起になる必要はねえだろう』

「やはり、『神器』が指す定義については理解しているらしいな。答え合わせをしてやる。貴様の考えを吐くがいい」

三式臥龍の反応が暁 雷光の背後に回る。

オレはそれにはあえて反応せず、アレクシアが再び割って入った。

三式臥龍は握っていた双剣の片方を弾き飛ばされ、それによって生まれた隙を圧倒的なスピードで強引に打ち消した。

操縦しているキノという審判員は、その戦況をまるで気にしない口ぶりでオレの間に答える。

『ムラサメが集める『神器』とは、プラスキー粒子を運用する、ガンダムの世界観に囚われない技術、その総称だ』

「ほう、概ね正解だ」

褒美としてオレはウエポンスロットの半数を展開する。

ほとんどが誘導弾、あるいは角度を微調整可能な砲台だ。

前回ツガミ・ユウジのアデルを大破させた弾幕が、三式臥龍に牙をむいた。

小さな機影はジグザグに軌道変更を繰り返し、夜空を縦横無尽に駆ける。

そして誘導弾を自らの後方へ集約させたとみるや、四肢に力を籠めて加速。

そのすべてを振り切ってみせた。

「やるじゃないか」

はじめてオレは、この男の技量に感嘆した。

S i d e コウイチ

「『粒子変容塗料』『紅の彗星』『R G システム』『炎システム』……これらの共通点がわかるか?」

「ガンプラグが、プラフスキー粒子と組み合わせられてはじめて生まれたもの、ということですか」

「その通り。ガンダムシリーズの登場人物ではない。我ら現実世界を生きる人間の、知恵と想像力が生み出した宝物を『神器』と呼ぶ。ムラサメの連中が名付けた、いわばコードじゃ」

「例えば、劇場の粒子発生装置の設計図にも」

「無論、狙いを定めておるじゃろう。ユウジから聞かなかったか？アレックスと現場で遭遇したと」

聞いていない。

アシハラはあの一件以降、手段を問わずがむしやらに調査を進めている。

何度か情報交換を試みたが、ナガイ女史への連絡をふくめて、そういった事情は一切明かしてくれなかった。

僕のエンジニアとしての力を必要としてくれたのは、一時利用されたに過ぎないのかもしれない。

「根拠のない憶測は疑念を生む。関係の改善と、心を開くというのを同一視しないようにするんじや」

彼女はまたしても僕の心を見通した。

「話を戻そう。ビルダーの無限の想像力の数だけ『神器』は存在する。ムラサメは自警団の活動を隠れ蓑として、それを片端から収集している」

「そんなことが、許されるのですか」

「断じてありえぬ。人の生涯の結実とすらいえるものをかすめ取るのは、卑しい夜盗の所業よ」

ムラサメという組織に、はつきりと憤りを感じた。

彼女が言う『神器』はいずれも、偉大なビルドファイターたちの汗と涙の結晶だ。

彼らの栄光と挫折を彩る宝物であり、だれかが蒐集して陳列するためのものではない。
い。

ガンプラマフィアや技術スパイよりも性質が悪い。

そして同時に、胸中にナガイ女史への疑念が沸き上がってきた。僕にこんな知識を授ける真意がさっぱりわからないので、戸惑うばかりなのである。

いつたい何のつもりだろう。

「あ」

思い当たる節があった。

昨晚、偶然発見し、覗き見てしまった第八回ジュニアカップでの『神器』の運用記録。

これの存在を彼女が知っていて、遠まわしに何かを示唆しているに違いない。

脳を冷静にし、ふたたび思考の海に埋没する。

……『神器』と目されるAGE―Iを製作したのはおそらくツガミ・ユウジ。

それを操縦していたのが、ムラサメにいるアレックス・メルフォール。

そして、ツガミ・ユウジとアシハラ・ユウジが同一人物である可能性と、アシハラ
の師匠であるというナガイ女史。

これだけ揃えば、推理力のない僕でも仮説がひとつ立てられた。

「警備部長。ひよっとして『ムラサメ』とアレックスの話をする理由はこれと関係があるのですか?」

僕は端末をカバンから出すと、あのメモリーチップに封印された映像を再生する。

銀色のAGE-1の丁々発止の活躍と、二人の少年の記録だ。

ナガイさんにとっては、また意味の異なるものに写るだろう。

よく見える位置に端末の向きを変えて、上司たちの前に差し出した。

彼らは興味深そうにそれを覗き込んだが、やがて、先にハカドさんの顔が、みるみる青ざめていく。

あの、活力がみなぎる老成した声が、やや裏返っていた。

「これを、どこで?」

「僕とアシハラが捜査した『コスモス』の事務所です。元は技術スパイとハイバラ・キミコさんの接触を示す証拠が入れられたメモリーでしたが、時限式で開示されました」

「……もうよい。停止しとくれ」

先ほどまで威勢のよかったナガイさんが、めまいをこらえるように、きつく瞼を閉じていた。

僕は急いで端末を閉じた。

にわかに空気が冷えきったのがわかる。

ナガイさんは唇をかたく引きむすび、杖の上に重ねた掌が小刻みに震えている。ハカドさんも執務デスクに両肘を載せて、何か思い悩む様子だ。

拾ってしまった爆弾は、想像以上の威力を秘めていたらしい。

おそるおそる、僕の仮説を検証させてもらう。

「アシハラだけでなく、アレックス・メルフォールも、かつてのあなたの弟子。そうですね？」

「……ふむ。我ながらどうして隠しきれれると思ったのか」

はりつめた空気が、ナガイさんが大きくついた呼気によつて、つかの間ゆるむ。

彼女は逡巡するように、皺だらけの手を開いては握るといふ行為を繰り返していたが、やがて、ゆっくりと唇を開いた。

「左様。わしの弟子はアシハラ、いや。ツガミ・ユウジとアレックス・メルフォールの二人だった」

「彼らは本当に友人同士だったんですか？」

そう問いかけると、彼女は苦虫を噛み潰したような、それでいて泣き笑いのような混沌とした感情を表した。

「彼らはビルダーとファイターという異なる得意分野を持ち、師匠のわしからは一心同体と見えた。だが、その関係が当人たちにとってどう捉えられていたかはわからぬ。特

にあやつ……アレックスからは」

「あなたほどの方が、そんなに自信なく言うほどなんて、何があつたんです」

「む。そこは口を滑らせぬぞ。ユウジ本人が秘密にしているのに、わしが言つてはかたなしじゃろう」

「そ、それは」

「これは家族の問題じゃ」

ナガイさんが強い語調で断じた。

その答えに不満がないわけではなかつたが、家族といわれるとぐうの音も出ない。

血がつながつていなくても、ナガイさんにとつて、かつてのアレックスやアシハラは我が子も同然だったのだろう。

その聖域に土足で踏み込む訳にはいかなかつた。

押し黙る僕に、彼女は極めて事務的なトーンで言葉を続ける。

「……しかし、その映像の存在はわしもたつた今はじめて知つた。今回、おぬしに『ムラサメ』とアレックスについて逐一語り聞かせているのには、別の理由がある」

「それはなんですか?」

「当事者が全員揃わぬことには、まだ明かせぬ。ユウジはどこに行つておるんじゃ?」

「あいつなら出かけていますよ」

「例の事件調査か？」

「はい。そして例によつて独断専行です。反省しているのか、いないのか」

しかも今回は一人ではない。

同行させられている当人は、きつと笑つて許してくれるだろう。けれど、雲をつかむような彼だからこそ、アシハラと組ませるのは心配だった。

状況の混乱ぶりを想つて僕はうつむいた。

Side ユウジ

アイドルグループ『コスモス』の劇場は、捜査および再メンテナンスの名目で封鎖されている。

ところが今現在、その内部を二機のガンプラが飛行していた。

『モワノーウェア』を装備したアデルともう一機。

巨大な副腕ユニットを主武装とするガンプラ『ジャイオーン』だ。

頭部はガンダムタイプに酷似しながらも、液晶ディスプレイで「表情」が変わるという特徴があり、劇場の広大な空間を我が物顔で飛び回っている。

「ははは。すごいですねえ。ヒカワさんも開発に参加したというこのシステムは。この場で買つて組んだだけなのに、まるで私が動かしたようなマニニューバだ」

「アデルが殺気立った性格設定にされていることは気に食わんが」

「ガンプラは持ち主に似ると言いますから。君のそれは懐刀とかそういう凶器の類ですし。」

オレがそうごちると、その男は胡散臭い笑顔をたたえながら首を傾げた。

名前はカザミ・シロウ。

ヒカワ、そして一応ながら俺が属する支部において、広報部長の肩書を拝する男である。

世界大会前の多忙な時期で、本来なら連絡が取れるような状況にはいない。

だがその障害も俺は強硬手段で排除した。

公式審判員本部の警備部長である俺の師匠、ナガイ・トウコの名義でカザミを呼び出したのだ。

案の定、カザミは慌てふためいて確認にやってきた。そして俺から事情を聴くと調査協力を快諾してくれたのである。

しかも頼んでいないのに、俺と現地視察をしようとまで持ち掛けた。

正式な『公式審判員』としての捜査は警備部が進めている。

現場を封鎖している警備部の捜査官がカザミと俺を通したのは、部署間でのいざこざを極力減らしたいという、上へのささやかな気遣いだった。

「私の権限でも『コスモス』からいい情報は得られませんでした。渦中にいるハイバラさ

んは証言をする気満々のようですが、逆にこつちが止めましたよ」

「このてんやわんやに飛び込むのは、さすがに自殺行為だ」

「ええ。ただ、おとなしくしていただく代わりに、あなたへ言伝をと」

「俺に？」

カザミは薄笑いで審判員の専用端末を取り出すと、俺の前へ差し出した。

その画面にはハイバラがいた。私室とおぼしき整頓された部屋の中、これまでとは異なり、私服姿でモニターに収まっていた。

その表情は明るいが、さすがに連日の事件報道に参ったようで、疲労の色があった。

それでも文字媒体で事足りるところを、ビデオメッセージで頼むあたり、我がままアイドルの気質は健在といった様子である。

彼女は大きくこちらへ手を振って、せきをきったように話しはじめた。

『やつほー、ユウジ！あたしたちが戦った相手、ずいぶん厄介な犯罪者だったみたいね。ゲームの中ボスみたいな、薄気味悪いお兄さんから聞いたわ』

カザミが肩を落とした仕草は見ないふりをして、俺は映像に目をこらす。

『あたしのことなら大丈夫。あんたが何の責任を感じているか知らないけど、そもそも悪いのはそのスパイ？とかマフィア？とにかくそういう奴らなんだから！またそいつらに会ったら気にせず暴れなさいな』

「……」

『全部終わったら、またライブに来て。待ってるから』

そうしてビデオメッセージは終わった。

カザミはうきうきと端末を制服のポケットにしまう。

「若者の友情は美しいですなあ」

「ただの知り合いだ」

「またまた」

おそらくは本気で喜んでいるのに、この男の言葉はどことなく嘘くさい。

その真実の感情を見抜けないということは、俺の観察眼もまだまだ甘いのだと再確認させられる。

不意にカザミがまとう雰囲気我真剣なものに変わった

「これだけ期待を寄せられているのですから、全力をつくしましょう」

「ああ」

「聞けば、今回の捜査はナガイ・トウコ本部長のお墨付きだとか。お知り合いなんですか？」

俺は曖昧にうなづく。

バトルを通して、カザミの言葉の説得力と効果は知っているつもりだ。

ヒカワを相手にするときのように、いちいち皮肉を返すような話題でもあるまい。

「教えを受けていた。ガンプラの作り方だとか、心得を」

「おお……となると、あなたの見せた居合斬りも彼女から？」

「そのはずだが、いつの間にか身につけていたというのが正直なところだよ。あの人からバトルは教わっていないはずなんだ」

俺は久方ぶりに師匠へと電話をして、特務の行く末について尋ねたときのことを思い返した。彼女は紋切り型の挨拶をした後、この経緯を静かに聞いたあと、こう返した。

—— わかった。わしがなんとかしてみよう。ただし、特務にもそれなりの挽回が必要であることは忘れるな。

それだけ。

過去の俺は師匠にとってどんな弟子だったのか。サビだらけの脳細胞は答えてくれなかった。

実は形ばかりの、ふがない弟子だったのかもしれない。

そしてより優秀な、彼女の技をきちんと伝授されている弟子がいるとすれば、俺ではなくアレックスの方だろう。

またも脳裏にあの自信に満ちた横顔と、それから、鮮烈なオレンジ色のイメージがフラッシュバックする。

何故あいつはこの事件への介入をやめたのだろうか。

ハイバラと同じように俺が、事件を収束させるとかってくれているのか。それとも師匠の存在を警戒しているのか。

「おーい。アシハラくん」

「あ？」

「大丈夫ですか？上の空ですよ」

カザミのうさんくさい笑顔が間近にまで近づいて、ようやく我に返った。

自分が事件現場の真つただ中に立たされていることを思い出して、想像の数々を前回のバトルの記憶で振り払う。アレックスの善性にすぎるなど、あんなに散々痛めつけられておいて信じがたい発想だった。

ともかく技術スパイが行方をくらませている以上『特務ファイターが』今度こそ結果を出さなければ、特務班は進退きわまる。

他の誰がどういう思惑だろうと、俺は黒幕を引きずり出すしかない。

「すべての状況は保存されている。なにかあるはずだ」

警備部だって居眠りをしている訳ではない。

それにもかかわらず、事件の進展をハカドさんやヒカワから聞かないならば、警備部の役人にはわからず、ビルダーの俺にしかわからない何かが残っている。

重ねた拳の上でせわしく指を打ち合わせ、思考を巡らせる。

ふと、自動操縦のアデルが、こちらの気を惹くように右往左往していると気づいた。思わず視線で追う。

アデルは、ハイバラたちと出会った売店の方角を向いて浮遊している。

たかが自動操縦に仲間意識があるかは不明だが、あそこに並べられていた商品は、アデルには同胞のようなものだろう。

「待てよ。売店か」

「どうかしましたか?」

俺はそこで、自分の思い浮かべた『売店』という単語に引っかけかりを覚えた。

自分の記憶の光景にある違和感に気づいたのだ。

さつきまでジャイオーンにはしやいでいたカザミも、近づいて声をかけてくる。

「カザミ。あんた広報部長として、ここの棚に自由にガンプラを置けると言われたらどうする?」

ぶしつけな質問にも奴は満面の笑顔で答えた。

「そうですねえ。初心者のみなさんが初めての一機を選べるようにバリエーションを豊かにします。中級以上のビルダーの方々が集まる会場にしても、種類は多いに越したことはないでしょう」

「なるほど。……そう考えると、ここの在庫はおかしい」
「ほう？」

あの売店におけるラインナップは極端に偏っていた。

まずはビギナ・ギナをはじめとしたクロスボーン・バンガードの系列機体がある。

そして、あの時俺が手に取ったGセルフに、ハイバラが改造のパーツとして使用したGアルケイン、そしてカザミがこの場で組んだジャイオーンだ。

こちらはすべて『Gのレコンギスタ』に登場する『G系』と呼ばれる機体のみである。たった二作品しかない。カザミが考えるものには及びもつかないだろう。

そう推理を話してやると、あいつはこう疑問を呈してきた。

「しかし、クロスボーン・バンガードのガンプラはライブで使用されています。一種のファングッズなのでは？」

「それでは『G系列』の説明がつかない。それに俺とヒカワが来たとき、『コスモス』の機体はすべてデナン・ゾンだった」

「それはちよつとニツチすぎますね」

さすがにカザミも納得せざるを得なかったようだ。

そもそも『Gのレコンギスタ』は深夜番組であり、もう一方の、デナン系が登場する『ガンダムF91』は物語の序章のみを映像化したとされる劇場作品だ。

いずれもガンダム史に燦然と輝く傑作には違いない。だがガンプラとして、初心者に勧める機体という程の知名度でもなからう。

まず限定品ですらないのだ。ここに来るような生粋のビルダーなら、より安価な店で買う。

『コスモス』の経営には邪魔でしかない」

「では、なぜ市販のガンプラを？」

「要するに、ここにあるガンプラは客に向けたものではないのかもしれない。例えば今回の襲撃に合わせて、事前に用意しておいたとか」

「そんなまさか。穿ちすぎですよ」

「いや、その通りだよ。特務ファイターくん」

突然、誰かのねばつくような拍手が、閑散とした劇場に響いた。

俺たちがそちらを見やると、燕尾服に身を包んだ初老の男がいる。そいつは心から嬉しそうに、骨ばった手をパチパチと打ち合わせていた。

「彼は？」

「この劇場の支配人だ」

ハイバラと出会った日、ヒカワの背後でまごまごとしていた男だ。

カザミはそう聞くと、それとなく俺を背後に押しやって支配人の前に立ちふさがつ

た。カザミの浮かべている笑みの毛色が、明らかに変わっていた。敵意を覆い隠すための『業務用』の笑顔だ。

「支配人さん。ここは封鎖されているはずですが？」

「私が何年通い詰めていると思っている？」

「答えになっていません」

「ここにスパイが空けた穴は一つじゃない。もつと巧妙に隠蔽したものが予備としていくつもあるのだよ」

「なるほど。『コスモス』内部の協力者はあなたですか」

「内部、ねえ。面白い冗談だ」

くつくつ、と声をたてて支配人は笑うと唐突に鬼の形相へと変わった。

「あんな子供の悪ふざけと一緒にするな！」

あまりの怒声にカザミが少し気圧された。

ここまで感情の浮き沈みが激しいと、ヒカワの鈍さでもなにか勘付いていそうなものだ。

支配人は、着ていた燕尾服の襟元を乱暴にゆるめて、つばをまき散らす。

「ここはかつて、私が経営するガンプラバトルバーの本店だったんだ！独自のルールを考案した試合で、多くの観客でにぎわっていた」

「アシハラくん、御存知ですか」

「いいや」

「私は満足していた。順風満帆な生活だった。だが」

支配人の拳から、皮膚と筋肉の締め上げられるギリリ、という音が鳴った。食いしばった歯は砕け散る寸前とばかりに震えている。

「PPSEが汚い手を使って、私の会社を倒産まで追い込んだのだ！ちようど今のよう

に、あらぬ噂を流して、客足を遠ざけて！」

慟哭が、俺たちしかない劇場に響いた。

外は音響の都合で防音加工がなされているので、警備部の職員には聞こえていないだろう。

PPSE社と聞いて俺は自分の知識を掘り出していた。

かつてガンプラバトルを運営していたこの企業は、技術独占のためならばあくどい手を躊躇なく使うという評判があった。

支配人の店は、本店、という言葉から察するにチェーン展開でもしていたのだろう。

それを意図的に倒産させて、保有していたノウハウを丸ごとかつさらったという経緯

のようだ。

あくどいPPSEのイメージは、ヤジマ商事が自社のイメージをアップさせるために

流した風評程度に考えていたが、あながち嘘でもないらしい。

「私はこの場所を残すため、あんなバカ騒ぎを我慢してやっていた。それも限界を迎えそうになっていた時、ガンプラマフィアが手を差し伸べてくれた」

「解決策としては最悪だと思いますね」

「最悪？まさか、これこそ最善だよ」

カザミの皮肉も支配人はどこ吹く風といった様子だった。

「私は事務所のサトウという男を買収し、事務所全体に濡れ衣を着せる方法を実行に移した。ハイバラ・キミコは屈指の人気メンバーだ。彼女一人を犠牲にできれば、他の有象無象などあつという間につぶせる」

「そのために技術スパイは劇場に侵入し、その存在が誤った形で公にされてしまった、と」

「寸前でハイバラ本人が気づいてしまったのはミスだ。しかし、フランスの自警団がひっかきまわしてくれたおかげで無事にゴシップは流せた。夜も眠れないほど恐れていた世間の目が、雑誌の紙面になって彼女を批判するさまは心が躍ったよ」

フランスの自警団とはおそらくアレックスが所属している勢力のことだ。

ハイバラたちへの逆恨みがこもった自白、そしてアレックスを知っているという事実を鑑みるに、この男が一連の黒幕に極めて近いとみえる。

カザミと話しながら、支配人はこの空間をぐるぐると歩き回っていたが、やがて劇場後方に据え付けられている巨大A Iの前にやってくる、それをいとおし気に撫でた。

すっかり陶酔した様子に、俺は狂気と危険を感知した。

「これで、この場所は二度と汚されぬ」

「カザミ、あの男から離れろ」

支配人を拘束しようと歩きだしていたカザミが足を止め、一歩引きさがる。

それを合図にするかのごとく、停止しているはずのA Iが再起動した。

「なんとー」

カザミが驚嘆の声を上げる。

A Iを搭載しているはずのサーバーが震えると、大きな音を立てて崩壊した。

蛹が羽化するように、およそ15cmの極彩色が姿を現す。

両肩から包み込むように垂れ下がる balan サーと、ガンダムとは似て非なるフェイス部分が特徴的だ。

全身の装甲が鮮やかな七色に変じているが、俺たちはその機体を知っていた。

「カバカーリー。G系の機体が在庫にあったのは、このガンプラのためですか」

「これも私の技術さ。プラスキー粒子の散布下では、ガンプラは一時的に原作の性能を発揮できる。会場すべてに粒子がまきちらされるこの会場でのみ、カバカーリーは本

物のフォトンバッテリー駆動を『再演』して演算装置となるのだ！」

「こんなものとすり替えられていたら、ヒカワが稼働試験で突然出たエラーに慌てる訳だ」

カザミがジャイオンを見上げるが、それはすっかり精気を吸われたように、だらりと四肢を脱力させて浮遊している。

あのガンプラは今、カバカーリーへと姿を変えたAIの制御下にあるのだ。

支配人はそれがわかっていて、ここまで手の内を明かし、自白までやらかしていたのだ

「さて、では私は帰宅させてもらおう。このデータを渡して、会社を再興する資金を受け取る予定だね」

「ここから警備部に通報しても、包囲する暇すら与えてくれなさそうだ」

カザミは笑みを崩さないまま悔しそうにする。と器用な芸当をしていた

支配人の計画はなかなかどうして周到だった。

カバカーリーがコアユニットとして駆動している間に、ヒカワが粒子発生システムの最新データを入力してしまっている。それが15cmまでダウンサイジングされて持ち去られたらせつかくの物的証拠は今度こそ消え去るのだ。

仮にガンプラだけを捕縛、破壊してもバックアップはGPベースに残るだろう。

戦場全域がカバカーリーの思うままという状態で、支配人ごと制圧するほかない。

「そうだ。だからここで叩く」

「なに？」

俺は頭上を仰ぐ。

モワノーウェアを装備したアデルがシグルブレイドを構えると、カバカーリーに突進した。

S i d e アレックス

ビームの雨が複数に分裂し、暁　雷光に降り注ぐ。

シールドを傘にしてそれをしのぐと、誘導弾のコンテナをパージ。別のサブアームにハイパーバズーカを掴ませる。

まっすぐに進んだバズーカの弾頭は、曲刀によって真つ二つに切り裂かれて、後方で大きな火の玉となった。

「む？アレクシアは何をしている……？」

『よそ見している場合かい!?!』

ザクに意識を向けるより早く、これまでの中で最も巨大な粒子の波が押し寄せた。

シールドはその出力に耐えきっても、細いアームが半ばから折れた。

先ほどから三式臥龍が連射しているメガ・ビームキャノンは、たった二門しかないに

もかわならず、暁 雷光のどの現行武装の追随をも許さぬ威力である。

こんな火力任せの力押ししの戦闘スタイルは世界を探してもそういない。

先ほど立てたオレの推理は間違っていないはずであった。

『いつで、トドメだ！』

予想通り、三式臥龍の周辺の空間が、蜃気楼のごとくねじ曲がっていく。

つまるところ、あれはフィールドを構成する粒子を吸収・貯蓄しているのだ。

関西のガンプラ造形術『心形流』の奥義の一つである。

極端なまでの火力偏重主義と、粒子を巧みに操作する奥義の数々がその特徴であった。

果たして三式臥龍の周囲の揺らぎはその像がねじれるまでに達する。

そしてスパークが爆ぜて墜落した。

『なっ、てめえ、何をしやがった！』

奴は事態の責をオレに求めているようだが、こちらはきっかけを作ったにすぎない。

決定打は三式臥龍のその機構自身だ。

暁 雷光のバックパックから放たれた誘導弾には、技術スパイが使用した『ガンダム

アクエリアス』のウィルスが封入されている。

機能が解析されてもいないまま試作したもので、実際にプラスチックから作りこんで

いるゆえに弾数も限られていたが、効果はあったらしい。

「粒子を吸収・蓄積して、ビーム・バリアと加速にまで運用するとは面白い。それならば常識外のスピードも出よう」

『野郎、そんなことをこのバトルの間に見破ったのか』

「当然だ。オレを誰だと思っている」

身動きもままならぬ三式臥龍めがけて、火器が続々と展開する。

奴に逃げ場はなかった。

「これ以上貴様にやる戦闘データはない。終わりだ」

「くっー！」

決着をつけようとしたその時、射線上に立ちふさがったのはパールホワイトのガンブラだった。

アレクシアのソヴァールザクウォーリアだ。意図を図りかねて、オレは静かに問う。

「なんのつもりだ？アレクシア」

『兄さん。我々の目的はこの場からの速やかな撤退です。勝負はつきました』

「ここで破壊しなければ面倒だ」

「ガンブラは何度でも修復可能です。今すぐに撃破しても、将来の禍根になることには変わりありません。」

そこで、彼女がオープン回線のモニターに姿を現した。

その細い指の間には一枚のメモリーチップが挟まっていて、それを見たキノの様子も映し出される。

奴は慌ててポケットを探り、今にもモニターの枠からはみ出さんばかりににじり寄った。

『オイオイ、スリ取ったのかよ!』

『お二人とも、あまりにもガンプラバトルに夢中でしたので。こつそり操縦席から外れさせていただきました』

『オレは気づいていたぞ。ザクの援護が突然途切れたからな』

『この通り眺　雷光とソヴァールザクウォーリアの戦闘データは回収しています。ご容赦を』

「まあいい。許す。よくやった」

目標を入手したならば、この戦闘を続けている意味もない。

オレは暁　雷光に踵を返させると、GPベースを外してバトルを強制終了させた。

粒子は収束し、小さく音を立ててSDが筐体に落下する。

予想外の結末に茫然としていたキノだが、すぐに気を取り直してこちらへと足を進めた。

「待てよ。約束を破ったなら、オレちゃんにも考えがある！」

「外に待機させている、他の公式審判員のことか？」

オレは奴の背後を顎で示す。

奴が振り返った先には、最初にキノが挑発行為を繰り返していた窓があった。

もちろん既にドローンは飛んでいない。

このバトルを最後まで見守る必要がないし、今は別の場所にあるからだ。

では別の場所はどこか。

それを察知したキノの顔色が、青を通り越して赤になって、それから蒼白にまで陥った。

「て、てめえ」

「あのドローンには小型のボンベが搭載されていてなあ。確か中身は何だったか」

「催涙ガスでしたね。密閉空間に隠れていると、逃げ場はないかと」

キノは無言で、オレたちを突き飛ばすようにして部屋から出ていく。

ただ一度ドアの間隙で立ち止まると、殺気に満ちた視線をサングラスの間から投げた。

「次はねえぞ」

大きな音を立ててドアが閉まり、全速力で廊下をかける足音が伝ってくる。

こうして、ビルに入る前後と立場は逆転したのであった。

「帰るか」

「はっ」

オレとアレクシアは悠々と部屋を出ると、エレベーターを待つ。

『神器』の原点として挙げられる心形流の技を目撃できたのは、個人的には大成功だったと言っている。

キノ・シユンという人物に対して、オレの相手としては及第点という評価を下そう。

惜しむらくはあの殺意よりも、奴の気丈とさえ言えるパフォーマンスの方が、よほど効き目があったことだろうか。

Side ユウジ

カバカーリーの手甲からビームセイバーが出力されると、こちらのシグルブレイドと拮抗し、鏝迫り合いになった。

本来は華やかな照明で彩られるはずの劇場に、みたび戦いの閃光がまたいた。

「バカな！」

支配人が目を見開いた。

アデルが彼の思惑から外れて反抗している。あろうことか、俺の周囲にコンソールまで出現している始末だ。

想定外どころか原理もわかっていないのに違いない。

しかしアデルに操縦系統を明け渡したのはA I、つまりカバカーリー側からだった。

自動制御の管轄外のガンプラは、イコール通常の操縦でなければおかしい、という逆説的な理論を組み立てたのだろう。

あくまでアデルは『カバカーリーの制御の外側』に立っていただけである。

「ここではガンプラは主に似るらしい。身勝手に、油断しやすいところなんてあんたにそっくりじゃないか？」

「ふざけるな！なぜ、そのアデルはカバカーリーの支配を受けない!?劇場内を飛んではたはずだ！」

「俺のアデルは他の機体とは違う。たぶんな」

この劇場にカザミと操作に来た時点で、自動制御のすべてがカバカーリーに操られているのなら、アデルは俺に利するような行動はとらないはずだ。

そもそも最初から、アデルはただの自動操縦ガンプラとしては異質だった。

ライブ会場でのつまらなそうな素振りや、他者を威嚇するなどの行動はライブの円滑な運営には邪魔でしかない。その基幹が俺の戦闘データから生成されているとしてもだ。

装置を作ったのがヒカワたちならば、この程度は予想して対策を立てている。

俺にはそういう奇妙な確信があった。

「くそ、わからん！なぜ動く！」

「……支配人。あんたのそのドス黒い感情に、俺も共感しないわけじゃない」

「知ったような口を利くな!？」

支配人の戸惑いに応じてか、カバカーリーの押し込みは弱かった。

アデルは敵の光刃もろともその右腕部を切断する。

すれ違いざま、カバカーリーのもう片方の腕をもサーベルの投擲で封じ、相手を大き

くよろめかせた。その隙に背後から、胴体をはがいじめにして膝蹴りを見舞う。

「ぐっ！」

「俺も大事なものを奪われたことがあるような、そんな過去があった気がするよ」

支配人の慟哭は、俺の曖昧模糊とした記憶の琴線に触れた。肌で、彼の悲哀に共鳴し、

心の底から憐れみと同情を覚える。

だがそれきりだ。それ以上は付き合ってやれない。

俺はモニターの片隅にあるパネルを押しした。

三流ファイターの意思に応えるべく、黒いアデルが発光する。

関節部から、そして胸部中央から光が漏れ出る。

「なんだ!?!まだ何かあるのか!」

それはビルドファイターが誰もが知る空色の輝き。すべての想像力の源泉だ。こいつがある限りガンプラには無限の可能性が認められる。

カザミは事態を見守っていて輝くアデルの絡線りを見破ったらしい。ついにその顔すべてを驚愕に変じた。

「結晶体。プラフスキー粒子の結晶体が、アデルの中に入っています！」

「バカな。そんなもの、どこで手に入れた！」

支配人が思わずそれを否定するが、それは揺るがしようなない事実だった。

プラフスキー粒子を凝縮した結晶は、まさしくアデルの心臓として息づいているのだ。

心臓の存在は、カバカーリーの操り人形となる魔の手を払いのけるだけではない。

キャパシティを超える量の粒子が、丹念に合わせ目消しを施した装甲の内側で暴れ狂い、内部骨格へ強引に浸透させられていく。

第七回世界大会を制した力が、表面的な現象だけでも模倣される。

『『R G システム』完全解放』

「まさか、これがあの男が言っていた『神器』……!?!」

「終わりだ。支配人」

アデルが上体をひねり、その右腕に粒子を集中させた。

逃げ場を失った膨大なエネルギーで、装甲が文字通り膨れ上がり、これ以上は抑えられないと悲鳴を上げる。

だが俺にとってはこれでいい。

アレックスとの戦闘では無様に使ってしまった。伝説に詫びを入れる時だ。

『RG・ビルドナツクル』

乾坤一擲。

粒子浸透で桁違いに上昇した硬度で以て、アデルは敵機の装甲をぶち破る。

胸部に大穴を開けたカバカーリーは、その装甲から光を失い、本来の黒に戻っていった。

『BATTLE ENDE』

「そんな、バカな」

決着はついた。

例外事項を強引に処理しようと、ときれときれのシステム音声が鳴る。

大事な記録を破壊され、膝をつく支配人にカザミが歩み寄った。

その長い膝を曲げて顔の高さを合わせると、黒幕の肩へ手を置く。

「支配人さん。あなたの後悔、怒りは私にも一定の理解はできます」

「……………え？」

「しかし、それと無関係な『コスモス』のアイドルたちを巻き込んで、陥れてしまったことが誤りだった。それではあなたの言う、P P S Eの悪辣な手口と同じではないですか？」

「……私はただ……」

うつむいた男は、それきり何も言わなくなった。

俺はほう、と安堵の息をつく。

これで一件落着だ。

ハイバラたちの行く末まで責任は持てないが、彼女たちなら後は乗り越えていけるだろう。

カザミが俺へ振り向いた時は、とうにいつもの胡散臭い笑顔があいつの顔面に貼りついていた。

「アシハラくん。警備部の人たちを呼んでください。この事件、真相はずいぶん複雑そうですねから」

「ああ」

俺は大人二人に背を向けて、劇場を出る。

その途中で、カバカーリーに拳を貫通させたまま浮遊しているアデルを手を取った。もはやアデルの粒子はすべて使い切られ、プラスチックでできた指先すら動かせない

だろう。

空間に粒子は散布されたままだが、これは『必殺の一撃』である。

一時的とはいえ、力尽きるのは当然だ。

「あの男。さつき『神器』とか言っていたな……俺がこいつを入手した経緯も、それと関係があるのやら」

支配人の言葉を思い返して、俺は目を細めた。

実はアデルの胸に収まった結晶体こそ、俺のかすれた記憶の手がかりとなる遺物なのだ。

思い出せるもつとも古い記憶の時点で、既にこれはアデルに入っていた。

自室のスケッチブックに記されていた特殊な内部構造は、この『RGシステム』の猿真似のために作られていたのである。

『神器』という単語が、かすかに記憶の扉をひつかいていくが、それ以上は想起できなかった。

支配人へもつと深く問いたただせばわかるのかもしれないが、そうやって過去への固執を続けていると、支配人のように悲惨な末路を辿るのかもしれない。

一解決策はわからないが、俺は彼を反面教師として心にとどめておくことにした。

Side コウイチ

アシハラは劇場から戻つてくると、執務室にノックなしで入ってきた。

そこでナガイさんの顔を見て、しばし視線をさまよわせていたが、彼女の満面の笑みにほだされたらしい。

やがてどつかりとソファアーに腰を下ろした。

部屋の主であるハカドさんから許可は下りていないが、厚かましくも彼女の正面である。

「お久しぶりです。 師匠」

「息災で何よりだ。 ユウジ。 しばらく見ない内に、随分物騒な面構えになったな」

「そうですか」

珍しく、アシハラが他人に敬語を用いている。

それほどまでに、二人の間に結ばれた絆と上下関係は硬いものなのだろう。

しばしの沈黙。

アシハラは口を引き結び、ナガイさんも何を話そうかとまごついている。

僕はというと、この師弟の間に挟まれていたたまれない気持ちになつていた。

癖でもない貧乏ゆすりをして、ハカドさんにアイコンタクトで助けを求めますが、ハカドさんも沈痛な面持ちで首を横に振る。

基本的に樂觀的でムードメーカーな人でも、さすがに限度があつた。

「そうだ、アシハラ。どうして劇場にアレックス・メルフォールがいると教えてくれなかったんだ」

「は？」

「ナガイ警備部長から伺った。何か変化があったらすぐに知らせてくれって言ったじゃないか」

「……あの時はこつちも混乱していて、正常な判断ができなかった。それ以降は、ハイバラの周辺を調べていて言いそびれただけだ」

「そ、そうだったのか」

「それにお前がアレックスの存在を知ったところで、顔も知らない相手を追いかけられるかよ」

「ん？いや、面識はあるぞ？茶髪に灰色の瞳の偉そうなフランス人だろう？」

「待て。それこそ初耳だ」

不意にアシハラの顔色が一変した。

「お前とアレックスが会っていただど?! いつ、どこでだ!？」

「え? え?」

すさまじい剣幕で僕に詰め寄ったかとおもうと、両肩を掴んで揺さぶってくる。

顔面は蒼白で、精気がないはずの目は血走っていた。彼のこんな表情ははじめてだ。

しかしよくよく思い返せば、この事件が起こるまでの互いのコミュニケーション不足は深刻だった。僕だけがアシハラとアレックスの関係を把握して久しいだけで、本人にその情報はまったく伝わっていなかったのである。

「これこれ」

ナガイさんが僕らの中間へ、その小さな体をねじ入れると、さすがにアシハラも身を引いた。

彼女は杖の先で、僕の額をコツン、と小突く。

「その話題に関してユウジは特に敏感なんじゃ。迂闊に触れるなど言つたらうに」
「す、すみません」

「ユウジも落ち着け。アレックスがこの地域で活動しているというのはお前も知つての通りで、ヒカワ・コウイチが公式審判員として最低限の知識を保有した、ということにすぎん。おぬしに収穫はないぞ」

「……………は、」

「それより、当事者が全員揃つたのじゃ。一番肝心な本題に入ろう」

着物のたもとから、一枚の紙切れが取り出される。

書類の形式からして、公式審判員の正式な辞令だ。すっかり頭から離れていたが、僕たちが呼び出されたのは、警備部への連絡なしに独断専行を行つて技術スパイをとり逃

したからだった。

ナガイさんは辞令を片手で、ハカドさんのデスクの中央へ滑らせた。

「公式審判員特務班は、警備部の監視下に入ってもらおう」

「なんですって」

「これまでの管轄部署である広報部との共同管轄だ。特務ファイターには従来の任務に加え『ムラサメ』をはじめとした対立組織撲滅作戦の手伝いをすることに決定した」

「無謀です！ 僕にもアシハラにも、そんなノウハウは存在しません！」

僕は今日一番の驚愕に心臓が一拍停止したと錯覚した。この班には知識も、経験も、人脈も何もかもが欠乏している。警備部と連携したとて、足手まといになるのがオチだ。

ナガイ警備部長をはじめとした、上層部の意図が汲み取れなかった。

「だから念入りに『ムラサメ』と『神器』について語り聞かせてやったのじゃ。バックアップ策も講じてある。入ってこい」

ノックもなしに、ほとんど吹き飛ばように扉が開くと、電光石火で誰かが飛び込んできた。

アロハシャツに逆立った金髪とサングラス。あまりに南国感あふれるその姿に、僕は見覚えがあった。

「シユン!？」

「そんなビビるこたねえだろう、コウイチ。昨日メールしたじゃねえか」

そこにいたのはキノ・シユン。

長いことアメリカで仕事をしていて、『神器』の映像を見つけた日の晩に、とうとう帰国するというメールを寄越していた相手でもある。

『ガン普拉心形流』の門下であり、何を隠そう僕の従兄弟にあたる男だ

ナガイ警備部長の来訪とは異なる懸案事項のように思っていたが、それどころか密接にかかわっていたようである。

「えっと、君は？ヒカワくと知り合いのようだが」

「申し遅れました！オレちゃんは北米支部所属で、コウイチの従兄弟のキノ・シユンとい
います！ナガイのバアちゃん……警備部長の命令により、本日づけで特務班に配属にな
りました！」

「なるほど。北米支部でムラサメとの戦いを支援していた現地の審判員というのは、キ
ミのことか」

「そうっすー！」

ハカドさんの質問に、シユンは鼻高々に答える。

こいつの特徴はこの高いテンションと、誰に対してもなれなれしい態度だ。

アシハラとは真逆のようであり、問題児という点だけが共通している。

「さつき、噂のアレックス・メルフォールとやりあったんだけど、いやはや強かった。ばあちゃんに頼まれた戦闘データの解析も阻止されて散々だったぜ」

「お前もアレックスに会ったのか」

「お、聞きたいか。オレちゃんの武勇伝。いや、まずは互いの自己紹介か？」

またアシハラの様子がおかしくなるが、シユンにとっては格好の自慢の材料でしかない。

初対面のアシハラ相手にその騒々しい口をばかり、と聞く。

「キノ審判員。そこまでだ。これ以上状況を混乱させないでくれ」

マシンガントークが始まろうとした直前で、あいつを制止したのはハカドさんだった。

僕たちの上司は机の裏側から、ゆっくりとこちらへ歩みを進める。両目はじっと、ナガイさんだけを見据えていた。

これから、重要な幹部同士の会談が繰り広げられるらしい。

そんな雰囲気を感じ取る。隣で異議を唱えようとした従兄弟の口を両手で塞いだ。

あいつはしばらくモゴモゴと唸っていたが、酸素が足りなくなっただのか、とうとうお

となしくなった。

そして二人のベテラン審判員が正面から対峙する。

「本部警備部長。一つ質問があります」

「聞こう」

「ユウジくんとアレックス・メルフォール。今回の処置は二人があなたの弟子であることを度外視した上での処置でしょうか？」

「どういう意味じゃ」

「私が見立てた通り、ユウジくんは卓越した観察眼とビルダーとしての技量、そしてファイターとしての一定のバイタリティーを持ち合わせています。しかし、今回のようにアレックスが関連すると、また平静を欠く可能性は否めない。警備部の補佐としてはまだまだ未熟であるように思いますが」

アシハラは抗議しない。

たった数分で、彼がアレックス・メルフォールへ強いこだわりを持つことは身にしみて理解した。口の端にのぼっただけであれだけ動揺するのだ。直接顔を合わせたら、どうなるかわかったものではない？

ナガイ女史はアシハラへと問う。

「ユウジ。例の技術スパイはどうした」

「ハイバラをはめようとした黒幕は捕まえた。カザミに頼んで警備部とやらに連行してもらっている」

「うむ」

満足げに彼女は頷くと、骨ばった指でとんと杖をたたく。

僕もこつそり胸をなでおろした。真犯人が捕まったなら証言によって、彼女と仲間たちを取り巻く醜聞はやがて消えていく。コスモスの活動再開も見込めるに違いない。

ナガイさんは杖の先端を指先でもてあそびながら、ハカドさんへと向き直る。

「特務ファイターの技量は、これで警備部にも証明されただろう。ユウジは途中に障害があろうと、最終的に任務をまっとうする」

「詭弁です」

「もしもこやつがアレックスとやりあうというのなら、任務の範囲外で好きにすればいい……それに」

不意に、温厚なしわくちやの顔がかげり、背筋も凍るほどの殺気がナガイ部長から発せられた。それは話し相手のハカドさんのみならず、のんきに事件解決を喜んでいた僕たちまでおろしを受けけるほどの激しい気迫だった。

傍らでシユンがつばを飲み込んだのが聞こえる。

「忘れるな。我々は既に、一度ムラサメに完全敗北している。ユウジを責めていられる

ほどの余裕なぞない」

「……………」

「奴が組織を統括しているなら、旧友のユウジがいる方が警備部の連中も助かるじやろう。ただの弟子びいきではないさ」

公式審判員の法を統べる長として、特務の行く末を真剣に考えた結果なのだと彼女は言う。

束の間の覇気は消え失せ、親しみやすそうなおばあさんが舞い戻っていた。

シユンは空気の抜けた風船のように、間抜けた息を吐き戻し、僕も自分の体が知らず知らずのうちにこわばっていたことに気が付いて、肩の力を抜いた。

横目で確認すると、アシハラは平然としていた。さすが弟子といったところか。

「話を警備部長にも通してくる。あやつは頑固だから、説得には骨が折れそうじゃ。ははは」

ナガイさんは棒立ちになる一同の隙間を、音もなくすりぬけて姿を消した。

ハカドさんは大きく息をつき、デスクに戻って頭を抱える。僕たちの所属は変化し、特務ファイターのデータ収集が主だったはずの活動内容に、殺伐とした事件捜査が加わった。

軽々しく一件落着とはいえない結末に、上司としては悩ましい限りなのだろう。

僕とシユン、アシハラは誰が言うともなしに額を寄せ合つた。

「なんとというか、アシハラのお師匠つて底知れない人だね」

「オレちゃんをアメリカから呼んだときも、ほとんど説明なしだぜ？ コウイチの班に異動つて聞いたのも、ついさつきだ」

「言つたろう。強引でロクデナシな人だと。ああして物事を引きずつて、むりやり終いにするのが得意なんだよ」

そう語るアシハラの腰の後ろの辺りで、ふと何かが揺れたのが目に入った。僕が目をつらすと、それは四角い15センチ四方の、透明な硬質プラ製の物体だった。

表面にファンシーな音符が飛び交つて入るといふあたりまで認識して、僕はおおいに驚いた。ファンであるからすぐにわかる。『コスモス』の最新のシングルのジャケットだ。

アシハラはいつもの仏頂面を崩さないまま、ジーンズへ無造作にものを突っ込んで、シユンと顔を見合わせているのである。

かつての僕ならば、その光景をハイバラさんへの義理立てと推測しただろう。

ところが今の僕にはほんの少しだけ、バディの心情を肯定的に捉える余裕があった。

アシハラも彼女たちの歌を気に入っていたのだ。だから買つてきた。それだけの話だ。

「あれ？ユウジちゃんそれって……あつ」

シュンが余計な水を差す前に、僕はその逆立った金髪をはたいた。

PC-01 「番外編 激突 SHADOW対OEGA」

side ユウジ

物資不足。それはガンプラビルダーの天敵でありながら、常に頭を悩ませなければならぬ要素である。

「ない」

そしてそれは、俺こと、アシハラ・ユウジとて逃れるすべはなかった。

特務班消滅の危機を回避した後、俺は新たなウエアの製作に勤しんでいた。しかし、肝心の素材となる『タイタスウエア』があちこちで売り切れているのだ。

ガンダムAGE-1のウエアの内、重装甲近接戦闘形態である『タイタス』は群を抜いた人気を誇る。

その独特の武装構成と、フィギュアの四肢に換装可能という偶然から、優先して棚から消えていく。メーカーとしては嬉しい限りだろうが、ビルドファイターはそうはいかない。

俺はあてもなく駅を乗り継ぎ、とうとう、あまり来ないような地域までやって来た。た。

「模型店くらいあるだろう」

それは樂觀ではなく、諦めのこもった呟きであった。

なにせ5軒もくまなく探し回っているのだ、足は棒になるし、あらゆる重装甲MSの箱がタイタスに見える始末である。

果たして、俺はその地域の模型店を見出した。路上にひっそりとただすむ、いかにも古き良き店といった趣である。

「サニー模型店……」

なんとはなしに店名をつぶやいた。第一次ガンプラブームから半世紀が経過する今の時代では、その佇まいは骨董品に近い。

「まだあったのか、ここの店」

俺はとある模型店を想起せずにはいられなかった。

店内に入ると、模型の津波が待ち伏せていた。見渡す限りの箱、箱。ボックスアートによる情報量の洪水である。

かつて俺が任務で向かったデパートの模型コーナーは、さながら博物館のように整頓されていた。しかしこちらは、とにかく物量でせめてくる。クローズアップされている目玉商品の後ろに別の商品が待ち構えているので、うかつに棚をざっと見回して終えられない。

ビルダーを店内に釘付けにするには、最強の戦略といえた。

「AGE系のプラモは……」

視界の悪くなるレベルの、棚の合間を縫って歩く。

俺が探すガンダムAGEシリーズのプラモは、他のシリーズのそれとは異なり、箱が白いので割合目を引いた。在庫状況はこれまで回った5軒とだいたい一緒である。常連に向けてなのかやけにフルグランサの数が多いのが気になるが、それくらいだ。

注意深く見回すと、赤い機体色がちらりと視界を横切った。

「よし」

間違えようがない。探していたAGE—1タイタスのキットであった。それは、身長は同年代の平均より背が高い俺でさえ、手を伸ばす必要のある高さにあった。

仕方なくかかとをあげて箱を掴もうとする、その時だった。

「あ?」

「あ」

一瞬遅れて、俺の手に重なるもう一つの手がある。首を巡らせると、隣にいつの間にか男がいた。

年齢は俺とほぼ同じだろうか。それにしても体つきは華奢で、肌色もあまり血色はよくない。そのくせ、かちあつた瞳だけは、吸い込まれそうな深さをたたえていた。まる

で長期入院した病人のようである。

しかし、今の俺にそれ以上人間観察をしている余裕はない。

「譲れ。こっちはもう6軒目だ」

「無茶なことを言わないでください。僕も自分の機体の修理に必要なんです」

「予備パーツならジャンクパーツをあたれ。こっちはウエアを新造する」

「そうはいきません。この機体は……」

売り言葉に買い言葉で険悪な雰囲気募っていく。相手は何を考えているかわかりづらい面構えだったが、少なくとも今日の機嫌は悪かったらしい。

俺と奴の視線はぶつかり合い、火花を散らさんばかりになっていた。

「妥協点はないな」

「そうなりますね」

「となると、方法は一つだけだ」

「望むところですよ」

俺とその男の見解は、具体的に言葉にせずとも一致した。

互いにベルトのホルスターからGPベースを取り出す。

ビルドファイターという人種は不思議なもので、諍いが起こると互いの得意分野で決着をつけようとするものだ。

すなわち、ガンプラバトルである。

『Please set your Gbase』

『Beginning playsky particle dispersal』

『Field 7 ruins』

『Please set your Gunpla』

修復したばかりのアデルを台座にセットする。高速戦闘用のモワノーウェアは間に合わず、標準装備であるノルマルに戻ってあった。

プラフスキー粒子がみなぎり、アデルに命を吹き込む。

『Battle start!』

「アシハラ・ユウジ『アデル・シャドウ』Sally Forth……i!』

カタパルトから機体が射出された。放り出された後方で、すぐさまゲートが閉じられる。

アデルの調子は悪くない。例の機構を組み込んで以降、全力稼働をした挙句の再運用ははじめてだったが、問題なさそうだ。

設定された戦場は廃墟。

第七回世界大会で、メイジン・カワグチとレナート兄弟が激突したフィールドである。

「前か」

接近する機体反応。その速度はタイタスを予備パーツに使うにしては、やけに速かった。

めくれあがった道路越しに、敵ガンプラと相對する。

基礎機体はガンダムA G E ー 1。両の拳をタイタスの肩アーマーでグローブのように覆い、下半身はアストレイの構造に近い。まさしく相手を正面から殴り抜くことに特化したカスタマイズだ。

登録された機体名は「ガンダムO E G A」。

その名前に、俺は一瞬だけ、記憶の奥底を刺激された。

(ねえアレックス、すごいよ！ボクら以外にも、こんなに強いA G E ー 1を使う人がいるんだ！)

(……ずいぶん嬉しそうだな、ユージ)

『……行きます』

「！」

あろうことか、相手の声で我に帰る。

既にO E G Aは、こちらの懐に飛び込んでいた。ビームナックルが唸りをあげて、ア

デルの胴に迫る。

「ちっ」

すんでのところで後方へ身をかわし、ドツズライフルの銃口を向けた。

計4発。

回転がかかったビームがOEGAを襲い、その全てを、奴は上体を寸分動かすだけで回避してみせる。まるでボクシングのスウエーだ。

「くそ、バカか俺は」

ようやくかぶりを振り、頭によぎった会話を打ち消す。

危うく、一瞬で潰されるところだった。あんな記憶をいちいち掘り返している場合ではない。

「……宣言している暇があったら、さっさと殴りかかれ」

『だから、やっていますよ』

胸に湧き上がる苛立ちを相手にぶつける。会話の流れが解せないのか、攻撃してきた側もやや荒んだ調子で応酬してきた。

本来、腑抜けていた自分自身に向けた憤りだ。ともかく、よりにもよってAGE―1使いというのがまずかったのだろう。

引き続きアデルはライフルを連射した。

OEGAは時にスウエーでいなし、時に拳でビームを弾く。そして、確実に距離を詰めていた。一方的な戦況悪化である。

「やはり俺に射撃は向かない」

そう判断して、俺はライフルを捨てることにした。OEGAの間合いに再び取り込まれる直前、ビーム照射時間を長く設定。

引き金をひいてすぐに手を離し、ビルを迂回して側面へ踏み込んだ。

断末魔の一射。

ビームが空を裂いたまま取り残されて、それにOEGAが、ほんのわずか気をとられる。

「獲った」

その無防備な背後へビームサーベルを叩き込もうとして、俺はアデルの天地がひっくり返るのを見た。

「なに」

『読んでいます』

驚くのもつかの間、真上から降り注ぐ赤の拳を、無様に転げて避ける。

しかしとにかくナツクルが大きいのである。ついにその一撃が頭部に打ち込まれた。

モニターに激震が走り、左のメインカメラがひしゃげたのがわかった。

両脚でOEGAの胴を蹴り、どうにか引き離す。

「ボクサーかと思つたら、なんでもありか」

俺はノイズが走るモニターを見て齒噛みした。

俺を投げ飛ばしたのは、おそらく柔道の一本背負いである。米国の拳闘の次は、日本の格闘技ときたのだ。その変幻自在の対応に俺は舌を巻いていた。

サブセンサーのおかげで、視界の範囲に変化はない。OEGAのビームナックルは相変わらず、次こそは上半身を吹き飛ばそうと狙っている。

俺は自分のサーベルに目をやり、その打開策を練った。

タイタスの特徴であるビームナックルは、それ自体が頑強な防御であり、こちらを刈り取る凶器である。がむしやらに突っ込めば、一方的に蹂躪されるのは目に見えていた。

しかし、ライフルはあてにできないと決めただけだ。こちらから仕掛けるしか道はない。

「まあ、それもそうか」

もとよりアシハラ・ユウジとはそういうファイターだ。相手が巨大な剣を振り回そう、身のこなし軽いSDだろうが、はたまた無尽蔵に弾丸を放つ機体だろうが、無心で剣を振るうしか能がない。

それでどうにか勝ってきたのだ。これまでそうしてきたのなら、これからもそうである。

「！」

『っ』

戦意の鏝迫り合いが、同時に終わる。

踏み込んだタイミングは同じ。距離はOEGAの方が長い。アデルはその可動域をフル活用し、頭部を右へ傾げた。

OEGAのビームナックルの熱が脆弱なサブセンサーを焼き潰し、左側の視界が破裂する。

それに構わずアデルはサーベルを突き出す。

狙いは自らを扶る拳そのもの。たとえ増加装甲で覆っていても、出力を上げたサーベルまで防ぎきれまい。

そして最高の効率で放たれるエネルギーの塊は、アデルを通過した時点で弱まり、光刃の侵入を許してしまった。

『えっ』

「出力調整が上手すぎるのも考えものだな」

とはいえ、動きを止められたのは数秒にすぎない。すかさずサーベルが刺さったまま

の裏拳が飛んでくる。

シールドを地面に突き立てると、それを軸に上へ跳躍。

真下で盾が音を立てて圧壊した。

アデルは引き寄せた隙を逃さず、だめ押し of 回し蹴りで、右拳にサーベルの柄を押し込んだ。煙が上がり、がくり、とOEGAの右腕が垂れ下がる。

『破損個所を蹴飛ばすなんて、とんでもないことをしますね』

「嫌いだろう、こういうの」

ファーストコンタクトの時点で、ファイターの男がタイタスに伸ばしていた手は右手だった。すなわち一心同体のガンプラも、これで利き手が潰れたはずである。

『ええ、嫌いです』

互いに距離を取る。

OEGAは左拳に力を込め、ビームナックルを起動した。アデルももう1振りのサーベルを抜きはなち、それに備える。

緊張感で空気が張り詰める中、OEGAのファイターが、ぼそりと呟いた。

『……セーブできるようになったからこそ、というのは流石に盲点でした』

「普通は起こらないからな。そのAGE-1を作った奴にも想定外だろうよ」

『わかるんですか』

「あんたは見た目に似合わず猪突猛進型だ。俺の行動の二手先を読んでも、自分を俯瞰はできていない。」

俺ならばジェネレーターを潰された時点で後退する。あの裏拳は、ファイターとしての最適解であり、ビルダーとしての最悪解だ。

「比べてガンプラは、あんた自身をよく理解して設計されている。すぐ側で見守ってきた、相棒のような人間でないと作れないさ」

それは半ば経験則からでもあった。

天才的な戦闘センスを持つ人間は、得てしてビルダーには向かない場合がある。

それは俺の自惚れではなく単純に相性の問題だ。自炊できる人間が、みんな美味なフルコースを作れる訳ではないのと同じである。

例えば第七回大会を制覇した彼らがそうであり、かつての俺たちもそうだった気がするのだ。

「ああ、認めるよ。お前のAGE―は、俺が好きだったタイプだ」
今はどうかかわからないから、あえて過去形で呟く。

掠れた記憶に沈む過去の自分に代わり、俺はそう相手を称賛した。

side コウイチ

「アレックス・メルフォール?」

僕の挙げた名前に、小首を傾げる短髪の少女。数日前に解決をみた『コスモス』事件の中心人物、アイドルグループのセンターだったハイバラ・キミコさんだ。

僕らは今、近くの公園のベンチに並んで座っている。

アシハラ活躍で事態は沈静化し、ネットの風評も急速にしぼんでいく中、久しぶりに連絡がついたのだった。

「それが、ウチのグループについて変な記事書かせた奴な訳?」

「アシハラによると、そうかもしれない、って話。それで、従兄弟から聞いたアレックスの機体の特徴を持つガンブラを、過去のデータから発掘してみたんだ」

僕がハイバラさんの前に出したのは一枚の写真。

紫色の機体の全身にキャノン砲、ミサイルランチャー、バズーカ等々を満載したガンダムタイプだ。それは従兄弟である審判員、シユンが語る『暁 雷光』によく似たコンセプトを持っている。

関東のとある大会に出場した一機体に過ぎないが、僕はつい注目していた。

「確かハイバラさんも、ファイターとして大会に出場したことがあるんだよね?」

「くすつ」

「え?」

彼女は僕の提言に対して、おかしそうに吹き出した。

我ながらなかなかあたりを引いたのではないかと思ひ、全国大会まで出場経験のある彼女に尋ねたが、よほど間抜けな答えだったらしい

「あなたの情報収集能力はすごいし、実際それで助けられたけど、この子は違うわ」
「そうなのかい？」

「だって、これ作ったのチヒロでしょ？」

「チヒロ……？」

「ちよつと前に、関東の大会で知り合った女子ビルドファイター仲間」

そういうと彼女はスマートフォンを取り出すと、しばし指先で操作してその画面を見せた。

「ほら」

そこには今時の若者らしくデコがなされた、二人の女子高生の写真が写っている。左で元氣よくVサインをしているのはハイバラさんだが、右でややこわばった表情の少女には覚えがない。

背が高く、かなりスタイルがいいので大学生や社会人のようにも思われるが、顔つきにはまだあどけなさが残る。おそらく、ハイバラさんとほぼ同年代なのだろう。

「彼女が、チヒロさん？」

「そう。トクガワ・チヒロ。人当たりはあんまりよくないというか、嫌な奴に皮肉を叩きつけちゃうあたりはユウジに似てるかも？」

「それはまた、出会ったら胃が痛くなりそうだ」

「大丈夫大丈夫。ユウジよりはるかに真っ直ぐだから。良くも悪くも。で、ビルダーとしての腕なら世界大会級よ」

「ずいぶん大きく出たな、と僕は驚いた。写真だけではバランスを殺さない程度に火器を配分するセンスが素晴らしい、というくらいで、相変わらず僕に審美眼はない。」

それでも、世界大会級は大げさではないか。

「アーティスティック・ガンプラで優勝とか？」

「それよりもすごいわよ。あの子の作ったガンプラ。去年の世界大会でベスト4なんだから」

「それはまた……言葉通りだね」

「そう。ファイターは別にいたから、このエンプレスガンダムとコンセプトは違うらしいけど、名前は確か。ガンダムOEGA、だったかな？」

それからハイバラさんは脚をぶらつかせながら、まるで我が事のように、友人との思い出を語り出した。

sideユウジ

『……そうですね。このガンプラで、簡単に勝ちを譲るわけにはいきません』

OEGAはしばし自分の拳を、いや、機体そのものを眺めていたが、やがて覚悟を決めたようにこちらへ突きつける。まだやる気という現れだ。

「大人げない奴だな。たかがタイタス一機だぞ」

俺は相手を焚きつけたことを少し悔いた。

次はエネルギー効率を改善し、サーベルを差し入れる余地はないだろう。自分で敵の隙を少なくしたなど、笑い話にもならない。

OEGAが来た。次はサイドステップを織り交ぜた、変則的な呐喊だ。

俺が取れる選択肢は一つであった。

サーベルを振りかぶり、正面からぶつかり合う。

ビームナックルはサーベルの光刃を霧散させて、アデルの左腕を轢き潰しながら胸部装甲にぶち当たった。

「ぐっ」

もんどり打って戦場を吹き飛ばされるアデル。廃墟を構成するビルに何度も叩きつけられ、俺はコンソールの激震を耐えるが、今の一撃であっけなく機体状態はレッドゾーンへ入った。

重すぎる。掠っただけでセンサーが潰れるわけだ。正面のモニターがけたたましい

接近警報を鳴らすが、想定以上にダメージが大きく、体制を立て直すのが遅い。

今度こそやられる。

「だが最近の俺は、諦めが悪くてな」

俺は唯一青く光るモニターに指先で触れた。

アデルが青く輝くのと、OEGAのナツクルが刺さるのは同時であった。

跳躍。

既に死に体だった機体が、にわかに関力を漲らせて跳ぶ。ビルの上に降り立ったアデルの、ビビが入った胸から、プラススキー粒子の光が漏れ出していた。

『……有り得ない、と言いたい所ですが、本物なんですね』

「本物ではない。こいつは仮初めの『RGシステム』だ」

第七回世界大会で、誰もが憧れた技の極致。

多くのビルダーが再現を試みて膝を折ったそのの、現象だけでもなぞってみせている。

中破したアデルのフレームへ、強引に粒子を流し込めば、こうしたドーピングじみたこともできるといふ訳だ。

「完璧な再現はできなかった、らしい」

『らしい？』

「忘れたんだよ。ただ、どういう訳か俺にはこれが作れる。そういう結果があるだけだ」
『なにやら、事情が複雑そうですね』

「ああ。だが、それは今は関係ない」

アデルの、右腕が痙攣する。

粒子の膨大な出力に悲鳴を上げて、解き放たれる時を待っているのだ。胴体という致命的な箇所に、拳を甘んじて受けたのは、せめてこの腕を温存するためだった。

「次で決める。」

『……………』

答えは待たない。

だが、その纏う雰囲気の変化で、相手もそのつもりであることはわかった。

アデルはビルから身を投げ、OEGAは上体を後方へ捻る。ビームナックルが肥大化した。

おそらくは最大出力。俺はそこへ向けて自由落下に任せて拳を振り下ろした。

激突と閃光。それは廃墟の仮想距離にして半径数メートルを、更地へと変えた。

sideアレックス

『神器』の定義が曖昧である以上、その所有者というのは、数多く存在する。

ガンプラファイア『ドラド』に刃を入れるため、事前調査を繰り返す中で、アレクシ

アが一つのデータを拾ってきた。

第九回世界大会の対戦映像とされているものだ。

真紅に染め上げられたデステイニーガンダムの改造機。それが複数のサブアームを保持するグフと戦闘を繰り広げていた。

グフの副腕がデステイニーの腰部に装備されたドリルスピアを奪い取る。己の武装を盗まれたことに動揺したか、デステイニーは胸に蹴りを受けてビルへと突っ込んだ。

グフはドリルスピアを柄に接続し、デステイニーのブーメランをもともせず距離を詰める。

とうとうマウントポジションを取り、相手の悪あがきのバルカンこそあれど、確実なトドメが落ちるはずだった。

「これか」

ムラサメが『神器』の可能性あり、としたのはこの直後に発生した現象である。デステイニーのいた箇所が実際に爆発したにも関わらず、本体はグフの背後に回り込んでいた。

右手が光り輝き、そのバックパックへパルマ・フィオキーナが叩き込まれたところで、妹は映像を止めた。

「ビルドファイターはトウドウ・ヘイタさん。第九回世界大会ベスト8です」

彼女によるとこの機体『ステイニージョーカー』はアブソープシールドの真似事から、独自の現象を連鎖的に会得したという。第七回大会にて出現した『神器』のひとつ、『粒子変換技術』に指先をかけている訳だ。

「米国の支部壊滅にも、何人かこの年の関係者が関わっていたことから、ムラサメが重点的にマークせよ、と」

「しかし、よりにもよって審判員の受験生か。このタイミングで首を突っ込めば、ナガイと正面闘争になりかねん。」

それはまだ早すぎる。

いくらアレックス・メルフォールとはいえ、相応の準備が必要なこともあるのだった。今回手を出さん。いずれ事態が変動したら手はつけると本部に伝え、リストにだけ入れておけ」

オレはトウドウとかいうそのビルドファイターの情報を眺めた。赤く逆立った髪の小柄な男の顔写真の下には、いくつか経歴が並べられている。そこに、つい最近出くわした流派の名前を見かけて、思わず顔を歪めてしまった。

「心形流か。奴らはひよつとして、オレの視界に入る特殊能力でも持っているのか？」
そんな独り言に、アレクシアは苦笑いを返した。

sideユウジ

「それで、なぜお前がここにいる」

「あー、話すと長くなるんだわ。このマドカ・ケイクンはアメリカで療養中なんだが、この夏休みに帰国することになったのさ。その時、外せない仕事で同行できなくなっちゃまったこいつの友人に代わって、たまたま日本に帰ってきていたオレちゃんか、お守りをするようになったのよ」

俺は目の前で肩をすくめる男、キノ・シユンの態度に眉間を抑えた。

話はバトルは終わった時にさかのぼる。

アデルが全粒子を使い切ったRGビルドナツクルは、OEGAの左腕を正面から潰すことに成功したが、こちらもフレームごとひしゃげていた。

相手には格闘技の心得がある分、拳の当て方に一日の長があつたのだろう。

そして相打ちになった以上、アデルの敗北は必然であつた。

あのビルドナツクルは粒子をすべて使い切る一撃必殺の技。たとえ機体が万全であろうと、動けなくなってしまうては無意味だ。

無慈悲に戦闘終了が告げられ、粒子が収束する。

「……タイタスはやる。好きに持っていけ」

「ええ。ありがとうございます。いいバトルでした」

丁寧な一礼の後、瘦身の男はバトルルームを出た。その背に続いて退室した俺は、キノに遭遇したのである。

「お前がやらなくても、この地域の審判員がいただろう」

「まあ、あつちでのいざこざの時、色々借りができたからな。返さないんじやあ男が廃るつてもんよ」

自慢げに鼻の下をこするキノに、OEGAの使い手、マドカ・ケイが声をかける。

「あの、キノさん。ここにあったタイタスを買いたいんですが」

「タイタス？それならお前らがバトルしている間に買われちまったぞ」

「え？」

「なに」

キノの言葉に俺たちは思わず顔を見合わせた。思えば景品として確保しておいた訳でもない。誰でも取れる状態だった。

事の推移を知らない第三者が、漁夫の利を得たのだろう。

これで俺たちのガンプラは骨折り損のくたびれもうけという訳である。

「無意味なバトルになっちまったな」

「そんなことはないですよ」

俺の言葉を、マドカは否定した。両腕を失ったOEGAを取り出し、俺へみせる。

その機体は傷だらけでありながらどこか誇らしげであった。

「楽しかったです。あなたとのバトル。次はもっと、強くなりますから」

俺に劣らず表情変化に乏しい顔に、わずかに微笑みが浮かぶ。

まるで青臭い映画的一幕だが、そうした所作を、肝心なところでやつてのけるところが憎たらしい。

そして、どうやらこいつも、生粋のガンプラバカなのだ。

「……直すか、ガンプラ」

「ええ」

「おつ、じゃあオレちゃんも混ぜて」

俺の提案にキノがにかり、と白い歯を見せて便乗する。俺たちは三人分作業をするスペースがあるかを、店長に尋ねることにした。

side ???

とある駅前、人通りの少ない通りに面したところに、トタン板で覆われたみすぼらしい小屋がある。今時そんな建物があるだけでも異様だが、その看板に『占い』の字があることが怪しさを増していた。

この相乗効果で小屋に人は滅多に寄り付かない。本当にそれを、必要とする者以外は。

「凶。運勢最悪。これから一年はまともな人生歩めませんよ。あなた」

「……わかつている。しかし、どうしても成し遂げたいのだ。少し、君の占いの保証が欲しくなった。」

小屋の暗がりの中で、二人の人間の声がこだまする。一人は穏やかな青年のもの、もう一つは、やや精気を失った、歳を感じさせる男のものだった。

「占いとは当たるも八卦当たらぬも八卦といえます。それを繙る藁にするなんて、本当に仕方のない人だ」

「……」

「残念ですよ。僕も、あなたのファンでしたから」

「そうか……すまないことをするな」

ギツ、と椅子を引く音がする。年上の男が、席を立ったのだ。吊るされた豆電球によって、ようやく初老の男だとわかった。

「では、私はこれで失礼する」

「ええ。二度と会うことはないでしょう」

きつぱりと告げる青年の声に、初老の男は悲しそうに眉を八の字に寄せると、小屋から出て行った。

錆びついた扉が音を立てて閉じられる。

後には静寂と、布をかけられた机。そして、その上に置かれた『ジオング』が残された。

「……ウォルターさん。ただの人間がルイス・キャロルの真似事をすれば、それはただの狂気ですよ？」

そんな占い師の言葉もあぶくのように消える。もはや彼には、届かないだろう。

PC—02 「番外編2 キノ・シユンの里帰り」

ガンプラ心形流。それは自らの心の在りようを、ガンプラという形で表現する、ガンプラ造形術の流派である。

伝説の第七回世界大会ではベスト16入りを果たしたヤサカ・マオ。

第九回世界大会で兄弟子を超えるベスト8に到達したトウドウ・ヘイタ。

いずれも関西ビルドファイターの間では語り草になる名前である。

さて、そんな心形流でも特級の曲者が一人いた。

「うーむ、相変わらず年寄りの足腰に悪い構造してんなあ。一応整骨院だろうが」

染めて逆立てた金髪に、サングラス。場違いなほど派手な紅白二色のアロハシャツという出で立ちの青年だ。

彼の名はキノ・シユン。

ヤサカ・マオの同輩ながら、長らくアメリカに滞在していた無冠のビルドファイターである。

彼は世界大会で華々しい活躍をしたことはない。しかし、大会の秩序を守る公式審判員として、その腕を磨いてきた。

「ウシワカの野郎、どんだけ口が硬いんだ。時間はあんまりねえし、弟弟子の電話番号くらい教えてくれたっていいじゃねえか」

彼が思い返すのは、つい最近任命された東北のSD使い、ウシワカ・ミノルのことだ。

一度だけ任務でテレビ電話を交わし、彼の傲岸不遜な態度をシュンは気に入った。

数少ないSD規格を扱う審判員として一方的な仲間意識まで抱いたのである。

さらに、弟弟子にあたるトウドウ・ヘイタと対戦したと風の噂に聞いてからは、もうストーカーのごとくつきまとうまでであった。

『教えてくれたらアメリカ産のとびつきり甘くて美味しいスナックあげちゃうから!』

甘党の彼に何度も頼み込んで、十五回目の電話で強引に評判を聞き出したのだった。

『とにかく!それ以上を知りたいならキョウタナベで直接戦えばいいだろう! いい加減審判員の守秘義務に訴えるからな!』

『Thank you ウシワカ!』

『まったく、ボクは忙しいんだぞ……』

そんな会話をスピーカー越しに交わし、彼はここにいる。

今頃、ダンボール三箱に詰め込んだ菓子が入ったウシワカの下へ郵送されているだろう。

相手には悪夢でしかないが、そういうことを善意でやらかすのがキノ・シュンという男である。

「さて、いつちよやりますか」

サングラスをくい、と上げてシユンは白い歯を見せて笑った。

シユンが見上げていた段差を上った先。整骨院を通り過ぎたさらに奥に、ガン普拉心形流道場はある。

その中はさながら柔道や剣道を行うような、杉無垢材の床で、窓から青白い光が差し込んでいた。

「ふむ……」

道場の一段高くなった足場で、あぐらをかいて座る人物がいる。

つるつるとした頭に、長いヒゲを蓄えた厳しい顔つきの老人。この心形流の師範、珍庵だった。

彼が見守る中、門下生たちは藍色の胴着に身を包み、静かにガン普拉の製作を続けた。
いた。

そこへ、一発の爆弾が放り込まれるのも知らずに。

「Good morning・後輩諸君！今日もガン普拉、楽しんでるか！？」

何事か、と門下生たちは背後に振り向く。

珍庵は、片眉を上げてその細い目を見開いた。

アロハシャツの怪人物、キノ・シユンの登場である。

「あれ？マオはいねえのか。やっぱりワールドクラスとなると忙しいかね」

「……キノ・シユン」

「ん？」

門下生の中でも、入り口に近い位置にいた短髪にメガネをかけた男、スギモト・ユウスケが彼の名を呼ぶ。

シユンはその姿をサングラス越しに認めると、嬉しそうに両腕を大きく広げた。

「へいブラザー！元氣？」

「ブラザーじゃない。スギモト・ユウスケだ」

「ユウスケな。よし、ユウスケ！元氣？ガンブラエンジョイしてる？」

「あ、ああ。じゃなくて！あんた、勝手にアメリカに行つたはずじゃ」

「今更どのツラ下げて、ってんだろ？わかってんだよ、そんなことは」

スギモトが警戒するのも無理はない。

シユンは確かにヤサカ・マオとほぼ同時期に入門した古株の弟子である。

しかし、一年と経たずに彼はアメリカへ飛び出してしまったのだ。

『オレちゃんの心はここにない』

そんな言葉を手紙に書き残して。

そこから長い期間ろくな連絡も寄こさぬ相手だ。破門されたと、後に続く弟子たちが

白眼視するのも仕方ないだろう。

当のシユンはそんな視線は気にもとめず、師匠である珍庵の下へずかずかと歩み寄った。

年少の弟子たちが慌てて道を開ける。

珍庵は腕を組み、不肖の弟子の笑顔を見上げた。

「師匠。お久しぶりです」

「……うむ、元氣やったか？」

「そりやもちろん。アメリカに渡ってよかったと思ってるぜ」

「シユンの追い求める心は、そこにあつたかいな？」

「そうでなきや帰つて来てねえ。そして今は、1000%の私情でここにいる」

「ほう」

「オレちゃんの弟弟子、トウドウ・ヘイタに会いたい」

シユンの背後で門下生たちがざわめいた。自分たちと同じ釜の飯を食った者が、とんでもない人間に目をつけられたと。

スギモトが代表してシユンに告げる。

「あいつは、免許皆伝で道場を出たぞ」

「でもメルアドや電話番号くらい知ってるだろう？まさか、ウチとは関係ありません、な

んて言うんじゃあるめえし」

「しかし！」

なおも抗議するスギモトを珍庵は片手で制すると、どっこいしょ、と声に出して立ち上がった。

「ええやろう。シュン。ヘイタの連絡先教えちやる」

「さすが師匠。話がわかるねえ」

「ただし！そこにおけるワシの弟子百人に勝つのが条件や。己の心の形、見つけ出したんやならでできるな？」

「おうよ！」

シュンは力強く頷くと、腰につけたホルスターから愛機を取り出す。BB戦士三ガンダムをベースに、三国伝をイメージした中華風の衣装を纏ったSDだった。

『Field 1 Space』

「では、はじめい！」

『Battle Start!』

「キノ・シュン。『三式臥龍 孔明ガンダム』カツ飛ばすぜ！」

瞳なきカメラアイがひととき強く輝くと、機体はカタパルトから射出される。

広大な宇宙空間の果てから、数十機のガンプラが押し寄せた。

「おい師匠！ヘイタの百人斬りのタイムは!?」

「18分57秒や」

「なら19分以内に全員倒せなかったら」

両手に曲線を描いた刃が収まる。三式臥龍の周囲の空間が揺らいだかと思うと、次の瞬間には、先頭に陣取っていたリック・ドムとウインダムを両断していた。

「その時はオレちゃんの負けでいい」

『舐めるな!』

ムキになった若輩の弟子数名が前に出る。バスターガンダムに、カラミティガンダム、スーパーカスタムザクF2000。

いずれも火力には自信のある機体で、それらが一斉砲撃を仕掛けた。

三式臥龍はその飽和攻撃の隙間を縫うように飛ぶ。ブレーキングなしの、次元跳躍してみた移動はあつという間に彼らの背後へ回り込んだ。

「いい弾幕だ。だが、射撃つてのはこうやるんだぜ!」

肩口の衣装がめくれ上がると筒状の砲身がせり出して、圧縮された粒子を解き放つた。

振り返った途端に三機は光の中へ消えた。

既に撃った場所に三式臥龍はおらず、あつけにとられていたギラ・ドーガのコック

ピットに無銘の剣を突き立てていた。

「は、速い……」

すべてのファイターが一斉エントリーできる訳ではないので、後方で控えていたスギモトが呟く。かつての百人組手で、トウドウ・ヘイタが駆つていたデステイニージョーカーも、撃破された側が視界に一切捉えられない速度でこちらを殲滅していた。

しかし、シュンも大概だ。あれから更に腕を磨き、腕を上げた弟子たちを一蹴している。

恒例のモバイルアーマー枠、ビッグ・ラングが上下に泣き別れになった時、珍庵は弟子に呼びかけた。

「なあユウスケ。シュンはワシの下からいこうなって、どのくらいかけて審判員になったと思う？」

「わ、わかりません」

「こんだけや」

珍庵は指を三本出した。スギモトは目を見開いた。

「たった三ヶ月で」

「違う」

「えっ」

「三日や。シユンはアメリカに渡つてすぐ、審判員の試験をストレートで合格しよつた」
「……なんと」

「ユウスケ。あいつは仮にも公式審判員。イオリ・タケシと同じ職場にいる男や。気い引き締めとき」

「……はい！」

スギモトは正面を見据え、自らのガンプラを手に取る。

鮮やかな桜色のスタークジエガン。全身に火器を備え、射撃とスピードに特化したガンプラ『ジエガン・カミカゼ』である。

「キノ・シユン！俺が相手だ！」

「お、来るか、ユウスケ！」

馴れ馴れしい調子でシユンは答える。

出撃したジエガンの横を、ジンとジnkクスを固める。彼らはかつて、デステイニージョーカーが最後に相手取つた三機だった。

三式臥龍は沈黙したヴァーチエを横合いへ蹴飛ばすと、再び空間を歪ませる。

フィールドを構成するプラフスキー粒子を強引に吸収し、推進剤に変えているのだ。

「来るぞ！対『龍帝』陣形！」

「了解！」

三機がちょうど三角形の頂点に位置するように陣取ると、ジェガン・カミカゼがバツクパツクに背負った四門のガトリングを一斉掃射する。

しかし、先ほどの砲火すら潜り抜けた速度だ。三式臥龍は瞬く間にジェガンの眼前へ姿をあらわすと、メガ・ビームキャノンを放とうとした。

「今だー！」

「ー！」

果たしてそれは、スギモトの作戦通りだった。

ジンとジnkスが、同時に『ジェガンめがけて』ライフルを発射する。

「おいおい、味方ごとかよー！」

さすがに虚をつかれた三式臥龍は、ジェガンを庇う位置で剣を振るうと、ビームを切り裂いた。その背後で、スタークジェガンがすべての火器、増加装甲をパージする。

その腕部からサーベルの柄が飛び出すと、ジェガンは固くそれを握った。

「おおおおおー！」

「なにっ！」

弾丸、否、まさしく勝利への神風を吹かせてジェガンが呐喊する。その速度は一時だけ、三式臥龍の後退速度に追いつくほどだった。

シュンは肉薄する弟弟子の姿を見て、にかりと、心底嬉しそうに笑った。

「なるほど、こいつはすげえ」

サーベルの光刃が三式臥龍の胴体へ迫る。

ジンとジnkスのファイターは、スギモトが三式臥龍を仕留めると確信した。

しかし、その予測は裏切られる。

「なっ」

「やるじゃねえか、ユウスケ。だが、あいにくオレちゃんはヘイタじゃねえ」

サーベルは三式臥龍に届く寸前のところでチリチリと散っていた。

ビーム・バリア。

本来は三ガンダム的高速移動の際、抵抗を軽減させるために前方に放射するものであり、戦闘用ではない。

しかしシユンはこれを展開することで、刃を形成する粒子を拡散してみた。

もし、これが実体剣ならどうしようもなかったろう。何よりも、あのデステイニーガンダムには、搭載されていなかった機能である。

対ヘイタ用として組み上げられた作戦では、想定されるはずがない要素だった。

「オレちゃんの、勝ちだ」

三式臥龍が空間を歪ませ、ジエガンの前から消失する。

そこから10秒以内に、三機のガンプラが切り裂かれ、百人組手は終了した。

「……これが、トウドウ・ヘイタの連絡先だ。今頃夏休みの真つ最中だ。暇を持て余しているだろう」

スギモトが差し出したメモ書きを、シュンは黙って受け取った。

先ほどはあんなに楽しそうだった彼だが、どこか冷静な雰囲気醸し出していた。

「ユウスケ」

「なんだ」

「オレちゃんは最初からヘイタの記録を塗り替えるつもりでいた。だが、それは叶わなかった」

記録は18分59秒。シュンが自らに課した制限時間ギリギリであった。

「自信満々だったか、といえば嘘だ。だが、せめて同着くらいかと思えばこのザマだよ。」
珍しく自嘲するシュンに、スギモトは呆然としていた。

そんな弟弟子を見て、彼は、また太陽のような笑顔に戻って言う。

「お前ら一人一人が、ヘイタとやりあつた時より強くなつたからだ。それが百人ぶん寄り集まつたから、この結果が生まれた。周りに自慢しまくれ！」

「お、おう」

「そんじゃあ、オレちゃんはヘイタに会いに行く。またな！」

ほん、とスギモトの頭に掌を乗せたシュンは、それから背を向けてさつさと道場を

去っていった。後にはバトルで息を切らせた弟子たちと、スギモト・ユウスケが残された。

「……次は、絶対勝つからな」

彼は嵐のように過ぎ去った男の方角へ、小さく呼びかける。

表情には悔しさが滲んでいたが、どこか晴れ晴れとしていた。

「いやあ、そんな感じで苦勞してゲットしたチャンスだ。受けてくれや。バトル」

「とんでもない人だな、アンタ。スギさん、大変だっただろうなあ」

キョウタナベ市、九十九商店街。

シユンは今、一人の少年と相対している。彼と違い、天然で逆立った赤髪を持つ男。第九回世界大会ベスト8の心形流、トウドウ・ヘイタだった。

彼は見ず知らずの兄弟子からの電話に大いに警戒したが、シユンがスギモトの名前とガンプラバトルの誘いを口にする、意気揚々とやって来たのである。

シユンから念押しされて、世界大会で使用した紅のデステイニーガンダム『デステイニーガンダムジョーカー』を持参していた。

「やるかあー！」

「おう！」

威勢の良い掛け声の応酬。

同時にベースヘガンプラをセットすると、展開されたコンソールを握る。

「キノ・シュン 『三式臥龍 孔明ガンダム』」

「トウドウ・ヘイタ 『デステイニージョーカー』」

「カッ飛ばすぜ！」

「行きます！」

全く同じタイミングで射出された二機のガンプラは、戦略もへつたくれもなく、正面からぶつかり合った。

「でえやあ！」

デステイニージョーカーのアロンダイトシアンを剣でいなした三式臥龍はビームキャノン撃とうと試みる。

それを察知したヘイタは、デステイニーの右手を輝かせた。

「ラプター……」

「そいつはウシワカから聞いた！」

三式臥龍は空間を歪ませて、凄まじい速度で後退。彼が「ラプター・ファング」と呼ぶ近接ビーム砲による掌底は空を切った。

しかし、その光球が滞空し続けていることにシュンが気づく。

「やべっ！」

「フアング・ストレイト！」

間髪入れず、デステイニーが光球をサッカーボールのように蹴り出した。とつさに急速移動した直後、貯蓄した粒子は再度の回避にはやや足りない。

そう判断したシユンは三式臥龍の短い脚を振った。

「『ストレイト返し』！」

「マジかよー！」

あろうことかヘイタの必殺技の一つを蹴り返す。

デステイニーはシールドを展開し、自らの攻撃を防いだ。ただ霧散するのではなく、粒子が吸収されていく様を目撃したシユンは、子供のようにはしゃいだ声を上げる。

「アブソープシールドじゃねえか！ かつけえ！」

「へへ、俺なりのアレンジだ！」

自慢げにデステイニージョーカーは得物であるシザーソードを構える。三式臥龍は粒子を吸い込みながら、あえてその間合いに踏み込んだ。

突き出した無銘の剣、その右手側が半ばから折れる。怯まずにもう一方がデステイニーを襲うが、相手は突如自ら爆発した。

ヘイタが得意とする爆発する残像である。

「こつちだー！」

「なんの、それくらいー！」

小さな体軀を180度回頭させた三式臥龍は、左手に握った剣を逆手持ちで振り上げた。

刃はデステイニーの胸部装甲、その前面を削り取る。負けじとデステイニージョーカーが振るったシザーソードは、三式臥龍の右半身を捉えていた。

メガ・ビームキャノンの砲火。

間一髪、三式臥龍は左右泣き別れになるのを回避する。

だが、その右肩に手ひどい破断の痕跡を残していた。

「さて、オレちゃんもそろそろ全力全開を……ん？」

いよいよテンションが最高潮になったその時、水を差すように通信が入った。審判員専用回線。こうしたバトル中に、電話にやって来た通話をバトルシステム側に繋いでくれる機構だった。

画面に現れたのは、整った顔立ちの金髪の男。シュンはアメリカにおける、ガンブラバトル自警団「ムラサメ」をめぐる事件で、その人物と面識があった。

「ジャック・シルバーフィールド！オレちゃん、今忙しいんだけど後でじゃダメかね？」
「すまないが、こちらでも火急を要する。例の、マドカ・ケイがもうすぐ日本に到着する予

定なんだ。今から迎えに行つて欲しい」

「バトル中なんだ、決着つけてから……」

「却下だ。間に合わなくなるぞ」

彼が、自分がどこにいるのか把握した上で電話を寄越していることに気づいたシユンは、ギリ、と歯ぎしりをすると通信を切った。

通信を聞いて動きを止めていたデステイニージョーカーに、三式臥龍が土下座の体勢をとる。

「すまねえ！ヘイタ！勝負はまた今度だ！」

「おう、ケイが来るならしようがねえな。あいつによろしく言っておいてくれ」

「Thank you!後でアメリカの面白いアクション映画のDVD BOXやるから！」

「いや、それはちよつと困るかな？」

そんなヘイタの返事も耳に入らず、シユンはGPベースを外してガンプラを回収する。

そして商店街を飛び出すと、駅の方角へ全力疾走していった。

その後ろ姿をほかん、と見送るヘイタは、やがて堰を切ったように笑い出した。

「ははは、変な人だなあ」

キノ・シュン。

アメリカ帰りの心形流ビルドファイター。

彼が2分遅刻でマドカ・ケイと合流し、黒いアデルとのバトルを目撃することになるのは、それからしばらく後のことである。

Parts. 06 「戦いと因縁（きずな）」

S i d e ユウジ

広々とした剣道場。

日光が左右の窓から、磨かれたヒノキの床と、中央にたたずむ黒いアデルに差し込んでいる。

ここはプラスキー粒子による仮想空間であった。

モニターの中には三体のハイモックがいる。

その寸詰まりな首とずんぐりむっくりとした胴体を見るのも、ずいぶん久しぶりだった。

アデルは腰部からサーベルの柄を抜き取ると、正眼に構える。

『BATTLE START!』

無感情な電子音声と同時に、アデル、ハイモックが踏み出した。

ヒート・ホークの刃が肩口に迫るその瞬間、アデルの胸部が大きく膨れ上がった。

胸のプラスキー粒子結晶体が急ピッチで粒子を供給し、それが腕から掌まで伝わり、そして、破裂する。

「乾ききつていなかったか」

だらりと右腕が垂れ下がり、ハイモックの攻撃が肩口に突き刺さった。

アデルが膝をついたところへ三機が一斉に群がる。

バディであるヒカワ・コウイチの慌てふためく顔がモニターに映しだされた。

『バトルを中止する！』

「いいや、ヒカワ。このままだ」

アデルは肩口に刃を受けたまま即座に立ち上がり、左手で斧を鷲掴みにした。

パワーゲインの差に任せて強引にそれを奪うと、左から迫るハイモックの頭部に叩き込む。

すかさず右へ蹴りを入れ、足裏のスパイクを隆起させて二機目の胴体を貫く。

正面のハイモックが拳を振りかぶるより先に、もう一方のサーベルへ手が届き、相手を上下に両断できた。

中途半端な抜刀術でも案外無理がきくものである。

『BATTLE ENDED』

「この程度なら、中止するまでもない」

粒子が筐体に回収されて、試験が終了する。

人工の冷たい壁にとり囲まれた、殺風景な練習室に明かりがともる。

後には俺と、困り顔のヒカワが残されているのみであった。

あいつは眉をひそめ、手にもったタブレットで今の戦闘記録を整理していた。

「だからダメなんだって。お前のRGシステム自体のデータが全然回収できていないじゃないか。腕の合わせ目消しが中途半端だった時点で、止めるものなの！」

「そうか」

俺はいつものようにヒカワの抗議を受け流した。

今回のテストは急ぎよ入れられたものであった、

俺のアデルには、かつて第七回世界大会で使用された『RGシステム』と、同様の現象を引き起こす機構が内蔵されている。

それを聞いたヒカワがぜひともデータを取りたいと申し出てきたのだ。

結果としては、右腕の修復が甘かったばかりに失敗したが、こちらとしては練習になつたので気にしていなかった。

「……」

「なんだよ。僕の顔になんか付いているのか？」

「いや？」

俺とヒカワがこうして会話をする機会も随分増えたものだ、としみじみ思う。

特務班が警備部と広報部の共同管轄になると決まっただけの数日間は特にそうだっ

た。

これまで互いに交流をしなかったツケで、持っている情報に大きな齟齬が発生していたのである。

俺はヒカワに、自分がアレックス・メルフォールと友人関係であったことを打ち明け、同時に、まだ過去に何があつたかまでは詮索しないでほしいと伝えた。

ヒカワはそれを快諾し、アレックスが『ムラサメ』という組織に所属し、『神器』という技術体系を盗み取る泥棒まがいの行為を行っていると教えてくれた。

その情報を呑み込むにはまだ時間がかかるし、互いの性格の相性が完璧に改善された訳でもない。

俺の主観で、進展を感じただけであつた。

「しかし、工作精度が高いおかげとはいえ、合わせ目消しなんて単純な工作でこんなことができるとは……」

「システム制御に必要なプログラムも別途に必要なだ。そちらはGPベースに入っていたのを使った」

「入っていた？ そんなまるで他人事みたいなの……」

「ワシが昔教えたやり方の丸パクリじゃからな。なあ？ ユウジ」

ヒカワの言葉を遮るように、記憶の底で聞きなれた声が出た。

そこには、杖をつきながら、こちらに歩み寄ってくる着物姿の老婦人がいる。
ナガイ・トウコ。

俺の師匠にあたるはずの女性である。

ヒカワはその姿を見ると、丁寧にお辞儀をした。

「警備部長。お疲れ様です。お昼頃には静岡の本部に戻られるとうかがいました」

「うむ。その前にいくつか野暮用を片付けようと思つての。弟子との語らいも、まあその一つじゃ」

「ああ……じゃあ、僕はデータの解析に行きます」

「そうしてくれ」

ヒカワはなにか得心がいったかのように目を輝かせると、俺に微笑んでから練習室を立ち去った。

こういう時だけいやに気が利く男だ。

「ごまかすのが下手ですね」

「空気を讀んだと言え。ヒカワ・コウイチに、記憶障害のことを伝えておらんのじゃろ」

「おっしゃる通りで」

「まったく。肝心なことを殆ど伝えていないではないか」

「……俺は人間不信なんですよ。ご存知でしょうか？」

そしていけない気遣いをするのは、師匠のいやらしい点の一つであったと、今思い出した。

練習室には俺と師匠だけが残されている。

バトル用の筐体もスリープモードに入っただので、部屋は完全な静寂に包まれた。

まったくの無言。気まずい空気だ。

やがてどちらかが示し合わすことなく、部屋のすみにあるベンチへ座る。

ぎし、ぎしり、とベンチがきしむ。

俺は手荷物にしまっていた弁当を二つとりだすと、片方を師匠へ突き出した。

「む？」

「……覚えている限りの、あなたの好物を詰めておきました。帰りの新幹線ででも食べればいいでしょう」

「……………どこまで思い出した」

「一年前に、アレックスと何かがあったこと。あいつと会って、戦わなければならぬこと。それぐらいは」

「つまり、料理上手は『ツガミ』から『アシハラ』になっても変わらなかっただけ、か」

師匠は安堵と落胆の入り混じったような声でつぶやくと、早くも弁当の包みと蓋を開けた。

中には生姜焼きと野菜の煮物、かつおぶしをふりかけた白米が入っている。彼女はふつと顔をほころばせた。

「お前もアレックスも、そしてワシも、豚肉が好物だった」

「俺はそれほども」

「その妙に素直でないところも変わらん」

「そういわれても、当の俺にその感覚はない。」

「師匠は弁当をしまつと、杖を自らの正面に引き寄せ、再び顔つきを険しくした。」

「険しいを通り越して、苦虫をかみつぶしたような、と言つてもいい、」

「さきほどお前の動きを見た。正直、かつてのお前よりひどい」

「……」

「居合切りをはじめとした剣術はたしかに、『心剣流』の戦法のひとつじや。しかし、我らの本懐はガンブラ造形術。その想像力を働かせ、思うままに機体を組み上げることにこそ重きに置く。」

「そういうと彼女は着物のたもとからガンブラを取り出す。」

「俺のアデルだ。」

「右手の損傷からしてコピーではなく、本物である。」

「おそらく、さつき弁当を渡すときにすり取られたのだろう。」

つづけてカッター、プラ板、接着剤、パテと、プラモデルの修復に必要な工具が次々と出てきた。

「このような『伝説の模倣程度』では、いつまでたつてもアレックスには勝てん」

そのしわくちやな手が真つ二つにされた亀裂にプラ板をあてがい、接着剤の筆先で輪郭を溶かしながらなじませていく。

ガンプラバトルの長い歴史で培われた『戦うための応急処置』だった。

しばしの時間ののち、そこに置かれたアデルは、明らかに左右の腕の完成度が違っていた。

右腕はそれ自体が完成品、一つながりのパーツであつたかのようにくみ上げられている。

これならば内側からみなぎる粒子の奔流にも耐えきるだろう。

「小手先の技に頼らず、そして基本をおろそかにするな。お前は本来、ビルダーなのだから」

俺がアデルを手にとつたその時、練習室の扉が開いた。

そこから見える廊下に、逆立てた金髪にサングラスとアロハシャツという奇天烈な恰好の男がいる。

ヒカワの従兄弟であるキノ・シユンだ。

こいつとの関係はヒカワ以上に手探りだ。記憶にある限り、こういうタイプの人間とは接したことがなかった。

それでも前例の反省から、自分の心境にやや正直になったことも手伝って、険悪な雰囲気にはならず済んでいる。

「ユウジちゃん、そろそろ作戦会議だぜ」

「了解」

「ユウジ」

立ち上がる俺の背中に師匠の声がかかる。

振り返って彼女の表情に一瞬ぎよつとした。

年端のいかぬ子どもがすがりつくような、泣きそうな顔だった。

だがそれも霞と消えて、いつもの厳格さをまとう老婦人に戻る。

「ヒカワ・コウイチに記憶のことを話しておらんのなら、これからも口を噤んでおけ。あの男は、優しすぎる」

「元よりそのつもりです」

「そして何よりも、無理にアレックスとの記憶を掘り返そうとするな。お前の脳髓は、それを思い出すことを拒否して、そうなったのだから」

「……善処します」

あえて曖昧な返事にとどめ、俺はキノの下へ向かう。

口ではああ言っても俺には他に道はない。

アレックスと戦わなければならないという強迫観念でここまでできた以上、もはやそれを捨て去った人生など考えられなかった。

今の返事できつと俺の心中は察してくれただろう。

なにせ、俺の師匠であるのだから。

Side コウイチ

警備部が使用している会議室に僕たち特務班は集まっていた。

巨大な円卓を中心におよそ二十の椅子があるが、着席しているのはたった三人である。

一人は僕。

二人目はバディである『特務ファイター』アシハラ・ユウジ。

そして三人目は加入したばかりの僕の従兄弟、キノ・シユンである。

「さて、ハカド班長から下された今回の任務について、オレちゃんが説明するぜ」

どういうわけか場を仕切っているのはシユンだった。

彼は椅子から立ち上がると、会議室正面のホワイトボードを掌でバン、と音を立てて叩く。

そこには数枚の顔写真と、彼の殴り書きによる補足が記されていた。

「技術スパイの事件以降、ガンプラマフィア『ドラド』の活動が活発化している」

「あの劇場の支配人が言っていたマフィアというのは、そいつらか」

「たぶんな。世界大会前に後顧の憂いを絶つべく、警備部は『ドラド』に対する一斉検挙作戦を行うことを決定した」

「それに特務も手を貸せと」

「そういうことだ。いやあ、ユウジちゃんは理解が早くて助かるね」

シユンは人懐っこい笑みを浮かべるが、アシハラは眉をひそめていた。

彼のような誰にでも馴れ馴れしい人間はどうしても印象がよくないのだろう。

とはいえ、アシハラと相性がいい者がいるのだろうか、という点は疑問でもある。

僕が二人のやりとりで苦笑いを浮かべていると、シユンはホワイトボードに書かれた

『情報源』という文字を大きく○で囲った。

「オレちゃんたちがやるべきことは、『ドラド』の動きをリアルタイムで把握できる情報源を確保することだ。候補は二つ。」

○の中には二つの単語が並んであった。

一方には『874』、もう片方には『G4』とあり、何かの形式番号あるいはコードネームを思わせる。

前者は00外伝のキャラクター名だし、やはり警備部で共有されている隠語だろうか。

「先にこの『874』について説明する。これは警備部の別件ともちよつと関係があるからな」

シユンは二枚の写真をマグネットから取り外すと、机の上に放った。

正方形の写真が斜めにかしいで机の上をすべる。

一枚は頭に紫色のベールをかぶった占い師のような人物の顔写真である。

その人相は判別できないが、全体からミステリアスな雰囲気の漂う人であることはなんとなくわかった。

もう一枚はおそらく、ガンプラバトル中の場面をキャプチャーしたものだ。

おそらく、と表現したのは、こちらの写真は焦点すら合っていないので、全体的に不鮮明だからである。

アシハラはその正体を見極めたいのか、ピンボケした写真を縦に横にと回転させて、検分していた。

「こいつの名前が『874』。ハナヨ、と読むらしい。口コミで評判の占い師だ」

「え？ 占い師が情報源？」

「これが案外バカにできないんだ。盗聴も監視もされない、信頼もできる他人の前で口

を滑らせる奴は多い」

「……こいつ、光学迷彩で姿を隠しているんだな?」

「そうそう。874が使うガンプラの数少ない手がかりといえる」

シユンが解説する横から、アシハラがガンプラの話題を差し挟んでくる。

彼はそちらにしか興味がないらしい。

このままではマニアックな話題に傾きかねないと判断した僕は、シユンに声をかけた。

「別件というのは?」

「警備部というよりは、こっちからの要請だ」

そういうとシユンは右手で敬礼のポーズを作る。

その所作が意味するところは、つまり警察だ。

ガンプラの違法操縦取り締まりなどを扱う警備部は、警察と協力関係にあった。

今回特務もその領域に片足を突っ込むということであろう。

「874はドラドの支配地域内で辻占をしているんだが、道路使用許可が出ていないそうなの」

「普段なら黙認しようと思っても、今回の件で警備部が出るなら」

「一緒に処理してほしいってことさ。そこいらの詳しいことは、現地で担当の警察官が

教えてくれるとき」

元々広報所属で、素人やエンジニアといったメンバーばかりだった特務班は法律には疎い。

シユン以外に刑事案件に詳しい人間がいることにほっとした。

「それで、もう片方が『G4』だっけ。こつちも占い師とかの名前かい？」

「あー、これはだな」

なぜかシユンは言いよどむ。

アシハラもその態度が気になったか、ちらりとシユンに目線を投げた。

顎に手をやったかと思えば、その場をぐるぐると歩き回る。落ち着かない。

僕はしびれを切らした。

「なんだよ。どうしたんだ」

「実はこつち、オレちゃんが現在進行形で調べているやつで、確証とかまるでねえんだわ」

「だったら書くなよ……まぎらわしいぞ」

「まあアレだ。自分で頭の片隅に置いておいてくれ」

笑顔でごまかして、シユンはホワイトボードの『G4』の文字を消す。

短い時間に限定して見せられたからか、僕はその単語に引っかけかりを覚えたままに

なった。

Side アレックス

オレたちが拠点としているホテルにはプールがある。

縦の長さ50メートルの長方形型を中心に、円形の小さなものやウォーター 슬라이ダーが点在する。

どういう気配りかは知らないが、ガンプラバトルのユニットまで存在していた。

そして、その清掃が行き届いたプールサイドに、水着に着替えたムラサメのメンバーが集まっていた。

無論、オレやアレクシアもその例外ではない。

ラッシュガードを羽織って、肌の露出を最小限に抑えてはいるが、一応水着を着用していた。

「先の『神器』回収任務はご苦労だった。今日は一日羽を伸ばせ。オレが許す」

「はい。ありがとうございます！」

部下たちはオレに礼を言うのと、思い思いの場所に散っていく。

大の大人がはしゃいでいる様子に、オレは苦笑をこぼした。

来日する以前から様々な活動を行っていた部下への慰労を込めて、今日はその広々とした空間を貸し切っている。

金にはこういう使い道もあるのだ。

「兄さん。私も泳いでできていいでしょうか」

「好きにしろ」

隣でアレクシアがそわそわとしていたことに、オレは最初から気づいていた。

彼女もここ数日情報収集に奔走していたはずである。疲れがたまっているだろう。

右手を前後にひらひらと振って許可を出してやると、妹は足取り軽くプールへ歩いて行った。

彼女がラッシュガードを脱ぐと、白い肌と水色のビキニが露わになって、プールサイドの白に溶け込むようだ。

十六歳ともなると、女性としてはおよそ完成系に近い色気があった。

オレは彼女の肢体を眺めながら近くの椅子に腰かけると、腕を組んで目を閉じる。

自分は休みなく、これからこのプールで待ち伏せである。

待つことおよそ一時間。

案の定、背後に誰かが立ったのがわかった。

杖を突く音からして老人だろう。そうなれば一人しか心あたりはない。

「こうして隙を見せなければならんとは、よほど信用されていないのだな？ オレは」

「たわけ。自分が何をしたのか、知っておろうに」

しわがれた声が頭上から降る。

オレはその主を見上げて、にやりと不敵な笑みを浮かべてやった。

桜色の和服を着た老婆、ナガイ・トウコだった。

彼女はオレに嫌悪感と殺意をぶつけていたが、オレにとっては今日の日光の方がよほど苛烈である。

「ユージに泣きつかれたと聞いた」

「ふん。貴様が余計な手出しをしたせいじゃろう」

「権力を使って、強引に特務の管轄を変えたそうだな。今回のユージの失敗は、特務を警備部の膝元に置きたいお前にはさぞ都合だったろうなあ？」

「……」

「ユージもかわいそうだ。頼りにした師匠が、この一年間で耄碌していたとは」

素人に仮初のライセンスを与えれば、どこかで破綻するのは自明だ。

弟子可愛さに見て見ぬ振りをして、子どもじみたワガママを振り回したのが、崇敬の対象とされた老婆の本性である。

もつとも、それを知るのはごく限られた人間だが。

「お主、罪悪感がないのか」

「オレにはどうでもいい話だからな。そのスタンスは昔から変えていないだろう？」

そう言い返してやると、彼女の唇のはしが、ぴくり、と引きつった。

よほどオレの態度が腹に据えかねるようである。

常に公正であり、冷静であることを要求される人間が、こうしてオレへ憤怒の感情をむき出しにしてくるのが愉快だった。

「ユージは事件を独力で解決した。オレは神器を回収した。どちらも得をして、損は帳消しにされた。ここに何の不都合があるうか」

「言わせておけば」

「ああ、言い訳は不要だ。ユージが手段を選ばずに解決手段を探したせいで、お前が尻拭いをする羽目になったという側面も理解はできる」

直感、フィーリングでバトルもビルドも突き進み、立ちはだかる難関を力業でどうにかしてしまうのがツガミ・ユウジの困ったところだ。

それで何度も選択を誤ったのに、周りの心優しい人間がすくい上げてしまう。友情だとか絆を紡げば紡ぐほど、自分の足元の綻びに気づかない。

そのしつぺ返しを受ける日にオレはどんな顔をしているのか。

オレは椅子から立ち上がると、この小さな老女を見下ろした。

「引き返させるなら今のうちだぞ」

『まだ進んですらおらん』

「よほど可愛がっているんだな」

「貴様が憎たらしいんじゃない」

「おおいに結構。憎まれることには慣れている」

その時オレは、ついでにちよつとした嫌がらせを思いついていた。

どうせこの女が、この場でムラサメをどうこうできる訳ではない。

可能な限りの妨害と心理的プレッシャーを与えるというのが、今後のためでもあるだろう。

論戦だけでは足りない。

そう考えていると、空気を読めぬ第三者が割って入った。

アレクシアだ。

妹はいつの間にか運動から食い気に走っていた。

「兄さん。そこで豚肉を串焼きにしていたので取ってきちやいました。兄さん好きです

よね？」

「それでもない」

「そ、そうですか」

「それよりもアレクシア、ガンプラバトルに乗り気なメンバーを集めろ」

「え？」

オレはうきうきと串焼きを両手にやってきた彼女を、さっそく使い走りにする。
アレクシアは首をかしげていたが、そこでオレの陰に立っていた小さな老女に気づいたようだ。

顔色を変えてプールサイドを引き返していった。

背後でナガイが、オレの意図を図りかねているのがわかる。

「なんのつもりだ」

「その歳でも稽古くらいできるだろう？ オレを倒せば気分もよくなる。一石二鳥だ」

「……自分勝手な男め」

ナガイはそう言うのと着物のたもとからGPベースを取り出す。

オレはそれを見てほくそ笑んだ。

駆け引きに勝ったことを確信したからである。

そもそも、遊びにすぎないガンプラバトルで犯罪者を確保する事例は皆無に等しく、だからこそナガイは刑事事件として、徹底的に冷徹な処理をしてきた。

そんな女が勝負を受けるとは、この場における最適解としてそれを選択し、さらに絶対的な勝利の自信を抱えていることを意味する。

オレが、その自信をこれからへし折ってやる。

まだ串焼きを持ったまま、アレクシアが戻ってきた。

「兄さん。12人名乗り出しました」

「よし。やるぞ」

「はい」

「それと、さつさとその串焼きをよこせ。いつまで持っているつもりだ」

アレクシアは呆けた顔で串焼きに視線を留め、しばし些細な大小に悩んでから、大きい方を手渡してきた。

オレはそれを受け取ると、勢いよくかぶりつく。

勝負の前の栄養補給というのは、大事なものである。

Side コウイチ

支部の最寄り駅から電車で一時間ほど揺られると、車両の長さにホームが足りないほどの小さな駅がある。

改札を出ると、僕らは合流する予定の相手を探した。

一通り見渡すがどうも見当たらない。

アシハラがうんざりとした表情で、頬をつたう汗をぬぐう。

「遅刻だろう」

「おいおい。相手は警察官だけ？連絡もなしにそれはねえだろう」

「とにかく、ハカドさんから教えてもらった連絡先に電話を……」

「あの、公式審判員の方ですか？」

喉がイガイガしそうな掠れた声が、ちよūdō僕の後ろから上がった。

僕ら三人はその発信源から一斉に距離をとる。

そこには制服姿の警察官が立っていた。

頬はやせこけて肌が青白い。炎天下に立ち上る陽炎のように消え入りそうな印象の男性だった。

「いつの間に」

「いえ、あの、みなさんが到着する前からここに……なんだかすみません」

悪いことをした訳でもないのに、彼は眉を八の字にして薄く笑った。

そして、その骨ばった手を僕に差し出してくる。

「けやきが丘警察署のイチジョウです。今日はよろしく」

「公式審判員のヒカワです。こちらこそよろしくお願ひします」

僕はイチジョウさんと握手を交わした。

なんだか気まずいファーストコンタクトである。

そこへ空気を読まずにやってくるのが僕のハイテンションな従兄弟だ。

「オレちゃんは警備部所属のキノ・シユン。こつちのしかめっ面の奴が、アシハラ・ユウ

ジちゃんね」

「……よろしく頼む」

シユンは早口でアシハラの方まで紹介を済ませてしまう。

イチジョウウさんはその勢いに気圧されつつも、また弱弱しい笑みを浮かべて、会釈を返した。

挨拶が済んだところで本題を切り出すことにする。

「今回は辻占の道路使用許可申請についてとのことですが」

「ええ。人通りの少ない場所ですから、正直騒ぎ立てる必要性は低いのですが、公式審判員さんが出っ張るところでダンマリという訳にもいきませんから。ご案内します」

イチジョウウさんに先導され、僕は駅前通りを歩きだした。

背後ではシユンがアシハラに何事かささやいているようだったが、内容までは聞き取れなかった。

歩みを進めるにつれて人気はみるみる少なくなっていく、イチジョウウさんが足を止める頃には、僕ら四人以外の姿はなくなっていた。

そこは左右を生い茂った草木と古い建築物に挟まれた裏通りで、この炎天下にもかかわらずほとんど日が当たっていない。

逆に言えば、一目をしのいでやってくるには最適な状態だった。

シユンがその道を覗き込んで、首をかしげる。

「まだ駅前って言える距離の土地で、道が狭いって訳でもねえ。飲食店も普通にある。だというのに、どうして人がこないんだ？」

「この利用者はたいてい脛に傷を持ったような人間です。普通の人は近寄りたがりませんよ」

「なるほど。ドラドの構成員もうろついているだろうな。昼に来た方が気は楽だ」

「では行きましょう」

通りを奥へ奥へと進む。

日光が当たらないので気温が下がり、涼しくなった。

シユンのように腕をむき出しにしていれば肌寒いほどだろう。

やがて、僕らは古ぼけたトタン板で構成された小屋のようなものの前にたどりついた。

その屋根には大きく『占』の文字が掲げられている。

僕にはそれが、童話に出てくる魔女の住処のように思えた。

「どうやらこれは組み立て式のテントに近いものらしく、各地を転々としながら……あ、ちよつと」

イチジョウウさんが説明を加えている最中に、アシハラとシユンが小屋の扉を開けてし

まう。

瞬間、中から身震いするほどの冷気が噴き出してきた。

大きさでは小屋の内部がうかがえそうなものだが、あるのは漆黒の闇ばかりである。

「どう思う。ユウジちゃん」

「塗料やプラスチックのにおいがしない。ビルダーをやっているという訳ではなさそう
だ」

「本当にガンブラで占っているのか？」

「ああ、占っているよ」

小屋から落ち着いた青年の声が答えた。

僕らは顔を見合わせ、黙り込む。

向こうに存在を知られた以上、こちらから打って出てしまうのが吉だろうか。

「どうしました？中へどうぞで」

「行くか」

「お、おい。アシハラ！」

真つ先に小屋に入ったのはアシハラだ。

思わず引き留めるが、それも意味がないと悟って後に続く。

最後尾のイチジョウさんが中に入ると、勝手に扉は閉じた。

視界がすべて闇に覆われ、ほこりっぽい空気が辺りに漂っている。

小屋の内部は足元がおぼつかなくなるほど暗く、天井から釣り下がる豆電球のおかげで、かろうじて中央に机があるのがわかる程度だ。

机には客が座るための椅子が備え付けられていて、アシハラは臆面もなくそこへ腰かけていた。

そして、彼の向かいにも誰かがいる。

暗さに目が慣れるとその人物のシルエツトが、ぼんやりと浮かび上がってきた。

ずいぶん小柄な人影であるがこの人が『874』だろう。

「あなたが、874さんですか？」

「……」

「僕たちは国際ガン普拉バトル公式審判員に所属するものです」

「……」

「おい。コウイチが質問しているんだから、なんか言ってやったらどうなんだ」

シユンが詰め寄ろうとすると、それをアシハラが左腕で制した。

「どうした」

「この女、口がきけんらしい」

「なに？ 女の子だと？」

シユンが仰天するとアシハラがポケットからスマートフォンを取り出し、ライトをつけて正面を照らした。

そこには紫のベールをかぶった少女がいた。その向こうに透けている、ウエーブのかかった金髪と人形のように白い肌からして外国人だ。

僕が知る外国人の少女といえればアレクシアさんだが、彼女とは異なる、まるで人工物のような美しさを感じた。

少女は突然の明かりにも動じずに目を閉じている。

アシハラはライトをつけたまま、机に置いた。

「おそらくだが、目も見えていない」

「ユウジちゃん。それはどういこうった」

「やれやれ。何をしているのかは知らないが、手荒な真似はよしてもらいましょう」

そこへ、先ほどの青年の声が響く。

僕らの前までゴロゴロと球状の物体が転がってくると、机の上で停止した。

それは若葉色をした、子どもが書いたような点と線でできた『顔』を持つロボットだった。

僕らはそのロボットの名前をよく知っていた。

「ハロだ……!」

「マジかよ! 本物じゃねえか」

「あの、ハロとは?」

「『ガンダム』シリーズに登場するマスケットロボットだ。初代主人公のアムロ・レイや『ガンダムAGE』のアスノ家など、さまざまなキャラクターの手に渡っている」

唯一それを知らないイチジヨウさんに、アシハラが解説する。

彼の言う通り、ハロは本来アニメのキャラクターだ。

だが初代メイジンの時代から、現実世界でも生産と販売が行われていた。

「僕はある事情で話すことができない。代わりにこのハロで代弁するよ」

ハロは球状のボディの一部から、双葉のような耳を起こすと、さっきの青年の声で話す。

どうやら874さんの意思を、このハロを通してこちら側に伝えてくれるらしい。

僕の知る『アニメを再現した玩具』としてのハロとはかけ離れていた。

「なんか、アムロ・レイみたいな声だな」

「せめてリボンズ・アルマークと言ってくれないかい? キノ・シユンくん」

「オレちゃんの名前を知っているのか」

たしかにハロの声は、ガンダムを少しでも知る者なら聞き覚えのあるキャラクターの

ものに、どことなく似通っていた。

本人には微妙なこだわりがあるようだがそれはともかく、シユンの名前が知られているのは僕らにも意外である。

「数日前、僕の雇い主がキミに煮え湯を飲まされたところ立腹だね。景気づけに運勢を占ってほしいといらっしゃったのさ」

「ああ……そういえばドラドのメンバーを一斉検挙したの、オレちゃんだったわ。アレックスとのバトルですっかり忘れていた」

シユンが支部に来る前、ナガイさんの命を受けてドラドの実験施設に乗り込んだことは僕も聞いていた。

ユウジとハイバラさんが撃破した技術スパイが、盗んだ設計図を持ち込むはずだった場所だ。

シユンはそこで同僚とともに検挙・押収を行った上で、アレックスを待ち伏せ、コテパンにやられたという。

どうやら『ドラド』側でも、その一件を根に持っているらしい。

するとアシハラが身を乗り出して、ハ口を両手で抱えると、自分の眼前にまで近づけて語りかけた。

『『ドラド』と明確に関係持っているなら話は早い。あいつらに関する情報を、公式審判

員にも流してもらおう」

「おいおいユウジちゃん。もうちよつとこう、からめ手つてものをだな……」

「いいですよ」

なんとハロはアシハラが無茶な要求を快諾してみせる。

あまりにもあつさりとした応答に僕は困惑した。

ハロの変化しない顔のデザインと、まるで人間のような声音のギャップが、僕には今
になつて怖くなつてきた。

「ただし、交換条件が一つ」

「なんだ」

「ガンプラを見せてもらいましょう」

「俺の機体をか」

「その通り。さきほどから、キミのガンプラから他の機体とは違う何かを、僕は感じ取っている。興味がわいてきて仕方ないんだ」

「待つてください。僕が言うのもおかしいですが、それだけで、公式審判員に『ドラド』の情報を渡すというのですか」

「ああ」

彼女は、ガンプラファイアとたった一人のビルドファイターを天秤にかけて、その上

で後者を選ぶかもしれないという。

アシハラの手がそつとホルスターに伸びた。

あいつはまだアデルを取り出してはいない。

それにも拘わらず、まるでハロや874さんには、そのホルスターの中身がすけて見えているようだった。

「僕が見た結果いかんでは、マフィアの情報なんていくらでもあげよう。もともと、得意先であつて部下になつた覚えはないんだ」

「しかし」

「怪しむのは勝手さ。でも、寝返りの対価としては破格に安いと思うけどね？」

ハロはそう嘯くが、仮にもガンプラマフィアに与する人間に、ガンプラをやすやすと見せていいものだろうか。

しかも、ここにきて益々得体が知れなくなつたときている。

やめておくべきだ。

僕がそう提案するより先に、アシハラはアデルを躊躇なく出してた。

机の上に寝かせられたそれを、874さんは骨董品でも扱うかのように両手で包んだ。

「アデルか。いい機体だ」

ハロが褒めてみせるが、制作者であるアシハラは眉一つ動かさない。

874さん自身は相変わらず口をつぐんだまま、ただ指先を滑らせる。

ツヤけしブラックで塗装された装甲の上をなぞり、クリアパーツのバイザーを撫で、やがて胸部コクピットのあたりで動きを止めた。

「やつぱり。このガンプラも、そうなんだね」

「なに？」

ハロの呟きに、アシハラが聞き返す。

その口ぶりがまるでアデルを知っているかのようにあつたからだろう。

874さんの細い人差し指が、アデルの中央をとんとんと軽く叩いた。

「心臓がある。こいつはキミの思いの受信機だ。他のガンプラより、キミが何を考え、感じたかがダイレクトに伝わってくる」

「アシハラ、ひよつとしてアデルに搭載された結晶のことじゃないか」

僕が口を挟むと874さんが静かにうなずいた。

ハロがびよんびよんと弾む。

「面白い。本当に興味深い機体だ。これだけ眩いものを胸に抱いているのに、機体の表面は氷のように冷たい。触れるほどに鳥肌が立つ。」

ハロの分析は、僕のアデルに対する所感とおおむね変わらない。

やはり彼の機体は、主と共にいる時間にもなつて、修羅へと突き進んでいるのだらう。

おもむろに874さんは席を立つと、部屋の奥から巨大なトランクケースを引きずつてきた。

アシハラの見立てでは、彼女は目が見えていないようだが、さすがに自分の領域ではまるで歩みに迷いが無い。

彼女がそのトランクケースを開けたとき、僕は目をむいた。

そこに収まっているのはおよそ二十ものガンダムタイプであった。

「サダルスード、アブルホール……それに、アストレアも……」

「こいつら全部タロットカードをモチーフにしたガンプラかよ」

「このガンプラたちは僕のものではない。仕事用に『ドラド』から供与された。組織が接収した、未知の技術も使用されている。ビルダーによる、唯一無二の特許技術ばかりらしい」

おそらく、ムラサメが規定する『神器』と同一だ。

あれを狙うものからすれば、このケースは宝石箱に思えるだろう。

874さんは手探りで一体のガンプラを手に取ると、アシハラの前に置いた。

機体名をガンダムデスサイズヘルという。死神をモチーフにした『ガンダムW』のガ

ンダムである。

ハロが耳を羽ばたかせて、アシハラの前で斜めにかしいだ。

「キミ、タロットはわかるかい？」

「知らん。だが、不吉な結果であることはわかる」

「そうだ。13番目のカードである『死神』は、正位置では不吉な結果が多くつきまとう」
874さんが指先でデスサイズヘルの腕に触れると、それが持っていた大鎌が振り下ろされて、アデルの首元で止まった。

ハロの解説が続く。

「『終末』『破滅』……そういったものが真つ先に思い浮かぶものだが、キミの場合は『決着』だ」

「『決着』？ユウジちゃんが誰と決着をつけるんだよ」

勝手にトランクの中を物色していたシユンの言葉に、ハロは蛇腹でできた腕を伸ばすと、肩をすくめるようなしぐさをして答えた。

「さあね？それは本人が一番わかっているだろう。僕の占いはそれに気づかせること。運命を示す仕事にすぎない。」

「……」

「アシハラ？どうした」

僕はそこで、アシハラが腕を組んだまま黙り込んでしまったことに気づいた。

ハロがごろり、と音を立てて彼の前に半回転する。

「さて、これで取引は成立した。僕は『ドラド』の情報を知る限り公式審判員に流すし、ついでにこの、タロットをモチーフにしたガンブラ二十数体を引き渡す用意もある」

「……」

「しかし、アデルを作ったキミは不満だろうか？」

「最初からわかかっていて占ったな。性格が悪い奴だ」

「だから言ったじゃないか。僕にとって大事なものは、キミのガンブラであって『ドラド』じゃない。そしてキミ個人が本当に欲しいのも、『ドラド』の情報ではない」

「……ちっ」

「大事なのはこれからだ。公式審判員と占い師874ではなく、キミと僕の取引をしようじゃないか。ツガミ・ユウジくん」

ハロがそう言って目を光らせるのと、アシハラが上半身を乗り出して、874さんの胸倉をつかもうとするのは同時だった。

暴力沙汰になる寸前で、シユンとイチジヨウさんが彼を食い止めた。

椅子に押し込まれたアシハラが机にあたり、大きな音を立てる。

「なぜその名前で俺を呼ぶ」

「自分でわかることは人に尋ねても無駄じゃないか。キミをその名前で呼ぶ人間は限られるだろう」

「……アレックス」

「そうだ。アレックス・メルフォールと言っていたね。前に来た、あの高慢なファイターのガンプラにもこれがあった。まるで『兄弟機』だったよ」

背筋に冷たいものが走る。

僕らより先に、アレックスが彼女に接触していたらしい。

それでは彼女が『ドラド』の情報してくれると約束したとしても、100パーセントの安心とはいかない。

僕らの情報をムラサメにでも流す約束を事前にしていたとしたら、とんでもないことになる。

アシハラの方がせわしなく貧乏ゆすりはじめる。

明らかに焦れていた。

「アレックスはここにきて、何を聞いたんだ」

「それはまた、別の対価が必要だよ。キミのアデルはもう見終えたし、他の人のガンプラには現状興味かわかない」

「なほ」

「じゃあバトルだな！バトル！」

そこへ首を突っ込んだのはシユンである。

ハロの声音に不快の感情が混じった。

「キノ・シユン。キミに話はしていない」

「そうだ。これは俺とアレックスの問題だ」

「いいじゃねえか。ユウジちゃんと874で勝手に『公式審判員』の方針を決めちゃったんだ。だったら、こっちが勝手に介入しておあいこだろう」

874さんは心底意味がわからない、と言いたげに顔をひきつらせる。

アシハラも似たような表情だった。

シユンの理論は僕でも辻褃があっていないと思う。

だが、それっぽい理屈で煙に巻き、自分の思う通りに運んでしまうのがこいつの困ったところである。

要するにシユンは、是が非でもバトルがしたくなってしまうのだ。

占い師が組織との協力関係とはかりにかけて、なお選ぶほどのガンブラを同僚が持っている。

その真価を自分の目で確かめなくなった。大方そんなところだろう。

「オレちゃんとユウジがお前とバトルをして、勝ったらアレックスに関する情報をもら

う。負けたらそうだな……お前の要求をなんでも一つ呑んでやる」

「おい。さつきはからめ手とかどうとか言っていなかったか」

「そうだったけ？」

「いいでしょう」

「先に要求を聞いておいてやる。オレちゃんのガンプラもおまけにつけるか？立ち退き命令の撤回でもするか？」

874さんの、顔にかけられたボールの奥で、薄く唇が広がったのが見て取れた。

笑っている。

口をきけないという彼女は、その口元の機能を怪しく微笑むためだけに行使していた。

「では、ボクにも『特務ファイター』の地位をもらおう」

「なんだって!？」

仰天したのは僕である。

そんなことを承諾してしまえば、敵味方ともつかぬ人間を身内に組み込むことになってしまわないか。

マフィアを裏切らせるのだから、彼女を保護下に置くくらいは当然やるつもりではないた。

だが、それを鑑みても、彼女の条件はあまりに破格な待遇である。

「ツガミ・ユウジのアデルは世界中を探しても珍しい代物だ。一通り触れただけでも、僕のこれまでを売り渡すほどの価値があつた」

アデルの足元には、対価に譲り渡すと言われた二十数基のガンプラたちが眠っている。

彼女はよほどアシハラのアデルを気に入つたらしい。

「もし、それ以上を望むことが許されるなら、彼に近い場所で彼のアデルを観察し続けたい。だから僕の願望は『特務』になることだ」

「申し訳ないけど、『特務』参加となると僕らの一存では……」

「いいぜ。乗ってやらあ」

「シユーン！」

「安心しろコウイチ。こつちは『特務ファイター』と警備部の公式審判員だぜ？勝てるや」

そんなお気楽なことを言つて、シユンはサングラスからいたずらっぽい目をのぞかせると、ウイंकをした。

874さんが机の下に手を入れると、何かのスイッチを入れる。

聞き覚えのある起動音と同時に、机の天板が左右に割れると、その間から空色の粒子

が噴き出してきた。

ハロが小刻みに跳躍すると、トランクケースに並べられたガンプラから一体を手にとって、874さんの膝へ乗った。

「あまり移動を繰り返したくはないからね。ここでやろう」

「上等だ。いくぜ、ユウジちゃん」

「……アレックスの情報ももらうぞ」

アシハラはそう言うと、ホルスターから新たに別のパーツを取り出した。

相変わらず艶消しブラックで塗られたそれは、一言で表すならば『ワードスーツ』である。

おそらく超重量級のウエア『タイタス』をベースにしていると思われる。

原型機より一回りほど大きく、特に両肩には『BB戦士 ネオジオング』の両肩をベアにしたらしきユニットが組み込まれていた。

アシハラは机上に寝かされたままのアデルを手にとると、ワードスーツの中に収めて、胸部の追加装甲でフタをした。

カチャリ、と小気味のいい音をたててパーツがはまる。

これでアデルの本体は、改造されたタイタスウエアの中にすっぽり収まったことになる。

「これは、何が始まるんです?」

イチジョウさんが、僕の耳元でささやく。

「ガン普拉バトルです」

「遊びではないですか」

驚きと、わずかに軽蔑がまじった言葉。

僕はそれを肯定せざるをえなかった。

ガン普拉バトルはしよせん遊びだ。

マフィアすら関わる案件に、そんな児童を持ち込むことは、ただの警察官であるイチジョウさんにはさぞかし滑稽だろう。

「でも、遊びで解決できるなら、それに越したことはないでしょう」

手錠や尋問より先に、ただの遊びで事件を解決できる可能性を秘める。

それが公式審判員の強みであり、既にアシハラはそれを技術スパイの事件で証明済みであった。

そこで、ふと、シユンはわざとこうなるように誘導したのではないか、という考えが頭をよぎる。

874さんは対価をきちんと渡せば、約束を守ることをあいつはさっきのやりとりで確信した。

それを確固なものとするために、この勝負を挑んだのではなかるうか。ちゃんと『か
らめ手』で距離を詰めたのでは。

いや、それはありえないだろう。

僕の従兄弟はそこまで複雑な心理戦はできない。そう結論づけることにした。

『Field—EX 『Trust you』』

『BATTLE START!』

「キノ・シユン。『E式臥龍 孔明ガンダム』かつ飛ばすぜ！」

「アシハラ・ユウジ。『アデル・シャドウ<ティタス>』Sally Forth……！」
「874。『サダルスードF3』行く！」

三機のガンプラが、最小単位の狭さのバトルフィールドへ一斉に解き放たれた。

side アレックス

ガンプラバトルにおける「戦力」とは通常、機体の性能、ファイターの技量から成る。
なぜならばガンプラバトルは近代的な戦争ではなく、決闘のごとき一対一が基本であ
るからだ。

しかしこの場においては、バトルに「数」という要素が加えられていた。

ムラサメの構成員十二名と、オレ達兄妹の合計十四機。

これに相對するのがナガイ・トウコのたった一機である。

ガンダムの中でも言われている。「戦いは数」だと。

通常の戦闘ならば勝率は計算するまでもないはずだった。

「アレックス・メルフォール。『暁 雷光』出陣する！」

暁 雷光はフィールドである市街地上空に射出される。一斉出撃は不可能なので、部下二名を伴って先陣を切っていた。

ドダイに乗ったドムが一機、オレの真横につけて通信をよこす。

「アレックス様。敵は……」

「阿呆が、かわせー！」

オレの叱責と同時に、暁 雷光のサブアームがシールドを前面へ展開する。

次の瞬間、巨大な光芒が傍らの二機、そして後続の三機を消滅させた。

熱源の正体は上空を雑払う巨大なビーム攻撃だ。そのエフェクトから判断するに、ウイングガンダムの主兵装のバスターライフルであろう。

「この距離から当てるとは。いや、こちらが遅いだけか」

「兄さん！(´；ω；)無事ですか」

三番目にエントリーしたアレクシアたちは無事だったようだ。

水着姿のままの妹がモニターに写った。

「問題ない。さっさと降下しろ。撃ち落とされるぞ」

「では兄さんも……」

「いや。オレはここであいつに手傷を負わせる」

オレは暁 雷光に二十門の武装を一斉展開させた。

あの女相手に加減は必要ない。

今の狙撃を元に、およその座標を見定めると、その周辺めがけて弾丸の嵐を叩きつけた。

市街地上空の青空に、赤い火の華が咲き乱れる。

手応えはなかったが、カメラが爆炎の中を駆け抜けるスラストアの帯を捉えていた。

「いつぞやのふざけた審判員よりはまだ遅いな」

それが耳に届いたか、ナガイの機体はこちらへ向けて急速接近を開始した。

互いの距離がせばまっていくにつれて、ようやく機体の詳細が判別可能になる。

紅白のツートンで塗装されたウイングガンダムだ。鳥を模したバード形態で呐喊をかけるそのガンプラを、オレは一度目にしていた。

「やはり今年の世界大会の宣伝で、メイジンとやりあっていたのは貴様か」

本来あのガンプラは、公式審判員本部の広報が所有するものはずである。

それをナガイが、例のコマーシャル映像で一時的に借り受けたままだったのだ。

暁 雷光は身を翻して、凶鳥の嘴をかわす。

オレの背後に回り込んだウイングガンダムは人型に変形すると、バスターライフルの銃口を真下に向けた。

オレの眼前で、アレクシアたちを狙おうという魂胆である。

「いい度胸だ」

サブアームでその銃身をつかみ、上へそらす。

遅れて発射されたビームの奔流は、明後日の方向へ流れていった。

接触回線で、老いぼれのしわがれた声が響く。

『ワシを相手どってにおいて、まだアカツキ自体の腕を使おうとしないのだな』

「本気を出せない貴様など、これで十分だ」

『抜かせ』

ウイングガンダムはあっさりバスターライフルを放棄し、胸部のマシンキャノンを発射した。

牽制といえども直撃すればそれなりのダメージを受ける。

シールドでそれを受けると、視界がふさがれた隙について、ウイングガンダムは市街地へ向かっていた。

「この程度はくれてやるといふことか」

サブアームが畳まれて、バスターライフルを背後へ回収する。

オレは暁 雷光の武装一覧が更新されたことを確認すると、後を追って市街地へ降りた。

暁 雷光の武装管理に割いているリソースを広範囲への通信に回す。

「アレクシア。聞こえているか」

『はい』

「現在のウイングガンダムの武装はサーベルと二種の機関砲だ。しかし、オレの期待より友軍が弱い」

『つまり、どうなさるのです』

「気が変わった。お前以外の友軍はすべて囷にする」

妹の表情が凍る。

オレの身勝手呼び出しておいてゴミのように使い捨てる戦法が、優しい彼女には容認しがたいのだ。

だがこれがナガイ・トウコに対する勝ち筋なのだ。

『兄さん。流石にそれは』

「これはガンプラバトルだ。命が取られるわけではない。それに、下手に動かれるより、オレたちの指示で効率的に撃破された方が役に立つ」

『……了解しました』

「それでいい。残存する機体を集めて、そこから仮想距離三キロメートルのポイントへ向かえ」

ザクが移動を開始する。

その途中で部下のウインダム、ノブツシという二機が合流した。

今の通信の間に二機が撃墜されたことを感知したので、残りは三機。

その位置をリーダーで探ると、長距離通信を投げる。

「オレだ。状況は」

『アレックス様！こちらはジェムズガンの中破が一機、リックディアスがバックパックをやられました。私は右腕を……』

「敵の場所はわかるか」

『いえ、その……ビルの合間を迂斬りのように襲われるので、カメラでとらえるのがやっとなです』

おどおどとした部下の返事にますます腹が立つ。

この短時間でこの体たらくとは、オレはムラサメのメンバーを買いかぶっていたらしい。

「中破したジェムズガンはその位置で固定砲台をさせろ。お前はリックディアスを持って、アレクシアの方向へ一直線に飛べ」

『はっ。……しかし、途中で幅が広い中央通りに姿をさらすことになります』

「そうか。つまりオレの命令が聞けんのだな」

『し、失礼しました！速やかに向かいます！』

暁 雷光は部下が口にした中央通りで仁王立ちをしていた。

余計な口答えで予測とはわずかにラグがあるが、修正の範囲内である。

まもなく、置き去りにされたジェムズガンの反応がリーダーから消失する。

そしてリックディアスと手をつなぐ形で、灰色のガンダムMk-IIIが飛び出してきた。

その奥に、紅白のウイングガンダムが見える。

緑色のサーベルの光刃を突き出し、オレごと奴らを串刺しにせんとしていた。

『アレックス様！』

「よく来た。そこを動くな」

『えっ？』

先ほど命令を聞こうとしなかった手前、素直に棒立ちになってしまいうMk-III。

それをウイングガンダムのサーベルが背後から無慈悲に貫いた。

部下の機体が身体をのけぞらせたのをとらえ、再び暁 雷光のバックパックが咆哮する。

そこには今しがた奪ったバスターライフルも含まれていた。

相手に武器を突き刺しているこの瞬間は、さすがに反応が遅れるだろう。

かろうじて生き残っていたリックディアスも、圧倒的火力の前に沈んでいく。

中央通りの一帯を炎と熱波が覆いつくした。

そして、その場にアレクシアたちの部隊も居合わせたらしい。

『なんてことを……』

『ひびく』

そんな眩きを、範囲を向上させていた通信がキャッチする。

しかしその程度の独り言にオレの良心は微塵も揺るがなかった。

軽率に人間を信頼し、おっかなびつくりで関係を構築するユージとは違う。

問題になるのは、今の砲撃で多少なりともウイングガンダムに損傷を与えられたどうかである。

かである。

残留する煙の頂点が大きく盛り上がると、紅白の装甲がのぞいた。

ウイングガンダムは傷一つなかった。

誘導弾をバルカんとマシンキャノンで相殺し、その手のサーベルでビームを切り払っ

たに違いない。

言うだけならば簡単だが、こちらの攻撃量は通常とは訳が違うのだ。

さすがに、ほんのわずかにオレの胸中にも焦りが生まれる。

「やはり厄介だな」

S i d e ユウジ

「厄介だな」

『ああ。こんなステージやったことねえ。いや、知ってはいるんだが』

新たに制作したウエア『ティタス』の初陣は、実に特殊な場所だった。

地球をのぞむ宇宙空間でありながら、俺たちが立つ場所は月やその他の惑星とは思えない。

足元に水面が薄く広がり、その下にはあらゆる種類の花が百花繚乱の体をなしている。

なによりも、俺たちの真正面に存在する、半壊したダブルオーガンダムがそのステージが何かを示していた。

機動戦士ガンダム00のセカンドシーズンのエンディングである『Trust You』、その一場面を再現したステージなのだ。

「ヒカワ。さつき『EX』というナンバリングが聞こえたが、知っているか」

『いや。ないな』

最小サイズのモニターの奥で、ヒカワは首を左右に振る。

ガンプラバトルのステージは1番に宇宙空間、2番に砂漠、といった具合で番号が割り当てられている。

そして同じナンバーが割り振られていても、その地形や設置オブジェクトは異なるものになる、というのがビルドファイターには常識だ。

しかし、『EX』というのは初耳だった。

ヒカワの知識にも該当なしとなると、不正に作成されたオリジナルのフィールドとみえる。

『マフィアの非正規ステージなら、そもそもナンバリングは呼称されないよ。これは、テスト段階にある新ステージのデータを不正に先行入手したのだろうね』

『フライングゲットってやつか』

キノ・シユンが会話に割って入ると同時に、アデルの傍らに『E式臥龍』が小さな体軀を着地させた。

ヒカワは眼鏡の位置を直しながらうなずく。

『とはいえヤジマのサポートを受けていないことには変わらない。予期せぬバグにも注意してくれ』

『はいよ』

「あちらの方に地の利はある。それだけわかればいい」

さて、その眩きに相手は答えたつもりだろうか。

操作空間いっぱい、けたたましい熱源接近警報が鳴り響いた。

モニターに注意を向けてしまったせいで、攻撃そのものは確認できていない。

オレは反射的にテイタスを『三式臥龍』の前に出し、防御姿勢を取らせた。

分厚い両腕をクロスしたところへ、強い衝撃が伝播する。

テイタスの装甲はわずかにへこみができた程度で、深刻な損傷はなかった。

『ユウジちゃん！無事か！』

「問題ない」

テイタスのコンセプトの一つは、タイタスの質量装甲を発展させた、鉄壁に近い防御力である。

あの紫色のアカツキに弾丸の雨あられを降らせられた対策として設計したものだ。

『野郎！今のは狙撃か！』

「身を隠せそうな遮蔽物は皆無に近いな」

テイタスの剛腕は飛び出していこうとする三式臥龍の肩口を掴んで、ぐいつ、と自らの背後へと下がらせた。

「お前はテイタスを盾にして、チャンスをうかがえ」

『オレちゃんにそれまで何もするなっ!?戦わせろよ！』

キノは不満を隠そうともしない。

まるで子供みたいなのがままを口にする。

そう会話をしている間にも、新たな一撃が飛来しているのがわかった。

今度は巨大なミサイルだ。正面から見た直径だけでも、三式臥龍を押しつぶすだけの大きさがある。

「そうだ。まだ何もするな」

テイタスの巨大な握りこぶしで、正面からミサイルを殴り飛ばす。

ミサイルが先端からひしゃげ、モニター一面を真っ赤な炎が包んだ。

瞬間、これは目くらましである、という直感が去来したかと思うと、その隙をついた狙撃がテイタスの胸部に直撃する。

損傷から目をそらしながら、俺はキノを説得しつつける。

「お前の機体はスピード型。闇雲に飛ばば予測射撃で墮とされるのがオチだ」

『だがなあ！』

「だから、敵のふところに飛び込めるのはお前だけだ」

『……！』

「戦術の要、とっておき。本日の主役だぞ。それまでおとなしく守られている」

『しょうがねえなあ！じゃあ、お前もそれまでやられるなよ！』

奴のテンションは露骨に上がった。

精神年齢が低い分、物分かりのよきはヒカワよりいい。

うぬぼれかもしれないが、俺が他人との接し方を変えた影響かもしれない。

とにかくキノ・シユンに関しては褒めて、信頼することが肝心だ。ビルダー同士なら造作もないはずである。

キノの扱い方を説明書のように記憶しつつ、オレはダメージ状況を横目で確認する。

サブモニターによって、テイタスの胸部に弾丸がめり込んでいるのがわかった。

拡大して観察すると、先の細ったメタリックゴールドの弾頭にヒビが入り、白化したプラスチックの破片がかすかに散らばっている。

これは、一発一発を、模型としてきちんと作りこんでいる『実弾』だとわかった。

1/144スケールとすればそのサイズは指先程度にもならない。

874本人かはわからないが、弾丸を制作した人間の技量は相当なものだろう。

「キノ。今の二発で敵の場所はわかるか」

『……いいや。計算してたどつてみたが、まるで違う場所から飛んできている。高速で移動しながら撃っているな』

「そうか」

次なる一発をアラームが報せる。

今度はティタスの側面方向から来ていた。弾道分析をしていた三式臥龍を狙っているに違いない。

それを、左腕を振りかぶって防ぐ。

いちいち腕に衝撃が伝わるのがわずらわしいが、仕方がなかった。

カメラの最大望遠でも、未だに874の機体は判別できていない始末であるのだ。

ここで俺は、バトルが始まってからの最大の疑問点を口にした。

「あの占い師は目が見えないはずだ。どんな理屈で、スナイピングなどこなしている？」
『お前の勘違いじゃねえのか？』

「それはありえない。トランクケースまでの足取りがややおぼつかなかった。狙撃機を使うなら、盲目のふりをする理由がない」

『じゃあどうやって……？』

直上から無数のマイクロミサイルが範囲爆撃を仕掛けてくる。

ティタスの両肩から、ネオジオング由来の拡散メガ粒子砲が発射される。

その細い光条が、ミサイル群の中央を射抜く。

激しい爆発音がバトルシステムのスピーカーを振動させた。

「これも陽動か」

俺の予想は的中した。

巻き起こった煙と炎の渦をかきわけて、バスターライフル級のビームの波が押し寄せ
る。

ウェアの持前の剛性でしのいでみせるが、今度はミシミシと不吉な音が、装甲の内側
から鳴っていた。

俺の頬を一筋の汗が伝う。

さつきよりも目くらましに次ぐ攻撃のタイミングと手段が、正確に、巧妙になつてい
ると感じたのだ。

相手はあらゆる手段を以て、このテイタスの弱点を探そうとしている。

『おい。どうやって、874は戦場を観ているんだ』

「それがわかったら、苦労はしない」

『だよなあ。くそっ』

「悪態をついている場合か。休んでいる分、お前が知恵を絞れ」

『おいおい。お前に言われて引つ込んでいるんじゃないやねえかよ』

「台詞を選んでいる暇があったら、代わりに対策を考えている」

『ああもう！わかった！言葉のイヤってやつにしといてやるよ！』

キノがそう言うのと、E式臥龍が、腕組をしようつむいた。

どういう理屈かはわからないが、キノの言動はその愛機にいちいち反映されている。

わざわざ操縦桿で動かしている訳でもあるまいし、思考制御の一種か、ハイバラのよ
うなモビルトレースの応用と思っておくことにした。

「ヒントとしては、俺のアデルの特殊性が、占う前から見抜かれていた。それが手がかり
になるはずだ」

『あれはびつくりしたなあ。コウイチが言っていた、プラフスキー粒子の結晶体がどう
とか、つてやつか?』

「おそろく」

『まさかハロの声通り、イノベイターだったたりして』

キノが笑えない冗談を言っている間にも、ミサイルは絶え間なく降り注いでいる。

このパターンも三度目となると、874はテイタスの強度を把握しつつあるはずだ。

テイタスがこの攻撃も簡単に防衛できるほど硬いというのは、理解しているはずだ。

その上で、同じパターンを続けているというのは、彼女にとって『正解』となる攻撃
がつかめそうになっているということだ。

すべての攻撃を必殺の領域にまで高め、こちらの耐久を確実に、堅実に掘削していく
段階である。

俺はキノに参謀役を任せたことを、少し後悔した。

『聞こえているかい? ツガミ・ユウジ』

周囲の地面が細かく抉られていく最中、敵からの遠距離通信が入る。

噂をすれば、あのリボンズ・アルマークによく似たハ口の声だ。

『そちらのSDガンダムはどうでもいいが、キミのアデルをあまり傷つけない。さっさと負けを認めてくれるとやりやすいんだけど』

「随分上から目線だな」

『僕はこういうとき、常に挑戦を受ける側だからね。勝てば褒章を与えるけれど、負けても何かを奪われる訳じゃない』

その言葉は的を射ていた。

このバトルはこちらがさらなる要求をしたのがそもそもの発端だ。

874にとっては負けてもデメリットはないに等しい。

その余裕の表れが、この降伏勧告である。

『おいおい。勝負はまだ始まったばかりだぜ？』

『僕はツガミ・ユウジと話をしてるんだ。黙っていてくれないか』

茶々を入れるキノに対して、874は苛立った様子をみせた。

対価が必要な取引だとか、占いを行うだとか、そういう『読み』を好む人間に、キノのような性格は相性が悪いだろう。

それをおそらく自覚していて、キノは口先で言葉をもてあそぶ。

『まあまあ。オレちゃんだって無視されたら寂しいのさ。構ってくれよ』

「そうかい。なら、キミのSDだけ正確に撃ち貫けるように努力するよ」

ブツン、と大きなノイズをひとつ立てて、通信は切断された。

「怒らせたな」

『怒らせたねえ』

「俺が話を引き延ばしている間に、作戦を考えてもらいたかったのだが」

『相手の頭に血を上らせて、精細を欠くように仕向ける。立派な作戦だろう？』

キノの言葉通り、一点集中で降り注いでいたミサイルが、わずかにばらけるようになった。

おそらく、ファイターがマニュアルで調整しているミサイルの座標コントロールをよろそかにしているのだ。

俺はそれを好機とみて、テイタスの両腕部のジェネレーターを開く。

質量装甲が凹みはじめても内部機構に不調はなかった。

『『ビーム・プロテクト』』

ジェネレーターからリング状のビームが発生すると、波紋のように何重にも広がりがら射出される。

ミサイルの後を追ってくる、874の本命の砲撃は、リングに阻まれて霧散する。

拡散メガ粒子砲とあわせて、相手の攻撃を完璧に相殺することを目標にした武装構成。

『防御特化』の支柱となる第二のコンセプト『砲撃特化』だった。

「さあ、次はどうくる。ミサイルにビーム攪乱幕でも仕込むか？」

『おい、ユウジちゃん。次の手まで考える必要は、もうないぜ』

テイタスの陰から、三式臥龍が顔を出す。

B B戦士の三ガンダムをベースにしたこのガンプラは、SDガンダムに多く見受けられる瞳がない。そのカメラアイが、外部の光を反射してキラリと輝いた。

「なにかわかったか」

『そのために一つだけ確認だ。お前のガンプラの存在に874は気づいたとき、それがアデルとまでわかっていたか？』

オレは記憶を探る。

874は俺のガンプラに指で触れて、はじめて機体の種類を判定していた。

最初からすべてを見抜いていた訳でもない。

そう伝えると、三式臥龍と、モニターに顔を出したキノは、一緒にサムズアップをしてみせた。

『だったら、もう正体は見えたぜ』

Side アレックス

後退を選んだ暁 雷光と入れ替わりに、残存した部下のガンプラが前に出る。

ウイングガンダムが最初に牙をむいたのはノブツシという水色の単眼モビルスーツだ。

相手がライフルを構えるより先に頭部へサーベルを突き立て、そのまま胴体を左右へ割る。

そのまま横なぎに振るわれた刃によつて、ウインダムはあつけなく上下に両断された。

弱い。弱すぎる。

オレは暁 雷光の全武装がリロードを終えたことを確認し、モニター越しにアレクシアと目配せをした。

「行くぞ」

『はい！』

まずはソヴァールザクウオーリアが前衛。暁 雷光が後衛。

いつものフォーメーションを組む。

まずは暁 雷光のガトリング砲でウイングガンダムの行動範囲を制限する。

ナガイは正面に陣取るザクウオーリアを相手どるしかない。

ビームサーベルとビームトマホークの刃が交錯し、まばゆい閃光が上がった。

改造を施した分、出力にまさるザクが圧をかけた。

鏑迫り合いに持ち込もうという魂胆である。

しかし、ウイングガンダムが左手をサーベルの柄から手を放し、ザクの頭部を鷲掴みにして、背面のブースターを数秒だけ噴かすと、パールホワイトの機体を道路に投げ倒した。

「剣道ではないのだぞー！」

「それは、こちらのセリフですー！」

アレクシアのザクが倒れたことで、ウイングガンダムがオレの前にその身をさらす。

ミサイルを目くらましに発射し、頭部バルカン砲で迎撃するように仕向けた。

爆発が二人の女のガンブラを呑み込んだがその程度ではどちらにも損傷はなからう。

本命は次だ。

アームレイカー操縦桿を前方へ押し出す。

オレが取った行動は、ナガイの目には奇妙に映っただろう。

なにせ後衛の砲撃機であるはずのオレの暁 雷光が突撃をかけたのだから。

ウイングガンダムの間合いに入る寸前で、暁 雷光のバズーカを、地面に向けて発射する。

その爆風で重い機体はさらに上昇し、ウイングガンダムの頭上を越えていく。
「獲ったぞ」

『甘い！』

ウイングのマニピレーターが180度向きを変え、まるで日本刀を鞘に納める動きのように、自らの脇を抜けて暁 雷光へ突き立てられる。

シールドは間一髪で間に合ったが、バスターライフルを防いで疲労していた部材は、無残にも貫かれた。

もとよりこの女に無傷の勝利を望むほど増長したつもりはない。

暁 雷光は一部の武器を捨てて、空いたサブアームでウイングガンダムの胴体をつかむ。

これで、奴も身動きは取れなからう。

『なんのつもりだ、貴様』

「甘いのはお前の方だ。ナガイ。なぜオレの機体が『アカツキ』なのかが、まだ思い当たらないか」

『なに？』

「上を見てみるがいい」

オレたちの機体は同時に空を見上げる。

こちらを見下ろす高層ビルの向こうには、仮想空間の天井に貼り付けられた偽りの青空がある。

そこに浮かぶパールホワイトの機影を認めて、ナガイははじめて、己の迂闊に歯噛みしただろう。

『ワシとしたことが、ぬかったか』

そこには、アレクシアのソヴァールザクウォーリアがいた。

オレがミサイルの爆炎と、暁 雷光の跳躍という派手なアクションで注意を引いた隙に、ウイングガンダム^①の懐から脱出したのだ。

妹のガンプラは、オレのような派手な改造もなく、特別なシステムの搭載もない。

故にナガイは見誤った。

有象無象にすぎぬと思っていた相手は、実際はオレと同等のファイターであるということに。

ザクはバックパックに搭載されたアムフォルタス・プラズマビーム砲を腰に回すと、改修で砲身に追加されたグリップを握っている。

友軍によるロックオンに、システムが繰り返し警鐘を鳴らす^②が、オレは意に介さない。

『アレックス！ 貴様！』

ナガイの怒号より先に、ザクウォーリアの銃口が、きらりと光ったのがわかった。

放たれた白色のビームはウイングガンダムを貫通し、暁 雷光の装甲『ヤタノカガミ』の表面で反射され、周囲のビルを倒壊せしめた。

この威力に装甲のみで耐えられるのは、おそらくアカツキのみである。

オレはアレクシアにお前以外の友軍を囮にする、と言った。

それにオレが含まれない訳があるまい。

『BATTLE ENDED』

粒子が消えゆくと、真正面にナガイの渋い顔があつた。

手には修復されたウイングガンダムが握られており、その復旧の早さにはオレも恐れ入る。

「……あのザクの武装はすべてビーム兵器。いかなる攻撃でも、アカツキの装甲ならば安全に反射可能ということか」

「ふん。妹なりのオレへの忠誠の尽くし方らしい」

暁 雷光に対抗不能という装備を以て絶対服従を表す。

はじめてソヴァールザクウォーリアのコンセプトを知ったナガイは、苦虫を噛み潰したような表情になっていた。

道連れならばいざ知らず、オレは撃墜されてもいないというのは、なかなか頭に来るだろう。

「まさか、『己の手で勝利する』というファイターに当然の欲望すら切り捨てているとは」「勝利のために有効な最適解を選び取り続ける。オレの流儀であり、あんたの教えだ」「ぬかせ。貴様は何もわかっておらん。半端な思想が、二代目のような闇を生むのだ」「そんなものは敗者の負け惜しみだ。そうして二代目に『影』を押し付けるのが、貴様の限界だ」

ナガイの言葉をオレはせせら笑う。

確実な勝利を得るためならばいかなる手段でも取る。

それが味方を生贄に放りだし、オレ自身の手で勝利を取らない『卑怯な』手だとしてもだ。

なるほど、確かに三代目メイジンの提唱する「楽しいガン普拉バトル」とやらは正反対のものだろう。

しかし、オレたちのものは『神器』の回収という遊びからかけ離れた任務の中で、培われた発想と戦術だ。

たとえ気まぐれと戯れからはじまった試合であろうと、この老婆が期待するガン普拉バトルと異なる様相を呈することは、明白のはずであった。

ナガイ・トウコのガンプラを破壊してシステムが勝利の判断をくだすという結末。

それだけを希求し、オレはこうして勝ちをさらってみせた。

「オレの取る道に間違いはない」

上機嫌で老婆に近寄ると、こうささやいた。

「次はお前自身のガンプラを持ってこい。そうでなければ話にならん」
「！」

繰り返すようだが、今回の勝負は戯れにすぎない。

オレが本気を出さなかったように、ナガイも本気を出さなかった。

正確には彼女専用のガンプラでないばかりに、その戦闘技術の神髄をほとんど見せていなかった。

次はその本気とぶつかり、打ち勝って見せるという宣言だった。

一瞬、背後のアレクシアですら立ちすくむほどの殺気がナガイから感じ取れたが、すぐに収まった。

プールサイドに背を向けて、腰の曲がった老女は去ってゆく。

傍らにアレクシアがやってきて、オレと共にその後ろ姿を見送っていた。

「さて、結局はこうなった訳だ」

『すみません、兄さん。私がこう言うとその、他のみなさんに申し訳ないでしょうけど……みなさん、想像以上に弱いですね……』

「お前ですらそう思うだろう。バトルをさせられる任務を、オレたち兄妹に任せつきり

にしているからだ」

『ひよつとして、それを意識させるために、バトルに誘ったのですか？』

「いいや。さつきも言ったが、あいつらの実力がオレの予想をはるかに下回っていただけの話だ」

「そう、ですか」

「人は試練を越えたとき、はじめて強くなるチャンスを得る。それがオレの気まぐれから起こった偶然であろうとな」

「はあ……」

「それと」

オレはそばにあったベンチから自分用のタオルを取ると、アレクシアの頭に載せた。妹はそれを手に、ぼかんとした顔でこちらを見る。

「身体はきちんと拭いておけ。いずれ乾くとはいえ、体調を崩せば今後の任務に障る」
「あ……はい」

オレが振り返ると、何人かの部下が露骨に視線を外したのがわかった。

今回のバトルで、オレへ反感を覚えた人間が何人か増えただろう。

それでも構わない。

どうせオレに与えられた時間は少なく、奴らとはそれまでの間柄でしかないのだあ

る。

そしてなによりも、奴らは弱すぎる。

来るべきツガミ・ユウジとの決着に臨むのは、オレとアレクシアだけで十分だ。

S i d e コウイチ

「コウイチ！聞こえるか！」

「ああ。どうしたんだ？」

あくまで第三者として、イチジヨウさんと傍観の立場にいた僕は、シユンから突然話しかけられてまごついた。

この間もアシハラのアデルとシユンの三式臥龍は苛烈な波状攻撃にさらされており、そのすべてはアデルによってしのがれていた。

「第七回世界大会の直後にあつた捜査記録で、今すぐ呼び出してほしいアーカイブがある！」

「第七回？」

「できるか？」

「技術面のデータだけならば、僕の権限である程度は……」

「それはよかつた！じゃあ『エンボディシステム』について頼む」

「『エンボディ』？どうして今そんなものを」

「いいから早くー！」

切羽詰まった従兄弟にせかされて、僕は愛用の端末を取り出した。

特務班に派遣されたヤジマの技術スタッフという立場上、テクノロジーに関する記録ならば申請をせずともその場でアクセスできる。

要求されたものはすぐに見つかった。

いわく、エンボディシステムは、第七回世界大会の後に発覚した、フィンランド代表の不正行為を調べる過程で発見されたものである。

フィンランド代表のファイター、アイラ・ユルキアイネンは『プラフスキー粒子の流れを可視化する』能力の持ち主だった。

その能力を増幅するものがエンボディであり、スーツの形をとってアイラ選手に装着、使用されたという。

能力なき人間にはコスプレでしかないという仕様もあり、発覚は大会終了後にまで遅くなってしまうていた。

「肝心のアイラ選手も大会後には行方不明になってしまっていて、システムの解明は遅々として進んでいない……と。これがどうかしたか」

「それだ。肝心なのはその、見える能力ってやつだよ」

「僕は信じられないけどな。そんなものが実在したら、アイラ選手は準決勝で敗退する

はずがない」

この『能力』というのが眉唾ものである理由は、あまりにも強すぎるからだ。プラフスキー粒子で流動的に操作するという性質上、この能力が実在すれば、相手の行動すべてを把握しているに等しい。

そんな相手に勝利することなどどう考えても不可能だ。

いかなる奇策を弄したとしても事前に読まれてしまう。単に先読みに優れているという話とは異なるのだから。

「コウイチの考える真偽は、今はどうでもいい。重要なのは874が、アシハラのアデルの、結晶体だけを先に知覚していたことだ」

「俺のガンプラの『心臓』が見えても、機体の種類は手で触れなければわからなかった。粒子のみが、あいつに見えているという証拠だ。」

「つまり、874さんも同じ能力の持ち主だから、アデルの結晶体を認識できたと?」
「そういうことだ!」

三式臥龍がわざわざブイサインをこちらによこす。

そこへ拡散して降り注ぐ実弾の雨を、アデルの剛腕が防ぐ。

とうとう厚い質量装甲に穴が開いた。

いかにタイタスが防御力の高いウエアであるとはいえ、無茶がすぎる。

戦況がみるみる悪化しているにもかかわらず、アシハラは冷静だった。

「874の攻撃は、俺のアデルの対応策に合わせる、次々戦法が変化している。それもテイタスの攻撃・防御方法を、粒子を通して観察しているんだろう」

「そんなのどうやって倒すんだよ！」

「ヒカワ、お前が慌ててどうする。その能力を持っていたアイラ・ユルキアイネンは、正々堂々とガンプラバトルで撃破された。倒す方法はあるはずだ」

アデルの巨体が動いた。

空を見上げ、まるで力士のように大きく四股を踏む。

その振動は大地を震わせた。

「キノ」

「おう、なんだ」

「俺の推測と戦法が正しければ、あの女の場所の特定、目くらましまではできる」

「マジで？」

「ただし、俺の役割はそれまでだ。あとはお前が倒せ」

「よおし！わかった！」

「まずは場所を探知する」

じつとしていた三式臥龍がにわかに元気を取り戻す。

アデルは背中 of 装甲をスライドさせ、数発のミサイルを発射した。

それは空中で炸裂し、耳が痛くなりそうな高音を発する。

それは彼等の足元にある水面にまで伝わり、無数の波紋を作り上げた。

「たとえレーダーが届かなくても、これで地上と空中、両方を観測すれば隙はない。……
見えた。ここだ」

アシハラのアデルが特定した位置を、三式臥龍も確認したらしい。

それは二機から見ておよそ北西の方向。

そこにわずかな空間の揺らぎが生まれたかと思うと、青いガンプラが姿を現す。

全身にカメラを装備し、両肩の大型シールドで身を守っているガンダムタイプ。

『ガンダムサダルスード』だ。

現象から察するに、GN系機体に特有の光学迷彩で、肉眼ではほとんど不可視の状態にまで姿を消していたとみえる。

しかし874さんにとっては不運にも、アシハラはステルス機に遭遇済みである。

あいつはコスモス事件を踏まえて対策を立てていたのであった。

「サダルスードなら、これの恐ろしさがよく見えるだろう」

アデルが両の拳を勢いよく打ち合わせる。

すると、パワードスーツのように巨大なテイタスの装甲が、さらに膨れ上がった。

規模は違うけれど、アシハラはRGシステムと同じ現象だった。

ただ相違点があるとすれば、その装甲のふくらみが腕を伝わり、肩のメガ粒子砲を搭載した部位にまで移動していることだ。

「この距離、ただのナックルでは届くまい。ならば、『その衝撃のみ』を発射するだけだ」
テイタスが両腕を広げ、上体をそらす。

肩の砲門が圧力に耐えきれなかったようで、ベコン、とプラスチックらしからぬ音を立ててひしゃげた。

『RGビルドインパクトキャノン』

瞬間、アデルの足元の水面が、激しく波打った。

そして不可視の衝撃がしぶきをあげながら一直線にサダルスードへ向かい、その機体を紙くずのように吹き飛ばす。

シユンがそれを見て快哉を上げた。

「当たった！」

「かつてアイラ・ユルキアイネンに予測されなかった攻撃は、伝説の機体のビルドナックルだけだ。だったら同じものを発射してしまえば、原理はともかく当たるだろうさ」

「なるほど」

僕が調べた過去の記録に、そんなことまでは書かれていなかった。

この作戦は、アシハラがアイラ選手のことを知ってから、己の記憶を頼りに考案したものなのだ。

「それにしてもあいつ、最初の狙撃した位置から移動していないように思えるが……?」
「そこらに武器をばらまいて、遠隔操作でもしたんじゃないか」

「ともかく突撃だ。一撃で仕留める!」

三式臥龍の周囲の空間が歪み、加速を開始する。

サダルスードは両手にハンドガンを構え、身を起こそうとしているが、どうしようもない。

先ほどのダメージの損傷が大きいのはわかるし、三式臥龍の速度は全世界のガンプラの中でも屈指の速度なのだから。

勝利を確信したその時、これまで蚊帳の外に置かれていたイチジヨウさんが話しかけてきた。

「あの、ヒカワさん」

「は、はい。どうかしましたか。イチジヨウさん」

驚いた僕がぎこちないリアクションをすると、彼はひどく申し訳なさそうに腰を低くしてつぶやいた。

「私はガンダムに詳しくないですから、間違いかも知れませんが……けれど、あのガンダム

は、スポッターではないでしょうか？」

「スポッター？」

「観測主です。狙撃目標や着弾点を観測するために狙撃手とは別に配置されていますが、見たところ体中にカメラがついているようですし」

「ええ。確かにサダルスードは全身カメラアイで、偵察を任務としていた機体です。でもあのガンプラは一人で観測し、一人で狙撃する自己完結型だと思いますよ……あれ？」

僕はそこで自分の言葉を反芻してからフィールドに目を戻した。

そこは今まさに三式臥龍が、刃を突き立てようとしている。

どうしてあの距離から狙撃をして、移動前の三式臥龍を狙おうとしないのだろう。

空間転移に近い三式臥龍のスピードだが、まっすぐに突撃したのだから、撃てば当たったはずだ。

ひよつとして、イチジヨウさんの言葉が正しいのではないか。

改めてサダルスードのマウントラッチに注目すれば、なんと狙撃銃を装備していないではないか。

機体のセンサーと連動させた方が命中しやすいのだから、わざわざライフルまでも遠隔操作する必要もない。

結論として、メイン武装を確実に命中させられる『狙撃手』を、どこかに隠し持ったままということになる。

罨だ。

僕はようやく思い立った。

「まづいーシューンー！」

僕の叫びと同時に、重々しい銃声が鳴り響いた。

三式臥龍が、サダルスードを切り裂く動きをやめぬままに振り返る。

なんとアシハラの真後ろに実弾が迫っていた。

最初に彼が防御した、おそらく手作りの『プラスチックの実弾』である。

アデルが反転しようとするが、機体が大型化しているためやや鈍重になっていた。

完璧な不意打ちだ。

さすがに三式臥龍の移動も間に合わない。弾丸はまっすぐに、脆弱な推進系へ炸裂した。

そのはずだった。

「……なあ、占い師さんよ。傍目八目ってことわざ知っているか」

果たして、その攻撃を防いでいるのは、ありえない位置まで瞬間移動してみせた三式

臥龍だった。

中華風の鎧から発せられるビーム・バリアはサダルスードの攻撃を完全に防御し、アデルへの損害をゼロにしたのである。

「……バカな。先ほどの移動スピードでは、間に合わない計算のはず」

874さんのハロが久しぶりに口を開く。

それほどまでに自信を持っていた攻撃を受け流されたのが意外だったらしい。

粒子の壁ごしに見えるシユンの横顔は、いつものように歯列を見せる笑みを浮かべていた。

あいつの気分が最高潮にまで高揚した場合に見せる、獰猛な獣の表情であった。

「傍目八目っていうのはよ。勝負を横から見ている人間の方が先を見通せる、冷静な判断を下せるって意味だ」

「キミは傍観者だったから、僕の不意打ちが読めたと?」

「オレちゃんのことを、邪魔だとか、話をしていない、とか邪険に扱ってくれたお礼さ」
三式臥龍が、一歩前へ出る。

そのシルエツトが、SDの小さな足を進めるたびに大きくぶれる。

そしてとうとう、二つに割れた。

分身したのだ。

サダルスードが、いや、味方であるアシハラのアデルでさえ、これには動揺する素振

りをみせた。

「逆に言えば、勝負の当事者が冷静になっているなんておかしいよなあ？」

「屁理屈だ！」

「熱くなるうぜ。占い師。先なんて見えなくらいによお！」

次の瞬間、三式臥龍のカメラアイに、炎をともしように瞳が現れた。

SDガンダムに時折見られるこの『瞳』は今、闘志をたたえて燃えていた。

ただならぬ気配を察知したか、各所に配置された武装が遠隔操作で一斉に発射される。

砲撃による蜘蛛の巣、包囲網だ。

その中心で三式臥龍が飛ぶ。

本体を追って分身も跳躍した。

「どういう現象だ!？」

ハロが狼狽する中、僕はシュンがとっておきとするこの技を、本人に自慢げに聞かされたことを思い出していた。

名づけて『臥龍転生』。

プラフスキー粒子の幻影で、独立駆動する分身を次々に生み出す必殺技らしい。

分身の数は貯蓄している粒子量に依存するものの、ここまでテイタスに守られ、ほと

んど動かずにいた三式臥龍は、全力でこの技を使用できる。

飛行する間も三式臥龍はその数を増やして、あつという間に限界の数である六機まで増加した。

てんでばらばらに散開し、戦場のあちこちへ手あたり次第に飛び掛かる。

ある三式臥龍はミサイルコンテナを両断した。

別の三式臥龍は、出撃したダミーバルーンを両肩のビームキャノンで一網打尽にする。

874さんが張り巡らせた知略、攻撃パターン、無数の武装を小細工なしに正面から狩り尽くしていく。

「オラァー！」

「迂闊……！」

そして、とある一機が、狙撃用のロングライフルを掲げて勢いよくへし折ったとき、バトル終了は告げられた。

『BATTLE ENDED』

粒子が回収され、後には茫然とする少女と、ハロが残される。

最後に破壊された狙撃銃が、かたり、と筐体に取り落とされた。

折れたライフルにはセンサーのあるべき場所に、ガンタンクのものと思しきコクピツ

トパーツが使用されていた。

『本体はライフルそのもの』……。さっきの一撃は逃げる必要さえない、最後の一発つて訳か」

シユンはそのライフルを指先でつまんで、一通り検分すると、破壊されたサダルスー
ドの横へ戻した。

撃墜判定をずらすような小手先の技には、さほど興味がわかないようだった。

一方のアシハラはというと、先ほど自分が油断したことが許せないらしい。

消沈した面持ちでテイタスをアデルから外していた。

「俺としたことが。こんな罠にかかるとはな」

「お前は悪くねえよ。こすい真似をするこの占い師の問題さ」

シユンは大儀そうに腕を大きく回し、首の関節を鳴らした。

そして874さんへ近づくと、その華奢な肩を優しく叩く。

先ほどまでの落ち着いた態度が嘘のように、874さんはその身体を跳ねさせた。

「さて、占い師さんよ。約束通り、アレックスのことをユウジちゃんに喋ってもらおう
か」

「……僕に勝ったのはキミだ」

「どっちにしても同じだ。勝ちの褒章として、オレちゃんの仲間情報によこせ」

「……仕方ない。約束は約束だ」

874さんには、注目していたアシハラではなく、路傍の石にすぎないようなシユンに負けたのがよほどショックだったようである。

観念してハロを手から離れた。

ハロがアシハラの下へ転がると、ぱかり、とその口を開いた。

先ほどまでの語り方と違う、まるで腹話術人形のような様子にアシハラも妙な顔をする。

僕も部外者ながら、思わず息をとめて耳を傾けていた。

「……アレックス・メルフォールも、キミと同じ結果が出た。『死』のカード……同じ『決着』を意味する」

「……つまり、俺と決着をつけると」

「そうなるだろう。しかも奇妙なことに、僕にはその時『未来』も見えた」

「お前、そんなものも見えるのか」

シユンが目をサングラス越しに目を見開くと、ハロは全身を左右に振って、それを否定する。

「普段はまったくの専門外だ。おそらく、彼らのガンプラが両方とも、結晶体を宿しているから、僕の感覚に妙な影響を与えたのかもしれない……あの忌まわしい研究所で視力

と声を失って以来、久しぶりに見るガン普拉のヴィジョンだった」

「ヴィジョンとやらは、どんなものだった」

「……どうしても聞くかい？」

「ああ」

ハロはアシハラの色をうかがうように見上げた後、短い沈黙を挟んでそれを告げた。

874さんが見た、悲惨な予言の内容を。

「……炎の中、アカツキの前に黒いアデルが崩れ落ちる姿を見た。キミのアデルは、アレックス・メルフォールが使うアカツキに確実に敗北する」

その一字一句が、刃のように冷たい。

だからこそ、妙な信憑性をともなって立ち現れたように感じてしまった。

さすがにアシハラは凍り付き、僕とシユンは言葉を失う。

イチジョウウさんだけが理解できず、居心地悪そうに身をすくめていた。

Side ユウジ

イチジョウウという警察官によれば、874の道路不法使用は始末書にとどめてくれるらしい。

彼女が視覚と会話機能に障害を抱えていることは事実であり、現場の判断での情状酌

量だった。

とはいえこれからは、今までのようには占いを営業することはできないだろう。

いや、まだ営業再開の余地があるだけ有情かもしれない。

874 はあの警察官に借りができたことになる。

「私も、あのバトルを見て手に汗を握らせてもらいました。そのお礼だと思ってください」

イチジョウはそんなことを言つて、薄笑いを浮かべていた。

あれでも精一杯の笑顔なのだろう。

ヒカワはそれを見て、なにやら満足げにうなずいていた。

「問題はこれからの保護場所だね。ぼんやりと保護するとは決めていたけど、支部に居住空間はないし……」

「オレちゃんの寮でいいじゃねえか」

874 の保護に関しては、キノのそんな鶴の一声で決まった。

突拍子と脈絡のない提案に、その場の全員があっけにとられたが、一番驚いたのは874 本人だろう。

大事そうに抱えていたハロをあやうく取り落とすところだった。

そのハロが震えた声でキノに尋ねる。

「キミ、正気か？僕は赤の他人、しかもガンプラマフィアの傘下にいた人間だぞ」

「今は違うだろ。マフィアに守れる人間が、オレに守れないはずがねえ」

「まあちよつと、倫理的に心配な感じがするけど……シユンもそこまでバカじゃないよね？」

ヒカワとしては思うところがあつたようだが、結局は従兄弟を信用した。

正式に決定が下るまでの間は、彼女はキノが身柄を預かる運びとなつた。

874はまだ現実を理解できていないようである。

「さっきの介入といい、キミはひよつとしておせっかいなのかい？」

「よく気づいたな。オレの700ある長所の一つだ。他には美少女なら命をかけて守り通す、などがある」

「やけに具体的だねえ」

「アムロボイスで言われてもなあ」

「だから、せめてリボンズと言ってくれ」

そんな調子のいいことを言う金髪アロハシャツの男に、紫のベールをかぶつた少女がハ口を抱いたまま微笑む。

俺は二人の間に妙な空気を感じ取つた。

さっきのバトルでの、一触即発なものとは正反対の雰囲気だ。

うまく言語化できないが、その漫画のような光景を見ると、どうにも背中がかゆくなる。

ヒカワもしきりに後頭部をかいて、視線をさまよわせている。

こんなところで、俺はこいつと同じ心情になるのは嫌であった。

「……外の空気を吸ってくる。何かあるなら呼べ」

「おうよ。お疲れさま。ユウジちゃん」

とにかく、任務の当事者が円満に笑っていられるならば、もう俺の役目は済んだと思つてよさそうだ。

俺はキノに断つて一人で874の占い小屋を出る。

扉を開けた先の裏路地は、相変わらず薄暗く、人通りはほとんどなかった。

もの思いにふけるには、ちょうどいい場所である。

俺は、先ほど874が、正確にはハロが口にした予言の内容を反芻した。

「アレックスに俺のアデルが敗北する光景を見た」

コスモスの事件で、戦う羽目になった、アカツキとザクウオーリアのことが頭に浮かぶ。

あの時は通信越しだったため確定できなかったが、あの紫色のアカツキが、アレックスの現在の使用機体ということだろう。

しかも、874の証言と統合すれば、アカツキにはアデルと同じ『プラフスキー粒子の結晶体』が埋め込まれていることになる。

あれはどういった経緯で俺とアレックスの手に渡ったのか。その経緯はまるで思い出せそうになかった。

「……む」

突然、裏路地を強い日の光が差し込んだ。

上空を覆う雲の切れ間から、わずかに太陽が顔を出したらしい。

思わず右手を顔の前にかざしたとき、俺は二の腕にアザができていることに気づいた。

今朝にはこんなものはなかったはずだ。

もしかして小屋の暗がりでぶつけただろうか。

「ユウジさま」

アザの様子を診ていると、俺を呼ぶ声が聞こえた。

警戒をむき出しにして振り向く。

「誰だ」

「……やはり、こちらにいらっしやいましたか」

そこには黒髪を後ろできつくくしばった、スーツ姿の女が立っていた。

どうやら任務を終えて俺が出てくるのを、ずっと待ち伏せていたようである。濃い化粧を施したその女の顔は、俺の記憶に符号するものがあつた。

ノイズが走つた記憶の渦のさなかに、アレックスと俺に微笑んでいた顔だ。

俺の唇が、自然と動いていた。

「オザワ、さん……？」

「二年ぶりでございますね。ユウジさま」

古い記憶が、新たな一ページを繰り出す。

俺は思い出した。

そこにいたのは、一年前までアレックスが日本にいたときの世話役であつた人、オザワさんだつた。

Parts. 07 「彼の実力」

S i d e ユウジ

俺はアレックスの世話役、オザワさんの運転する乗用車の中にいた。

占い師の小屋の前で彼女と遭遇してから、有無を言わせず乗せられたのである。

ヒカワの説教を回避するために連絡は入れてあるが、後で根掘り葉掘り聞かれることは避けられまい。

「……」

車はとつくに高速道路へ侵入し、変化のない隔壁ばかりが視界の端へすつ飛ぶ光景が続いていた。

オザワさんは黙してハンドルを握り、背を向けたままである。

俺が重苦しい空気を紛らわせるため、座席の前にあるケースを開くと、妙なものがあつた。

工具ケースだ。

俺と揃いの、緑色の握りがついたニツパーもある。

おぼろげな記憶が正しければ、アレックスはファイター専門のはずだが、誰のものだ

ろう。

「……それは、忘れ物が多かったユウジ様のために、アレックス様が用意していた予備の工具です」

「あいつが？」

「お忘れですか」

揃いもなにも、どうやらかつての俺が日常的に使用していたものの名残らしい。頭がかすかにしびれる。はつきりとしたことは思い出せなかった。

そんな俺の様子を、彼女はバックミラーで静かに観察していることがわかった。まるで黒曜石のような瞳だ。この人の前で嘘はつきづらいと感じさせる。

「……情報は入手しています。精神的なショックによる、部分的な記憶障害だと」
「どうしてそれを」

『ムラサメ』の情報網は広いです。関係解消後のあなたの動向を、念入りに調べるようにと命じられました」

『ムラサメ』。

たしか、アレックスの実家がそんな組織か企業かを管理していたような気がする。

組織の力を借りるほど、俺の空白の一年間はアレックスにとって重要なものだと見える。

突然オザワさんがハンドルを右に切ったので、俺は大きく体勢を崩した。

シートベルトが肩口に食い込んで鈍い痛みが走るが彼女が意に介した様子はなかった。

「……調査の結果、あなたがかつての『ツガミ・ユウジ』様とはまるで別人のようであると結論づけられました」

「余計なお世話だ」

「あなたに前回接触した際は、そのような受け答えをする方ではなかった」

「人は変わるさ。それがあいつにとって望ましくないのなら、縁の切れ目じゃないのか」
ぶつきらぼうに返すとオザワさんはしばし言葉を詰まらせる。

似たようなことは、三流ファイターに転向してからしばらくして、叔父にも言われた。その時の彼は、いかついひげ面をくしゃりと歪めて悲しそうにしていたが、彼女も同じような感情にとらわれているのだろうか。

「変わったのはあの方も同じです。今ではとても頑固に、意固地になってしまわれました」

先ほどまで平坦で事務的だった声に熱がこもっていた。

車は高速道路から一般道路へ下り、市街地の中を車は進む。

窓の外に立ち並ぶ建物の配置を見て、俺の胸に懐かしさが去来した。

俺はこの道を通ったことがある。

それも一度や二度ではなく、何度もだ。

この先は歩道橋を二つ越えて、閑静な住宅街に入るはずだ。

「見えました」

果たして歩道橋を二つ越えた先の一面で、オザワさんは車のスピードを落とした。

住宅街のど真ん中、近くにスーパーはおろかコンビニすらない、ただ家を並べただけの住宅街である。

その藍色の屋根を視界にとらえた瞬間に俺の心臓が跳ねた。

一つだけ、やけに巨大な建造物がある。

隣家に比べて明らかに大きく、もはや屋敷と形容するがふさわしい。

車輪の回転にあわせて、屋根の下から白塗りの漆喰の壁がのぞかせ、こちらへ迫ってくる。

それが身震いするほど恐ろしかった。

やがて、錆びた両開きの門の前で、オザワさんは車を停めた。

この時点で頭痛は過去最悪のレベルまで悪化しており、門の後ろは輪郭がぼけてい

る。
腰のホルスターを開けると、アデルと一緒にしまつてある常備薬を取り出す。

「オザワさん、水、持っていますか」

「ええ」

彼女はわざわざ運転席を出ると、俺の乗っている側へ回り込んで、扉を開けた。

目の前にキャップを開けたペットボトルが差し出される。

暗に俺も降車することを求めているようだ。

俺は薬を二錠口に放り込み、水で喉奥に流し込んだ。

「……………どうも」

「礼には及びません。それよりも、思い出されたようですね。ここがどこか」

「ああ…………アレックスの家だ」

かつて俺とアレックスが組んでいた時代、アレックスが日本での居住地としていたのがこのバカでかい屋敷だ。

実家にはバトルシステムなんて贅沢なものはなく、まだ叔父に引き取られる前だった俺は、あいつと練習をするためにここへ通っていた。

その送迎を行っていたのは、傍らに立つオザワさんだった。

「なぜ、こんな場所に」

「もちろんアレクサンダー様…………アレックス様からのご命令です」

彼女はスーツの外ポケットから二つの物体を取り出した。

一つは細かい傷や塗料はげにまみれたGPベース、もう一つはキーホルダーのついた鍵だった。

「これは一年前まで、あなたが使用していた『本来の』GPベースです。あなたとアレックス様の戦闘データがすべて記録されていますが、解析は不可能でした」

「不可能だった？」

「なにせPPSEの最高級テクノロジの結晶です。いくら我々でも、最も重要な部分のプロテクトを破ることはできません」

「だから今さら返すというわけか」

「そうです。この屋敷の鍵と共に、あなたにお渡しします」

俺の掌にベースと鍵を握らせる彼女の手は、氷のごとく冷たかった。

GPベースは気持ち悪いほどに手になじんでいて、普段アデルに使用しているものが他人のものだと感じるほどだ。

「アレックス様からあなたへ向けた言伝は一つだけ。『ここで待つ』と」

「……………」

「自宅までお送りいたします。」

オザワさんが再び車のドアを開け、俺に乗るように促す。

俺は屋敷をもう一度見上げた。

遠目に見ても壁や窓に至るまで清掃が行き渡っていて、時間の経過を感じさせない。ここだけ時間が止まっているように感じる。

ひよつとした、アレックスはあそこにいて、どこかの窓からこちらを見ているかもしれない。

そう考えると、否が応でも鳥肌が立った。

あいつの言葉が意味することなど、深く考えるまでもない。

思い出の場所で決着をつけよう。

そう誘っているのだ。

Side アレックス

オレと暁 雷光は新たな『神器』の回収任務についていた。

ガンプラマファイア『ドラド』の息がかかったファイターの寄り合いが開かれるという情報を聞きつけ、強引に介入したのである。

『紫電のアレックス』が、なんだっていうんだ！

「邪魔だ」

威勢よく、オレンジ色のグファイグナイテッドが飛び掛かってきたので、ガトリングでハチの巣にする。

銃口から上がる煙が掻き消えるよりも早く、頭上から次の機体であるアリオスガンダ

ムが降下してくる。

これで30機目だ。

「ゲームの残機のように、連続出撃を繰り返す『神器』か」

同時出撃ではなく、単独のガンブラを矢継ぎ早に繰り返すという、通常のパトルでは意味をなさないもの。

つまり、裏の界限でなければ誕生しえない『神器』であった。

アリオスは暁 雷光の弾幕を変形することで回避したが、背後からのビームに貫かれて地に堕ちていった。

下手人であるソヴアールザクウオーリアが、オレの傍らに立つてモノアイの眼光をこちらに向けてくる。

「兄さん。いくら暁 雷光でも、ここまでの長期戦では不利かと」

「やや景気よく撃ちすぎたのは認めよう。だが、相手の方が先にバテたようだ」
次にやってきたZプラスは目に見えて完成度が異なっていた。

おそらくとっておきの一体。これまでとは段違いの性能でかかってくるだろう。
それでも高揚感はない。

あの女、ナガイ・トウコを、彼女が本気でなかったとはいえ撃破してしまったことが、妙な空白を胸中に作り出してしまったようである。

「よそ見をするな！」

Zプラスのライフルから放たれた光条は暁 雷光の装甲表面で弾かれる。

こちらのバックパックの右側からせり出したバズーカ砲で、その行動範囲を狭めつつ、アレクシアの突破口を形成する。

「……何かが足りない」

「くそっ！こんなバトルで！」

アレクシアに自機の左腕を切断されたZプラスが体制を崩す。

相手は何か戦闘のはこびに不満があるようだが、オレの思考は既に、自分自身へ向けられている。

人間の心理というものは不思議で、計画があまりにうまく運びすぎていると、そこに何らかの見落とし、作為を感じずにはいられない。

このままツガミ・ユウジと決着をつけていいものか、と足を止めてしまったのだ。

今のオレは、一年前のアレックス・メルフォールが持っていたものを全て揃えていると断言できるのだろうか。

「そうでなければ、意味がない」

面倒だが、帰還したのちに、これまでの計画を一から確認せねばならない。

意外なところで躓いたものだと思われている。

オレはため息とともに、ビームキャノンの引き金を引き、勝敗に決着をつけた。

……そのはずだった。

「兄さん！」

「なに」

アレクシアの切迫した声でさすがに我に返る。

不可解なことに、Zプラスは倒れていなかった。

モニター越しに見上げれば、ビームキャノンの一門が火花を上げ、ほぼゼロにまで出力が落ちている。

しかもその不調は今現在もモニターに表示されていない。

連続出撃などという反則を許容しているバトルシステムなのだから、エラーを吐き出しやすいのだろう。

「不運だったなーいや、俺がラッキーだったのかな？」

Zプラスは損傷したスラスターで不格好に地面スレスレを飛ぶ。

おそらくファイター自身にもわかっていないランダムな軌道のズレに、アレクシアの迎撃が外れる。

ここに来て、あの『神器』所有者に運が回ったとでもいうのだろうか。

「食らえ！」

Zプラスの前腕部が開き、グレネードランチャーの弾頭が顔を出す。相手はこれまでとは異なり、原型機にはない切り札を切ってみせたのだ。

「……残弾なし。残りはサーベルのみ」

そして、計算が狂った故に暁 雷光はほとんど対抗手段を失っていた。

弾頭がゆつくりと暁 雷光の胸元へ迫る。

万事休す、と人は言うだろう。

勝負の天運が、長いバトルの末に相手方へ傾いたのだと。

かつてメイジンも第七回世界大会で敗北寸前にまで追い詰められた際、『筋書きなきドラマ』の存在を認めている。

「なめるなよ」

それこそがオレの逆鱗に触れるものであるとは、知る由もなからうが。

「勝利の女神とやらが実在するならば、力あるものに微笑まずしてなんとする！」

オレは幸運に快哉を上げる相手を、何よりも天運ふぜいに勝敗を一瞬でも許そうとした己自身に喝を入れた。

瞬間、昂った感情に呼応するように、暁 雷光の表面で、紫色のスパークが走る。

「なんだ？」

設計にない現象である。

まさしく『紫電』と形容するに相応しい輝きが、わずかに空間を歪めた。

見事にグレネードランチャーの弾道はそれ、暁 雷光をかすめて後方で炸裂した。

「バカ、な」

Zプラスは愕然として動きをとめる。

そこへソヴアールザクウオーリアが、トマホークで渾身の一撃を入れて、今度こそバトルは終わった。

一連の現象を目にしたとき、オレの中でパズルのピースがピタリとはまるような感覚があった。

「そうか。オレとしたことが、その発想はなかった」

収束していく粒子を見送りながら、オレはほくそ笑む。

確かに、肝心な最後の一押しは『運』なのだ。

オレが得た結論はそれだった。

今まで偶然による計画の障害は何度かあった。キノ・シユンに先を越されたことなどが最たる例だろう。

だが、それが現在にまで引きずられる傷跡として刻まれただろうか。

答えは否である。

「どうやらオレには、偶然による不運を幸運へ転がす才能があるようだ」

おそらく一年前のアレックス・メルフォールは自然と持ち合わせていたもの。ツガミ・ユウジと共にあったからこそ、逆に気づかずにしたものである。

その点へ納得がいったために、オレの中で条件は揃った。

暁 雷光の引き起こした現象こそが、オレが悟った才能を有効活用する術だ。

ツガミ・ユウジの代わりとなるものだ。

部下にファイターの身柄を確保させたアレクシアが、不思議そうな顔でオレの下へ歩み寄ってくる。

「兄さん。さっきのエフェクトは一体……？」

「知らん」

「え？」

「それよりアレクシア。先行組の老人どもに連絡を取れ」

「何をなさるつもりですか？」

「計画を次の段階に移行しよう。オレ自身の『神器』が必要だ」

S i d e コウイチ

占い師874さんの事件解決後、アシハラがふらりといなくなった。

携帯には一言『急用ができたので直帰する』とだけあり、僕とシユンは大いに心配させられる羽目になった。

結局あいつは翌日に支部にやってきたが、その顔色がやけに悪い。

事件で破損したアデルのウエアを修復した後、さっさと荷物をまとめはじめていた。僕が近づくと、咎められるとも思ったのか、先にアシハラが口を開いた。

「今日はもう帰る」

「ああ。現状、依頼はないし構わないよ。でも体調は大丈夫か？ここ最近、激務が続いているから……」

「しばらく休むことになるかもしれない」

「わかった。僕が代わりに、数日分の休暇をまとめて申請しておこう」

「頼む」

いつもの棘はどこへやら、アシハラは素直に僕の提案を受け入れた。

スカウトが世界大会による動員で、人出が減るギリギリの時期であったため、『特務ファイター』の必要な任務はすべてアシハラによって行われる。

可能なかぎりバックアップはしてきたが、人間はガンプラのように修理して完全回復とはいかない。

年長者として、彼の休息を確保してやる義務があった。

アシハラが部屋を出ていったあと、僕はシユンに声をかけた。

シユンは手帳片手にソファで寝そべっていた。

「シユン、考えたことがあるんだけど」

「874を『特務』にするってアイデアなら反対だぜ。ユウジが休むなら穴はオレちゃんが埋める」

「参ったな。お前にもお見通しか」

「当たり前だろ。ガキの頃からの付き合いじゃねえか」

あの任務の時、874さんは自らを特務ファイターにするように打診してきていた。

それを言うだけの実力があることはバトルで確認済みで、本人もその意思があるとかば悪くないと考えていた。

しかし、彼女は目が見えず、ハ口を通したアム口声でなければ言葉による意思疎通もできない。

シユンが反対するのも道理だった。

「いずれにせよ、ドラドへの攻撃作戦前に、サポート強化が必要だ」

「そのことだが、オレちゃん一つひっかかることがあるんだよねえ」

シユンは上半身を起こすと、僕と頬が触れるほど近くまで顔を寄せてきた。

僕から彼が持つ手帳の中身が見えて、無数の殴り書きとそれを打ち消す線でいっぱいだった。

その中でひとときわ目を引くのが『特務は誰のもの?』という大きな文字だった。

「コウイチはこの『特務』に来るとき、この部署についてどう説明を受けた？」

「え？そりゃあ、一般のファイターからデータを集め、さまざまなシステムの改良・開発に役立てるって」

「それならなおさら、特務ファイターがユウジしかない、サポートもお前しかない現状はおかしいよな？」

「たしかに母数が少ないのは困るけど、世界大会前のでんやわんやで時間も足りなかったから」

「仕方ないじゃすまないぜ。高校生にオーバーワークを強いるなんて、マスコミにばれたら騒ぎになる」

「何が言いたいんだよ？」

自分が責められているような気がして、つい苛立った調子になってしまった。

するとシユンは取り繕うように両腕を広げ、肩をすくめた。

「コウイチを責めているわけじゃねえ。オレちゃんと言いたいののは、この『特務』という組織について、いろいろ隠し事が裏にありそうだなって話さ」

そう言うのと、シユンは手帳の頁をめくる。

先ほどとは打って変わって彼の疑問点が、一行ごとに整理されて箇条書きにされていた。

そして最後の行が、現在の未解決な問題らしい。シユンはわざわざそれを読み上げる。

「『特務』はユウジが提案するまで広報の所属だった。しかし、それを設立したのは、管轄外であるはずの警備部の長。どう思うよ？」

指摘されると妙な話だ。

特務設立には様々ないざごじがあつたことは、噂で耳にしたことがある。

最終的にはナガイ・トウコ警備部長のコネと権力を利用して設立され、本部からは白い目で見られたままであるとも。

強権を行使してまで彼女が『特務』という部署にこだわった理由が、僕にも説明できそうになかった。

「そして唯一の『特務ファイター』が彼女の弟子。これは本当に偶然なのか、って話だ」

「……つまり、最初からあいつ一人だけをスカウトするつもりだった？」

「オレちゃんはそう見ている。コウイチはおろか、ユウジ本人にも報せずにな」

「どうして」

「わからん。それを確かめるために、オレちゃんが勝手に調べている。機密に触れるし、バレたら首が飛ぶな」

僕は思わず部屋全体に視線を走らせる。

監視されていやしないか、と俄かに気になってしまったのだ。

自分の従兄弟が己の領分をこえた場所にまで踏み込んでいることは明白であり、僕も今この瞬間、話を聞いている。

無関係であるとシラをきることは不可能だった。

シユンは頁の右下、『G4』の文字を指す。

874さんの一件でブリーフィングを行ったときにも、ホワイトボードに書き入れられていた名称だ。

「目下のところはこの『G4』が鍵だ」

「874さん以外にドラドの情報源になるかもしれない人だっけ？」

「よく覚えているなあ」

「なんだか、ずっと引つかかっていたんだ」

「どこかで見たとか？」

「さあ……」

その引つかかりの正体は既視感ではないか、とシユンは指摘する。

僕は端末を取り出すと直近の任務の記録をあさった。

パーツハンターの事件。

カザミさんの制作教室。

ハイバラさんと、彼女のグループをめぐる技術スパイとの戦い。

こうしてみると、僕とアシハラで担当した任務はまだまだ少ないことに気づく。

随分長い間、一緒にいるような錯覚に陥っていた。

そんな僕の様子を見たシユンはニヤニヤと嫌な笑いを浮かべている。

思わず横目で睨みつけてしまった。

「なんだよ」

「いやなに。自分がどうなるか分かった上で、面倒ごとに首を突っ込むなんて昔のコウ

イチじゃ考えられないから」

「そうか？」

「たぶんコウイチちゃんの影響だろうよ。あいつと組んでいるときのコウイチ、結構楽し

そうだぜ？」

「……かもな」

たった一か月ほどの仲で、ずいぶん影響を受けたものだと思う。

シユンへかける言葉づかひも、子供のころからの付き合いとはいえ、ややぶつきらば

うになった気がする。

悪影響の方が大きいのは勘弁願いたい、と苦笑いした。

僕はアシハラのストップパーであるためにも、真面目な人間のままでいたいのだ。

そんなことを考えているうちに、端末がコスモス事件の資料に突き当たった。

指先が止まったのは、事件の発端となった写真の添付されたメモリーカードについての報告書である。

「見つけた。このメモリーカードにはハイバラさんの写真ともう一つ、秘匿データとしてアシハラ過去の映像が入っていたんだが……」

写真には一行だけ文章が添えられていた。

当時は写真や映像へと目が行ってしまっていて、検証さえまともに行っていない文面だ。

「当該人物に技術スパイの疑いあり。調査されたし。G4」

素直に受け取ればこれは差出人の名前だろう。

技術スパイについての情報を、僕とアシハラに提供したのも、シュンがマークしている『G4』と同一人物とみる。

僕は端末をシュンに渡して確認を求めた。

メールの文面、そしてこれを発見した前後の状況を読んだ彼は、普段の陽気さを表情から消し、すぐさま自身の携帯を手に取った。

「なあ。この写真を解読したコードのパターンって、まだ残っているか？」

「タブレットに残っているから、自由に見てくれ」

「サンキュー。これで色々わかるかもしれない」

シユンはそろえた指先を自分の側頭部ではじめて謝意を示して、電話越しに外国語で会話を始める。

英語ではないので僕にその内容はわからない。

どうやら彼の協力者が、海を越えた向こうにいるようだった。

「それにしてもG4ってどういう意味だ？」

874さんと同様にガンダム用語からきたコードネームだろうか。

たしかG4計画なんてマニアックな設定があったはずだ。

その詳細を僕は覚えていないが、アシハラなら知っていそうな気がする。

ついでに聞いてみようかと携帯を手にとって、ばかばかしさに乾いた笑いが出る。

あいつは今しがた休息をとるといったばかりだ。

重要なのはコードネームの由来なんかより人物そのものの情報ではないか。

シユンは『特務』にアシハラがスカウトされた経緯についての鍵というが、いったい何があるというのだろうか。

僕はない頭を絞りつつ、とある番号へと電話をかけた。

乗りかかった舟だ。

どうせなら出来る範囲の情報を、シユンに提供してあげよう。

S i d e アレックス

今度の暁 雷光の相手は、改修を加えられた三機のガンプラだった。

一つは、青色に塗装変更されたガンダムシユピーゲル。

もう一機は、カウボーイハットを被ったガンダムマックスター。

そして三機目は、射撃兵装を中距離用に換装したライジングガンダム。

いずれも『モビルファイター』と呼ばれる、競技のために特色を強調されたガンダムたちである。

残念ながらシユピーゲルとマックスターは物いわぬジャンクとして転がっていた。

「せめてシミュレーションぐらいは務めろ」

その言葉が届いたか否か、ライジングガンダムがライフルを投げ捨て、ナギナタで刺突を試みた。

暁 雷光のバックパックでカバーできないクロスレンジに潜り込む発想は悪くない。

だが、案の定というべきか、こいつもアレクシアの存在に対応できていなかった。

上空からのフォルテスピーム砲で牽制を受け、自ら後退を選んでしまう。

そこからは暁 雷光の支配下だ。

誘導弾とガトリングによる弾幕で圧迫し、あえてオレの死角へと追い込んで行く。

好機とみたか、ライジングが再接近の兆しをみせる。

「アレクシア」

「は、はい！」

ザクウォーリアがアムフォルタス・プラズマビーム砲をオレに向け、発射した。

紅白のウイングガンダムさえ一撃で屠り去ったそれを、暁 雷光が左脚のヤタノカガミで蹴り飛ばす。

ナガイに対して行った戦法の応用。

自分の意思で死角にまで入り込めたと勘違いさせ、そこへ本物の不意打ちを叩き込むのだ。

あまりにもあつさりと目論みは成功し、ライジングガンダムは胴体を円形に抉り取られ、四散した。

『BATTLE ENDED』

「古株だからと、多少は期待していたというに」

「面目次第ありません」

仮想の戦場は消え、オレたちがいる場所の全景が明らかになる。

まずは十数基のユニットから成る大規模なバトルシステムがあった。

とある屋敷の大広間を一区画埋めており、大広間から直上は吹き抜けになっている。したがって、建物の二階の通路は大広間をぐるりと取り囲む形であった。

ここはかつて『ムラサメ』の拠点となっていたメルフオール家旧邸宅だ。

大広間のど真ん中にユニットを移したという以外に、ほとんど内装に変更はないと聞いている。

「お二人の連携、アレクサンダー様の實力は我々の想定を超えておりまして」

「ほう？ならば随分安く見られたものだ。まさか一年前ならば勝っていたとでも言うのか？」

バトルユニットの周囲には、先ほどまでバトルをしていた『ムラサメ』のメンバーがいる。

年齢層はだいたい中年か壮年であり、組織構成員の中でもベテランと呼ばれる者ばかりだ。

先行して日本にやってくるとオレたちの支援を務めていたが、少なくとも世辞は下手である。

とうとう彼等は口をつぐみ、しきりにオレの機嫌をうかがうだけの置物になつていった。

「まあいい。連絡しておいた『神器』の製造はどうなっている」

「はい。バトルユニットがもともとあつた空間でやっております。屋敷は広いですが、こちらにはツガミ・ユウジが使用していた工作ルームが残存していましたので」

この先行したメンバーのリーダーを務める、白いあごひげの太った老人が進み出て、二階の一室を手で示す。

オレとアレクシアは老人について二階の通路へ通じる階段を昇って行つた。

「フランスから『神器』の製造・テストは禁止されていると伺いました」

「数回はおとなく従っていたが、最近の情勢を鑑みると時間が足りなくなってきた」

「既に何種類かは兄さんの機体に搭載しています。今さら本国を気にしても、無駄だと思えますよ？」

机上の虚像で効果を考えるより、一度使ってしまった方が、数倍効率がいい。

本国がそれを行わない理由は単純だ。

オレたちの祖父、メルフォールが『神器』を直接に目にしたいと駄々をこねているからである。

階段の下でオザワがこちらを見上げている。

彼女に声が届かない高さまでやってきていることを確認し、老人に耳打ちした。

「……実のところ、ジジイは長くない」

「なんですと。メルフォール会長が、ですか？」

「本部は体調をひた隠しにしているさ。しかし孫のオレたち兄妹が気づいていないはずがなからう」

祖父が死ねば指揮はオレたち兄妹に移る。

そうすれば『神器』の回収のみならず、管理までやらねばならぬだろう。いつまでも末期のわがままについていられない、というのも理由にあった。

二階の部屋の内、もつとも大きい部屋に通される。

換気がなされているにも関わらず、塗料のにおいが鼻についた。

部屋の内部では何人かのビルダーが工作ブースに向かって黙々と作業している。

オレたちが入室しても視線さえ向けなかったが、その方が態度としては望ましい。

アレクシアが興味をもったのか、ビルダーたちの背後を通って、その手元をのぞきに行く。

その隙に老人がオレの手に何かを握らせた。

見れば、ガンプラの右腕である。

分厚い装甲が具足のように腕全体を覆い、原型機が何であったかの判別をつけ難くしていた。

「こちらが注文されていた『神器』です」

「ご苦労」

「しかし一つわかりません。なぜ、アレクシア様には『開発中』であるように装うのです」
声をひそめる老人の顔には不審が浮かんでいる。

その言葉通り、早くも『神器』が完成にまで至っていることはアレクシアには話さずにいた。

把握しているのは依頼を受けた老人と制作した人間、そしてオレのみである。

オレたち兄妹はいかなる情報も共有する。片方が知らないはずのこともいつの間にか読まれている。

それがムラサメに属する者の共通認識だ。

だからこそ、組織に長く所属する老人には気になる事態であろう。

あえて、オレは軽くあしらうにとどめた。

「アレクシアは優しすぎる。これの使い道を知れば死に物狂いで止めにかかるに違いない」

「そんなことは、今までにもありましたでしょう?」

「今回ばかりは訳が違う。なにせ、『紫電』が関わる」

「?アレックス様の、二つ名が、ですか?」

「『紫電』の完全復活はあいつには都合が悪かろうからな」

呟きの意味は、老人にさえ理解できないものである。

「ここそと話をしていることに気づいたのか、アレクシアがオレたち二人を見て、きよとんと首をかしげた。」

オレは何でもないように、久方ぶりにほほ笑んでみせた。

これから最愛の妹を裏切るのだ、これくらいはやってみせねばなるまい。

「アレクサンダー様。屋外のカメラに、不審な人物が」

部下から耳打ちをされた老人が、オレにそんなことを報告してくる。

手渡された端末を見れば、門を解錠し、庭を突っ切る人影があった。

体格はオレと同程度か、やや痩せている。

なにより目立つのは、精気を失った亡者のような瞳だ。

よほどの絶望を抱えてここまでたどり着いたに相違ない。

その変わり果てた姿を見ても、オレは不審者の正体にすぐに合点がいった。

「来たか、ユージ」

時間はいくらでもあったというのに、昨日の今日に来るとはご苦労なことだ。

「アレクシア、時間だ。下へ戻るぞ」

呑気に制作担当の部下と談笑していた妹を呼び戻す。

事態をすぐさま把握した彼女は、俄かに拳を握りしめ、緊迫した様子を示した。

「手が震えているぞ。そんなに嫌か？ 奴に会うのが」

「いえ、これは、武者震いです」

「ぬかせ」

下手な誤魔化しだ。

アレクシアとツガミ・ユウジでさえ、実力の差は歴然としている。

こちらの勝利は必定であった。

階段から見下ろせば、屋敷の扉にオザワによって開かれる。

いよいよ、贄が足を踏み入れる。

Side ユウジ

公式審判員で休暇を取った次の日、俺は地下鉄に揺られていた。

腰のホルスターにアデルを収納し、ワンシヨルダーバッグに飲料とサイフを入れただけの軽装だ。

家でうじうじと頭を悩ませるより、さっさと行動に移すべきだと決意していた。

携帯を取り出し、ヒカワにメールを送る。

地下鉄の車内は電波状況が悪いので、送信までやけに時間がかかる。

そんな些細なことにさえイライラさせられた。

『……お出口は右側です。開くドアに、ご注意ください』

車内放送で駅名を聞かずとも、体が降りるべきタイミングを覚えている。

地上に出れば、オザワさんと共に車で通りすがった景色が広がっていた。

歩きの場合はずっと狭い路地を通れば、近道ができるはずである。

急ぐ必要はない。

のんびりと、気持ちの整理を兼ねて、懐かしい道程を辿った。

「……………あ」

ふと、俺はとある場所で足を止めた。

土手だ。

ゆるやかな勾配が眼下の川までのびて、雑草がぼうぼうと伸びている。

草原の上でシートを敷いて、ピクニックに興じる家族連れもいる。

何の変哲もない、どこでも見かけるような土手であった。

にも関わらず、俺は、アレックスの屋敷を見たときよりも強く胸をつかれた。

身体の中で錆びついて、動きを止めていた歯車が、ギシギシと音を立てて回り出すような気分であった。

「そうだ。ここにいつも、バトルの反省会をして、それから……」

弁当のおかずをほおぼる子供が、俺を怪訝な表情で見上げていることに気づいた。

よほどおかしな顔をしていたに違いない。

気恥ずかしさから目を背けて、俺はその場を立ち去った。

「……………さて」

やがて、屋敷の両開きの門の前へ立つ。

預けられた鍵を差し込むと、当然ながらびたりとはまった。右へひねると、ガチャン、と重い留め金が外れた感触が手のひらへ伝わってきた。

慎重に門を押す。

大きな音が屋敷の庭に響くが、警報が鳴るところか、人の動きがある気配もなかった。本当に進入していいらしい。

整然と剪定された庭の木々の間を突っ切り、建物の扉に手をかける。こちらにも鍵穴があつたが、門の鍵とは形状が違うらしい。

針金でも使えばいいのか、としばし扉の前で頭を悩ませていると、それは内側から開いた。

顔を出したのはオザワさんだった。

「……お待ちしていました。どうぞこちらへ」

彼女は体半分だけ下がり、慣れた手つきで俺をエスコートする。

まるで召使いだ。

導かれるままに大広間へやってくると、来客を歓迎するはずの場所を、大型のバトルシステムが塞いでいた。

こんな場所にあつただろうか、と過去の自分の記憶が首を傾げている。

「都合のいい夢からは醒めたか？」

頭上から降り注ぐ声に、脊椎を痛めそうな速度で顔を上げた。

広間からのびる幅広な階段の頂点に、ふたつの人影があった。

地平線に燃える暁のような茶髪と、ロシア系の先祖から受け継いだと話していた灰色の瞳。

そして、他人を品定めするような眼差しと、ワガママな性格が見て取れる顔つきがある。

「アレックス……！」

「技術スパイの時、軽く手合わせした時以来だな。ユージ」

口角をつりあげているアレックスの隣で、同じ髪と瞳の少女がいることに、俺は気づいた。こちらはアレックスとは真逆に、唇を堅く引き結び、への字に曲げている。

体つきからわかる性別の違いと髪型を除けば、うり二つの容姿だった。

いつか、アレックスにきょうだいがいると聞いたことはある気がする。

その「きょうだい」が彼女なのだろう。

しかし、その少女から放たれる強烈な違和感の正体は解せなかった。

恐れと緊張の入り交じった最中に、なにか隠し通せないドス黒いものが渦巻いている。

わからないのはそれだけが、俺には向けられていないように思えたからだだった。

「ここまで三年間かかった。お前さえ倒せれば、もはや憂慮すべき事態すべてに片がつく」

「悪いが、お前が何を言っているのか、まるでわからん」

「ずいぶん枯れたように見えたが、肝心な弱点はそのままか。嘆かわしい。そうして理解を拒み続けたツケが回ってくることを、今気づかせてやる」

アレックスが一步踏み出すのを待っていたかのように、バトルシステムに火が点いた。

装置が唸りをあげて、粒子を噴き上げる。

西部劇の早撃ち勝負のように、俺たちはまったく同時にGPベースを取り出した。

俺の反対側の手には、ほんの少し改良を加えたティタスが握られている。

こちらとて一年間、何もせずにいた訳ではない。

一矢むくいてやることはできるはずだ。

「いいや、そうじゃない」

戦う前で実力差を想定したことなど、今まで一度もなかったはずだ。

俺の深層意識で、アレックスの存在がどれだけトラウマになっていようが関係ない。アシハラ・ユウジはここでアレックス・メルフォールに勝利してみせる。

Side コウイチ

「えらいこつちや！えらいこつちや！」

シユンが奇声を発してオフィスに駆け込んできた。

僕が椅子を引いてやると、彼はそこへ飛び込むように着席した。

その手にはいつかの手帳がクシャクシャになるまで強く握られ、無残な紙くずになっている。

「あ、あの、G4つてあつたらう」

「ああ。僕もあれから調べてみたけどほとんど何もわからなかつたよ」

僕は『特務』設立前後の支部の様子を尋ねるべく、カザミさんに電話をかけていた。

彼は当時のことを色々と話してくれたが、衝撃的な新事実、というものはほとんどないように思われた。

強いて挙げるとするならば、新たな部門設立をたかが一地方の支部で実験的に行うという内容ゆえに、後ろ暗い事情を勘ぐる者がいるにはいた、という程度だ。

しかし、これも最近の旺盛な活動によって少しづつ解消されているらしい。

そう言うときシユンは何故かガツクリと肩を落としてしまう。

「お前なあ……そりや聞き方が下手くそすぎるよ。何か知っていたとしても、あの胡散臭い広報の兄ちゃんならかわしちまうぜ？」

「そういうものかなあ。やっぱり専門外のことにはやるもんじゃやないな」

「それはともかく、聞いてくれ。G4の正体が掴めたかもしれないんだ」
「どうだったのさ」

シユンは手帳のシワだらけな一ページを、指で広げながら差し出した。

そこにはハカドさんやナガイさんといった見覚えのある人や、僕の知らない人物の名前が大きく丸で囲まれていて、『全員知っている』とある。

それだけではてんで理解が及ばず、僕はさすがのように従兄弟を見つめた。

「ごめん。もう少しわかりやすく」

「オレちゃんがこのに書いたのは、『特務』の設立や運営に関わった人間だ。この人らの周辺を洗った結果、ユウジが制作教室をやった直後ぐらいから、綿密に連絡を取り始めていることがわかった」

「どうして」

「突然、ムラサメから公式審判員に情報売り渡す、って接触をはじめた奴がいたんだよ。それがG4と名乗った、謎の人物だ」

僕は思わず椅子から転げ落ちそうになった。

つまり、ムラサメの内部にスパイがいて、僕の上司を含めた『特務』設立メンバーは、知りながら僕らに黙っているというのだ。

「しかも窓口はお前だ。コウイチ」

「僕が？」

「オレちゃんが入手した記録によると、ある日、『G4が要求した連絡手段を承諾する』というやりとりが上層部でされた。お前がメモリーカードをナガイ警備部長とハカドさんの下に持ち込んでくる直前のことだ」

「あれが『連絡手段』だったのか」

「コウイチの推察通り、あれは『審判員に所属するプログラマーやエンジニア』でしか開けられないメモリーカード。しかも受け取る本人は、その本質を知らないときた」

「じゃあアシハラがガンプラの足の裏からメモリーカードを見つけたのは、そう仕向けられたってことか？」

「わざと目立つガンプラを飾っておいて、注意を引いたのさ。ユウジはああ見えて重篤なガンプラバカだ。手に取らないはずがない」

「万が一、メモリーカードが一般人の手に渡ったとしても、きわめて複雑なセキュリティによって守られている。」

内容が漏れる確率は低い。

ガンプラを見つけるビルドファイターと、開けるエンジニア。

G4が要求する連絡手段を解読できる、その組み合わせが成立するのは、唯一特務班のみであった。

「でも結局、アシハラ一人をスカウトしようとした理由とは関係ないんじゃないか？」
「そうなんだよなあ。あくまで、とっかかりができたにすぎねえ。G4がわざわざ『特務』を選んで近づいてきたなら、何か絡んでいるはずなんだが」

シユンが腕を組み、喉の奥から唸り声をあげた時、僕の端末にメール着信を告げる通知音があった。

大事な話の最中であるし、後で見ようと無視すると、シユンがサングラスの奥から目配せをしてくる。

含みがある様子に僕はつい首を傾げて、端末を開いた。

『話は済んだか？ G4』

「なっ!?!」

僕の表情筋が凍る。

噂をすれば影、G4と名乗る何者かが、タイミングを見計らって連絡をよこしてきたのである。

「公式審判員と通じている以上、窓口になったコウイチを監視できる体制はあると思っ
たぜ」

「こ、これ返信すべきかな？ それとも発信源を特定して、警備部に通報を……」

「落ち着け。ナガイ警備部長が関わってるなら、通報しても無意味だ」

どうやら僕は、明らかに怪しいこの相手に渡り合わなければならぬらしい。

胃がしくしくと痛むのをこらえて、慎重に言葉を選びつつ、キーを打つ。

会話の交わされる速度は非常に迅速だった。

『あなたがG4ですか？』

『そうだ』

『僕たちに直接連絡する意図はなんですか』

『状況の急変により、あなたに直接コンタクトを取るべきだと判断した』

その文面とともに、一本の動画ファイルが添付されている。

題名は撮影日時を数字に並べたものであり、つい五分前のものだ。

端末のOSに搭載されている、送信主に応じてファイルを分別する機能が、あのメモリーカードと同じ場所に動画ファイルを移動させていた。

つまりこれは少なくとも、前回G4と名乗る人物が送ってきたものと、同一のアカウント・データによって作成された動画である。

「オレちゃんにも見せろ」

シユンも見守る中、開かれた動画の内容は、ガンプラバトルの様子を撮影したものだった。カメラの視点からは、黒いジャケットを羽織った背中だけが見える。

この暑い日にそんなものを着ているのは、特務ファイターぐらいのものだ。

仕事を休んでいるアシハラが、誰かとバトルをしている。

それに怒るつもりは毛頭ないが、そんなものをG4が見せつけてくる意味がわからなかった。

「おいコウイチ。このフィールド内で戦っている機体、アレックス・メルフォールのガンブラだぞー！」

「なんだって!?!よくわかったな」

「メタリックパープルだから目立つんだよ」

画面に小さく、「豆粒大で移動するガンブラが確かに伺える。

シユンは一度アレックスと戦っているの、彼が使用していたものだど即座にわかったらしい。

しかし、それではムラサメにアシハラが単身挑んでいることも意味する。

ただのガンブラバトルならいざ知らず、相手は警備部長が直々に潰しにかかる組織だ。勝敗が決まっても、何をされるかわからない。

「助けに行かなきゃ」

「オレちゃんが行く。コウイチはここで、G4から場所を聞き出してくれ」

「そんなこと、支部に引きこもってなくてもできるだろう。僕はシユンについて行くからな」

そう言ってやると、シユンはいつもの齒列をのぞかせる笑顔を浮かべて、僕の背中を勢いよく叩いた。

side ユウジ

『Field 1 Space』

星空の海が、超巨大バトルシステムユニット一面に展開される。

バトルロイヤルさえ行える広大なフィールドが、俺たちの決戦のためだけに用意された。

『Please set your Gum-plate』

テイタスを手に取り、カタパルトにセットする。はるか前方で、アレックスがメタリックパープルのアカツキを、あいつによく似た少女が白のザクウオーリアをセットしたのが見えた。

アデルのバイザー奥で鈍くツインアイが発光し、粒子の充填完了を告げる。

『Battle Start!』

「アシハラ・ユウジ、『アデルへテイタス』Sally Forth……!」

「アレックス・メルフォール、『暁 雷光』出陣する!」

「アレクシア・メルフォール、『ソヴァールザクウオーリア』行きます!」

カタパルトがスパークを放ち、三機のガンプラをまったく同時に戦場へ放り出す。

口火を切ったのは、相手側のザクウォーリアだった。

白地を赤が貫く『SEED』のプラズマビーム独特のエフェクトが、ティタスの質量装甲に激しく叩きつけられる。

しかしティタスは耐えてみせた。パーツの裏側にプラ板を貼り込んで、更に堅牢にした甲斐はあつたらしい。

すぐさま体制を立て直し、両肩の拡散メガ粒子砲の砲門を開く。

「生憎射撃戦は苦手だな。付き合うつもりはない」

四方八方にビームの条線を撒き散らしながら、ティタスは距離を詰める。意地でもあのアカツキの懐に潜り込み、一撃を叩き込まねば勝機はない。

前回の戦闘と同様に、その前に立ちふさがるのはザクウォーリアだ。おそらく、中近距離の遊撃はすべて担当しているのだろう。

先ほどの一撃から、質量装甲で防がれるのをおそれてか、シールドから取り出したビーム・トマホークを振り下ろしてくる。

こちらはそれに、原型であるタイタスから継承した、巨大な拳で応戦した。胆力ならティタスの方がはるかに上だ。

しかし、まるで突進をさばく闘牛士のように、こちらの突進力は軽く受け流されてしまった。

「やる……！」

あせりで操縦桿を握る掌に汗がにじむが、敵はそれを拭う暇を与えてくれない。続いてやってくる一撃は、質量装甲のない胴体部分を狙っていた。

とつさに膝蹴りで刃の先を受け止める。ビームが装甲に干渉し、ビリビリとした衝撃が俺自身にまで伝わってきた。

背面のミサイルランチャーで砲撃を試みた矢先に、ザクが後退する。

その動きを見て、直感が警鐘を鳴らした。ライブのステージ裏でぶつかったときと同じ、あのアカツキの一斉砲撃が来るのだ。

遠方で銃口が火を噴いた。

それはまるで、宇宙の果てで、突然星の数が増大したかのようなのだ。

「腕部ビーム・ジェネレーター、全開……！」

火花を上げて、腕部の装甲からビームの発振口が顔を出す。

そこから円形のビームが、幾重にも折り重なって噴き出した。

テイタスのジェネレーターは波紋のようにビームを撃ちだすように設定されている。

よって断続的に放射し続けることで、一時的に全身をカバーできるほどのビーム・バリアを張ることも可能なのだ。

次々と押し寄せる弾丸とビームの雨が、前方に展開されたビームの傘にあたって弾け

る。

アカツキの火力はその防御さえ貫通するが、質量装甲で押しとどめる。

「ぐ……！」

操縦桿が暴れる。あまりの苛烈さえ故か全身にまでヒリヒリと痛みが走るようだ。

やがて弾丸とビームのスコールは止んだ。ほんの一瞬だけ、バトルフィールドを完全な静寂が包む。

テイタスはかろうじて健在だ。

戦闘不能になることは避けられたが、身動きは取れない。

その隙について白いザクウオーリアが迫ってくる。せつかくアカツキの暴風雨的攻撃をしのいだとしても、これではすぐに致命傷を負うだろう。

だが、それに対策を取っていない訳ではない。

俺はアームレイカーをひねり、武装スロットへ新たに設定した『SPウエポン』の項目を選択した。

「まだ行ける」

『！』

ザクのファイターが息を呑んだのがわかった。

テイタスの装甲が音を立ててはじけ飛び、中から別の装備を纏ったアデルが飛び出し

てきたのである。

両脚に装備していたエールストライカーは取り去られて、全体の形状は原型である『スパロー』に回帰している。

ただし、一部のパーツが審判員の支援で取り寄せた『レイザー』に交換された。

『モワノー』に、テイタスを上からかぶせることを想定した、この場限りのアツプグレードバージョンである。

『反応に、機体が追いつかなくて……！』

「捕まえたぞ」

たとえファイターの技量に天と地ほどの差があろうと、その差はガンブラで埋めればいい。

このモワノーの瞬発力に対応できるなぞ、世界大会レベルの人間でも難しい。

ザクの胴体部分に両腕を回し、抱きつくような体制に持ち込むと、その顔面めがけて膝のニードルガンを叩き込む。

すんでのところでザクが首をかしげたせいで、メインカメラを吹き飛ばすには至らなかったが、それでも頭部のパイプを断裂させることができた。

プラズマビーム砲が動く気配を感じたので、こちらから距離を取る。

宇宙空間に漂うテイタスの右腕部へ、モワノーの右腕を突っ込むと、先に引き金を引

く。

さつきは防御用に使用されたビーム・リングが今度は攻撃としてザクに牙をむいた。頭部への一撃で怯んでいるのだ。掠ってくれることぐらいは期待した。

「……冗談だろ？」

相手は無傷だった。

右手に握っていたトマホークを咄嗟に投擲し、ビームを拡散せしめたのだ。

アレックスのような真似ができる人間が、戦場に二人いることの絶望感が、今更胸をしめつけてくる。

『さて、次のこれはどうだ？ ユージ』

「しまった」

ザクが横にのいたことと、アレックスの喜びがこもった声が、最悪の未来をはじき出させた。

アカツキの第二波が来る。

そして俺の技量で、すべて回避することはかなわない。それは自分が一番わきまえて
いることだった。

アレックスに指一本触れられず、まるでローテーションのような攻撃に敗れ去る。

アシハラ・ユウジの限界はここまでらしい。

「いいや。そんなことは、認められないんだ……い！」

R Gシステムの起動コマンドなしに、アデルの胸部装甲が鈍く光を放つ

その時、俺は確かに自分の心臓が、アデルの『心臓』と同時に跳ねるのを感じた。

Side アレックス

「アレクシア、下がれ。もつと遠くへ」

オレの警告が妹の耳に入るよりも早く、それは覚醒した。

暁 雷光の一斉発射は既にツガミ・ユウジのいる場所へ放たれていたが、手ごたえは一切ない。

とうとう、火が点いたようだ。

アレクシアのザクウオーリアがこちらへ振り向き、何かを伝えようとした瞬間、彼女の周囲を蒼い残光が奔る。

その正体が、シングルブレイドが閃いたものだとなかったときには、ソヴァールザクウオーリアの右腕が根本から切断されていた。

『これは！』

「たわけ。それぐらい避ける」

説教をしている間にもアレクシアは応戦をしているが、翻弄されていた。

ザクの左足が、アデルの右手に捕まると、スパローのスラスター出力によってポリ

キャップごと千切られる。

抵抗として振り上げられたパールホワイトの左腕は、ニードルガンで機能不全に陥らされた。

クリアパーツの刃がザクの鳩尾に向かう直前に、暁 雷光の砲撃が狂犬の背後を襲う。

「お前の敵はこっちだ」

『！』

「アレクシア、お前もこれに懲りたら、機体を自作なぞしないことだ」

奴のバイザーの奥、原型機であるガンダムAGE-1ゆずりのツインアイが光った。

攻撃は回避されたがアデルの注意はこちらに向いたようである。

確かに一連の攻撃は、ツガミ・ユウジのスペックをはるかに超えたものだったが、妹があそこまで陥るほどのものではない。

ガンプラを自分で作ることにこだわったために、緊急時、彼女自身の反射に機体が追従できないのだ。

そうこうしている間にも、オレの見る正面モニターいっぱいにはアデルが迫っている。

冷静に、暁 雷光のサブアームでアデルの右腕を捕捉し、ねじり上げた。

最小限の動きでいとも容易くアデルはブレイドを取り落とし、崩れ落ちた。

「さてユージ、『アシムレイト』を知っているか」

相手は答えない。

オレを倒そうという一心で思考がすべて支配されているのだろう。

アデルが視界から消えると、左側のシールドがもぎ取られた。

ブレイドを失ったため、腕力でオレのガンプラを解体しようとしているようだ。

オープンチャンネルで、独り言のように、オレは話を続ける。

「最近発見された、ガンプラとファイターのシンクロ現象だ。初心者でも事故のように起こりうるらしいが、自身の限界を突破するまで深入りすることは極めて稀らしい」

『アレックス……！』

「オレとて、実際に遭遇するのははじめてだが、今の動きで確信しているよ」

『兄さん！危険です！』

中破したソヴァールザクウオーリアが接近し、オレの援護を試みている。

サブモニターに映る妹の表情は、今までにないほど憔悴していた。

そして、アデルはなおも腐肉にたかるハエのように周囲を飛び回る。

ガトリングをもぎ取り、ミサイルランチャーを蹴りつぶす。

暁 雷光の全火器のうち、八割が破壊された

このまま好き勝手にさせてもいいが、そろそろ鬱陶しい。

オレは自分から見て左側にある虚空へむけて、銃身がひしゃげたバズーカを振った。高速移動を続けていたアデルは軌道を塞がれて、まるで人間がダメージを受けたように、大げさにのけぞった。

アシムレイトの副作用が如実にうかがえる反応だ。

『がつ』

「ユージ。そのアデルが、アシムレイトを引き起こした根源に他ならない」

『アレ………ックス………！』

アシムレイトとは直訳すれば『同化』だ。

ガンプラをまるで自分自身のように強く思い込み、そのプラシーボ効果で恩恵を得る。

よって、ガンプラが生身の肉体に近い反応速度、強度、内部構造をしていればいるほど、共感しやすくなるに違いない。

アデルには粒子結晶体という『心臓』があり、フレイムという『骨格』があり、装甲の内側を流れる粒子という『血液』があり、そして合わせ目を完璧に消された『皮膚』がある。

そこらのガンプラより、はるかに人体に近い構造をしていた。

「お前が普段のように、観察を欠かさないビルダーとしてあれば、それでもアシムレイト

は発生しなかつただろう」

だが、アレックス・メルフォールという存在を前にして、ツガミ・ユウジは冷静さを欠いた。

ファイターとしての勝利にこだわりすぎたのだ。

ビームキャノンがアデルの肩口を貫き、右半身を巻き込む小規模な爆発を発生させた。

追い付いたソヴアールザクウオーリアがトドメを刺そうと、プラズマビーム砲の銃口をアデルの背中に向ける。

だが、手負いの猛獣と化したアデルはなおも動いた。

ビーム・ダガーを抜刀し、ザクのビーム砲を半ばから切断すると、逆手に持ち替えてコクピットブロックめがけて突き立てようとする。

果たして、悪あがきの一撃は、差し出された暁 雷光の右腕によって食い止められていた。

原型機が判別できないほどに異様な改造を施した、『神器』。

完全装備になってからここまで、一度も解いたことのなかつた、暁 雷光の腕組みをほどこいたのである。

強化されたヤタノカガミによって、光刃はバチバチと閃光を放ちながら霧散する。

「茶番はここまでだ」

『兄さん!』

『アレックス……!』

「ユージ、言ったはずだ。オレは、弱い奴は嫌いだと」

その言葉は、暴走する三流ファイターにも確かに届いたはずだ。

動きを止めたアデルに対して暁 雷光はその身に紫電を纏って威嚇する。

バックバックを外し、素体であるアカツキに限りなく近い形態となる。

その両腕は今、眼前の敵機を塵殺する凶器へと変貌した。

『兄さん、何を……!』

操縦桿をひねり、武装スロットを『SP』の欄で固定。

妹の問いさえ意に介さず、渾身の右ストレートでアデルの顔面を殴りぬく。

敵機はそれだけで、弾丸以上の速度で吹き飛んだ。

そこへ背面のブースト出力のみで先行し、踵落としを入れる。

アデルは筐体そのものに激しく機体を打ち付けられて、フィールド全体を鳴動させる。

アシムレイトは継続しているため、ユウジの感じている苦痛は尋常ではあるまい。

それでもよろよろと起き上がり、最後のビーム・サーベルを抜き放った姿には涙ぐま

しいものさえあった。

アデルめがけて降下する間も、暁 雷光の紫色のスパークは空間に干渉し続ける。アデルは自分の頭上めがけてサーベルを繰り出す。

そして偶然、そのサーベルのビーム発振機関が沈黙した。

『バカ……な……』

まだ破損していないにも関わらず、武装が発生した不可解な現象にあいつは愕然としている。

それは不運だ。タネもしかけもない、真正正銘の運命のいたずらだ。

そこに作為があるとすれば、オレの『神器』の存在に他ならない。

暁 雷光の右手がアデルの頭部を再び捕らえ、あるはずのない宇宙の果てへ叩きつける。

人間でいうところの脊髄をやられたのだろう。アデルの四肢が、びくん、と大きく痙攣した。

「これが誰から奪った訳でもない、オレ自身の『神器』だ。ユージ」

『がっ……ア……』

「お前が努力と根性で、蜘蛛の糸ほどの奇跡をつかんだとて、オレはその可能性を断ち切ってみせよう」

もはやアデルの四肢は指先さえ動く気配はなく、ツガミ・ユウジがこれを聞いているかも定かではない。

アレクシアがこらえきれずに叫ぶのが聞こえた。

『やめて！』

「さうばだ。お前の想像力はもらっていくー！」

暁 雷光の空いた左手をそのコクピットブロックへ突き込む。

胸部に収められていたプラスキー粒子の結晶体は、あっさりと引き抜けた。

ファイターとのリンクを求め続けるアデルの心臓は、しばらくの間空色の輝きをやめようとしなかったが、徐々に変色し、淡い水色の球体に成り下がった。

『BATTLE ENDED』

粒子はいつも通りの手順を踏んで回収される。

暁 雷光ただ一機だけが、バトルユニットの上に仁王立ちしている。

オレの勝ちだった。

そして、向かいにいたはずのツガミ・ユウジの顔が見えなかった。

アシムレイトの反動をまともに受けたのだ。無事ではすまない。

「ふむ……」

相手の様子を確認するより先に、オレは妹に詰め寄られていた。

「どういうことですか！私の知らない『神器』なんて、どうして!？」

彼女の瞳孔はあまりの動揺に開き、オレの二の腕にすがっている細い手は、皮膚へ爪が食い込むほど強く握りしめられている。

「あれのことか。詳しい機構についてはいくらお前でも教えられないな」

「そういうことを聞きたいのではありません！あのアデルは……兄さんが止めるよりも先に戦意を喪失していました!」

「その確証がどこにあるというのだ。妄想も大概にしろ」

「でも!」

「いいか、アレクシア」

妹の肩口をつかみ、その耳をオレの口元にまで近づけて、こうささやく。

「ユージを倒したのはオレだ。お前ではない。この意味がわかるな?」

「……!」

妹が言葉を失う。

オレにすがっていた手も、行き場を失って離れていく。

茫然自失とする妹を冷然と見下ろし、口を開いた。

「見境なく優しさをふりまくな。あいつは、貴様には関係のない人間だ」

「……わかりました」

「わかったなら、部屋に戻れ。ソヴァールザクウオーリアはその内修理できる」
「はい」

「オザワ！アレクシアを介抱しろ」

オレは入口に立っていた世話係を呼ぶ。

オザワは自身の足元にちらり、と視線を向けた後、妹の肩を抱いて屋敷の二階へ連れていく。

そこで気分を落ち着けさせようというのだろう。

一人この場に残されたオレは、筐体の反対側に回り込んだ。

季節外れの黒いジャケットを羽織った男は、そこに倒れていた。

女だか男だか、一見では判別がつけづらい華奢な骨格だ。熱にうなされたように頬は紅潮し、大量の汗をかいている。

「遅かれ早かれ、こうなる運命だった。恨むなら、かつての自分を恨むんだな」
これで決着はついた。

もはやオレを止める可能性を持つ者はいなくなり、『神器』の回収は滞りなく進むだろう。

それらを以て成し遂げる、ムラサメの最終目標が達成される時は近い。
指ぬきグローブをはめた己の右手を見つめる。

アシムレイト状態のガンプラを破壊したからだろうか、その感触はまだ掌に残っていた。

まるで本物の人間を蹂躪したような、生臭い感覚だ。

これを成し遂げたとき、平然としていられるという確証があったが、存外それもアテにはならないらしい。

「……イヤなものだな」

S i d e コウイチ

874さんのハロを両腕に抱きかかえ、僕は病室へ向かう廊下を急いでいた。

数日前に入院したアシハラが、ようやく昏睡状態から目を覚ましたのだという。

先にシユンと、同居状態の彼女が病室にいるはずだ。

道中、ハロはアシハラの容態について説明してくれていた。

『あれは単なる熱中症じゃない。アシムレイトの後遺症だ』

『アシムレイトって、ガンプラと自分を同一化させるっていう……?』

『そうさ。一度アシムレイトを起こした人間は、通常より多量のプラフスキー粒子をその身に取り込むらしく、一種の『気脈』のようなものができる』

「はあ」

『その流れが僕の目に粒子として見えるから……ああ、長くなるからやめよう』

「ようするに、874さんはアシムレイトに詳しいんだろう」

『訳あってね。そのG4という人間の意図はわからないが、対応が遅れていたら命にもかかわっただろう』

「G4に借りができてしまった、ということだね」

あの日。G4の連絡によって住所を特定し、僕らは巨大な洋風の屋敷にたどり着いていた。

行く手を阻む鉄の門の前で立ち尽くしていると、シユンが、その傍らに座り込んでいるアシハラを発見した。

その体調が重篤な熱中症に近いものと見受けられたため、彼を付近の市民病院に担ぎ込み、現在に至る。

屋敷が誰の所有物なのか、といったことも調べなければならないが、それよりもアシハラが心配だった。

「あ……ヒカワさん？」

「あなたは、アレクシアさん？」

アシハラが入院している病室の前で、僕は見覚えのある茶髪を見かけた。なんと、ムラサメにいまするはずの少女、アレクシア・メルフォールである。

彼女の兄であるアレックスの姿はなかった。

「どうしてここに？」

「申し訳ありません！」

突然深々と頭を下げる彼女に、僕はたじろいだ。

いきなり知り合いの美少女に謝罪される事情がのみこめない。ハ口も黙りこくつてしまっている。

彼女が顔を上げると、その端正な顔が悲痛にゆがめられていた。かろうじて泣きだすのを、踏みとどまっている寸前といった感じだ。

見ているこちらまで、胸がちくりと痛む。

「実は、彼がああなったのは私と兄のせいなんです」

「なんですって？」

「アシムレイトが起こっているのを知りながら、アデルを破壊してしまったせいで……」
『僕の知る限りでも、数日単位で意識不明にまで陥った事例は聞いたことがない。よほど手ひどく痛めつけたんだね』

ハ口が平坦な調子で尋ねると、またアレクシアさんはうつむいてしまった。

「……はい」

「なんてことを」

僕はアシムレイトに実際に遭遇したことはないが、この現象こそ自分の天敵だと直感

した。

僕はガンプラが壊されることすら、個人的には許容できない人間である。

その破壊されるリスクがファイターにまで及ぶなんて言語道断だ。これまでのバトルの領分を越えている。

たとえばその原典が戦争を題材にしたアニメーションだとしても、ガンプラバトルは、命をかけるゲームであってはならないのだ。

「とにかく、あなたの責任を問う前に、アシハラの様子を見に行きましょう」

『そのことだが、ヒカワ・コウイチ』

「は、はい?」

ハ口、もとい874さんが僕に神妙な口調で語りかける。

まるで余命宣告を聞かされるような緊張感で、僕は自分の心拍が早まっていくのがわかった。さっきの言葉を信じるならば、現在のアシハラの様子を可視化された粒子の流れで察知しているはずである。

目だった外傷はなかったと記憶しているが、まさか見落としがあったのか。

『こちらに入ってくる前に、心の準備をしておいた方がいい』

「そんなにひどいんですか?」

「ああ。はつきりいって最悪だよ。目も当てられない状態になっている」

その言葉を聞いたとき、僕の中に吐き気を催すようなビジョンがよぎった。思わず病室の扉を力任せに開ける。

中にいた人物が一齐にこちらを振り向いた。

そこにはシュンがいた。

874さんがいた。

そして、清潔なベッドの上で、上半身を起こしたアシハラの姿があった。

彼の身体には傷一つなく、どこかを治療している痕跡もない。

僕は自分の予想が裏切られたことを知り、安堵のため息をもらそうとする。

「今日は随分お見舞いの方がいらっしやるんですねえ」

「……………えっ？」

その、アシハラの口から出たらしき言葉を聞くまでは。

僕は眼前で、首をかしげる少年の顔をまじまじと見つめた。

中性的な顔の輪郭に、短く切りそろえられた黒髪。意外と薄い唇。そして、その瞳を覗き込んでしまった故に、僕は久しぶりに怖気が走った。

あの地獄へ引きずり込むような瞳ではない。当然のように活気にみちた人間の目がそこにあつた。

これは誰だ。

僕の知っている、アシハラ・ユウジはこんな人間ではなかったはずだ。

愕然としてシユンの方を見やると、彼もひどく気まずそうに顔をそらしてしまった。

「あー、ユウジ。こいつもオレちゃんと同じ公式審判員でな。自己紹介してやってくれ」
「シユン。お前、冗談はよせ……！」

「わかりました。気にしないでください」

僕が知るあいつより、幾分高いトーンで少年は答える。

やめてくれ。

それを僕に教えないでくれ、と僕は耳をふさぎたい衝動に駆られた。

正直、もう彼に何が起こったのかは気づきつつあるのだ。

その答え合わせが、よりもよって目の前で、すっかりとなされるのが嫌なのである。

「はじめまして」

僕の前に白い掌が、握手として差し出される。

はじめて出会ったときと同じ、プラモ用の塗料がこびりついたビルダーとしての手だ。

向き直れば、これまでの一か月で一度も見たこともない、陽だまりのような笑顔がそこにあった。

「ボクは、ツガミ・ユウジといます」

その時僕は、自分のバディが死んだことを悟った。

過去編「Lost parts」

Lost—Ol「ニブンノイチ」

Prologue—Side Yuj i

胸をしめつけるような痛みで、ボクの意識は突然覚醒した。

皮膚を突き抜け、直接心臓を鷲掴みにされるようだ。息を荒げてのたうち回りなくなるが、身体の自由がきかない。

ボクは助けを求めようと目を開き、辺りを探ろうとした。驚くべきことにそこは見慣れた寝室などではなく、指先さえ見えぬ真つ暗闇だった。

その光景を知覚した途端に今度は浮遊感に襲われる。

今しがた何も見えないと認識したはずであるが、足元からあぶくのようなものが上がってくる、とはつきりわかった。

『よつやく思ひ出せる』

腹の底から足の裏まで震わせられるような、低い声が聞こえる。

小心者のボクは背筋が寒くなったが、不思議と他人の気がしなかった。

まるでわが事のように、心を達成感が満たす。

前後不覚の暗闇の中で手足をばたつかせ、手がかりを掴もうとあぶくに触れる。グチャリ、と生肉を手にとったような感覚があった。

その気持ち悪さに、ボクが思わず顔をしかめたその時だった。

「ユウジ！朝よ！起きなさい！」

「えっ!？」

ボクは今度こそ目を覚ました。

悪夢から引きずり上げてくれたのは、聞きなれた母さんの声だった。

茫然と上半身を起こし、辺りを見回す。

いつも通りの自分の部屋であった。

朝早くのまじりつけない陽光が斜めにさして、明かりの消えた室内を照らしていた。

部屋の壁にはガンダムポスターが貼られ、グッズを並べた棚も取りつけられている。

すっかり作業台としてしか役目を果たさなくなった勉強机の上には、一つの写真立てがおかれていた。

「ここユウジ！まだなの？」

「今行きます！」

母の催促に、ボクは慌ててベッドから抜け出る。

さっさと着替えて、顔を洗わなければ叱られてしまうだろう。半そでのシャツとジーパンに袖を通し、つい伸ばしてしまう前髪をヘアピンで留める。

そしてクローゼットからエプロンを取り出して着用する。

これがボクの仕事服だ。

悪夢のことなどすっかり忘れて、ボクは部屋を飛び出すと、一階へ通じる階段を駆け下りた。

Prologue — Side ALEX

「アレックス様。聞いておられますか？」

「……むっ？」

気が付けば懐かしい場所にいた。

殺風景な部屋の中央に、整然と机とイスが二人分並べられている。

オレはその左側に座ってうたた寝をしていたらしい。

壁には出入りの為の扉以外に存在せず、天井の明かりさえ、機能を果たす以上の装飾は許されていないようだ。

この吐き気を催す場所こそ、フランス本国で、オレがムラサメという組織について教育を受けていたときの部屋だ。

「アレックス様」

顔を上げると、オザワの不機嫌な顔があった。

化粧が薄く、今より幾分若い。

そう気づいたとき、オレは、己が昔の夢を見ているのだと悟った。

人間の脳は休息中に記憶の整理を行い、その断片を夢として見せるという。

今更こんな記憶を掘り当てたのは、ツガミ・ユウジに対して全力をふるった影響だろうか。

「話は聞いている。続けろ」

「承知しました。……ご当主であるメルフォーオール会長は半世紀前、アーキタイプのバトルシステムの開発者として参加しておられました」

過去のオザワは淡々と組織の軌跡を語っている。

夢の中では未来人であるオレは、その内容すべてをそらんじることできるだろう。

半世紀前の初代メイジンの時代、オレたちの祖父はガンプラバトルを生み出そうとする人間の一人だった。

まだコンピュータグラフィックスのデータにすぎないが、個人の作るガンプラを認識し、再現するところまでこぎつけていた。

ガンダム作品では『ビギニングG』の形式に近い、この今とは異なる形式のシステム

を、現代の技術者は『アーキタイプ』と呼んでいる。

しかし、数十年もの間、日進月歩の改良を続けていたアーキタイプは、プラフスキー粒子の誕生によって一瞬で踏みにじられた。

「自らの研究成果をことごとく凌駕する現在のガンプラバトルシステムを、会長はこう評されました」

「弱肉強食。この未知の粒子は、ヒトの数十年など食らいつくすほどの、栄光ある強者である」

オレの暗唱とオザワの授業が声の重なり合いになって、教場に響く。

「ジジイらしい、ふざけた言い回しだ。そして今度は、その強者であるプラフスキー粒子にすり寄って、その関連技術を、見境なく集めて回っている」

「かなり不適切な表現があるように思われますが、流れとしては誤っておりません」
オレは大きくあくびをする。

自分の生い立ちなぞ当時のオレでも自覚していたことだ。

祖父が抱いた、『強くありたい』という単純にして、傲慢な野望。

オレたちはその願いを成就するための道具にすぎない。

「……そういえば、あいつはどうした」

「先ほど席を外されましたが、まだ帰ってこられませんね」

「どうせオレと同じことを知っているさ。問題はあまるまい」

隣に空いた空席に主が戻ってくる気配はない。

オザワは右手を閉じたまぶたの上にあてがって、やれやれと首を振っている。

かつての彼女は、現在よりずいぶん感情表現が豊かだ。

「では、趣向を変えてガン普拉バトルの訓練をいたしましょう」

「いいだろう」

「今日も機体はボールを使われるのですか？」

「ああ。ここにいる連中は、そうでないと張り合うことすらできんからな」

オレは音を立てて椅子から立ち上がった。

仮想空間にも満たない、臍気なものの中ではあるが、イメージトレーニングというものもある。

あえて未来を忘れ、過去に身を委ねるというのも悪くない。

Side Yujii

ボクの家は、『ツガミ商事』という会社を営んでいる。

海外へのバトルシステムの出出や、広告に必要な資材の輸送を仲介している、らしい。

今日も営業で炎天下を歩き回った社員の人たちが、ボクと母さんの仕事場にやってきた。

母さんの考案した定食や家庭料理で空腹を満たし、つかの間の休息をえる場所。『ツガミ商事』の社員食堂である。

木製のカウンターの奥できびきびと働いている女性がボクの母さんだ。

ひつつめた髪と割烹着がよく似合う人で、実の弟であるリョウタロウ叔父さんには、生まれてくる世代が一つ遅かったとまで言われている始末だ。

ボクは料理の仕込みの他には配膳や案内など、接客を手伝っていた。

「いらっしやいませ！」

「おう、ユウちゃん。今日もかわいいね」

「ユウジはもう14歳だぞ。茶化すのはよせよ」

「ははは、それは悪かった」

ボクをからかう痩せたスーツ姿の中年男性は、オムロさんという。

それをたしなめる大柄な人が、アシハラ・リョウタロウさんだ。

模型店の店主を勤める傍ら、こうして父さんの仕事も手伝っている。

ボクが小柄なこともあって、二人を迎えるときはいつも見上げなければならなかった。

「そういえばユウジ。まだ券売機は直らないのか？」

「うん。さすがにボクでもあれはどうしようもないかな」

叔父さんが指さしたのは、入口にある券売機だった。

ある時期を境に、お金を呑み込んでしまうだけになったポンコツである。

すっかり直すタイミングを逸してしまい、代わりにボクが注文を取るように切り替え
ていた。

「ユウちゃんのオススメ頼んだ後は調子いいから、俺はずっと壊れたままでも構わんの
だけだな」

「それは困るよ」

「冗談さ。それで、今日は何がいいかな」

オムロさんにそう聞かれると、ボクはいつものように、二人の様子をしげしげと観察
し始めた。

お客さんにオススメを尋ねられたとき、ボクはできるだけその人に合ったものが出せ
るように考える。

顔色、かいている汗の量、なんとなくなっている視線の方向などの要素から体調を推測す
るのだ。

最初はうまくいかなかったが、最近は正解を引き当てる確率の方が大きく上回るよう
になつていきていた。

「……オムロさん。最近、おへその上あたりずっと冷えてない？」

「ん？ああ、そうかもな」

他のお客さんにもいるのに、オムロさんは恥ずかしげもなく手をシャツの下に突っ込んで頷く。叔父さんが横目で睨んでやめさせる。

やり方がみつともないことはともかく、オムロさんの内蔵が冷えていることはわかった。

「二人とも脈拍見せて」

「ほいよ」

「ああ」

ボクは二人の手首に指先をあてがう。

叔父さんの脈拍に違和感がある。

歩きで中に入ってきて、涼しい店内にしばらくとどまっているにしては早い。汗をかきすぎたのかもしれない。

ボクは観察結果を二人に告げた。

「叔父さんはたぶん塩分とミネラル不足。今日はA定食がサバの塩焼きだから、それにするといいかも」

「ユウちゃん。俺はどうだい？」

「オムロさんは夏野菜カレーかな。最近冷たいものばかり食べているでしょ。バテる

「よ」

「あちやあ。なんでもお見通しだ。さすがだねえ」

ボクは照れ臭くなって頬をゆるめる。

母さん曰く、ボクの実顔はふにやふにやとして男子らしい覇気がないそう。

それでも身についてしまった反射というのは直しがたい。

「じゃあユウジ。俺たちは二人ともオススメのやつで頼む」

「うん」

叔父さんたちの注文を受けつけたボクは、エプロンの胸ポケットからメモを取り出すと、注文内容を書きながらカウンターの奥へ入った。

ここでは母さんがいくつかの料理を同時進行で盛りつけていた。

メモを冷蔵庫の扉にマグネットで固定しながら、口頭でも伝えた。

「母さん。A定食と夏野菜カレー。あと麦茶持つていくね」

「じゃあついでに、これ持つて行って。スギヤマさんのところよ」

母さんはボクには目もくれずに、指先だけでかつ丼をさした。

右手に麦茶のボトル、左手にトレーを持って慎重に移動する。カウンターの奥で待っている社員の人が料理を出して、帰りに叔父さんたちの机へ麦茶を出した。

二人はなにか大事なことを話し込んでいるらしく、叔父さんが目線だけでお礼を言っ

てくれる。

軽く一札を返したとき、視界の端で人影がちらついたことに気づいた。

新しいお客さんが入ってきたようだ。

「いらつしやいませ」

ボクは振り向いて声をかける。

入口に立っていたのは和服姿のおばあさんだった。

背はボクよりも小さく、古木からくりぬいたような、節くれだった杖で身体を支えている。

この社員食堂は一般のお客さんにも開放しているので、ボクとは面識がない人がやってくるのはおかしくない。

しかし、ボクは初めて出会うおばあさんに、なぜか親近感を覚えていた。

つい癖で観察をしている間に、おばあさんが壊れた券売機に向かってサイフを開けていた。

中からしわくちやの手で取り出したのは、よりにもよって一万円札である。

ボクは慌てておばあさんを引き留めた。

「すみません。その券売機壊れていました」

「おや。そうかい」

「注文でしたら、ボクがお受けします」

カウンター席は位置が高くて座りにくいので、入口に最も近いテーブル席に案内する。

ちんまりと席に収まったおばあさんは顔をほころばせた。

メニューには目もくれず、ボクをにこにこ見つめている。

思わず、メモを片手に首をかしげてしまう。

するとおばあさんはいたずらっぽく尋ねてきた。

「では、オススメはあるかの？」

「……ひよつとして、見られていました？」

「うむ。あれはなかなか良き観察眼であった。ぜひとも、この老婆にも見繕ってもらいたい」

あの観察を細部にまで行うのは、身体に触れることもあるので常連さんに限っている。

しかし、おばあさんがボクに向けてくる好奇の目線から逃れることはできそうにもなかった。

躊躇しつつも、おばあさんの体調の推理をはじめめる。

目元に深く刻まれた皺の奥に、青白い隈が見て取れる。

寝不足やストレスが原因だ。加齢で体力が衰えているうえに、この炎天下で何か作業をしていたのかもしれない。

「脈をみていいですか」

「うむ」

おばあさんの手首の皮膚は薄く、血管が浮き出ている。それでも脈拍は非常に弱かった。

外見と体調がまるで一致していない。

結論としては、この人は非常に無理を重ねているようだ。高齢の人の胃腸にきつすぎず、体力を回復できるものが望まれるところか。

「うどん入り茶わん蒸しとかどうですか？」

「ほう。ではそうしようか」

「かしこまりました。少々お待ちください」

台所に入って、母さんに伝達をして、メモを冷蔵庫に貼り付ける。

すつかり身にしみついた動きを終えたところで背後からおばあさんの声がかけられた

「少年、すこしいいかの」

振り向けば、そこには先ほどとは打って変わった真剣な表情があつて、どきりとした。

なにか粗相を働いてしまっただろうか。

「なんでしよう……?」

「あそこに飾つてあるガンプラ、おぬしのか?」

おばあさんが指さしたのは、ちょうどどこから対角線上にあたる位置、天井の角になえつけられたテレビ用の棚だった。

そこでは他の食事処と同じように、ニュースやバラエティ番組がつけっぱなしにされて、お客さんが料理を待つ間ぼんやりと眺めているのが日常的だ。

よそと違うのは、テレビの左右に一体ずつ、ガンダムのプラモデル、ガンプラが置かれていることだろう。

今は『スタービルドストライクガンダム』と『ベアツガイⅢ』という機体が並べられている。

「そうです。ボクが作りました」

「あんなところにわざわざ飾るとは……よほど好きなんじゃなあ?」

「はい! 去年の第七回世界大会は最高でした!……あつ」

そこで母さんのたしなめるような視線を感じて我に返る。

ガンプラの話題を振られると、見ず知らずの相手にも暴走してしまうのがボクの悪い癖だ。

顔がかつと熱くなってうつつむいてしまうが、おばあさんはまるでわが事かのようにニコニコと笑顔を浮かべていた。

「遠目でもわかる。レプリカキットをあそこまで高精度に作るには、元の機体への並々ならぬ愛情が必要だ」

「ありがとうございます。でも、あれはレプリカじゃないですよ」

「むっ？」

おばあさんが首をかしげる。

インターネット上で限定生産という代物だった、高精度のレプリカキットはボクには入手できなかった。

尊敬するビルダーによる渾身の改造が、成型機で生み出されたパーツでいいのだろうかという自問自答もあった。

だから、きちんと同じ道筋を踏んだのである。

「ちゃんとストライクガンダムとベアツガイⅡから改造しました。スクラッチで」「なんと!?!」

おばあさんが大声を上げたので、今度は店内中の視線が一斉にボクらに集まる。

幸いにもみんな顔なじみだったので、ボクが苦笑いを返すと、すぐに視線は散っていった。

おばあさんが手で小さな輪をつくりながらささやく。

「作ったのはあの世界大会優勝者のイオリ・セイじやぞ？」

「もちろん知っています。大ファンです」

「内部にフルスクラッチのフレームが仕込まれていただろうか？」

「フレームは頑張りましたけど、肝心のシステムはちよつと無理がありました」

「……おぬし、歳は」

「14歳です」

おばあさんは腕組みをして、すっかり口を閉ざしてしまった。なにか考えこんでいる様子である。

そこへ母さんがうどんを乗せたトレーをカウンターに置くが、気づいた素振りもない。

ボクは受け取った料理を、おばあさんの眼前にまでそつと運んだ。

温かいうどんの湯気が皺だらけの顔の前まで、つう、と漂う。

「あの、うどんがのびちやいますよ？」

「……決めた」

恐る恐る尋ねると、上の空だったおばあさんが、バネでも仕込んであるかのような速さで顔を上げた。

ぎよつとして身じろぎすると、おもむろにボクの手を取り、強く握ってくる。さつき体調を診たときとは比較にならない力強さだった。

「おぬし、ワシの弟子にならんか」

「え？」

そこでボクははじめて、おばあさんの爪の間に、見覚えのある色が入り込んでいることに気づいた。

コウキ塗料独特の発色をもつ青色だ。

茫然として目の前の人の顔を見つめてしまう。

おばあさんもまた、ボクと同じ人間、ガンプラビルダーであるとようやく悟った。

S i d e A L E X

あのナガイ・トウコが弟子を取ったらしい。

『国際ガンプラバトル公式審判員』の最初期メンバーであり、世界最強のファイターとも噂される女傑だ。

ガンプラバトル心剣流という造形術を生み出しておきながら、現在に至るまで彼女の眼鏡にかなうビルダーは現れなかったとされていた。

そんな人物が、突然自らの技を伝える人間を見出したとなれば騒ぎにもなる。

「事件がオレたちの傘下で起こったとなれば、ジジイは大喜びだったろう」

「ええ。決定を下されるまで一時間も待ちませんでした」

オレは今、オザワを含めた数名と共に、日本へ向かう飛行機に乗っていた。

『メルフォーール輸送』という社名を機体に刻んだプライベートジェットだ。

ムラサメの表の顔は、ひねりもなく一族の名を冠しているのである。

この輸送会社の取引先に『ツガミ商事』という小企業があるらしい。

件の弟子はその一人息子、という情報だった。

「ターゲットの名前はツガミ・ユウジ。詳細なプロフィールはこちらの端末に……」

「いらん。会えばわかる」

「そうですか」

隣に座る部下の一人から、タブレット端末が差し出されたが突っぱねる。

連中に漂う空気がやや険悪になった。

オザワだけがすました顔で、オレの向かいに座っている。

その表情が気に食わなかったので、オレは彼女に話題をふった。

「オレが行くということは、およそ同年代のビルダー専門で、そいつに取り入れという話なのだろうか？」

「ご明察です。しかし、一つ訂正しますと、取り入るのではありません」

「ほう」

「アレックス様には、ツガミ・ユウジ氏と本当の友人同士になっていたいただきます
流石にオレは自分の耳を疑った。

偽りの関係ではなく、真に友情を築けとはどういう見であろうか。
オザワの表情からは何も読み取れない。

深く考えずとも、オレの祖父からの命令を伝達しただけであろう。

そこに彼女自身の感慨が、一ミリたりとも含まれているはずがなかった。

「友人の定義などは知らんが、人選ミスにも程がある」

「そうでしようか」

「無論だ。オレに友人はできん。そうだろうか？」

周囲を見回すと部下たちは一斉に下を向いた。

さつきまでオレに反感を抱いていた者たちが、白々しいものだ。

まさか察知されていないとも思っただろうか。

静まり返った機内を、突然大きな振動がひとつだけ襲った。

機体の車輪が、日本の大地に接したのである。

『到着しました。降機の準備が整うまで、もうしばらくお待ちください』

操縦席からの声を聴いて、オレたちはてんでばらばらに荷物をまとめはじめ。

オレは手荷物さえ持つ必要がないという。

会長の孫という待遇だけではなく、オレの体質に起因する配慮だった。なんせ、掌の感覚神経が異常なまでに鋭敏なのだ。

一般人には温かいという程度のもものが、オレには溶けた鉄塊のように熱く感じる。重い荷物を手にすれば、過重による痛みで涙腺がゆるむほどだ。

故にオレは常日頃から掌にグローブを嵌めていなければならなかった。

手持ち無沙汰に、座席に用意されていたチョコレートを口に放り込む。

グローブは指先が露出しているものなので、革部分は汚れない。

過剰な甘みがこの優遇の皮肉にさえ思えて、かえって不愉快になった。

『準備ができました。お気をつけて』

「アレックス様」

「ああ」

座席から立ち上がり、扉を開けてタラップを下りる。

現地時刻は正午を回った。太陽は中天にあつて極東の大地を熱している。

この空港は海に近いそうで、ほのかに潮の香が鼻腔をつく。

フランスで何度か海に行ったが、こんな極東の島国でもその香りは変わらないらしい。

コンクリートで舗装された道路に足を着けると、目前にリムジンが停車していた。

オザワが後方からオレを追い抜かすと、率先して後部ドアを開ける。今度はこれで『ツガミ商事』まで向かうらしい。

行くのはオレとオザワだけで、他の部下たちは別の車両にて、日本に確保した拠点へ向かうとも聞いていた。

オレがリムジンに乗り込むと、運転席にオザワが座る。

彼女がエンジンに火を入れ、アクセルを踏むと、窓の外から見える航空機の姿はみるみる離れていった。

「一通り、娯楽は用意させました。移動は長くなりますからご活用ください」
「空よりマシンだろう」

目の前にある棚を開けると、車内のテレビモニターで鑑賞できるように、いくつか映像ディスプレイが並べられていた。

第七回世界大会の録画映像を選びとり、プレイヤーに滑り込ませる。

再生された音声から内容に察しがついたらしい。

バックミラー越しに、オザワの黒曜石のような瞳がオレを見る。

「好きですね」

「好悪ではない。歴史上類をみない混乱と変革を巻き起こした大会だ。注目に値する」

「……私もそう思います。祖国へのこだわりを失ったとしても、あの時の熱気は、忘れら

れませんから」

「そういえば、貴様、この時の静岡にいたんだったな」

オザワがムラサメにやってきたのは去年の夏、この世界大会の直後だった。

ガン普拉バトルの本場の出身、しかも第七回の一部始終を目撃した人間だ。

祖父は目の色を変えて彼女をスカウトし、古参を差し置いて、オレの世話役にあてがった。

こうしてオレに、あの大会のことを語り聞かせることが、彼女に本来期待された役割である。

「今まで何度か話は聞いた。大会の名勝負といわれた激闘、PPSEによる大会運営の私物化、そして、ニュージエネレーションと騒がれた、オレの同世代たちの話もだ。」

だが、それはムラサメが、ガン普拉バトル自警団として公に姿を現し始めた言い訳として、かつて学習した事項である。

肝心なオザワ自身の所感は聞いたことがなかった。

「せっかく日本に帰ってきたなら、私情を入れてもバチは当たるまい」

そうやってやると、オザワはしばし沈黙し、慎重に言葉を選ぶように語りはじめた。

「強いて言えば、ひどい仕打ちだ、と思いました」

「ほう」

「私が現役だった六年前は、地区予選すら突破できませんでした。基本工作だけのRX—78に負けたんです」

「自暴自棄にでもなつたか？」

「いいえ。ファイターとしての自分に落胆はしましたが、ビルダーとしてはまだ自信がありました。第七回大会で、アレを目にするまでは」

ちようど、オレが流している記録映像の中で、一機のガンプラが飛翔する。

仮初の星々を身にまとつて、ビームの嵐をいなす白い閃光。

新世代の到来をすべてのビルドファイターに実感させ、驚嘆と熱気、そして絶望さえもたらしたガンプラ。

『スタービルドストライクガンダム』である。

「作つたのは、私を倒したファイターのご子息でした」

数年の研鑽もむなしく、ビルダーとしても敗北感を与えられた。

自分をファイターとして超えた人間の、息子にさえ届かない。

その事実を我慢できるほどオザワの心は強くなかったらしい。

半ば衝動的に日本を飛び出して、辿り着いたのがフランスだったという訳である。

「ジジイがお前に目をつけたのは必然だったな」

「はい？」

「自分の努力を、軽々と超越していく天才に我慢がならなかった。その点で、お前とジジイはよく似ている」

「……あなたも、いつかそれを経験するかもしれませんよ」

彼女の、ほんのわずかな反抗心をオレは鼻で笑い飛ばす。

諦めた者の嫉妬心など聞くはともかく道連れにされるいわれはない。

「ありえんよ。オレは、天才の側だからな」

Side Yuji

日曜日は社員食堂も会社も休みだ。

ボクは人気のなくなつた食堂で、ひとり昼食をとつていた。

炊き込みご飯のおむすびだ。

おばあさんこと、ナガイ・トウコ師匠は、上の階にある居間で母さんと食事中である。

ボクはたまに、こうして家族と離れて食事をする。

考え事や悩み事を整理したいときもあれば、特に理由なく行うときもあった。

今回は後者だ。

心外なことに、師匠にこの習慣のことを話したら変な顔をされた。

「あれから二週間ほど経ちますが、ユウジはどうですか？」

母さんのそんな言葉が階段の上から降ってくる。

職業柄か、普段から声は大きく、居間の扉が開けっぱなしだと、ここまで届くのだ。

「いやはや、なかなか磨き甲斐のある子ですよ。お母さまが弟子入りを快諾してくださって、本当に感謝しております」

「いえいえ。ユウジには年頃の子供らしい、彩りのある日々を送ってほしかったですから」

母さんが店をボクに手伝わせていることに、少なからず負い目があることは感じ取っていた。

父さんの会社は人員が少ない割に、社員食堂には多くの人がやってくる。

猫の手も借りたい現状は、小さいころからわかっているつもりだし、だいいち手伝いを願ったのはボクの方からだ。

母さんが申し訳なく思う必要はないはずであった。

「余計な心配させたかな……」

おむすびをもう一口ほおぼる。

炊きたてのご飯を使ったので、湯気が立っているほど熱い。

口からほくほくと息を吐いて、冷ましながら食べ進めていると、突然正面入り口の引き戸が音を立てた。

今日は休みだから、もちろん鍵は閉まっている。

引き戸にはめこまれているすりガラスごしにのぞきこむと、高身長的女性らしき人影がすけて見える。

強盗、という文字が頭に浮かんだ。

大声で二階の師匠と母さんと呼ばうとも考えたが、女性がそれを聞いて強引に入口を押し破ってきたらどうしようもない。

物音だけで異変を察してくれまいか、と震えていると、すりガラスの向こうから声が届いた。

「すみません。ツガミさんはご在宅でしょうか」

「あ……はい！少しお待ち下さい！」

ボクはようやく上の階へ声を張り上げた。

「母さん！お客さま！」

「あら？お父さんの知り合いかしら？」

母と、なぜか師匠もついて下りてくる。

引き戸の鍵を開けると、黒いビジネススーツにぴっちりと身を包んだ女の人が姿を現した。

能面のように白いつるりとした肌に、切れ長の目が冷たい雰囲気を与えている。

いかにも仕事ができそうな人だ。

父さんの商談相手に違いない。

「突然の訪問申し訳ありません」

女性は母さんに深々とおじぎをすると、一枚の名刺を取り出した。

「私は、『メルフォール輸送』人事部のオザワ・リサと申します。」

「ああ。夫がいつもお世話になっていきます」

母さんもおじぎを返す。

ボクは皿をカウンターに置いたまま、師匠とそのやり取りを見守っていた。

オザワさんというらしいスーツの女性は、『メルフォール輸送』からきたと名乗った。その会社名なら、父さんがたびたび口になっているのを聞いたことがある。

フランスにあるというウチの一番のお得意先のはずだ。

「申し訳ありませんが、夫は外出しております……」

「いえ。今日は会社というよりは、個人的なツテの話でして」

「ツテ？」

「はい。アレックス様。こちらへ」

彼女は店の外にいる誰かを呼ぶ。

親の仕事の話とはいえ、その場に居合わせているし、つい視線をそちらへ走らせてしまふ。

そしてボクは、驚くほどの美少年が、堂々とした足取りで入ってくるのを見た。背丈はボクよりも頭一つ分ほど大きい。同年代、もしくは年上だろう。

その次には、鮮やかな茶髪が目を引く。

太陽光線を受けて、一本一本がキラキラと輝いているようだ。

その下に収まる灰色の瞳からは、自信と尊大さがこぼれている。身長差も相まって、こちらが見下されているような錯覚に陥ってしまう。

そもそも全体的な顔のパーツ配置がボクなんかとは完成度が違う。

美術館の彫刻や絵画に並び立って、この人の顔写真が並んでも遜色はあるまい。

結論として、ボクはこの少年に見惚れてしまったのである。

「こちら、『メルフォール輸送』会長のお孫さんにあたる、アレックス・メルフォール様です」

「まあ。御曹司様ですか」

「メルフォールだと？ フランスのビルドファイターのか？」

口を挟んだのは師匠だ。

その表情はここ数日ではじめて見るほど、険しい。

ボクはといえば、突然飛び出した『ビルドファイター』という言葉に目を丸くしていた。

ここに突然やってきた美少年も、ビルドファイターなのだろうか。そうだとすれば、話してみたい。

腰を浮かせたボクの頭に、師匠がしわだらけの掌を乗せる。

まだ動くと言外に伝えていた。

「あいにく、弟子はこのユウジだけで間に合っておる。わざわざフランスからご苦労だとは思いますが、帰ってもらおう」

「そうはいきません。我々も切迫してしましてね。手段を選んではいられないのです」
「ほう？半世紀前から、家名をかけて腕を磨いていた、貴族のような連中が？」

怪訝な顔をする師匠をよそに、オザワさんが、今度はボクをまっすぐに見すえる。

ただ瞳を向けられただけなのに、ボクはその迫力に圧倒された。

明らかに一般人じゃない。

マフィアとかヤクザとかさういう、関わってはいけない人の雰囲気があるところにあった。

「詳しい事情の説明は大人だけでしましょう。ここで立ち話をするには、少々込み合った話です」

「……よかろう」

師匠とオザワさん、そして母さんは上の階にある居間へと上っていく。

後には、未だ事態をのみこみきれていないボクと、つまらなそうに口をへの字に曲げ

た茶髪の少年が残された。

食堂全体が、気まづい静寂に包まれる。

先に口を開いたのは、相手の方だった。

「貴様が、ツガミ・ユウジか」

灰色の瞳がボクを見据える。

はじめて聞いたその声は蜜のように甘く、ボクの耳へと入り込んでいった。

Side ALEX

正直なところ、オレはがっかりしていた。

あのナガイ・トウコが直々にとつた弟子である。

どんな逸材が現れるものかと期待してみれば、みすばらしい食堂のカウンターで、こ
うも間抜け面をさらしているときた。

日本人の付和雷同な精神性が露わになったような、無個性な黒髪と黒い瞳。

男なのか女なのかわからない、なよなよとした顔つき。

その第一印象として与えられる、こいつの外見的特徴すべてがオレの癪に障った。

とはいえ、人間を外見だけで断定することは愚か者のすることだ。

オザワがいらぬ気遣いを働かせている間に、ナガイの弟子とコミュニケーションをと
るとした。

「貴様が、ツガミ・ユウジか」

「は、はい」

「貴様はビルダーとしての才覚を認められたと聞いた。作品をオレにも見せてみる」

「もちろん！じゃあキミも……」

「妙な期待はするな。オレはファイターだ。ニッパーは握らん」

そう言つてやると、一瞬だけ目を輝かせたツガミは、ひどく残念そうに肩を落とした。よほど同好の士に飢えているとみえる。

奴はすぐごとカウンターの奥へ引つ込んだかと思うと、やがて何かを両手で支えて戻つてきた。

見れば、米と数種類の具を混ぜ込んだらしい塊を、皿にのせて運んできているではないか。

「おい。オレはガンプラを持ってこいといったんだ」

「でも、お腹すいているでしょ？ 顔色悪いよ」

ツガミは小首をかしげる。

確かに空腹であることは事実だ。

意思で拒否しようにも、胃は何かを放り込めと悲鳴をあげている。

さつき、チョコレートで半端な補給をしたのは逆効果だった。

一瞬自分のグローブに目を落とす。

手をつかめば、オレの軟弱な皮膚は確実に大やけどを負うだろう。

「いや、こんなものは食えん」

「そうだよね……ごめん。アレルギーとか聞いてなかったよ」

「そういうことじゃない。胃には収まるが、体質が受け付けないのだ」

「それってつまり……ああ、そういうことか」

ツガミは何やら合点がいったらしい。

ほん、と手を打つと、皿を持って姿を消す。

オレはその間に食堂を見回し、空間の右上の隅に古いテレビがあるのを見出した。

テレビの左右にガンブラが置いてある。

その内の一方は、つい一時間ほど前まで、液晶の中で動き回っていた『スタービルド

ストライクガンダム』のレプリカだ。

オレはそちらまで歩み寄ると、テレビの真下の壁を、ごく弱い力で足蹴にする。

予想通り、足元を固定されていないガンブラはあつという間に落下してきた。

それをグローブで受け止める。

「それ、ボクが作つたんだ。好きに見ていいよ」

背後から、また皿を持ったツガミが顔を出していた。

皿の上の料理は、相変わらず米と具のままだった。だが、一点異なるものがある。なぜか塊どうしを、一本の木串が貫いていたのだ。

「何をしてきた」

「これだったら、食べられるでしょう?」

「なに?」

「団子みたいにすれば、直接触らないから火傷せずに済む。しかも木製の串だから、熱伝導もすぐく遅いし」

「待て。貴様、オレの体質を知っているのか?」

あつけないことに、オレの冷静さはもろく崩れてしまった。

今の会話だけで、オレの体質を瞬時に見破り、対処をしてきたとは考えにくい。

奴の父親経由で話を聞いていたと推測する方が妥当だ。

しかし、ツガミはその予想をたやすく裏切ってみせた。

「その、キミが着けているグローブ、指が出ているだろう?その皮膚との隙間に、ガーゼみたいな素材がちらつと見えたんだ。きっと、怪我をしていて、そのせいで熱いものが触れないんじゃないかって」

「……」

「ごめんなさい。気づかないまま勧めちゃって」

そう言うと、ツガミは頭を下げてきた。

奴の推理は厳密には異なる。

オレの過敏な感覚の原因は怪我ではなく、生まれつきの体質だ。

熱さのみならずすべての感覚が、オレの痛みに変わる。

しかし、その些細な違いが、ツガミがこの場で観察し、組み立てた推論であることを示しているかのようにだった。

「よーせ」

「うん。フランスの人むけに料理はしたことないから、口に合うといいけど」

ツガミが「オムスビ」と呼んだものをひったくり、口に入れる。

わざわざ温めなおしたらしく、熱さにやや面食らったが、すぐに魚介や肉のうまみが舌の上に広がった。

使われている調味料からして、確かにフランス人には合わない味かもしれない。

だが、空腹のオレには十分すぎるほど染み渡った。

腹立たしいことに、ツガミは満面の笑みでそれを見守っている。

「それで、どう?」

「どっちの話だ。ガン普拉か。飯か」

「両方聞きたいかな」

ふにやふにやと溶けた笑顔を見ると、夢見がちな女を相手にしている気分におちいる。

オレは渋々答えた。

「……この米については悪くない」

「ガンプラの方は？」

空いていた手に持った『スタービルドストライクガンダム』を精査する。

このガンプラが制覇した第七回世界大会は、オレにとつての教材であった。

繰り返し鑑賞を強いられている。

だからこそ、このガンプラのおそろしさがわかった。

すべて同一なのだ。

それは装甲の基本的な表面処理から、合わせ目の消し方だけでは済まない。

オリジナルの部位を加工する際のプラ板の切断のクセ、塗膜の厚さやその噴き方に至るまで、映像から読み取れる情報と完璧に一致する。

まるで、日の下に立つ人間の足元に、まったく同じ形状の『影』ができるように。

「要するに貴様は観察に長けた人間らしいな」

「結構頑張ったんだ。映像に巻き戻しや一時停止かけすぎて、リモコンのボタンが壊れちゃったほどで」

「そうかい」

奴のひそかな自慢は右から左へ抜けていく。

オレはこれを見たときのナガイ・トウコの心理を想像していた。

映像だけで、『ビルドファイター個人』を自らに投影しうる男。

そんな奴を野放しにしておくなど、公式審判員としては無理な相談である。

「化け物だな」

「何か言った？」

「独り言だ。ついでに言っておくが、余計な詮索はいずれ身を亡ぼすぞ。間違いなくな」

「……ぐめん」

ツガミはオレの言葉にいちいち身を縮こませている。

オレにない才能を持ちうるにも拘わらず、小動物のようにふるまうのがまた癪だった。

その時、オザワたちが階段を下る音が聞こえた。

オレたちは同時にそちらを見上げる。

オザワは交渉にひどく神経を擦り減らしたらしい。憔悴していた。

一方で、ナガイはなぜかオレに憐れむような視線を投げかけてきた。

睨み返しても、当然ひるまない。

彼女はおもむろに口を開いた。

「アレックス・メルフォール」

「なんだ」

「おぬしの事情は聞いた。そこまでの理由があるならば、弟子として認めてやらんこともない」

ナガイは表情を険しくしたままで、オレの弟子入りの可能性を認めた。

彼女の情に訴えるように、オザワが虚構を織り交ぜて、お涙ちようだいの裏事情を語り聞かせたのだろう。

公式審判員にも拘わらず感情に流されやすい。

事前情報で得た、ナガイ・トウコの弱点であった。

そして彼女は、オレの前でその骨ばった指を二本立てる。

「ただし条件が二つある」

「聞こう」

「一つは、弟子入りしたならば、そのユウジとコンビを組んでもらうことじゃ」

「え。ボクですか!？」

傍らにいたツガミが、目を丸くして自身を指さす。

ナガイは一番弟子の反応に厳かにうなずいた。

「そうじゃ。ユウジはビルダーで、そのアレックスはファイターだ。役割分担に問題はない」

「いいだろう」

オレはその要求を呑む。

あくまで造形術の師範であるナガイが、弟子を取ったという時点で、こいつがビルダー専門である可能性は考慮していた。

あれほどの完成度を誇るならば、まず異存はない。

「次に、弟子入りに値する技量があるかを見極めるために、これに出てもらおう」

ナガイは着物のたもとから一枚のチラシを取り出して、カウンターの上进行かせた。

ちやうど紙面が回転して、オレとツガミ・ユウジの間で止まる。

表題には『明日野中学校 学事予定表』とあった。

「これって、ボクの学校のプリントじゃないですか」

「そうだ。ユウジのお母さまから借りた。この学校では、試験的に『ガン普拉バトル』の授業を導入している」

「ちやうど明日がそうだね」

第七回世界大会の後に起こった変革は、ビルダー新世代の到来を告げた。

『スタービルドストライクガンダム』とその製作者、イオリ・セイの存在など、その最た

るものだろう。

たかが中学生でも、世界を獲りうる。

そう認識した各界は、ようやく『ビルドファイター』をサッカーや野球の選手と同列に、つまり、本腰を入れて養成すべき存在だと認識したのである。

このツガミ・ユウジの母校だという、『明日野中学』も、その潮流に乗ったのだ。

「ユウジ、明日の授業は、クラス内で生徒たちのトーナメント戦をやると言っておったな？」

「え？あ、はい」

みなまで言わずとも、オレはナガイの二つ目の条件がわかった。

「オレにその頂点をもぎとってこいと言うつもりだな」

「左様」

「待つてくださいいよ、師匠。トーナメント戦は、あくまで学校の授業です。彼は、アレックスクくんは生徒じゃないから、参加できない」

「問題ない。オザワに転入手続きをさせれば、明日から通えるだろう」

「ええ!？」

「バカだと思ふか？その女に弟子入りするためなら、オレはどこにでも行くぞ」

そう言うのと、ツガミは首を左右に振った。

むしろ、同胞をみるキラキラとした視線が向けられている。

奴の非常識な観察眼と相まって、こちらの内心を見透かしてくるようですらある。オレの苦手なものの一つになりそうだ。

「びっくりはしたけど、そんなにバトルをしたいなんて、よっぽど好きなんだなあって」
「オレにとつて、バトル自体が存在意義だ、すべてに優先する」

ナガイがオレたち二人の手を取る。

グローブ越しに伝わる老女の体温は、不気味なほど冷たかった。

「決まりだな。つかの間の関係かもしれないが、仲良くすることだ」

「はい。師匠！」

ツガミは無邪気に、喜色満面で応えた。

そしてオレのグローブの革の部分だけを、己の生白い手で包む。

ビルドファイターは短いスパンでの修理や再塗装のせいで、どうしても指先の汚れが残りやすい。

しかし、衛生を死活問題とする食堂の人間だからか、ツガミの指には塗料の欠片すらなかった。

「じゃあ、あらためてよろしく。アレックスくん」

「半端な敬称などいらん。アレックスでいい」

「わかった。ボクもユウジでいいよ」

「ああ」

オレはわざと強く力を込めて握り返す。

嫌がらせのつもりだったが、奴はぴくりともその反応を表に出さない。

鈍感なのか、純粹すぎるのか。

いずれにしてもオレの気に入らない態度だ。

「せいぜいオレをがっかりさせるなよ。『ユウジ』」

「頑張るよ」

やや発音しづらく、クセのかかったアクセントで名を呼ぶ。

くすぐったそうに笑うユウジを前にして、ふとオザワの言葉を思い出した。

『アレックス様には本当の友人になっていただきます』

もしも、その条件がナガイの方から提示されていたら、オレは弟子入りなど不可能だったに違いない。

side Y u j i

翌日になってアレックスは本当に転入してきた。

担任であるヤマザキ・サクラコ先生の隣に立っている間も、彼はじつとりとした視線を隠そうともしなかった。

「転入生のアレックス・メルフォールくんです。なんと、フランスからやって来たそうです」

教室中がざわめく。

身目麗しい転入生、しかも外国人となれば大騒ぎだ。

ボクに話しかけてくる人はいない。

みんな、ボクよりもその話題を共有すべき友人が他にいるからだ。

普段は何とも思わないことだが、アレックスを前にすると、急にそれが恥ずかしいことのように思えてきた。

「フランスかあ」

「すごいイケメン……」

クラスの女の子の間でそんなつぶやきが漏れる。

ボクも心の中でこっそりうなずいた。

「では、アレックスくん。自己紹介を」

ヤマザキ先生はにこやかに、教卓の正面の空間を明け渡した。アレックスはその空間へ、昨日と同じ堂々とした歩みで陣どった。品定めをするように、教室全体をぐるりと見回すと、口を開く。

みんながその第一声に注目する。

「Bonjour」

「ボンジュール！」

本場のフランス語に、調子のいい男子が、日本語発音の挨拶を返す。

声からしてホソカワくんだ。

アレックスはそちらに一瞥すら向けない。

ただ自分の真正面にある、教室の壁に向かって、堂々と言葉を発した。

「J e m , a p p e l l e A L E X M e l f o r t . J e v i e n d u
P a r i s 」

「……」

「J e r e s t e r a i p e n d a n t u n a n . J e p e n s e ……」

早口でまくしたてられているのは、英語で知らない。たぶんフランス語だ。

ボクらに理解のできない内容をアレックスは話している。

「Enchante」

一通り話し終えたらしく、アレックスは小さく息をついた。

クラス中が凍り付いていた。

氷河期のようなそれではなく、メモリいっぱいに情報を入力されたコンピューターの

ような思考停止である。

さつきの男子も、口をあけて呆然としている。

ボク一人だけが、滝のような汗をかいていた。

アレックスが日本語を流ちょうに話せることはとづくに知っているのだ。

にも関わらず、こんなことをしでかすのはコミュニケーションの拒否に他ならない。

そちらに歩み寄るつもりはないし、こちらに迂闊に話しかけても理解はしない。

そういう意思表示だった。

「え、えつと。アレックスくんはまだ日本語に慣れていないようだけど、みなさんよろしくね」

ヤマザキ先生がどうにか場をとりつくろうと、まばらに拍手が起こった。

「では、座席は右列のはじ、ツガミくんの後ろに空けておいたから、そこに座ってください」

およそ四十ある座席の合間を、アレックスは突っ切っていく。

周囲のひそひそ話など気にも留めていない。そしてボクの横を通り過ぎる瞬間、わずかに、にやり、と笑ってみせた。

思わず振り返ったときには、すっかり澄まし顔で席についていた。

「では、朝礼はここまで。一時間目は国語ですから、教材を準備しておいてくださいね」
みんなアレックスの話題に夢中で返事はない。

去り際、ボクはヤマザキ先生が不思議そうな顔で、小首をかしげるのを見逃さなかった。

やはり事前に聞いていた情報と食い違いがあったのだ。

冷静に考えれば、先生の指示をすんなり理解しているのだから、日本語がまったくわからないはずはない。

「アレックス。どうしてあんなことしたのさ？」

正面を向いたまま、椅子ごと全身を後ろへ傾けて、アレックスへ問う。

アレックスの革のグローブが、後頭部を抑える感触があった。

「面倒だった」

その上手な日本語は、クラスの喧噪にかき消えて、誰も注目しなかった。

side ALEX

日本の中学校での教育は、フランスと大差ない。

教材をまだ所持していなかったのは、やや不便ではあったが、内容自体そう難しいものでもない。

オレがもつとも気を張るべきであったのは、昼休みだった。この時間帯に生徒たちはコンビニを結成、あるいは再確認して、次の授業である「ガンプラバトル」に備えるのである。

とはいえ、その前に腹ごなしだ。食堂ならば、他の生徒の中に、ビルドファイターがいる情報も盗み聞きできるかもしれない。

「はい、アレックス」

「あ？」

席を立つ直前、ユージは一つの包みをオレの机上に置いた。

怪訝な視線を向けると、相手は何かおかしいことをしたか、とでも言うようにとぼけた表情をしていた。

「キミの分のお弁当だよ。今度は余り物じゃなくて、ちゃんと作った」

「……オレが自分で用意していたらどうするつもりだったんだ」

「そりゃあ、もつたいないから自分で食べるよ」

やれやれと席に戻り、包みをほどく。

こいつのガンプラと食事の技量については、昨日認めたばかりだ。特に異議はない。ふたを開けると、薄く切った豚肉を、黄金に焼いたものがあつた。

小さく巻かれた卵焼きと野菜が、箱のすみにちんまりと収まっていた。

「昨日の炊き込みご飯が平気なら、和食は食べられるのかなって」

「食ってみなくてはわからん」

食器はフォークと箸が用意されていたが、オレは箸を選んだ。使い方は、フランスで

オザワに教わっている。

一口サイズに切り分け、口に運ぶ。

甘辛いタレの味付けが、やけにオレの舌にマッチした。

ユージは不安そうにこちらの顔色をうかがっている。うつつうしいので、肉を飲み込んでから感想を言ってみよう。

「うまい」

「本当!？」

「そうやってすぐにはしゃぐから、お前は賞賛したくないんだ」

「ごめん」

オレは小さく舌打ちをした。

案の定、周囲の視線が突き刺さっている。驚きと困惑の入り混じったものがほとんどだ。

どういう経緯をたどれば転入初日の人間が、クラスメイトにあらかじめ弁当を用意されるのか。

「ユージ。これから弁当を持ってくる時は学校に来る前にしろ」

「そうは行っても、キミの通学路知らないんだけど」

「明日になればわかる。いいな?」

「わかった」

ちようどその会話が終わったとき、オレはユージの背後に男が二人いることに気づいた。

左は体育会系のがつしりとした体つきの、坊主頭の男だ。

オレの自己紹介にへたくそなフランス語で返してきた生徒である。

その傍らに、腰が曲がって、眼鏡の鼻あてをしきりに直す男がいる。

ユージの体格は華奢と言えるが、こいつのそれはガリガリで不健康にすら思える。

オレがユージにあごをしゃくって報せてやるのと、そいつらが声をかけるのは同時だった。

「おい。ツガミ」

「ホソカワくん、ナエダくん。どうしたの」

「俺たちのガンプラ、まだ直ってないんだけどよ」

「え、また？」

「ナエダもガンプラは弄れるけどさあ、やっぱりお前の修理する機体が一番動かしやすいんだよ」

どうやらガタイのいい生徒の方が、ホソカワというらしい。

字から受ける印象とは異なるので、日本語というものはまだわからない。

ホソカワとやらは、己の制服のズボンのポケットから、ガン普拉を取り出した。
ギャン改。

ジオン軍の量産型コンペに負けた試作機、ギャンをベースに大剣とラウンドシールドで武装した豪快なコンセプトの機体だ。

関節がすっかりくたびれて、左肩にいたっては完全に外れてしまっている。

ビルドファイターならば専用のホルスターを腰に帯び、そこへ機体を収納しているが、それをやっていないからだ。

これにはユージも苦い顔をしている。

「悪いけど、組んでいるメンバー以外の手を借りたらルール違反だよ」

「細かいことは気にするなよ。どうせお前、今日も一人でやるんだろ？」

「ツガミくんには、友達少ないからね」

ナエダという男が、かすれた声でつぶやく。

ホソカワはそれに同調するようにへへ、と笑いをこぼした。

少なくとも、ビルダーに依頼する態度ではない。

「ほら、休み時間終わっちゃうだろう。早く直してくれよ」

ギャン改がユージの机へ乱雑に放られた。

ともすればビルダーの逆鱗に触れるであろうに、ユージはただ、悲しそうにそれを手

に取った。

ゆつくりとギャン改の全体を回し、装甲に入ったヒビを撫でる。

「こんなことしちゃ、ガンプラがかわいそうだ」

「そんなの俺たちの勝手だろう？」

「ガンプラは『自由』。先生が言っていた」

ナエダの言葉に、ガンプラの状態を検分していた手が止まった。

その指先に、かすかに力がこもっている。

ガンプラは『自由』。

オレたちの世代のビルドファイターならば、誰もが心に刻んだ言葉だ。

三代目メイジンによって広められた、その思想は単純ながら実に難解だ。

ガンプラにとって多くの可能性を認める。

原作のままに作るもよし、思想を込めて手を加えるもよし。

簡単にいえばそれだけの題目を、多くのビルダーたちが曲解してきた。

そういう邪な解釈は、メイジンの言葉を素直に受け取ったユージのような人間にとつて、爆弾以外の何でもない。

つまるところこのナエダは、奴の地雷原でタップダンスを踊ったようなものである。

ユージの頬を汗が伝う。

その薄い、色の青ざめた唇が開く。

その直前にオレはユージの肩を叩いて身を乗り出した。

「いやはや、ユージ。オレは一つ謝らなければならんな」

「転校生？」

「日本語喋れるの？」

ホソカワとナエダが驚愕に目を開く。

ユージは口を半開きにして、言葉のあてを失っていた。

「世の中、下には下がいる。お前以外の日本人がここまでバカだとは思わなかったぞ」

「テメエ、おちよくってんのか」

「その通りだ。規則にのっとった闘争もこなせない男が『自由』を語るとは笑わせる。路

傍の売れないコメディアンでも、もう少し面白い冗談を言うぞ」

ホソカワの額に青筋が入った。

その太い腕がオレの胸倉へ迫るが、軽く左手で払いのける。

バランスを崩した相手は、情けなくナエダへと身を預けた。

「このツガミ・ユウジはオレと組む。それ以上バカな要求をするならば、オレに勝ってからにするんだな。バカめ」

「に、一回も言いやがった……」

「もういいよ。ホソカワ。ツガミくんなんて放っておいて、ガンプラは僕が何とかしよう」

ホソカワは歯をむき出しにしてオレを威嚇したが、ナエダに羽交い絞めにされるように引き下がっていく。

オレは茫然とするユージの手からガンプラをひったくると、ホソカワに向かって投げる。

それはナエダが手を伸ばして受け取った。

「忘れ物だ」

ナエダは鼻あてを再度直すと、オレを一睨みして去っていった。

それを合図に、遠巻きに見守っていた野次馬連中も己の領分へと戻っていく。

いくらオレが日本語を話せると理解したところで、今から話しかけてくる猛者はおるまい。

また教室に騒がしさが戻ってくると、オレは弁当の前へ戻った。

冷えても豚肉は美味かった。

ユージがおおずとおおずとオレの下へ顔を出す。

どういふ訳か目元には涙がたまっていた。そんなに相手が怖かったのか。

「ありがとう。代わりに文句言ってくれて」

「お前のためじゃない。所有権の侵害を見逃せなかったただけだ」
「……つまり、ボクがキミの所有物だって？」

「そんなものだろう。それよりも、お前もさっさと昼飯を食え」

ユージは細い指で涙を拭くと、頬杖をついて、そこにあの鬱陶しい笑顔を乗せた。

「アレックスって素直じゃないね」

「は？」

言うだけ言って、ユージは背中を向けて昼食を用意しはじめる。

オレにはユージの言葉が心底理解できなかつた。

Side Y u j i

昼休みが終わり『ガンプラバトル』の授業がはじまった。

これはいくつか選択できる技術科目の一環として用意されており、参加している生徒のほとんどは男子だ。

内容としては、彼ら自身が製作したガンプラを持ち寄って、体育館に設置したバトルシステムで競わせている。

今日はその中でも大きなイベントである、全生徒対抗トーナメント戦が開催されていた。

人数は結構多いので、ともすれば規模は世界大会地方予選にすら匹敵する。

「じゃあアレックス。ボクは表に名前書いてくるけど、アルファベットで書いた方がいい？」

「くだらんことを聞くな。カタカナでいい」

「わかった」

トーナメント表には早いもの勝ちでタッグ、あるいは個人の名前が書きこめる。

ボクがサインペンを持って表の前に行くと、ナエダくんが待っていた。

いつものように前傾の体勢で、鼻あてを直している。

彼の手にも同じサインペンが握られていた。

ボクと一回戦で勝負するために、わざわざ空欄を確保していたらしい。

「ツガミくん。転入生と随分仲がいいみたいじゃないか」

「アレックスのこと？ボクが構ってもらっているだけだよ」

「彼は自分でも思っている以上に、キミにご執心のようにじゃないか。よかったね」

「師匠に組むように言われたからね。本当はボクでなくても、きつといいパートナーを見つけていた」

表の中央あたり、空白となっている欄に名前を書き込む。

ナエダくんもボクと同時にペンを動かしはじめた。

『津上 遊治』

『アレックス・メルフォー』

ボクの名前の横に、誰かの名前と一緒に並ぶことは初めてだ。

それがうれしくって、つい口元がにやけてしまう。

ナエダくんもボクらの横に、名前を書き終えたようだった。

「第一試合で、完膚なきまでに叩き潰す。ホソカワくんは執念深いよ」

「うん。知ってる。だから、負けないようにするよ」

ボクらはバトル前の最後の言葉の応酬を終えて、逆方向に分かれた。

ナエダくんはホソカワくんがいる場所へ、ボクはアレックスのいる場所へと帰る。

アレックスは腕組みをして待っていた。

「遅い」

「ごめん。ちよつとした雑談を」

「迂闊に口を滑らせて、手の内を読まれていたら殴り飛ばすぞ」

「本当に大丈夫だから。心配しないで」

「ふん」

ボクは腰のホルスターからガンプラたちを出した。

趣味で作ったはいいものの、ボクには扱いきれなかったものを二体、選んできたのだ。

一つは、『ガンダムAGE―Iをウルフ・エニアクルが使っていたら』という空想の下、

全身を白一色に塗ってきたもの。

もう一つは、ボクのとっておきだった。ベースは同じガンダムAGE-1だが、全身にかなり改修を加えている。

まず『顔』が違った。

フェイス部分はへの字型のスリットがなくなり、後継機である『ガンダムAGE-3』のものに代わっている。手に取った人が受ける第一印象は大きく異なるだろう。

両腕は叔父さんの模型店『ビシディアン』に朝から並んで手に入れた『レイザー』ウエアと、『スパロー』のニコイチ。

腰まわりはやはり『ガンダムAGE-3』のパーツと交換し、スラスターがついたことで機動力が向上している。

最後に両脚はAGE-1の強化仕様『グランサ』の装甲を纏わせていた。

これで重心が下に沈んでいるので、AGE-3の高出力スラスターに機体が振り回されることを防いでいる。

「さあ。どつちがいい？」

「白い方は却下だ。昨日慌てて作っただろう。塗装が甘い」

果たして、アレックスはとっておきの方をセレクトしてくれた。

彼に対してはボクの事情は筒抜けである。

とつておきばかり見ていたのも多少は影響したかもしれない。

「こちらはトリコロールというのも気に入った」

「そういえばフランスの国旗の色だよね」

「そうだ。オレたちフランス人は、この色に『友愛』『平等』、そして『自由』を祈った」
アレックスがボクを見る。

気迫と威厳、自信に満ちた灰色の瞳だ。

ボクもいつか、彼のような目つきができるのだろうか。

「そして『自由』を手に入れるために、闘争を繰り返した国民でもある」

「自由のために、戦いを」

「覚えておけ。すべての『自由』は闘争で勝ちとる。それがフランス人の、オレの流儀だ」
授業を担当するイワナガ先生が、ボクたちの名を呼んだのが聞こえた。

ガンブラを手を持ったまま、アレックスが先に行く。

ボクは彼の後ろをひな鳥のように歩いて歩いた。

早足で追いかけてながら、その広い背中へ、半ば独り言の言葉を紡ぐ。

彼の流儀を聞いたからこそ、ボクのこだわりも耳に入れておいてほしかった。

例えそれが、アレックスにとつてどうでもいいことだとしても、だ。

「アレックス。ガンダムAGE―1がどのくらい長い間使われたか知っている？」

「……」

「およそ半世紀だよ。これは全ガンダム作品を比べても、類を見ないほど長いんだ」

「……………」

「このガンダムは『諦めなかった』機体だと、ボクは思う。その目的が敵のせん滅だろうと、救世主になることだろうと、とにかく、戦争が終わるその日まで何度も何度も直されて、改良されたガンダムなんだよ」

「……………」

「だから、ボクはAGE-1が一番好きだ。どんなに無様になっても、立ち上がり続ける。それがボクの流儀になった」

「……………」

「……」

気まずい沈黙の後に、アレックスの採点が返ってきた。

「……なかなかの演説だった。人間が好きなのを語るといふのは、それだけで耳を傾けるに値する」

彼は決してこちらを向きはしなかったけど、声音はほんの少しだけ、柔らかかった。

そしてボクらは、バトルシステムの前にたどり着いた。

向かいには不機嫌ここに極まった様子のホソカワくと、ナエダくんがいる。

ホソカワくんの右手に握られているギャン改の様子を見るに、どうか修復は間に合ったらしい。

『Please set your GPBase』

すっかり聞きなれたシステム音声体が体育館に響く。

ガンプラ操縦の要であるGPベースもボクが持つている。

ついさつきまで、アレックスがどの機体を使うかは未定だったので、機体名の登録はされていなかった。

『Field 2 desert』

『Please set your GunPla』

アレックスがボクのAGEEー1をセットする。

粒子がプラスチックの五体に浸透し、ツインアイを緑に輝かせる。

アレックスの前にはコンソールが、ボクの前にはセコンド用のモニターパネルが展開された。

空色の障壁ごしに、パートナーの端正な横顔をみつめる。

もしも彼がいなければ、ボクのAGEEー1がこうして日の目を見ることは永遠になかったに違いない。

「ユウジ。このガンダムの名前は」

アレックスに尋ねられて、ボクは自分のとっておきに、名前を与えていないとようやく気が付いた。

画竜点睛を欠くとはこのことだ。

ボクはやや思案する。アレックスの視線が刺さっているので長く時間は取れない。脳内のネーミング辞典を必死にめくって、ぴったりの名前を考案できた。

フランス語の名詞だけなら『SEED』の改造機を作るときにちよつとだけ調べている。

これならフランス人のパートナーにもぴったりだろう

「『エトワール』。いつか、あの星に手が届きますようにって」

「星か。よほど、『スター』ビルドストライクが好きなんだな」

「AGEEーと同じくらいには、ね」

「そうかい」

アレックスが右手を前に突き出すと、そこへもう片方の手を伸ばす。

あのガーゼが挟んであるグローブを取っているのだ。

外気に触れた彼の素手は皮膚が薄く、血管まで透けてわかるほど病的な様相だった。とても脆いガラス細工のようで、触れると壊れてしまうとさえ思う。

ガーゼの正体は怪我ではなく掌を防護するためのクッションだったのだ。

「掛け声は『Sally Forth』だ。オレがずっと使っているもので、これがないと本調子にならない」

「了解」

いよいよボクらの初陣だ。

早鐘を打つ心臓を深呼吸で抑え、ただ、開始の号令を待つ。

問題ない。

二人で使うガンプラの出撃タイミングは、第七回大会で覚えた。

モニターに手をつき、アレックスと同じ体制になる。

すべてのコンディションを、ギリギリまで彼に合致させる。

そして、イワナガ先生が、開始の合図のホイッスルを吹いた。

『BATTLE START!』

「ツガミ・ユウジ!」

「アレックス・メルフォール!」

『ガンダムAGE― エトワール』!」

「『Sally forth!!』」

リニアカタパルトで、ボクらのガンプラが射出される。

『エトワール』が初めて躍り出た戦場は、仮初の灼熱地獄だった。

Side ALEX

学校内のバトルシステムは最小規模の1ユニット級なので、敵は最初からカメラに捉えられていた。

ギャン改だ。先に砂漠へ降り立つと、巨大なビームソードとバスターシールドで、攻防一体の構えをとっている。

一方こちらに手持ちの武装はない。

ビーム・サーベルはおろか頭部バルカンさえない。

元々AGE-1の固定装備は少ないのに、わざわざ腰部を『AGE-3』に変えたからだ。

スラストアーだけではダメだったのか、と問い詰めてやりたいが、ビルダー特有のこだわりなのだろう。

オレには理解不能な代物である。

「ごめん。アレックス。すっかり武器のことを忘れてた」

「問題ない。だからいちいち青ざめるな。血の気がいくらあっても足りんぞ」

さつきまでユージの流儀を聞いてやっていたせいで、その点について指摘することを怠っていた。

これはオレのミスだ。ユージは責められない。

『へへ。転入生。不運だったな。はずれを掴まされたみたいじゃないか』
『言っておくけど、このバトルに降参はないよ』

相手の日本人二人の、からかうような通信が入ってくる。

オレはそれを一切聞かぬふりをして、操縦桿の具合を確かめた。

両腕、両脚、首をはじめとした全可動範囲をチェックする。

AGE—1エトワールはオレの試運転を真に受けて、奇妙な踊りをはじめてしまった。

両手脚をあらゆる方向へ曲げ、ややもすると地面にくずおれるなど、おどけた道化師を連想させる。

困惑したユージの声がこちらに届く。

「あ、アレックス?」

『ははは!こいつ操作方法も怪しいのかよ!』

嘲笑と共に、ギャン改が突進をはじめめる。

大型ビームソードは砂漠の表面を焼きながら、まっすぐAGE—1エトワールへ迫った。

この動きには覚えがある。

昼休みに、オレに掴みかかってきたときの動きだ。

ガンプラバトルはアニメ『機動戦士ガンダム』の操縦系統より、操縦者の動きをトレースして伝えやすい。

だからこそ、ガンプラでさえ似通った動きを強いられるのであった。

オレはのんびりと、ユージに通信をつないだ。

「ユージ。武装についての打ち合わせを逃したのは、オレの油断だ」

「え？」

「詫びになるかわからんが、手品を見せてやる」

全身の点検を終えたAGE-1は突如として正気に戻る。

当然ギャン改は速度をゆるめず、必殺の間合いにまで距離を詰める。

それを緊張感のない、自然体の直立不動で迎え撃つ。

そして、ばん、と左手でビームの切っ先を払った。

「え？」

『は？』

一切の予備動作なしの、ただの平手打ち。

ギャン改の全体が左へかしぐ。

その時、オレには敵機の腰関節に亀裂が残っているのが垣間見えた。

エトワールの右脚だけで跳躍し、左大腿のスラスターを一瞬間だけ噴射する。

グランサの追加装甲を上乗せした重量と、スラスタ―出力に裏打ちされたスピードを掛け合わせ、一撃必殺の物理エネルギーがギャン改の腰部を襲った。

赤い足先が突き刺さり、残心をたたえてクルクルと下半身が回転する。憐れにもギャン改は上下泣き別れになって、そのまま完全に沈黙した。

『BATTLE ENDED』

粒子は収束し、顎が外れそうなほどあんぐりと口を開けた、ホソカワとナエダが残された。

かくしてAGE―1エトワールの初陣は終了である。

試合時間、総計55秒。

1分を切るというのは久しぶりの記録だった。

「ま、まさか。ビームを払いのけるなんて」

驚愕を発声で表現できたのは、製作者であるユージだけだった。

オレは役目を終えたエトワールを手にとつて、奴へ渡す。

自分の創造物のくせに、ユージはAGE―1を様々な角度から検証している。

手品という言葉から種や仕掛けがあると踏んだのか。

「え?ん?どうなって……?」

「昼にお前も見ただろう。あれをそのままやったただけだ」

オレにはそれをガンプラで再現可能とする技量があった。

だが技量だけでは足りないことも認めざるをえない。

実のところビームソードに『エトワール』の指先が触れた数秒は、オレも心臓が止まるかと思っただけである。

それでもこの『手品』をなしえたのは、ユージが作ったガンプラの性能のおかげだった。

まず、準備運動を終えてから直立不動へ移行、平手打ちと、オレの操作タイミングをギャップなしで伝達する反射速度。

そして、ほんのわずかでも、高出力ビームに耐えきる強度。

いずれにしろ、このガンプラの完成度による圧倒的な性能補正を受けている。相手との実力が雲泥の差であるからこそ、昼休みの再現は完成したのである。

「ユージ」

「な、なに」

奴は我に返ると畏れと驚嘆、なにより歓喜の入り混じった黒い瞳でオレを見つめた。

「一度しか言わないからよく聞け。お前、飯とガンプラだけは一流だ」

オレははじめて、100パーセントの称賛をパートナーに送る。

ユージはパチパチと目をまたたかせて、それからひどく赤面した。

Lost—02「Imagination∞Reality」

Side Yujii

師匠いわく、修行に最適な場所には条件があるそうだ。

研鑽する者たちがのびのびと技を發揮し、その一方で、彼等の試練となりえるように適度な過酷さを秘めているといらしい。

その条件でガンプラバトルを行うとすれば、確かに、そこはうってつけといえた。

仮想全高20m前後の機体が稼働可能な広大さ。

そして強風や険しい岩肌、視界を塞ぐ密林群と、厳しい自然環境が揃っている。

『機動武闘伝Gガンダム』のファンならば、なるほど修行向けだ、と苦笑するはずだ。

自然の脅威と抱擁のあるその場所は、ギアナ高地と呼ばれていた。

「それでは、15戦目……」

師匠のアナウンスが、ボクの頭上から聞こえてくる。

ファイター用の操縦空間は周囲が防音加工されているため、たとえ隣に人がいても、音源はスピーカーに限られていた。

汗でにじむ操縦桿を握り直し、号令を待った。

「はじめ！」

『BATTLE START!』

「ツガミ・ユウジ、『ザクF2』、行きます！」

練習用のガンプラでボクは出撃する。

正面モニターには既に相手の姿は視認できていた。

水色のボディと他のジムタイプとは明確に異なるスタイリッシュなデザインライン。

RG M-79 N ジム・カスタムだ。

両腕を組み、気怠そうに首をかしげてボクを待っている。

その、内部に人間でも宿ったかのような態度は、ジムの制御を担っているファイターが誰かをはっきりと教えていた。

「アレックス！」

「やかましい。騒ぐな」

ザクのマシンガンが火を噴く。

続けざまに発射された数十発の弾丸を、ジム・カスタムは身体を左右へと翻すだけでかわしてみせた。

オートロックを設定しているはずなのに、たった数センチの補正が振り切られてしま

うのだ。

ボクが必死に引き金を引いている間に、ジムが組んだ両腕がゆったりと解かれた。

その指先がサーベルの柄に伸びるのを認めた瞬間、頭の中に氷を放り込まれたような冷たさが走った。

攻守交替の合図だ。

「遅い！」

「うわあっ!？」

たった一撃。

視界をピンク色の閃光が奔ったかと思うと、がくり、と斜めにかしいだ。

後れて激しい衝撃でモニターが揺れる。

たったそれだけで、ボクは自分のガンプラのコクピットを斜に斬られた、とわかった。

『BATTLE END』

たった数十秒の試合でも、システムは開始と終了を律儀に数える。

ボクは消え去るギアナ高地を目に収めながら、ぼんやりとジム・カスタムを観察していた。

基本工作だけをこなしただけの、いわゆる『素組み』だ。

奇妙なことに、そのサーベルの切っ先は、空を指して揺らめいていた。

ザクの視点よりも高い場所から振りぬいたにも拘わらず、斬撃の軌道は足元から発生したということになっているのである。

「師匠に居合斬りまで教わったの？」

「あの女が得意としていると聞いたから、どれほどの難易度なのか試しただけだ」
「へえ、そんなこと初耳だなあ」

「それよりも自分のバトルを反省しろ。あつさり全敗記録を更新してからに」

。プラフスキー粒子の天幕の向こう側から、アレックスが眉をひそめて現れた。

打ちっ放しのコンクリート壁を背にすると、彼の威圧感は強まるように感じられた。

「ここだともうにも緊張しちやって」

「オレたち以外は引き払わせている」

「そ、それはそうというか。ええっと」

アレックスの指摘に、ボクは困り果てる。

ボクらがいるのはアレックスが日本での居住地としているお屋敷だ。

その一室に小型のバトルシステムが設えられていて、師匠はここを修行の場と定めた。

聞く所によると、わざわざ父さんが手配したらしい。

「それでは永久にオレには追いつけん」

アレックスは自分の左腕に巻かれた腕時計を見ていた。

ボクもつられて、倉庫の壁にかけられた丸時計で現在時刻を確認する。

11時50分。もうすぐ正午だ。

「定時報告をしてくる。お前は昼飯の用意をしておけ」

「わかった。台所借りるね」

アレックスはボクの傍らをすり抜けて、両開きの扉へと歩いていく。

出口ではオザワさんが待ち構えていて、二人は何やら話しこみながら部屋を出た。

それを見送ってからボクはGPベースを取り外し、片づけを始める。

試合の後にアレックスは故郷であるフランスに連絡を取りに行き、ボクは後片付けと

お昼ご飯の準備をする。

彼が来てからのおよそ二週間で、すっかり生活に組み込まれた流れだった。

「ユウジや」

「はい。なんででしょうか、師匠。」

ジム・カスタムを手にとったとき、ボクの耳に柔らかな声音と、カツン、という軽い

音が入ってきた。

「ここまで成行きを見守っていた師匠が、杖で歩みを支えながら近寄ってきていた。

「おぬしも少しは咎めぬか。あれでは召使じやて」

「他意はないと思いますよ。つい命令口調になっちゃうだけで」

ボクは笑ってみせるが、師匠は唇をへの字に曲げていた。

相変わらずアレックスに対していい印象を持っていないようだ。

二週間前、彼は師匠の課した入門条件である、学校のクラス内トーナメントの優勝を勝ち取ってみせた。

ほとんど苦労もなく、激闘もなく、文字通りあっさりとした。

一戦目で彼の実力を目の当たりにしたボクでさえ、まだ夢のような話だと思っ
る。

コピー用紙に印刷された、間に合わせの表彰状だけを見た師匠は、なおさら信じづら
いのだろう。

アレックスからしてみれば理不尽かもしれないけれど、人間そういうものである。

「それはそうと、今日のお昼ご飯はカレーですよ」

「む？……そうか、おぬしが作るカレーは結構辛いから覚悟せんとな」

「ちゃんと調整していますって。片付けが終わったら用意しますから、下の階で待つて
いてください」

「うむ……」

ボクはそう言うのと、ザクの破損具合を確かめるため、手元に視線を落とした。

師匠の杖をつく音が、ゆっくりとボクから離れていった。

Side ALEX

屋敷にある一室で、オレは故郷へ通信を繋いだ。

オザワが用意したノートパソコンの前に座り、徐々に満たされていく読込ゲージを見つめる。

この回線は複数のサーバー経由で発信源を隠蔽されており、盗聴が行われないように幾重にも対策が施されてもいる。

だから接続に時間がかかり、オレをやきもきさせた。

「……アレックス様。完了しました。」

「見ればわかる」

一瞬だけ画面にノイズが走ったかと思えば、明るく広々とした寝室が映った。

あちらはまだ朝の4時のはずだ。

日光の恩恵はなく、部屋に満ちた甘ったるい蜜色の光はすべて人の手が介在している。
る。

一見整えられているが、その何もかもが人工物で構成されているという点が、部屋の主の本性には似つかわしいように思われた。

オレは画面中央に位置する寝台をにらみつける。

装飾のない寝台の中には、紙くずのような物体が押し込められていた。

「起きろ。ジジイ」

オレはいつもよりもさらに低い声音で、それを叩き起こす。

紙くずが、もぞり、と蠢くと不気味な貌を露わにした。

矮小でしわくちやな老爺の顔だ。

奴の喉元には小型のスピーカーが取り付けられて、豚の悲鳴のようなしわがれた音をこちらに届けさせる。

『……こんな朝早くにとは、老人の身体には答えるぞ、アレックス』

「つまらない冗談はよしてもらおう。あんたみたいな人種を、この国では『ヨウカイ』と呼ぶらしいぞ?」

『ふん』

オレの祖父、レオ・メルフォールはゆっくりとこちらへ向いた。

骨まで透けた人体が上体を起こすさまは、死体が蘇生するような不気味さがある。

『……報告を聞こう』

「今朝もユージとの模擬戦だ。オレがジム・カスタムで、あいつがF2ザク。居合斬りで腹の継ぎ目からコクピットめかけてバツサリだ」

『その居合斬りはナガイの技か』

「あんたから聞いたから、試してみた。さほど難しいものではなかったな」

少し腕を上げれば、ユージでさえもできるのではなからうか。

そんな考えを見透かしたかのように、ジジイはせせら笑う。

骨を打ち合わせるようなカラカラとした笑い声だ。

『まだ本人と対戦したこともないというのに、ナガイの剣技が見様見真似で再現できるものか』

「ほう?」

『意味はいずれわかろう。今のところは、ナガイの弟子に取り入ることを優先しろ』

「……」

『少しは仲良くなったか?』

いつもの問いを老爺は投げかける。

一日三回行われるこの定期報告で、毎度行われる調査だ。

ずうずうしくも、孫を案じる祖父を演じるとは片腹痛い。

つい、オレの頬も引き攣るというものである。

「相変わらずだ。ユージの製作技量はオレの期待以上で、ついでにいえば料理もうまい」

『くくく』

「だが、それまでだ。あいつのことを友人とは思わん。日本で得た協力者、という認識が

せいぜいだろう」

『そうか。それでは、まだ足りんな』

「……ジジイ、なぜユージなんだ。ナガイに認められた男だが、唯一無二の才能でもあるまい」

オレはうんざりとしてリムジンの背もたれに身を預けた。

ツガミ・ユウジと友となること。

この国にやってくる時もオザワを通じて言われたことだが、何度考えても、これ以上ユージと仲を深めなければならぬのかがわからない。

ナガイ・トウコに媚びを売れ、と言われた方が、まだ理屈は通る気がする。

この老人の真意はどこにあるのか。

探りを入れてみると、ジジイは濁った眼をぎよろぎよろと動かした。

『アレックスよ。我がメルフォール家の悲願を言ってみろ』

「最強であること。一族ではなく、あんなだけの悲願だ」

『お前はナガイの弟子に、フランスは自由のため闘争を繰り返した国である、と教えたそうだが……』

AGEEー1をはじめ使ったときの会話のことだ。

この定期報告において、オレがユージと交わした言葉、行動はすべて祖父も知るとこ

ろになっている。一字一句、一挙手一投足の些末なく、文字通り「すべて」だった。

『フランスの革命闘争とガンプラバトルにおいて、決定的に異なる点がある』

「戦争か遊びか、だろう」

『惜しいな。ガンプラバトルは『人間性』を競う闘争なのだ』

およそ発言者には似つかわしくない単語に失笑がもれた。

確かにフランスの革命は、お世辞にも理性の光が照らした闘争とは言えない。

しかし、それは現代のガンプラバトルとて同じだ。ユージの中学校だけでも、猿同然まで退化したビルドファイターもどきを知っている。

「バカらしい。それがユージと親交を深めることに何の関係がある」

『まだわかっていないようだな。……答えを明かす前に、もう一つ質問をしよう。お前とツガミ・ユウジが、正面から殴り合いをしたとき、勝つのはどちらだと思う?』

またしてもはぐらかすジジイに腹が立ったが、その質問自体は考えるまでもなかった。

オレは祖父の『最強たる』というあやふやな妄執のために生み出され、育てられてきた。

知能や身体能力、精神強度を社会規範から逸脱しないギリギリまで高められている。

対してユウジは料理とガンプラの腕が多少いいだけの平均的日本男児だ。

まず勝負にならない。

すると骨ばった老人はオレの思考を悟ったかのように、にたり、と歯をむき出しにした。

「お前が勝てると思った条件の数々はしよせん、私がそうあれかしと『調整』してやったものだ。己が置かれた環境によって、理不尽な『調整』を受けることはどんな原始的な生物だってできる」

「なに?」

「真なる人間性とは霊長としての知恵でや倫理観ではなく、生まれや育ちを超え、その当人が己の体に蓄積した経験値を指す。ナガイの弟子と仲良くし、経験と記憶を培うがいい。そうでなくば私はお前を『再調整』する面倒を負うからな」

数年ぶりの長広舌によって、ジジイはやせ細った身体を折り曲げてむせた。

オレはそれを合図に弾かれたように端末の電源へ指を伸ばすと、強引に通信を切断した。

ブラックアウトした画面に、少し青ざめた自分の顔が映り込んでいた。

Side Yujii

アレックスの家の食堂は二か所ある。

一つは『ツガミ商事』の社員食堂と同様にカウンターと座椅子の用意された、『メル

『オール運送』社員さんのためのもの。

もう一つは、アレックスとその家族のために作られた、豪華なテーブルのある部屋だ。ボクは後者を使わせてもらえないので、慣れた構造の場所に入ることになる。

遠慮がちに扉を押すと大柄な男の人の背中に突き当たった。白いワイシャツから、汗でランニングが透けている。

ボクはこの背中をよく知っていた。

「父さん」

「ユウジか」

「どうしてアレックスの家？」

「粒子貯蔵タンクの交換だ。あまり大っぴらにやるとヤジマに叱られるが」

、細長い横顔は疲労から更にやつれていた。

太いフレームの眼鏡は鼻あてからずれ落ち、その奥から除く眼窩は落ちくぼんでい
る。

スポーツ刈りにしたはずの髪も、無精ひげも伸びつばなしでみつともない。

明らかに体力は限界寸前だ。

わざわざ注意深く観察するまでもなかった。

「すぐにお昼できるからね」

「いや、いい。これからまた商談だ。車内で済ませる」

「でも……体に悪いよ?」

「いいんだ」

父さんは乱暴に言い捨てると、買い置きしていたらしいコンビニ弁当をレンジに放り込んだ。

こうなつては、それを捨てても言えないので、すごすご引き下がるしかない。父さんに続いて、冷蔵庫からカットしておいた食材を取り出すと、調理を始める。

広くない作業スペースで互いの背中が触れ合った。

「……学校はどうだ」

「今は夏休み」

「……………メルフォール輸送の御曹司とは、うまくやっているか」

「アレックスのこと? うん、仲良くできていると、思う」

「思う?」

父さんに聞き返されて、ボクは自信なくうなだれた。

クラス内トーナメントで彼に褒められたとはいえ、アレックスがボクに対し友情を感じているかとは別問題だ。

ボクはニュータイプじゃない。

他人の心の底まで覗き込めるほど器用ではないから、やはり一方的に親しくさせてもらっているというのが精々であろう。

「あそこは一族経営だと聞く。御曹司の機嫌を損ねるだけで、取引が打ち切られることもあり得るだろう」

「そんなまさか」

「くれぐれも、迂闊なことはするな。たった一社でも契約破棄されれば、ウチのような小さな会社はすぐに崩れる」

父さんの声に抑揚はなかった。

会社を一人で立ち上げ、どうにかこうにかやってきた人にとって、得意先の御曹司がやってくるというのがどれほど心臓に悪いかは察して余りある。

「……」

「戻ったぞ」

「あ、おかえり」

ボクが答えあぐねていると、尊大な態度でアレックスが食堂へとやってきた。

自分のために別途に食堂を備えられているのに、ボクの用意する食事が食べられないと知るやいなや、アレックスはこちらへ居座るようになった。

社員の人たちは遠慮が食欲に勝るらしく、昼時にも拘わらず、カウンターの向こう側

には彼しかない。

木製の椅子に腰を据えると、頬杖をついて大きな溜め息をひとつ。

視線はボクが用意しているカレーの鍋に注がれて、細い唇のはしが吊り上がっている。

その時、父さんがカウンター越しにアレックスに気づいたようで、のっそりと振り返った。

乱れた服の襟元を両手で直したかと思うと、ほとんど直立不動の体勢で彼と相対する。

「アレックス・メルフォールさんですか」

「む?」

『ツガミ商事』のツガミ・ソウイチと申します」

「……ユージの父親か」

「はい。出来の悪い息子ですが、これからもよろしくお願いいたします」

「ああ」

大の大人が、ボクと同年代の友人に向かって、頭をカウンターにこすりつけそうなほど下げている光景は異様であった。

アレックスは眉をひそめ虫を払うように手をヒラヒラと振った。

彼もいきなり大人同士の関係を持ち込まれては迷惑だ、という意思表示だろう。父さんはゆつくりと頭を上げた。

「では、私はこれで」

「父さん、本当に食べていけないの？」

「ああ」

レンジから加熱完了のメロディが鳴る。

挨拶を済ませると、父さんは温かなコンビニ弁当を片手にそそくさと立ち去った。

重い扉の閉まる音。

後にはボクとアレックスだけが残された。

「ユージ、お前は父親に似なくてよかったな」

「え？」

聞き捨てならないことを聞いた気がして、ボクは聞き返す。

嘲りを含んだ声の主は、どう考えてもアレックスだった。

「確かにオレの報告次第でお前の家はずぶれる可能性はある。だが、オレがお前の父親なら、息子の前で子供にこびへつらうような真似はしない」

「……父さんは必死なんだよ」

「必死と無様は違う。そんなに会社に価値があるのか？」

ボクは何も言い返せなかった。

ガン普拉バトルが流行するよりも早く、いや、ボクが生まれる前から父さんはガン普拉に関わり続けている。

そのおかげでボクはガン普拉に触れる機会を得ていたし、『スタービルドストライク』に出会うことができたのだ。

ボクにとってツガミ・ソウイチという人は父という以前に、ガン普拉愛好家の大先輩である。

同級生に頭を下げたくらいで、軽蔑なんてするものか。

でもどんな言葉を取り繕っても彼に言い負けそうで、反論する勇気が湧かなかった。

「おい。泣くことはないだろう」

アレックスの声で我に返ると、いつの間にか頬を涙が伝っていた。

慌てて拳で拭う。

「……キミが、そんなことを言うから」

「オレのせいだど？」

ほんの少しだけの反抗心を秘めたままごねると、アレックスはしばし視線をさまよわせた。

珍しく気まずそうで、そして戸惑っているように見受けられた。

彼としてはいつものように接したつもりが、突然ボロボロと涙を流し始められたのだから驚いたのかもしれない。

黙考を経て、アレックスは目線を外したまま言った。

「……家族なぞ、血が繋がっているだけではないか」

この期に及んで反省する気はないらしい。

流石に何か言い返そうと思って、ボクは口を開いたまま言葉に詰まった。

ほとんど消えかかった声で呟いたアレックスの横顔には、はつきりと寂寞が感じ取れた。

ここではないどこか遠くを望むような目元は、ボクがこの二週間見かけた表情の中でも一等美しく、一瞬、見惚れてしまった。

鍋がぐつぐつと音を立てる。

ボクが慌てて火を消してから視線を戻すと、もう既に彼の顔にはいつもの傲岸不遜が輝いていた。

ひよつとしたら幻覚だったのかもしれない。

首をひねっていると、音を立てて食堂の入口が開いて杖をつく音がした。

師匠だ。

先に待っていたはずが随分遅い来訪であった。

「すまん。ちょっとオザワさんと話をしていた」

「何をですか?」

ボクが炊飯器を開けて、しゃもじを握りながら尋ねると、師匠はいたずらっぽく笑った。

「おぬしたち、『合宿』をしてみないか?」

S i d e A L E X

翌日。

オザワの運転する乗用車は『ツガミ商事』の社員食堂前に停止していた。助手席にはナガイ・トウコが収まり、オレは運転席の真後ろに陣取った。

ユージは忘れ物をしたと店にトンボ帰りしてからまだ帰ってきていない。

暇を持て余して、奴が持ち込んだスケッチブックを開く。

白い画用紙に細かく注意書きが書き込まれた設計図が並んでいた。

支援機と推測される戦闘機や大型のライフル、果ては用途不明のドリルやノコギリなども描き込まれていた。

こいつの発想を形にしたとき、いくつが『ムラサメ』によって『神器』として認定されるのか。

最後のページに手をかけたとき、勢いよくドアが開けられた。

「ごめん！ようやく見つかつた！」

「遅い。工具ケース一つ持つてくるのにどれだけかかっている」

息を荒げてユージは座席に沈みこんだ。

こいつの忘れ物をする頻度はかなり高く、しかも遠出するときに限ってこうだ。

今回は出発前に気づいただけマシと言える。

「オザワ。今度シートの背もたれに工具とケースの予備を備えつけておけ」

「承知しました」

「え?! いいですよ、そんなことまでしていただかなくても!」

「迷惑だと思ふならもう少し気をつけろ」

「あ、うん……」

ユージは所在なさげにケースを開け閉めする。

小動物のように縮こまっている奴は放つておいて、オレは後部座席から身を乗り出す。

ナガイの皺だらけの顔が真横にきた。

「それで、合宿というのは何をするんだ」

「む? そうさな……魚釣りにバーベキュー、虫獲りもよいかの」

「おい。それではただ遊びに行くだけじゃないか」

ガンプラ造形術の師範が弟子を呼びつけて『合宿をする』というのなら、泊まり込みでバトルをするとか、修練のような性格を持つものだと考えていた。

オレは失望をこめた眼差しを向けると、ナガイはその反応を期待していたとでもいうように、満面の笑みを返してきた。

「ガンプラバトルは『遊び』。その合宿というのだから、遊びに行くのは当然の論理じゃろう?」

「聞いてないですよ師匠!」

しよげかえっていたユージが、にわかにながいに元氣を取り戻して座席から立ち上がる。

声の震えからは喜びというより当惑を感じ取られる。

いかにユージでも許容できないことは抗議をするか、とオレは感心した。

ナガイも愛弟子に反対されるのはシヨックだろう。いい気味だ。

そう考えてユージの発言に口を挟まないでやると、奴は予想外の言葉を続けた。

「バーベキューするなら道具を持ってこないと!」

「いい加減にしろ」

「ぐえ」

そう叫ぶと、またしても車から降りようとすする姿勢を見せたので、オレは咄嗟に奴の首根っこを掴んだ。

ユージは死にかけのカエルのような声を上げて停止する。

ナガイは癪に障る笑いを漏らしているし、一瞬でもこいつの発言に期待した自分が恥ずかしい。

「……出発してもよろしいでしょうか」

ハンドルを握った手を震わせたまま、オザワが小声で呟いた。

Side Yuji

師匠がいう合宿所は、静岡県のある町はずれにあるという。

出発前のやりとりでアレックスはすっかり機嫌を損ねてしまったらしい。道中ボクが話しかけても最小限の返事しかしてくれなかった。

そうなると手持ち無沙汰になって、車の揺れが気になってくる。

窓の外で暇をつぶせるほど子供でもないし、いつの間にかうつらうつらとしてしまっていた。

「……………ん？」

耳が詰まったような感覚と鈍痛で目が覚めた。

高い場所に行ったときの気圧差で起こる症状だと思い当たり、辺りを確認する。

周囲の景色はすっかり様変わりしていた。

左右はほとんど畑だ。ちょうど収穫したばかりなのか土がむき出しで、わさわさとし

た葉っぱが点々と残されている。

その向こう側では、雲一つない青空が山の稜線でぱっくり切り取られていた。

正面を見れば、車が進んでいる田舎道がうっそうと茂る木々の間へ続いている。

「この奥ですか？」

「そうじゃ」

「町はずれ、というか『田舎』と表現するべきじゃないのか？日本語では」

アレックスがあくびを噛み殺しながら呟く。

確かに町はずれはおろか山の上、キャンプ場に適しているような場所であった。

急に車内に影が差し込み互いの表情を見えづらくする。太陽をそびえたつ樹木が覆

い隠したのだ。

車の揺れは激しさを増し、腰が座席から浮くほどまでになった。

「昔はこんな悪路が畑のあった場所まで広がっていたんじゃ」

「いつの話だ」

「初代メイジンの時代というと、もう50年も前になるかの？」

こともなげに師匠は口にするが、半世紀前から使われているような場所となると、ただの合宿所ではない。

ボクの心臓は期待と緊張で早鐘を打ちはじめた。

「ナガイ警備部長。仰っていた地蔵というのはあれでしょうか」

「そうじゃ。あれに沿って進んでくれ」

「承知しました」

まもなく、窓からもオザワさんの言うものが見えるようになった。

苔むしたお地蔵様だ。

穏やかな顔の像がいくつも居並んでいて、それぞれに真新しい花や水が供えられている。

かすかに差す木漏れ日がぼんやりと輪郭を浮かび上がらせるのだから、ボクはなんだからかうすら寒いものを背筋に感じた。

「着いたぞ」

師匠の言葉と同時に、突如として視界が開けた。

こもっていた日光がその一帯をすどく照らす。そこにあつた建物を見てボクはあんぐりと口を開けることになった。

大きな木造の日本家屋だった。

石垣で広大な敷地を包囲しているようで、ここから見ただけでも二棟は確実に建物があ

る。錆びた金属でできた門の前で立ち尽くしていたら、玄関がガラリと音を立てて開き、

中から若い男の人が姿を現した。

体格のいい人で、肩幅はボクの二倍くらいありそうだ。顔つきも岩をそのまま乗せたようで、ごつごつとしている。

袖をまくって太い二の腕を露わにしているのは、それだけで圧迫感があった。

その人は助手席から降りてきた師匠の姿を見ると、にっこりと笑顔を浮かべた。

「ナガイさん。お久しぶりです」

「うむ。息災だったか」

「おかげさまで。……こちらの子供たちは？」

「弟子じゃ」

「おお！とうとう心剣流を伝承されるのですか」

男の人はぎよろりとした目をわざとらしく見開くと嬉しそうに体をゆすった。

「紹介しよう。こここの管理人のヤマザキという」

「どうぞよろしく」

ヤマザキさんはボクたちへ微笑みかけて、MGを握りつぶせそうなほど大きな手を差し出してきた。

おずおずと握り返すとこちらの肩関節が外れんばかりの勢いで上下に振る。

豪快な人のようだった。

ボクはこれから一週間ほど、ここで過ごすことになる。ちよつと自分の体力が心配になった。

S i d e A L E X

オザワはやマザキという巨漢の誘導で、車を移動させている。

オレたちは一足先に合宿所へ上がり込むと寝泊まりする予定の部屋へ荷物を運んでいた。

しかし、ナガイは唐突に妙な依頼をユージに持ちかけた。

「ユウジ、すまんがワシらの荷物もしまっておいてくれんか？」

「ええ。いいですけど、どうかしましたか？」

ユージは、体質で重い荷物が苦痛となるオレに代わり、衣類が入ったシヨルダーバッグを両腕に抱えていた。

オレは諸手で、奴が手際よくダンスに服を仕舞っていくのを眺めていたが、ナガイの言葉には怪訝に思わずにはいられなかった。

「ワシとアレックスはこれからすることがあるでな」

「はあ。」

話の矛先はオレに向いているらしい。

ユージは目をしばたたかせてナガイとオレを交互に見比べていたが、やがて悟ったよ

うに相好をくずした。

「わかりました。アレックス、何をするかわからないけど、気をつけて」

「死ぬ訳じゃあるまいし、いらん心配だ」

「そっか」

「オレの荷物には触るなよ。オザワが困る」

「うん」

ユージは素直にうなずいた。

「ではアレックス、ついてくるがよい」

ナガイにつづいてオレは一階へ降りる。

階段の踏面へ足を乗せるごとにギシギシと音が鳴り、この建物の老朽化がわかる。

この老婆の言を信じるなら半世紀前から存在するはずの屋敷だ。仕方あるまい。

縁側から庭を突っ切り、にぎりきった小さな池のそばを通り過ぎる。宿泊する屋敷とは別棟へ向かっているようだ。

「やて」

ナガイが足を止める。

こちらの建物は宿泊場所よりはるかに小さく、さらにボロボロであった。

壁を構成している材木は所々虫に食われて剥がれ落ちているし、屋根にも雑草が生え

ている。

昔オザワに教材として見せられた、明治時代の日本の学校校舎がこんな外見をしていたような気がする。

懐かしそうに目を細め、ナガイは着物のたもとから一本の古びた鍵を取り出す。

「いつ以来かのう」

唯一頑丈さを保っていると思しき木製の扉の鍵穴に、鍵が差し込まれる。

ガチャリと金具の落ちる音の後、ナガイは扉を押し開けた。

扉は地面の砂と摺りあってザリザリと音を立てる。

「それなりに重そうなものだったが、まだ筋力はあるみたいだな」

「衰えたさ。この身ではゴロツキ一人抑えることすら、もはや叶わぬ」

オレは再びナガイの後を追う。

彼女が手探りでスイッチを入れると、電球が弱弱しく点滅しながら、かすかに廊下を映し出した。

左手は庭を一望できるように窓が連続して並べられていて、この建造物の元来の仕様を維持していたが、反対側は異様だった。

雑多なメモ書きや図解、写真が所せままと貼り付けられ、その塊が幾重にも折り重なっている。

オレはその中で唯一、額縁に入れられて周囲の混沌から保護された一枚を見出した。さきほど通過した庭で撮影された集合写真であることは一目でわかった。

ただ、背景にある宿泊所そのものは新築のように傷一つない姿をそこに残しており、これがよほど古い時期のものであるとオレに理解させた。

男女さまさまな人物がこちらに向かって、思い思いのポーズや表情を向けているが、特に目立つのは中央で両脚を八の字に広げ、仁王立ちする女だ。

歳は二十代ごろだろうか。

写真ごしでもわかる艶をたたえた黒髪を背中まで流し、こちらをわざと見下ろす角度まで顔を背けている。

端正な顔立ちに得意満面な笑みを浮かべ、ブイサインを突きつけていた。

なぜか腰には日本刀を差している。さすがに模造刀だとは思いますが、女の気迫と相まって本物ではないかと疑念さえ湧いた。

「こいつは」

「若いころのワシじゃよ」

「ずいぶん生意気そうな顔をしている」

「そうじゃろう。……それは半世紀前、ガン普拉バトルシステムの完成に心血を注いでいたチームの全員が写っている珍しい一枚さ」

『アーキタイプ』の、だと」

まさかと思い、一人ずつ顔を検めていくと最後列にその人物はいた。

ロシア系の先祖から代々継承しているという灰色の瞳。

フランス人に多い茶髪。

若かりし頃の祖父、レオ・メルフォールがそこにいた。

過去の祖父は隣に立っている人物、誇らしげにシルクハットを振る手品師のような風貌の青年を睨んでいる。

「レオは優秀な男だった。だが寡黙で、群れることを嫌ったので衝突も多かった」

「今ではよく口が回る代わりに、性格もねじ曲がったようだな」

「ワシらはこの場所で、誰もが参加できるガン普拉バトルの完成をめざした。しかしプラフスキー粒子の登場で、半世紀の研鑽は露と消えた」

そんなことを呟きながらナガイは廊下のつきあたりにある部屋までたどり着いた。

ドアには古びたネームプレートが貼り付けられている。汚れがこびりついているが、かろうじて『トレーニングルーム』というのが判読できた。

「レオはそれに絶望したようだが、ワシはそう思わん」

ホコリがたちこめてオレは思わずむせる。

解放された室内に、蛍光灯の光が満ちる。この部屋だけは当時の面影を残しているよ

うだ。

中央には巨大な装置が鎮座している。

六角形のユニット中央にレンズ型のパーツがはめ込まれているという外観は、一般に普及しているバトルシステムと同じだ。

しかし、その左右に巨大なサーバーと排熱装置が控え、太い配線が床に蜘蛛の巣のようになり張り巡らされている。

本来GPベースを置くべき場所にそのスペースはなく、代わりにキーパッドと球体型操縦桿が備え付けてあった。

「ガンプラバトル黎明期、プロトタイプのパトルシステムじゃ。粒子普及後に研究目的で導入した」

筐体の反対側へ回り込んで、ナガイがスイッチを入れたらしい。

部屋中がサーバーの稼働する音、排熱口が排気する音で俄かに騒々しくなる。灯のともったシステムの中央から粒子が柱状に噴出された。

『プラフスキーリユウシ サンプカイシ』

「後ろの棚にある好きな機体を使え」

「いいのか。これまであんたはオレがバトルをしたがるのを断ってきたはずだ」

「だからこそだ。レオの孫ならば、ここで戦うのがふさわしい」

降ってわいた世界レベルファイターとの対戦の機会。

それに胸躍らせない者はおるまい。オレはドアの真横に設置された陳列棚を檢分した。

無改造の素組みから、あちこちに手が加えられた者まで多種多様なものがある。

直感的に、一体をつかみ取った。

『アナタノガンプラヲ セットシテクダサイ』

カタパルトに置かれたのはアカツキ。

大気圏内飛行用の装備『オオワシ』を背負っているため、全体的に横方向へ張り出したシルエツトになっている。

黄金であるはずの機体色がメタリックレッドに変更されている以外に、変更点はなさそうだった。

『バトル カイシ』

「アレックス・メルフォール Sally Forth！」

勢いよく紅のアカツキは射出される。

用意された戦場は、これまで踏んだことのない場所だった。

この部屋そのものに倣うように、光源はギリギリまで絞られた洞窟だ。

左右が人の手によって掘られ、摩崖仏のようにモビルスーツの姿が彫り込まれてい

る。

『やはり選んだか。そのガンプラを』

「なに？」

『「暁 激雷」……かつてのレオの愛機じや」

通信と共に、聞きなれない音が耳に届く。

ワイン、ワイン、というモーターの歯ぎしりだ。

粒子によって形作られる全長18メートルのロボットの足音ではなく、このオレたちが息づく現実が発生している音であった。

『森羅万象は、次代に受け継がれて流転する』

「なんだ、あれは」

『では、お前という次代は、あのレオから生まれた殺生石なのか、それとも我らの足跡から掘り当てられた金砂なのか』

一步、また一步と接近してくる。

カメラアイの補正によって、その姿はモニターで鮮明に映った。

概観はいわゆる『フルアーマーガンダム』に近い。

全身を覆う追加装甲とダークグリーンというカラーリング、右肩のキャノン砲や、右腕のダブルビームキャノンがわかりやすい判別の指標を与えている。

しかし、それを上回る異様が眼前の機体にはあった。

増加装甲の両手両足にモーターが取り付けられているのだ。

おそらくミニ四駆からでも取ってきたと推測されるそれは、例のウイン、ウインという音を不気味に響かせている根源であった。

モーターから伸びる配線は装甲の下に潜り込み、まるで機体全体が脈打つに震えている。

オレは頭部を観察する。

ファンなら馴染みある初代ガンダムのデザインラインは、ガンプラの世代が推移するごとに異なるが、ナガイの機体の顔は記念すべき原初の『ガンプラ』。

ベストメカコレクションのものであった。

「まるで動く死体だな」

オレの頬を冷たい汗が伝う。

あのオンボロからは、オレという人間の出生を知り尽くした上で、それを恨めしく呪うような恐ろしさがある。

普段のオレならば自信満々に笑い飛ばしているが、今回ばかりはまるで勝算がない。

なにせ相手は初代メイジンと同じ時代を生き、今なお戦い続ける伝説だ。

『レオの血を引く者よ。おぬしがこの先、ワシから学び、受け継ぐことを望むのならば』

ガンダムが立ち止まる。

分厚いチエストアーマーがゆっくりと沈み、ダクトから白い蒸気を吐き出した。

まるで、老人が久方ぶりの運動で息をつくようだ。

『今ここで、その存在を見極めさせてもらう』

「……………」

『この『ザ・パーフェクト』で相手になろう。来い！』

ナガイの挑発を真に受けて、オレの暁 激雷は前進する。

武装スロットの三番目、73F式改高エネルギービーム砲を選択。

挨拶がわりの一撃を試みた。

瞬間、予想の数倍の反動とともにビームは暴れ狂い、暁 激雷はもんどりうって吹き飛ばされた。

反射的にオオワシのスラスターで姿勢制御を行い、無様に転がることは避けたが、オレの脳は混乱していた。

「くそ、何てバランスの機体作ってやがるあのジジイ……………」

オレは自らの体質を利用し、アームレイカーから伝わる感覚で機体の重量を勘案した。

どうやらビーム反射装甲『ヤタノカガミ』に防御機能を預け、装甲そのものをギリギ

りまで削り込んだらしい。

自分の武装すらまともに扱えないなんて、設計思想が狂っている。

とんだ暴れ馬を引き当てたことを実感した。

暴走したビーム砲によって洞窟の天井が崩落し、瓦礫がガンプラの間を塞ぐように降り注いだ。『ザ・パーフェクト』と名乗ったガンプラはものともせず踏み越える。

二連装ビームキャノンの銃口がこちらに向けられるのと、暁 激雷がサーベルを抜き放って突撃したのは同時だった。

果たしてキャノンから発射されたのは実弾であった。ハイパー・バズーカ級の弾頭がまっすぐに飛来してくる。

オレはサーベルでそれを切り裂き、ザ・パーフェクトへ光刃を振りかざす。

相手は左腕の装甲だけで防御した。

閃光が一带に炸裂し、ビームをただの追加アーマーが食い止めるといふ、あまりに異様な光景が繰り広げられる。

『ふむ。失敗は一度きり、ということか』

「オレがこの機体を使うと予測していたなら、ビーム兵器なんて使わんだろう。フルアーマーガンダムの設定はどうした」

『知らんな。これはガンプラだ』

ザ・パーフェクトの一払いで暁 激雷は振りほどかれた。

今度こそしつかりと狙いを定めて『オオワシ』のビーム砲を撃つ。

原典である『ガンダムSEED』におけるMSの武装トップクラスの攻撃は、ザ・パーフェクトの胴体ではじけ飛んで消えた。

「……加工の形跡は見受けられない。Iフィールドを積んでいるようにも見えない。本当にただ単純に硬いのか」

『その通り。アーキタイプ開発の合間に磨かれた、戦闘用のプラ板積層技術よ』

攻撃手段を切り替える。

最大火力のビームが効かない以上、最適解はオオワシの推力に任せた突貫、もしくは直接の格闘しかない。

このガンプラの装甲は脆いから殴り合いには向かない。つまりサーベルで装甲の間、潜り込んでいる配線のどこかを狙えば勝機はある。

「おおッ!!」

『ふん』

連続の刺突を掌で払いのけられる。

それはクラス別トーナメントでオレがとった対応に酷似していたが、オレは一発限りの博打であったのに対し、ナガイは確固たる自信を以て連続回避を成し遂げている。

五回目の刺突が失敗した直後、サーベルを握った右腕が、ザ・パーフェクトの両腕に捕まった。

そのままぐい、と引つ張られて前のめりに転倒する。

機体の軽量化がこんな場面でも足を引つ張る。

暁 激雷のバックパックスが力任せに千切られる音を聞きながら、オレは歯ぎしりした。

まだ一撃も与えられていないことにやきもきした。

『よっこらせ、と』

背面に衝撃が来た。

ザ・パーフェクトが馬乗りになっているのだ。

大柄な右腕がアカツキの右肩を、左腕が二の腕の付け根を持つ。

『アカツキは二の腕と肩の間が動かないキットじゃ。このままでは、利き腕が碎けるぞ』
「そんな悠長な解説をしている暇があるのか！」

アカツキの頭部は額を地面に擦り付けている体制から180度回転。

バルカン砲をセンサーアイめがけて斉射する。

いかに完成度が高いガンプラであっても急所であるはずの部位は、あっさりと弾丸をはじいた。

『すまん。そこはクリアパーツを重ね貼りして対策済みじゃ。バルカン程度じゃ割れやせんよ』

「……………」

『さて、ここからアカツキの敗因について二時間ほど講義を聞く余裕はあるかな？』

「……………オレの、負けだ」

吐き気をこらえながら、人生ではじめてその言葉を口にする。

暁 激雷の視界に、こちらを見下ろすザ・パーフェクトの姿が映る。

その右腕の二連装バズーカが背中に押し付けられ、一発だけ放たれた。

『シヨウシヤ ナガイ・トウコ』

無慈悲な電子音声とともに、現行システムよりもはつきりと結果が定められる。

オレは茫然と立ち尽くし、結果を理解しようと努めていた。

祖父の愛機をどうにか乗りこなしてなお、傷一つつけることすら叶わなかった。

オザワから教わった話では『アーキタイプ』に降伏の音声認識は備わっていない。

つまりあの回りくどい降伏勧告は、オレの心を折るためにわざわざやったことになる。

バトルでも負け、感情でも負けた。

まさしく完全敗北であった。

「どうじゃ。ワシの腕前は」

ザ・パーフェクトを懐にしまいながら、ナガイが意地悪く話しかけてくる。

オレは言葉が出ない。

「レオは、ワシに居合斬りを使わせたぞ」

「！」

その言葉に息を詰まらせる。

オレは、衰えたと自嘲するナガイに技一つ出させなかつた。

祖父は、おそらく全盛期の彼女に得意技を行使するくらいには食らいついていた。

胸にドス黒い絶望が渦巻く。

あれほどバカにしていた祖父にすら及ばないとは、オレの実力も所詮その程度だったということなのか。

そのオレの顔がよほどおかしかったのか、ナガイは口元に手をあてて、くつくつと笑った。

「少なくとも、力関係ははつきりしたじやろう？」

「……ああ」

「では、これからはもう少し奥ゆかしさを持つことじゃな。おぬしはあの時のレオよりも若い。まだまだこれからじゃよ」

「よく言う。若者の前途なんて幻想だぞ」

「どうだかな。今回は慣れないレオのガンプラを使ったからこうなったが、おぬしにはピッタリな機体を作ってくれるビルダーがいるじゃないか」

「ユージか」

「その通り。……一応聞くが、あやつのはどう思っている？」

ナガイはよりにもよって、何日か前の祖父と似たような質問をオレに投げかけた。癩に障るが同世代の友人同士だったのなら、似たようなことが気になるのだろう。

しょうがない老人たちだ。

オレは率直な答えを返す。

「日本で得た協力者だ。それ以上でもそれ以下でもない」

「ふむ。そうか……」

ナガイは顎に手を当てて思索しているようなしぐさをしたが、何を考えているかまではオレには汲み取れなかった。

万が一わかったところで、どうせロクでもないことだろう。

「まあいい。帰るぞ、アレックス。ユージとオザワさんを待たせている」

「……ああ」

オレはナガイの意味ありげな間を心にとめ、最大限警戒しておくことにした。

Side Y u j i

合宿三日目。

ボクらは虫獲りに向かうため、ヤマザキさんが知る穴場に向かっていた。

「だからパテが重すぎてエトワールの腕がもたないですよ……」

「レイザーの腕部というのは譲れんのか？ 同じAGE系でもせめてノーマルの方が」

「あの腕のラインが好きなんですよ」

「そうか……ではまず、武器の軽量化から検討して」

「おい。いつまでガンブラの話をしているんだ」

ボクと師匠が話し込む隣で、アレックスが苛立たし気に虫網を振り回す。

最初は面倒くさがっていた彼だが、問答無用で同行させられていた。

「だってアレックスが言ったんじゃないか。キミ用に、エトワールの調整を急げって」

「だからといって四六時中ガンブラの話題をされたら気も滅入る。オレはビルダーの話
題に興味がないからな」

アレックスは合宿で製作技法を学ぶ気はないらしい。

ここに来てからも行っている模擬戦で、様々な戦法を自力で考案、ボクを実験台に
していた。

「昨日の晩に、この辺りへバナナをぶらさげておいたんですよ」

ヤマザキさんが立ち止まったのは、一本の木の前だった。

ボクらの頭の高さぐらいに、ネットに入れられたバナナが下がっている。

残念ながら、カブトムシやクワガタといった花形の昆虫が集まっている様子はなかった。

虫には詳しくはないけれど、そのくらいの判別はついた。

「うむ。ここにはいないようじゃな。次のスポットへ移動しよう」

師匠も落胆のため息をつく一方で、アレックスが木の根元まで大股で歩み寄る。

ボクは非常に嫌な予感がした。

「ユージ、オレは昆虫採集なぞしたことはないが……」

「うん」

「こうすればいいと聞いたぞ」

ボクが止めるよりも先に、アレックスが幹めがけてスニーカーで蹴りを入れた。

ズン、と鈍い音がしたかと思うと、ボクらの頭上から葉っぱやら虫やらが一気に落ちてきた。

その中には確かにクワガタが混じっていて、ヤマザキさんは喜々として拾い上げていた。

師匠が見たことないスピードでアレックスの頭をはたく。

「いてっ」

「ハチの巢なんかがあったらどうする気だったんじや！」

「逃げればいいだろう。逃げれば」

「おぬしは自然をなめてかかりすぎじや、マヌケ！」

ともすれば命にかかわったからか、師匠は怒り心頭だった。

アレックスは茶髪を抑えながら不満げにボクの背後を見ている。

ボクはここまで無言で佇んでいたその人物に声をかけた。

「アレックスにあの方法教えたの、オザワさんですね」

「……私が幼い頃はそうして……いえ、申し訳ございません」

オザワさんはひどく気まずそうに頭を下げた。

Side ALEX

合宿は五日目を迎えた。

ユージは相変わらずエトワールの改良に悪戦苦闘している。

バトル用のガンプラとしての高性能と、自分のこだわりが頭の中で延々とせめぎあっているようだ。

「そろそろ一度、脳を休めたらどうじや」

ナガイが自慢げに持ってきたのは、パステークだった。

日本語だと『スイカ』というらしい、ウリ科の果物だ。

ヤマザキというあの男がここへ来る途中に見かけた畑からわざわざもらってきたらしい。

大きく半円に切ったものをユージと縁側に座って食べたが、あいつはオレがパステークにかぶりついている様子を見てなぜか目を丸くした。

「え、アレックス、スイカを種ごと食べるの!？」

「言っていることの意味がわからん。まさか食ったものを吐き出すつもりか?」

「いや、その、日本では種は取り出すから……」

言葉通り、ユージは傍らに置いた小皿へ、律儀に種を出していた。

オレのところにも同じ皿が用意されていたが、皮の置き場だと思ってほとんど眼中になかった。

小さく切ったパステークをスプーンで食べていたオザワが、背後から補足を入れてくる。

「種は外皮が厚いため、身に比べれば消化しづらいものです。日本には食べ過ぎると胃の中で発芽するという迷信もあります」

「まさか、食堂の一人息子がそれを信じていたのか?」

「いや、父さんも母さんもそうやって食べていたから何となく……」

「日本人の食文化はよくわからんな」

もう一口かぶりつこうとすると、オレとユージの間にしわだらけの腕がぬつと突き出てきた。その手には白い粉末の入った小瓶が握られている。

ぎよつとして振り向くと、ナガイがいた。

「塩をかけると美味いぞ」

「……？」

これも聞いたことのない話だ。

まずい組み合わせを教えて、渋い顔をするオレを観ようとしているのではなからうか。

そんな疑念が脳裏をよぎる。

視線でユージに確認をとると、あいつも自信ありげにうなずいていた。

老婆の親切心よりまだ信用に足る反応だ。

「まずかったらユージのをもらうからな」

「ひんぐ」

ナガイの握った瓶をひったくり、二、三回ほどパステークに振りかける。

おそるおそる、一口かじった。

ユージとナガイ、オザワが左右からオレの反応をうかがっているのがわかる。

こんな注目されながら果物にありついたことなどない。

「どうじゃ?」

「……………うまい」

案外、日本の食文化は侮れなかった。

ユージはオレの反応に満足したのか、自分のものにも塩を振りかけながら食べ始めた。

もしかもしやと音を立てて咀嚼し、呑み込んでからまた唐突にガンプラの話題を切り出してくる。

「……それでさ、関節がどうしても耐えきれないから、内部に手を入れるべきか悩んでい
るんだけど」

こうなるとこいつは止まらないので、観念してオレも話を合わせる。

「エトワールのコンセプトがスタービルドストライクを参考に行っているなら、内部フ
レームも流用すればいいだろう」

「フレームそのものの複製はできるけど、AGE-1むけに再設計をするには時間がか
かるよ。それにあの機構は整備性が悪化する。砕け散ったプラスチックの破片が隙間
に入り込んで、思わぬ誤動作を引き起こすこともあるんだ」

「スケッチブックに描いてあったアイデアはどうした」

「二つだけ合宿中に開発の用途が立って試行錯誤しているんだけど、足は引つ張つても解決法にはならなくて……あれ？ボク、キミにスケッチブック見せたことあったけ？」

「どこかで見たんだろう」

オレはとぼけたが、そこでふと、自分の発言に違和感を持った。

胸の奥にひつかかる小さなしこりのような感覚である。

なぜオレは今、こいつのスケッチブックを見たことを素直に白状しなかったのか。

その疑問の答えは簡単にはじき出される。

ユージを怒らせたくなかった、からだ。

ビルダーにとつては秘中の秘を無断で覗いたことで、逆鱗に触れる可能性を恐れたからだ。

そんなことを考えたことなど、今まで一度もなかったというのに。

「アレックス？スイカ食べないの？」

ユージの声は右から左へ抜けていく。

無意識に発露した自分の意識の変化に、戸惑い、混乱していてそれどころではなかった。

オレはなぜ、ユージの感情に配慮したのだろう。

Side Yuji

合宿がはじまってから六日が経った。

もう日はとつぷりと暮れて、縁側からは月が見える。

広々とした畳敷きの居間に寝転んで、ボクは日記を書いていた。

夏休みの思い出を英文にして提出するという、中学校からの宿題をこなしているの
ある。

「ユウジさま。お風呂が空きましたので、どうぞ」

すつかり耳になじんだ声に振り返る。

いつの間にかすぐ近くに、浴衣姿のオザワさんが立っていた。

「アレックスは……」

「既に済ませておられます。残るはあなただけです」

「そうですか。もう少してキリがいいところまで済むので、それから入ります」

アレックスの入浴はいつも時間がかかっている。

体質で掌にお湯を受けられないので、濡らして石鹸をつけたタオルで少しずつ拭くそ
うだ。

だから順番を譲ってあげようと思ったのだが、杞憂だったらしい。

オザワさんはしずしずとボクの隣を通り過ぎて縁側に腰かける。

浴衣は師匠の若い頃のを借りているそうだけど、よく似合っている。

「……日記ですか」

こちらに背を向けたまま彼女は尋ねてきた。

「はい。今日行った川釣りの話を書こうと思って」

「そうですか」

「釣った一匹目を見たときのアレックスの『食えるのか?』という質問がおかしくて」

ちなみに釣った魚はきちんと処理して今日のお昼ご飯となった。

オザワさんも結構楽しそうだった記憶がある。

最初は口数が少なく接しづらい人のイメージだったオザワさんだが、この合宿を通じてかなり距離は縮んだように思う。

第七回世界大会予選ピリオドの、ウイングガンダムフェニーチェ対ビルドストライクガンダムの一戦について二時間も付き合ってくれるあたり、絶対にいい人だという確信すらある。

「……ユウジさまの在り方には常々感心しています」

唐突にオザワさんがそんなことをつぶやいた。

ボクの在り方という言葉の意味は図りかねるが、たぶん褒められているのだろう。

彼女はこちらに対して背を向けたまま続けた。

「あの自分勝手でどうしようもないアレックス様と一週間共同生活を行って、衝突ひと

つ起こさないなんてことは前代未聞です」

「あ、オザワさんでもそう思うんですね。どうしようもないって」

ちよつと意外に思った。

てつきりボクのおらずかり知らないところで、ひっそりとした絆が結ばれていて、わがままを許容できているものだと考えていた。

するとオザワさんは重苦しいものを振り払うかのように首を左右に振った。

「私は……諦めていただけです。あの方の傍若無人は矯正できないものだ、と。だからこそ、己を押し殺して仕えることを選んだのですが、あなたはそうではない」

そしてボクの方へ振り返って、黒く潤んだ瞳で見つめてきた。

泣きはらした子供のような、すがるような目である。

ただならぬ気配を感じ取って、ボクは開いていたノートを閉じ、膝をそろえて座りなおした。

オザワさんと正面から向かい合う。

「正直におっしゃってください。あなたは、アレックス・メルフォールをどう思われているのです」

「……」

ほんの少しだけ、視線を横へ反らす。

この問いに嘘はつけない。

口から吐き出した答えは未来永劫、ボク自身に突き刺さるだろう。

それをしつかりと自覚した上で、ボクは断言した。

「アレックスは大事な友だちです」

「……なぜ、そう言い切れるのです。まだ会って十日経つかどうかの相手を」

「うーん、それを尋ねられると難しいんですよ。確かにアレックスってわがままで、人の言うことを聞かなくて、頭を抱えたくなくなるくらい対処に困るんですけど」

ボクは腕を組み、首をひねる。

誰でも友情を感じる理由なんて聞かれたら答えに詰まるだろう。

一度言葉を切って、ひと呼吸ついた。

思い返すのはこれまでのアレックスの姿だ。

はじめて会って、彼がおむすびをほおばっていたとき。

ボクのポリシーを黙って聞いてくれたとき。

そして合宿に来てから、虫獲り、魚釣り、ガンプラの調整についての話し合いをしたときの彼の横顔は、どれも記憶に焼き付いている。

「でもボクは彼の自信满满的な、時々ふつとかげる表情が好きなんです。ああいう顔をする人に悪い人はいませんよ。経験則です」

「そう、ですか……あまり参考になりませんね」

「ええ……」

何の参考になるかはともかく、ボクはオザワさんが期待するような回答はできなかつたらしい。

彼女は縁側から立ち上がると、深々と一礼した。

「不躰な質問を失礼しました。これからも、あの方をよろしくお願いします」

「ええ。ボクでよければ」

「それでは、私はナガイ警備部長に用がありますので」

そう言うとおザワさんは足早に居間から立ち去っていった。

部屋の北側の襖が閉まる音と、廊下を進んで小さくなっていく足音を確認してから、ボクは虚空へ向けて口を開いた。

ボクがオザワさんに見つめられたときから、ずっと隣の部屋で聞き耳を立てていた誰かさんに話しかける。

「もう少し人当たりをよくした方がいいんじゃない?」

「余計なお世話だ」

案の定、襖を隔てた西側の空間から、アレックスの声が返ってくる。

声音だけでひどく不機嫌であることが伝わってきた。

それがなんだかおかしくて、クスクスと笑いをこぼしてしまう。

「なんだ、さっきの問答は？随分なれなれしいじゃないか」

「ごめんね。ボクの勝手な思いこみだからさ。好きにさせてよ」

「……」

アレックスはまた口をつぐむ。

静かな夜だ。

師匠とヤマザキさんはどこへ行ったやら、今は庭の葉がさざめく音しか届かない。

「ねえ、アレックスはさ、ボクのことをどう思ってくれているの」

「……」

「ねえってば」

「ほんの気まぐれで、お前を切り捨てることはできる。その時に、お前はとうするつもり

だ」

「それは、キミに裏切られたときに考えるよ」

「……バカだな、お前は」

アレックスの気配は遠ざかっていった。

ボクは宿題を一か所に集めておくと、入浴するための準備をはじめた。

Side ALEX

合宿の最終日。

オレはユージと共にバトルルームへ呼び出された。

初日にナガイと一戦交えた骨董品のある別棟ではなく、合宿所の二階にある模擬戦のための部屋だ。

音を立てて階段をのぼりながら、オレはユージと他愛のない会話をする。

「そうなるアカツキのヤタノカガミつて、ビームを全部反射できることのメリットより、視認性が上がりすぎるデメリットの方が大きいとボクは思うんだ」

「確かに。少なくともガンプラバトルで積極的に金色にする意味はない」

「でしょ？だから塗料だけでビーム反射ができるなら是非とも作り方か、売っている場所を知りたくて……」

「オザワに聞いてみるか」

「そうだね」

そこで会話は打ち切られる。

バトルルームと廊下を仕切る扉の前に立ち、ユージがドアノブをひねった。

四畳半ほどの室内には無数のメモ書きやガラクタ、ガンプラのジャンクパーツが転がっていてごみ屋敷同然になっている。

これらも半世紀前の研究の痕跡だろう。

一週間で見慣れたが、はじめて見たときは流星にオレも目をむいた。

「……………む？」

部屋の中央には最小単位の1ヘクスサイズのバトルユニットが置かれているが、その向かいには先客がいた。

筋骨隆々とした、ボディビルダーのような体格の大男。

この合宿所管理人のヤマザキだった。

奴は右手を挙げて馴れ馴れしい挨拶をする。

「やあ。二人とも。昨日はよく眠れたかい？」

「貴様、ファイターだったのか」

ヤマザキは一瞬きよとんと呆けた顔をする、急に豪快な笑い声で部屋を震わせた。

あまりの大音声にユージが耳を塞いでいる。

「ははは。実はそうなんだよ。これでも腕には自信があつて、世界大会に出たこともある」

「せ、世界大会に!?!」

「関西ブロックの方にいたから、こつちじゃ大した知名度はないんだけどね」

ユージは仰天しているが、オレはまだ奴の言葉を信じていない。

この男はこれまでガンブラに精通している素振りは見せなかった。

オザワとユウジが世界大会の話題で盛り上がりつつあるときも、遠巻きに見ていただけの人間である。

過去の恥部ならいざしらず、功績ならば隠し立てする必要はあるまい。

「ワシが隠すように言ったんじゃよ。今日のためにな」

「師匠!？」

するとバトルシステムの陰から、ナガイがひよつこりと顔を出した。

もとより背が低いので、大柄なヤマザキに注目しているとなおさら目立たなくなる。

またしても人の心理を読んだかのような口ぶりに腹が立って、オレは老婆を睨みつけた。

「なんのつもりだ」

「最終日は二人の成長ぶりを確認しようと思つてな。ユウジは普段以上の時間をかけてガンプラに触れ、アレックスは模擬戦を重ねた。ここいらで世界の實力に触れてみるのも一興じゃろう」

「だからといって、隠す必要はないはずだ」

「ユウジの観察眼で見抜かれて、対策されたら意味がないではないか。いつでもバトルが事前にスケジュールリングされたものと思うな」

「詭弁だ」

「いやあ、大変だったよ。ガンプラの調整はみんなが寝静まった深夜で、塗料は手から念入りに落としたし、服はすぐに洗濯して二オイをつけないようにしたんだ」

ヤマザキはさも自分の苦労のように語るが、ナガイの入れ知恵だろう。

オレの体質さえ一発で見抜いた男の感覚を回避するなど、その場しのぎでどうこうなるものではない。

「さて、これから二人にはバトルをしてもらう訳じゃが……使う機体はアレックス、おぬしが決める。残った方をヤマザキが使い、対戦をする」

「は？」

ヤマザキが取り出して、筐体の上に置いたのはガデッサという砲撃型MSだった。

小さな角の生えた鬼のようなフェイス部分、球体状の両肩と、鳥のくちばしのようにとがった脚が特徴だ。

ただし左腕が兄弟機である近接格闘機、ガラツゾのものに交換されている。

機体は白と水色のツートンに塗り替えられていた。

「全距離対応に改修してある。粒子制御を得意とする太陽炉搭載型だから、はじめてでも乗りこなすのはたやすいだろう」

耳と目を疑った。

愛弟子に一週間かけて機体を改良させておいて、ここで梯子を外すとはどういう了見

なのか。

ようやく、初日にナガイが見せた思案顔を思い出す。

「あの時考えていたことはこれか」

「ヤマザキにはワシがアドバイスをしながら、おぬし向けに調整をさせた。初日のバトル、ユージとの模擬戦を経てクセは大体読み取れたからのう」

ナガイはオレの言葉など聞いてはいない。

ただ淡々と説明を行い、選択を迫っていた。

ユージのガンプラを使い続けるか、自分専用念入りにカスタマイズされた強力なガンプラを使うか。

とりあえず、目を輝かせてガデツサを検分する男の頭を小突く。

「いたっ」

「お前のエトワールも見せろ」

「うん」

ユージは素直にうなずくと、ホルスターケースからエトワールともう一つ、見覚えのないものを取り出した。

その場にいる全員の視線が未知の新装備へ集中する。

一見してそれはプラモ用のポリパテの塊だった。

かろうじて剣のような形をしているが、使ったとしても鈍器として使うが精々だろう。

門外漢のオレでもわかるほどの失敗作に対して、ヤマザキが失笑を漏らしたのをオレは聞き逃さなかった。

先ほどのような無駄に大きな哄笑ではない。無意識に人を見下し、優越感に浸ったときに漏れ出す醜い笑いだった。

「お前自身からして、今のエトワールはどうだ」

「まだまだ詰めが甘いね。あのガデッサの方が絶対に戦闘能力は高い。」

エトワールの生みの親はそう断言する。

ナガイのアドバイスを受けて、世界大会級のビルダーが製作したという誕生経緯が同じならば、完成度による性能補正はほぼ同等だろう。

AGEEーには固定武装がないため武装の選択肢はガデッサの方が多い。

近接格闘能力だけに絞っても、鈍器ひとつの前者よりクローで安定した切断能力を得ている後者が安定さで優る。

地形対応性も太陽炉搭載機の方が広いのは確実だ。

なにより優れた観察眼をもつビルダーが、自分の機体より優秀だと断言する。

選ぶべきガンブラは一機しかないようなものであった。

ナガイがオレに問う。

「決まったかの？」

「ああ。考える時間すら無駄だった」

Side Yuji

「オレはAGEEー1を使う」

アレックスはとんでもないことを口にした。

ボクだけではなく、ヤマザキさんも啞然としている。

師匠だけが期待どおりとでもいった感じの、柔らかな微笑みを浮かべていた。

ボクはアレックスに詰め寄る。

「ボクの話聞いてた!? エトワールよりもヤマザキさんのガンプラの方が戦闘能力は高いんだよ!」

「それがどうした」

「だから、その……」

「お前はオレがあのがテッサを選んだとして、ヤマザキにエトワールを使わせるのか?」
できない。

ヤマザキさんは凄腕のビルダーで、しかも世界大会レベルのファイターだという。

師匠のお墨付きならばなおさら、エトワールを託しても大丈夫だろうと思えた。

ところがいざアレックスに言われてみると、心のどこかでそれを嫌がっている自分がいる。

彼以外の人間に使ってほしくないというわがままが芽生えていた。

「理由を聞きたいな。なぜ私の『ガデツ』ではなく、その子のAGE―Iを選んだのか」
ヤマザキさんがにこやかに言う。

だが、その唇のはしが引き攣っていることからして、不審と不満が渦巻いていることは見え見えだ。

それに対してアレックスの自信に満ちた不適な笑みが戻ってくる。

彼の右手のグローブから、薄氷の透明さをたたえた指が一本、ぴんと立てられた。

「まず慣らし運転もしていないのに、オレのために完璧な調整をしたとぬかす、その思い上がりが気に食わん」

「なっ!?!」

「太陽炉搭載機体は、GN粒子の自重軽減効果をも再現するために、操縦系の感度は他のガンプラと大きく異なる。オレの感覚なぞ一ミリも考えていない、傲慢な設計だ」

「し、しかし、キミなら乗りこなせるだろう!」

「貴様は胃に入って消化できるからといって、残飯を皿にぶちまけて食わせるか? ファイターへの依存と信頼ではベクトルが違うと知れ」

「ぐ、ぐ……」

「それに何よりも」

アレックスは唐突に言葉を切り、ボクを見た。

灰色の瞳が、ふつと白い瞼の下に隠れる。

薄い唇は引き結ばれて、軽く歯がたてられていた。まるで何かを逡巡、迷っているような顔つきだ。

そして彼は、意を決したように息を細く吐き出すと、ヤマザキさんに告げた。

「それに、貴様はオレの『友』のガンブラを笑った。ただそれだけで、貴様を敵とみなす幾万の理由にも勝る」

「アレックス……！」

「ははは！とうとう言いおったわ！げっほげほ！」

『友』と、たしかにアレックスはボクをそう呼んだ。

昨晩ははぐらかされた答えを、彼ははつきりと口にしていたのだ。

アレックスの表情は真剣そのもので、冗談や酔狂、皮肉がこもっていないことを示していた。

思わずボクは声が上がらず、師匠は気管支が壊れたかと錯覚するほどの大笑いである。

そしてヤマザキさんはいつと、こめかみに青筋を立てていた。

ビルダーとしての自信と尊厳を真正面から打ち砕かれたのだ。当然の反応だろう。

「いいだろう！ならばキミの友だちの、その出来損ないのガンブラで勝負するがいいさ！」

「その出来損ないのプライドがなければ、世界に名を刻めたるうに

豹変するヤマザキさんと、さらに怒りをあおるアレックス。

二人のはざまで、バトルシステムが厳かに起動した。

『Beginning Playvsky particle dispersal』

『Field 1 Space』

『Please set your Gunpla』

ボクはエトワールの手に武器を握らせる。

パテの重量で手首から先に負担がかかるけれど、これはどんなガンブラでも強化しきれない急所の一つだ。

しばらくは、我慢して使ってもらえない。

エトワールをカタパルトにセットすると、ボクは一步下がってアレックスの斜め後ろに立った。

セコンド用のスペースが形成され、彼はセルリアンブルーの隔壁の向こうへ消える。

すぐに常時連絡用のモニターに映るが、実際よりあまりに小さいシルエツトだ。

「いこう、アレックス」

『ああ』

「……ツガミ・ユウジ！」

「アレックス・メルフォール」

『『ガンダムAGEー1 エトワール』！』

「『Sally Forth!!』」

正面の視界が急速に焦点へ向かって押し出され、あつという間に視界一杯の星の海が広がった。

エトワールは武器を両手で握りなおして、腕への負担を軽減するようにした。

「アレックス」

『なんだ』

「ありがとう」

『礼はいい。お前のガンプラの色は気に入っている』

『そうじゃなくて。ボクのことをはじめて、友だちと呼んでくれた』

『……』

アレックスはしばし沈黙する。

あの宣言は、ちよつと気恥ずかしかつたのかもしれない。

『正直、自分でも妙な感覚だ。実はナガイに提案を受けた瞬間、お前のエトワールを使うと決まっていたように思う』

「そうなの？」

『うまく言語化できません。人と利害のかかわらない関係などはじめて築いたからな』
『でも家族はいるでしょ？』

『……父親は早くに死んで、母親は蒸発した。後はろくでもないジジイと……きょうだいがいるが、あれを肉親というか、そもそも他人のように感じたことがない』

「きょうだい、かあ。はじめて聞いたよ」

『話はここまでだ。コロニーの外壁に着地する』

展開された仮想の宇宙空間には、スペース・コロニーが浮遊している。

内部に入ってもいいが、ヤマザキさんは『ガデツ』と呼んでいたあのガンプラにGNメガランチャーを持たせていた。

袋のネズミと取りこめられて、ハチの巣にされるかもしれない。

エトワールは外壁に膝をついた。

「GN粒子の効果で、レーザーは期待できない。先に武器を起動させておこう」
『起動？このパテまみれのメイスをか？』

「メイスじゃないんだ。まあ見えてよ」

ボクはコンソールのキーボードを叩く。AGE-1の動力経路を武器へ接続し、認証パスを入力した。

するとAGE-1が握りしめていたものの、パテで覆われた部分が微振動をはじめ

る。細かい破片がパラパラと崩れ落ち、本来の姿が少しずつ顔を出す。

だがそこへ、熱源反応の急速接近警報が鳴り響いた。

ボクは星海の果てから、オレンジ色をしたエネルギーの塊が迫っているのを目撃した。

GNメガランチャーだ。このままではまずい。

「アレックス……この武器でアレを防いで！」

『くそっ、吞まれてもしらんぞー！』

AGE-1は砲火に対して垂直になるように武装を構えた。

間髪入れずに、とっておきのシステムの一つを起動する。

衝撃と閃光がエトワールを襲った。

こちらを一片たりとも残しはしないと振るわれるビームの嵐は、武器の『刃』にすべて吸われていった。

ただの粒子ひとかけからも残さず、ガンダムの糧になるのである。

パワーの衝突によるノイズの合間に、アレックスの声が聞こえる。

『これは……まさか』

「そう、そのまさかだよ」

十秒ほどの照射ののち、攻撃は止んだ。

AGE-1は纏わりつく重圧を跳ね除けるように、黒鉄を横へ払う。

そのマニピレーターにあるのは最早不格好なパテの塊ではない。

一振りの対艦クラス大型剣だった。

AGE-3の大口徑主砲『シグマシスライフル』を芯に、レイザーウエアの腕部ブレードを加工した刃を装着。銀を縁取った斬撃用の先端部は、露で濡れたかのごとく輝いている。

ライフルそのものも、握りやすいように銃身の一部をくりぬいてグリップとして改造した。

これこそAGE-1エトワール専用設計した、とっておきの一振り。

スタービルドストライクの独自機能を、模倣・投影した至高の聖剣だ。

「名づけて『ビルドカリバー』！」

『ダサイ』

「そんなあ!?!」

丸一日考えたネーミングを切って捨てられて、ボクは悲嘆にくれた。

『とういか、なぜパテで覆った』

「え、起動するときにかつこいいからだけど」

『……それだけのために、腕部の耐久性に苦勞していたのか?』

「うん。普通にカリバーを振るう分には従来通りで大丈夫だよ」

『正気か?』

「本気だよ?」

とうとうアレックスはなぜか頭を抱えて唸りはじめてしまった。

さっきのアブソープシステムも、色々工夫をこらして名前も付けなおしたのだけけれど、言ったら怒られるだろうか。

そうこうしていると、コロニーの外壁にガデツゾが降り立った。

メガランチャーは無効化されると踏んだのか、再度の発射はしてこなかった。

『……驚いたな。まさか、あのシステムを使うとは』

『『ウォーゼス・アブソープ』っていう名前なんですけど、ヤマザキさんはどう思います?』

「は?……別に、悪くないんじゃないか?」

「そ、そうですね!ありがとうございます!」

ほっと胸をなでおろす。

ここで追い打ちをかけられていたら、ボクは一足先に撃沈していた。
アレックスがヤマザキさんを挑発する。

『貴様が小馬鹿にしたガンプラに、肝をつぶされる気分はどうだ』

「最悪だね。さつきから、頭に血が上って仕方がない！」

そう言うや否や、ガデツゾは左腕のGNビームクローを扇状に展開し、突進してきた。
エトワールもビルドカリバーを正中に構えて迎えうつ。

実体とビームの刃が交錯し、まばゆい光が互いの近接レンジ一帯を白色に染めた。
完成度、パワーレシオの拮抗するガンプラ同士による、本気の鏖迫り合いだ。

エトワールが強引に踏み込む。

下半身がグランサの追加装甲で重いので、ガデツゾより前に出やすいのだ。

さらには、ビルドカリバーの表面がクローを構成する粒子を呑み込み始めた。

『サーベルも吸うのか!?!』

ヤマザキさんが瞠目しているのが、接触回線モニター越しにわかる。

彼の驚愕は無理もない。

一般的に知られているアブソーブシステムは、ビームを専用の孔で吸収していて、接触するだけで持っていかれるなんて現象はありえなかったからである。

だが生憎、ボクのビルドカリバーに搭載された『ウォーゼス・アブソープ』は違った。この機能を再現するために『ガンダムAGE』世界の技術を流用して、イチから再解釈している、結果だけ同じ別物なのだ。

「ウォーゼスというのは、ゲーム作品で使用された幻のウェア。ミラーシールドというビームの吸収・蓄積が得意な盾を持っているんです」

『その素材を、ガンプラで再現したのか』

「延々と紙やすりでパーツを磨いてヒケを完全に無くしてから、メタリックシルバーの塗料を慎重に吹き付けたら、案外うまくいきました。どっちかというと、GPベースの設定が大変でしたよ」

『なんてこった。さっきの感想は訂正しなければならぬな』

ガデツゾの尖った脚部がカリバーをはじく。刀身に歪みも瑕もできないが、距離を取られてしまった。

『ツガミ・ユウジくん。それに、アレックス・メルフォールくん。キミたちは間違いなく、ナガイさんの弟子に値するコンビだ！』

ガデツゾは脚部をコロニー外壁に突き立て、自らを固定する。

GNメガランチャーの三叉に分かたれた銃口をこちらへ向けた。そして機体を紅に輝かせたかと思うと、さっきとはけた違いの量の粒子を銃口に収束させていく。

『トランザムを使った、渾身の一射だ。いくらアブソープとはいえ、許容限界はあるだろう！』

ヤマザキさんの予想は正解だ。

いかに手段を変えた亜種アブソープとはいえ、本家と同じで吸収できる量は限られている。

あの威力のビームを浴び続ければ、受け皿であるエトワールが耐えきれずに大破してしまうだろう。

対処法を必死に考えていると、アレックスが言った。

「ユージ、アブソープがあるなら、アレもあると考えていいんだな！」

「……もちろん！ビルドカリバーの先端を、相手に向けて！」

ボクは彼がこれから何を試みるつもりかが、すぐにわかった。

エトワールはビルドカリバーを弧の軌道で振ると、その切っ先でガデツゾを指した。

カリバーの先端が上下に割れると中央からシグマスライフルの銃口が露出する。

そこへ先ほど吸収した粒子が収束を開始した。

『『フォトン・デイスチャージ』、70パーセント出力で開始』

フォトン・リング・レイという技術がある。

『ガンダムAGE』において、歴代主人公の母艦であるディーヴァには、強力な攻城砲

『フォトンブラスタークャノン』が載せられていた。

その威力をさらに戦略級まで引き上げるのが『フォトン・リング・レイ』だが、これは、空間に用意したゲートを経由して、通過したビームを増幅するという過程を経る。

つまりスタービルドストライクガンダムの第二の機構『デイスチャージ』と仕組みがよく似ていて、現象を再現するにはうってつけであった。

「シグマシスライフルなら、フォトンブラスタークャノンと威力は同等で申し分ない！」
『勝負！』

「撃て、アレックス！」

GNメガランチャーとビルドカリバーが、同時に火を噴く。

かたやオレンジの、かたや淡い水色のビームは中間で正面激突し、絡み合い、混ざり合った。

余波によってコロニーの外壁が剥がれ、足場に亀裂が入る。

エトワールとガデツゾはにらみ合い、どちらも一步も退かない。

核を炸裂させた方がマシと思えるまでのエネルギーが乱舞し、そして、勝者の光線が宙域を貫いた。

『BATTLE END』

戦いは終わる。

筐体に無傷で立っていたのはAGEEー1だった。

巨大なビルドカリバーは重力のくびきを受けて、ぐつたりと地面へと垂れ下がっていた。

ボクらは世界大会出場ファイターに勝ったのだ。

「やったね、アレックス」

「ああ。正面からの火力制圧とは、実にオレ好みの勝ち方だった」

思わずボクはアレックスに駆け寄り、その首元に抱きつく。

アレックスはたやすくボクの体重を受け止め、やんわりと身体から遠ざけた。

師匠はヤマザキさんの肩を優しく叩き、彼自身はびつしよりと汗をかいたまま、晴れやかな笑顔を浮かべていた。

「さすがオレの友だ」

「いやいや。ボクの友だちが、強かったからね」

師匠に言われて、コンビを結成してからおおよそ三週間。

ボクとアレックスは、はじめて笑いあった。

S i d e A L E X

「じゃあね。アレックス。また明日」

「ああ」

合宿を終え、ツガミ食堂の前でしきりに手を振るユージに、オレは苦笑を返した。車のウインドウが閉まると、バックミラーに映る姿はみるみる小さくなっていく。やがて何も見えなくなった後も、オレは頰杖について、さしたる興味もない外の景色を漫然と眺めていた。

オザワはハンドドルを握りながら、背中越しに感想を求めてきた。

「この一週間はいかがでしたか」

「収穫は大きかった。ユージが作り上げたあの剣は、基礎技術は他に由来していても『神器』への認定に値するだろうな」

「会長もお喜びでしょう」

「ああ。忌々しいが、寿命が延びるかもしれないな」

苦虫を噛み潰した気分、オレは隣の席へチラリと目をやった。

合宿へ向かう道のりではなんて事のなかった座席が、友のいない空白へと変わって見える。

この寂寞こそ、ジジイが語ったものだとかわかってしまった。生まれや育ちに関係なく、他でもないオレとユージだけが培った経験と友情。人間性。

祖父がガンプラバトルに求め、メルフォール一族の理想に求めた要素でさえなければ、吐き気を催さずに済んだのだろう。

「ヤキが回つたな」

オザワにすら聞こえない程度の声でオレは自嘲する。

脳裏に、ユージの間の抜けた笑顔がはしって、淀んだ泥のような不快感から少しだけ
拗り上げてくれた。

そんな自分の思考の甘さが、なによりも笑えた。

PC—03 「番外編3 すれ違った喪失」

Side Alex

「ユージ、お前『桃井アイ』って知っているか？」

「へ？」

「ほら、ガン普拉バトルの配信をしているとかいう。そこそこの知れた奴だと思っただけだ」

「じ、実はその辺あんまり詳しくなくて……」

「そうか」

親友は何故か申し訳なさそうに頭を掻くが、オレは別段、その答えに失望はしなかった。

ガン普拉バトルはアジア圏のみならず、北米、ヨーロッパまで普及している。

その競技を配信している人間など、それこそ星の数ほどいるし、有名どころに絞ったとしてもユージがそれを必ず見ているとは限らない。

「でも珍しいね。アレックスがそんなこと聞くなんて」

「お前の顔を見ていて、そういえばそんな日本人がいたな、と思い出しただけだ」

「ボクに似てるの?」

「1ミリも似ていない。ただ、その女も『ガンダムAGE』のガンプラを使っている……」

「詳しく〜!」

予想通りというべきか、親友は食いついた。

その単純さに内心呆れながら、オレは少しだけ思い出話をしてやることにした。

「確かめれば、オレがユージと出会う1年ほど前のことだ」

アメリカで、PPSE主催の社交パーティーが開催されていたことがあった。

オレの実家はガンプラバトルの海外展開に手を貸している、PPSEの協賛企業の一つであるため当然そのパーティーに呼ばれていた。

金ばかりかかった会場でオレはオザワと暇を持て余していたところ、そこに愛想よく話しかけてくる男がいた。

その男は、祖父と多少の親交があったらしく、オレの顔を見るなり、なれなれしく自分の娘を紹介してきた。

それはちやうど、自慢の商品をアピールするセールスマンのようであった。

「はじめまして」

その女は、人形のように顔色一つ変えず、流れるような所作でお辞儀をしてみせた。

上流社会で育てられたことがよくわかる振舞ではあるものの、逆に言えばステレオタ

イブの『お嬢様』といった感じで、その時はそれ以上オレの興味を惹くことはなかった。「その後、オレはパーティーを抜け出して、会場の中にある筐体でバトルをしていたんだが」

「え、そんなところにバトルシステムが置いてあったの？」

「オレのような『家の事情でしぶしぶついてきた良家の子ども』への、PPSEの配慮だったんだろうさ」

そこでは、動きづらい礼服から普段着に着替えた、オレと同世代くらいの少年少女がバトルに興じていた。

よほど鬱憤がたまっていたのか、あるいは名家の子どもというのは傲慢になりやすいのか、どいつもこいつもいがみ合いながら戦っていた。その喧噪の中に、オレも混じることにした。

「アレックスのことだから、負けなしでしょ？」

「当たり前だろ」

4、5戦ほどこなした辺りだっただろうか。

「ねえ、あたしとガンプラバトルしない？」

そう声をかけてくる女がいた。Tシャツにショートパンツ、長い髪を大きなシュシュでくくった勝気そうな女だった。声をかけてくるだけで動作がうるさく、桃色のリスト

バンドが視界をひらひらして煩わしかった。

「きみ、ガンプラバトル強かったんだね！あたしも、けっこう自信あるんだ！」

「オレはお前みたいなのは知らんが」

「ひどい！さつき会って挨拶したじゃん?」

女はショックを受けたように大げさに俯いてみせたが、オレには覚えがなかった。

挨拶をした、という話から記憶を探って、ようやく思い当たった。

「あの場にユージがいたら、すぐに気づいただろう」

「さつきの女の子かあ。本当はすごく元気な子だったんだね」

「そうだ。そいつは自分を『桃井アイ』と名乗っていた。さつき聞いた父親の苗字とは

違ったが、理由に興味はなかった」

奴がウエストポーチから取り出したのは、白い花の台座にたたずむ、曲線をメインと

したガンプラだった。

今のオレたちが使っているガンダムには、もっとも縁深いモビルスーツの一体。

「ファルシア！うわあ、いいなあ。性能や操縦性だけならフオーンファルシアの方が上

なのに、わざわざユリンのファルシアをチョイスしているのがいいね！デザインが好き

なのかな」

「……そこまでオレは知らん」

ただ、言われてみれば、外からの思惟に操られるファルシアの在り方は、父親の望む令嬢として振舞うアイツには似合いの機体だったのかもしれない。

『Beginning Plavsky Particle dispersal』

『Field 5 《City》』

『Please set your Gunpla』

オレがその時に使っていた機体は、レンタルの『ストライクフリーダムガンダム』だった。

『ムラサメ』で開発中の新型のガンプラが、祖父の使っていたアカツキの発展型であったため、構造の似ている機体での予行演習を兼ねていた。

『Battle Start』

『アレックス・メルフォール 『ストライクフリーダム』 Sally Forth!』

オレの『ストライクフリーダム』は戦場に定められた市街地へと降り立った。

会敵する前に、スーパードラグーンを全て放出すると、それを飛ばすことなく、コンクリートで固められた地面へと突き刺していく。

フリーダムを中心に、ドラグーンが円陣を組むように突き立った。

『ストライクフリーダム』のスーパードラグーンは地上では使用できない。作りこんだガンプラであれば、その原典の呪縛から逃れることもできるが、今回は貸与されたHG

の素組であり、それは望めない。

「来るか」

「来たよ！」

ファルシアは意気揚々と、花卉を模したファルシアビットを放出、爆撃じみたオールレンジ攻撃を仕掛けてきた。

それを二丁のビームライフルで迎撃する。ビットはこちらのビームを回避し、あるいは自らが放つ黄色のビームで相殺しながら距離を詰めてくる。

「いい腕だ」

ここまでの精度だと、もはや本体以外に5体のビットMSが追隨しているに等しい。

オレなりに称賛したつもりだが、相手はお気に召さなかったらしい。

「ちよつとは感情をこめて褒めてよね！」

その言葉と同時に、ストライクフリーダムの子ライフルが撃ち抜かれる。

オレはそれが誘爆する前に放り捨てる、足下のスーパードラグーンを蹴り上げて、マニピュレーターでキャッチ。

それを新たなビームライフル代わりに、ビット1基を撃墜した。

ファルシアは負けじとドラグーンも破壊しにかかるが、狙いがつけられる寸前で、オレがドラグーンを放り捨てるのが早かった。

ほんのわずかだが、ビットが戸惑う。

今度は遠隔操作で、別のスパーードラグーンがフリーダム両手に収まり、それをブーメランのように投擲することで、ビットを潰した。

「やるじゃない！」

「貴様こそ、これだけやって3基残しているとは、少しは他のファイターよりできるらしいな」

「うーん、やつぱり上から目線！」

ファルシアは背面から実体剣『ファルシアソード』を抜き放ち、フリーダムが抜いたビームサーベルへと叩きつける。

作りこまれたガンブラと素組みでは出力に絶望的な開きがあり、ストライクフリーダムの足が地面へとめり込む。

接触回線で、アイという女は語りかけてきた。

「ねえ、きみ、闘技場に興味ない？」

「なに？」

「さっきのドラグーンの使い方といい、きみなら華のある戦い方ができる。それを活かせる、もっと楽しい場所が日本にあるんだけど」

「……くだらん」

至近距離で胸部のカリドウスビーム砲を放つが、ファルシアはひらりと身をかわす。

「どうして？ あたしみたいなファイターと戦うの好きでしょ？」

「お前は確かに他のファイターより強い。感心はしている」

「だったら」

「だがそれでも、貴様程度がトップなら面白くもなんともない」

「……もう！」

ビットがストライクフリーダムとファルシアの間へと立ちふさがり、ビームの壁を作って迫る。

オレはフリーダムのビームシールドを両腕とも展開すると、それで上半身をボクサーのようにブロックしながら突撃し、振り払った。

ビームの強烈な閃光でモニターが焼け付き、ノイズが奔る。

ファルシアソードがノイズの向こうから刃先を煌めかせて、コックピットへと迫る。ストライクフリーダムの胴体を、黒い剣が貫いた。

「獲った！」

「そうかな？」

果たして、青い光の翼をはためかせ、ストライクフリーダムはファルシアの背後に回り込んでいた。それはヴォワチュール・リュミエールによる高速移動。

「デステイニーガンダムのような残像は、ストライクフリーダムには発生させられない。」

それでも、相手のモニターも異常をきたしているようなこの戦況なら、真事はできな

た。

追い詰められてなおファルシアは驚異的な反応速度で後方へ振り返っていた。

ビットの突撃よりも早く、フリーダムのビームサーベルが奔ろうとしたその時。

『Over the Time Limit』

「え？」

「……だろうな」

戦場は時間切れを迎えた。

「制限時間あったの？」

「なかった。おそらくはパーティーを終えた大人たちが、主催に子どもの遊びを終えさせたんだろう」

結局、オレはその女とファルシアを仕留め損ねた。

ギリギリまで食らいついていくタフネス、バイタリティというのは、令嬢らしからぬ見どころがあった。

向こうは納得はいいいなかったようだが、そういう事も往々にしてあるのがガンブ

ラバトルだ。

「今もどこぞで、オレのようなファイターを誘いにかけているのか、と気になったのさ」
「なるほどね……ねえ、アレックス」

「ん？」

一通り思い出話を聞いた親友は、ひとつの疑問を口にする。

「もしもそのアイさんが、ボクを観たらどうするかな」

それは、ビルダーに専念するといい、バトルを遠慮している普段のユージラしからぬ
問いかけた。なんてことはない純粋な興味だったのだろうが、そのちぐはぐさがお
かしくて、オレは笑いをこぼした。

「そうだな。お前が怒った時ならば、可能性はあるかもな」

Lost—2. 5 「ガンブラ☆ワールド」

1

明日野中学は文化祭の真つ最中であつた。華美な装飾で彩られた校門をくぐれば、そこより先は別次元の喧噪に包まれている。

校庭で開かれた模擬店からは、威勢のいい呼び込みが上がり、胃袋を刺激する香りが漂う。普段は殺風景な教室も、クラスや部活が念入りに準備した企画が展開され、老若男女でごった返している。

ただ一つ、最西端にぼつんと離れ小島のように位置する、ひとつの企画を除いては。

「いやあ、今日もここは……なんだっけ。アレが鳴いているな」

「閑古鳥ですか？」

「それだ。世間のガンブラブームというのが嘘みたいだぜ」

永い沈黙に耐えきれずに、上級生が同じ言葉を繰り返す様子を、カグラ・ケントはくたびれた顔で聞いていた。こうやって言い回しを忘れたふりをして、無理やり応対を引き出されては黙り込む繰り返しである。教室を飛び出したい衝動を、シフト交代までの我慢と言ひ聞かせ、抑え込んで一時間経つ。彼の精神は、天井のしみの数を記憶するほ

どにすり減っていた。

彼等は模型部である。教室の机をコの字に並べ寄せて、ガンダムのプラモデル『ガンブラ』を雑多に置いてあるだけの企画を催していた。ここ十数年で加熱するブームに甘んじたような、努力も獨創性も欠けた地味な展示会である。当然人が来るはずもなく、文化祭開始から四時間で来客2名という、凄惨極まる有様であった。

「所詮はミーハーばかりということかね。ガンブラを真に愛する人間が減ったのは嘆かわしいよ」

「どうでしょうね」

喉まで出かかった皮肉をカグラはぐっと呑み込んだ。

「先輩がた、模擬店で色々買ってきました」

両手首がかしぐほどのビニール袋を抱えて、カグラの後輩であるセンジュが教室に戻ってきた。彼はシフト外のはずだが、先輩に気を利かせたのだ。話の通じる人間の顔を見て、カグラの表情にもいくらか人間味が戻ってきた。

「聞いてくださいよ。応対してくれた店員さんがすごく可愛くて」

「どこの店だ？ワツフルのところの女子生徒は愛想が悪くてオレは苦手だった」

「いえ、チョコバナナ屋さんです。青いハ口のついたヘアピンつけた子で」

「ああ……」

「日程消化したら一緒に教室回れないか誘おうと思うんですけど、いけますかね」
「……」

センジュの話す相手が誰のことか、カグラにはなんとなく合点がいった。朝早くにここへやって来た、ただ2人の来客のうち、しきりにはしゃいでいた男子生徒も、センジュが語る形状のヘアピンをつけていたのである。彼はただの素組みのガンブラを逐一観察して、その機体に与えられた設定について、傍らの友人らしき茶髪の生徒に語って聞かせていた。

その純粹さが微笑ましくて鮮明にカグラの記憶に残っている。

「それよりもお前、この後のホールでのイベントに参加するんだろ？デートに誘っている場合か？」

「あ……：そういうえばそうでした。僕としたことが」

後輩が悲痛な末路をたどる前に、カグラは巧妙に話題を反らす。

彼が指すイベントというのは、体育館に隣接した多目的ホールで行われるガンブラバトル大会のことである。個人で参加するも、チームで参加するもよし。公共のルールに反しない限りは何でもありのバトルロワイアルである。

今から11年前に、プラスチックのみに反応する『プラススキー粒子』が見出されてからというもの、ガンブラを稼働させるガンブラバトルは隆盛を極めた。1年前の世界

大会ではカグラより年下の中学生コンビ、イオリ・セイとレイジ組による優勝が世間を騒がせた。カグラもビルダーのはしくれた。彼らの後に続こうと志を燃やしたこともある。

「先輩も行くでしょう」

「ああ……一応な」

しかし、現在の彼の情熱は風前の灯、ほとんど燃え尽きた灰のような状態であつた。こうして後輩と話題が盛り上がっても、そのテンションに火が点くことは殆どない。

理由は簡単に言えば、疲労してしまつたのである。彼の理想とする模型部と、上級生の陰気な愚痴を聞くだけの相談所ではあまりに乖離があつた。人間の精神は環境に引っ張られるもので、入部した直後はセンジユやあのヘアピンの少年のように輝いていたカグラの瞳も、すっかりサビついてしまつた。

「機体を部室で整備しておきます。時間になつたら来てくださいね」

センジユは立ち上がつて、窓際に放り出されていた工具箱を拾つてから教室を出ていった。またカグラを静寂が囲み苛む。

「……ガンプラなんてすっかり嫌いになつたな」

つい、そんな禁句をつぶやいてしまうほど、彼は疲れていた。

ハルノ・ケンタロウは中学校の廊下に手持ち無沙汰で佇んでいた。彼の息子がこの学校の文化祭でイベント進行を勤めていると聞かされて、妻と一緒にやってきた。

しかし来てみるや、妻は廊下で鉢合わせたママ友と会話に花が咲いて、ハルノはいづらくなってしまった。息子はどこで何をしているのか、照れて教えてくれない。つまり、彼はこの人込みの中で独りぼっちになったのである。

「……おや」

息子の名前か写真でも載っていないかと、廊下の張り紙を物色していると、その中の一枚がハルノの関心をひいた。

『ガンブラバトル大会 多目的ホールにて13時から開催』

実のところ、彼はガンブラが趣味である。幼いころからアニメの『機動戦士ガンダム』に熱狂し、最新作までチェックしている。よって、ガンブラの製作が、会社員になってからも休日の安らぎとなるのは必然だった。現在、家族から物理的にも心情的にも孤立したハルノにとって、その文字はオーロラに彩られてさえ見えた。

「ガンブラ、借りられるかな」

3 腕時計を見れば、12時45分。ハルノは50代の肉体をせかせかと動かした。

多目的ホールの一階には、ガンブラバトルのかつての経営母体であるPPSE社製の

筐体が設置されていた。休み時間にはガンプラを愛好する生徒たちで大いに盛り上がったが、ちよつとした事故での断絶期間を半年ほど経て、母体をヤジマ商事へと移行してからはなぜか動かなくなってしまった。もしもマシントラブルとなれば修理する予算は学校にはないので、教師陣は生徒会と長いこと維持についてもめたが、その論議もヤジマのエンジニアによる無償アップデートで徒労に終わった。そして、万事大団円と落ち着いたからには、そのもつたいない期間を取り返し、フラストレーションを解消しなければならぬ。それがこのガンプラバトル大会であった。

「先輩、持ってきました」

「どうだった。ジムの調子は」

「前に副部長がBB弾で壊した一機は、胸部をジム・コマンドのジャンクパーツで修理しました。バランスが気になるので僕が使います。先輩のジム・カスタムは触っていません」

カグラはセンジュから自身の愛機を手渡された。『ジム・カスタム』。

特長がないのが特徴といわれるほど、性能は量産機として安定しており、突出を嫌うカグラとは相性がよかった。彼はこの機体のプラモデルの関節を強化し、装甲の裏側にプラ板を貼り、ライフルの銃口を金属パーツで補修して堅実な強化を施した。徹底的に、かつ消極的に生き残るためのガンプラであった。

「さて、行くか」

「待ちな」

「ん？」

カグラが振り向くと、妙な風体の青年がいた。上着もズボンもヨレヨレで、髪もボサボサだ。ずいぶんうだつの上がらない二十代ほどの男である。

「ジムが二機じゃ絵面が悪い。一人加えて小隊にしないか」

彼はポケットから一機のジムを取り出して、ジュースの缶でも扱うようにシャカシャカと振ってみせた。センジュがカグラに耳打ちする。

「どうします？先輩」

「まあ、素組のジムならいいだろう。変にアレンジされるよりマシだ」

カグラはリスクを深く考えることさえ面倒で、青年の要求をうのみにした。ちようど退路を塞ぐように、彼等の背後で筐体が起動した。セルリアンブルーの光が柱状に立ち上る。

『Beginning Plavsky Particle Dispersal』

『Field EX The Room』

展開された空間は風変わりであった。本来ならば宇宙空間、砂漠や湖水地方が広がるはずの筐体の上は、モデラーの作業机が広がっていた。しかも机に置かれているニツ

パーや接着剤がガンプラよりも大きく、まるで巨人の遊び場である。

「ヤジマのエンジニアがアップデートのときに、サービスしていったらしいです」

「余計な事を」

「まあまあ。面白そうじゃねえか」

毒を吐きながら、3人はガンプラをセットした。ジム・カスタムにジム2機の小队最初単位である。

「センジュ・カズキ、『ジム現地補修型』」

「タカヤマ・ヒロヤ、『ジム』」

「カグラ・ケント、『ジム・カスタム』出るぞ！」

カタパルトは火花を散らしながら、3人のファイターを未知の戦場へと放り出していった。

4

ハルノは球体コンソールを握りしめ、機体の調子確かめていた。彼が操縦しているガンプラはシルヴァ・バレットというものだった。

技術源流の先祖をジオンにもちながら、紆余曲折を経て連邦軍に属するモビルスーツとなった異端児である。そして、彼の手元にこうして至るまでも、少々複雑な経緯を辿った。

彼は多目的ホールにやって来たはいいが、借りるガンブラの余地がなくて困り果てていた。その時、泣きじやくる小学生に遭遇したのである。

「どうしたんだい?」

昨今の世知辛い世の中では、声をかけただけで不審者扱いである。ハルノは慎重に声をかけ、幸運にも少年の信頼を勝ち取った。

曰く、彼は彼の父親とともにこのコーナーへやってきたそうだ。

少年にバトルの心得はなく、ただ父親の雄姿を目当てにしていた。

ところが父親は息子にガンブラを預けたきり姿を消してしまい、彼はすっかり孤独になつてしまった。ちょうど今のハルノのようだ。

「じゃあ、お父さんが帰ってくるまで、おじさんが代わりに戦つていいかい?」

端から見れば奇妙な申し出を、幼い少年は快諾してくれた。

つまり、いくつもの偶然と好意によつて、ハルノはこのフィールドに立っているのであつた。

「彼の父親が帰ってくるまで、謳歌するとしようか」

気合を入れなおしたのも束の間、ハルノの正面に接近警報が鳴り響く。見れば、両肩に大型スラスターを担いだガタイのいい重モビルスーツが、サーベルを抜いて駆けてくるのがわかつた。ハルノのガンダム知識が、それを『ガンダム試作2号機 サイサリス』

であると、瞬時に判別した。

「やあ。ハルノ」

そう叫ぶハルノの声は、いくぶん若々しい活気が感じられた。

シルヴァ・バレットが背負った二門のビーム・キャノンを挨拶代わりに撃ち放つ。サイサリスはその特徴の一つである、全身を覆うほどの大型シールドで凌ぐ。すかさずハルノは次の攻撃手段をコンソールで選択する。シルヴァ・バレットとサイサリスの決定的な差といえば、その武装数だ。サイサリスは元々が核攻撃を想定した機体設計故に、こうした白兵戦にはサーベルと頭部バルカンしか選択肢がない。だがシルヴァ・バレットは違う。

シールドからミサイルを発射し、それも防がれたならば、有線による全方位攻撃端末であるインコムを射出する。いくら全身を覆う盾とはいえ、所詮は前面のみを守るものだ。インコムによる背後からの攻撃にサイサリスはおおいに狼狽した。

「インコムだ」

ブースターを噴かして、一気呵成に間合いを詰める。懐に飛び込んだシルヴァ・バレットはビーム・サーベルを抜き放ち、相手の腰関節めがけて刃を叩きつけた。激しい閃光と金属が溶解する音と共に、サイサリスはクの字に曲がって沈黙した。ハルノは機撃破したのである。

「おじちゃん、すごいー！」

通信モニターに、彼のバトルを許してくれた少年が映る。底抜けに明るい称賛に、ハルノも頬をゆるめた。

その時、注意を怠ったのもまずかったのだろう。

彼は、その存在の到着の感知が遅れた。

「なんだ？」

おそらくは上空からのダイナミックエントリーで、そのガンブラはやって来た。演出として、地面は木製という設定にもかかわらず土煙が巻き起こり、中からゆつくりと立ち上がるシルエツトがある。

ゆらり、と陽炎のように緑色の残光がなびく。やがて煙が晴れ、それがこちらを睨みつけるツインアイとわかった途端、ハルノの口からひとつの名詞がこぼれた。

「ガンダム……」

その名前は、今しがた撃破しているサイサリスだっただけ持っている。シルヴァ・バレットだっただけ、その血脈を引いた機体だ。さらに言えば、ハルノの知識はアレを正確には『ガンダムAGE―1』と識別していた。

両脚を『グランサ』という装備の追加装甲で覆い、両肩には高機動型の『スパロー』両腕は『レイザー』、顔と腰は後継機である『AGE―3』を使用したキメラであるときまで

看破してみせていた。だが、それでもなお、あのガンプラはあえて抽象的なカテゴリーで呼称せざるを得ないほどの気迫に満ちていた。

両手に握られているのは、全長に匹敵するブーメラントと、あきらかにモビルスーツ相手には過剰な火力を誇るであろうビーム・ランチャーだ。武装数ならまだシルヴァ・バレットの方が勝るといいうのに、

その得物の威容をハルノは恐れた。

こういった場を言い表す言葉を、彼は唐突に思い浮かべる。

「蛇ににらまれたカエル、だったっけ……」

ハルノの『銀（シル）の（ヴァ・）弾丸（バレット）』を、『白い（ガン）悪魔（ダム）』が襲った。

5

カグラ・ケントはおおいに焦っていた。状況が、彼の予想をはるかに上回る速度で悪化したのである。

15分ほど前、彼らは3機で行軍し、索敵を行っていた。

3機のデータをリンクさせ、センジュがマッピングを行っていた。

「ここからなら、孤立しているシルヴァ・バレットを叩くのがいいと思います」

「賛成だ。ジムは基本性能そのものが心もとない。数で押すのが得策だろう」

「へ、いいね。みんなでタコ殴りといこうか……っ！」

大学生のジムが肩をすくめておどけた瞬間、その頭部を爆裂させた。

当たり所が悪かったのか、ジムは精気を失ったかのように倒れ、そのまま動かなくなった。センジュのジムと、カグラのジム・カスタムはすぐさま頭部をめぐらせて、攻撃の下手人を確認する。

「おい、あれって」

「まづいですね……」

カグラは苦々しく顔をしかめた。そこにいたのは、単眼のカメラアイを特徴とする3機『ギユネイ専用ヤクト・ドーガ』『ギラ・ドーガ』『ザク改』である。カグラたち模型部はこの3機に、地方のバトル大会で散々に敗北した苦い記憶があった。しかも1機を不意打ちされ、数の均衡も崩された。

「逃げるぞ。できる限り時間をかせいで、他の連中も巻き込むんだ」

「了解」

そして、現在に至る。ジム・カスタムとジムはできるだけ敵の攻撃を避けることに徹し、戦場の中央へと移動し続けていた。ヤクト・ドーガが両肩から無線遠隔操作兵器『ファンネル』を射出する。インコム以上に自由度の高いこの兵器によって、カグラたちは退路を狭められていた。

「先輩、左です！」

センジュの声と同時に、ジム・カスタムは大きく突き飛ばされた。

背後で爆発が起こる。カグラのリーダー画面から、センジュの反応が消えた。カグラが振り返ると、ザク改が赤熱したヒート・ホークを振り下ろした姿勢のまま、こちらを睨んでいた。

チームメイトからの通信も切断されており、今、彼は沈黙の中にいた。バトルが終わるまで、自分以外の二人と言葉を交わすことは叶わないだろう。あの退屈な静けさから逃れたくて参加したのに、またしても静けさに悩まされているのである。

「……………クソが！」

悪態をつき、ジム・カスタムはザク改めがけて突進した。

いかにカグラ・ケントとはいえ、自分のネガティブな方針を撤回するときは存在する。100パーセントの勝機を見出したときと、自分の方針で他人の足を引っ張ったときである。この失敗は自分で償わなければならない。そんな使命感が、彼の胸中でつつつと燃え上がった。

「さっきから、背中ばかり狙いやがって、卑怯者が！」

ジム・カスタムはザク改を中心に弧を描くように滑る。左手を支点に滑走して、ライフルで敵のバックパックめがけて引き金を引いた。

ザク改が前のめりに倒れ、爆発四散する。一瞬だけ無謀な荷重をかけた左腕はスパークをあげて機能を喪失した。

「慣れないことはするものじゃないな」

とつさに思いついた動きが功を奏したのと、仇になったのを同時に察知して、カグラの額を汗が伝う。今倒したザク改は、3機の中でも彼が倒せる可能性があつた敵だった。ヤクト・ドーガとギラ・ドーガはどうしようもない。完全な詰みである。

「だが、まだやるしかないか」

カグラは自分に言い聞かせた。胸中で燃えていた己のふがいなさへの怒りは、いつの間にか高揚へと姿を変えていた。彼にとつて久しく体験したことのない感覚であつた。

ジム・カスタムが決意を固め、バックパックからビーム・サーベルを抜いたその時、新たな波乱が訪れた。

ギラ・ズールの頭上めがけて、2機のガンブラが墜落してきたのである。

鈍い音を立てて、ギラ・ズールはひしゃげた。事故でカグラを救つたのは、中破したシルヴァ・バレットと、未知のガンダムタイプであつた。おそらくガンダムAGE-1を改造したものだろう。

シルヴァ・バレットがビーム・ライフルを向ける。まだ使用されていなかったらしく、銃身だけは傷ひとつなかった。すると、ガンダムAGE-1はそのツインアイを輝か

せ、右腕に握っていた巨大ブーメランを振るった。ちょうど野球のアンダスローのような体勢で振るわれたそれは、仮想空間の大地、すなわち巨人サイズの木製作業台の天板へまっすぐに亀裂を発生させた。

「なっ!？」

カグラは目を見張った。これまで彼が目撃してきたバトルとはスケールが違う、文字通りフィールドを巻き込むほどの戦闘がそこに繰り広げられていた。度肝を抜かれたのはヤクト・ドーガも同じらしい。ジム・カスタムへの攻撃を忘れ、立ち尽くしていた。

6

「冗談じゃない!」

シルヴァ・バレットのファイターであるハルノはその異常な攻撃を紙一重で回避したが、つづく一撃でさらに仰天した。ガンダムは振り上げたブーメランを、今度は上体を回転させ、ブーメランそのものを投擲したのである。

「はは、そりゃあ、投げるよな。ブーメランだもんな」

己の敗北を悟ったとき、ハルノには乾いた笑いかこぼれなかった。

シルヴァ・バレットの視界が一度激しく振動すると、斜めに傾き、地面へ叩きつけられる。おそらく、上下半身が両断されたのだろう。

言い訳のつかない撃破判定であった。

ハルノの周囲からコンソールが消滅していき、後には脱力した中年男が残された。

「おじちゃん」

見れば、少年がこちらを見上げている。その瞳はまるで、テレビの中のヒーローを見ろかのように輝いていた。ハルノは膝の関節を鳴らしながらしやがみこむと、少年の頭に手を置いた。

「ごめんな。おじちゃん、負けちゃったよ」

「ううん。すつごく強かった！ボクだったら、あの強いガンダムにすぐに壊されちゃうもの」

「そうか……」

あのガンダム相手にしばし持ちこたえたことは、確かに彼自身にとってもファインプレードだった。しかし、息子よりも幼い少年に励まされていることに、ハルノは嬉しいような情けないような妙な気分になった。

「ヒデキー！」

聞き覚えのない男の声がして、ハルノは顔を上げた。どことなく、目の前の少年と顔つきの似た男が、こちらへ向かって血相を変えて走ってきていた。

「パパー！」

やはりというべきか、少年の父親のようだ。ハルノは胸をなでおろした。少年が駆け

寄り、親子は強く抱き合った。

「ごめんな。携帯を落としたことに気づいて、あちこち歩いていたらはぐれてしまった」
「大丈夫だよ。おじちゃんがそばにいてくれたから」

そう言うのと父親はようやくハルノの存在に気づいた。怪訝な顔で、彼を見つめている。

「あなたは……」

「ああ、迷子になっていたこの子を保護した、つもりだったんですがね……」
「？」

言葉の意味を図りかねて、父親が首をかしげると、少年が上ずった声で語った。

「おじちゃんね、すごいんだよ！ パパのガンブラで、すつごく強いAGE-1と戦ったんだ！ かつこよかった！」

「申し訳ない。息子さんがシルヴァ・バレットの戦う姿を観たがっていたようなので、私が代わりに」

ハルノは平謝りした。壊れたガンブラを修理するのは、それなりに費用と労力がかかる。無断での破壊など言語道断であるのは、戦う前からわかっていたはずだった。培った処世術を駆使して、地面に額があたるほど深く頭を下げる。

「顔をあげてください。気にしていませんから」

「しかし……」

「いいんです」

顔色をうかがってみれば、少年の父親は我が子の頭をわしわしと撫でて微笑んだ。

「この子が楽しそうだったのであれば構いません」

「で、ではせめて修理を手伝い……」

「そのお気遣いも不要です。私が操縦しても、壊れることに間違いはなかったのですから」

父親は少年を抱き上げ、筐体で倒れるシルヴァ・バレットを拾い上げると、ハルノに一礼した。

「それでは私はこれで。息子に、楽しいバトルをありがとうございました」

「おじちゃん、またね」

「あ、ああ……また、ね」

父の肩越しに少年が手を振るのに、ハルノは小さく手を振り返して応える。そして親子が観客たちの間へ消えた後は、ぽつんと取り残されてしまった。

「試合、残りを観なくていいのかな？」

彼が振り返れば、まだガンダムは交戦中だった。黄色いヤクト・ドーガのファンネルを、危なげなくかわしている。子供のごっこ遊びに、プロの軍人が本気で潜り込んだが

如き、完全に格の違うぶつかり合いだった。

「やっぱり強いんだなあ、ガンダムって」

ハルノはそう、感慨深くつぶやいた。

7

カグラのジム・カスタムは、ヤクト・ドーガと奇妙な共同戦線を形成していた。ヤクト・ドーガがビーム・ガトリングで牽制をかける間ジムはサーベルを構えて少しずつ距離を詰めていた。

ガンダムとはといえば、左手に握っていたシグマスライフルを連射してくる。設定どおりでも、一発ごとに対要塞・攻城砲に匹敵する威力である。ここまでカグラは死に物狂いで回避を成功させていたが、余波だけでコンソールはビリビリと震えた。

「まるでボス戦だな」

RPGのそれと違うのは、たとえ勝ったとしても得られるアイテムも栄誉もないことだ。今ならA G E Eの脇をすり抜けて、ヤクト・ドーガを囿に逃走することも可能かもしれない。

しかし、カグラの心情がそれを許さなかった。

「ああチクシヨウ。……本当に腹が立つ話だが、楽しいなあ！」

カグラは叫び、その氣勢を浴びたジム・カスタムが一步踏み出す。

後方で絶えず張られていた弾幕が突然やむ。ヤクト・ドーガがエネルギーの奔流を浴びてしまったらしい。

この瞬間において、カグラとガンダムは完全に1対1であった。

サーベルの光刃を振り上げ、ガンダムの脳天めがけて振り下ろす。直撃すればいかに性能の高いガンブラでも視界を失うことに間違いはない。

かすかに見えた光明は次の瞬間、ガンダムがサーベルの柄を鷲掴みにしたことで霧散した。そのまま腕力の差で、サーベルはジム自身へ突き立てられる。

「おいおいおい」

ただの家庭ゲームをやっているならば、コントローラーを投げたくなるほどの反則技に思われた。

しかし、これはガンブラバトルである。いかなる不測の事態も想定しなければならず、ここで思考停止したカグラの失態であった。

深々とコクピットブロックに自分自身の武器を突き刺し、ジム・カスタムは膝から崩れ落ちた。

その様子はさながら、切腹する武者のようであった。

暗転するモニターでカグラが最後にみた光景は、飛び去って行くガンダムの背中だった。

「はー、負けたなあ」

カグラが我に返ると、序盤に撃破された大学生がセンジュと共に待つていた。その表情は満面の笑みで、さして悔しそうにも見えない。センジュも無言ではあったが、相手が悪かったとでもいうように苦笑いを浮かべていた。カグラは後輩へ歩み寄ると、その肩に手を置いた。

「相手の顔を拜んでくるよ」

「ええ。そうしてください。僕も気になります」

カグラはバトルシステム筐体の側面へ回り込む。セルリアンブルーの操作空間は、大会がはじまったときから三割ほどまで減少していた。この短時間にそれだけ脱落したということである。

「！」

そして彼は、あのガンダムAGE-1を操縦しているとおぼしき少年たちを発見した。そして、その外見的特徴に覚えがあった。

まず彼等はこの学校の制服を着ていた。一人は黒髪をハ口のヘアピンで留めた少女のような顔立ちの少年で、もう一人は茶髪に灰色の瞳をたたえた、西洋人形のような整った顔の生徒だった。

あの向上心のない企画に足を運んでくれた下級生たちである。カグラを打ち負かし

た張本人は、模型部に所属していない同好の士であった。彼が息を呑んだのは、少年たちの表情を見たからだ。

楽しそうだった。

カグラのように歯を食いしばり、必死に生存を考えるのではなく、前のめりに逃走を楽しむために、その白い歯列をむき出しにしていた。

「そりゃあ、勝てないはずだ」

その瞬間にカグラは悟った。さっきまでの乾いた砂漠のような心象であった自分では、こんな楽しそうにバトルをする彼らに勝てるはずもなかったのだと確信した。

手に握ったジム・カスタムに視線を落とす。

今の彼の脳裏には、このガンブラの改造案が無限に広がっていた。

L o s t — 0 3 「w i m p」

L o s t — 0 3 「w i m p」

S i d e A L E X

第七回世界大会以降、中高生を対象にした大会は急速に増加した。

『ガン普拉バトルは金銭や技術的アドバンテージのある大人の娯楽』という観念が、新世代の台頭によって壊されたからだろう。

もつと刺激的なバトルを求めて、あるいは大人たちが盗める技術の持ち主を探して、世界の門戸は開かれた。

今日、オレとユーヅが参戦している試合も、そういった催しのひとつだった。

『第三回 東京ガン普拉バトルジュニアカップ』。

都内のビル街を再現したフィールドで、地区における最強のビルドファイターを決めようという次第らしい。

オレたちの機体『AGE—1 エトワール』は都庁のヘリポートに片膝をつき、ビルドカリバーを杖がわりに待機姿勢をとっていた。

真下では見覚えのある一つ目の騎士が、槍を片手に周囲を見回している。

まだこちらには気づいていない。

「ユージ、奴らのスペックはどの程度だ」

「前回と同じギャン改だけど、関節や装甲のディテールアップが見える。大型ビームソードもヒート・ランスに交換しているみたいだから、取り回しの観点なら、ビルドカリバーより上だね」

「つまり？」

「性能は間違いなく向上しているよ」

「それなりに気合は入れてきたという訳か」

「『それなり』って……これがジュニアカップの決勝ってこと、忘れてないよね？」

「当たり前だろう」

対戦相手はホソカワとナエダ。

オレたちがはじめて組んだバトルでの対戦相手だった同級生たちである。

あの戦いからもう一年以上が経過していると思うと、時間の流れの速さというものが実感する。

「仕掛けるぞ」

「わかった」

ヘリポートを蹴ると、ビルドカリバーを壁面に突き立てて減速しながら降下する。

音に気づいたギャン改と目があつた。

そのピンク色のモノアイが拍動する。

ラウンドシールドから無数のミサイルが放出され、寸分の狂いなくエトワールに殺到する。

カリバーをビルから引き抜き、その刃で防ぐ。

ビルドカリバーはビームに圧倒的な優位性を誇るが、実体攻撃には鈍重な盾としかならない。

弾着と同時に、けたたましいアラート音が操作空間内にこだまする。

「ウオーゼス・アブソープが壊れた!」

「どうせ相手もビームは使わん!」

たしかに積層材の半分以上が抉れ焦っていたが無視し、ギャン改の足元へ投擲。

相手はシールドで正面をカバーした体勢で後退を選んだ。

その隙に脚部スラスタで急減速をかけ、太さ一センチほどに見える街頭の柱へ足裏を乗せる。

街頭は重量に耐えきれず、ミシミシと音を立てながら首をたれた。

それが折れる寸前で再び跳躍。ちようどギャン改の右側頭部へ蹴りを入れる。

ギャン改はおおきく吹き飛び、ビルの壁面へめりこんだ。

「ランズが来る！」

ユージの声より一拍後れてアラート音が鳴る。

友の観察眼は、槍の穂先が煙をかきわけるときの微かな揺れを捉えていた。

すかさず拳で槍の側面を殴り、切っ先を反らす。

「ビーム兵器をなくしたのが仇になったな！」

続けざまに膝を狙ったローキックを二発、シールドの周縁を掴んで膝蹴りを一発。

そして衝撃でがら空きになった上半身めがけて、回し蹴りを叩きこむ。

長い間AGE-1を操縦する内に、その機体特色にあわせてオレ自身の戦闘スタイルも変化していた。

ビルドカリバーを除けば、エトワールには徒手空拳しか残らない。

そこで周囲のオブジェクトやカリバーそのものを物理的な始点に定め、キックを主体にした格闘戦に偏ったのである。

ギャン改がシールドの裏側に手を伸ばす。

「ライフル！」

「隠し持っていたか！」

動きが止まった時点で勝敗は決まった。

真後ろに突き刺さったままのビルドカリバーを片手で引き抜くと、ギャン改の頭頂部

から人間の脊椎に相当するあたりまで貫く。

「ユージ！」

「エネルギーサプライ、正常稼働！いけるよ！」

オレはその言葉を聞き、ウエポンスロットの二番目を選択する。

本来ビームを吸収しなければ開くことのない、カリバーの刃が爆砕ボルトで上下に割れる。

一年前のバトル以来、改修を続けていたのはギャン改だけではない。

ユージも、ビルドカリバーの弱点を克服するために地道な改良を行っているのだ。

ジェネレーターから直接エネルギーを供給され、シグマシスライフルの銃口から閃光が炸裂する。

その一撃で、ギャン改は内側から構造を完全に破壊された。

『BATTLE ENDED』

『決着——！第三回東京ジュニアカップの優勝者は、ツガミ・ユウジくとアレックス・メルフォールくん組の優勝です！』

粒子が収束し、アナウンスが流れる。心地いい拍手喝采を浴びる。

肩の力を抜いたとたんユージが真横から飛びついてきた。

飯屋を手伝っているくせに食が細いので、疲労したオレでも簡単に受け止めることが

できた。

「やったね、アレックス！」

「ああ」

「はじめて大会で優勝できた！」

「今まで出ていなかったただけだろうか？」

「ボク一人じゃ絶対無理だった！キミのおかげだよ！」

「……まあな」

早口でまくしたてて、ユージはふと正面を見た。

オレたちの反対側、ホソカワとナエダが悔しそうにこちらを見つめている。

特にホソカワの視線には明確な憎悪が籠っていた。

ユージはそんな相手の前で、無邪気に喜ぶ行為に気が引けているようだった。

「敗者を気にかけるな」

「でも……」

「そういう感情は相手がみじめになるだけだ。特に今のような場合はな」

そもそも両者は日常的にユージに嫌がらせを行っている連中だ。

オレが側にいるようになってから機会と回数は激減しているが、決して和解したわけでもない。

同情はおろか、いい気味であるとする思うのが普通のはずである。

とにかくオレの友は優しすぎる性格が短所のひとつだった。

「それと、いい加減オレから離れろ。観客に笑われるぞ」

「あつ、(ム)めん」

ユージはオレの肩口から泡を食って離れ、赤面した。

さすがに正面から密着したことは未だにないが、このスキンシップは体裁のいいものでもないだろう。

S i d e Y u j i

ボクたちはオザワさんの車で帰途についていた。

優勝トロフィーが入ったケースは後部の荷物入れで嚴重すぎるほどの処置を受けて輸送されている。

さすがに一日での連続戦闘は気力も体力も使うようで、アレックスはうたたねをしていた。

「むー……」

ボクはといえば、アイデアノートを兼ねているスケッチブックを両手に持って悩んでいた。

エトワールの改良案が頭打ちになってしまったのだ。

これまで、様々なプランを立案してはアレックスにプレゼンし、同意が得られたら形にしてきた。

しかし、それはエトワールの弱点を埋めていく地道なものばかりで、戦術を根本から変更する『ウエアシステム』や『ビルドカリバー』をのぞく大型武装などは悉く却下されてきた。

そうなるとボクの想像力も限界を迎えてしまう。

いかにしてエトワールの汎用性を崩さず、アレックスのバトルスタイルに影響しないままのカスタマイズを行うか。

何か師匠からヒントをもらう必要があると痛感していた。

「到着しました」

「ありがとうございます。オザワさん」

「いえ……」

「アレックス。ほら起きて」

「ん……」

車は静かに停車し、ミラー越しにオザワさんがこちらの様子をうかがっていた。

ボクは素早く一礼すると、隣で眠っているアレックスを揺り起こす。

彼はひどく不服そうにゆっくりと瞼を持ち上げた。

「着いたか」

後部ドアがオザワさんの操作でゆっくりと開き、先にアレックスが下りる。

ボクはそれに続くこうとして、彼の意外と華奢な背中にぶつかつた。

「いてっ」

「わざわざお出迎えとは、珍しいじゃないか」

アレックスは車のほど近くで、腕を組んで仁王立ちしていた。

彼の陰からその方向を覗き込むと、店の前にちんまりとした人の姿があつた。

ナガイ・トウコ師匠だ。

桜色の着物に身をつつみ、皺だらけの顔をくしゃくしゃに綻ばせていた。

「ほほ。お主たちがジュニアカップを制した祝いを送ろうと思つてな」

「祝いっ？」

「そうじゃ」

そう言うのと袂から何かを取り出して、それを入れた拳を逆さにして止めた。

視線でボクらに受けるように促している。

ボクはアレックスの隣をすり抜けると、掌を差し出した。

ポトリ、と冷たい物体が二つ落ちた。

セルリアンブルーの水晶だ。まるで、プラフスキー粒子を冷やして固めたかのような

色彩である。

「これは？」

「粒子の結晶体だな。ヤジマが筐体に収納している、ガンプラバトルの中枢だ」

先に答えを出したのはアレックスだった。

彼はボクの手にある結晶体の内、ひとつをひったくる。黒い革の保護グローブの上で、結晶体はキラリと輝いた。

「たかが一地方大会の優勝祝いにしては豪勢じゃないか。これを所持できるのは現代ではごく少数のはず」

「現代ではないから、ワシが持っているんじゃないよ」

「どういう意味だ」

「これは十数年前の研究途上に偶然生まれたものじゃ。あの実験場でな」

「山の中にあつた、例のみすぼらしい旅館か」

アレックスが言及したのは去年の夏に行った合宿場のことだろう。

はじめてビルドカリバーを使った部屋には無数の設計図やメモが残されていたし、実験場だったと言われても納得はできる。

それ以上に奥深い事情を二人は知っているようだけど、ボクだけは蚊帳の外だった。

「これはお主たちの成長が一定の段階に至ったとわかった時点で渡すと決めていた」

「一定の？修行が終わった、とかじゃなくてですか？」

「ユウジ、お主そろそろ、ガンダム改修に限界を感じていたじゃろう」

ボクはぎくりとする。

とつくに師匠はお見通しだったのだ。それが顔に出ていたようで、師匠はにつこりと笑うと骨ばった指で、ボクたちの手の中にある結晶をさした。

「二人ほどのレベルのビルダーとファイターが成長を続けた場合、どこかで個人の限界値を迎える。それを突破させるには、己の価値観を根本的に覆すほどの大きなイベントが必要になる」

「それが、この粒子結晶」

「お主たちがそれをどう使おうが自由じゃ。せいぜい自分の限界を突破してみせい」

師匠はしわしわの喉の奥で、コロコロと笑った。

Side ALEX

ツガミ食堂での優勝祝いを終えたあと、オレは一人でカウンタース席に伏せていた。さすがに疲労が限界を超えて、身体を動かす気力を失っていたのだ。

背後のテーブルでもツガミ商事の社員が何人も、酒盛りの挙句に酔いつぶれている。ときどき、上の階からユウジの笑い声が聞こえてきた。

両親と三人で談笑しているようだ。

あの家族はオレと違って、当たり前のように身内で笑いあうことができている。

それに対して、オレは羨望とも寂寞ともつかぬものを覚えていた。

「アレックス。しばしいいかの」

「……明日にしろ」

「ユウジがお主の側にいないときは貴重だからのう。今が望ましい」

いつの間にか、隣に老婆が腰を下ろしていた。カウンター席の丸椅子はかなりの高さがあるのに、器用に脚をぶらつかせている。

オレは仕方なしに寝返りを打った。

ナガイは一升瓶を開けているところを見たはずだが、呂律もすっかり回っているし顔つきは涼しげである。

「お主だけに、話がある」

「手短に言え」

「ワシの得意技を、お主に伝授しようと思う」

それを聞いて、にわかには眠気は吹き飛んだ。

心剣流の奥義たる『居合斬り』の伝授。

それは酒の勢いにしてはあまりに重大すぎる話題だった。

思わずナガイの方へ身を乗り出す。

「本当か」

「酔ってはおらん。もしも知らぬふりをしたら、いつでも問い詰めていい」

「……詳しく聞かせろ」

「お主、自分が成長の限界を迎えた自覚はなからう？」

オレは素直に頷いた。

ナガイも指摘していたが、ユージの機体改造は袋小路に入り込んでいる。

原因はオレがあいつのアイデアを却下しているからだ、それは単純につまらなかつたからだ。

ビルドカリバーという『神器』になりうる武器を造り出した男が、タイタスやスパローのマイナーチェンジ程度にとどまっていはいはすがない、という期待からだった。

この結晶体という種火を与えられたからには、いつかあいつはカリバー以上のものを生み出すに違いない。

一方で、オレの戦闘技術はブレイクスルーすら到達していない。

進歩の速度で友に劣っていた。

「誤るなよ。ユージと同じ速度で成長しているにもかかわらず、スキルアップが留まることを知らぬだけじゃ。スランプへの助け舟ではない」

「どういふ風の吹きまわしか、話の先行きが見えない」

「ユージのように薪を間断なくくべる成長方法では足りん。お主には、ひとつのゴールを示していく方針にした」

「……」

「落ち着け。そんなに力んでも、『居合斬り』の方法をすぐに伝える訳でもないのだ」
グローブに汗がにじみ、腕の鳥肌が止まらない。

ともすればメルフォル家半世紀の妄念を断ち切るかもしれない一大事だ。

この一年で感情が理性に先立ちやすくなっていたので、とても平静を保つてはいられなかった。

「無論、手取り足取り教える訳ではない。お主が自ら、同じ技を放てるように促すだけじゃ」

「技を見様見真似で覚えろということか」

「そう簡単にはいかんよ。これまで通り、ワシは基本的に『居合斬り』を使わずにいる」
「つじつまが合わないぞ」

「だから『ワシをその気にさせろ』。それだけでいい」
「……自分で言っていて詐欺じみていると思わんのか」

要するに、普段から多忙なナガイを捕まえた上で戦いのフィールドに引きずり出し、なおかつ『居合斬り』を出すぐらいまで追い込めというのである。

ナガイ本人が明言した以上、伝授の可能性がゼロではなくなった程度で、ハードルの高さはむしろ高くなったとさえ思う。

唸るオレに、ナガイは追い打ちをかけた。

「そして、ワシがその気になる相手はお主とは限らん」

「！」

うかうかしていると、ナガイはオレの眼前で、オレ以外のファイターに技を使うと示唆した。

どこの誰とも知らぬ相手に、自分のこだわりが先を越される屈辱など想像したくもない。

それはオレがこれまで見下してきた凡百の相手よりも、オレは無価値であるという意味ではないか。

祖父の妄念以前に、オレのプライドが賭けられていた。

「一番危険な相手はユージかもしれないのう。ワシの技の原理は簡単じゃからのう。案外、観察眼で見抜いてお主より先に身に着けるやもしれん」

ツガミ家の談笑が、また耳に届いた。

オレの動揺など知る由もなく、友は幸福を謳歌している。

うつむくと、カウンターの磨き上げられた机にオレの顔が映りこんでいた。

いつものように自信を発露させた笑みも、はつきりとした憎悪を燃やすこともできない。
い。

焦燥と混乱で感情が飽和して、オレの表情筋は機能を停止していた。

Side Yujii

アレックスと迎える、二度目の夏休みがやってきた。

身体が溶けそうなほどに照りつける陽光。

屋台やイベントブースが互いをアピールするための音楽。

そしてそこに集う人々の熱気。

様々な要素が一つにまじりあうと、週末のお台場で巨大な陽炎になって立ちのぼって

いく。

ボクとアレックスも、そのただ中をゆだっていた。

「まだ立像の写真を……」

「この間も撮っただろう。待機させているオザワに連絡して撮影してもらえ」

「そ、そこまで必死でもないけど」

親友が人込みを強引に押し分けていく後ろを、よたよたと追従する。

ボクとあいつの距離はほんの少ししか離れていないのに、その隙間をすぐに他人が埋めてしまう。気がつけば写真撮影のことは頭の片隅へ消えて、時々のでく茶髪と、意外

と小さな背中を追うのに必死になっていた。

「まだ時間はたっぷりあるから急がなくても大丈夫だよ」

「エキシビジョンマッチは時間が前後すると聞いた」

「それでも五分くらいでしょ。まだ一時間前じゃないか」

建物に入ってから十数分かけて、ようやく最上階へ続くエスカレーターにたどり着いた。

周囲はぱっくりと無人の空白があつて、そこで一息つく。

視界の端にはシャアの深紅に塗装された自動車の展示があるが、それをまじまじと見ている暇も与えられないだろう。

アレックスの言う通りエキシビジョンがあるのだ。

この真上に位置するアミューズメント施設『Gミューズ』に、師匠が向かうと言い出したのは一昨日のことであつた。

そこで開催されるガンプラ初心者向けイベントに、特別ゲストとして招致されたい。いい。

警備担当のトップであり、普段は広報の仕事を断る師匠だったが、なぜか今回は重い腰を上げた。

「ユージ。下を見てみる」

二人してエスカレーターに乗ると、アレックスに促されるまま、ボクは階下を見下ろす。

黒や茶、白、ほんの少しの金。

多種多様な色や長さの人の頭が、フロアを蠢いていた。

あれを通り抜けてきたと思うと、ちよつとした冒険をくぐり抜けてきた気分になる。

「あそこにいる人間の内、ナガイ・トウコのパトルという出来事の価値がわかる人間は、どのくらいいるんだろうな」

「……？」

彼の声からただならぬものをかき取って、ボクは顔を上げた。

いつもはすぐに喜怒哀楽を表に出すアレックスであつたが、その時は、ボクの予想に反してのつべりとした無表情だった。

そこには銃身の鉄のような重く、無機質な雰囲気宿っている。

東京ジュニアカップを制した日以降、たまに彼はこういう陰りのある顔をする事があつた。

それはアレックス個人の感傷というよりは、彼のフランスの実家だとか、そういう複雑なしがらみに端を発しているように思われた。

そしてそういう深刻な兆候を垣間見せたとき、ボクは彼のデリケートな部分に触れて

しまうのではないかと不安になって、つい目をそらしてしまうのである。

「あ、アレックス。あの店いいよね」

「どれだ」

強引に話を変えようと、ちょうどエスカレーターの先にある肉まんの店を指さす。

ハ口の看板が掲げられていて、お台場に来るガンダムファンをねらった商品だと一目でわかる。

するとアレックスは口角を吊り上げて、いつもの自信満々な顔に戻った。

「ああ、うまそうだな。買ってくるから、お前は先にスペースを確保しておけ」

「え」

「さっき時間に余裕があると言ったのはユージだろう。任せたぞ」

相変わらずボクの同意は求めずに、勝手に途中で降りてしまう。

水をむけたのは自分なので、仕方なく最上階まで一人で行くことにした。

師匠のバトルを見た回数、片手の指で数え切れるほどしかない。どんなバトルを見せてもらえるのか、いやおうなしに胸が高鳴る。

腰のホルスターに収めたガンプラ、AGE—1エトワールがカチャリと鳴った。

Side AL EX

肝心なところで目をつむりがちなのは、ユージの悪い癖だ。

人のデリケートな側面を抜群の観察眼でとらえたとしても、その対処には及び腰になるようである。おそらく、客と店員という線引きに厳しい家庭環境が、無意識の内にそうした性格を醸成したのだろう。

赤の他人と体よく接する上では必須のスキルなのかもしれないが、その対象に自分が含まれていると感じると、心の隅に黒いモヤがかかった。

「待たせたな」

「本当に時間がかかったね。並んでた？」

「いや。持ち帰りでは三個までしか買えないのが不満だな。店内の食事スペースで色々つまんできた」

「あんまり食べ過ぎると、お昼ご飯が入らなくなるよ？」

「この程度なら間食にもならん」

Gミューズの中央に、このイベントのためにマルチスタックの筐体が運び込まれている。

せいぜい3on3が開催できる程度の規模だ。

その周りをぐるりと取り囲むように、立方体のクッションが設置されて、簡易的な観客席とされていた。

オレはその最前列にユージの後ろ姿を見出して、隣に座った。

戦利品の紙袋から、ハ口の肉まんを新たに取り出すと頬張る。熱くジューシーな肉汁がしみだしてきて、なかなか美味だ。

「あ、もう始まるみたいだね」

天井の灯りが絞られて、筐体からプラスキー粒子がほとぼしる。

耳に痛いほどのBGMが鳴り響き、正面の巨大モニターにバトルの様子が映し出された。

オレはナガイの機体『ザ・パーフェクト』を目で探す。

フィールドは宇宙空間。特に月面を主戦場にしていた。

アクトザクなどの一般的な規格のガンプラから、デーパーストライカーという全長数十メートルの巨大なものまで、千差万別の機体が飛び交っている。

その中で、カメラがとらえているのは月面の中央、ちょうど地球が顔を出して、強烈にその灰色の大地を照らし出している宙域だった。

オレはそこで、見覚えのあるガンダムに目をむいた。

両脚に増加装甲、両腕はレイザーをベースとした高機動用ウエア。

そして、日本語の「へ」の字型スリットのない顔パーツ。

『AGE―1エトワール』だと!？」

「ボク渡してないよー!」

友の言葉は嘘ではなからう。

ユージが腰のホルスターに愛機をしまい込んでいるのを、出かける前にオレも確認している。しかし、事実としてあそこに友のオリジナル・カスタムは存在して、同作品を原典とする『ギラーガ』と向かい合っている。

トリコロールの騎士と紅の竜人の対決カードは、オレたちの周囲の観客をおおいに熱狂させていた。

「なんのつもりだ」

十中八九、操縦者はナガイで間違いない。

ここからはセルリアンブルーの光が強烈すぎて、実際の位置を確認できないのが歯がゆかった。

ギラーガはあいさつ代わりに、胸部中央からビーム・バスターを発射した。対艦クラスのエネルギーを、エトワールは側方へ体をひねるだけで回避。

その間に相手が跳躍し、必殺の距離まで詰めていることにも何の反応も示さなかった。

ギラーガの双頭の槍が突き出される。

対するガンダムの手には、ユージが作り上げた必殺の大剣『ビルドカリバー』は握られていない。

まったくの諸手だ。

観衆のほとんどがガンダムの敗北を確信しただろう。

「わあっ!?!」

「なっ」

果たして、切り裂かれたのはギラーガだった。

エトワールはマニピレーターをまっすぐに伸ばして手刀をつくると、そのまま相手の腰から肩口にかけてを、斜に斬ったのだ。

剣を使わなくとも、ナガイ・トウコが発動したのはまごうことなき『居合斬り』であった。

歓声があがる。

その一瞬の逆転劇は、フィールドのあちこちで行われている、他のやりとりの中へ埋没していく。

半世紀ぶりの奇跡に気づいているのは、世界でただ一人、オレだけだった。

「なぜだ」

それはわずか数秒の現象で、ガンプラバトルの常識を凌駕していた。

実際にプラモデルを操縦する絶対法則の下、バグやタイムラグは皆無にもかかわらず、あの模造エトワールは『後から出した攻撃を先に命中させている』。

原理不明。

理解不能。

かつての祖父のみならず、オレ自身が眼にしてもなお理解できない、人知を超えた一撃だった。

メルフォール家が固執するだけの価値がある、美しい技だった。

「アレックス！見て、あそこファイターすごいよ！」

ユージがオレの肩を揺さぶる。

こいつの観察眼でさえ、その価値には気づけていない。

オレの一族の妄執は、大衆の娯楽としてあっけなく消化されていった。

『……あなたも、いつかそれを経験するかもしれないよ』

来日したばかりの頃の記憶がフラッシュバックする。

オザワは自分の限界値の先を、当たり前前に消費する人間に絶望した。

『そして、ワシがその気になる相手はお主とは限らん』

ナガイは最初から、奥義をオレに見せる気はなかったと言外に示していた。

二つの言葉はオレの内側でやり場のない怒りに還元されて、ついさつきエレベーターから見下ろした無辜の群衆へ重なっていく。

オレのすべては、あの観客にすら及ばない。

右手に持っていた紙袋が、音をたててひしゃげた。

Side Y u j i

会場を出るとき、アレックスは非常に機嫌が悪かった。

空になった紙袋が小さいクズになるまできつく握りしめ、大股で歩いている。眉間は深いしわが刻まれて、細い唇は引き結ばれていた。

ボクは流石に理由を尋ねようと、彼の隣や正面をグルグルとしていた。

「ねえ、ボクなにかまずいこと言っちゃった？」

「お前のせいじゃない。気にするな」

「じゃあ何でそんなに怒ってるの」

「……」

あまりにしつこいからか、彼はようやく足を止めてくれた。

ボクの方へ向き直ると、腕を組んで答える。

また、あの無表情に変わっていた。

「お前は気づかなかったようだが、ナガイが心剣流の奥義を使った」

「師匠が？」

「封印して五十年。オレたちにさえ、さんざん勿体ぶって使わなかった技だ。それをあんな、どこのとも知れぬファイターに使うなど」

「それだけ強い相手だったんだよ」

「強い相手だと?」

アレックスの口元に、かすかに侮蔑と嘲笑が浮かんだ。

よほど気がたっているようで、大仰に肩をすくめる。

「あれのどこが、ナガイ・トウコの『居合切り』を使うに値するファイターだったのだ。 टीम・バスターとスピア程度で世界クラスになるなら、オレはとつくに世界チャンピオンだ」

「戦ったこともない人の実力を、勝手にバカにしちゃいけないよ」

師匠の考えは師匠本人にしかわからない。

それまでの動きでギラーガの実力を見定めた可能性だつてある。

何より、対戦経験のない相手を他の試合の動きだけで裁量するなんてアレックスらしくもない言動だ。

いくら自信過剰で王様気取りだからって、彼はそんな迂闊な真似をしてこなかった。

ボクの戸惑いをよそにアレックスは語気を荒げる。

「お前だつて見ていて気付いただろう。あの技の違和感を」

「ボクはガンプラバトルを楽しく見ることを優先したいんだ。全部を注意して観察、分析している訳じゃない」

「オレが楽しんでいないって言いたいのか!？」

「そうじゃなくて……」

言葉尻を捕らえられて、すっかり萎縮してしまう。

彼がここまで怒り、当たり前散らすこと自体が珍しく、ボクは完全に参ってしまった。た。

「……いったんオザワさんのところに戻って落ち着こうよ。師匠とはゆっくり話をすればいいじゃないか」

「いや。オレは少しバトルをしていくつもりだ。ナガイの本物の『居合斬り』を見た以上は、すぐにでも再現できるようにならなければ」

「アレックス!」

自暴自棄に陥っている。

服の裾を掴んで引き留めると。彼は口角を吊り上げた。

「なに、オレとお前のことなら大丈夫だ」

同世代にしては高めの、鈴を鳴らすような声が震えている。

いつもの自信満々の態度に思えて、その実、取り繕ったことが明らかだった。もろく崩れさりかけた表情を見て、ボクは心臓を締め付けられる。

親友の暴走を止めなければならぬ使命感に襲われた。

「今のキミじや師匠には追いつけない！」

だからつい、そんな讒言が口から飛び出してしまったのだ。

言つてすぐに発言をひどく後悔したが、遅かった。

あのアレックスの頬を、透明な水滴がつうと伝つて、整ったおとがいを滴つた。

「お前なら、付いてきてくれると思つたのに」

「え？」

「……いいや違うな。『一族』の執着も、ナガイとの確執も知らない一般人に、期待したオレがバカだったのか」

「ちが……ボクは」

「貸せ。オレは、弱い奴は嫌いだ」

ボクの手からAGEEー1をひつたくるなり、踵を返して親友は雑踏へと突き進む。

その間をたくさんの方が埋めていった。

何人かは言い争いを聞いていたらしく、不審な顔つきでボクを見やつてから通り過ぎる。

ボクらには途方もない距離が開いていた。

彼の言い捨てて行つた言葉は、ボクに深く刺さつて、追いかけるための足を縫い留めてしまつていた。

Side ALEX

台場のゲームセンターで数十回のバトルをこなして、屋敷に戻ってきた頃には日ごとつぷりと暮れていた。

オレはただ広い食卓の中央に一人で座らされている。

当主に連なる者のみが着席を許され、故に無駄な空間があまりに多い。

頬杖について待っていると、料理長が清潔な白服に身を包み、金属製のトレイを片手にやってきた。

「お待たせいたしました」

差し出されたのは、故郷でも豪勢とされる料理の数々だ。

最高級の食材と調味料、器具を総動員して作られ、世界ではありつけない者がほとんどだろう。

「……」

ほんの少しだけ口に入れる。

美味いはずなのだが、砂を噛んでいるようだ。

黙って皿を押し出すと、料理長は困惑した素振りを見せた。

「お口に合いませんでしたか」

「いや……悪いが、今日は食欲がない。お前たちで始末してくれ」

「……はい」

きらびやかな皿はほとんど手つかずのまま下げられる。

その様子を横目に、オレはズボンのポケットに手を入れて、AGE-1を取り出そうとした。

すると何かが絨毯の上に柔らかく零れ落ちた気配がした。

人差し指と中指でそれをつまむ。

空色の結晶体。

オレとユージに渡された、あの石だった。

「アレックス様」

入口にオザワが立っていた。

おそらく料理長の報告を受けて、世話役としてオレの様子を見に来たのだろう。

「ユウジ様から話は伺いました。心剣流の奥義を、伝授されなかつた」と

「そうじゃない。勝手にオレが期待して、裏切られただけだ」

いつか、ナガイが技を使うにふさわしい強さまで上り詰めてみせるという意志があった。

だが、そもそも奴にとってオレの野望など唾棄すべきものだったに違いない。

考えるだけでバカバカしい気分になる。

結晶体を彼女めがけて放った。

オザワはそれを片手で受け止めた。

「捨てておけ。今のオレには無意味なものだ」

「本当にそうでしょうか」

「何がだ」

この国に来てから久しぶりに、オザワは教師の顔になった。

「プラスチック粒子の結晶体の効果は未知数です。あなたが期待したように、自分の限界をこえ、居合斬りを体得できるようになるかもしれません」

「ユージならうまく使っているさ」

「ですが、ただの粒子結晶体なら、ナガイ氏が秘蔵していたものを渡す必要はあったのでしょうか？」

「どういうことだ」

「ただ結晶体によるブレイクスルーを狙うなら、ヤジマ製の粒子でも構わないのです。公式審判員であるナガイ氏なら、入手も容易いでしょう」

オザワはオレのすぐ側までやってくると、結晶体を返してきた。

これはヤジマ製の粒子結晶体ではなく、三年前の暴走事故を生き残った旧来の粒子で

できている。

世界でたった二つしかない宝物を、オレと友に託した理由を考えろというのだ。

「あの方はあなたに、メルフォル家の目的は関係なく、自分で意味を見出してほしいのではないのでしょうか」

心剣流の技を極めるための、踏み石以外の使い道を探す。

それは随分と難題であるように思った。

「オザワ、当主への定期報告は何日ごまかせる」

「私だけの代理通信が許可されているのは、最長三日です」

「十分だ。三日間、ジジイにも部下にもオレの行動に一切手出しをさせるな。いいな？」

そう言うのと、オレは食卓から立ち上がった。

Side Yujii

お台場でアレックスに怒鳴られてから、二日が経過した。

二年間ではじめて、彼が食堂に來ない日が続いた。

ボクの対応は、彼にとってどうしても腹に据えかねていたのだ。

申し訳なさに泣きたくなるが、クヨクヨしていたらそれこそアレックスに叱られる。

彼からの信頼を取り戻し、仲直りするには、一度信頼してもらったものを使うのが一番だ。

「流石に一気に用意しすぎたかな……」

叔父さんの模型店『ビシディアン』。

作業用のカッターマットの上には二枚の設計図が広げられていた。

アレックスと友達になる前から、彼は料理とガンプラの腕は評価してくれた。

それならばガンプラでアプローチするべきというのが、ボクの出した結論だった。

一枚目は、エトワールへ搭載する予定の支援プログラムだ。

第七回世界大会で使用された伝説の機構『RG』システムをベースに、師匠からもらったプラフスキー粒子の結晶体を有効活用できるものを考案中である。

要するにボクがいなくても、ちよつとだけ手伝いができるような代物だ。

二枚目は、アレックスお気に入りの武器である『ビルドカリバー』の発展型、いわばバージョン2と呼ぶべき剣。

一枚目と連動した色々を詰め込んだから、アレックスはきつと気に入ってくれる。

「でも、これ作るのに何年かかるかなあ」

支援システムとビルドカリバーはアイデアこそあつても、具体的な実現手段は白紙だ。

システムはガンプラバトル用のプログラム知識を勉強しなければならぬし、途方にくれている状態であつた。

「限界値の突破はできそうか？」

手元に夢中になっっている間に、師匠が作業部屋へ入ってきていた。

彼女は無遠慮にボクの設計図をのぞきこむ。

「む……これは」

「それなりに自信作なんですけど、かかる工程が想像つかなくて」

「これを、アレックスに渡すのか？」

「当然ですよ」

普段は察しがいい人に変な質問をされた。

親友へのお詫びを兼ねているのだから、渡さなければ意味がないのだ。

ファイターではないボクが使ったところで持ち腐れになってしまう。

「……少し昔話をさせてくれ」

「ええ。気分転換にもなります」

問いかけの意味を教えてくださいというのでもなく、師匠は話題を転換する。

顔つきは深刻で有無を言わせぬ迫力があつた。ボクは丸椅子を回転させて向き合うと、もう一つ椅子を引き出して勧めた。

師匠が座ると、目線の高さはこちらが上になつてしまう。

その節くれだった指先が、木製の杖の先端をなぞつた。

「おぬしが貿易商と食堂の一人息子であるように、ワシは没落した武家の末裔でな。幼い頃から『誇り高き現代のサムライであれ』と毎日のように言い聞かせられた」

「かつこいいいですね！」

現代のサムライという響きにボクはときめいたが、師匠にとつては苦々しいらしい。

「所詮は古い言い伝えにすぎりつく一般家庭にすぎん。しかしそんな家で、どういう訳かワシは相手を倒す才能を持って生まれてしまった。自分の背丈の倍はある師範を倒せ、とか山に入つてクマを鉋で斬り殺せ、とか無理難題を喜々として親に命じられたよ」

殺意を察知する嗅覚。

急所を見抜く観察眼。

あらゆる防御を貫くためのパワー。

戦争がとつくに終わり、平和が当たり前になっている日本で、師匠は戦える才能を、戦うためだけに磨かれた。

その在り方は、ボクにはどこかの誰かさんによく似ていると感じられた。

「他の活かし方があつたのではないかと気づいた頃には、ワシは自分の才能を忌避するようになつていた」

「でも、師匠はバトルシステムを開発してたんですよ」

「戦いを遊びとして楽しめる可能性に、夢を見ていたのかもしれない。レオ・メルフォー

に出会ったのもその頃じゃ」

「メルフォールって、アレックスの？」

「祖父にあたる。互いの技術や知識を交換し、切磋琢磨しあう関係は悪くなかった」

師匠が語る五十年前の思い出も、ちょうどボクたちのようだ。

これまでの楽しかった記憶が蘇り、今抱えているアレックスへの気まづさが少しだけ溶けた気がして、頬が緩む。

「……だが、レオの本性はワシの想像をはるかに超えておぞましかった」

「えっ」

「出会ってからずいぶん経った後、故郷で身内だけの研究に引きこもったはずのレオが、ワシの前へいきなり現れた。奴はこう言った。『最強の血が欲しい。お前のすべてをオレによこせ』と」

師匠の仲間であつたレオ・メルフォールという人物が要求したのは、天才だつた師匠の血を引く何か。

そして恐らくは、彼自身の血も引いた何か。

文言だけ聞けば、映画で流れるような愛の告白のようにも思えるそれは、師匠がなによりも忌み嫌う戦闘の天才というラベルに惑わされた、人の狂気の発露だつた。

師匠は吐き気をこらえるように口を手で覆いながら、ボクへ問いかける。

「ユウジ。それから長き時が経って、レオによく似た、孫と名乗る子供が現れた時のワシの気持ちかわかるか」

「……………」

「この二年間、見守ってきた。アレックスはお主を友と呼んでも、まだレオと同じ目で見ている」

「師匠、あの、何が言いたいんですか?」

そんな話の運び方ではまるで、ボクの友だちがそんな恐ろしい人物と同類であると言いたいようだ。

「お台場で心剣流の技を披露したのは、アレックスの真意を試すためじゃ」

「わ、わざとやったんですか!?!」

「もしもレオの孫が、怨念から生まれた怪物だとしたら。ワシの気づかぬ内にユウジを傷つけるかもしれない。たとえ、アレックス本人から恨みを買おうとも、悲劇はなんとしても避けたかった」

カッと眉間に血が上った。

二年間も一緒にいて、弟子として技を教え込んでおいて、師匠はアレックスを信じられなかった。

彼の尊敬と憧憬を一身に浴びながら、その気持ちをわざと突き放した。

人にスペックで品定めされることを何よりも嫌いながら、自分こそがアレックスを、レオ・メルフォールの後継者という色眼鏡で睨み続けていた。

なんと、ロクでもない人だ。

「あいつだってあなたの弟子ですよ！」

「弟子として愛情はあった。だからこそ、最後の最後に信じたかった」

「そんなの、おかしいのはアレックスじゃなくて、師匠の方じゃないですか！」

「ユウジ……」

「あなたなら、もつと優しく伝える方法だっていくらでも選べたはずなのに」

師匠も自分の選択を後悔して懺悔しに来たのだろう。

だからこそ卑怯だと感じる。

ここにおいてなお、アレックスと向き合うことができず、中途半端な赦しを願っていたのだとしたら。

ボクは親友の代わりに怒るべきだ。

「……すまない。ワシは、お主たちの期待するような聖人君子ではないのだ……」

師匠の体は小刻みに震えていて、本来の背格好以上に小さくみえた。

Side ALEX

祖父への定期報告をごまかして三日目を迎えた。

今日中にオレは自分自身の感情に決着をつけなければならぬ。

その間、身体を動かしていないと落ち着かないのもあって、バトルも欠かさずに続けていた。

『よそ見してんじゃねえ！』

正面から中華風の意匠をもつアルトロンガンダムが挑んでくる。

アプローチこそ違うが、『龍』『槍』という構成要素がいつかのギラーガを連想させ、オレの神経をかき乱す。

「冷静になれ……」

自分に言い聞かせて、三つに分かれた槍の切っ先をかわす。

反撃のスキを直感するも、次の攻撃を感知した脊髄の反射がその判断をねじ伏せる。

ドラゴンハング。

龍の頭部を模した長大なクローが、本命としてAGE-1に襲いかかった。

直前に跳躍したが、爪が脚部のプラスチックをちぎり飛ばす。

視界いっぱい空が広がった。

スラスターで方向転換。しかし空中では思うようには身動きが取れない。

既に三叉槍の切っ先が、こちらを捉えている。

「ちいつ」

オレは操縦桿を強引にかなぐった。

モニター右半分がバツン、と音を立てて破裂する。

槍が側方を通過していく轟音がスピーカーを震わせる。

隻眼となったエトワールのカメラアイが、ぎよろり、とトライデントを睨んだ。

槍は今まさに虚空へと放り出されようとしており、その最後尾を掴む。

瞬間負荷は計り知れず、右腕装甲の隙間からスパークが散った。

「あいつのガンプラならば、持ちこたえてみせろ！」

オレの気合へ呼応するように、火花はオレンジから、鮮烈な紫色へと変貌する。

『なにっ!?!』

アルトロンのファイターが動揺で動きを停めた。

がら空きの胸部めがけて槍を投擲する。

アルトロンは地上に縫い留められて、ぐったりと四肢から力を失った。

『BATTLE END』

集まった野次馬からまばらな拍手が送られる。

オレは両肩の筋肉をほぐし、ガンプラを回収した。

「今の観たか!?!」

「最近ウワサされている『紫電』ってアイツのことか……」
「てつきり紫色の機体に乗っているからだ」と

野次馬がオレや対戦相手の後ろで、やいのやいのと騒いでいる。

短期間に苛烈に戦い続けたせいで『紫電のアレックス』という通り名がどこともなく湧き出てきたらしい。

ファイターにとつて固有の二つ名を戴くというのは至上の名誉だが、個人的には気に食わなかった。

せっかく故郷の色を背負った機体なのにその要素がまったく伝わらないし、なにやり、そこにオレの相棒の要素が加味されていない。

孤独な模擬戦をしておいて、そういう我儘がオレに渦巻いていた。

「アレックス様。聞いておられますか」

我に返るとオレはオザワが運転する車の後部座席に収まっていた。

ほとんど無意識にゲームセンターの外まで出て送迎を受けていたようだ。

「ご当主が火急の命令があるため、なんとしても繋げと」

「そうか……」

掌に結晶を転がす。

結局、オザワの言うような『自分で意味を見出す』ことは三日間がむしやりに戦いつ

づけてもできなかった。

得られたのは不要な渾名と技量だけ。親友との仲は修復できず、ナガイの技の領域へ届くきっかけも見いだせず、オレはただウダウダとしていただけだった。

無為な気分でタブレット端末を開き、故郷の祖父へ繋ぐ。

数コールののちに、あの人工灯で甘ったるく染められた部屋が映し出された。

「ジジイ、何の用だ」

『……ナガイの奥義を伝授されそこねたそうだな。』

「あんたができていけば、こうして悩む必要もなかった」

『そうだな。お前たちはこの世に生を受けてすらいなかったらう』

堂々と言つてのける神経は最早人間のそれではない。

病床に臥せったまま、執念だけがくすぶっている人と人の情など腐り果てる。

その腐敗したミイラもどきがどんよりとオレを見据えていた。

「緊急の命令とはなんだ」

『我が孫よ。お前をフランスに帰す』

耳を疑った。

このタイムリングでオレを本国へ帰還させるとは、それこそ日本へやってきた意味がない。

バックミラーごしのオザワは鉄面皮を保っていた。先に聞かされていたらしい。

「とうとう脳の随まで耄碌したか？ 数秒前に、自分が何を確認したと思っている」

『たしかに、ナガイの技の伝授というミッションは未達成だ』

モニターに別のスクリーンが表れて、何らかの折れ線グラフを示す。

下端にある時系列を辿ると、地区大会を境に、平坦を保っていた線はみるみる下降し、台場のイベントで地に堕ちていた。

まるでオレの気分の浮き沈みを画像化したかのようだ。

『出国前にお前に埋め込んでいたナノマシンから逐一送信しているバイタルデータだ』
「聞いていないぞ」

『知らせていない。お前が私の管轄を外れるほど情に流される場合を想定して、極秘裏に埋め込んでいた』

自分の身体を見下ろす。機械が内側にあるように違和感は一切ない。

ヤジマの技術解放による恩恵が、こんなところでも発揮されているのだろうか。

老爺は下卑た笑みを浮かべた。黄ばんだ歯の奥からしわがれた哄笑がのぼってきた。

『その目だ』

「なに」

『その獣のように憎悪をたぎらせた目、なんと醜い。私が欲しいのは、感情を理解し、な

お切り捨てられる王者の資質である。お前のような感情に躍らされる失敗作ではない」
「貴様がこうしたのだろうが！」

『いやはや、貴様の蓄積したデータ自体は有効だったな。それは訂正しよう』

もはや寿命の灯も尽き果てんとしていたはずの男が、今日は饒舌だった。

オレのバイタルグラフの上に、今度は二体のガンプラの設計図が覆いかぶさる。

ムラサメでオレたち兄妹が使う予定の専用機のものだった。

『ツガミ・ユウジのアイデアと、AGE-1の戦闘データは『暁 雷光』と『ドミナンス
ザクウオーリア』の設計へ大きく寄与した』

「……」

『そしてお前が過度に摂取した感情の浮き沈みは、バックアップ用に『調整』する予定だ』
脳裏にオレと瓜二つの人間の姿がよぎる。

オレのきょうだいは、万が一のバックアップとしてフランスで待機しているはずだ。

そこへ定期報告や戦闘データ、バイタルグラフに刻まれたオレの心象を基礎に、ジジイによって手が加えられるということだろう。

まるでビルダーがガンプラに理想を託して、手を加えるように。

半世紀をかけた狂気はそれを可能にすると、オレはメルフォール一族としての感覚でわかっていった。

では、そのデータを集めきり、最重要の目的を果たせなかったオレはどうなるのか。答えは明白だった。

『本国に帰還しだい、お前の記憶は消去して『再調整』を加える。既にオザワを通して、日本支部のメンバーが渡航準備を整えているはずだ』

「もしもオレが脱走を図ったらどうするつもりだ」

『そうだな……お前が憩う場所など数が限られている。それを片端から潰していこう。例えば、どこぞの大衆食堂とかどうだ？』

血の気が引く。

あの家族だけは絶対に巻き込んでほならない。

「クソジジイめ」

『せいぜいほざくがいい。期限は夏季休暇が終了する明日までだ。それを過ぎれば、お前はただの傲慢な人間へと逆戻りする』

一方的に通信は切断された。

オレは茫然と、座席へ深く身を沈める。

明日、ユージと和解をするかどうかにかかわらず帰還させられるとききた。外堀から埋められた絶対命令。オレが逆らうかどうかではなく、既に手が回されている。

このままではオレは祖父と同じだ

届かない才能に絶望し、執着し、かけがえのない友人と永遠に決別することになる。

「アレックス様。申し訳ございません。あなたを裏切るような真似を」

「いい。お前がジジイの命令に反抗して、味方がいなくなっても困る」

車はとつくに屋敷の前に停まっていた。

庭の周囲を部下の何名かが段ボールを抱えて右往左往している。

祖父の言葉は真実であった。

「……アレックス様。前を」

オレは上半身を乗り出して、オザワの肩越しにフロントミラーを見た。

情けないことにその姿を目にするだけで心臓が跳ねる。

ツガミ・ユウジが歩いてきていた。

相変わらずふにやふにやとした笑みをたたえて、まるでこちらの煩悶など意に介していないようだ。

すぐさま車を降りるとあいつの前に立ちふさがる。

屋敷の異変をあいつに悟らせたくなかった。

「話がある」

「うん。ボクも」

オレはようやく腹をきめた。

観念した、という方が正しいかもしれない。

ここまで尻に火が点いてようやく、あの石の使い道を思いついたのだ。

「ここでは人が多い。いつもの河川敷でいいか」

「そうだね。歩いて行こう」

三日ぶりの会話は、予想よりもすんなりと進んだ。

Side Yuji

アレックスの屋敷までの道中には河川敷がある。

広いなだらかな傾斜で、週末には家族連れがピクニックを楽しむような場所だ。

ボクたちはバトルの反省会場として利用していて、次の改造プランだとか、よもやま

話をして過ごしていた。

二人で草の上に腰かけて、西の空へ目をやれば、夕日がバターのようにとろけて地平

線で波打っていた。

「ん」

彼はこちらには目もくれないまま何かを突き出してきた。

AGE—1エトワールド。

四肢はあらゆる方向へ湾曲しV字アンテナが中央からポツキリと折れている。

彼はホルスターを持っていないから、ポケットに無造作にしまつて歩いていたのだろ

う。

ボクはそれを黙って受け取る。

今は取り扱い方について議論するべき時ではなく、話を切り出すべき時だ。

「師匠から、キミのおじいさんについて聞いたよ」

「あの女、余計なことを」

「うん。だから怒った。キミとちゃんと向き合えないのはおかしいって」

アレックスは目を丸くした。

ボクが怒ったというのが心外だったのだろう。

「お前まで、あの女と気ままずくなることはなかならうに」

「もとはと言えばボクがキミの気持ちに気づかなかったのがいけないんだ。二年間ずっと一緒にいて、友達なのに」

「……」

「ごめんね」

ボクが頭を下げると、彼はなぜかひどくうろたえたように見えた。

しばらく落ち着かなそうに視線をさまよわせると、両の手を額に当ててうつむいた。気ままずい沈黙が二人の間を通り抜けていく。

またしても地雷を踏んでしまったかと思つて、ボクは取り繕おうと試みた。

「本当はおわびに、とっておきの改造ガンプラを持ってくるつもりだったんだけど……」
「ユージ」

彼の凜とした声にさえぎられて、口を閉ざす。

その口調からは怒りとは違うような、それでいて非常に切羽詰まったものを感じ取っていた。

アレックスはやにわに立ち上がると、ポケットから空色の宝石を取り出した。

師匠からボクたちがもらった、プラフスキー粒子の貴重な結晶だった。

彼はそれに視線を落としていた。

「オレはこいつを渡されたとき、正直なところ、お前に劣等感を抱いていた」

「まさかあ」

「いいから聞け」

ボクの驚きを掌で遮って、親友は話を続けた。

「あのととき、オレは突き当たるような限界すら見えていなかったんだ。霧中をさまよっていて、いきなりゴールの先に行くためのカギを渡された気分だったよ。お前はとつくに、そんな所を超えていたというのに」

「ボクは能天気なだけだよ」

「オレがそう思ったただけの話だ。とにかく、オレはそんな自分に我慢がならなくて、お前

に当たり散らした。みつともない話だ」

夕日がいよいよ沈みかかる。

夜のとぼりが訪れる直前に日の光はいつとう強くなり、アレックスの横顔と結晶体を染め上げる。

「……こんな石も意味がないと思っていたが、今、お前を前にして思いついたことがある」

アレックスが振り返り、茶髪がなびく。

太陽光線がぱつと散りはねて親友の姿を背後から鮮烈に照らしだした。

それはさながら一枚の絵画のようで、ボクの記憶に一瞬で焼き付けられた。

「ユージ。もしもオレたちの間に何かあったら、この石のことを思い出せ。どんな時でも、どんな状況でも、オレはお前の友であり続ける」

「……」

「例えオレがすべてを忘れて、人間のクズに成り下がったとしてもだ。これは約束であり、オレの宣誓だ」

アレックスは笑った。

そこに普段のような誰かを見下す眼差しや、軽蔑の思惟は欠片もなかった。

夕日の眩しさに負けない、まばゆい純粋な輝きがそこにあった。

ボクはその大げさな宣言にしばし呆氣に取られて、それから、つい嘖き出してしまった。

「まるでヒーロー映画だね。キミが言う」と

「……よせ。そう言われると、今更ながら恥ずかしくなってきた」

彼は右手で顔を覆っている。グローブの指の隙間から見える頬は、真っ赤になっていた。

S i d e A L E X

翌日の早朝。

唐突に宣告された、日本からの帰還の期日がやってきた。

夏でも空気は冷ややかで、屋敷内でも肌が粟立つほどだった。

屋敷の内装は多くが片付けられ、人の気配も減っている。ほとんどの部下は先行して空港に向かっているはずだった。

オレは広間に居残って、オザワを呼びつけていた。

出発十五分前というギリギリの時間帯だからか、彼女は少し焦れている様子だった。

「しつこいようだが、撤退に際してツガミ商事には手を出さんのだな？ 証拠隠滅だとか、一族郎党抹消だとかは、ないな？」

「ええ。そう聞いています」

「ならいい。金輪際、こんな一族と関わるべきではないさ」

ユージは『暁 雷光』などの改良に関わっているし、次期当主であるオレについて仔細に把握してもいる。

ジジイが何かをしないでかす予感を振り払いたくて、オレは何度もオザワに確認していた。

冷静に考えれば、メルフオールの関与を発覚させるリスクを冒してまで、零細企業ひとつを潰すような愚はさすがのジジイでも冒さない。

だが、万が一、億が一、友の平穩無事を祈らずにはいられなかった。

「それと、お前に一つ頼みがある」

「なんでしよう」

「お前はしばらく居残って、この拠点の後始末を監督すると聞いた。その間に、ユージにこれを渡してほしい」

取り出したるは古式ゆかしい紙の封筒だ。

電子データはジジイの息のかかった部下にもチエツクされるので、アナログな方法に頼った。

中身には便せんで十数枚にも及ぶ長々とした手紙が入っている。

「これね。」

「たいした内容じゃない。オレの生まれについての下らない話題から、日本に来てからの所感まで、色々だ」

「機密に触れかねます」

「ユージにとつてはSFまじりの日記にしか見えんよ。機密は、バレたらまずい人間に渡るから機密なんだ」

オレはユージに一切の事前連絡もなしに姿を消す。

あいつのことだ。オレの失踪に気づいたら三日は泣き暮らすに違いない。

その慰めに手書きのメッセージくらい残しても、罰は当たるまいと考えた。

それに、オレの出生だとか幼少期の話は、ごく普通の日本人であるユージには荒唐無稽にすぎる。

信じる人間がいるとすれば、せいぜいナガイが舌打ちをする程度だろう。

「オザワにしか託せない。組織の中で、ジジイよりオレを優先できる人間はお前しかない」

「アレックス様……」

「頼む。オレがすべてを忘れたら、あいつにはこの手紙と結晶体しか残らないんだ」

オザワは周囲をうかがうようにして手紙を手に取り、懐深くに仕舞いこんだ。

「礼を言う」

「らしくありませんね」

「あいつとの友情がかかっている」

「………出発の時間です。行きましよう」

「ああ」

オレはオザワと二人で屋敷を出た。

生家ではないとはいえ、二年間も住んでいれば後ろ髪を引かれる気分にも陥った。

振り返ると、空の果てからどんよりとした灰色の雲が迫っていた。

オレが発つ頃には、日本は雨に降られている。

Side Yuji

あの河川敷で親友と『約束』を交わしたあと、ボクは叔父さんの模型店に引き返した。本当はアレックスも呼びびたかったけど、彼は家の用事に追われているらしい。

明日ツガミ食堂で昼ご飯を一緒に食べる予定を立てて、その場は別れた。

そして『ビシディアン』の工作室にこもること数時間。

工作用マットの上には完成したばかりのアデルが立っていた。

「にへへ」

自分でわかるほどに頬の筋肉が緩み切っていたが、次の瞬間、激しい雷鳴で我に返った。

外は土砂降りだった。

この天気では塗装は無理だろう。

ボクはデジタル時計の表示を確認して、思わず目をこすった。

「10時……?」

電波受信式の時計はきわめて正確に時を刻み、朝の10時と示している。

ボクとしたことが両親に連絡もなしに、一晩中我を忘れて作業し通していたのである。

食堂の準備時間はとくに過ぎていて、母さんから大目玉を食らうのは確かだった。

ひとまずアデル作業机に立たせると、工作室の外へ飛び出す。

もう叔父さんは店を開けてレジに立っているはずだ。

果たしてその後ろ姿を認めて、ボクは声をかけた。

「叔父さん！母さんに電話しておいてくれた!？」

「ユウジ……」

広い背中で気が付かなかったけれど、叔父さんは何人かのお客さんに対応していた。

そんなときに大声を出したら迷惑だ。

ボクが縮こまっていると、思いのほか柔らかな口調が降ってきた。

「いいか。落ち着いて聞いてくれ。実は……」

「この子がツガミ・ユウジくんですね」

「おい。ちよつと待ってくれ」

レジカウンターの向こう側から、お客さんが叔父さんを押しつけてきた。

黒髪をオールバックに固めて、上下も黒のスーツにびっちり身を包み、神経質そうな面持ちでボクを見ている。右手の端末には見覚えがあった。

師匠も使っていた、国際ガンプラバトル公式審判員のライセンスである。

「公式審判員のホンゴウです。ツガミ・ユウジくん間違いはないね？」

「はい。そうですが……」

喉がごくり、と音を立てた。

やましい覚えはないのに、この人に射すくめられると前世の罪まで遡って吐き出しそうだ。

ホンゴウと名乗った審判員さんは、ボクにこう告げた。

「単刀直入に言おう。つい先刻、キミの父親であるツガミ・ソウイチ氏に、プラフスキー粒子関係施設の違法使用の疑いで逮捕状が出た」

「……えっ？」

突然横合いからトラックにぶつけられたような、あまりにも前触れのないショックが、ボクの頭頂部からつま先までを突き抜けていった。

父さんが、犯罪者になった。

その言葉を咀嚼し飲み込んだとたん、心臓が早鐘を打ち、呼吸が勝手に浅くなってきた。

「あ。あの、それは」

「先刻、内部告発をうけて我々はキミの実家であるツガミ商事へ自宅捜索に入った。しかし、キミの両親は姿を消し、残された施設や筐体の内部データはすべて破壊されていた。完全な蒸発だ」

「……」

「逃走を図ったなら、息子であるキミも連れていくと考えたのだが、どうやら見込み違いだったらしい」

叔父さんが、審判員さんに掴みかかる。

襟元を締め上げられてなお、彼は顔色一つ変えなかった。

「姉さんとお義兄さんが違法行為などするはずがないだろう！」

「アシハラさん。それは身内だからこそその、あなたの先入観にすぎないんですよ。現に告発者はいくつかの証拠を揃えて通報してきている」

「その、内部告発者っていうのは、誰なんですか」

ボクが乾いた喉から絞り出したのは、両親の質問ですらなかった。

告発者の正体。

それだけは尋ねてはいけなかったと、本能が警鐘を鳴らす。
手が自然と持ち上がり、両耳を塞ごうとするが、間に合わなかった。

「告発者はメルフォール財団。そういえば、キミはその御曹司と親しかったと聞いて
いるよ」

「あつ」

瞬間、昨日の約束と夕焼けが強烈にフラッシュバックした。

焼き印を押し付けるように、脳髓へと強烈な熱さと痛みを与えながら、二度と忘れま
いと悲鳴を上げる。

「……………あ。ああ……………」

ボクのたった一人の親友が、ボクのかげがえのない両親を、犯罪者であると告発した。
あの美しい約束を告げた次の日に、家族を奪った。

ありえない。

すぐに否定しようとして、ボクは舌が口腔に張り付き二の句を告げなくなる。

なんて答えればいいのかだろう。

『親友との二年間はすべて嘘だった。彼は太ウソつきだ』

『親友は嘘をついていない。ボクの両親は犯罪者で、しかもボクを見捨てて逃げた』

この話はつまり、親友と両親のどちらかが裏切り者だと、選ぶということだ。

そしていずれを選んだにしろ、ボクは今、すべてを失っている。

最悪の事実黒く、黒く大きな影法師となって、ボクの前へ迫ってきていた。

「ユウジ!？」

叔父さんの呼び声が急速に遠ざかっていく。

腰の下あたりで何かが砕け散る音が聞こえた。ボクの全身が床に叩きつけられる直前、ホルスターにしっかりと仕舞っていたAGE―1がずり落ちて、粉々になったと感じ取れた。

——どうしてだろう。

何に向けたのかもわからない、そんな疑問を抱えたまま、ボクの視界は影に沈んでいった。

Side アレックス

「おはようございます」

「……」

薄緑色の薬品をたゆたいながら、うすぼんやりと瞼を上げた。

オレが入られているカプセルの丸窓を、オザワが覗き込んでいる。エアロックが解

除されると、外気が入り込んで、さらけ出されている皮膚に突き刺さった。ゆつくりと体を起こす。

ヘッドギアが頭部を重く拘束するので、取り外した。

ここはムラサメによる『再調整処置』を行うための部屋だ。

十メートル四方を壁で囲い、薬液で満たされたカプセルが二つ設置されているだけの殺風景な場所だった。

「お加減のほどは」

「それを聞くか？」

「いえ……」

今朝の『再調整処置』も最悪の感触だった。

薬液による疑似的な催眠導入と、ヘッドギアに搭載された音声や光パターンで記憶を書き換えているそうだが、脳に焼けた鉄棒を突っ込んでかきまぜられているようだ。

こうして安静にしている間も、視界の端を羽虫が飛び交っているような幻視に悩まされて、暴れだしたくなる衝動に駆られる。

「わざわざ起こしに来た理由は」

「財団がツガミ・ソウイチ氏を告発しました。なぜ反対なさらなかったのです」
「ん？」

そこでようやく、オザワが事務的な理由で来たのではないと気づいた。処置の直後は判断が鈍っていけない。

オレはカプセルのサイドテーブルからバスタオルを取り、体を清めながら、その間に答えた。

『オレたちに金輪際関わるべきじゃない』。日本にいたアレックス・メルフォールはそう言っただろう？』

オレの調整段階に入ったとなれば、メルフォール家にとってツガミ商事は目障りな証人だ。

日本にいた頃のアレックス・メルフォールは、ツガミ・ユウジに本意を忘れるほどに入れ込んだ。

もしもユウジが敵対陣営に人質に取られたともあれば、あっけなく弱体化しただろう。

故にジジイは、ツガミ商事を社会的に抹殺することにした。

ツガミ・ソウイチの犯罪を通報し、ユウジもろとも社会の表舞台を堂々と歩けないようにする。組織だった犯罪行為を許すほど、日本の社会正義は寛容ではない。

「それに、ツガミ・ソウイチが粒子発生筐体の違法な改造や調整を行っていたことはまぎれもない事実だ」

「メルフォール財団が、出資打ち切りをちらつかせたからでしょう」

「確かに脅迫に近い指示だったろうさ。それでも、従うことを決めたのはソウイチ自身だ。社員と、妻と息子の生活のために、犯罪に手を染めた」

証拠に偽造はなく、真正銘のクロ。潔白を叫ぶことはできない。

オザワは唇を震わせ、拳を握りしめている。彼女らしからぬ激情が、その瞳の中で燃えていた。

「そこまで『再調整』で歪められてしまったのですか？」

「他人事のように言うじゃないか。お前が日本に残ったのは、主を失ったツガミ商事からデータを回収するためだろうに」

メルフォール財団として、自分の指示の証拠を残すようなへまはしない。

公式審判員の捜査が及ぶ前に、日本に残留したメンバーによつて二年間の戦闘データをはじめとした証拠は拐取、隠滅された。ユージが自宅に置き忘れていたGPベースも拾得したという報告が上がっていたが、さすがに解析は難しかろう。

己の行為を指摘されてなお、不満やるかたない様子のオザワに、オレはとどめの一言を放った。

「いいか。オレをあのアレックスと同一視するな。今のオレに友はいないし、裏切った罪悪感など欠片も生まれていない。良心の呵責に賭けているなら、一ミクロンもありえ

ないと断言してやる」

「……はっ」

結局、オザワは従属するだけの人間だ。

ジジイに反抗する度胸もなければ、日本でのツガミ家の破滅を阻止する努力さえしなかった。

もしもオレを正面きつて断罪できる存在があるとすれば、それはいつの日か、オレの前に復讐に現れるツガミ・ユウジじゃない。

「兄さん」

そこでオレは口を噤んだ。

スズランの爽やかな香りが鼻先をくすぐったかと思うと、白いレース地が翻るのを見た。

茶髪に灰色の瞳。

鏡を覗き込んだような錯覚を覚えるほどに、瓜二つの顔がやってくる。

オレの双子の兄妹にしてバックアップである存在、アレクシアが調整室に入ってきていた。

金属のトレイを両手に持ち、コップ一杯分の水と三粒の錠剤を運んでいる

「安定剤をどうぞ」

「わざわざお前がやらんでもいいだろう」

「いえ。私、何故だか最近、気分がいいんです。だからこれぐらいは」
妹は笑顔を浮かべている、

しかしそれはしよせん、目を三日月型に細め、口角を持ち上げているだけだ。人間にもかかわらず『不気味の谷』を超えていない、人造の笑顔だった。

これは二年間でアレックス・メルフォールが集積した『感情のマッピングデータ』が、うまく反映されていないことに起因するのだろう。

「私、おじい様に呼ばれているので、お見舞いに行ってきます」

「……」

「兄さん？」

「好きにしろ」

「はい。では、兄さんもお大事に」

アレクシアは傍らの小さな机にトレイを置くと、スカートの裾を持って優雅に一礼し、去っていく。

オレはそれを横目で見送り、露出したままの二の腕をさすった。鳥肌がぶつぶつと立っていた。はじめての経験だ。

自分の感情を肯定する。オレはあの『妹』がバックアップであると思うと、怖いのだ。

人間の真似事をする機械などと、共に生まれ落ちた覚えはない。

だというのにアレクシアはああやって、オレの知らない表情を作ってみせる。

人懐こい、初めて会う誰も好印象を抱くような、計算された笑顔を。

もう少しだけ猶予を与えられたら、妹の表情の調整は終わるだろう。

そうすれば人間の喜怒哀楽を理性で操り、計算で掌握する人間が一体、できあがりだ。

安定剤を口に放り込み、水で一気にあおった。

誤魔化しきれない苦みが口に広がり、オレは顔をしかめる。

「余計なモノを作ったな、ジジイ……」

病床の老爺は気づいていないのだろう。

自分の枕元に、自らの判断が作り上げた怪物を呼び寄せていることに。

第2章 「3つの運命が歴史になる」

Parts—7. 5 「???による報告書 ガンプラ編」

目次

- ① アデル・シヤドウ（ノルマル）
- ② アデル・シヤドウ（モワノー）
- ③ アデル・シヤドウ（テイタス）
- ④ 三式臥龍
- ⑤ 暁 雷光
- ⑥ ソヴァールザクウオーリア
- ⑦ メツサーラ
- ⑧ コスモ・ギナ
- ⑨ ガンダムアクエリアス（スパイカスタム）
- ⑩ ガンダムサダルスードF3
- 11 ガンダムAGE—1 エトワール

※機体データは劇中のビルダーが考えた数値です

※データは劇中の設定です

①アデル・シヤドウ（ノルマル）

・型式番号 R G E — G 1 1 0 0 N O

・全高 1 8 . 0 m

・重量 4 2 . 4 t

・武装

ビームダガー／ビームサーベル×2

ドツズライフル

シールド

・詳細

アシハラ・ユウジがHG『アデル』を改修、チューニングしたもの。

アレックスとの離別のショックで記憶障害を患ったから、特務ファイターになった直後までは、基本工作に加え機体色が黒に変更されていただけだった。のちにさらなる性能向上のために塗装を下地からやり直し、後述するシステムにあわせた内部改修を行なっている。

最大の特徴は内部に搭載されたフレームと、プラフスキー粒子結晶体『アリスタ』による『擬似RGシステム』である。

そもそもHGのガンプラにフレームを搭載する技術は、第7回世界大会でスタービルドストライクに確認された最高峰のもので、性能の爆発的な向上と引き換えに整備性が劣悪になる諸刃の剣である。これに対しアデルに採用されたフレームは「鉄血のオルフェンズ」や「HG revive」シリーズで進歩したガンプラの技術を参考に、これらを含めた市販のパーツからつぎはぎした、きわめて簡便なもの。つまりフレーム単体での駆動はまったく想定していないし、できない。

過去編3話でユウジが設計図に描き起こし、記憶障害に罹った後に本編1話のパーツハンター戦で右腕のみ試作。骨格強度が確認され、3話のプラモデル製作教室の最中に完全搭載された。

RGシステム発動の仕組みとしてはアリスタから無尽蔵に湧き出る粒子を、丁寧に合わせ目を消した装甲で閉じ込めてフレームに無理やり粒子を浸透させ、オリジナルのRGシステムと同様の現象を生み出している（この副作用で装甲が内側から圧迫され、膨らんでみえる）。長所はアブソープシステムによる粒子吸収なしでシステムを発動できること。

短所は機体が破損した場合にそこから粒子が漏洩し、システムの恩恵に預かれなくなることである。

②アデル・シャドウ（モワノー）

・型式番号 RGE-G1100MO

・全高 18.7m

・重量 32.7t

・武装

ビームダガー／ビームサーベル×2

シグルブレイド

ハイパーバズーカ

ニードルガン

・詳細

アデル・シャドウの高速ステルス戦闘形態。スパロウウェアをベースに『擬似RGシステム』への対応加工と、シグルブレイド以外の武装を扱いやすくするためのマニユピレーター強化。くわえて両腕にガンダムEz8の分厚い胸部装甲を手甲として装着し、エールストライカーのブースターを脚部に増設するという改造を施している。直線機動におけるスピードは向上したが、小回りの効き具合は悪い。また推進系を小説版A GEの「Sparrowシステム」に切り替えることで闇討ちも可能。

換装の正確性を上げるべくウェアシステムへネオジム磁石を仕込む試みもなされたが、重量の問題が足を引っ張ったのか、続く874戦、アレックス戦では廃止された。

③ アデル・シャドウ（テイタス）

・型式番号 RGE—G1100Ti

・全高 24.5 m

・重量 72.4 t

・武装

拡散メガ粒子砲

音波式索敵弾

磁気穿孔システム改（ビーム・プロテクト）

RGビルドインパクトキャノン

・詳細

アデル・シャドウの砲撃要塞形態。質量装甲を大型化することで防御力を高め、モワノーとの差別化も兼ねて重砲撃仕様にシフトしている。直接の動機として暁 雷光の大火力に対抗するために開発されたが、同時にモワノーが対峙したステルス機の対策もなされている。防御重視につき、素体の上からパワードスーツのように被せる方式を採用した。アデルの擬似RGシステムが装甲の内側を伝播する性質を利用し、粒子に物理衝撃を乗せて、肩のメガ粒子砲に形成されるフィールドをバレルとして発射する『RGビルドインパクトキャノン』を切り札とする。ビルドナックルの破壊力を持った不可視

の衝撃波が襲いかかるので回避や防御は困難。874のように粒子の将来的な攻撃が見える体質の人間には、視界いっぱい粒子の予測判定が広がるため別の意味で脅威となる。

④三式臥龍

・型式番号 RX-105MFS

・全高 設定なし

・重量 設定なし

・武装

ビームサーベル

シールド

メガ・ビームキャノン

ファンネルミサイル

『臥龍転生』

・詳細

アメリカ帰りの心形流、キノ・シユン愛用のガンプラ。BB戦士『三ガンダム』をベースに『SDガンダム三国伝』の司馬昭クスイー、司馬師ペーネロペーの装甲を衣装のように身にまとっている。タイ代表の世界ランカー、ルワン・ダラーラが第8回世界大会

で披露した『高速移動の最中に粒子をかき集める』技術と、ガンプラ心形流の奥義である粒子の貯蓄・任意放出を組み合わせて、己の望むタイミングでミノフスキークラフトの最高速度を叩き出す。さらにメガ・ビームキャノンは出力が砲身耐久ギリギリまで高められており、他の「心形流」にこそ劣れども、その火力は尋常ではない。

SDガンダム特有の必殺技は「臥龍転生」。

貯蓄した粒子を一気に放出し、実体と自立意識のある分身体を複数形成する。分身体は攻撃されても粒子として霧散し、再形成されて反撃してくる。この時のみ、デュアルアイに黒目が点く外見上の変化がある。

欠点としては粒子チャージにやたら時間がかかること。

実は本作から4年後にあたる「トライ」でトライバーニングガンダムが行った分身戦法と同じ原理だが、むろん当人は知る由もない。

⑤ 暁 雷光

・型式番号 MMS-01L

・全高 19.74 m

・重量 98.0 t

・武装

MMS5D 12.5 mm 近接防御火器×2

ガトリング砲

レールキャノン

ミサイルポッド

ビームキャノン

バズーカ

迫撃砲

マシンガン他多数

『紫電』

・詳細

ムラサメが当主レオ・メルフォールのガンプラ『暁 激雷』の後継機として開発した機体。背面にバランスを度外視した武装を総計20門搭載し、圧倒的な火力による単騎制圧を可能としている。その荷重過多故に自立せず、ガンプラの自分であるはずの鑑賞を全く想定していない。バトルでさえ、アレックスの卓越した技量がなければ歩かせることもままならない。

あらゆる『神器』のテストベッドとなるべく、様々な規格のガンプラと組み合わせられることも要求されたが、原型機『アカツキ』はプラモデルとして既にだいぶ旧式であり第8回世界大会の年まで開発は難航していた。

そこで当時ユウジがボツをくらった砲撃ウエア（実はティタスの原型にあたるが、当のユウジは記憶障害の影響で忘れてしまっている）の構造データを間接部位にフィードバック。四肢の互換性を確保、強度向上に成功した。

ある意味でアデル（シヤドウ）の兄弟機といえる。

・『紫電』

本来はガンプラではなく、アレックスの覚醒した技能。第7話から使用。詳細な仕組みはまだ語られていないが、ビームサーベルを霧散させたり、グレネードランチャーの弾道を捻じ曲げるなどの超常現象を引き起こした。

実はこの技能こそアレックスが『紫電』と呼ばれる所以であり、過去に能力を發揮した状態のAGE-1で大暴れしたため、そうした二つ名がつけられた経緯がある。アレックス本人に施された精神調整処理によって、第2話で来日したときには失われているが、油断で窮地に陥った際に不屈の闘志で再覚醒している。

⑥ソヴァールザクウオーリア

・型式番号 ZGMF-1000/M S

・全高 18.61m

・重量 77.13t

・武装

MMI—M633 ビーム突撃銃

MA—M8 ビームトマホーク

ハンドグレネード

MA—7B スーパーフォルティスビーム砲

M106 アムフォルタスプラズマ収束ビーム砲

・詳細

暁 雷光が『神器』の实地試験機として開発された頃、不意不測の事態に対応しサポートするため設計されたガンプラ。パールホワイトの塗料はPS装甲の耐弾性を再現すべく実験的に調査されたものである。

こちらは過去にアレックスが日本で収集した戦闘データをフィードバックしているため、生まれつき手のひらの感覚が鋭敏な兄妹にあわせ操縦系統が再調整された。

セイバーガンダムのバックパックを改修し、ウイザードシステム対応にしたものを装着している（第6話でプラズマビーム砲の砲身に、射撃時の安定性を向上させるためのグリップが追加された）。

ムラサメの正式な開発コードは『ドミナンスザクウォーリア』で『ソヴァール』はファイターであるアレクシアがつけた愛称。GPベースにも『ソヴァール』で登録されている。

⑦メツサーラ

・型式番号 P M X—000

・全高 30.3 m

・重量 89.1 t

・武装

メガ粒子砲

ミサイル・ポッド

ビーム・サーベル

グレネード・ランチャー

バルカン砲

腕部、脚部クロー

・詳細

初心者向けガンプラ製作イベントで、公式審判員広報班長カザミ・シロウが使用したガンプラ。いわゆる素組みで一切の改造が施されていない。

ガンプラバトルにおいて素組みが弱いとされる理由は

「これを基準として完成度によってプラス補正をかけるシステム上の都合」

「素組みでガンプラバトルに挑むようなビルドファイターは大抵初心者なので、キット

に対する工作処理が甘い。つまりマイナス補正がかかりやすい」

など様々に挙げられるが、カザミはバリ取りやヤスリがけ、シール貼りなど子供でもできるレベルの基礎工作を高精度で行い、なおかつキットのパーツ構成を把握した上で
の操縦技能を発揮することで、性能だけは世界大会クラスのアデルと互角以上に渡り
合った。

⑧ コスモ・ギナ

・型式番号 MSXM-07A

・全高 15.8 m

・重量 24.0 t

・武装

ショットランサー

ビーム・サーベル

ビーム・ライフル

ビーム・シールド

フルドレス

・詳細

ガンプライイドルグループ『コスモス』のセンターであるハイバラ・キミコのガンブ

ラ。

本人いわく「ヘルメスの薔薇から発見されたビギナ・ギナの設計図を見たメカニックが、その機体の雰囲気からアイーダ・スルガンに使ってもらおうとフルドレスを追加装備した」という脳内設定らしい。原型機にないショットランサーを装備しているのは彼女が幼い頃に中古ゲーム店で親に買ってもらった「ガンダムvsガンダム Next plus」で使われていたため。要は思い出補正と記憶違いである。（なおハードであるPSPは父親のお下がりで、ビルドファイターズの世界でもとつくに生産終了している）

⑨ガンダムアクエリアス（スパイカスタム）

- ・型式番号 OZ-14MS
- ・全高 17.6m
- ・重量 9.4t
- ・武装
- ヒートロッド
- シールド
- ・詳細

技術スパイの男、ハンダが新型バトルシステムを構造解析してデータを盗み取るため

に使用していたガンプラ。原型機は電子戦を得意とし、モビルドールを強制停止するウィルスを放出する仕様だったが、こちらはモビルドールの遠隔操作にセンサー系統のクラッキングとやりたい放題になっている。特にセンサーへの侵食がやかいでビームを不可視にするため、見えない攻撃が襲ってくることになる。とはいえ、戦闘はモビルドールに任せて自らはシステム侵入に専念するつもりであったため、武装は自衛用の最低限しかなかった。

⑩ガンダムサダルスードF3

・型式番号 GNY-002F3

・全高 18.2 m

・重量 49.9 t

・武装

リボルバーバズーカ

GNビームサーベル

GNスナイパーライフル

大型センサーシールド

他多数のオプション装備

・詳細

ガンプラマファイア『ドラド』の勢力下で活動していた占い師、874が所持していたガンプラ。これ自体はドラドが貸与した十数体のガンプラの内の一つにすぎず、874自身のガンプラは別にある。機体を光学迷彩で秘匿しつつ、フィールドの各所に配置した武装をリモートで攻撃することで狙撃場所を誤魔化す戦術を想定してセンサー、通信系が改修されている。また、使用されなかったがトランザムシステムも実装されている。

11 ガンダムAGE—1 エトワール

・型式番号 AGE—1 ・toile

・全高 18.2 m

・重量 46.4 t

・武装

ビルドカリバー

・詳細

過去編に登場。ツガミ・ユウジがイオリ・セイを研究した成果をつぎ込んだガンプラ。アデル・シャドウの原型機にあたる。名無しのまま自宅で保管されていたものをアレックス・メルフォールとタッグを組んだ際に持ち込み、スタービルドストライクへの敬意と憧れから『星』、エトワールと名付けられた。

『改造前の機体の特性を殺さないまま、弱点を補完する』というイオリ・セイの改造方針に従い、AGE-1ノーマルをベースに機動性を向上させ、至近距離での格闘性能を底上げしている。最大の特徴であるウエアシステムも継続して搭載されていた。

固定武装がないためユウジはビーム・ダガーを追加する予定だったが、後述するビルドカリバーをアレックスが気に入り、それ以外を必要としなかったため2年が経過した現在に至るまで固定武装はない。

・ビルドカリバー

夏の合宿で師であるナガイ・トウコの教えを受けながら完成させた、エトワール専用の対艦クラス大型剣。スタービルドストライクの最大の機能である『アブソープ』『ディスタージ』の2つを、ガンダムAGEの世界観に再解釈することで現象模倣している。AGE-3の主砲である大口徑ビームキャノン『シグマシスライフル』を基礎にしているため取り回しは最悪で、AGE-1の耐久性とアレックスの技量がなければ使いこなせない。

Parts. 08 「哀・真実」

S i d e ユウジ

意識がまどろみから浮上すると、重い瞼がのしかかっていた。

まるで全身に鉛を詰めて海の底へ放り込まれた気分だ。瞼の少し隙間を開けるだけでも外気の冷たさが目に染みる。

朧気な視界の中、ボクの眼前を黄色い角材のようなものが行ったり来たりしていた。

喉の奥から、かろうじてうなり声を絞り出した。

「ううん……?」

「お!? ユウジちゃん、目が覚めたか!」

『病人の枕元で大声を出すべきではないよ』

「そうか。わりい」

角材だと思っていたのは、男性の頭だった。知らない人だ。

逆立てた金髪にサングラスとアロハシャツという奇天烈な出で立ちで、心配そうにボクをのぞき込んできていた。鼻先が触れ合いそうなほどに近づくと、かすかにプラモ用の塗料のにおいが鼻腔をくすぐる。

「心配したぜ。延々と眠りっぱなしなんて、どんなダメージ受けたんだよ」

「……」

「ユウジ?」

「あの、どちら様でしょうか?」

「は?」

相手からひっくり返った声上がるが、訳がわからないのはボクの方だった。

あの後、模型店『ビシディアン』で気を失ったボクは、どこかの病院に担ぎ込まれたのだろう。

幼い頃から様々な理由で入退院を繰り返したもので、身体をびっちり抑えつける布団の感触や、まだら模様の天井は慣れ親しんだ光景である。

しかし、こんな強烈な恰好の人は食堂の常連にも、父さんの仕事の同僚にもいなかった。

ましてやボクを名字でなく名前で親し気に呼ぶ人だ。そんな距離感でいられるのは家族と師匠、そしてアレックスくらいのはずである。

「おいおい。冗談はよせよ」

金髪の男性は取り繕うように、両腕をじたばたと振りながらまくしたてる。

「オレちゃんはキノ・シユン。お前の同僚だろうか」

「ボクの、同僚？」

「そうだよ。公式審判員特務班の」

「特務班って……師匠からそんな名前は聞いたことないですよ」

まったくの寝起きで、霧がかかったようになっていた頭の中に、モヤモヤとした警戒心が沸き起こった。

そもそも、中学生のボクは審判員のライセンスを取ることでできる年齢に達していない。

キノさんと名乗るこの人はひょっとして、ボクによからぬことを吹き込もうとしているのではないだろうか。

「874（ハナヨ）、どういうことだ」

キノさんは、サングラス越しにボクへと鋭い視線を投げかけた。瞬間、背筋が冷たいナイフで撫で上げられたような錯覚に陥る。

師匠と同じ、修羅場をいくつも潜り抜けた人の目が、そこにあつた。

『ふうむ……これは奇妙だね。まるで別人だ』

背後で、ガンダムファンなら誰もが耳になじませたキャラクターの声がした。

アムロ・レイだ。

驚いて首を巡らせたなら、そこには儚げな雰囲気的女性が一人座っていた。

彼女もやはり金髪だが、こちらは恐らく天然の綺麗な巻き毛が渦を巻いている。臉を閉ざし明後日の方向を向いている点から察するに、盲目なのだろう。

そして膝の上にハロを乗せていた。ハロの双葉型の耳がぱたぱたと羽ばたき、アムロの声を発する。

『少し診てみるとしよいか。専門的な医療知識は皆無だけど、妙なものが視えたからね』
この間、女性の唇は微動だにしていな。

どうやら彼女の意志は、このハロを介しているらしい。短いつぶやきの端々からは人間の息遣いを拾い上げることができて、造られた音声とはとても思えなかった。

『キミ、自分の名前は憶えているかい？』

「え？……ツガミ・ユウジですけど」

「なに言ってるんだ。お前はアシハラ・ユウジじゃねえのか？」

「アシハラ？」

『キノ・シユンは少し黙っていてくれないか。余計な混乱を招く』

ハロもとい874さんによって遮られたが、ボクは『アシハラ』という語を聞き逃さなかった。

それは母さんの旧姓だ。ボクがその名前で呼ばれることは戸籍上ありえないのだが、リョウタロウ叔父さんと父さんを混同しているのだろうか。わざわざハロは合成音声

で咳払いをした。

『今のはひとまず気にしなくてもいい。キミが望むなら後で説明しよう』

「はあ……」

『それより、だ。キノ・シユンが『ずっと眠っていた』と言うのを聞いていたと思うけれども、日付の予想はつくかい？』

「今日のことですか？」

『何年何月何日かまで頼むよ』

変な質問だ。

形をとりつつある警戒心をいったん隅に置いて、ボクは頭を働かせる。

たしか食堂で最後に用意した日替わりランチは、アレックスの好物である『豚肉の生姜焼き定食』だった。ランチは月と曜日に対応したローテーションを組んでいるから、逆算すれば自然に答えは出る。

第七回世界大会から2年後の7月24日だ。寝起きにしてはよくできた。

一抹のうれしさを秘め、自分の計算を874さんに伝える。彼女の真つ白な眉間にシワが寄った。

『やはりそうか』

「ユウジちゃんの勘違いって訳でもなさそうだな」

ところがどうだろう、かえって2人は深刻そうにボクを見るばかりである。

東の間ちらついた得意げな気分はどこへやら、ボクはまるで自分が叱られたような心地で、所在なく首を縮こませた。

そして874さんはなぜか、浅く頭を下げてみせる。

『ツガミ・ユウジ。ひとつ謝罪させてくれ』

「なんででしょう?」

『さっきのキノ・シユンの認識には大きな誤解があつた。すまない』

「あつ……そう、ですよね? 倒れたのが朝早くだから、だいたい6時間後くらいですか?」

『違う。今は1年後だ』

「は、はい?」

流石のボクでも、その告知には乾いた笑いがこぼれた。冗談にしてもタチが悪い。

1年、365日。

いくら寝坊したつて、そんなに長く眠り続けていたら身体がもたない。

起きたばかりの気だるさこそあつたけれど、健康体そのものという自覚があつた。

「何言ってるんですか。そうしたら僕の身体は……あれ?」

そういつて、己の首から下に視線を落としてボクはぎよつとする。

周りから女の子のようだからかわれてきた、生白いはずのボクの腕が、筋肉のついたがっしりとしたものにすり替わっていた。顔や体もベタベタ探ってみれば、どう考えても一回り大きく硬い反発を受ける。

「なんだ？ボク、どうなつて……」

汗が噴き出して止まらない。

キノさんが枕元から、片手に収まるほどの小さな卓上カレンダーを手渡してくる。そこに刻まれた4桁の西暦は、記憶よりも1つ大きい数字だった。

S i d e アレックス

昨晩は忌まわしき記憶を見た。

これまでは意識の奥底へ沈めてやっていたが、ツガミ・ユウジとの対決をトリガーにして、久しぶりに『再調整』の副作用が出たらしい。

「1年前か……ふん」

『再調整』措置は様々な処置で脳を掻きまわすせいか、過去の記憶をありのままに、悪夢の形をとってフラッシュバックさせる副作用があった。

当時の苦痛、なによりも実の妹の立ち居振る舞いに戦慄したという過去が、オレにふつと怒りを湧き上がらせる。

1年前、あの程度で、オレは妹を化け物と呼んだのだ。

アレックス・メルフォールが『たかが』喜怒哀楽を調整された程度の人間に、ただの一瞬だろうと肌を粟立たせたとは、とんだ屈辱である。

措置の後遺症で頭をおかしくしていたとしか思えない。

「……おい、聞いたか。アレックス様のこと」

苛立ちを紛らわせるように、ホテルの廊下を乱れる足取りで踏み進んでいると、不意に部下の会話が耳に入った。

ちようど通路が壁によつてT字に分岐している箇所死角であるため、オレに彼らの姿はうかがいしれず、あちらもオレの接近に気づいていなかった。

「ああ。ビルドファイターを病院送りにしたつてやつだろう?」

「それがどうも、日本にいた時の親友らしいぜ」

「まじかよ」

どうやら数日前、オレとの対決によつてユージが昏睡状態に陥つたことの話をしてい
るらしい。

咎めるようなささやきは、あの夢と同じ過去に紐づけられているが、こちらはちつとも心が動かなかつた。オレ自身の感覚では、日本でツガミ・ユウジに媚を売つたアレックス・メルフォールは別人なのだから当然だ。

「昔、頭の中をいじられたつて噂は本当なのかもな」

「なんだそれ？」

「俺も最近耳にした話なんだが、その親友と別れた後に記憶を全部リセットされて性格も変えられたとかいう」

「アニメの見すぎだろ」

「でも急に機嫌が良くなったり悪くなったり……なんていうか、キャラが定まってないところがあるだろう？」

「そんなのただの気分屋だって。わがままなんだから、アレクサンダー様は……」

そこまで話して彼らは口をつぐんだ。

オレに気づいたのではない。連中の立つ直線通路の反対側から、オザワの高い靴音が差しかかったのである。彼女は部下たちに冷たい視線を送り、静かな怒気をはらんだ口調で言い渡した。

「任務中の私語は慎みなさい。上層部への異議は直接申し立てるように」

「は、はい」

「それとアレックス様。静岡の研究施設から、至急お話したいと連絡が」

「わかった」

オザワの位置からはオレが見える。

おもむろに死角から姿を現すと、部下たちの顔が青を通り越して白んでいき、ぶるぶ

ると震え始めた。

しかし、奴らにオレは一切の感想を示さない。流し目をひとつ送ってやるだけだ。

この仕草だけでこいつらは、自分たちの愚痴が相手に聞こえていたと悟ることになる。いつ自分たちの首が飛ぶかと気の休まらない日々を送ることになるだろう。重い罰を下すよりも、そちらの方がいい気味である。

「(こ)ちらへ(ご)うぞ」

オザワがオレを誘導する。

通る道の先で、作業や打ち合わせをしていた構成員たちはバラバラと道を空けた。

そんなことをしなくても廊下は十分に広いのだが、オザワの叱責が聴こえて、みな余計な遠慮を働かせているのだ。

左右から思惟が集まる。

畏怖。怯え。冷笑。それらが赤黒い渦の形をとって、自分の周りを流されていくようだった。

「どいつもこいつも、たかが16歳の高校生に意見もできんのか」

「チーム全体の士気が下がっています。由々しき事態です」

「もしも帰国や退職を希望する奴がいたら好きにさせろ。機密漏洩にだけ気をつければどうでも構わん」

オレを慕う人間など最初からいないのだ。最終的に、オレ独りがすべてを手にてきればいい。

目的の部屋にたどり着くと、その中央にノートPCが開かれていて、暁 雷光の両腕に宿る『神器』を製作した老人が写り込んでいた。

何やら困惑している。オレは用意された木製の椅子に腰を下ろした。

「要件はなんだ」

「アレックス様。先日そちらから送っていただいた、ツガミ・ユウジ所有のアリスタについてですが」

「ほう。なにか進展があったか」

「1年前、アレックス様の帰国直後に回収させていただいたアリスタとのシンクロ実験が失敗しました」

アリスタとは、ツガミ・ユウジのガンプラが擬似的なRGシステムの拠り所としていたプラフスキー粒子の結晶体のことだ。

その膨大な粒子の発生に任せて強引な出力を可能にしたようだが、前回の戦闘でその胸部から抜き取ってやっていた。

オレの『神器』を使った計画を遂行するために欠かせないものだ。

「二度や二度の失敗で臆するな。条件づけが甘いのだろう」

「いえ。それが分析したところ、2つのアリスタの構成の相違が原因と判明しました。反粒子の結合パターンが異なるのです」

「……同じモノのはずだ」

「出力、構成、拡散反応に特異性が認められたのはツガミ・ユウジのアリスタのみでした」

「結論を申し上げます。アレックス様が所持していたアリスタは、現在のシステムに使用されている粒子となんら変わらない凡百のもの……つまり偽物です」

こめかみが引きつったのを自覚した途端、右手を乗せていた肘置きが悲鳴をあげて軌んだ。

S i d e コウイチ

アシハラ・ユウジはフランス出身の凄腕ファイター、アレックス・メルフォールに敗北し、倒れているところを発見されて市民病院へと運ばれた。

それから数日後。

彼が目覚めたと聞いて駆け付けた僕が目にしたのは、彼の変わり果てた姿だった。

『さつき概略は話したが……もう一度はじめから説明しよう』

874さんのハロが跳ね、ゆるいアーチを3度描いて、ベッドの上に着地する。

僕はその軌道をついで目で追いかけて、ハロを手に取ったアシハラと目があつた。

つい先日まで、不愛想で仏頂面ばかりだった僕のパートナーは、おどおどと目を逸らす。その整った顔を構成しているパーツは何ら変わっていないはずなのに、かすかな挙動の端々に、今にも崩れそうな弱々しさがこもっていた。

まるで別人だ。

『アシハ……ツガミ・ユウジが罹患したのは『アシムレイト』の後遗症だ』

「噂で聞いたことはあるよ。数年前から、ガンプラのダメージが身体に出たという報告があつたとか」

アシムレイト。

その現象の正体は強烈な思い込みによるプラシーボ、ノーシーボ効果の複合作用である。

ガンプラと身体を同一視した結果、よりダイレクトに機体を操れるようになる反面、ダメージまで自分が受けたと錯覚してしまう。

例えるなら、TVゲームのキャラが攻撃されたとき操作している自分まで「痛い」とつぶやくのを、極端にしたバージョンのような感じだ。

「ダメージに関しては、オレちゃんも上から注意喚起がきたことはあるが、よりにもよってユウジがなるとは思わなかったぜ」

「うん……それにアシハラがアシムレイトを引き起こすタイプのファイターとは考えに

くいよ。これまでだって何度も機体をボロボロにしてきたじゃないか」

僕が知っている限り、アシハラのガンプラへの接し方はビルダーとして達観したものだ。こう改修すればもつと強くなる、壊れても直せばいい。

自分の身体とガンプラを同じものとして戦うなんてやり方はしていなかったはずだ。すると874さんは首を左右に振った。

『それはアシハラ・ユウジのコンデイションが僕たちの知る通りだった場合さ。相手が自分と縁深い相手なら、その精神も平静ではいられないだろう?』

「アレックス・メルフォール、か」

「っ……!」

アシハラがハロに置いた手が、ぴくりと動く。やはり彼にとって重要な意味を持つ名前らしい。

『アシムレイトを発症した状態で強いダメージを受けたのと、因縁の相手とのバトルに勝てなかったという精神的ショックが重なって、アシハラ・ユウジは退行を起こしたんだ』

「幼児退行ってことか?」

『その表現は不適當だね。彼の場合、1年前の夏にまで精神状態と記憶が逆戻りしている』

「さつきユウジちゃんに日付を聞いたのは、戻った時間の長さを確かめるためか」
『正解。前にアレックスが、僕の古い小屋まで来たという話はしただろうか？その時にツガミ・ユウジとの過去は必要最低限、断片的に聞かされたからね。もしかしてと思ったのさ』

それは残酷な告知だった。

幾度かの任務達成を経て、僕とアシハラの間にはわずかな信頼関係が芽生えていたのだが、一切適切巻き戻ってしまったのだという。

まるで、メモリーデータを昔の日付で再読み込みするように、僕はちらりと、アシハラの色をうかがった。

唇が血が出そうなほどに食いしばっている。こみあげる吐き気をこらえているように見えた。

「ボクが、退行」

かすかに絞り出された感想は弱弱しかった。

そうだ、一番ショックを受けているのは、他でもない彼自身だろう。

目が覚めたら1年間も経過していて、しかもその間の記憶はいつさい覚えておらず、知らない大人が顔突き合わせてなんだかんだと騒いでいる。

その恐怖と喪失感はいかばかりか、とても僕には推し量ることはできなかった。

「アシハラ……」

とにかく、何か気の利いた励ましのセリフをかけようと考えをめぐらせていたときだ。突然、僕とシユンの胸元から同時に着信バイブレーションの振動音がした。

上司であるハカドさんからの、メッセージによる呼び出しだった。

「ユウジちゃんのことかな？」

「いや。たぶん、あのG4っていう人物のことじゃないかな」

数日前、僕とシユンにアシハラの危機を伝えてくれた『公式審判員』と『ムラサメ』のスパイこと『G4』。

僕はハカドさんに、その怪人物との接触を報告していた。そう言うときシユンは顎をガクリ、と大げさに落とした。

「なんでハカド部長に話したんだよ？バカか？」

「だって報告義務が……」

「あのなあ。『あなた方が存在をひた隠しにしていた人と、さつき連絡がついちゃいました』なんて普通バラすか？」

「ううう」

「オレちゃんより頭いい癖にそんな簡単なことが浮かばねえのな」

「仕事のクセというか。つい。ごめん」

ハカドさんは、ナガイ警備部長の強引な再編成措置に抵抗してくださったり、アシハラの仲をいつも心配してくれていたり、常に僕たちの味方であった。

だからスパイの存在を知らされても、無条件に彼を信頼してしまっていた。

公式審判員の心得その一。『公式審判員は、規則を把握し公正であれ』。

その『公正』とはバカ正直という意味ではないことを、僕はすっかり忘却していたようである。

シユンは頭を片手でガシガシとかきむしって腹をきめたらしい。

「とにかく。この現状も含めて、色々と話しに行く必要があるらうだな」

「そうだね」

「874、悪いがユウジちゃんのことを頼めるか。お前がアシムレイトの症状に一番詳しいみたいだしな」

『僕は一応部外者だよ』

「審判員のオレちゃんやんが信用するって言ってるの。ここはただの市民病院なんだから、民間人がついていても法には触れてないって」

『しょうがないな』

シユンにそんな信頼を寄せられて874さんはどこか嬉しそうである。

最初に会った時より、彼女も少し態度が柔らかくなった気がした。

「そんじゃあ、さっさと済ませにいくか」

「うん」

「じゃあユウジちゃん、また後で……おわつ!？」

シユンが病室を出ようと、真つ白な扉に手をかけて横に引いたところで、茶色の髪と灰色のくりつとした瞳に、出合い頭でぶつかつた。

この場に居合わせた人物の内でも破格の造形美に、僕まで後ずさつてしまふ。

アレックス・メルフォールの妹、アレクシアさんだつた。

そういえば病室の前で会つたはずなのに、彼女は中へと入つてきていなかった。

「あつ」

果たして驚きの声を上げたのは誰だつたらうか。

みるみるシユンが顔をしかめてアレクシアさんへ詰め寄つた。

メルフォール兄妹に敗北し、仲間を一網打尽にされている彼にとつては最悪の相手だつた。

「おい、どのツラさげてここに來たんだ?」

「……」

「ユウジがこうなつたのはテメエらのせいだろうが!」

「ごめんなさい」

「ごめんで済んだら審判員いらねえんだよー」

この部屋ごと爆発しそうな怒りに、アレクシアさんが身をすくめる。

まずい、と僕が従兄弟を抑え込むより先に、俊敏に立ち上がる人影があった。

なんとアシハラがベッドから起きてシユンの腕をつかんだのである。

「あの。待つてください。キノさん」

「ユウジちゃん、止めるな！こいつは……」

「知ってます。アレックスの兄妹、ですよね」

「……ちえつ、やっぱり知り合ってたか」

「例えあれから時間が空いていたとしても、ボクとアレックスは2年間一緒にいました。

きつと話を通じるはずですから、キノさんはお仕事へ」

『キノ・シユン。さつき僕に任せるといったのは君だぞ？』

874さんの援護射撃もあって、シユンはようやく落ち着きを取り戻した。

大きく地団駄を踏むと、病室の扉を乱暴に閉めて出て行ってしまふ。

病室に気まずい空気がたちこめるが、僕もここで取り持つてはいられない。招集命令

は可及的速やかに、が大原則だからだ。

「あの……それじゃあ、すぐに帰ってくるから」

それでも廊下へ踏み出る直前、後ろ髪をひかれる思いで振り向く。

既にアシハラの臆病なまなざしは、旧友と瓜二つの少女へ注がれていた。

Side ユウジ

ついさつきまで、ボクはほとんど死んだ気分になっていた。

体は自分のものじゃないみたいに成長していて、およそ1年間の記憶がきれいさっぱりと消え失せている。

そのことを心配してくれる大人たちは見覚えのない赤の他人で、その上、なぜかボクのことを『アシハラ・ユウジ』と母の旧姓で呼んでいた。

最早なにをどこから理解すればいいのかさえわからない。

家族の、父さんと母さんの失踪でさえ十分に呑み込めていないというのに、世界は唐突に、ボクを遙か未来へと放り投げた。

白々しいほどに清潔な病室で、不安や恐怖に吐きそうになる寸前、忘れようもない姿が飛び出して来た。

茶色の髪と灰色の瞳。

綺麗に筋の通った鼻や細い眉といった細部に至るまで、アレックスと鏡写しの女の子がそこにいた。

『ツガミ・ユウジ。ベッドに戻るべきだよ。脚が震えている』

「えっ……?」

874さんに指摘されて我に帰る。その時はじめて、ボクは自分の脚が生まれたての小鹿同然だと気づいた。

実際にはたった数日でも、肉体の正常なサイクルより長く眠り続けていたのに変わりはない。

よろめき、崩れ落ちるようにベッドへと腰かける。親友そっくりの少女は涙が喉につかえた声でボクに尋ねた。

「……なんで私をかばったんですか？ 兄と違って、私はあなたと初対面のはずです」

『ツガミ・ユウジ、いや、アシハラ・ユウジという男は、こういう場合に相手を恨まないだろうからね。それを知っているから見舞いなんて殊勝な真似をしたんだろう？』

「そんなつもりでは」

『さっきのキノ・シユンの気持ちもわかるよ。君はあざとい女だ。アレクシア・メルフオール』

アレクシスの妹はアレクシアさんと言うらしい。

874さんの口撃にすっかりしよげて俯いてしまったが、その表情こそが、彼女がアレクシスとは別の存在であることを何よりも明らかにしていた。

「でも874さん、この子はいいつの妹ですし」

『そういうところだというのに』

「ツガミさん」

ふわり、とボクの手がやわらかな感触に包まれる。それはアレクシアさんの両手だった。

よく似た双子でも体質は違うのだろうか。彼女は、親友とよく似た色素の薄い手をしているのに、皮膚を防護するためのグローブを着けてはいなかった。

あの血管が透けて見えるほどの掌に触られているというのは、とても奇妙な感じがした。

「信用されないかもしれませんが、あなたが目覚めてよかった」

アレクシアさんが握った僕の手を頬へ寄せて、心の底から安心したように息をつく。

その吐息が手の甲をくすぐって、とたんに顔が火でも点けられたかのように熱くなった。

ただ親友とそっくりというだけで、キノさんたちの時とは違う反応をしてしまう自分が情けない。

「い、いえ。特にケガをした訳じゃないですから……記憶はちよつと飛んじやいましたけど」

「それでもです……ああ、本当によかった」

あまりにもしどろもどろで、ますます恥ずかしくなる。

アレクシアさんは感極まったのか、息を詰まらせ、口元を覆っていた。

「すみません。みつともないですよ。ちよつと、外の空気を吸ってきます」
するり、とボクから暖かさが抜け落ちる。

長い茶髪が翻り、後にはボクと874さん、そして彼女の代弁者であるハロが残された。

『まったく。あそこまで芝居がかつているなんて拍手を送りたくなるよ。わざとらしいにも程がないかい?』

またアムロの声がアレクシアさんを揶揄する。

「874さんはどうしてそんなに意地悪なんです?」

『ただの同族嫌悪だよ』

「同族?あなたもフランス出身とか……」

『いやいや、そういう意味じゃないよ』

874さんの細い指の間には、いつの間にかカードが挟まっていて、それをハロが口に咥えたままボクのところへ跳ねて来た。

促され手に取ると、タロットカードだった。

しかもただのタロットではなく、満月の下に立つガンダムXを図柄にした、特注と思しき一枚だった。カードの天地は逆転していて、それがいわゆる「逆位置」というのは、

ボクにもわかった。

GXの足元には「THE MOON」と記されている。

『彼女を表すのは月のカード——要するに、大ウソつき、つてことさ』

874さんは、そんなとんでもない単語でアレクシアさんを形容した。

Side アレックス

「う、ウソをついているのではありま、せん……!」

指ぬきグローブにつぶされた老人の喉から、蚊の鳴くような声が絞り出される。両足はわずかに宙に浮き、ふらふらと揺れていた。

ここは先日ユージと対決したメルフォル家の別邸である。

かつてナガイ・トウコからもらい受けたアリスタが偽物だという、あの通信を聞いた後、オレはすぐさまオザワに車を出させて老人を文字通り締め上げていた。

「オレが組織にアリスタを預けたのは1年前、ツガミ家と関係を断ち切った直後だ。それから研究を続けておいて、偽物と気付かなかったなどということがあるか」

「本当に、か、かはっ……」

老人の顔面はいよいよ蒼白に変わり、瞼が落ち始めた。

このままでは全て話す前に事きれそうなので、一度手を放してやる。彼は膝をつき、ひゅうひゅう、と虫のような呼吸を再開させた。

「お前がウソをついていないと言うのなら、納得のいく説明をしてみせろ」

「……では、一つ意見具申します。早急に、本部へ問い合わせるべきです」

「なぜ本国が出しゃばる必要があるんだ」

「我々は日本に残留して1年間にもわたり、アレックス様の所持していたアリスタを研究してきました。ツガミ・ユウジのものと比較するまで、ありふれたヤジマ式プラスキー粒子であると、メンバーの一人も気づかないというのは異常です」

たしかに、異常を普通と誤魔化すより、その逆の、普通を異常と飾り立てる方が何倍も難しい。仮にも専門知識を兼ね備えた研究者連中の目をすり抜けたのには、何か外発的要因を疑っていいだろう。

「採集したデータは設備の都合上、ムラサメ本部へ送信しています。先ほどもそうです。我々は本部が解析した結果を比較検討し、複数の収穫を得たはずでした」

「それらは全て誤りだったようだがな。つまり何者かが、フランスでデータに細工を施して、お前たちの目に通したと言いたいんだな」

老人がうなずいた。

この屋敷はあくまでアレックス・メルフォールの生活拠点として、成長する戦闘データの収集と、動向監視を行っていた場所にすぎない。

毎秒ごとに変動するプラスキー粒子反応の意味を解説し、研究を推し進めるには、

半世紀のアーキタイプ研究のノウハウがあるフランス本部に頼るしかなかった。

その隙を突かれたというのならば、なるほど一応の筋は通る。

「アレックス様。この仮説が正しかった場合、ムラサメ内部に裏切り者がいるということになります」

「それを究明しなければ、いくらユージのアリスタを手に入れようと『紫電』は完成しない、と」

「はい」

「……お前たちの話はよくわかった。あきらかにこちらの不益を狙っての工作となつては、確かめない訳にもいかん」

他のビルドファイターから回収した『神器』全てではなく、アリスタの計測数値のみを誤魔化す目的は不明だが、どうあれ、その裏切り者がオレの敵であることには違いな

い。
老人はそんなオレの対応に何を安心したのか、急に饒舌になった。

「賢明な判断です。なぜってアレックス様の神器はプラフスキー粒子を——うぐつ」

「よく回る口だな。せつかくだから切り落としてホルマリン漬けにでもするか?」

「し、失礼しました……」

老人の下あごをひつつつかむと、奴は舌足らずなまま謝罪をのべた。

オレの神器『紫電』の全貌は、ムラサメ内部でもこいつとオレしか知らないものだ。そして、その情報は門外不出どころか、オレ自身でさえも戦闘時以外には思考へ浮かび上がらせないように努めている。

一年前のアレックス・メルフォールが、己の浮ついた感情を祖父に読まれ、再調整を受けた愚を繰り返さないためだった。

「アレックス様。お取込み中失礼します」

ちようどその時、オザワが通信用タブレット端末を片手にやってきた。その端末の使い分けられている用途からして、要件は『ムラサメ』への自警団活動の依頼だ。

「アメリカにある協賛企業からです」

「アメリカ？ああ、そういえば北米支部は、心形流のふざけた審判員とナガイに潰されていたな」

「そうです。依頼内容は、過去のビルドファイターのデータ保管施設の襲撃予告が届いたため、警備をお願いしたいと」

ゆつくりと口角が吊り上がる。

ムラサメの協賛企業なら、その保管している戦闘データの中にはおそらく眠っているはずだ。本国で裏切り者に改ざんを受ける前の『ツガミ・ユウジとアレックス・メルフォールの戦闘記録』が。

そこに、オレのアリスタだけが偽物であったカラクリも隠されている。

「やはり、オレには幸運を手なずける才能があるようだ」

Side コウイチ

呼び出しを受けた僕とシユンは、アシハラがいる病院から公式審判員の支部へ引き返していた。

いつもは何でもなかった執務室の木の扉が、今日は立ちほだかる巨大な城壁にさえ思える。シユンは真剣な面持ちで僕に耳打ちした。

「気をつけろよ。スパイの情報を部外者が掴んだ以上、ドアを開けた途端に消される可能性もある」

「タブレットのカメラでビデオ録画はしているけど……」

「お守り程度だろ？ 没収されたら諦めるしかねえな」

扉のノックに対し、平坦な抑揚で入室の許可があった。

「入ってくれ」

「失礼しまーす！」

シユンが声を張り上げ、一足先に執務室へと入る。

彼の背中からハカドさんをうかがうと、机に向かつて何か紙束を読んでいた。たとえばアシハラの観察眼が健在であつても、その心境は推測できないだろう。

彼はこちらを顧みることなく問いかけてきた。

「ユウジくんはどうだった？」

「えっと……」

「1年分の記憶が丸ごとすつ飛んでました。オレちゃんはおろか、コウイチのことも知らない。まるで別人だ」

「そうか……」

先んじてシユンが事実を告げたが、ハカドさんはそれをありふれた相槌で流す。

仮にも自分で見出した部下に冷淡すぎると感じるほどだった。

「驚かれないんですね」

「私からしてみれば、現在の『アシハラ・ユウジ』くんの方が不自然だったからね」

「オレちゃんには初耳だなあ。やっぱりアンタも、ユウジの昔からの知り合いだったんだ」

「昔というほどではないさ。ただ、彼のことは特務ファイターとしてスカウトするよりも前から、一方的に知っていた」

そういうとハカドさんは、自分が持っていた資料をこちらへと差し出した。

表紙には『ガン普拉バトル筐体 違法改造関連事件 全資料』とあった。

「これは？」

「G4と接触したという報告を受けて、私が静岡の本部から取り寄せた事件資料だ。審判員ライセンスを持つ人間しか見られない、持ちだし厳禁の資料だね。見舞いに赴けなかったのさ」

G4、という単語が上司から出たことに身体がこわばるが、それもつかの間、僕とシユンは紙束に目を落とした。よく見れば綴じられている紙の色褪せ方はまちまちで、異なる時期のものを無理やりにまとめたのだとわかる。

設立からたった十数年、公式審判員は司法機関としてはあまりに未熟で、日本警察の歴史と比べたら雲泥の差だ。

それがこの事件資料の、とても公文書とは思えない乱雑さに表れていた。

僕たちが質問を投げかけるよりも先に、ハカドさんは口を開いた。

「去年の夏のことだ。『ツガミ商事』という会社がバトル筐体を違法に改造し、運用しているという通報が、この支部に入った」

おびなりに設けられた目次から、一年前の該当する報告書を探り当てる。

その事件について記したのはホンゴウという警備班所属の審判員らしい。

いわく、ガンプラバトル関連物品の仲介を行う小企業『ツガミ商事』は、海外向けの筐体や機材を一時的に保管できることを利用して、システムに違法な改造を加えていたという。

フランスの取引先である『メルフォール輸送』がこの件を察知し、公式審判員に通報した。

「メルフォールからの密告を受けて捜査指揮を任されたのは、私だった」

僕は驚いてハカドさんを見上げた。

そういえば、特務設立前にハカドさんが所属していたのは警備班だった。立場からしても、この支部にいれば地域一帯の事件は任されていて不思議はない。

「ツガミ商事にナガイ警備部長が入り浸っている噂は、当時から有名だった。もしも彼女が、事件を見逃していたとなれば大失態だ。私たちは現場に急行した」

そこで彼らが見た光景は、いくつもの画像資料として記録されている。

しん、と静まり返った倉庫の中に、数台の筐体が立ち尽くし、ツガミ・ソウイチ容疑者と従業員の姿は影も形もない。

社屋・社員食堂と、その上階に位置する一家の居住スペースもまた、もぬけの殻である。

とりわけ僕の目を引いたのはリビングを撮影した一枚だ。

部屋の中央にある食卓に二人分の夕飯がラップをかけられたまま放置されている。

そこには手書きのメモが添えられていたようで、ご丁寧にも文面が読み取れるように別撮りがされていた。

『ユウジへ 遅くなる時はちゃんと電話するように お母さんは明日が早いので先に寝ています 冷めていたらチンしなさい 母』

アシハラのお母さんはきつと、友人の家に遊びに行っているはずの息子に呆れながら、そして苦笑いをこぼしながら、このメモを書いていたのだろう。

だが、それが読まれることはなかった。

一連の写真は、まさしく唐突に彼らの日常が消え去ってしまったことを痛いほど感じさせた。

さらに報告書は続き、消えていたのはヒトだけではないと述べている。

遺された筐体は完全にデータを消去され、ブラックボックス解析でも、めぼしいレコードは抽出できなかつたらしい。

つまり、ツガミ商事の社長は証拠を完全に隠滅し、自分の妻や社員もろとも蒸発したということになる。

そこまで読んだ上でシュンが不愉快そうに鼻を鳴らした。

「あんたがいながら、これだけ綺麗さっぱりと逃げられたのか」

「ひよつとしたら、前から逃げる準備は水面下で進めていたのかもしれないね。ただ手掛かりをすべて失った訳ではなかった。事件の翌朝になって『1人だけ間に合っていない』という情報が飛び込んできたのだ」

「それがユウジちゃん、と」

「戸籍上の本名はアシハラではなく、ツガミ・ユウジ。当時は15歳で、社長の一人息子だ」

その名前を、僕はアレクシアさんやナガイ警備部長、なにより本人から聞いたばかりだった。

ツガミ・ユウジ。

あのアレックス・メルフォールの唯一無二の友であった少年。

彼はたまたま叔父の模型店でガンプラを作っていて、ホンゴウ審判員に会ってはじめて両親の夜逃げを知ったという。

「ツガミ容疑者は実の息子を、置き去りにしたってことですか？」

「よほど切羽詰まっていたのだろうな。遺されたユウジくんが被った仕打ちについては語るべくもないが、ともかく、彼には学校での名字を変えて引越すことを勧めた。我々はその手続きを支援するのが精一杯だった」

いかに小さい企業とはいえ取引先からみれば一大事だ。

マスコミも『世界的なスポーツを食い物にしようとした悪徳企業の遁走』として飛びついただろう。

ひよつとしたら、僕もこの事件を雑多なニュースの一つとして聞き流して、アシハラ

の家族への義憤で顔をしかめていたかもしれない。

背筋が急に寒くなった。

「実のところ公式審判員という組織にとつて、この事件で受けたダメージはガンブラマフィアの跳梁を許したとき以上のものだった。幹部の目が届く範囲で、マフィアでない素人によつて犯罪が進行し、すべてが終わつた後には、一人の若きビルドファイターの人生をズタボロにしてしまつた訳だからな」

資料によれば、ナガイ警備部長は『メルフォール輸送』と、その母体であるメルフォール財団による犯行の教唆を主張したが、それを決定づけることのできる物的証拠は、なにも残されていないかつたそうである。

わざわざ自分たちから通報したのだから、隠滅などとつくに済ませた後だったのだろう。彼女が悔しさにほぞを噛んだことは想像に難くなかつた。

「これ以上の信頼失墜を防ぐため、ナガイさんのツガミ家への関与は伏せられ、組織内部でも数か月の謹慎と減俸で済ませられた。処分を終えた後の彼女は私と共に、いずれメルフォール一族が引き起こす脅威から、新世代ビルドファイターを守るための部署を立ち上げることに決めた」

「それが特務班の正体……」

「本来の姿、と言つてもいい。以前のアイドル事件で、ナガイ警備部長がこの小さな支部

へ直々に立ち寄って、特務班を強引に警備部預かりに移管したのも、彼らが日本で動き出したとわかったからだ」

一年前の当時「何もしていない」フランスの組織を脅威とみなし、対抗しようとする部署を作ろうなんて正気の沙汰ではなかっただろう。

故に、バトルシステムの技術試験を委託するなんて活動を隠れ蓑に、ハカドさんとナガイ警備部長は虎視眈々と待っていたのだ。

世間の審判員不信の波に乗じて、メルフォール財団が『ムラサメ』という自警団を立ち上げるのを。

「スカウトの時に、アシハラにこだわったのも、そういう理由ですか」

「鼻屑ではない。彼以外の特務ファイター候補たちも特殊なガンプラ関連技術、通称『神器』を持つ新世代ファイターたちだった。『ムラサメ』に狙われる可能性は高かったし、できるなら保護したかったよ。G4からの非公式な報告だが、彼らの内から、既に『神器』を奪われる者も出ている」

ハカドさんは沈痛な面持ちで語った。

その様子にいたたまれなくなつたのか、さつきまで彼に喧嘩腰だったシユンは、自らの金髪を片手でかき回すと、どっかりと執務室のソファへと腰を落とした。

ソファは従兄弟の体重を受けて沈む。

「前にオレちゃんか調べたときに気づいたんだけどよ。ナガイのばあさん、そういう特務関係の強引な動きのせいで、本部から孤立しはじめているんだろ？」

「ツガミ商事の事件の顛末は、幹部級の人間は全員が把握している。今はまだ、彼女に同情的な意見が多いが、いずれ特務が『私情で設立された復讐組織だ』と弾劾される日は必ず来る」

「……」

「その時、部下やユウジくんまで片棒を担いだとは思われなくなかった。私は上司として、キミたちを守りたかったんだよ」

ひどい釈明だった。

ハカドさんは、僕とシユンにここまで関わらせておいて、何も知らずに巻き込まれただけのかわいそうな審判員を演じ続けてほしいのだ。

僕の堪忍袋の緒が切れたのは、そのタイミングだった。

「見くびらないでください！」

「む……」

「ご存じの通り僕は頼りないし、ヤジマから出向してきたお客様に過ぎないかもしれない。警戒するのはしかたない」

「コウイチ、オレちゃんの口が軽いはねえだろ」

「うるさい。——ですが、それでも僕らはライセンスを与えられた審判員です。その発祥はどうあれ『ビルドファイターとガンプラを守る』という目的なら、反対するはずないじゃないですか」

さつきのアシハラを思い返す。

あんな苦しそうに、悲しそうに震える姿は今まで見たことがなかった。

それが、メルフォール一族と『ムラサメ』の野望によるものだとすれば、僕は仇討ちではなく、公式審判員として止めなければならぬ。

周りの評判だとか、今更どうでもいいのだ。

相手はそんな僕の内心をくんでくれたようで、ふつと、口元をゆるめた。先ほどまで執務室を満たしていた、重苦しく陰鬱な空気が少しだけほどける。

「ああ。本当に、キミを特務に呼んでよかったよ。キミはきつと、そう言ってくれると信じていた」

「え？」

しばし固まった。

なんとこの人は、僕に決心をさせるために、わざとしおらしくしていたらしい。

隣でシュンが、わかりきっていたとでもいいたげに両腕を頭の後ろで組んでいる。

「本当に巻き込みたくないなら、わざわざコウイチに二人の関係を話してやる必要なんかないし、だいいち、ヤジマの技術者にしか解除できないレベルのプロテクトをかけたチップなんて連絡手段に使うかよ。最初から巻き込んで泣き落とす算段だったのさ」

「ははは。いやいや、重ね重ね本当にすまない」

僕らの上司はさつきまでの行状が嘘だと証明するように、からからと朗らかに笑った。

「全世界に散らばる審判員の中から、他でもないキミたちを選んだのは、例え事情を知ったとしても、正しい意志の下に協力をしてくれる人材だと見込んでこそだ。ふふふ。まだまだ、私の目はさびび付いていないらしいね」

そう言うのと、このとんでもない上司は、執務室の電話の受話器を持ち上げた。

「さて、お互いにスッキリしたところで、ここから先は具体的なミツシヨンの話だ。警備部のメンバーに874さんとユウジくんを、この支部へ送り届けてもらおう」

「症状が軽いとはいえ、アシハラは病み上がりですよ」

「それについても申し訳ないと思うよ。しかし、アレクシア・メルフォールがあちらにいるのだろうか?」

そこまでお見通しだったのに悠長に話をしていたとは、本当に腹の底が読めない人である。僕は天を仰いだ。

再び部屋のドアがノックされ、僕らはそちらへ注目する。

「ハカドさん。警備部の者です」

「どうぞ？」

今度はずいぶんいい加減な調子の入室許可だったが、それに背中を押されたように、警備部所属の顔見知りか前のめりで転がり込んできた。

その手にはヤジマの社章が刻まれた、ガンプラの収納用ケースが提げられている。

嚴重な耐熱と防弾加工が施された、極秘試作機を運ぶためのスペシャル仕様だった。

「遅かったじゃないか。事件資料の方が先に届いてしまったぞ」

ハカドさんの苦言に、警備部の彼は息を切らせ、汗を飛び散らす勢いで首を左右に振った。

「それどころではありませんよ。今連絡が入って、ツガミ・ユウジと874の二名が、病室にいないとー！」

「なに?！」

Side ユウジ

公式審判員警備部の人たちに両脇を固められ、ボクはタクシーに乗っていた。

なにやら一刻を争う事態とのことで入院着から着替える暇もなかった。

いつしよに病室にいた874さんは、後続の車に乗せられているらしいが、外を確認

しようにも車窓にはしつかりカーテンが引かれている。

じれったくなくなって左横の審判員さんに話しかけてしまった。

「あの、公式審判員の支部って随分遠いんですね」

「ガン普拉バトルにおけるアシムレイトは、まだ未解明な部分も多い。あなたを看てる病院を探すために、かなりの距離を移動したんですよ」

「それはどうも……お手数をおかけしました」

「いえいえ」

相手はニツコリとまなじりを三日月形にして微笑を浮かべる。

その貌になんとなく不気味な印象を受けるのは、ボクのメンタルが弱りきっているせいなのだろうか。

そういえばこの人、病室に入ってくるときにライセンスを提示していなかった気がする。

「では、そろそろ」

タクシーのスピードがみるみる落ちていき、停車したブレーキ音でネガティブな思索は打ち切られた。

無意識にうつむきがちだった頭を上げると、なぜか運転手さんが帽子と制服の上着を脱ぎ、どこにでもいそうな普段着になっている。

その恰好に違和感を覚える前に、隣にいた審判員さんがドアを自分で開けた。

「降りてください」

「でも」

「さあ早く」

穏やかなのに、有無をいわせない圧力で肌がひりつく。果たして降りた先は、さっぱり知らない場所だった。

アレックスの屋敷よりも大きな門の向こう側、白い玉ねぎ型のドームをかぶせた建物が横に伸びている。さらにその建物を外側より包囲するように、セルリアンブルーの透明な柱が数本、ニヨキニヨキと生えていた。

「なんだ、ハン」

さすがのボクでも、ここが公式審判員の支部ではないと芯からわからされた。

PPSEスタジアム跡地の記念オブジェだって、ここまで独創的なデザインじゃない。

これでは小さい子どもが無理やり接着剤をつけて作った、おもちゃの城だ。

「ツガミ・ユウジくんですね」

聞き覚えのないバリトンボイスでボクの息が詰まる。

審判員を詐称していた男性たちと、運転手の変装をしていた人が、そちらへ深々とお

辞儀する。さつきの門が左右に開き、建物とそっくりの白の装束に身を包んだ男性が、しずしず歩いてきた。

「貴方を待つていました」

「は、け、けいさつ、を……よび……」

「まあまあ。そう怯えなくてもよろしい。警察より、我々の方があなたにはよっぽど親身ですよ。ほら、そちらのお客様もどうぞ出て来てください」

男性は、すつからかんのはずのタクシーへも語りかける。

数拍の間をおいて、ひとりでにトランクが開くと、中から艶やかな茶髪がまろび出た。

「アレ——」

「完全に気配は消したはずなんですけど、どうしてバレたんでしょう」

「——クシア、さん!？」

親友の妹が、どういう手段と経緯でもってか、狭い荷物入れに忍び込んでいたのである。仰天するニセ審判員たちをしり目に、彼女は猫のように滑らかな所作で全身を露わにし、ほんの一瞬でボクの真横に並び立った。

「さつきぶりですね。ツガミさん。心配だからついてきちゃいました」

「え、そんな、でも、ここは」

「大丈夫です。私があなたを守ります」

アイツと口調は違う。声のトーンだって彼女の方が高い。

それでも、あの懐かしい雰囲気が肩を抱いてくれた感じがして、ボクはようやく勇氣の振り絞り方を思い出せた。

今にも涙がこぼれおちそうになるのを押しとどめ、白装束の男をにらみつける。

きちんと観察すると、彼は青みがかかった髪を一つくくりにして頭頂部で結び、眼光穩やかで肌はみずみずしい二十代くらいの若者であるとわかった。

老成した覇気に圧倒されて、さっきまで気づけなかった。

「いったいあなた方は、何者なんですか」

「——私たちは、星の彼方の理想郷を求める者。そして、影に苦しむ貴方の心をいやす者。『アリアンのまどろみ』修道会、というささやかな宗教団体です」

彼は誇らしげに胸を張って、そう名乗った。